佐賀県文化財調査報告書第154集

西九州自動車道建設に係る文化財調査報告書(２)

梅　白　遺　跡

２００３年３月

佐賀県教育委員会

唐津平野空中写真

巻頭図版２

集落跡全景

石囲い炉がある弥生時代の住居・SH222

石囲い炉がある弥生時代の住居・SH119

巻頭図版４

古墳時代上層水田空中写真

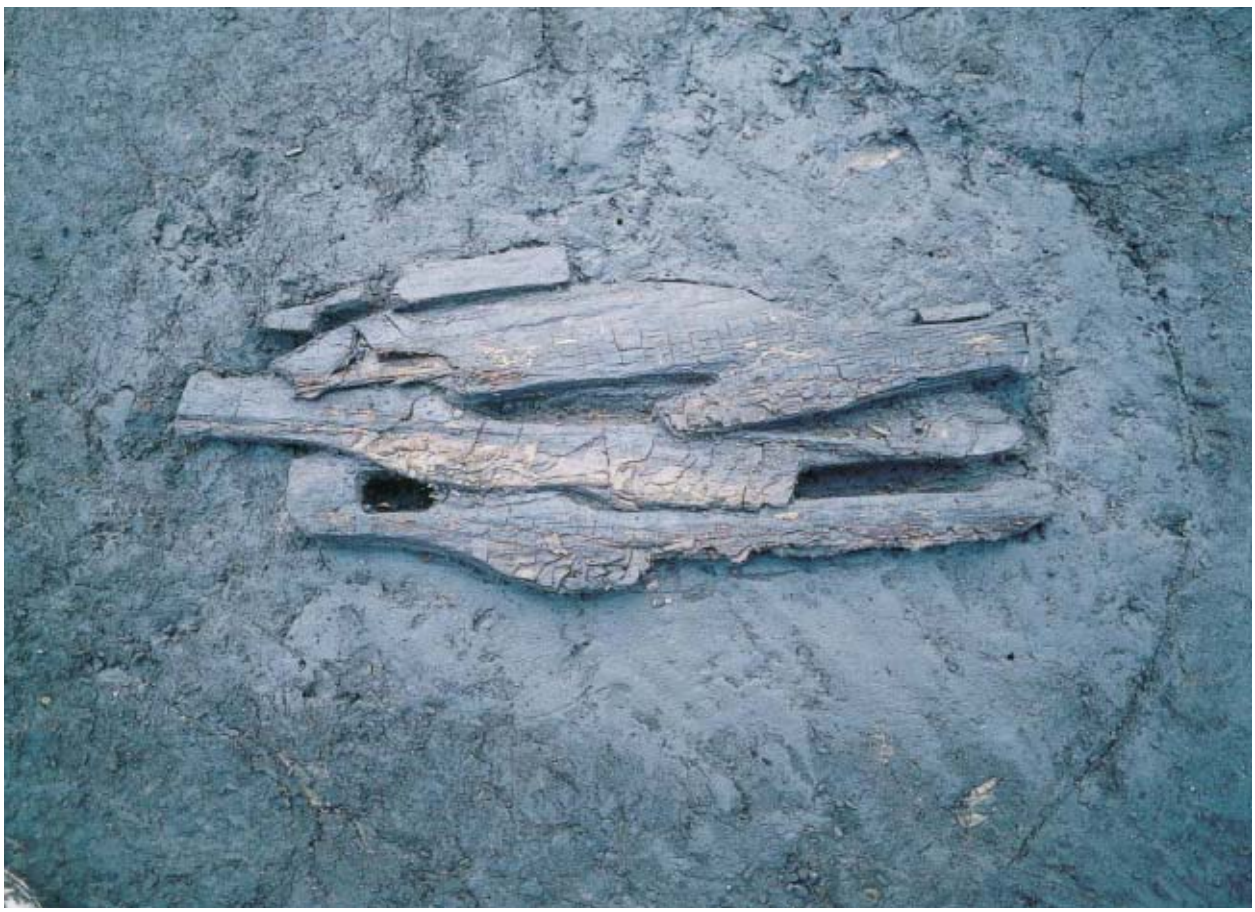
水田面基本土層

二条に並んだ大畦

古墳時代上層水田畦畔内芯材

巻頭図版６

古墳時代中層水田水路内のまつりの土器



古墳時代中層水田畦畔に埋められた鍬

古墳時代下層水田水路内の堰

階段状遺構

堰近景

巻頭図版８

弥生時代水田空中写真

多量の杭や材で補強された大畦

杭で補強された大畦

水田出土の木製品

最下層のドングリ土坑群

巻頭図版10

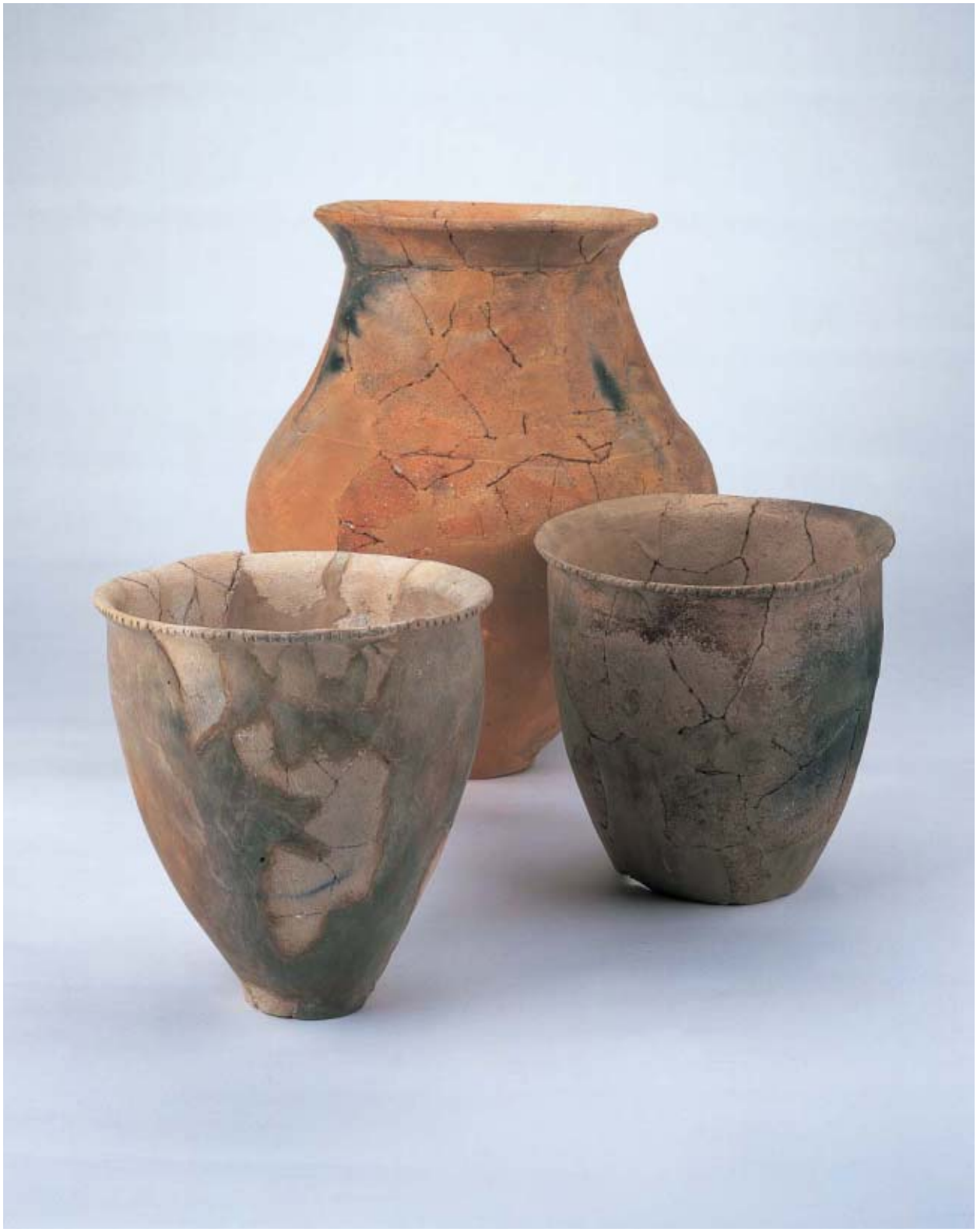
刻目突帯文土器群・甕

東部九州系突帯文甕

板付祖形甕

突帯文土器群・浅鉢

巻頭図版12



板付式土器群

石剣

石庖丁

磨製穿孔具

磨製石鏃

紡錘車

巻頭図版14

弥生時代諸手鍬・平鍬

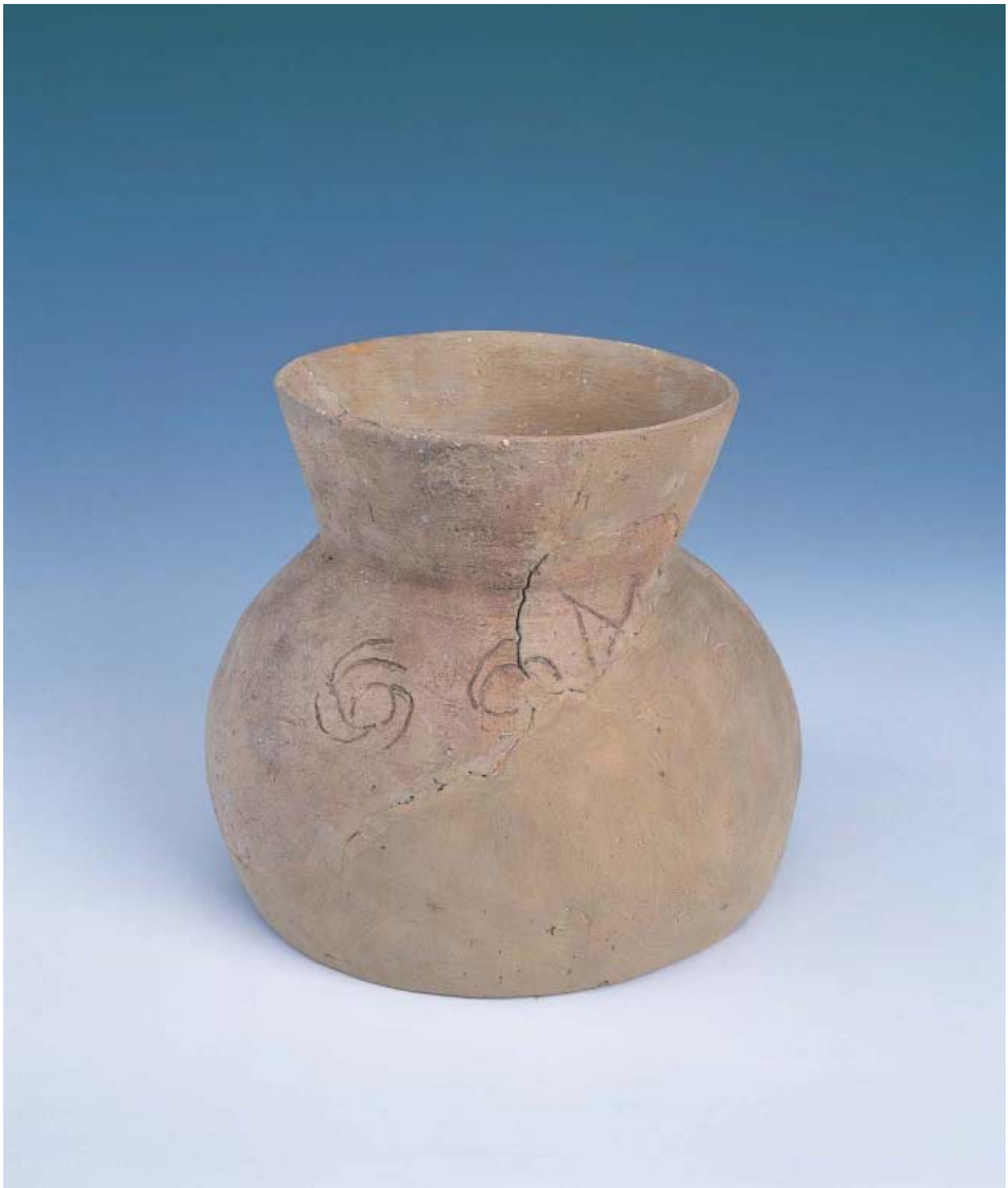
弥生時代又鍬

巻頭図版16

集落、水田跡出土土師器群

布留式土器群

土師器・椀



線刻土師器

土製人形

石錘

古墳時代二又鍬

佐賀県文化財調査報告書第154集

西九州自動車道建設に係る文化財調査報告書(２)

梅　白　遺　跡

２００３年3月

佐賀県教育委員会

序

この報告書は佐賀県教育委員会が国土交通省九州地方建設局佐賀国道工事事務所の委託をえて唐津市教育委員会の協力のもと平成９～11年度に実施した西九州自動車道唐津道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告です。

今回報告の唐津市梅白遺跡では弥生・古墳時代の水田跡と集落跡がみつかりました。とくに古墳時代中期の水田跡は植物遺体に覆われていたために畦畔がみごとに残っておりました。また、弥生時代の水田跡からは長大な又鍬が出土し、同時代の石囲い炉をもつ住居跡などはその起源が注目されます。

本書が今後の学術文化向上や埋蔵文化財に対する理解や普及に少しでも役立てば幸いに存じます。発刊にあたり多難な調査作業に従事していただいた地元の皆様、整理作業に従事していただいた調査事務所の方々並びに埋蔵文化財の保護に御理解頂きました佐賀国道工事事務所に対し、心より厚くお礼申しあげます。

平成15年3月31日

佐賀県教育委員会
教育長　松尾正廣

例言

1，本書は西九州自動車道唐津－浜玉道路建設に伴い平成９・10・11年度に実施した唐津市原所在の梅白遺跡の発掘調査報告書であり、西九州自動車道建設に係る文化財調査報告書の第２冊である。

2，発掘調査は国土交通省九州地方建設局佐賀国道工事事務所の委託を受け、佐賀県教育委員会が主体となり唐津市教育委員会の協力を得て実施した。

3，本書の執筆分担は目次に記す。

4，報告書作成にあたっての整理作業は主に佐賀市高木瀬事務所で行い、一部唐津中原事務所でも行った。また、写真現像焼付は主に佐賀県文化財調査研究資料室で行い、一部唐津中原事務所で行った。
作業分担は次のとおりである。
遺物復元整理……土井マサ子・新井久美子（高木瀬事務所）、浦田照千代・桑代ゆかり・松本いつ子・三浦美智子（中原事務所）
遺物実測・製図……蒲原淑子・末吉由紀子（高木瀬事務所）、美浦あずさ・菊池孝子・小松譲・辻村美代子（中原事務所）
遺物写真撮影……小松譲
写真現像焼付……奥智恵子（資料室）市丸宮子（中原事務所）

5，遺構実測は調査員が行い一部（有）埋蔵文化財サポートシステムに、空中写真は（有）空中写真企画に委託した。

6，発掘調査、遺物整理に際して下記の方々から指導・助言を得た。
高橋学（立命館大学）、能登健（群馬県教育委員会）、佐藤甲二（仙台市教育委員会）、山口譲二（福岡市教育委員会）、下山正一（九州大学）、野井英明（北九州大学）、酒井清治（駒沢大学）、下條信行（愛媛大学）、小松正夫（秋田市教育委員会）

7，本書の編集は小松譲が行った。

凡例

1，遺跡の略号はＵＭＥである。

2，遺構種別記号は次のとおりである。
SH：竪穴住居跡、SB：掘立柱建物跡、SK：土坑、SE：井戸跡、SD：溝跡・溝状遺構、SJ：土器棺墓・甕棺墓、SF：畦畔、SA：杭列、SX：不明遺構

3，各遺構番号は（遺構種別記号－番号）で連番とし、発掘調査時の遺構番号をそのまま用いた。

4，本書の挿図番号・図版番号は通し番号である。

5，遺物番号は遺構ごとに連番とした。本文中では挿図番号－遺物番号で表記した。写真図版遺物も同じである。

6，本書に用いた方位はすべて国土座標第Ⅱ系の座標北である。

7，遺物および実測図の検索・照合のため、実測遺物全てに県遺物登録番号を付け表に付記した。

8，遺構・遺物写真、遺構・遺物実測図は佐賀県文化財調査研究資料室に保管する。

目次

Ⅰ，調査の経過（小松）…… 1
　１，調査に至る経過 …… 1
　２，調査組織 …… 3
　３，調査の方法と経過 …… 4
　（１）調査の方法 …… 4
　（２）調査の経過 …… 5
Ⅱ，遺跡の位置と環境（小松）…… 9
　１，地理的環境 …… 9
　２，歴史的環境 …… 11
Ⅲ，調査の概要（小松）…… 14
　１，遺跡の概要 …… 14
　２，基本土層 …… 27
Ⅳ，集落跡の調査 …… 31
　１，縄文時代晩期～弥生時代の遺構と遺物 …… 31
　（１）包含層の調査 …… 31
　　①旧河道土層（小松）…… 31
　　②包含層出土遺物 …… 32
　　Ａ，土器（美浦）…… 32
　　Ｂ，石器（ 〃 ）…… 36
　　Ｃ，土製品・玉類（辻村）…… 73
　（２）竪穴住居跡（小松・美浦）…… 81
　（３）土坑（ 〃 ）…… 84
　　①ドングリ土坑 …… 84
　　②その他の土坑 …… 89
　　③土器棺 …… 91
　（４）溝跡（ 〃 ）…… 92
　２，古墳時代の遺構と遺物 …… 116
　（１）竪穴住居跡（小松）…… 116
　（２）掘立柱建物跡（ 〃 ）…… 132
　（３）土坑（ 〃 ）…… 137
　（４）井戸跡（ 〃 ）…… 151
　（５）溝跡（ 〃 ）…… 152
　（６）包含層出土遺物（ 〃 ）…… 162
　　①土器（ 〃 ）…… 162
　　②土製品・玉類・石製品（辻村）…… 170
　　③木製品（小松）…… 172
Ⅴ，水田跡の調査 …… 186
　１，概要（小松）…… 186
　２，弥生時代水田跡 …… 186
　（１）低地部水田跡（辻村）…… 186
　　①概要 …… 186
　　②下層水田 …… 186
　　Ａ流路跡（水路）…… 186
　　Ｂ畦畔 …… 189
　　③上層水田 …… 189
　　Ａ流路跡（水路）…… 189
　　Ｂ畦畔跡 …… 193

（２）微高地水田跡（小松） …… 195
３，古墳時代水田跡（ 〃 ） …… 198
（１）概要 …… 198
（２）下層水田 …… 198
①水路 …… 198
②大畦畔 …… 201
（３）中層水田 …… 201
①水路 …… 201
②畦畔 …… 203
（４）上層水田 …… 204
①被覆土と耕作土 …… 204
②大小区画水田面積と大小畦畔の規模・形態・走行 …… 204
③取水口と堰 …… 208
④水路 …… 208
⑤配水 …… 209
⑥畦畔内埋納農具、芯材 …… 209
３，中世・近世水田跡（小松） …… 217
（１）中世水田跡 …… 217
（２）近世水田跡 …… 217
①溝跡・杭列・足跡 …… 217
４，水田跡の出土遺物 …… 218
（１）弥生時代の遺物 …… 218
①低地部水田出土土器（美浦） …… 218
②低地部水田出土石器（ 〃 ） …… 218
③微高地水田出土土器・石器（ 〃 ） …… 218
④木製品（小松） …… 229
（２）古墳時代の遺物（小松） …… 252
①土器 …… 252
②木製品 …… 267
（３）中世・近世の出土遺物 …… 267
①土器 …… 267
Ａ，中世陶磁器（辻村） …… 267
Ｂ，近世陶磁器（辻村） …… 277
②木製品（小松） …… 279
Ⅵ，自然科学分析 …… 285
１，梅白遺跡におけるプラントオパール分析　古環境研究所 …… 285
２，梅白遺跡における花粉分析　古環境研究所 …… 289
３，梅白遺跡における珪藻分析　古環境研究所 …… 296
４，梅白遺跡における放射性炭素年代測定　地球科学研究所・古環境研究所 …… 306
５，梅白遺跡出土木材の樹種同定　古環境研究所 …… 307
６，梅白遺跡における種実同定　古環境研究所 …… 322
Ⅶ，考察 …… 325
１，古墳時代土師器の器種・形式・型式分類（小松） …… 325
２，梅白遺跡出土土師器群の編年的位置づけ－梅白式の提唱－（小松） …… 333
３，唐津市梅白遺跡の弥生・古墳時代の集落と水田跡の変遷（小松） …… 347
４，弥生・古墳水田出土杭の型式変化（小松） …… 358
５，佐賀県唐津市梅白遺跡出土資料の年代学的調査（藤尾・今村・坂本） …… 360
６，遺物から見た縄文時代～弥生時代にかけての梅白遺跡（美浦） …… 367

挿図目次

図１　路線図(1/30000) …… 2
図２　遺跡位置図 …… 9
図３　旧海岸線・古砂丘列・新砂丘列地形分類図 …… 10
図４　周辺遺跡分布図(1/70000) …… 11
図５　遺跡位置図(1/4000) …… 14
図６　遺構配置図上層１(1/500) …… 15・16
図７　遺構配置図上層２(1/500) …… 17
図８　遺構配置図下層１(1/500) …… 21・22
図９　遺構配置図下層２(1/500) …… 23・24
図10　層序認識の変遷図 …… 28
図11　調査区南壁土層(ヨコ1/400,タテ1/80) …… 29・30
図12　旧河道土層図(1/80) …… 31
図13　包含層出土土器１(1/4) …… 40
図14　包含層出土土器２(1/4) …… 41
図15　包含層出土土器３(1/4) …… 42
図16　包含層出土土器４(1/4) …… 43
図17　包含層出土土器５(1/4) …… 44
図18　包含層出土土器６(1/4) …… 45
図19　包含層出土土器７(1/4) …… 46
図20　包含層出土土器８(1/4) …… 47
図21　包含層出土土器９(1/4) …… 48
図22　包含層出土土器10(1/4) …… 49
図23　包含層出土土器11(1/4) …… 50
図24　包含層出土土器12(1/4) …… 51
図25　包含層出土土器13(1/4) …… 52
図26　包含層出土土器14(1/4) …… 53
図27　包含層出土土器15(1/4) …… 54
図28　包含層出土土器16(1/4) …… 55
図29　包含層出土土器17(1/4) …… 56
図30　包含層出土土器18(1/4) …… 57
図31　包含層出土土器19(1/4) …… 58
図32　包含層出土石器１(1/3) …… 59
図33　包含層出土石器２(1/3) …… 60
図34　包含層出土石器３(1/3) …… 61
図35　包含層出土石器４(1/4) …… 62
図36　包含層出土石器５(1/2・1/3) …… 63

図37 包含層出土石器６(1/2) …… 64
図38 包含層出土石器７(2/3) …… 65
図39 包含層出土石器８(2/3) …… 66
図40 包含層出土石器９(2/3) …… 67
図41 包含層出土石器10(2/3) …… 68
図42 包含層出土石器11(2/3・1/4) …… 69
図43 包含層出土石器12(1/4) …… 70
図44 包含層出土石器13(1/4・1/3) …… 71
図45 包含層出土石器14(1/4・1/3・1/6) …… 72
図46 紡錘車散布図 …… 73
図47 包含層他出土紡錘車Ａ類(1/2) …… 74
図48 包含層他出土紡錘車Ｂ類(1/2) …… 75
図49 包含層他出土土製品・玉類(1/2) …… 76
図50 集落部遺構配置図１(1/250) …… 78
図51 集落部遺構配置図２(1/250) …… 79・80
図52 ＳＨ119竪穴住居跡(1/40)・石囲い炉跡(1/30) …… 82
図53 ＳＨ119出土土器(1/4)・石斧(1/2)・磨製石鏃(1/2)・砥石(1/3) …… 83
図54 ＳＨ119出土石器(2/3・1/4) …… 84
図55 ＳＨ222竪穴住居跡(1/40)・石囲い炉跡(1/30) …… 85
図56 ＳＨ222出土土器(1/4) …… 86
図57 ＳＨ239竪穴住居跡(1/60) …… 86
図58 ＳＨ239出土土器(1/4)・石器(1/2・1/3・2/3) …… 87
図59 ドングリ土坑(1/60) …… 88
図60 ＳＫ223土坑(1/40)・出土土器(1/4) …… 90
図61 ＳＫ248土坑(1/40)・出土土器(1/4) …… 90
図62 ＳＫ285土坑(1/60)・出土土器(1/4) …… 91
図63 ＳＫ291土坑(1/20)・出土土器(1/4) …… 92
図64 ＳＪ292土器棺墓(1/20) …… 92
図65 ＳＪ292出土土器(1/4) …… 93
図66 弥生自然流路・ドングリ土坑(1/300) …… 95
図67 ＳＤ187土層(1/60) …… 95
図68 ＳＤ187出土土器(1/4) …… 96
図69 ＳＤ187・ＳＤ192出土土器・石器(1/4・1/2) …… 97
図70 ＳＨ104竪穴住居跡(1/60) …… 116
図71 ＳＨ104出土土器(1/4) …… 117
図72 ＳＨ118竪穴住居跡(1/60)・出土土器(1/4) …… 118
図73 ＳＨ121竪穴住居跡(1/60) …… 119
図74 ＳＨ121出土土器１(1/4) …… 120
図75 ＳＨ121出土土器２(1/4) …… 121

図 76 ＳＨ121出土土器３(1/4) …… 122
図 77 ＳＨ122竪穴住居跡(1/60)・出土土器(1/4) …… 123
図 78 ＳＨ124竪穴住居跡(1/60) …… 124
図 79 ＳＨ125竪穴住居跡(1 /60)・出土土器(1/4) …… 125
図 80 ＳＨ231竪穴住居跡(1/60) …… 127
図 81 ＳＨ231出土土器(1/4) …… 128
図 82 ＳＨ250竪穴住居跡(1/60)出土土器(1/4) …… 129
図 83 ＳＨ262竪穴住居跡(1/60) …… 130
図 84 ＳＨ262出土土器(1/4) …… 131
図 85 掘立柱建物跡１(1/60) …… 133
図 86 掘立柱建物跡２(1/60) …… 134
図 87 掘立柱建物跡３(1/60) …… 135
図 88 掘立柱建物跡４(1/60) …… 136
図 89 ＳＫ103土坑(1/30) …… 138
図 90 ＳＫ103出土土器(1/4)・木器(1/4・1/6) …… 139
図 91 ＳＫ105土坑(1/40)・出土石器、土製品(1/2) …… 140
図 92 ＳＫ106土坑(1/30)・出土土器(1/6･1/4) …… 141
図 93 ＳＫ108土坑(1/40)・出土土器(1/4) …… 141
図 94 ＳＫ110土坑(1/40)・出土土器(1/4) …… 142
図 95 ＳＫ111土坑(1/30)・出土土器(1/4) …… 142
図 96 ＳＫ112土坑(1/40)・出土土器(1/4) …… 143
図 97 ＳＫ120土坑(1/40)・出土土器(1/4) …… 144
図 98 ＳＫ127土坑(1/60)・出土土器(1/4) …… 145
図 99 ＳＫ128土坑(1/30)・出土土器(1/4) …… 145
図100 ＳＫ132土坑(1/30)・出土土器(1/4) …… 146
図101 ＳＫ133土坑(1/60)・出土土器(1/4) …… 146
図102 ＳＫ205土坑(1/60)・出土土器(1/4) …… 147
図103 ＳＫ220土坑(1/60)・出土土器(1/4) …… 148
図104 ＳＫ228土坑(1/40)・出土土器、木器(1/4) …… 149
図105 ＳＫ232土坑(1/30)・出土土器(1/4)、木器(1/6) …… 150
図106 ＳＥ251井戸(1/30)・出土土器（1/4) …… 151
図107 ＳＤ115溝遺物出土状況(1/160) …… 153
図108 ＳＤ115出土土器１(1/4) …… 154
図109 ＳＤ115出土土器２(1/4) …… 155
図110 ＳＤ115出土土器３(1/4) …… 156
図111 ＳＤ115出土土器４(1/4) …… 157
図112 ＳＤ115出土土器５(1/4) …… 158
図113 ＳＤ115出土土器６(1/4) …… 159
図114 ＳＤ115出土土器７(1/4) …… 160

図115 ＳＤ138出土土器(1/4) …… 162
図116 包含層出土土器１(1/4) …… 163
図117 包含層出土土器２(1/4) …… 164
図118 包含層出土土器３(1/4) …… 165
図119 包含層出土土器４(1/4) …… 166
図120 包含層出土土器５(1/4) …… 167
図121 包含層出土土器６(1/4) …… 168
図122 包含層出土土器７(1/4) …… 169
図123 包含層他出土土製品・玉類・石製品(2/3･1/3)12のみ1/3 …… 171
図124 包含層出土木製品(1/4) …… 172
図125 水田跡地山地形図(1/400) …… 187
図126 弥生下層水田(1/300) …… 188
図127 ＳＤ173・174土層(1/60) …… 189
図128 ＳＦ175・176・ＳＤ162・163遺物出土状況(1/140) …… 190
図129 ＳＦ175土層・ＳＤ163断面(1/60) …… 191
図130 ＳＦ175畦畔杭列出土状況(1/40) …… 191
図131 ＳＸ177出土状況(1/20) …… 191
図132 ＳＦ176畦畔土層(1/60) …… 192
図133 ＳＦ176畦畔杭列出土状況１(1/40) …… 192
図134 ＳＦ176畦畔杭列出土状況２(1/40) …… 192
図135 弥生水田中央ベルト土層(1/60) …… 193
図136 弥生上層水田(1/300) …… 194
図137 弥生水田溝(1/400)・土層(1/60) …… 196
図138 調査区南壁土層(1/60) …… 198
図139 古墳下層水田(1/300) …… 199
図140 古墳中層・下層水田・ＳＤ164土層(1/60) …… 200
図141 ＳＤ164下層遺物出土状況(1/80) …… 200
図142 古墳下層水田・ＳＦ171芯材(1/60) …… 201
図143 古墳中層水田(1/300) …… 202
図144 ＳＤ164上層遺物出土状況(1/80) …… 203
図145 畦畔内埋納農具(1/20) …… 203
図146 上層水田面被覆土模式図 …… 204
図147 古墳上層水田(1/300) …… 205・206
図148 大区画１水口(1/120) …… 207
図149 上層水田・ＳＦ155芯材(1/80) …… 207
図150 ＳＡ161杭列(1/30) …… 207
図151 ＳＤ149・ＳＤ150土層図(1/40) …… 209
図152 上層水田　水田区画番号・水流方向想定図(1/400) …… 210
図153 古墳上層水田畦畔内芯材・埋納農具(1/300) …… 211・212

図154 中世溝(1/400)・土層(1/60) …… 219
図155 近世溝・杭列(1/600) …… 220
図156 ＳＤ101・102溝・足跡(1/80)・土層(1/30) …… 221
図157 低地部弥生水田出土土器１(1/4) …… 222
図158 低地部弥生水田出土土器２(1/4) …… 223
図159 低地部弥生水田出土土器３(1/4) …… 224
図160 低地部弥生水田出土石器１(1/3) …… 225
図161 低地部弥生水田出土石器２(1/3･2/3) …… 226
図162 微高地水田出土土器・石器１ …… 227
図163 微高地水田出土土器・石器２ …… 228
図164 弥生水田出土木製品１(1/6) …… 230
図165 弥生水田出土木製品２(1/6) …… 231
図166 弥生水田出土木製品３(1/6) …… 232
図167 弥生水田出土木製品４(1/6) …… 233
図168 弥生水田出土木製品５(1/6) …… 234
図169 弥生水田出土木製品６(1/4) …… 235
図170 弥生水田出土木製品７(1/4) …… 236
図171 弥生水田出土木製品８(1/4) …… 237
図172 弥生水田出土木製品９(1/6・1/4) …… 238
図173 弥生水田出土木製品10(1/6・1/4) …… 239
図174 弥生水田出土木製品11(1/6) …… 240
図175 弥生水田出土木製品12(1/6) …… 241
図176 弥生水田出土木製品13(1/6) …… 242
図177 弥生水田出土木製品14(1/6) …… 243
図178 弥生水田出土木製品15(1/6) …… 244
図179 古墳水田出土土器１(1/4) …… 253
図180 古墳水田出土土器２(1/4) …… 254
図181 ＳＤ149出土土器(1/4) …… 254
図182 ＳＤ164出土土器１(1/4) …… 255
図183 ＳＤ164出土土器２(1/4) …… 256
図184 ＳＤ164出土土器３(1/6) …… 257
図185 ＳＤ164出土土器４(1/4) …… 258
図186 ＳＤ164出土土器５(1/4) …… 259
図187 ＳＤ164出土土器６(1/4) …… 260
図188 ＳＤ164出土土器７(1/4) …… 261
図189 古墳水田出土木製品１(1/6) …… 268
図190 古墳水田出土木製品２(1/6) …… 269
図191 古墳水田出土木製品３(1/6) …… 270
図192 古墳水田出土木製品４(1/4・1/6) …… 271

図193 古墳水田出土木製品５(1/6・1/4) …… 272
図194 古墳水田出土木製品６(1/6) …… 273
図195 古墳水田出土木製品７(1/12) …… 274
図196 古墳水田出土木製品８(1/12) …… 275
図197 中世土師器・陶磁器(1/3) …… 276
図198 近世陶磁器他１(1/3) …… 277
図199 近世陶磁器２(1/3) …… 278
図200 中・近世包含層出土木製品(1/4) …… 279
図201 プラント・オパール分析結果 …… 287
図202 プラント・オパール顕微鏡写真 …… 288
図203 花粉ダイアグラム …… 292
図204 花粉顕微鏡写真 …… 293
図205 珪藻ダイアグラム …… 298
図206 珪藻顕微鏡写真１ …… 299
図207 珪藻顕微鏡写真２ …… 300
図208 珪藻顕微鏡写真３ …… 301
図209 C^{14}土壌採取土層模式図 …… 306
図210 弥生時代水田跡大畦畔内杭材顕微鏡写真１ …… 312
図211 弥生時代水田跡大畦畔内杭材顕微鏡写真２ …… 313
図212 弥生時代水田跡大畦畔内杭材顕微鏡写真３ …… 314
図213 弥生時代水田跡大畦畔内杭材顕微鏡写真４ …… 315
図214 木製品木材顕微鏡写真１ …… 316
図215 木製品木材顕微鏡写真２ …… 317
図216 木製品木材顕微鏡写真３ …… 318
図217 木製品木材顕微鏡写真４ …… 319
図218 掘立柱建物柱根材顕微鏡写真１ …… 320
図219 掘立柱建物柱根材顕微鏡写真２ …… 321
図220 種実写真 …… 323
図221 甕形式分類図 …… 328
図222 壺形式分類図 …… 328
図223 高杯形式分類図 …… 329
図224 鉢Ａ,Ｂ形式分類図 …… 329
図225 土器の共通した型式変化 …… 337
図226 甕口縁部成形技法 …… 337
図227 梅白遺跡古墳時代土器群の編年１(1/10) …… 340
図228 梅白遺跡古墳時代土器群の編年２(1/10) …… 341
図229 梅白遺跡古墳時代土器群の編年３(1/10) …… 342
図230 土師本村３式土器群(1/8) …… 343
図231 宇木川，半田川流域遺跡群分布図(1/25000) …… 348

図232 縄文時代晩期遺構配置図 …… 349
図233 弥生時代前期遺構配置図 …… 350
図234 弥生時代中期遺構配置図 …… 350
図235 古墳時代中期遺構配置図 …… 351
図236 基本土層模式図 …… 351
図237 確認した畦畔 …… 354
図238 畦畔確認地点位置図(1/1000) …… 355
図239 基本土層模式図 …… 355
図240 遺跡位置図(1/50000) …… 356
図241 巡見道遺跡A－1区検出遺構(1/16) …… 356
図242 菜畑内田遺跡基本土層模式図 …… 356
図243 菜畑内田遺跡調査区位置図 …… 356
図244 菜畑内田遺跡3次調査遺構配置図(1/240) …… 356
図245 杭分類図 …… 358
図246 弥生水田出土杭形式比率 …… 359
図247 古墳水田出土杭形式比率 …… 359

表目次

表１ 調査経過一覧表 …… 1
表２ 弥生時代土製品・玉類一覧表（１） …… 76
表３ 弥生時代土製品・玉類一覧表（２） …… 77
表４ 包含層・遺構出土土器一覧表（１） …… 98
表５ 包含層・遺構出土土器一覧表（２） …… 99
表６ 包含層・遺構出土土器一覧表（３） …… 100
表７ 包含層・遺構出土土器一覧表（４） …… 101
表８ 包含層・遺構出土土器一覧表（５） …… 102
表９ 包含層・遺構出土土器一覧表（６） …… 103
表10 包含層・遺構出土土器一覧表（７） …… 104
表11 包含層・遺構出土土器一覧表（８） …… 105
表12 包含層・遺構出土土器一覧表（９） …… 106
表13 包含層・遺構出土土器一覧表（10） …… 107
表14 包含層・遺構出土土器一覧表（11） …… 108
表15 包含層・遺構出土土器一覧表（12） …… 109
表16 包含層・遺構出土石器一覧表（１） …… 109
表17 包含層・遺構出土石器一覧表（２） …… 110
表18 包含層・遺構出土石器一覧表（３） …… 111

表19 包含層・遺構出土石器一覧表（４）…… 112
表20 包含層・遺構出土石器一覧表（５）…… 113
表21 包含層・遺構出土石器一覧表（６）…… 114
表22 包含層・遺構出土石器一覧表（７）…… 115
表23 竪穴住居一覧表…… 116
表24 掘立柱建物跡一覧表…… 132
表25 土坑一覧表…… 137
表26 集落跡出土土師器一覧表（１）…… 173
表27 集落跡出土土師器一覧表（２）…… 174
表28 集落跡出土土師器一覧表（３）…… 175
表29 集落跡出土土師器一覧表（４）…… 176
表30 集落跡出土土師器一覧表（５）…… 177
表31 集落跡出土土師器一覧表（６）…… 178
表32 集落跡出土土師器一覧表（７）…… 179
表33 集落跡出土土師器一覧表（８）…… 180
表34 集落跡出土土師器一覧表（９）…… 181
表35 集落跡出土土師器一覧表（10）…… 182
表36 集落跡出土土師器一覧表（11）…… 183
表37 集落跡出土土師器一覧表（12）…… 184
表38 集落跡出土土師器一覧表（13）…… 185
表39 古墳時代土製品・玉類・石製品一覧表…… 185
表40 古墳時代集落跡出土木製品一覧表…… 185
表41 古墳上層水田計測表（１）…… 213
表42 古墳上層水田計測表（２）…… 214
表43 古墳上層水田計測表（３）…… 215
表44 古墳上層水田計測表（４）…… 216
表45 低地部水田出土弥生土器一覧表（１）…… 245
表46 低地部水田出土弥生土器一覧表（２）…… 246
表47 低地部水田出土弥生土器一覧表（３）…… 247
表48 微高地水田出土弥生土器一覧表（１）…… 247
表49 低地部水田出土弥生石器一覧表…… 248
表50 微高地水田出土弥生石器一覧表…… 248
表51 弥生水田出土木製品一覧表（１）…… 249
表52 弥生水田出土木製品一覧表（２）…… 250
表53 弥生水田出土杭一覧表（１）…… 250
表54 弥生水田出土杭一覧表（２）…… 251
表55 古墳水田出土土師器一覧表（１）…… 262
表56 古墳水田出土土師器一覧表（２）…… 263
表57 古墳水田出土土師器一覧表（３）…… 264

表58 古墳水田出土土師器一覧表（４）…… 265
表59 古墳水田出土土師器一覧表（５）…… 266
表60 古墳水田出土木製品一覧表（１）…… 280
表61 古墳水田出土木製品一覧表（２）…… 281
表62 中世土師器・陶磁器一覧表…… 281
表63 近世陶磁器一覧表…… 282
表64 銭貨一覧表…… 283
表65 梅白遺跡における花粉分析結果（１）…… 294
表66 梅白遺跡における花粉分析結果（２）…… 295
表67 梅白遺跡における珪藻分析結果（１）…… 302
表68 梅白遺跡における珪藻分析結果（２）…… 303
表69 梅白遺跡における珪藻分析結果（３）…… 304
表70 梅白遺跡における珪藻分析結果（４）…… 305
表71 放射線炭素年代測定値表…… 306
表72 弥生時代水田跡ＳＦ175大畦畔内杭材（１）…… 308
表73 弥生時代水田跡ＳＦ175大畦畔内杭材（２）…… 309
表74 弥生時代～古墳時代の木製品…… 310
表75 古墳時代中期前半の掘立柱建物・柱根…… 311
表76 梅白遺跡における種実同定結果…… 322
表77 甕分類表…… 325
表78 壺分類表…… 326
表79 高杯分類表…… 327
表80 鉢分類表…… 327
表81 椀分類表…… 327
表82 ＳＨ104高杯脚部形式分類表 …… 329
表83 ＳＨ104高杯杯部形式分類表 …… 329
表84 ＳＨ121甕Ａ・体部形式分類表 …… 329
表85 ＳＨ121甕Ａ・口縁部形態・体部調整分類表 …… 329
表86 ＳＨ121鉢形式分類表 …… 330
表87 ＳＨ121高杯・杯部形式分類表 …… 330
表88 ＳＨ121高杯・脚部形式分類表 …… 330
表89 ＳＨ125小型丸底壺形式分類表 …… 330
表90 ＳＤ115・甕Ａ分類表 …… 330
表91 ＳＤ115高杯脚部形式分類表 …… 330
表92 ＳＤ115高杯杯部形式分類表 …… 330
表93 ＳＤ115小型広口壺形式分類表 …… 331
表94 包含層・甕Ａ分類表…… 331
表95 包含層・小型丸底壺形式分類表…… 331
表96 包含層・高杯脚部形式分類表…… 331

表 97 包含層・高杯杯部形式分類表 …… 331
表 98 包含層・鉢形式分類表 …… 331
表 99 ＳＤ164甕Ａ・体部形式分類表 …… 332
表100 ＳＤ164甕Ａ・口縁部形態・体部調整分類表 …… 332
表101 ＳＤ164小型広口壺形式分類表 …… 332
表102 ＳＤ164鉢形式分類表 …… 332
表103 ＳＤ164高杯脚部形式分類表 …… 332
表104 ＳＤ164高杯杯部・口縁部形式分類表 …… 332
表105 甕・壺属性型式消長表 …… 337
表106 梅白遺跡出土主要土器型式構成表 …… 339
表107 主要編年案との併行関係 …… 339
表108 唐津平野遺跡群消長表 …… 347

巻頭図版目次

１，唐津平野空中写真
２，集落跡全景
３，石囲い炉がある弥生時代の住居・ＳＨ222／石囲い炉がある弥生時代の住居・ＳＨ119
４，古墳時代上層水田空中写真／水田面基本土層
５，二条に並んだ大畦／古墳時代上層水田畦畔内芯材
６，古墳時代中層水田水路内のまつりの土器／古墳時代中層水田畦畔に埋められた鍬
７，古墳時代下層水田水路内の堰／階段状遺構／堰近景
８，弥生時代水田空中写真／多量の杭や材で補強された大畦／杭で補強された大畦
９，水田出土の木製品／最下層のドングリ土坑群
10，刻目突帯文土器群・甕
11，東部九州系突帯文甕／板付祖形甕／突帯文土器群・浅鉢
12，板付式土器群
13，石剣／石庖丁／磨製穿孔具／磨製石鏃／紡錘車
14，弥生時代諸手鍬・平鍬
15，弥生時代又鍬
16，集落、水田跡出土土師器群
17，布留式土器群／土師器・椀
18，線刻土師器
19，土製人形／石錘
20，古墳時代二又鍬

図版目次

PL. 1　1.集落跡遠景（北から）2.集落跡遠景（南から）
PL. 2　1.集落跡空中写真（北東上空から）2.集落跡空中写真（真上から）
PL. 3　1.旧河道全景（東から）2.旧河道土層（西から）
PL. 4　1.旧河道作業風景（北東から）2.旧河道作業風景（南から）
PL. 5　1.SH119(1)（北から）2.SH119（2）（北から）
PL. 6　1.SH119遺物出土状況（東から）2.SH119炉跡（北から）3.SH239（北から）
PL. 7　1.SH222（1）（東から）2.SH222（2）（東から）
PL. 8　1.SK285完掘（西から）2.SK285半載（南から）3.SK285遺物出土状況（南から）
PL. 9　1.SJ292完掘（北から）2.SJ292土器棺（西から）3.SK291遺物出土状況（東から）
PL.10　1.SD187と土坑群（北から）2.SK180（東から）3.SK180（真上から）
PL.11　1.SK182堅果出土状況（南から）2.SK182半載（南から）3.SK181完掘（西から）
PL.12　1.SK183（南から）2.SK184（南から）3.SK185堅果出土状況　4.SK185完掘　5.SK186半載・堅果出土状況　6.SK186完掘　7.SK189・SK190（南から）
PL.13　1.弥生土器出土状況・F-15(1)　2.弥生土器出土状況・F-15(2)　3.柱状片刃石斧出土状況　4.磨製穿孔具出土状況　5.石庖丁出土状況　6.フォーク状木製品出土状況　7.長柄出土状況　8.不明木製品出土状況
PL.14　1.作業風景・E-11（北東から）2.遺物出土状況・E-11(1)（北東から）3.遺物出土状況・E-11(2)　4.遺物出土状況・E-11(3)　5.遺物出土状況・D-8　6.遺物出土状況・C-5　7.遺物出土状況・D-6
PL.15　1.SH104（南から）2.柱穴内高杯出土状況　3.炉跡　4.遺物出土状況
PL.16　1.SH118（北から）2.SH122（東から）
PL.17　1.SH121遺物出土状況（東から）2.SH121完掘（北から）
PL.18　1.SH121遺物出土状況（南東から）2.SH121土層（南から）3.SH121遺物出土状況
PL.19　1.SH124（北から）2.SH250（南から）3.SH262（東から）
PL.20　1.SH125（北から）2.SH125遺物出土状況（東から）
PL.21　1.SH231遺物出土状況（南から）2.SH231完掘（南から）3.屋内土坑（東から）4.床面検出足跡
PL.22　1.SB107（南から）2.SB136・137（北から）3.SB144（南から）4.SB145（西から）5.SB148（北から）6.SB253（南から）7.SB254（北から）8.SB255（北から）
PL.23　1.SK103上層遺物出土状況（東から）2.SK103中層遺物出土状況（東から）3.SK103下層遺物出土状況（東から）
PL.24　1.SK105（西から）2.SK106（北西から）3.SK108（南から）
PL.25　1.SK110半載（西から）2.SK110（東から）3.SK111遺物出土状況（北から）
PL.26　1.SK127・SK133（北西から）2.SK127（西から）
PL.27　1.SK128（南から）2.SK132（東から）3.SK205半載（南から）4.SK205完掘（南から）5.SK220半載（南から）
PL.28　1.SK228遺物出土状況（西から）2.SK232遺物出土状況（東から）3.SK232完掘（西から）
PL.29　1.SE251検出状況（南から）2.上層遺物出土状況　3.SE251井戸枠（南から）4.SE251井戸枠内

遺物出土状況（北から）
PL.30　1.SD115遺物出土状況・SD149検出状況（南から）2.SD115・SD149完掘（南から）
PL.31　1.SD115,竪穴住居群（南から）2.SD115遺物出土状況（北から）3.SD115土層（南から）4.SD138土層（南から）
PL.32　1.SF176・SD162（北から）2.SF176大畦畔に打ち込まれた杭（南から）
PL.33　1.SD163土層（南から）2.SF175・SD163下層水田（南から）
PL.34　1.SD174（南から）2.諸手鍬出土状況　3.三又鍬出土状況
PL.35　1.弥生水田空中写真（真上から）2.弥生上層水田遠景（南から）
PL.36　1.SF175近景（北から）2.SX177（東から）3.SX177（真上から）
PL.37　1.SF176土層（南から）2.SD174（南から）3.SD173（南から）
PL.38　1.微高地弥生水田・SD280（北から）2.微高地弥生水田・SD288・SD286（南から）
PL.39　1.SD164下層（北から）2.SD164下層堰状木組と階段（南から）3.堰状木組
PL.40　1.SF171杭列（南から）2.SF171検出状況（南から）3.SF171芯材（北から）4.SF171杭列（南から）
PL.41　1.SD164上層（北から）2.畦畔内埋納二又鍬
PL.42　1.SD164上層遺物出土状況1（南から）2.SD164上層遺物出土状況2　3.SD164土層
PL.43　1.SF157・SF158・SD160土層1、調査区北壁　2.SF157・SF158・SD160土層2、調査区南壁　3.SD160（南から）
PL.44　1.古墳上層水田空中写真1（南上空から）2.古墳水田空中写真2（真上から）
PL.45　1.古墳上層水田遠景（南東から）2.古墳上層水田近景（北西から）
PL.46　1.古墳上層水田、二条に並んだ大畦畔（北から）2.古墳上層水田、大区画水口（北から）
PL.47　1.古墳上層水田大区画1、検出状況（北から）、2.古墳上層水田大区画1・2（北から）
PL.48　1. SA161（北から）2. SF155芯材内出土土製品　3. SD150土層
PL.49　1.古墳上層水田畦畔盛土内出土芯材１（北から）2.古墳上層水田畦畔盛土内出土芯材２（北西から）
PL.50　1.SF154畦畔内出土二又鍬（北東から）2.SF156芯材出土状況（東から）3.小区画水田㊱-㊳畦畔内出土芯材（北から）4.杭で固定した芯材
PL.51　1.中世水田溝、SD281・282・283（北から）2.中世水田溝、SD289・281（南から）
PL.52　1.中世水田溝、SD281（南から）2.中世水田溝、SD283（南から）
PL.53　1.近世水田検出状況（南東から）2.SD101、SD102（南から）3.足跡検出状況
PL.54　1.SD102に沿った杭列（南から）2.SD101土層　3.SD102土層
PL.55　包含層出土 縄文～弥生土器（1）
PL.56　包含層出土 縄文～弥生土器（2）
PL.57　包含層出土 縄文～弥生土器（3）
PL.58　包含層出土 縄文～弥生土器（4）
PL.59　包含層出土 縄文～弥生土器（5）
PL.60　包含層出土 縄文～弥生土器（6）
PL.61　包含層出土 縄文～弥生土器（7）
PL.62　包含層出土 縄文～弥生土器（8）
PL.63　包含層出土 縄文～弥生土器（9）

PL. 64 遺構出土 縄文～弥生土器
PL. 65 遺構・低地部弥生水田出土弥生土器
PL. 66 包含層出土 縄文～弥生石器（1）
PL. 67 包含層出土 縄文～弥生石器（2）
PL. 68 包含層他出土 縄文～弥生石器
PL. 69 柱状片刃石斧
PL. 70 扁平片刃石斧
PL. 71 石庖丁
PL. 72 磨製石鏃　磨製穿孔具
PL. 73 磨製石剣
PL. 74 包含層出土紡錘車
PL. 75 包含層他出土土製品・玉類
PL. 76 集落跡出土 古墳時代 土師器（1）
PL. 77 集落跡出土 古墳時代 土師器（2）
PL. 78 集落跡出土 古墳時代 土師器（3）
PL. 79 集落跡出土 古墳時代 土師器（4）
PL. 80 集落跡出土 古墳時代 土師器（5）
PL. 81 集落跡出土 古墳時代 土師器（6）
PL. 82 集落跡出土 古墳時代 土師器（7）
PL. 83 集落跡出土 古墳時代 土師器（8）
PL. 84 集落跡出土 古墳時代 土師器（9）
PL. 85 集落跡出土 古墳時代 土師器（10）
PL. 86 集落跡出土 古墳時代 土師器（11）
PL. 87 集落跡出土 古墳時代 土師器（12）
PL. 88 集落跡出土 古墳時代 土師器（13）
PL. 89 集落跡出土 古墳時代 土師器（14）
PL. 90 集落跡出土 古墳時代 土師器（15）
PL. 91 集落跡出土 古墳時代 土師器（16）
PL. 92 集落跡出土 古墳時代 土師器（17）
PL. 93 集落跡出土 古墳時代 土師器（18）
PL. 94 集落跡出土 古墳時代 土師器（19）
PL. 95 集落跡出土 古墳時代 土師器（20）
PL. 96 集落跡出土 古墳時代 土師器（21）
PL. 97 集落跡出土 古墳時代 土師器（22）
PL. 98 集落跡・水田跡出土 古墳時代 土師器
PL. 99 水田跡出土 古墳時代 土師器（1）
PL.100 水田跡出土 古墳時代 土師器（2）
PL.101 水田跡出土 古墳時代 土師器（3）
PL.102 水田跡出土 古墳時代 土師器（4）

PL.103　水田跡出土 古墳時代 土師器（5）
PL.104　水田跡出土 古墳時代 土師器（6）
PL.105　水田跡出土 古墳時代 土師器（7）
PL.106　水田跡出土 古墳時代 土師器（8）
PL.107　水田跡出土 古墳時代 土師器（9）
PL.108　1.古墳時代石製品　2.古墳時代土製品　3.土製人形
PL.109　弥生時代 木製品（1）
PL.110　弥生時代 木製品（2）
PL.111　弥生時代 木製品（3）
PL.112　弥生時代 木製品（4）
PL.113　弥生時代 木製品（5）
PL.114　弥生時代 木製品（6）
PL.115　古墳時代 木製品（1）
PL.116　古墳時代 木製品（2）
PL.117　古墳時代 木製品（3）
PL.118　古墳時代 木製品（4）
PL.119　古墳時代 木製品（5）
PL.120　古墳時代 木製品（6）
PL.121　古墳時代 木製品（7）

Ⅰ，調査の経過

１，調査に至る経過

西九州自動車道は福岡県福岡市から前原市、佐賀県唐津市、伊万里市、長崎県松浦市、佐世保市を経由して佐賀県武雄市に至り九州横断自動車長崎大分線と合流する総延長約150kmの路線であり、国土交通省九州地方建設局の事業である。本埋蔵文化財発掘調査事業はこのうちの唐津道路区間の中の浜玉インターチェンジと唐津インターチェンジ区間6.6kmを対象としている。

佐賀県教育委員会文化財課は佐賀国道工事事務所から道路建設事業の照会を受け、平成６年度から路線予定地の踏査および確認調査を実施した。文化財調査体制は開発事業が広域かつ大規模であることから調査主体は佐賀県教育委員会文化財課とし、調査対象地の当該教育委員会からの職員派遣をうけた。

これまでの本調査は唐津市堂の前遺跡・井ゲタ遺跡・末広遺跡・梅白遺跡・中原遺跡、浜玉町赤野遺跡・岩根遺跡・袈裟丸城跡・大江前遺跡・目貫古墳群がある。年度別調査経過一覧を表１に示す。

梅白遺跡は本事業による確認調査により新たに見つかった遺跡である。確認調査は平成９年１月～３月にかけて実施した。確認調査担当は立石泰久、家田淳一、中尾賢治（調査補助員）である。確認調査対象地は佐賀国道工事事務所路線測点番号NO480～NO540までで梅白遺跡から中原遺跡までを対象とした。３m×40mを基本とするトレンチを57本設定し、重機による掘削をおこなった。梅白遺跡に該当するトレンチはNO１～NO21である。確認調査の結果検出した遺構はNO11で小穴をNO７・12トレンチで溝跡がある。また各トレンチで弥生土器片、土師器片などが出土した。そこで本地区はこれまで未周知地区であったため小字名をとって梅白遺跡とした。

確認調査所見としては小規模な遺跡と予想し、NO４トレンチから～NO11トレンチまでを本調査対象地として協議をおこなった。その結果、本調査を平成９年度から実施することになった。

表１ 調査経過一覧表

年度	本調査・唐津市	本調査・浜玉町	確認調査
平成６年度			唐津市半田地区
平成７年度	堂の前遺跡		唐津市半田地区・浜玉町東山田地区
平成８年度	井ゲタ遺跡･末広遺跡		唐津市原地区・中原地区
平成９年度	梅白遺跡	赤野遺跡	浜玉町東山田地区・大江前地区・横田上地区
平成10年度	梅白遺跡	岩根遺跡･袈裟丸城跡	浜玉町横田上地区
平成11年度	梅白遺跡・中原遺跡	大江前遺跡	唐津市中原地区
平成12年度	中原遺跡	大江前遺跡･目貫遺跡	
平成13年度	中原遺跡		唐津市中原地区・北波多村上平野地区
平成14年度	中原遺跡		

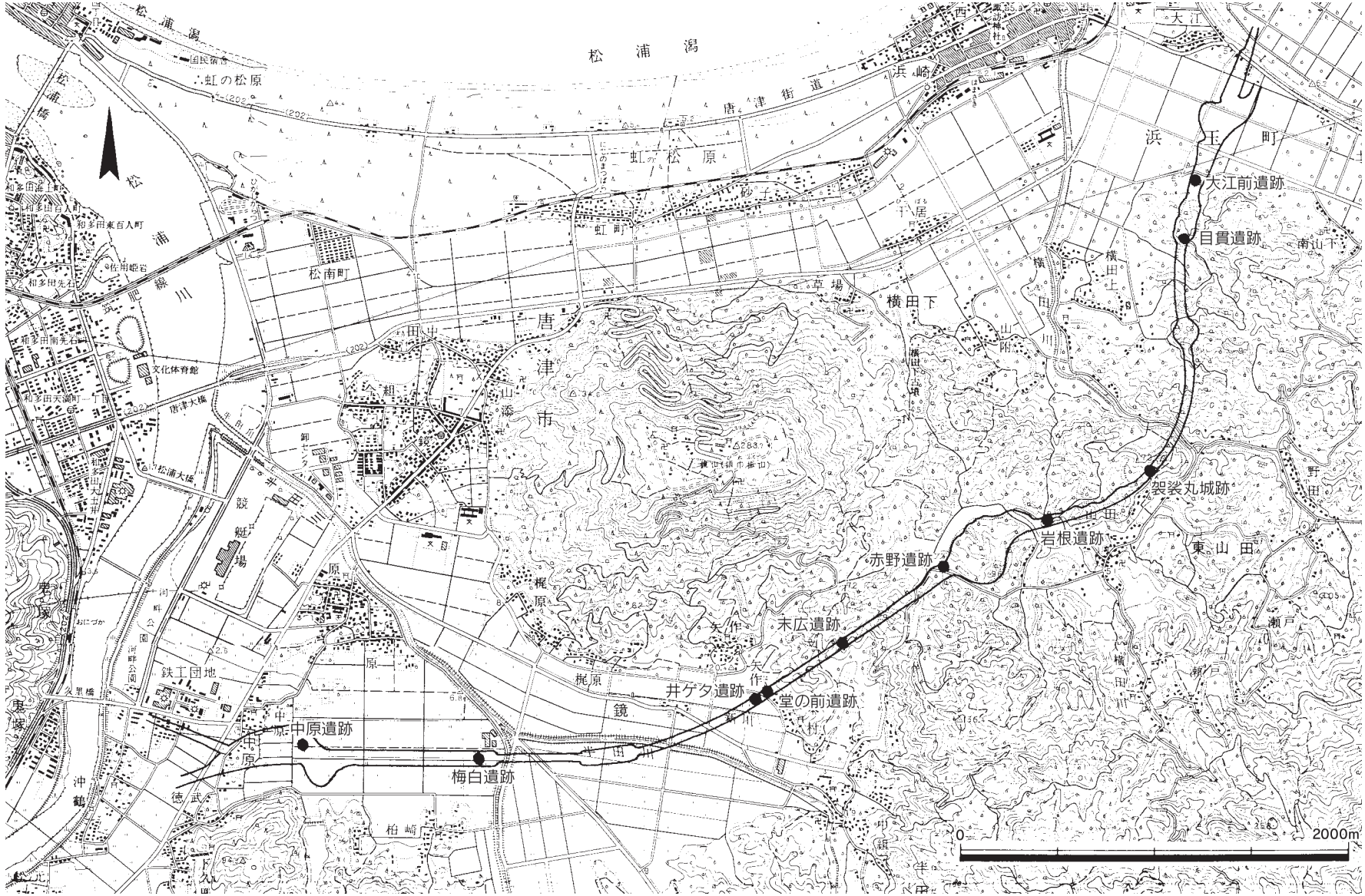


図１　路線図(1/30000)

２，調査組織

調査主体　佐賀県教育委員会

調査協力　唐津市教育委員会

発掘調査（平成９年４月～11年６月）

総括	佐賀県教育委員会	教育長	川久保善明（平成９～11年度）
	佐賀県教育委員会	文化財課長	佛坂　勝男（平成９～11年度）
	佐賀県教育委員会	文化財課長補佐	深町　昌司（平成９年度）
	佐賀県教育委員会	文化財課長補佐	田平　徳栄（平成９年度）
	佐賀県教育委員会	文化財課副課長	園田　義孝（平成10・11年度）
	佐賀県教育委員会	文化財課副課長	大橋　康二（平成10・11年度）
調査総括	佐賀県教育委員会	文化財課企画調整主査	立石　泰久（平成９～11年度）
調査員	佐賀県教育委員会	文化財課指導主事	小松　　譲（平成９～11年度）
	佐賀県教育委員会	文化財課指導主事	井上　倫生（平成11年度）
	佐賀県教育委員会	文化財課嘱託	美浦　雄二（平成９年度）
	佐賀県教育委員会	文化財課嘱託	坂井　清春（平成10年度）
	佐賀県教育委員会	文化財課嘱託	辻村美代子（平成11年度）
	唐津市教育委員会	事務吏員	草場　誠司（平成９年度）
	唐津市教育委員会	事務吏員	美浦　雄二（平成10～11年度）
庶務会計	佐賀県教育委員会	文化課庶務係長	岩瀬　茂生（平成９年度）
	佐賀県教育委員会	文化課庶務係長	津野　建夫（平成10～11年度）
	佐賀県教育委員会	文化課主査	久保　信行（平成９～10年度）
	佐賀県教育委員会	文化課主査	相川ミエ子（平成10～11年度）
	佐賀県教育委員会	文化課主事	吉村　俊也（平成９年度）
	佐賀県教育委員会	文化課主事	富窪　道代（平成９年度）
	佐賀県教育委員会	文化課主事	毎熊　　近（平成11年度）
	佐賀県教育委員会	文化課主事	陶山　　優（平成11年度）

調査補助員　中尾賢治、山口伸英、若杉あずさ、青木秀昭

発掘作業員　青木淳一、安藤剛、石倉美智子、磯口裕子、市丸和子、市丸クミエ、市丸久美子、市丸節子、市丸宮子、井手房男、伊藤正子、井上みつこ、井上義秋、井山美紀代、岩田悦子、岩村正、牛岡さちえ、内田史子、内山為次郎、内山智子、内山妃冨美、太田一枝、大谷文男、緒方義春、奥千枝子、小栗三行、小野悦子、鍵山裕恵、片峰秋子、片峰節子、片峰弘美、加茂豊子、加茂春江、加茂光春、鴨川チヨ子、川崎恭二、菊池馨、栗原カヨコ、桑代ゆかり、兼尾いつ子、兼武利夫、佐伯ヨシ子、重カズヨ、末石果壽美、末吉早、末吉泰子、杉山澄江、田中フサ子、田中美月、堤怜子、鶴田九一、手島茂一、戸野川一二、長嶋サツエ、中村敦子、中村幸子、中村静江、鍋島フミ子、楢崎国枝、野崎徳蔵、長谷川三男、八田君子、馬場重治、藤田五美、藤田ハルコ、藤竹千枝子、古川善彦、古館満代、松下一枝、松本いつ子、真名子カチコ、豆田紀久子、宮崎等、向井つや子、森智恵子、山口正章、山崎ミヨ子、山下登記子、山下真知子、吉田勝洋、吉村百合子、米

倉アヤコ、米倉ツルエ、脇山妙子、脇山忠義、脇山ツタコ、脇山輝代、脇山典子、脇山マスエ、脇山美佐子、脇山光子、渡辺津留子、渡辺フサエ　　（五十音順）

整理・報告書作成（平成13・14年度）

総括	佐賀県教育委員会　教育長	松尾　正廣（平成13・14年度）
	佐賀県教育委員会　文化課長	佛坂　勝男（平成13・14年度）
	佐賀県教育委員会　文化課副課長	天本　洋一（平成13・14年度）
調査総括	佐賀県教育委員会 文化課企画調整主査	立石　泰久（平成13・14年度）
調査員	佐賀県教育委員会　文化課指導主事	小松　　譲（平成13・14年度）
	佐賀県教育委員会　文化課指導主事	井上　倫生（平成 13 年度）
	佐賀県教育委員会　文化財保護主事	川副麻理子（平成14年度）
	佐賀県教育委員会　文化課嘱託	松浦　　智（平成13・14年度）
	佐賀県教育委員会　文化課嘱託	辻村美代子（平成13年度）
	佐賀県教育委員会　文化課嘱託	松瀬　京子（平成14年度）
	唐津市教育委員会 事務吏員	内田　孔明（平成13・14年度）
庶務会計	佐賀県教育委員会 専門員	天本　茂春（平成13・14年度）
	佐賀県教育委員会 主査	相川ミエ子（平成13年度）
	佐賀県教育委員会 主査	島田　一幸（平成13・14年度）
	佐賀県教育委員会 主事	陶山　　優（平成13・14年度）
	佐賀県教育委員会 主事	坂口　豪史（平成14年度）

調査補助員　美浦あずさ

整理作業員　市丸宮子、渡辺直美、松本いつ子、桑代ゆかり、菊池孝子、池内理恵、馬場薫、浦田照千代、辻美紀子、中島美佳、青木淳一、徳田まり子、脇山邦子

３．調査の方法と経過

（１）調査の方法

遺跡名は梅白遺跡として佐賀県遺跡地図に登録し、略号はUMEとした。調査区の呼称は算用数字を用い１区であれば「UME－１」と表示した。

調査区画は国土座標にあわせＸ＝46120、Ｙ＝－91840の交点を原点とする10m×10mの方眼区画を設定した。南北方向をアルファベットとし北から南にＡ～Ｇ、東西方向を算用数字にし東から西に１～26とし、グリッド（区画）名をアルファベット－算用数字で表記した。各グリッドの北東杭をグリッド杭とし、杭にグリッド名を表示した。

遺構番号は３桁の一連番号とし、百の位は調査区を示すことにした。この遺構番号の頭に遺構の種別を示すアルファベット２文字の分類記号を付けて表示した。柱穴は調査区ごとの４桁の一連番号とし千の位は調査区を示すことにした。

遺構の写真は白黒、カラーリバーサルとも４×５、ブローニー、35mmを使用し、カラーネガは35mmのみに使用した。また、必要に応じ気球による空中写真撮影を委託した。

調査にあたっては基本土層を設定し、各土層の堆積時期を決定した。その上で表土は重機により掘削し、包含層は人力掘削を原則とした。ただし、出土遺物が少ない包含層は重機掘削を行った。

（２）調査の経過

梅白遺跡の調査は平成９年５月12日の重機による表土掘削から開始し、平成11年６月30日に終了した。調査当初に予想していなかった植物遺体層のさらに下からの水田の発見により調査期間は約２年に及んだ。その間、佐賀国道工事事務所と調査期間の延長や工事計画の調整を行った。

確認調査により調査対象地の東端は低地になり植物遺体層が分布することが判明していた。この植物遺体層は従来コモ層とよばれるもので、弥生・古墳時代の後背湿地に繁茂したものと考えられていた。従って、一応、調査対象地に入れているものの弥生・古墳時代の遺構の存在は予想していなかった。

そこで最初の表土剥ぎの地区は調査対象地東端から約80ｍ西方の北側寄りに設定した。この重機による表土掘削は調査対象地区全面を一度に行うのではなく、包含層や遺構検出面の保護と廃土置き場の確保のため順次拡張していく方法をとった。また、調査対象地は道路や水路などで区画されていないが、調査班編制の関係上、６ラインを境に東側を１区、西側を２区とした。

この調査区の拡張とともに梅白遺跡の全容が次第に判ってきた。大まかな調査の経過でいえば平成９年度から10年度前半が集落部分の調査、10年度後半から11年度にかけて水田部の調査を実施した。

平成９年５月の最初の調査地区では近世の溝２条と水田に残されたと思われる足跡を検出した。また、幅約10ｍの旧河道の埋土上部はコモ層であり、これを挟んで土師器が出土したためコモ層の堆積時期が古墳時代であろうとの推測ができた。さらに旧河道内のトレンチから刻目突帯文土器が出土し旧河道の下層には当該時期の包含層があることが予測できた。

６月中旬から２区の調査に着手した。これは東西９～14ライン、南北Ｂ～Ｆラインの約2000㎡にあたる。ここでは幅約50cmの自然河道５条を検出した。埋土中の出土遺物からは時期の特定は困難であり、土層の検討を必要とした。これらの自然河道は旧河道と切り合いながらも同じ方向に流れていることなどから遺跡内の微地形発達の有効な手がかりになると考えていた。

８月中旬には前述２カ所の調査区間の調査に入り、これによって旧河道や自然河道のほぼ全容が判ってきた。また、弥生時代前期の特異な石囲い炉をもつSH222や掘立柱建物SB107、竪穴住居SH104が確認でき、ようやく集落の一端が見え始めた段階であった。

10月に入ると２区の６～14ラインの南側を約1500㎡拡張した。その結果、完形の磨製石剣が出土したSH239や古墳時代の大型住居であるSH231を検出し、次第に弥生・古墳時代の集落が明らかになってきた。また、併行して調査を進めていた旧河道の上層から人形土製品が出土した。旧河道内Ｅ-11グリッドからは刻目突帯文の甕や完形の浅鉢、磨製石斧などの多量の遺物が出土した。

また、調査面積が広大になってきたことなどから作業員募集のチラシを地元に配布し作業員を増員した。

12月初旬から１区の３～６ラインの南側、約1500㎡を拡張し、ほぼ集落の全域が検出できた。古墳時代の竪穴住居は２、３軒の切り合いが認められ、周辺には掘立柱建物もあることがわかってきた。

基本土層はこれまで、１層が近・現代の表土層、２層は近世、３、４層は中世、５層を植物遺体層であるコモ層、６層が古墳時代、７層が弥生時代の包含層と考えていた。ところが、12月中旬、４層から17世紀前半の擂鉢片などが出土し、これまで中世と考えていた４層が近世であることが判った。またコモ層を５層としていたが、コモ層上部の黒色粘質土を５層として捉え直した。平成10年５月には５層から中世に属すると思われる底部糸切りの土師器皿が出土し、５層の時期が特定できた。ここに至って集落部の基本土層の各時期が確立した。

平成10年１月下旬から２区の西側約1500㎡を拡張した。14～17ラインにあたり、遺構密度は希薄であった。地形とは無関係に東西方向にはしる溝跡２条を検出した。また、調査面積が広がったために２班

編制で調査を進めていくことにし、調査区西側の溝跡と集落部の調査を併行して行った。集落部の調査ではSH121や集落と落ち込みを区画する溝であるSD115などから多量の土師器が出土した。この集落部の調査は旧河道の調査と併行して７月まで続いた。この間、５月にはSK103から線刻土器が出土し以前出土していた破片と接合した。また、旧河道沿いには土製模造鏡などが出土した土坑・SK105などもあり古墳時代の祭祀行為も明らかになってきた。

集落の形成時期について須恵器がSK106をのぞいてほとんど出土しないことなどから調査当初は古墳時代前期との認識があったが、土師器の検討や包含層やコモ層下よりわずかな小片ではあるものの須恵器の破片が出土したことなどから、その時期は須恵器出現期前後であることが次第に明らかになってきた。

３月には立命館大学・高橋学先生から地理学的な観点からの調査指導をうけた。地形に沿わない東西の溝は水田に伴う水路の可能性を指摘された。また、３月21日には現地説明会を実施した。

５月には調査区の西側をさらに拡張した。その結果、地形に沿わない東西溝とつながる南北溝や、調査区を斜め方向に横切る溝を検出した。斜行するSD281、282、283は旧河道や自然河道と同じ方向に流れ、数回の掘り直しがみられた。SD281に直交するSD289などもあり、水田関連の溝の可能性を考えた。また、南北溝であるSD280、286、290は出土遺物からの時期決定が困難であったが、最下層からの出土遺物によって弥生時代中期であることが判った。また、東西溝とつながり方形にめぐることなどから、水田の水路の可能性を考えた。

調査と工事との調整では佐賀国道工事事務所から４月末に調査区北側に仮設道路を建設したいとの協議があった。当該地区は旧河道内の縄文晩期の包含層があり、数回の協議の後、仮設道路予定地区の調査を７月末で終了することになった。

７月中旬、調査区の壁面を精査中、コモ層が大きく盛り上がる畦畔を発見した。その横には水路と思われる埋土砂層の溝も確認できた。

８月下旬、重機により畦畔直上まで掘削することにより大畦畔二条・SF153、154を検出した。大畦畔の間には水路であるSD149があることもわかった。引き続きコモ層までを掘削することによって小畦畔と水田区画が明らかになってきた。水田調査地区の区割りは原点よりさらに東側であり、東西方向区画名は原点から０、－１グリッドとした。

10月には古墳水田１のほぼ全面を検出した。また、取材にきた新聞局、テレビ局に応じて古墳水田の報道がなされた。この古墳水田１は12月初旬にはほぼ全面の掘り下げ作業や図面、写真が終了し空中写真を撮影した。その後、畦畔盛土はずしを行い割付的な芯材や二又鍬、小型壺が畦畔盛土内に埋納されていることが判った。また、12月20日（土）には現地説明会を実施した。

古墳水田が形成される以前の地形の確認を目的としたトレンチを設定し人力で掘り下げた。12月15日、このトレンチ内にて古墳水田の下層に杭列がありさらに畦畔があることが確認できた。これを受けて調査方法に関しての協議や工事との調整を行った。

平成11年1月中旬には重機により古墳水田１を掘り下げてさらに下層の水田検出を行った。掘り下げ地点は東西、－５～－７ラインにあたり蛇行する溝、SD162、163とそれに沿った多数の杭を打ち込んだ大畦SF175、176を検出した。溝中の出土土器の時期は弥生中期であり、又鍬や木製容器なども早い段階で出土した。

２月５日、取材にきた新聞局などに応じて弥生水田の報道がなされた。引き続き、重機による下層水田の掘り下げを行う段階で蛇行する溝SD164を検出した。ここからは多量の土師器が出土し、古墳水田

１と２では溝と畦畔が重なりあうことが判った。次第に古墳水田、弥生水田とも複数の面をもつとの認識ができてきた。

３月には群馬県埋蔵文化財調査事業団の能登建氏、仙台市教育委員会の佐藤甲二氏らの調査指導をうけた。３月下旬、半田川東岸の大きくオープン掘削された工事現場の壁面にてコモ層と畦畔を確認した。水田面は複数面を確認し、相当広い範囲で水田経営がなされていたことが判ってきた。この遺構の取り扱いについては、土層の観察、記録にとどめた。

４月にはいると水田部調査区南壁の土層観察と実測を開始した。面的な水田遺構と壁面の土層の検討を併行して行うことによって古墳水田および弥生水田の層序が明らかになってきた。

水田部の基本土層に関しては２月段階でSD164が上、下層に分層できることなどから古墳水田は３面と考えていた。ただし弥生水田が２面あるとの認識ができたのは３月になってからであり、個々の溝跡などの検討をとおして５月には古墳水田が３面、弥生水田が２面あることが明らかになってきた。

６月、弥生水田２をさらに掘り下げたところ、－1～－3ラインで突帯文土器を出土するSD187を検出した。埋土中から大形石庖丁、平鍬が出土し水田遺構は確認できないものの調査区周辺にも突帯文期の水田がある可能性がたかまってきた。また、SD187を切ってドングリ土坑も検出した。ここに至って調査の最終段階になり、（株）古環境研究所に委託してプラントオパールや花粉分析用の土壌試料採取や調査区南壁の土層剥ぎ取りを実施した。そして６月30日に調査を終了した。

調査と工事の調整では水田確認前の段階では調査終了を平成10年の秋頃としていたが、古墳水田の発見により、調査期間を平成11年３月までと延長した。その間、仮設道路の設置と調査を終えた調査区内集落跡は真砂土で埋める工事が進行した。平成10年12月のさらなる下層の水田の発見は文化財担当部局内でも水田の調査方法について議論が交わされた。工事との関わりで調査をトレンチ調査で留めればとの意見も出されたが、佐賀国道工事事務所との協議で調査期間を平成11年６月末まで延長できることになり、その中でできうる調査を実施した。約２年にわたる調査を終えたがその間、標高２ｍ～４ｍの低地であるがゆえに梅雨、台風による雨で幾度となく現場が水没し、ポンプで水を汲みあげることの繰り返しだった。沖積地の調査の困難さが身にしみた２年間であった。

調査日誌

平成９年

５月１２日　１区重機による表土剥ぎ開始
　　２３日　近世溝SD101、102検出
　　２７日　線刻土器出土
６月　６日　１区落ち込みから刻目突帯文土器出土
　　１２日　２区重機による表土剥ぎ開始
　　１３日　１区古墳時代竪穴住居検出
７月　７日　大雨のため現場水没
　　３０日　県教育委員視察
９月２２日　石囲い炉をもつSH222検出
１０月２２日　人形土製品出土
　　２９日　福岡市より見学者多数来訪
１１月　４日　群馬県埋文センター矢口氏ら来訪
　　作業員増員のための面接開始
　　１８日　SH239から磨製石剣出土
１２月１６日　４層から17世紀代の擂鉢片出土

平成１０年

１月　７日　１区にて古墳時代住居数棟検出
　　２７日　２区の西側を重機にて表土剥ぎ
　　２８日　２班体制にする
２月　５日　SH121から多量の土師器出土
　　６日　SD115検出
　　１９日　気球写真撮影
３月　４日　駒沢大学、酒井先生調査指導

９日　立命館大学、高橋先生調査指導
１６日　青山学院大学、清水先生調査指導
１７日　記者発表
２１日　現地説明会
４月２８日　仮設電柱工事
５月　１日　５層から底部糸切り土師器皿出土
１１日　大雨のため現場完全冠水
２０日　SK103出土線刻土器片接合
２７日　南北直線溝SD280､286､290を検出
２８日　九州大学下山先生、北九州大学野井先生来訪
６月　１日　中、近世溝SD281､282､283を検出
６月１７日　SE251埋土下層から古墳前期古段階の土師器出土
７月　７日　石囲い炉をもつSH119検出
９日　SD115遺物取り上げ
１６日　コモ層下から須恵器破片出土調査区南壁にて大畦畔確認
８月２０日　１区の東側を重機にて表土剥ぎ開始
大畦畔２条を検出
２６日　水田小区画を検出
９月１４日　１区落ち込みから石剣出土
１０月２３日　水田確認の報道
１２月　１日　田植え再現写真撮影
８日　気球写真撮影
９日　古墳水田１の畦畔盛土をはずし始める
１８日　九州大学下山先生、北九州大学野井先生来訪
１５日　下層水田を確認
２０日　現地説明会
平成１１年
１月　６日　愛媛大学下條先生調査指導
７日　古墳水田１・SF154から二又鍬出土
１４日　重機による下層水田検出開始
鋤・弥生土器片出土
１８日　弥生水田大畦畔検出
２月　５日　弥生水田報道
９日　古墳水田２・SD164掘り下げ開始
１７日　SD164は上、下層に分かれ、古墳水田は３面あることが判明する。
２２日　古墳水田１，２で溝と畦畔が重なりあうことが判明する
２５日　立命館大学高橋先生調査指導
３月　２日　弥生水田は２面あることが判明
９日　群馬県能登氏調査指導
１１日　仙台市佐藤氏調査指導
２４日　半田川東側の工事現場にて畦畔らしき土層を確認
２６日　秋田県小松氏調査指導
５月２１日　気球写真撮影
６月　３日　ドングリ土坑検出
６月１５日　土層剥ぎ取り実施
３０日　調査終了

調査指導風景（高橋　学 教授）

Ⅱ，遺跡の位置と環境

１，地理的環境

梅白遺跡は佐賀県唐津市大字原に所在する。今回調査を行った梅白遺跡は原3-3、3-4、3-5、3-6、3-7、3-8、4-1、4-2、4-3、4-4、4-5、4-6、5-1、5-2番地にあたる。

唐津市は現在の市役所で北緯33度27分、東経129度58分にあたり、平成12年度の統計によれば面積127.49km²で人口78,945人、世帯数は26,740戸である。唐津市は九州の北端で佐賀県の北西部にあたり、東は東松浦郡浜玉町、南は同郡相知町・北波多村、西は同郡鎮西町・玄海町・肥前町に接する。北は唐津湾および玄界灘に接し朝鮮半島へと連なる。このように半島に最も近いという地理的環境のため古代より我が国のなかでもいち早く半島や大陸の文化を受容した地域である。

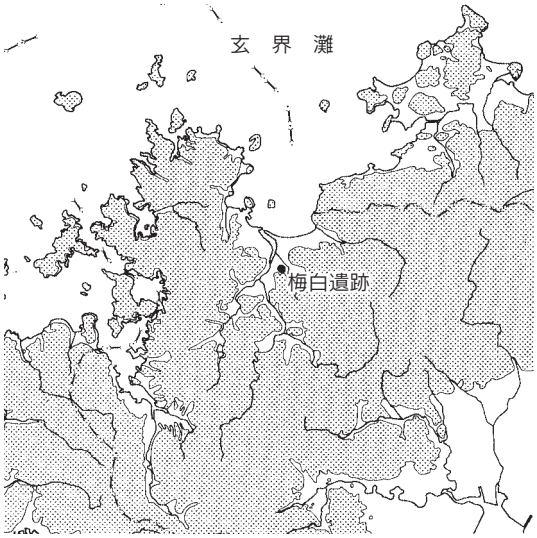


図２　遺跡位置図

唐津市およびその周辺の地形は大きく①東松浦熔岩台地域②松浦杵島丘陵地域③脊振山地西部域④唐津平野の４つの地形区からなる。①東松浦熔岩台地は東松浦半島の大半を占め、第三系や花崗岩類の基盤のうえに第三紀末期～第四紀初頭にかけて噴出した松浦玄武岩が覆う熔岩台地である。通称上場台地と呼ばれ標高150m～200mである。②松浦杵島丘陵地は南北に流下する佐志川およびその延長線を境に東側の丘陵性山地であり、松浦川左岸まで続く。その地質は第三系や花崗岩類からなり標高200m内外である。③脊振山地西部域は松浦川および唐津平野の東南部にあたる。地質は風化の進んだ花崗岩類からなり唐津平野の基盤の大部分もこの花崗岩類にあたり、不整合面を介して沖積層が堆積する。④唐津平野は東松浦熔岩台地や松浦杵島丘陵地や脊振山地に囲まれ、北は唐津湾および玄界灘に接する低地を総称して呼ぶ。この唐津平野にはおもに弥生時代以降の遺跡が立地する。唐津平野を形成した河川として最大規模の松浦川やその支流にあたる徳須恵川、半田川、宇木川がある。玉島川は唐津平野の東端を流れ松浦川に次ぐ規模の河川である。この他、唐津市街地を流れる町田川や唐津平野の北西端を流れる佐志川がある。これらの河川をもとに遺跡の立地などから唐津平野はさらに地域区分ができる。

唐津平野の地形発達は海岸線の変化と密接に関わり、井関（1982）や下山（1994）の研究がある。最終氷期最盛時における最低位海面について井関(1975)は日本各地の沖積層基底礫層の深さからそれが堆積した当時の河川の浸食基準面、すなはち現海面下140m付近にあったと考えている。また、１万年前頃も低温期であり海面は約50m低位にあったことが判っている。その後、後氷期の温暖化に伴う海進現象は約6000Ｂ.Ｐに高頂期をむかえ縄文海進と呼称されるがこれは現在の唐津湾に対して奥唐津湾とも呼ばれる。久里小学校建設時の試錐資料により高頂期のころ同小学校あたりは－6m内外の水深をもつ海湾の状態にあったことが伺われる。

図３に縄文海進時の海岸線と古砂丘列、新砂丘地形分類を示す。このうち古砂丘列、新砂丘列は井関（1982）をもとに遺跡立地を加味し筆者が修正を加えたものである。太線で示す縄文海進時海岸線は下山(1994)による。下山氏は海成層に含まれる海棲生物化石のうち貝殻に注目した。そしてボーリング資料により北部九州の縄文海進時の海岸線を復元した。古砂丘の定義が井関氏と下山氏ではやや異なるようで

あるが、下山氏によれば唐津地域では古砂丘は海進途上の段階で破壊され、海域がいち早く奥にまでひろがった。現在の虹の松原の新砂丘は弥生時代になって形成されたという。いずれにしても古砂丘の発達は縄文海進の高頂期を経て海面がやや下降傾向をたどっていた縄文中期～後期頃と思われ、松浦川や玉島川の沖積作用も相乗して形成されたのではなかろうか。

唐津平野の旧地形のうちとくに注目されるもののひとつには玉島川の流路がある。現在の玉島川河口は浜玉町街の東端にあるがこれは後世の河川改修によるものである。旧玉島川は虹の松原砂丘の南側を流れていたようである。虹の松原砂丘の発達は玉島川河口を天然の良港に仕上げたものと思われ、谷口古墳の立地はまさしく天然の良港となった玉島川河口である。また、虹の松原砂丘の基部である浜玉町街から砂子を古砂丘列と考えたのは浜玉町浜崎の地下約４ｍの砂層から弥生中期の土器片が出土したという聞き取りによるものであることを付記しておく。

参考文献

川添　一　　1962「自然環境と集落景観」唐津市史

井関弘太郎　1975「沖積層基底礫層について」『地学雑誌』84-5

井関弘太郎　1982「末盧の地形と地質」『末盧国』

下山正一　　1994「北部九州における縄文海進以降の海岸線と地盤変動傾向」『第四紀研究』33-5

図３　旧海岸線・古砂丘列・新砂丘列地形分類図

２，歴史的環境

唐津地方は前項で述べたとおりの地理的条件のため原始・古代より半島・大陸文化受容の地であった。遺跡の多くは唐津平野に立地するため遺跡の変遷は唐津平野の地形発達とも関連する。ここでは旧石器時代から古墳時代までを中心として記す。

旧石器時代・縄文時代の遺跡の多くは東松浦熔岩台地、通称上場台地上に立地する。旧石器時代の著名な遺跡としてナイフ形石器文化の肥前町磯道遺跡[(1)]や生石遺跡[(2)]、細石器文化の唐津市原遺跡[(3)]などがある。縄文時代では押型文土器・石鏃を出土した牟田辻遺跡や住居跡、組織痕文土器を出土した女山遺跡[(4)]、晩期の貯蔵穴状土坑を検出した唐ノ川高峰遺跡[(5)]や梨川内村前遺跡[(6)]があり、晩期前半から上場台地では遺跡数が増大することが指摘されている。平野部においても菜畑遺跡、西唐津海底遺跡では前期の土器が出土しており、徳蔵谷遺跡[(7)]では中期の土器が出土している。

晩期後半になると旧砂丘列の背後の低湿地が初期稲作の適地となり菜畑遺跡[(8)]や宇木汲田遺跡[(9)]が形成されが、菜畑遺跡では我が国最古の水田跡を検出している。晩期後半以後、唐津平野において多くの著名な遺跡が出現し、河川流域ごとの遺跡分布を示す。

唐津平野の中で調査事例も多く研究史的にも重要な遺跡が多いのは宇木川・半田川流域である。宇木

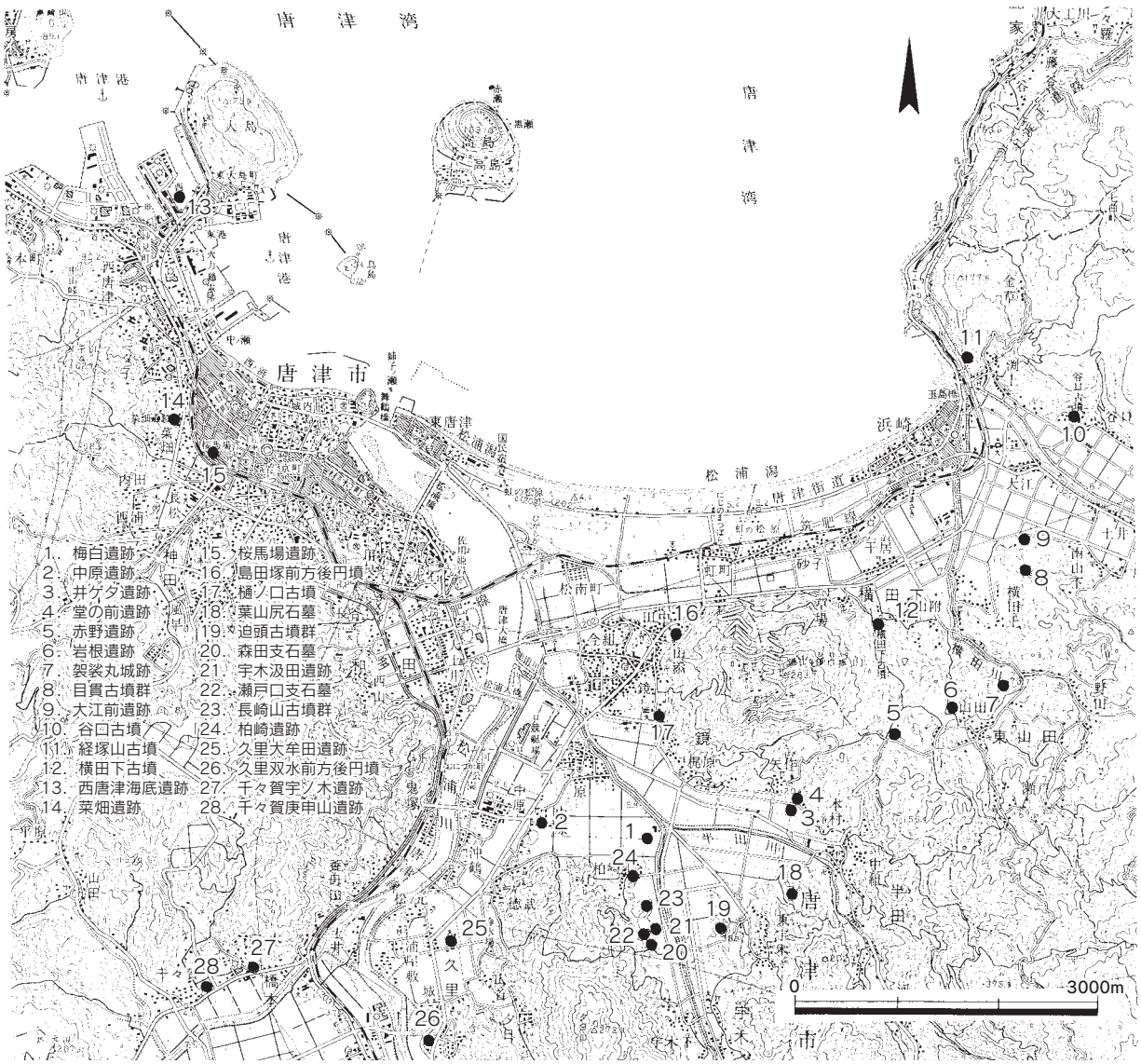


図４　周辺遺跡分布図(1/70000)

汲田貝塚では1965年の日仏合同調査により縄文晩期の夜臼式期より炭化米や土器底部の籾圧痕が発見され稲作の存在を示した。貝塚より200～300m南の宇木汲田遺跡では昭和初期には銅剣、銅矛が発見されており、1957年の東亜考古学会、1965、1966年の日仏合同調査により甕棺墓群から多紐細文鏡、細形銅剣、銅矛、銅戈、銅釧、玉類など多数の副葬品が出土した。

柏崎貝塚も昭和初期の耕地整理によって発見されその後、数回の学術調査が実施され弥生前期後半の短期間に形成されたものであることが判った。柏崎遺跡[10]では明治末に触角式銅剣、銅矛が発見され、柏崎田島遺跡の甕棺墓群では日光鏡が柏崎大深田遺跡からは広形銅矛の鋳型が出土している。

また、唐津平野は西北九州に特徴的に分布する支石墓がみられる。葉山尻支石墓[11]では1952、1953年の調査で支石墓と甕棺墓を検出しており、この他瀬戸口支石墓[12]、森田支石墓[13]や玉島川流域では五反田支石墓[14]などが調査された。

本報告の梅白遺跡も宇木川・半田川流域にあたる。同流域における古墳時代の遺跡としては垂飾付耳飾、三累環頭を出土した半田宮の上古墳や竪穴系横口式石室のほか土壙墓、箱式石棺墓などが検出された迫頭古墳群、同じく竪穴系横口式石室をもつ長崎山古墳群、石障系石室をもつ樋の口古墳など古墳時代中期の墳墓が目立つ。後期では銅椀や金銅製冠などが出土した島田塚前方後円墳がある。

松浦川流域でも弥生墳墓からの青銅器、鉄器の出土がみられる。久里大牟田遺跡[15]では鉛製の矛や銅矛、銅戈などが甕棺、土壙墓から出土している。山本中尾遺跡[16]からは細形銅剣と勾玉、管玉が千々賀庚申山遺跡[17]からは細形双耳銅矛や銅戈が千々賀宇ノ木遺跡からはイモ貝縦切銅釧が、中原遺跡[18]からは中期後半の甕棺墓から鉄矛、鉄戈、玉類が出土し、地域首長の成長をみることができる。同流域における古墳時代の首長墓として全長108mの久里双水前方後円墳や双水柴山２号前方後円墳[19]のほか、近年松浦川の支流である徳須恵川中流域にて前方後円墳２基が確認されている。この他弥生時代後期の首長墓として著名な遺跡として町田川流域の桜馬場遺跡がある。甕棺から方格規矩鏡、巴形銅器、有鉤銅釧などが出土しており、墳墓群の詳細は不明なものの副葬品などから小首長の存在を推定できる。このように宇木川・半田川流域や松浦川流域では稲作受容後の弥生～古墳時代の地域首長の出現や地域社会の発達が副葬品を埋葬した墳墓などからわかる。それに対して玉島川流域は古墳時代以降に卓越した首長墓が突如出現する地域である。墳長77mの谷口古墳[20]の内部主体は初期の横口式石室で鏡、石釧、玉類などの副葬品が出土しており、松浦地方でも屈指の規模である。これに前後する古墳として経塚山古墳[21]や横田下古墳があるが、玉島川流域では弥生時代の卓越した副葬品を埋葬した墳墓が発見されていないのは宇木川・半田川流域や松浦川流域と対照的である。

参考文献

１，堀川義英1981『田尾遺跡群磯道遺跡』肥前町教育委員会
２，堀川義英1978『生石・森の下遺跡』佐賀県教育委員会
３，松岡史・富桝憲次1960「佐賀県東松浦郡鎮西町字原出土の細石器」九州考古学10
　杉原荘介・戸沢充則1971「佐賀県原遺跡における細石器文化の様相」考古学集刊4 -4
４，日本考古学協会西北九州総合調査特別委員会編1960「島原半島（原山、山ノ寺、礫石原）および唐津市（女山）の考古学的調査」『九州考古学』10
５，田島龍太1996『唐ノ川高峰遺跡』（３）唐津市教育委員会
６，内田孔明1996『梨川内村前遺跡』（２）唐津市教育委員会
７，田島龍太1995『徳蔵谷遺跡』（２）唐津市教育委員会
　田島龍太1996『徳蔵谷遺跡』（３）唐津市教育委員会
８，中島直幸・田島龍太1982『菜畑遺跡』唐津市教育委員会

９，岡崎敬ほか1982「宇木汲田遺跡」『末盧國』六興出版
10，中島直幸1982「柏崎遺跡群」『末盧國』六興出版
11，渡辺正気1982「葉山尻支石墓」『末盧國』六興出版
12，渡辺正気1982「瀬戸口支石墓」『末盧國』六興出版
13，伊藤奎二・高倉洋彰1982「森田支石墓群」『末盧國』六興出版
14，渡辺正気1982「五反田支石墓」『末盧國』六興出版
15，中島直幸1980『久里大牟田遺跡』唐津市教育委員会
16，岡崎敬1982「山本遺跡」『末盧國』六興出版
17，岡崎敬・木下尚子1982「千々賀遺跡」『末盧國』六興出版
18，橋口達也1982「中原遺跡」『末盧國』六興出版
19，中島直幸1987『双水柴山遺跡』唐津市教育委員会
20，家田淳一1991『史跡谷口古墳保存修理事業報告書』浜玉町教育委員会
21，田平徳栄1980『経塚山古墳』浜玉町教育委員会
22，小田富士雄1982「横田下古墳」『末盧國』六興出版

Ⅲ，調査の概要

１，遺跡の概要

本遺跡は弥生・古墳時代の集落跡と水田跡である。遺跡は砂丘縁辺部の微高地上に立地する。弥生時代の集落跡は前期前半～後半の竪穴住居跡を３軒検出した。このうち、SH119、SH222の２軒は石囲い炉をもつ特異な形式であった。この他、弥生時代前期の遺構として集落跡東側の低地部からドングリ土坑10基を検出した。土坑にはイチイガシやコナラ属アカガシ亜属の種実がびっしり詰まっていた。

古墳時代の集落跡として中期前半の竪穴住居跡は９軒検出した。このうち８軒は約25ｍ×30mほどの比較的狭い範囲に２、３軒が重なりあってつくられる。やや規模の大きいSH231のみ離れてつくられる。また、掘立柱建物跡は12棟検出したが、竪穴住居群の周囲につくられる。集落の東端で水田部に移行する落ち込みの肩部に沿ってSD115溝が流れる。埋土中から完形に近い土器が多量に出土した。土器は数型式がみられ、集落が継続している間この溝が祭祀の対象になっていたことを窺わせる。さらにこの溝から分岐して水溜場らしき土坑に注ぎ込む施設もつくられる。この他、前期の井戸跡１基も確認した。

調査区東側の低地部から弥生時代と古墳時代の水田跡を検出した。弥生時代の水田面は２面、古墳時代の水田面は３面であった。弥生水田は自然流路を水路として使うなど自然地形に沿ったものであったが古墳水田はおおまかな地形の制約を受けながらも規格性のあるものであった。とくに、上層水田はコモ層に覆われていたために畦畔の遺存状態が良好で水田区画が明瞭に検出できた。

図５　遺跡位置図(1/4000)

図6　遺構配置図上層1(1/500)

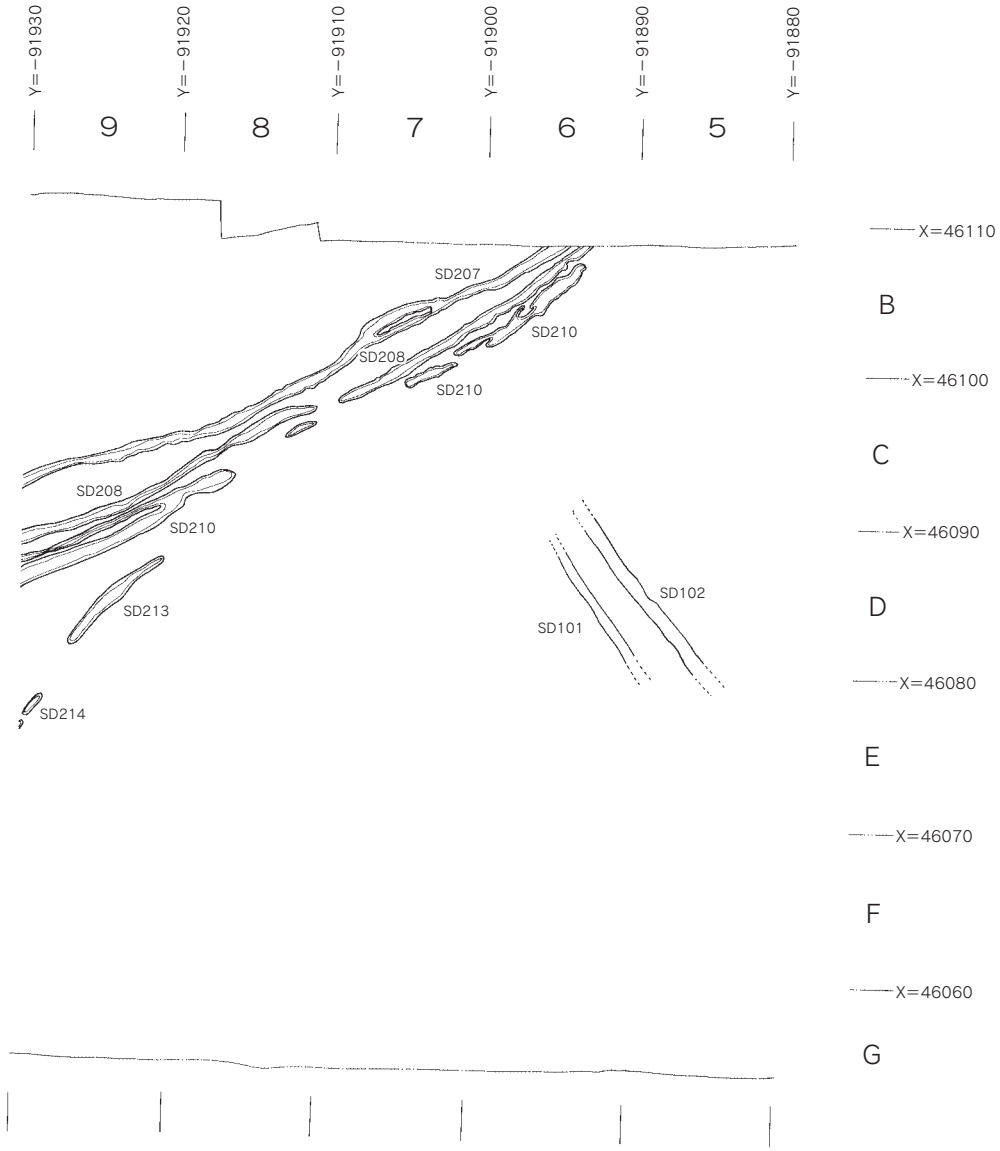


図７　遺構配置図上層２(1/500)

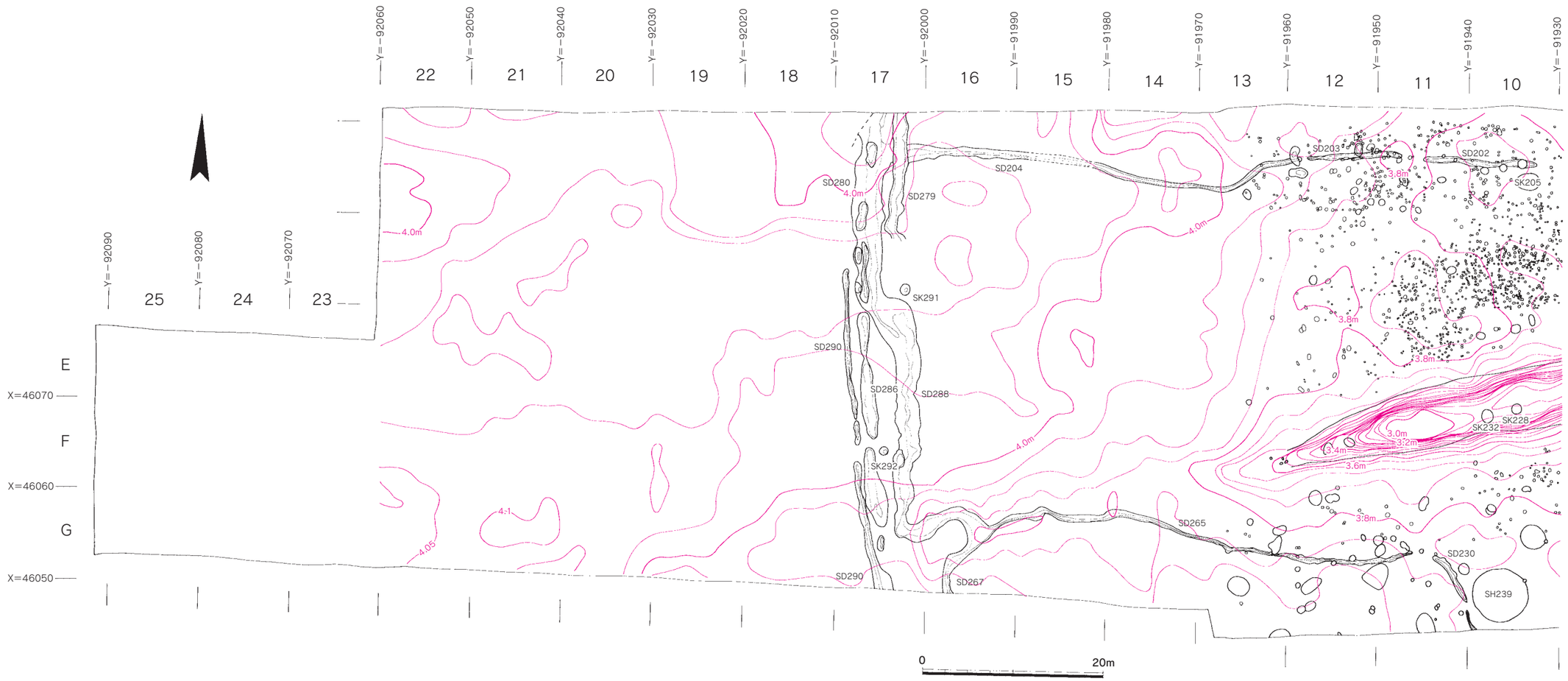


図８　遺構配置図下層１(1/500)

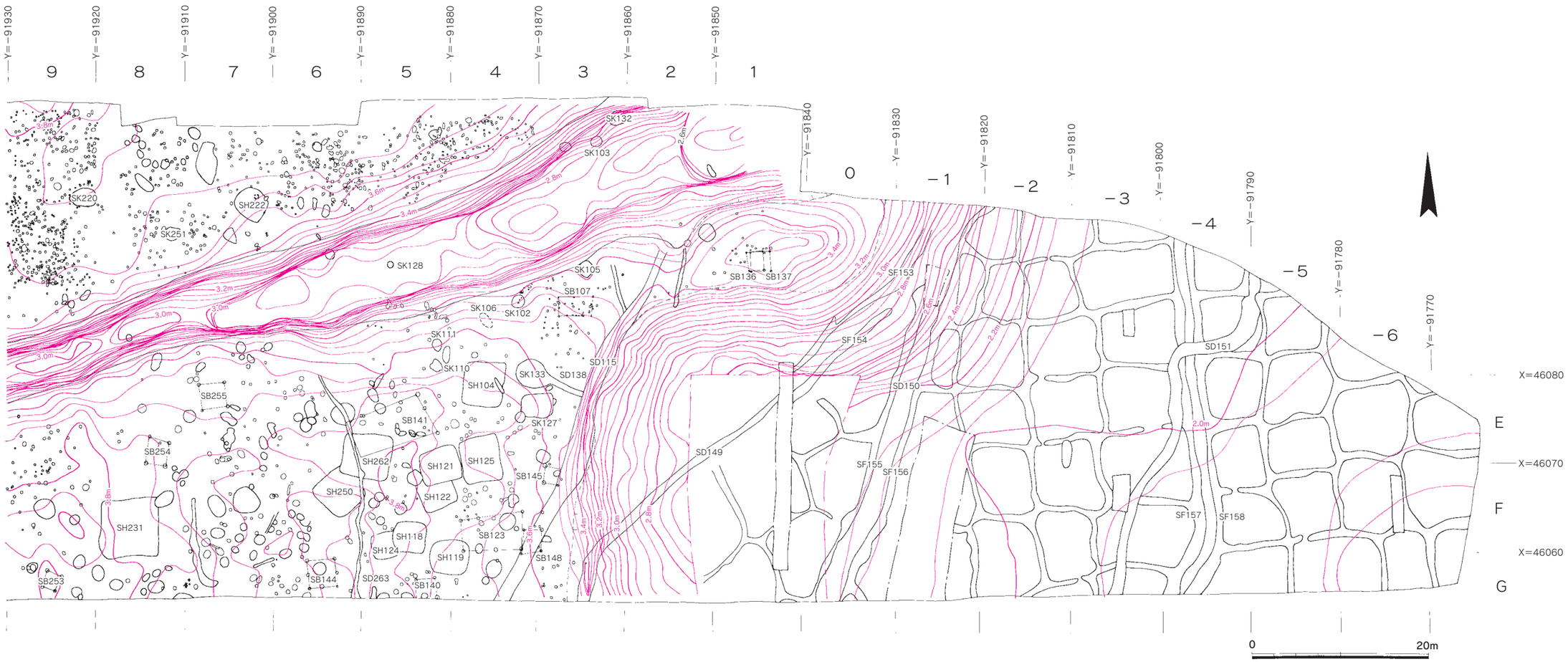


図９　遺構配置図下層２(1/500)

２，基本土層

本遺跡は砂丘上で標高約２m～４mの低湿地に位置する。従って調査対象地の現状は平坦な水田ではあるが古地形は比高差約２mもある起伏ある地形であった。調査区内のより低い部分には各時代の包含層が堆積しており、地形の発達と遺跡の変遷を知るうえには各層序の時期決定が必要であった。従って調査当初から基本層序を設定し調査を進めていった。分層発掘を基本とし包含層出土遺物により各層序の時期決定を行った。従って調査の進展に伴い基本層序に対する認識も変わっていった。最終的な基本層序と、それに至るまでの層序認識の変遷を図10に掲載する。

調査は集落跡の調査から始まり水田跡の調査へと進んでいった。従って調査の進展とともに基本土層も複雑になっていった。Ver.１段階では２層を近世、３、４層を中世と誤認していた。また、コモ層と５層を同一層序と考えていた段階であった。近世、中世の層序が決定したのはVer.２段階であり包含層出土遺物から４層が近世、５層が中世であることが判ってきた。コモ層の時期が古墳時代中期であることも判明した。

Ver.３は水田跡の調査に入った段階であり、水田跡の調査の進展に応じて各水田面の認識も変化していき最終的に図10の基本層序ができあがった。分層発掘による各層の時期決定と同時に調査区周壁の土層観察と図化、写真撮影の記録を行った。図11は調査区南壁の土層図である。土層実測は1/20で行ったが調査区が東西約330mにも及んだため、その図面は数十枚にもなった。従って掲載した土層図はタテ1/80、ヨコ1/400に縮尺した。以下、基本土層層序の説明を記す。

１～３層は近・現代の堆積層で１層が褐灰色細砂、２層が明黄褐色粗砂、３層が褐灰色粘質シルトを基調とする。４層は近世の堆積層で色調は３層と類似し褐灰色粘質シルトを基調とする。５層は中世の遺物包含層で黒褐色粘質土を基調とする。６層は古墳時代の遺物を主体とする包含層で黒褐色細砂を基調とする。調査区東側の弥生・古墳時代水田跡を検出した低地部ではこの６層中に植物遺体層であるコモ層が堆積する。７層は縄文晩期～弥生時代の遺物を主体とする包含層で７ａ層が黒褐色粘質シルト、７ｂ層が黒色粘質土を基調とする。８層はいわゆる地山で褐色細砂を基調とする。径５cm～10cmの軽石を含む。この軽石の起源が何であるかは不明である。８層は基本的には無遺物層であるが20、21グリッド付近の７、８層から縄文時代中期の土器片が少量ではあるが出土している。なお、基本土層の色調はあくまでも基調とするもので調査地点により色調が異なる。

これらの基本土層が１層から８層までみられるのは調査区東側の低地部のみである。調査区西側の砂丘微高地上は近・現代の圃場整備などで削平などの土地改変を受けており旧地形がそのまま埋没されている箇所がむしろ少ないのが現状である。水田などの開墾や廃絶といった土地利用の変遷を知るためには基本土層をおさえたうえで各層序の層界を観察することによって削平なのか埋没なのかが判ってくる。

５～７ライン付近では６層直上に足跡状に踏み込んだ４層がある。これは調査によっても平面で足跡として確認できた。（図156）また５層中に４層のブロックが混入しており耕作によるものかと思われる。これらのことからも近世段階ではこの付近は水田として使われていたが、その耕作土壌は近・現代に削平されたと思われる。12、13ライン付近では４層、５層が全くみられず、３層直下に６層がきており、層界も水平である。同付近は周囲よりやや高く、そのために近・現代に削平されたと思われる。

本遺跡の調査区西側では全体的に４層、５層がみられないものの、中世、近世の溝はあり、その埋土は４層、５層起源の土壌である。また、層界も水平であることなどから本来の古地形は現状よりさらに高かったことが想定される。

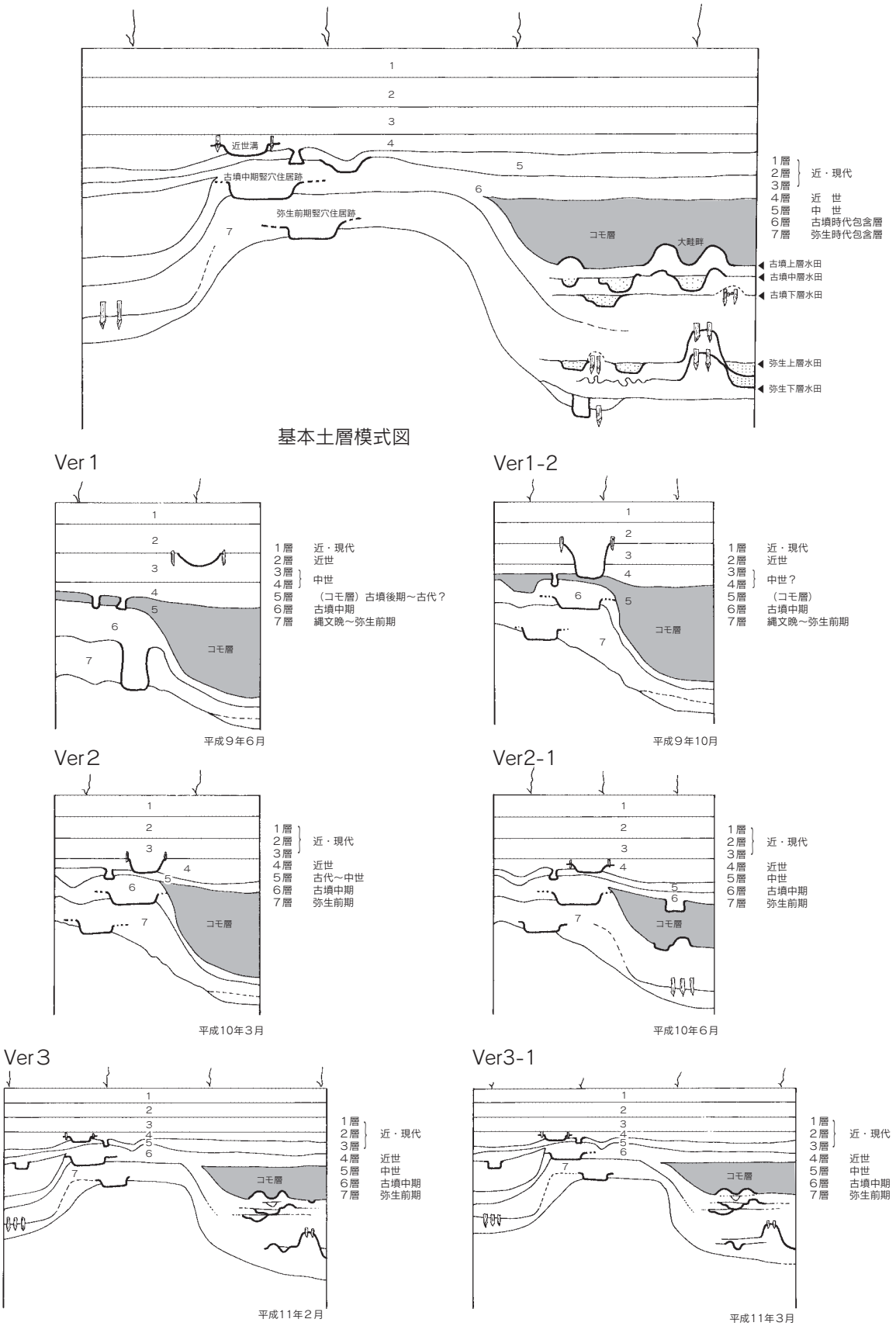


図10　層序認識の変遷図

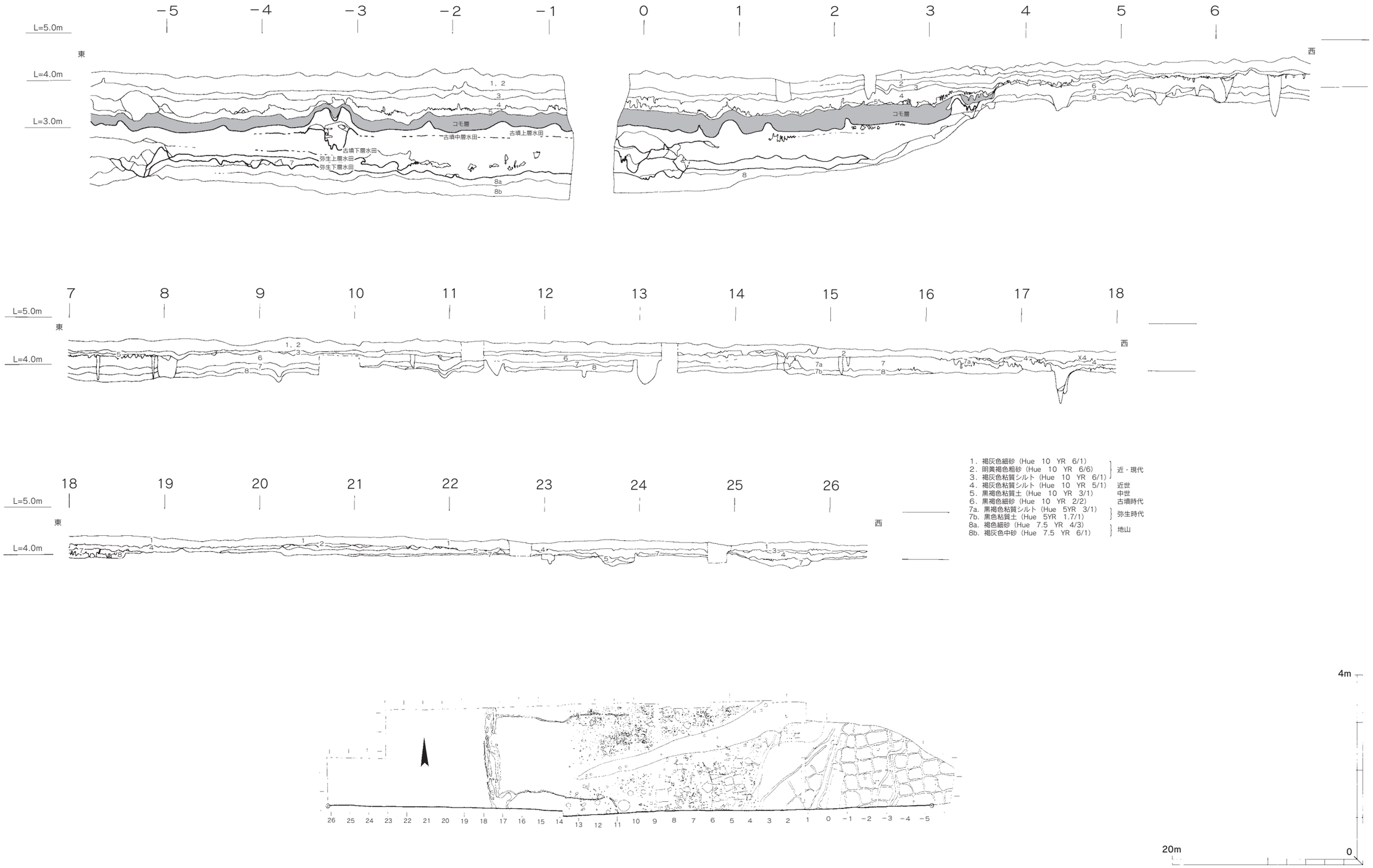


図11 調査区南壁土層(ヨコ1/400，タテ1/80)

Ⅳ，集落跡の調査

１，縄文時代晩期～弥生時代の遺構と遺物

（１）包含層の調査

①旧河道土層（図12）

調査区内にある長さ約12mの細長い落ち込みである。規模は幅約５m～20m、比高差約0.7m～１mである。本来、この自然地形が流水によってできたものかは疑わしく、砂丘（砂堆）形成時にできた地形の可能性もある。調査時にこの落ち込みを旧河道と呼称したため本書でも同様に呼ぶことにした。

旧河道の断面形態はレンズ状で埋土もレンズ状堆積である。コモ層や中近世の遺物包含層である４層、５層までもレンズ状堆積を示していることから、近世期には相当埋没しているものの若干の窪みがあったことが判る。この旧河道埋土中から特に縄文晩期～弥生前期を主とした遺物が多量に出土した。

図12には旧河道の土層を示す。これは調査区東壁の旧河道断面土層にあたる。層序は基本土層と同じで１層からいわゆる地山の８層からなる。この中で５層と６層の間層にあたるコモ層や４層、５層は中世、近世の遺物包含層であり鍵層となる。以下、土層註記を記す。

１層は灰色シルト質細砂、２層は灰黄色シルト質細砂でマンガン粒子混入、３層は明黄色シルト質細砂でマンガン粒子がさらに多くなり色調も黄色味を帯びる。粗砂ブロックを混入、下部に砂粒を混入。４層は褐灰色シルト質粘土で大粒のマンガン粒子を混入、４層をさらにａ層とｂ層に分層できる。ベースになる粒子は同じでｂ層には５層のブロックが耕作時のまきあげ痕として混入し区別される。４層は乾燥するとタテ方向のクラックがはいる。５層は黒褐色粘質シルトで植物遺体を含む。黒色粘土と褐灰色粘土がまだらに混入する。コモ層は色調が暗褐色の植物遺体層で黒色と暗褐色の交互な層が数十条みられる。昆虫化石を含む。６層はさらにａ層、ｂ層、ｃ層に分層できる。６ａ層は黒褐色粘質シルトで繊維状の植物遺体を含む。６ｂ層は黒褐色細砂でやや粘性あり。６ｃ層は灰白色粗砂で粗砂をベースに６ｂ層の黒褐色細砂をブロック状に含む。７層はさらにａ層、ｂ層に分層できる。７ａ層は褐色中砂で黄橙色粗砂を含む。７ｂ層は黒褐色中砂で褐灰色粗砂をブロック状に混入する。８層はいわゆる地山で無遺物層である。色調は灰色味を帯びるが、下部にいくにしたがい青灰色味を帯びる。

縄文晩期～弥生時代の遺物包含層は７層である。旧河道中、とくにＥ-10、11区画から土器が集中して出土した。

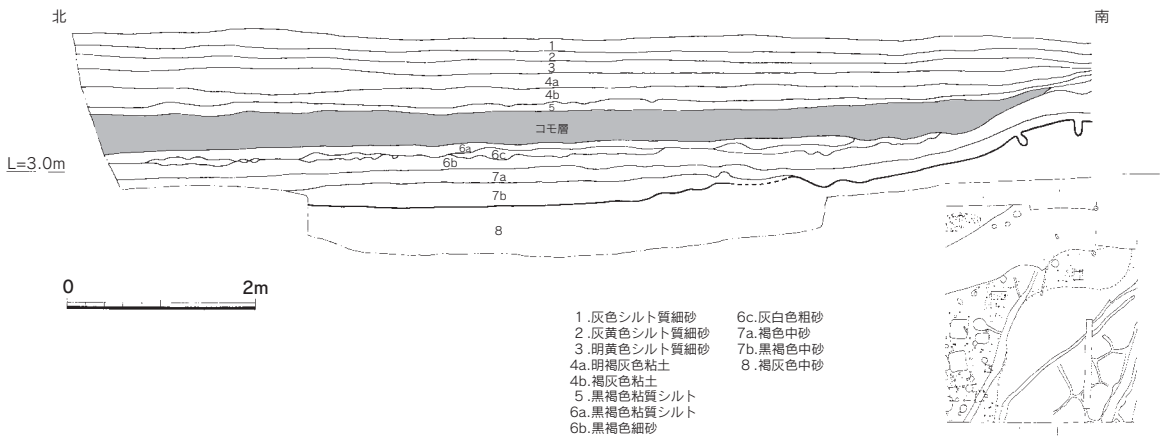


図12　旧河道土層図（１／80）

②包含層出土遺物

Ａ－１，土器の分類

包含層及び遺構から出土した土器を田崎氏（1994年、2000年）を参考に分類した。ただし、破片資料が多いため、田崎氏の分類をそのまま使用できず、細分が行えなかったため一部変更して分類を行った。特に壺は肩部まで残っている資料が少ないため、ほとんど細分が行えなかった。甕、壺、浅鉢は以下に分類する。この他、鉢、高杯、蓋の器種を設定し、底部についてもまとめて説明した。

Ⅰ類：「黒川式土器」に代表される突帯文土器に先行する土器群。

Ⅱ類：口縁部及び胴部に刻目を施した突帯をめぐらせた土器。

Ⅲ類：口縁部が外反し、刻目を施した土器。

Ⅳ類：口縁部が逆Ｌ字状またはＴ字状に肥厚するもの。上記の三類より新しい土器群。

甕

上記で分類したうちⅡ類はさらに細分する。また、Ⅰ、Ⅲ類の中でも細分できなかったものは文章中で説明する。

ⅡＡ類：口縁部だけに刻目突帯をもち、胴部が屈曲しない、砲弾形の器形を持つもの。

ⅡＢ①類：胴部がくの字状に屈曲し、口縁部及び胴部に刻目を施した突帯をめぐらせるもの。

ⅡＢ②類：胴部がくの字状に屈曲し、口縁部に直接刻目、胴部に刻目を施した突帯をめぐらせるもの。

その他のⅡ類：個体数が少ないため分類しなかったものは、その他のⅡ類の中で説明する。

壺

甕Ⅱ、Ⅲ類に伴うものとしてⅡ、Ⅲ類の壺を細分した。

ⅡＡ類：長い頸部を持ち、肩部が張ったもの。本来はこの中を胴部が長いものと短いものに分類すべきだが個体数が少なく、器形が分かるものが少ないため一括した。

ⅡＢ類：短い口頸部を持ち、肩部の張りが弱いもの。

ⅡＣ類：広口の壺を一括した。

ⅢＡ類：頸部は直線的にすぼまり、口縁端部の外反転が大きい。口縁部の外側を肥厚させ段を設ける。

ⅢＢ類：球形の胴部を持つ無頸、短頸のもの。

浅鉢

Ⅰ、Ⅱ類に分類した。

Ⅰ　類：縄文時代晩期からの系譜を引くもので、細分できるが個体数が少ないため、文章中で説明する。

ⅡＡ①類：胴部上半で「く」の字状に屈曲するもの

ⅡＡ②類：そのうち屈曲部の上部の外反が強く、外方に大きく開き、口縁部に最大径があるものに細分した。

ⅡＢ類：方形で波状口縁を持つもの。

Ａ－２，縄文時代晩期～弥生時代

甕Ⅰ類（図13－1～図14－14）

Ⅰ類には、口縁部が直線的に開くもの（1～5,7,8）、口縁部が若干内側に湾曲するもの（6,9～12）、口縁部の内側が肥厚するもの（13）、口縁端部に突起がつくもの（14）がある。1,2,4は内、外器面共にナデ調整を行なう。1,4は板状工具によるナデ調整を行っている。板状工具によるナデ調整は粗く、ナデ調整とするよりは擦過調整とすべきかもしれない。7は内、外器面共に条痕を残す。9は外器面に板状工具によるナデ調整を施し、口縁部の内湾が大きい。12は外器面に接合痕を明瞭に残す。13は口縁部の内側

を肥厚させる。14は口縁部に突起をもち、内器面に指頭圧痕が残る。13,14共に縄文時代晩期の古い特徴を残す。Ⅰ類は全体的に器面調整が粗いが、３と５は外器面にミガキ調整を施しており、特に５は丁寧なつくりになっている。そのため、鉢の可能性もあるが、ここでは傾きから考えて甕として分類する。甕とした場合は、特殊な使い方をしたものか。

甕ⅡＡ類（図14‐15～17,19,21）

梅白遺跡ではⅡＡ類の出土はほとんどなく、可能性のあるものを含めて図示した。確実にⅡA類といえるものは16,17だけで、15,19,21は鉢とすべきかもしれない。15,19,21は内、外器面に条痕を残し、板状工具によるナデ調整を施し、つくりが粗い。16は口縁端部に接して突帯を巡らせ、刻目を密に施す。板状工具によるナデ調整の後、さらにナデ調整を施す。

甕ⅡＢ①類（図14‐18,20,22,図15‐23,26）

ⅡＢ①類も梅白遺跡からの出土は少なく、甕の主体とはなっていない。18,20は口縁端部から離れた位置に突帯を巡らす。18は太めの突帯に棒状工具による中程までの深さの刻目を施す。20は低く細めの突帯に棒状工具による深い刻目を施す。23は数少ない完形に復元された甕で、口縁端部から離れた位置に突帯を巡らす。太めで上下端を横ナデ調整した断面三角形の突帯に、ヘラ状工具による突帯の根元付近までの深さの刻目を施す。肩部から口縁部にむけて直線的にすぼまり、胴部下半は若干膨らみを持つ。26は大型の甕で、肩部から口縁部にかけて内側に大きく屈曲する。屈曲部と口縁端部にそれほど大きくない断面三角形の突帯にヘラ状工具による刻目を深めに施す。

甕ⅡＢ②類（図15‐24,25,27～図17‐41,43）

ⅡＢ②類は梅白遺跡から出土した甕の主体となる。24は肩部の屈曲でいったん内傾し、外反しながら上方に立ち上がる。突帯の整形は粗雑。刻目はごく浅い。25はほぼ全体の器形がわかる個体で、口唇部を端正に面取りし、端部を外方につまみ出し、ヘラ状工具による深い刻目を施す。ほかの個体も同じ整形をしているが、刻目がごく浅いものが多い。胴部は張らずに直線的にすぼまる。底部は脚部が張った上げ底状を呈するが、厚手の平底の底面が剥がれ落ちた可能性もある。27は屈曲が弱く、肩部から口縁部にかけて直線的に内傾する。28は器形は25に似るが、口縁部の刻目が小さく浅い。29は条痕が残り、刻目も大きく深い。30もほぼ全体の器形がわかる個体。口唇部を面取りし端部を外側につまみ出し、浅く小さな刻目を施す。胴部の突帯も小さく、浅い刻目を施す。屈曲部の下部はあまり張らずに若干湾曲しながらすぼまる。31は口唇部の端部の整形が甘く若干丸みを帯びる。32は肩部の屈曲が弱く、直線的に内傾し、口縁部で外反する。肩部の突帯は省略され、屈曲部をつまみ出して整形し、浅く小さな刻目を施す。口唇部も面取りし端部をつまみ出し、浅く小さな刻目を施す。器面調整はⅢ類と同じく丁寧にハケ目調整が施されており、その影響が窺える。33は口唇部のつまみ出しが甘く、棒状工具による浅く大きな刻目を施す。口径が大きく、鉢の可能性もある。34は肩部の屈曲もほとんどなく、突帯も省略され、屈曲部のつまみ出しもなく、刻目が施される。口唇部は面取りされ、つまみ出された外端部に刻目を施す。36は口唇部の面取りが粗く、口縁部が波打ち、突帯も横ナデを施さない。外器面胴部下半は条痕を残す。37と大きさが異なるが、器形はほぼ同じで、屈曲がほとんどなく砲弾形に近い。36の方が若干屈曲が大きい。37は外器面に丁寧にナデ調整を施しており、屈曲部に小さな断面三角形の突帯にヘラ状工具による浅い刻目を密に施す。口唇部も丁寧に面取りし刻目を施す。38～40は小型の甕。39,40は屈曲がほとんどなく、丁寧に整形し、外端部をつまみ出した口唇部に浅く小さな刻目を施す。40は底部までほぼ完形に復元できる個体。41は口縁部の突帯が大きく断面が隅丸の三角形に近く、佐賀平野以南に分布の中心があるいわゆる「亀の甲タイプ」と呼ばれているもので、胴部の調整にハケ目調整を用いる。

43も同じものか。

その他のⅡ類（図17‐42,44～図18‐54）

42は口縁部に突帯や刻目がなく、胴部にだけ刻目を施した突帯を持つもの。口唇部はⅡB②類と同じく端正に面取りし外端部をつまみ出している。胴部はいびつな断面三角形の突帯に中程までの深さの刻目を施す。胴部の屈曲はほとんどなく、若干内傾する。44は胴部に刻目突帯、口縁部につまみ出して整形した凸線を巡らす。胴部は小さな断面三角形の突帯にほぼ正面から深い刻目を施す。肩部で内傾し口縁部で外湾しながら立ち上がる。内、外器面共にナデ調整を施す。このタイプは梅白遺跡では１点のみ出土しており、搬入品若しくは模倣品か。45はⅠ類とすべきかもしれないが、刻目を持つことからⅡ類として報告する。口縁部が内湾しながら立ち上がり、口唇部に上方から深い刻目を施す。器面調整はナデ調整を施す。内、外器面ともに接合痕を明瞭に残し、外接ということがわかる。胎土、色調共に黒色を呈し、器壁も厚ぼったく、ほかの出土品とは明らかに異なる。在地産かどうかも含めて検討を要する個体である。46は口唇部から離れた位置に突帯が巡り、断面三角形の突帯にヘラ状工具による深い刻目を施す。肩部の屈曲は緩やかで、他地域からの搬入品か模倣品と思われる。47は口縁端部にだけ刻目をもち、口縁端部を外上方につまみ出し、刺突による深い刻目を施す。胴部で「く」の字に屈曲する。鉢として分類すべきかもしれない個体である。48はⅡA類の可能性があり、断面三角形の突帯に刺突による太く深い刻目を施す。49～51はⅡB類の可能性があり、49は断面かまぼこ形の突帯に刺突による太くて深い刻目を施す。53は口縁端面の下端を外方につまみ出し、浅く小さな刻目を施す。刻目の直下からハケ目調整を施す。口縁部が短く外反し、胴部が若干張る。Ⅱ類とⅢ類の折衷形または他地域からの搬入品と思われる。54は口縁端部に叉状の工具による浅い刻目を施す。

甕Ⅲ類（図18‐55～図19‐60）

55は口縁部が短く外反し、口唇部を面取りし下端部を中心に端面全体に刻目を施す。胴部はほとんど張らない。内、外器面共にナデ調整を施す。56は口縁部が緩やかに湾曲しながら外反する。刻目は下端部を中心に端面全体に施す。ハケ目調整を施す。57は口縁部が短く外反し、下端部を中心にほぼ全面に刻目を施す。胴部が若干張る。外器面にハケ目調整を施す。58は端面の正面から全面に刻目を施す。口縁部の外反が強く、胴部が若干張る。59は口縁端面の下端に浅い刻目を施す。ハケ目調整を口縁部の一部にだけ施し、胴部にはナデ調整を施す。60は口唇部の面取りが甘く、刻目を施さない。

甕Ⅳ類（図19‐61～65）

61～63,65は胴部の張りは弱いが、64は胴部の張りが強い。

壺

壺ⅡA類（図19‐66～図21‐84）

67,68はⅡA類の中では頸部が短く、口縁端部が短く外反し、肩があまり張らない。内外器面共に丁寧なミガキ調整を施す。69は頸部がほぼ垂直に立ち上がり、口縁端部が短く外反する。他のⅡA類とは別系譜の可能性がある。75は頸部に縦方向のミガキ調整を施しており、器壁も薄く、他の個体とは特徴が異なる。78は頸部と肩部の境に沈線を巡らす。79～81は大型の壺で、80は頸部に縦方向のミガキ調整を施し、内器面はハケ目調整の後ナデ調整を施す。81は口縁部から胴部上半までわかる個体で、口縁端部が短く折り曲がって外反し、頸部から肩部への変化は緩やかで肩部の張りが強い。外器面はミガキ調整を施し、内器面は胴部にハケ目調整を施す。

壺ⅡB類（図21‐85～90）

85は頸部で折れ曲がり直線的に外側に開いて立ち上がる。87は肩部の張りが弱いため、頸部が短く外

側に開くように緩やかに立ち上がる。88,89は胴部から口縁部にかけて緩やかに湾曲しながらS字状に立ち上がり、口縁部は外湾する。そのため肩部の張りが弱い。内外面共にミガキ調整を施す。90はほかの壺とは違い、器面を条痕の後ナデ調整で仕上げる。肩部から頸部にかけて緩やかに湾曲し、ほとんど内傾せずに口縁部にむけて外湾する。

壺ⅡＣ類（図21‐91～95）

91は96と胎土と焼成が同じで、胎土が緻密で、焼成が非常によい。頸部と肩部の間に2条の沈線を巡らし、口縁部が短く外反する。丁寧なミガキ調整を施す。92は頸部から口縁部にかけて直線的に立ち上がり、端部で外反する。肩部の張りがかなり強いことが予想される。93は肩部がくの字状に屈曲し、口縁部が大きく外反する。94は頸部がすぼまらず、口縁端部が小さく外反する。内外面共に丁寧なミガキ調整を施す。鉢として分類すべきかもしれない。95は粗製の無頸壺で、肩部からほぼ直線的に内傾する。粗いナデ調整を施しており、内器面には接合痕が残る。

壺ⅢＡ類（図22‐96～98,100～102）

96は口縁部の外側を肥厚させ段を設け、口縁部が屈曲しながら外反する。98は口縁部の屈曲はなく、頸部との境で屈曲する。100は口縁部の外端部と段を設けた部分に刻目を施す。102は口縁部の段がなくなり、頸部と肩部の境も緩やかになる。胴部に小孔が穿たれる。

壺ⅢＢ類（図22‐99）

包含層からは１点だけ出土している。口縁部に沈線、胴部に貝殻を用いた幾何学文を持つ。

浅鉢

浅鉢Ⅰ類（図22‐103～110）

104,105は口縁部がくの字状に屈曲し、端部が若干肥厚し、内傾する。肩部が張っており、扁球形をなす。106～108は口縁部にいわゆる「蝶ネクタイ」形の突起がつくもので、甕の可能性もあるが、今回は浅鉢として報告する。107は内外器面共にミガキ調整を施す。109は胴部中程で一旦内側に屈曲し、外方に向けてほぼ直線的に立ち上がる。内外器面共にミガキ調整を施す。110は胴部下半で屈曲するボウル形をしており、内外器面共に丁寧なミガキ調整を施す。

浅鉢ⅡＡ①類（図22‐111～図24‐132,134）

ⅡＡ類には屈曲部から口縁部までの長さが短いもの（111～126,135）、口縁部までの長さが長いもの（127～134）があるが、変化は漸移的で明確な区別はできない。外器面に丁寧なミガキ調整を施し、口縁端部を外反させているものが多い。黒色磨研処理を施されたものも多い。115は肩部の屈曲の直上に沈線を巡らす。121,122は口縁端部を外反させず、若干肥厚させている。124は口唇部上面と屈曲部に棒状工具による刻目を施す。125,126は口縁部から底部までわかる個体。127は完形品で出土し、底部が丸底で、屈曲部が丸みを帯びており、器面に赤色磨研を施す。128は内外器面に条痕を残す。129,130は口縁端部の先端を尖らせて折り曲げている。屈曲部直上に沈線を巡らし、内外器面に丁寧なミガキ調整を施す。同一個体の可能性もある。132は屈曲部直上に沈線状の段が巡る。134は大型の個体で口縁部の屈曲部に若干段が巡る。

浅鉢ⅡＡ②類（図24‐133,135～144）

底部までわかる個体は出土していないが、浅くて口縁部の開きが大きいもの（138,140,142,144）と深いもの（133,135～137,139,141,143）に分けられる。135は屈曲が甘く、内外器面にミガキ調整を施す。133,136は屈曲部から口縁部までが長く、外湾しながら大きく開く。138は外器面下半部に条痕を残す。144は屈曲部直上に沈線を巡らす。

浅鉢ⅡＢ類（図25‐145～163）

すべて破片資料で全体の器形がわかるものは出土していない。黒色磨研土器がほとんどであるが、147と152は丹塗磨研土器である。口縁部が屈曲するもの、口縁部が肥厚するもの、屈曲部に刻目突帯や刻目を巡らすものがある。145は口縁部の屈曲が弱く、若干肥厚させる。156は口縁部を内側に肥厚させ、外器面には突帯を巡らす。157は屈曲部に浅く小さな刻目を巡らす。162は口縁端部を肥厚させ上端に窪みをつくり、肥厚部に刻目を巡らす。Ⅰ類の可能性もある。

鉢（図26‐164～図27‐191）

甕の器高を低くしたもの（164～166,168,169）、椀形のもの（167,170～182）、組織痕を持つもの（183～191）に分けられる。164は甕ⅡＢ②類、165は甕ⅡＡ類、166は甕Ⅰ類の系譜の鉢。164は口縁部の刻目の直下に沈線を巡らす。168は裾が張らない平底の底部を持つ。169は内外器面に条痕を残す。

椀形のものは口縁部が内湾するもの（170,173）、外反するもの（172,176,178）、直口縁のもの（171,174,175,177）、大型のもの（179～182）に分けることができる。172は補修痕がある。176は口縁部が外反しないが、端部を肥厚させており、外反するものとして分類した。

組織痕を持つもので183は胴部に籾跡圧痕を持つ。傾きがわかるものは１点だけで、ほかは細片のため傾きは推定である。

高杯　（図28‐192～199,204）

脚部が短いⅡ類に伴う台付鉢（192～195,199）と長い脚部を持ち杯部と脚部の接合部分に突帯を巡らすもの（196～198）がある。後者は梅白遺跡からほとんど出土していない。192は完形に復元された個体で、脚部と杯部の間に刻目突帯を巡らし、口縁部から離れた位置にも刻目突帯を巡らす。196は口縁部が大きく外反する。197,198は脚部が細いが、204は脚部が大きく開く。

蓋（図28‐200～203）

200,201は小型の蓋。203は大型のものか。

底部（図28‐205～図31‐294）

底部には甕の底部（205～251）、壺、浅鉢の底部（252～278）、脚台を持つもの（279～294）がある。205は底面に籾跡圧痕が残る。215,216は底面に木葉圧痕が残る。222は底面に擦痕が残る。237,241～251はⅢ類の底部。241,245,249は底面に穿孔し、甑として用いたものか。253,256は丸底の壺の底部と思われる。267,269は上げ底気味の底部。273は裾部を丁寧に面取りし上げ底気味に整形を行い、底面にもミガキ調整を施す。276～278は浅鉢の胴部から底部片。ⅡＡ類のものか。279～290は脚台を持つ底部片で、甕や浅鉢、高杯（台付鉢）の底部と思われる。291～293は中実の脚部で何の底部かは不明である。294は底面に織物痕がつく。

Ａ－３，縄文土器

梅白遺跡からは調査区西端付近を中心に少量であるが、縄文時代前期から後期にかけての土器片が出土している。最近唐津平野内でも低地部で縄文時代の遺跡が発見され始め、注目を集めている。295は曽畑式土器の口縁部片。滑石粉は含まれていない。296は口縁端部上面に刻目を施し、端部の正面から指もしくは棒状の工具の刺突による浅い刻目を施す。器面調整は粗い条痕を残す。297,298は並木式土器で、胎土中に大量の滑石粉を含む。297は口縁部片で、口縁端部上面に浅く小さい刻目を施し、細沈線による山形文を施す。299は阿高式土器の細片。

Ｂ　石器

両刃石斧（図32‐1～34‐21）

破片資料がほとんどであるため、細分は行えなかった。しかし大まかに、縄文系といわれる基端部が狭く、刃部に向けて広がるタイプ（１～４）、基端部と刃部の幅がほとんど変わらないものに分けられる。後者はさらに身が厚いもの（6,7, 9～12,14,16～21）と薄いもの（5,8,13）に分けられるが、正確な刃部幅と身幅の比率が出せないため、感覚的な分類にとどまる。１は刃部の一部を欠くもののほぼ小型の両刃石斧の完形品。表面の剥離が進んでいるため、研磨痕は明瞭ではない。鎬や稜は甘く、はっきりしない。重さ193.7g。３は刃部にむけての広がり方が大きい。４は縄文系の中では大形品で、基端部に向けてのすぼまり方が小さく、折衷型と呼べるものか。５は基端部の一部を欠くものの、ほぼ完形で、基端部から身部にかけて敲打痕を残し、刃部には丁寧な研磨を施す。刃部付近の両端は明確に稜をつくる。重さ568.1g。６は横断面が楕円形に近いが、基端部は尖らすように整形する。身部は敲打による凹凸をほとんど残さず、丁寧に調整を施す。重さは938.5g。破片ではあるが、伐採斧の中で最も重い。安山岩製で今山産と思われる。８は装着痕が側縁部に残る。９はほぼ完形品で、刃部の端部がＳ字状に湾曲する。研磨の範囲は狭く、敲打痕を残す。重さは606.9g。11は片面が基端部付近まで研磨が及び、平滑な面をつくりだしており、破損後再利用した可能性もある。14も平滑な面を広くつくりだしており、再利用されたものか。18は側縁部に稜をつくりだしている。

柱状片刃石斧（図34‐22～26）

梅白遺跡では両刃石斧や扁平片刃石斧と比べて出土数が少ない。22は前主面が面をなしておらず、身部に装着時に破損した跡が残る。23は大形品で、丁寧に研磨を施し、鎬を明確につくる。

扁平片刃石斧（図35‐27～39）

層灰岩製のものが多く、落ち込み内から出土したものが多い。しかし落ち込み内のものは細片が多く図示できたものは少ない。27は出土した扁平片刃石斧の中では最も大きい。鎬や稜を明確に研ぎ出す。34は基端部を除きほぼ全体の器形がわかる小型品で、刃部の後主面側に使用痕が残る。35は前主面が剥離しているがほぼ全体の大きさがわかり、34,35共に重さが30ｇ強であることから、小型品の重さは30～40ｇになると思われる。39は前後主面に装着痕が残る。

ノミ状片刃石斧（図36‐40～43）

40は完形品で重さ12ｇ。身が厚く、鎬と稜を明確に研ぎ出す。41は基端部と後主面が剥離しているがほぼ全体が分かり、身が薄く鎬と稜が甘い。43は両端に研ぎ出しが甘い刃部をつくっており、別器種の可能性もある。

石庖丁（図36‐44～51）

すべて破損品であり、全体がわかる個体はない。ほとんどのものは磨耗のため研磨痕を確認することができない。44は両側から擦切り技法で穿孔しており、片刃で身も厚い。上端も丁寧に面取りしている。磨耗しているため研磨痕は残っていない。49は身部が厚いため疑問も残るが、石庖丁の再利用品と思われ、上端部と右側縁部を丁寧に面取りしている。

磨製石剣（図36‐52～図37‐54）

52は石鎌か石剣の未製品、もしくは打製石斧の可能性が考えられるが、両側縁部がほぼ直線的であることから、石剣の未製品と考える。側縁部の整形途中で破損したものか。53は切っ先と柄部を欠く。54は柄部の一部であり、両側縁部に細い抉りを入れ、下端にむけて大きく広がる。丁寧に研磨を施す。探したが類例を見つけることができなかった。朝鮮半島では類例を求めることができる。

磨製石鏃（図37‐55～64,66）

ほとんどが破損品であり、全形を確認できるものは少ない。55は唯一出土した茎部のない凹基式の磨

製石鏃の完形品。重さは5.3g。磨耗のため研磨痕は確認できない。ほかの個体は全て身幅が狭い柳葉形の石鏃。60は側縁部にも研磨を施しており、実用品ではない可能性が高い。茎部が残るものには側縁部下端の形状で鈍角に茎部とつながるもの（60,64,66）、茎部に向かい抉りの入るもの（62,63）がある。66は古墳時代の土壙SK242から出土しており、片面が剥離のため欠損しているが、全形がわかり、側縁部の研磨が甘く、鎬もあまり明確ではない。茎部は面取りがなされる。大形品のため石槍としたほうがよいかもしれない。

磨製穿孔具（図37‐65,67～70）

65は目の細かい石材（泥岩？）で他は目の粗い砂岩を用いる。68は上端と下端が欠損し、身部が円形ではなく、多角形に面取りされる。69は先端部を使用によると思われる磨耗で欠くもののほぼ全体がわかり、身部は多角形に面取りされる。重さは13.4g。

打製石斧（図37‐71）

一点だけ出土しており、完形品。石材が磨製石斧と同一のものを用いる。重さ95.6g。

スクレイパー（図38‐72～74）

72、74は安山岩製、73は黒曜石製。厚手の剝片を用いる。

打製石鏃（図38‐75～図41‐137）

打製石鏃は梅白遺跡において最も多く出土した石器であり、破損品を加えると300点を越える。その形態はさまざまであり変化も漸移的であることから分類は容易ではない。しかし基部形態によって、ａ：明らかに脚部をつくりだしたもの（75～80）、ｂ：基部に抉りを入れたもの（81～100,102～105,117）、ｃ：基部が平坦なもの（106～116）、ｄ：基部が突出し柳葉形をなすもの（118～129）に分けることができる。ｅ：この他これらの石鏃とは違い、先端が鋭くなく、身部に厚みがあるもの（101,130～135,137）も分類することができる。75は剥片鏃であり、縄文後～晩期に多いとされる。そのほかａは、脚部の先端が丸くなるもの（76,77）、先端が鋭いもの（78,79）に分けることができる。ｂは梅白遺跡では最も多く出土した形態であり、特に平面形が五角形になるもの（90,102）、局部磨研石鏃（104）などがあるほか、平面形態も正三角形から二等辺三角形に近いものまで様々あり、重さも0.2から３ｇを超えるものまである。ｄは基部を明らかに突出させたもの（118）、基部が外湾気味もの（123）とそのほかの柳葉形のものに細分することができる。ｅ類はａ～ｄに比べて大型のものが多く形がいびつなものも多い。先端も尖っていないため別器種の可能性もある。

その他の打製石器（図41‐136,138～151）

136はつまみ形石器か。138は石錐と思われ、断面形が正三角形に近い。139,140は石鏃ｄ類の大形品であるが、重さも５gを超えることから石槍とした。145は両端を尖らせ、中ほどに両側縁から抉りを入れたもので、用途不明の石器である。145～150は使用痕のある剥片。151は黒曜石の石核。

凹石（図42‐152～154,158）

153は側縁部にも敲打痕があり敲石としても使用している。158は上面が平滑であり、磨石としても利用している。

敲石（図43‐155～157,159）

157は上端部のみの使用であるが、他は両端、側縁部まで使用しており、155,159は中央部に凹みができるまで使用している。

磨石（図44‐160～164）

梅白遺跡では円礫を使用したものが出土している。160,163は両面が使用のため平滑化する。

砥石（図44‐165～図45‐169,172,174）

166,174は砥石の一種と思われ側縁部に突起がつく。162は側縁部に使用によると思われる抉りが数箇所入る。169は大型の置砥石。刃部を研磨したときの凹線状の研磨痕が残る。

その他の石器（図45‐170,171,173,175～181）

170は擦切り技法で切断された未製品。171,173は刃器の破損品であろうか。175は刃部に浅い抉りが入る不明品。178は刃部が三方に入る。180は火きり臼もしくは棒状の道具の先端を研磨する砥石と思われる。181は台石に使用したと思われ重さが３kgを越える。

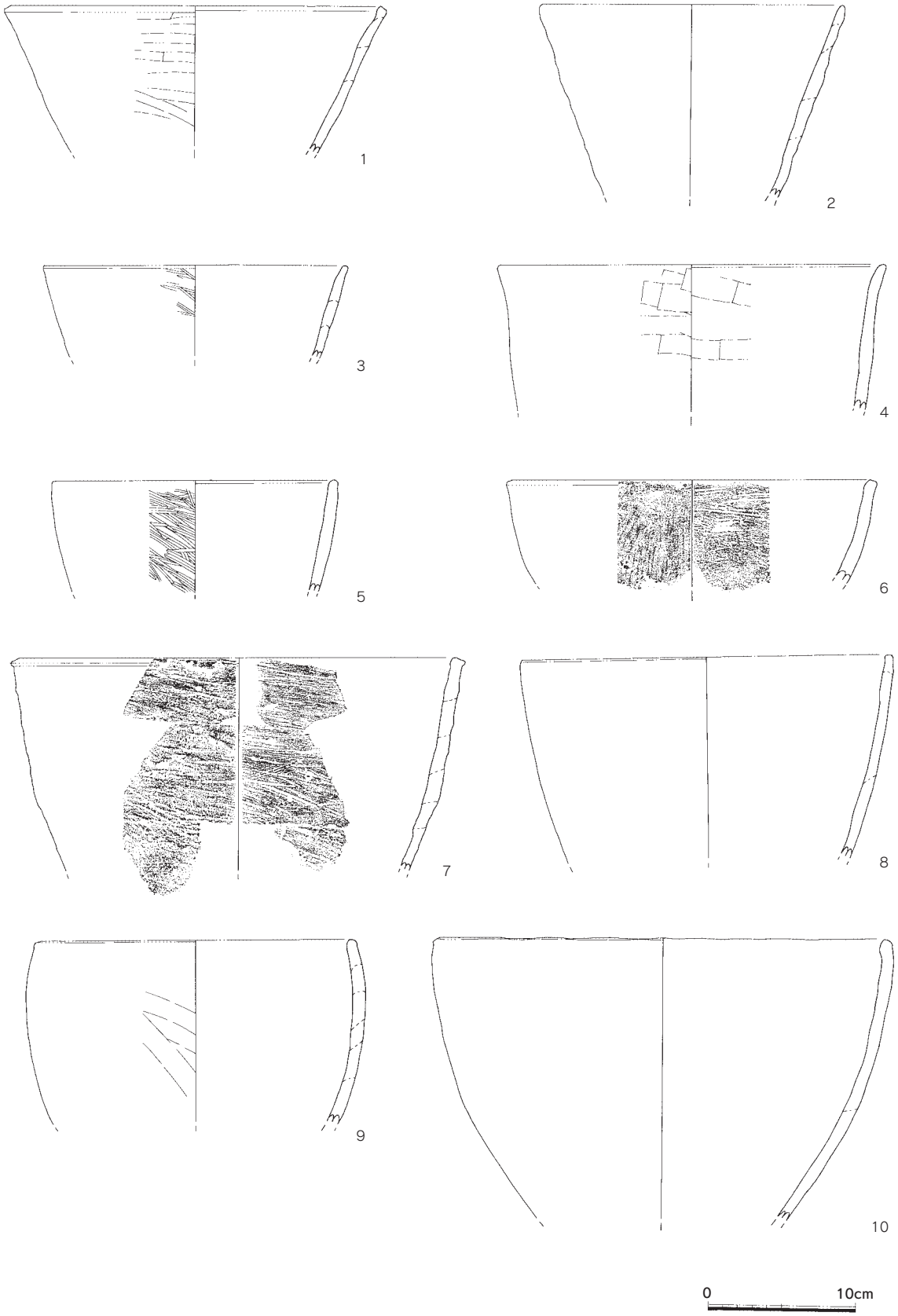


図13　包含層出土土器１（1/4）

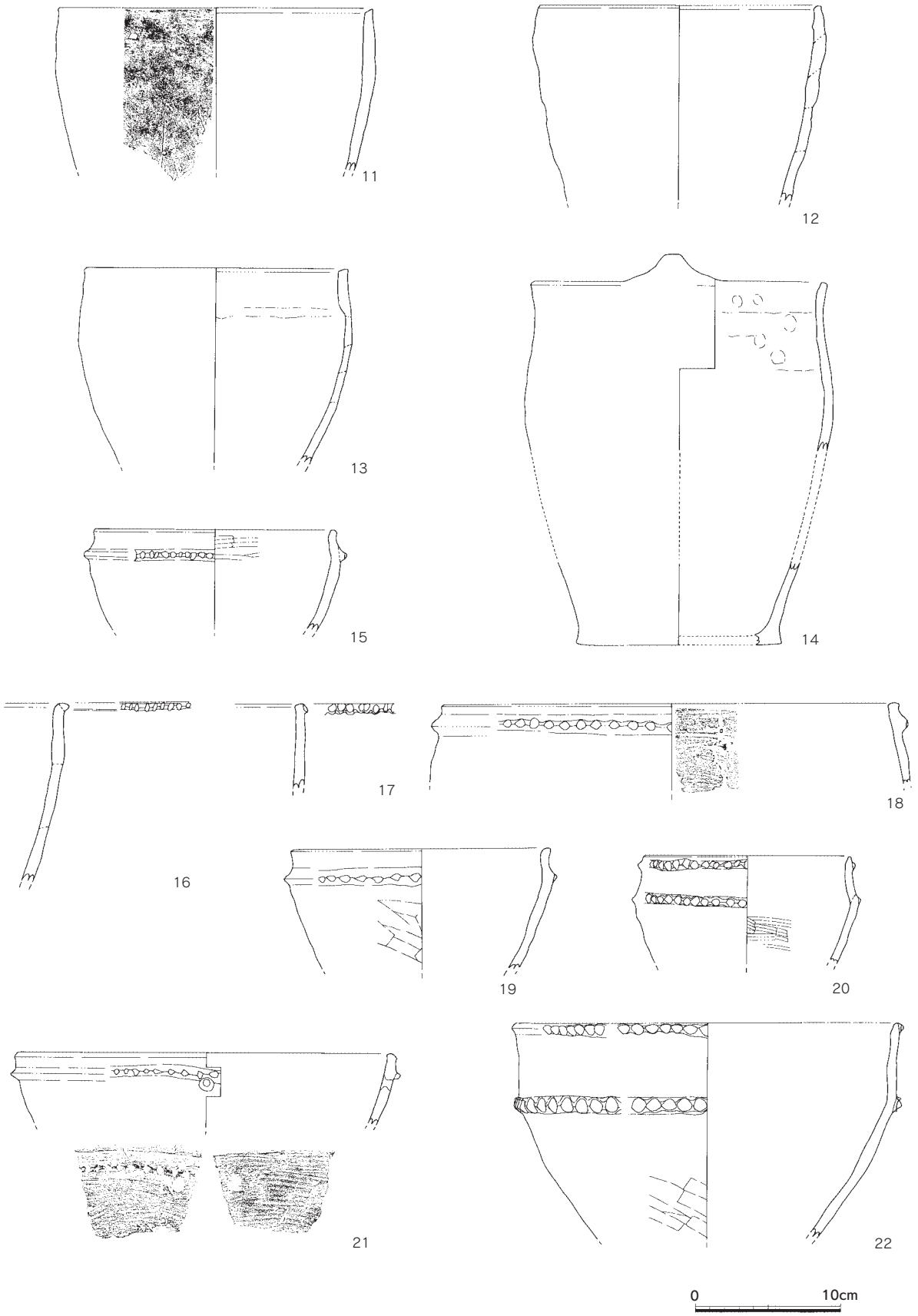


図14　包含層出土土器２（1/4）

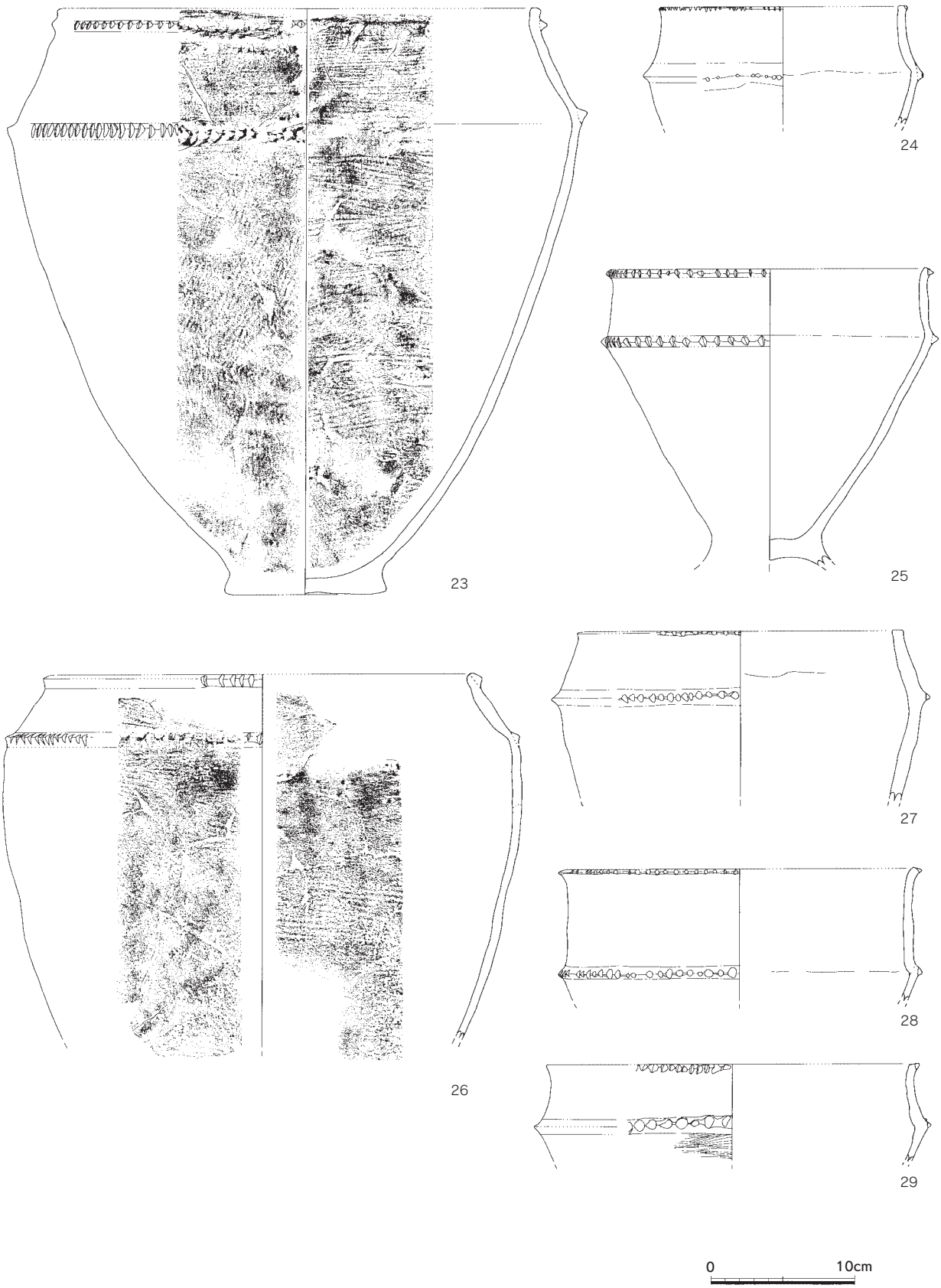


図15　包含層出土土器３（1/4）

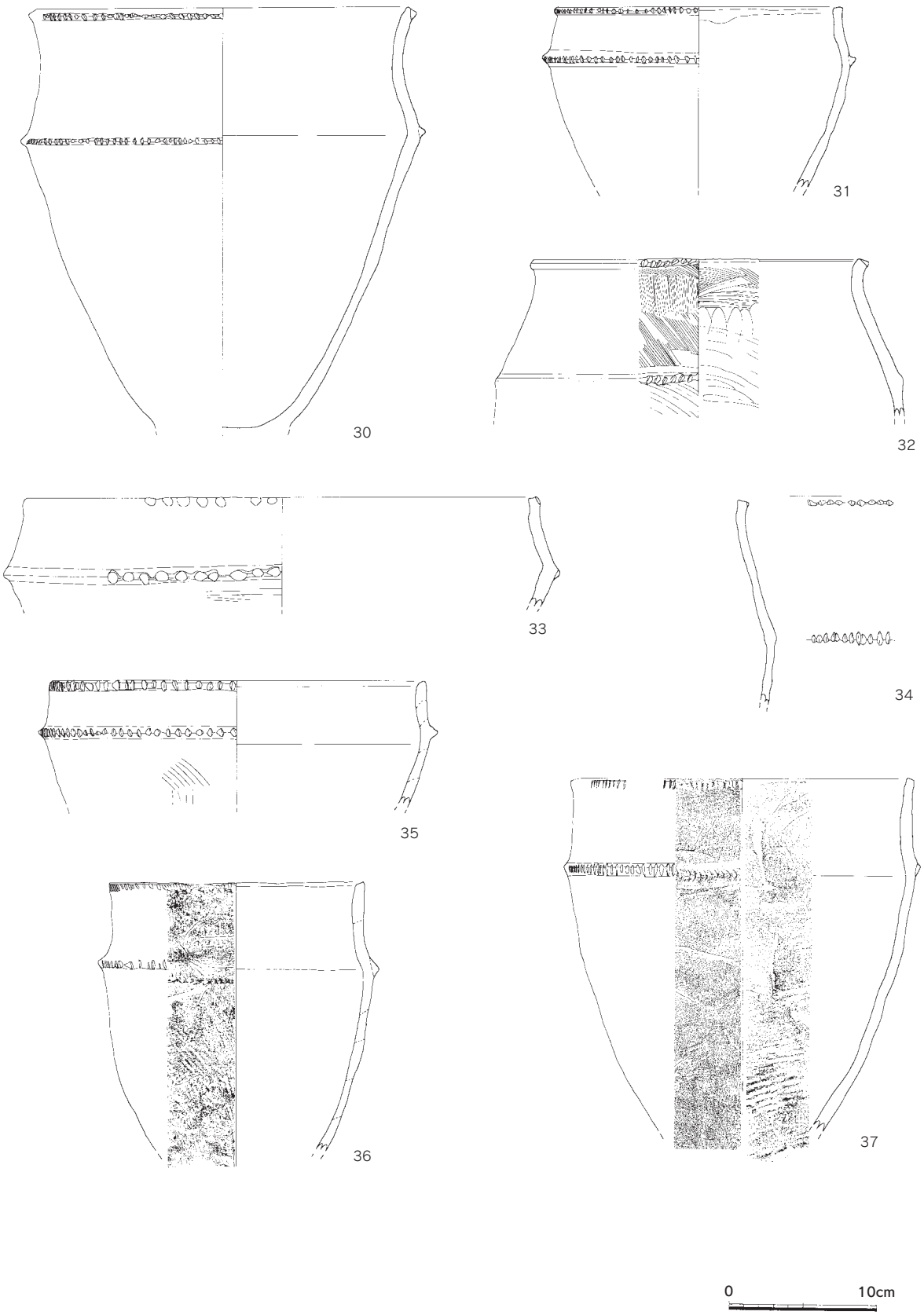


図16　包含層出土土器４（1/4）

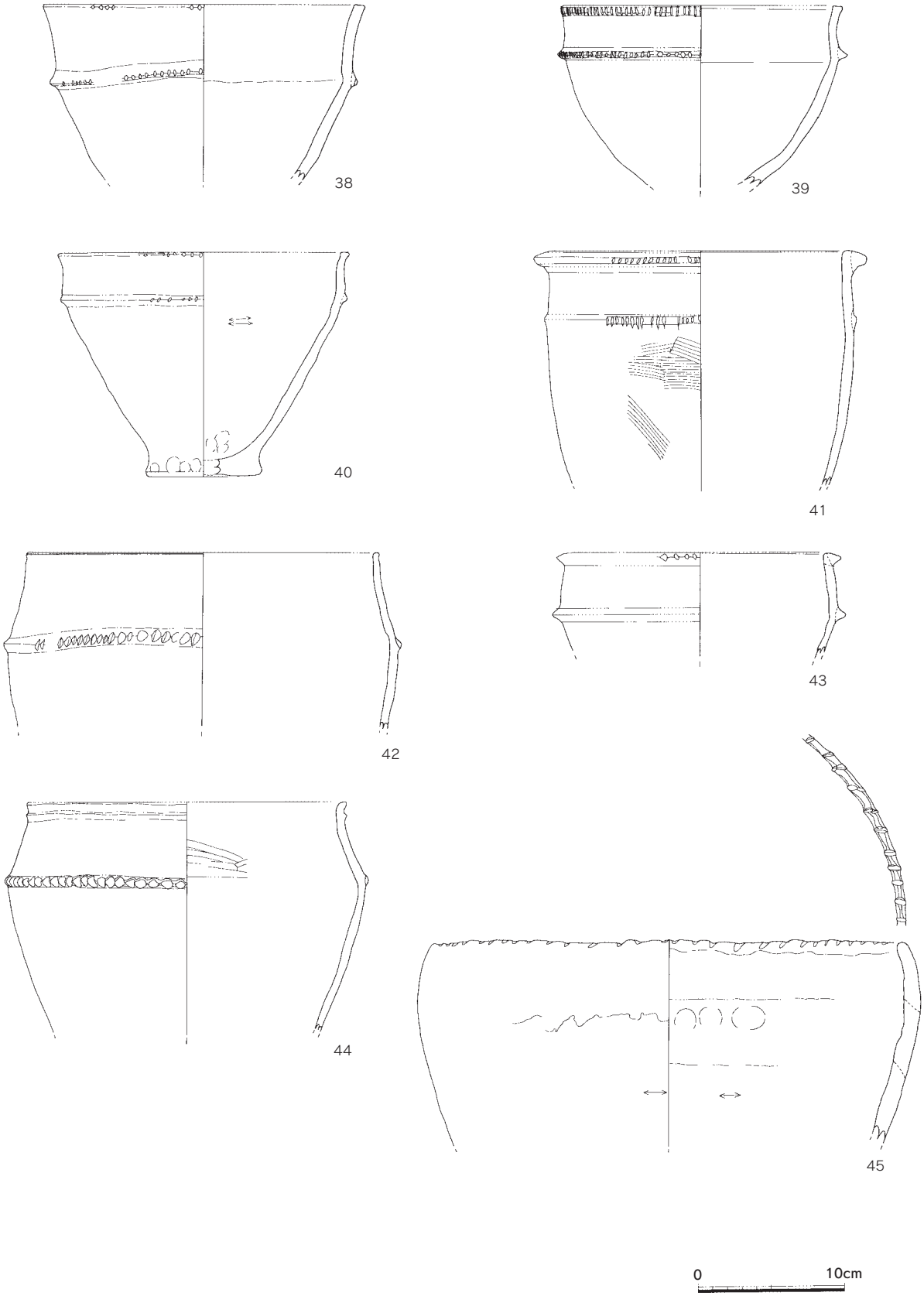


図17　包含層出土土器５（1/4）

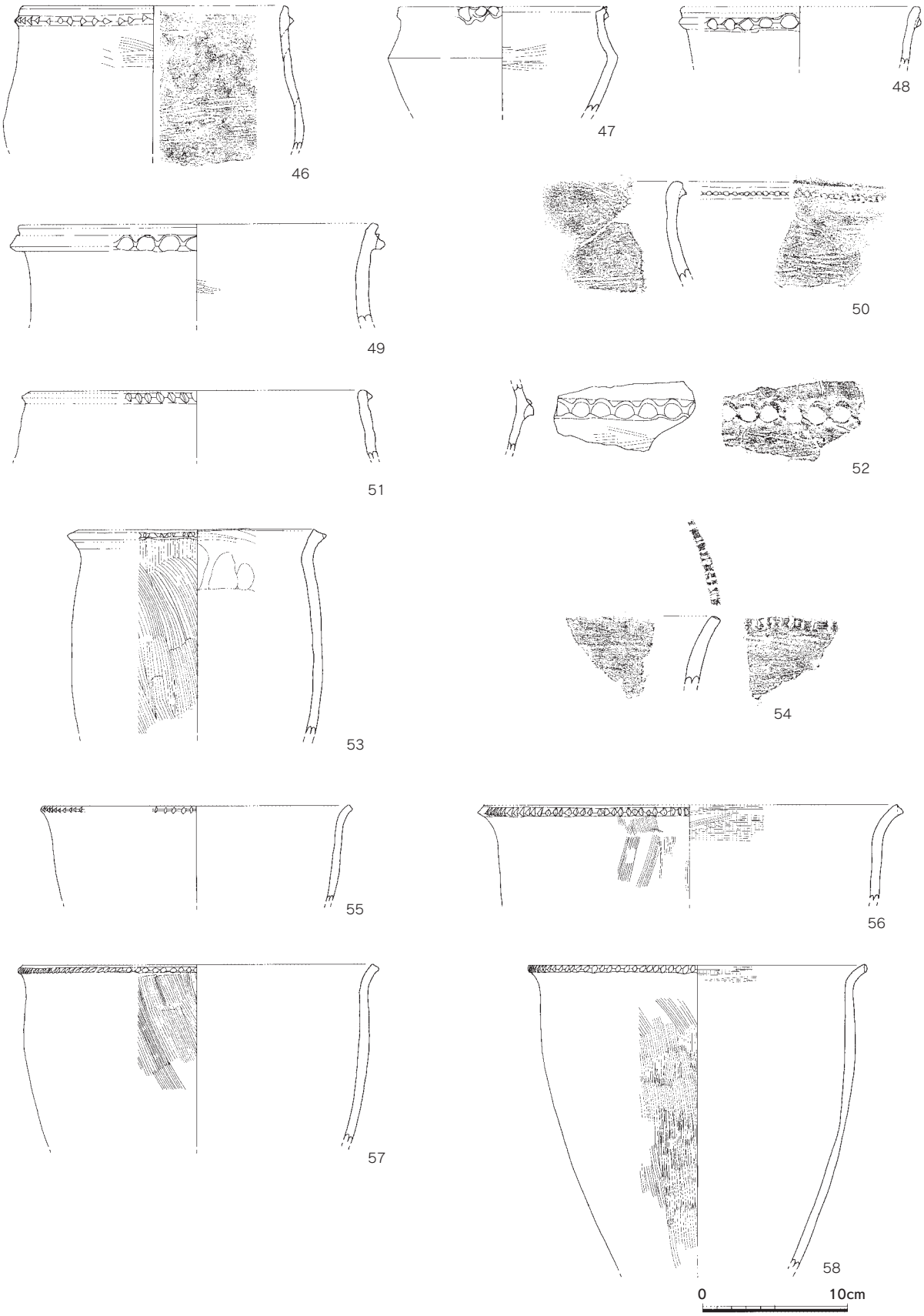


図18　包含層出土土器6（1/4）

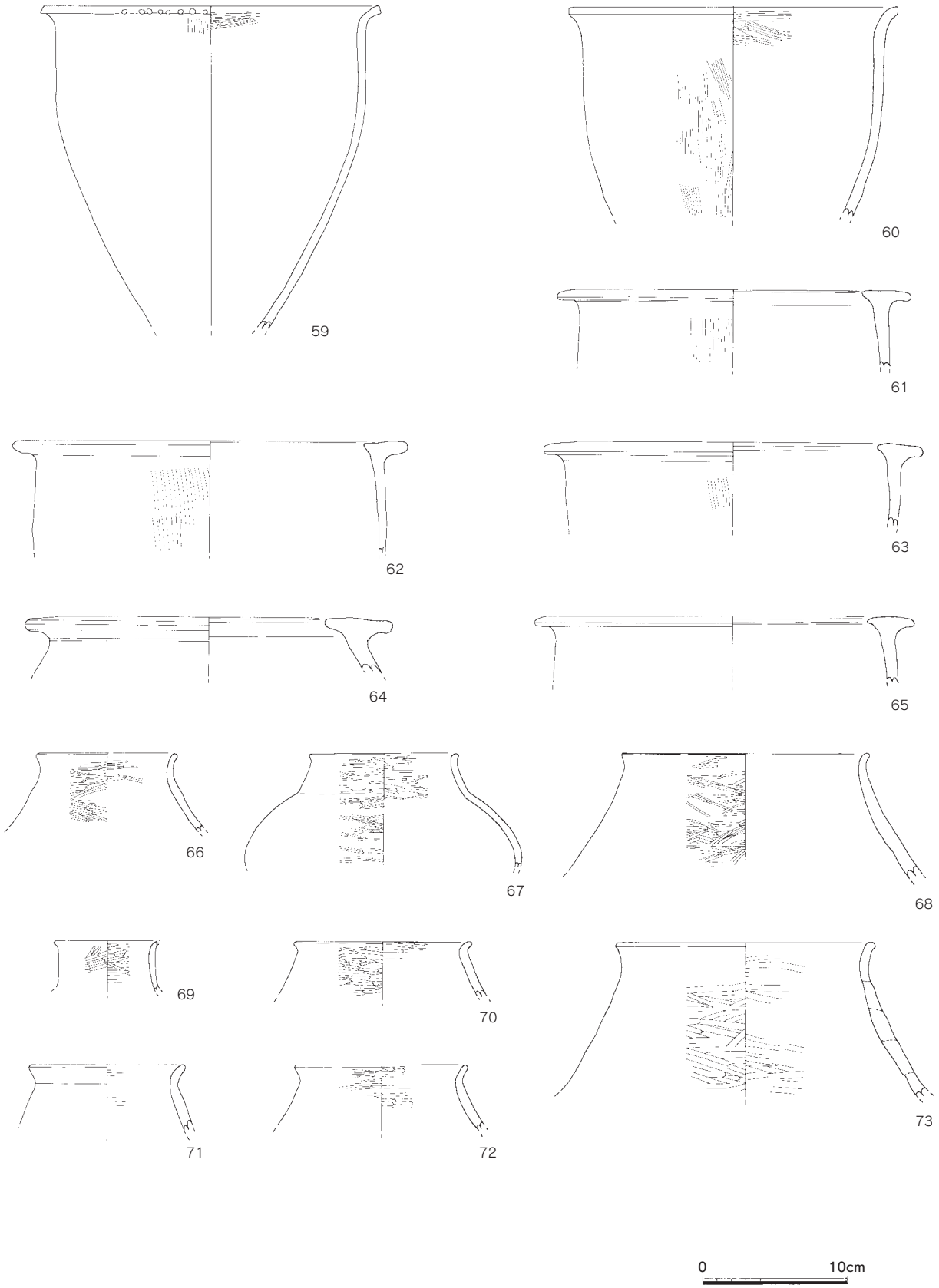


図19　包含層出土土器７（1/4）

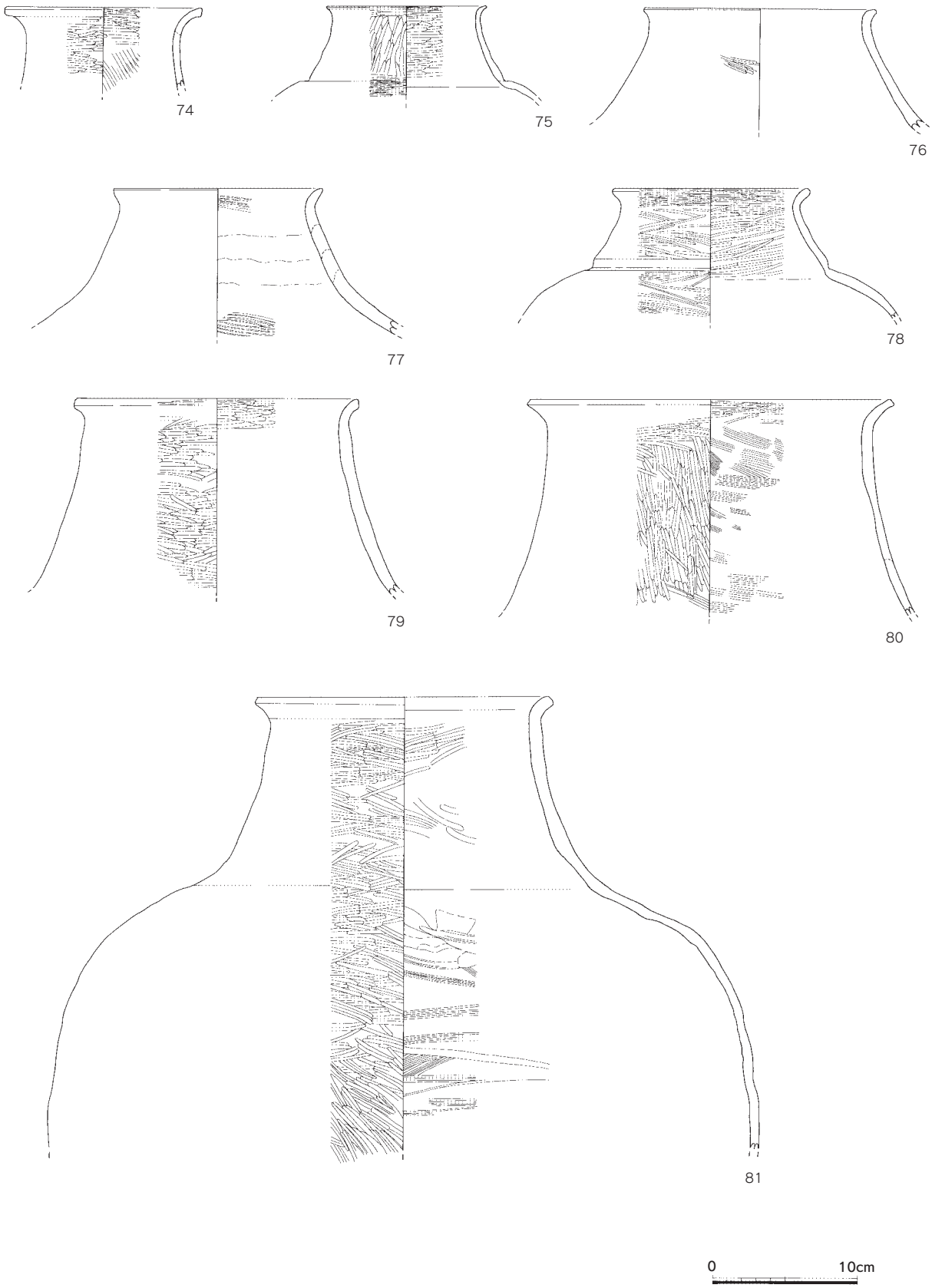


図20　包含層出土土器８（1/4）

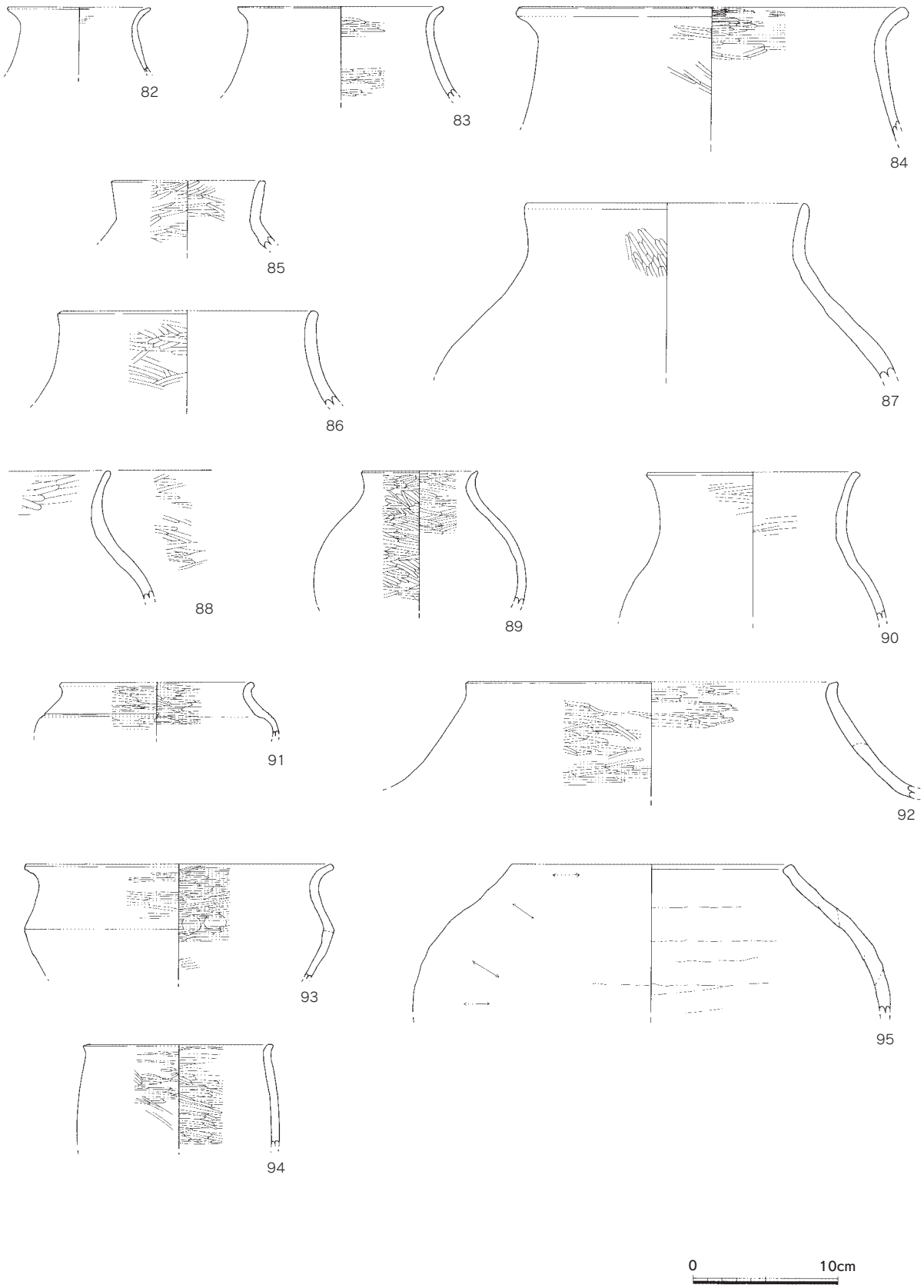


図21　包含層出土土器９（1/4）

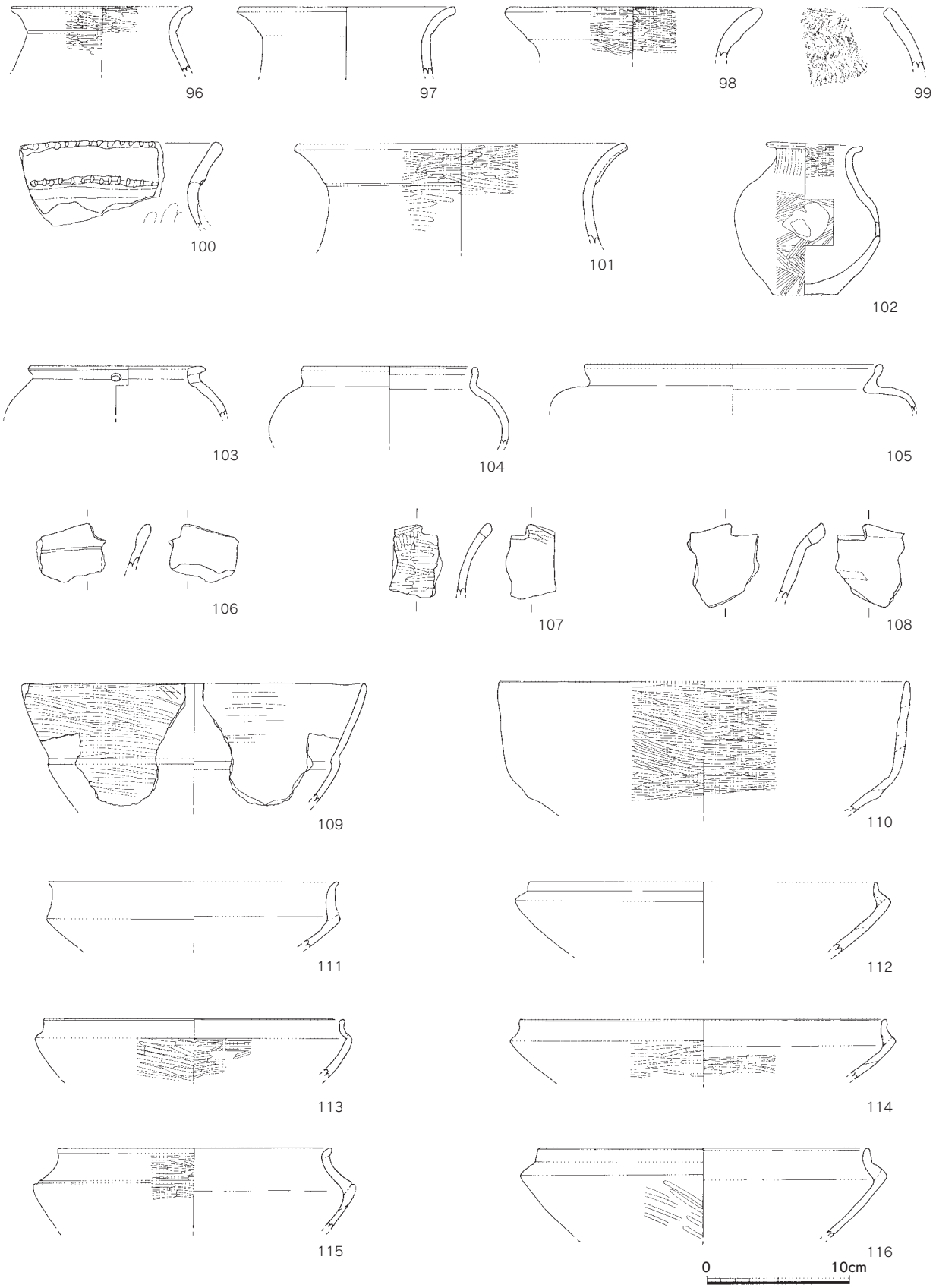


図22　包含層出土土器10（1/4）

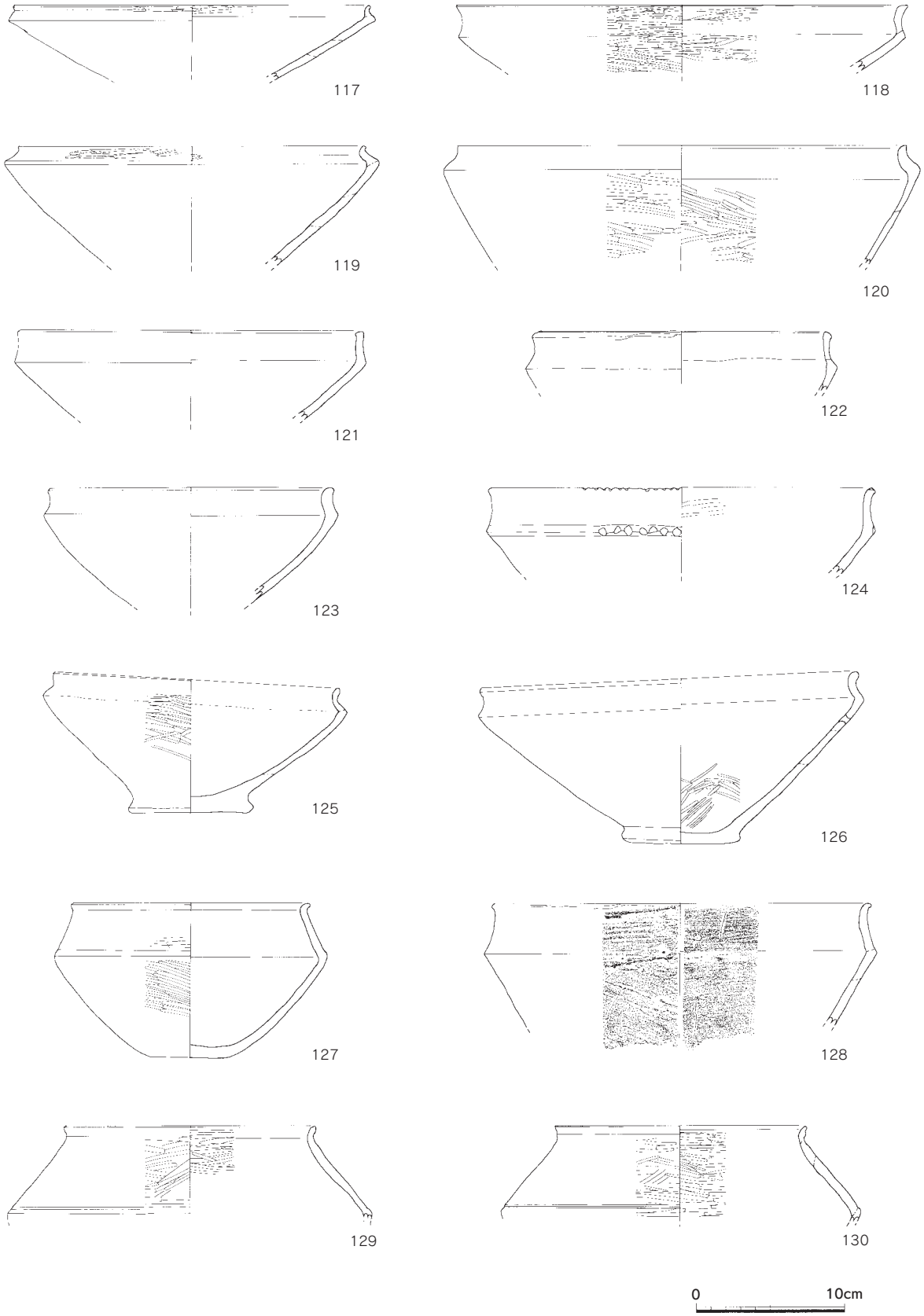


図23　包含層出土土器11（1/4）

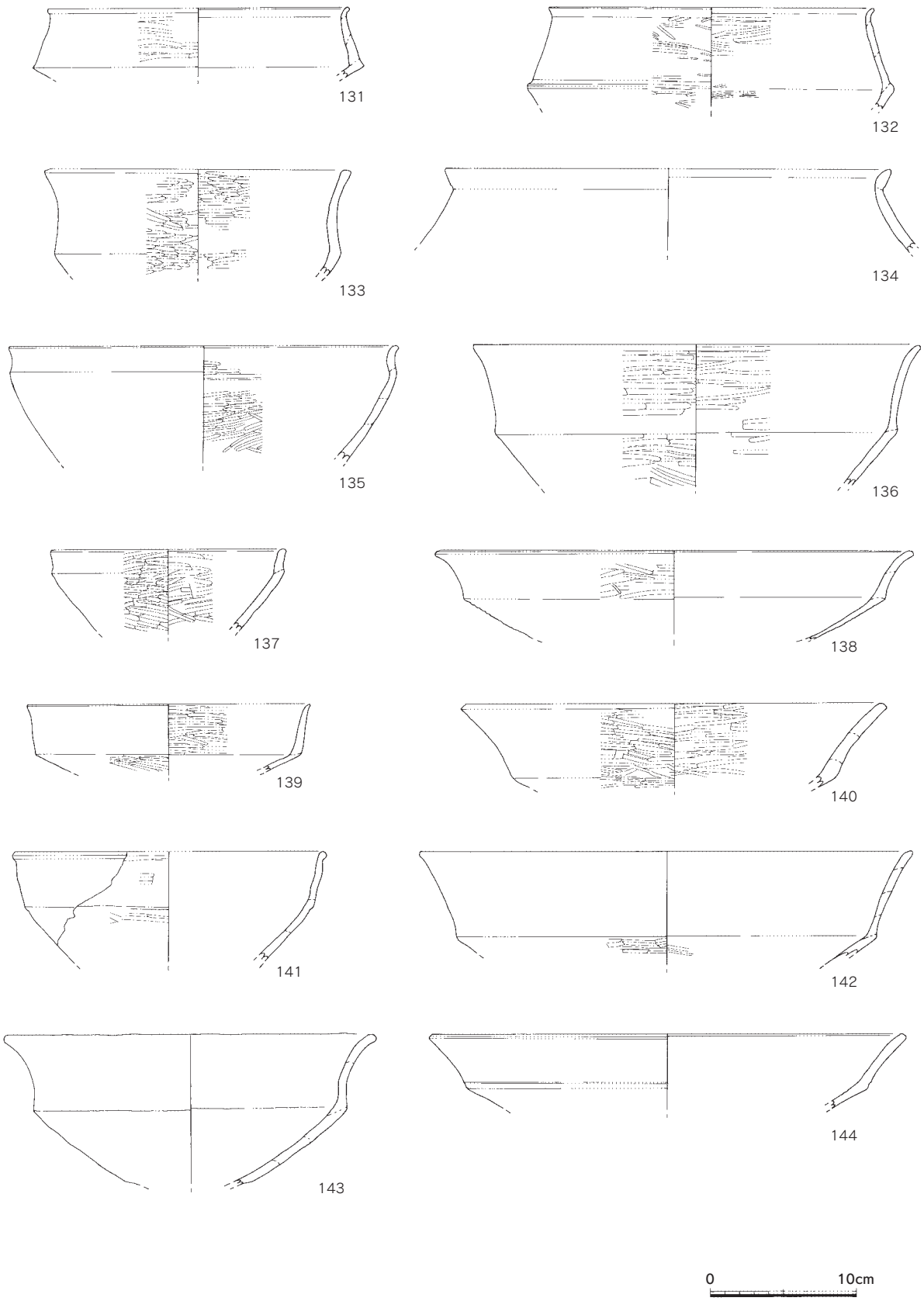


図24　包含層出土土器12（1/4）

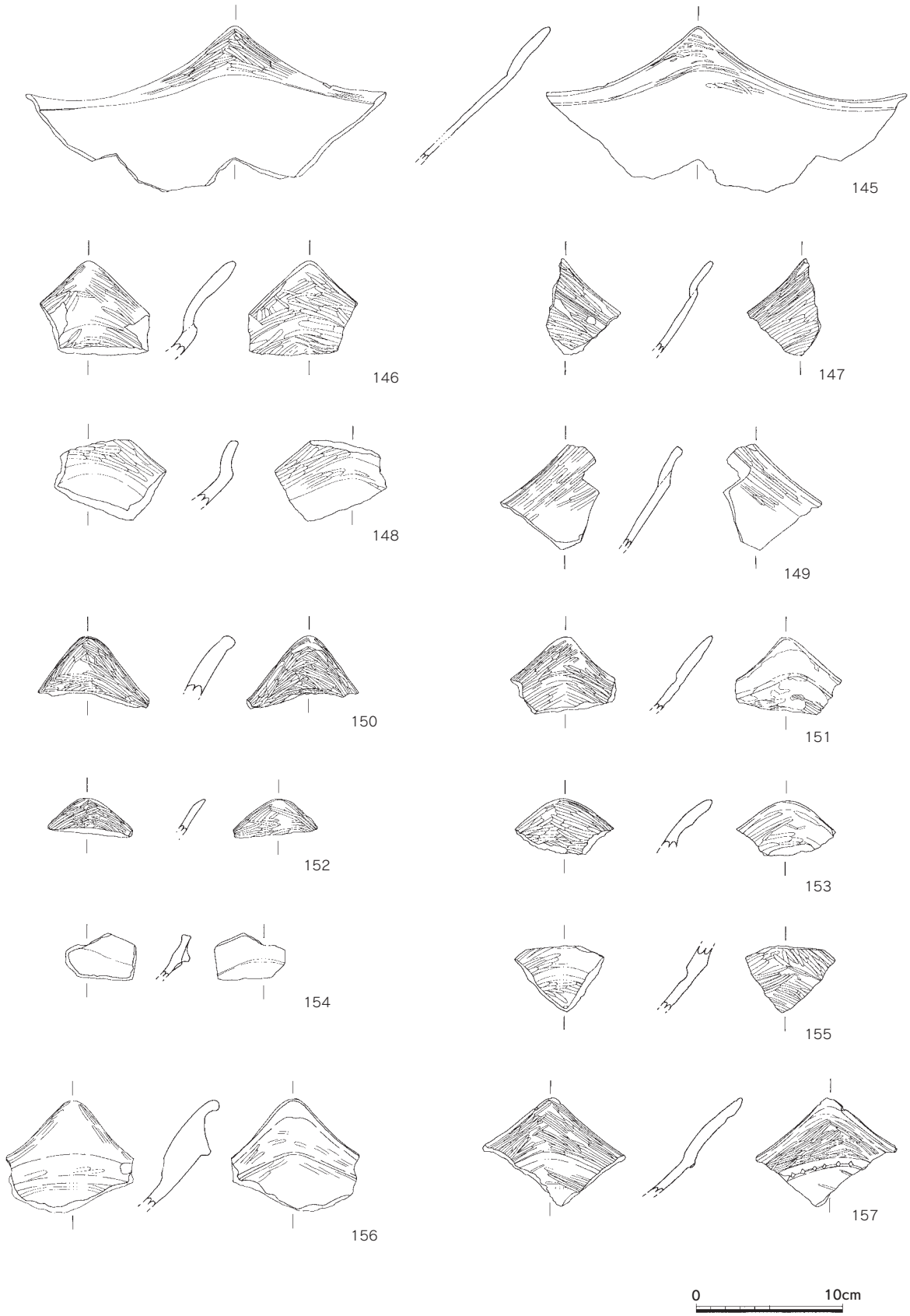


図25　包含層出土土器13（1/4）

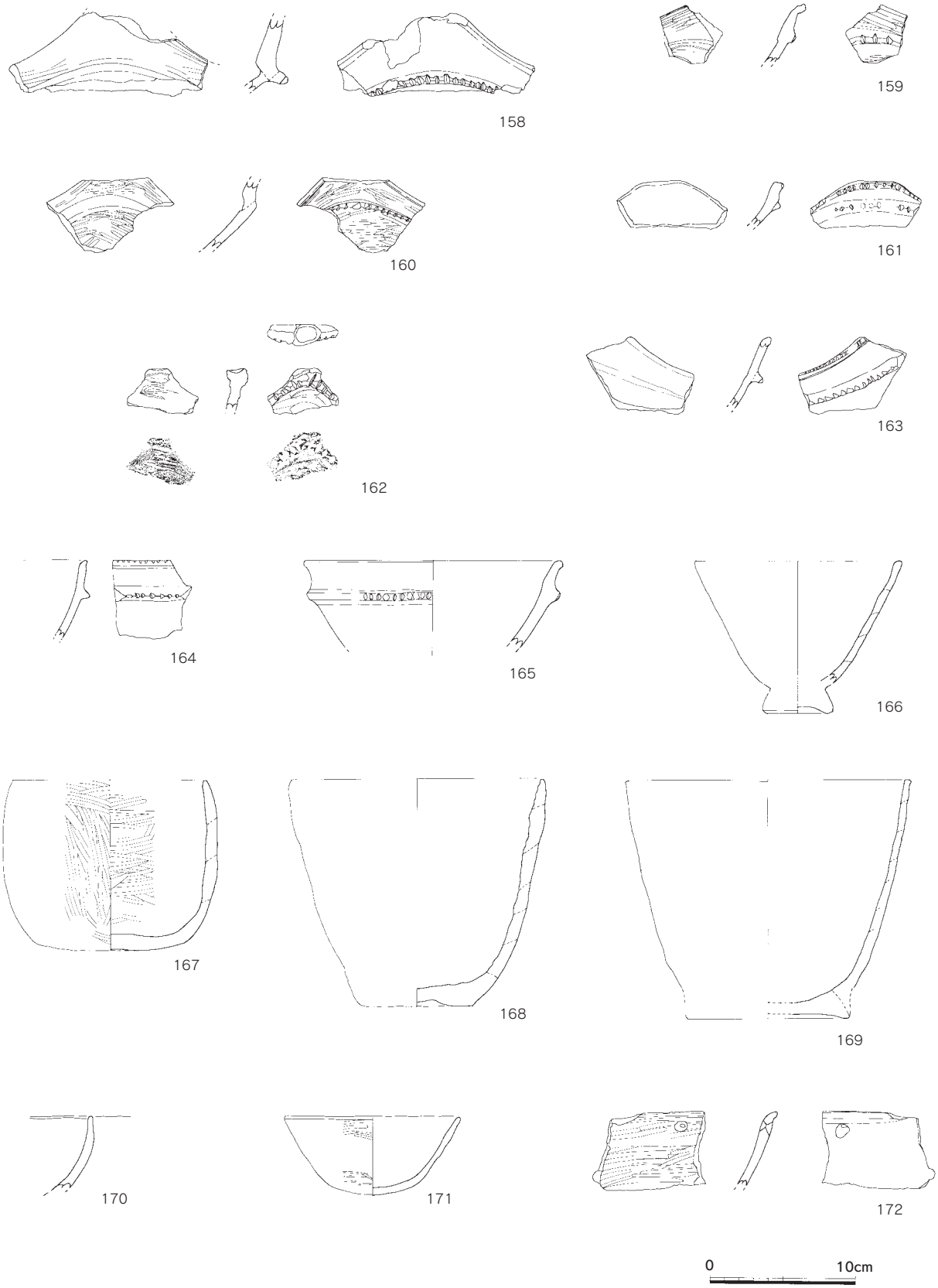


図26　包含層出土土器14（1/4）

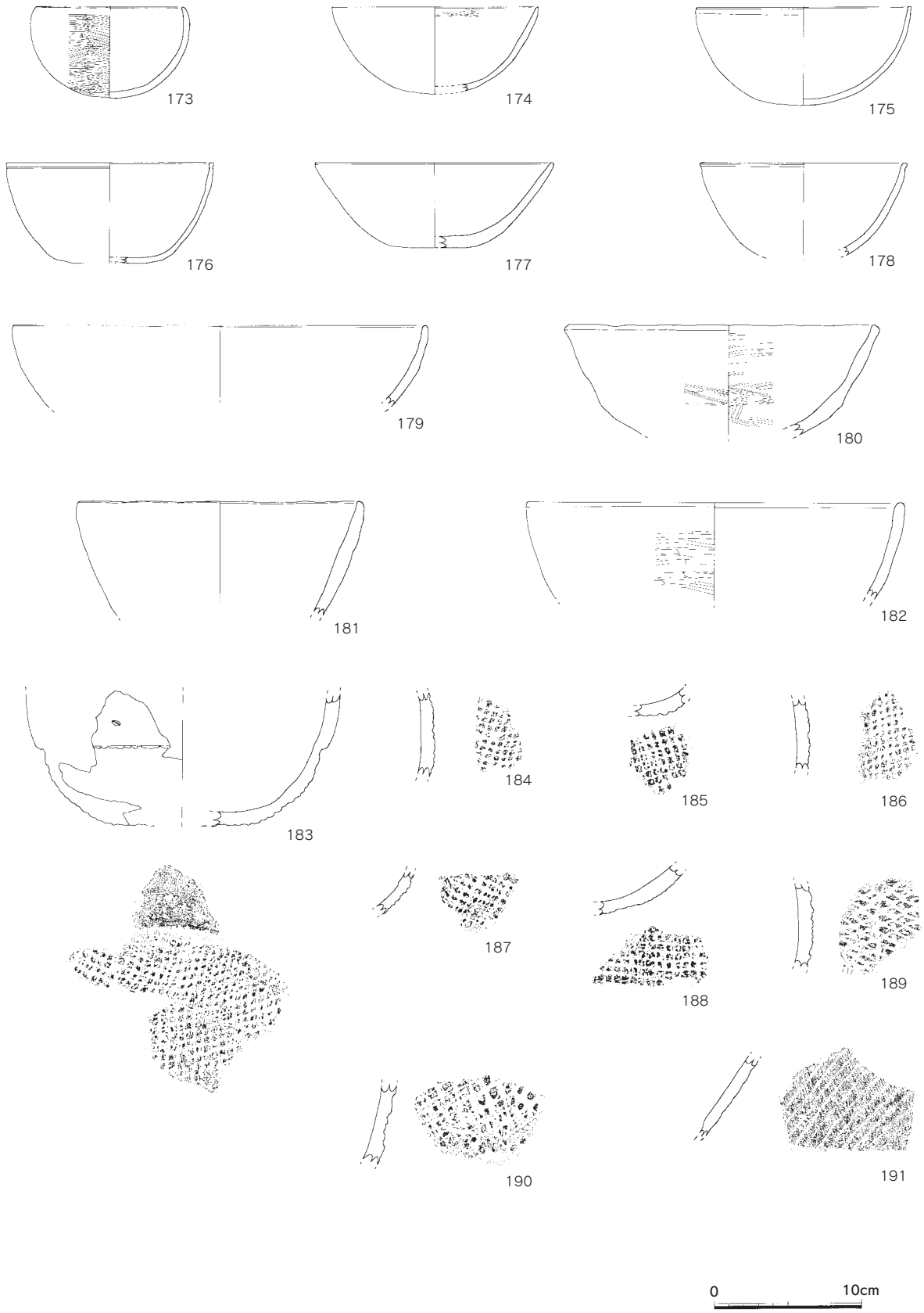


図27　包含層出土土器15（1/4）

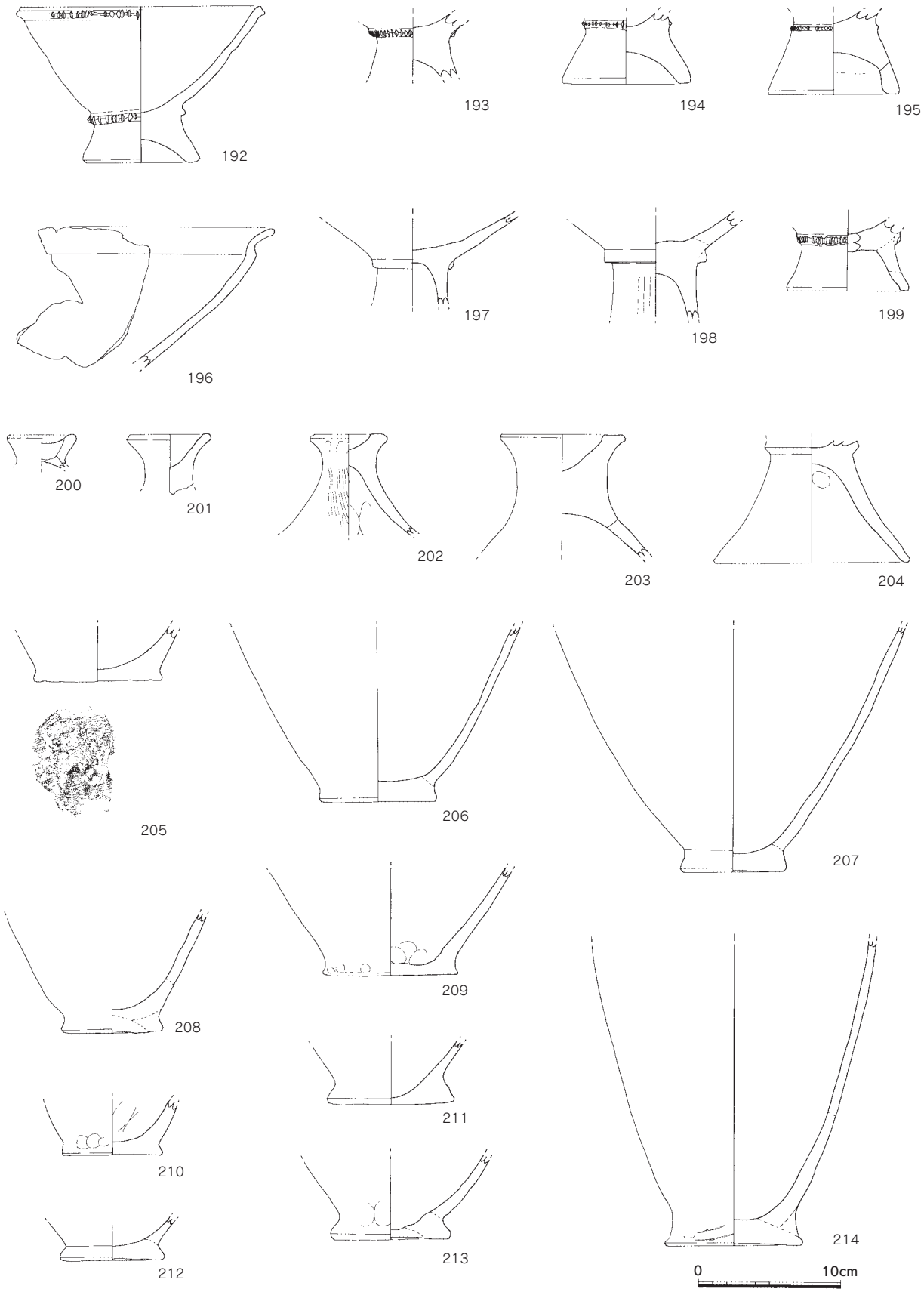


図28　包含層出土土器16（1/4）

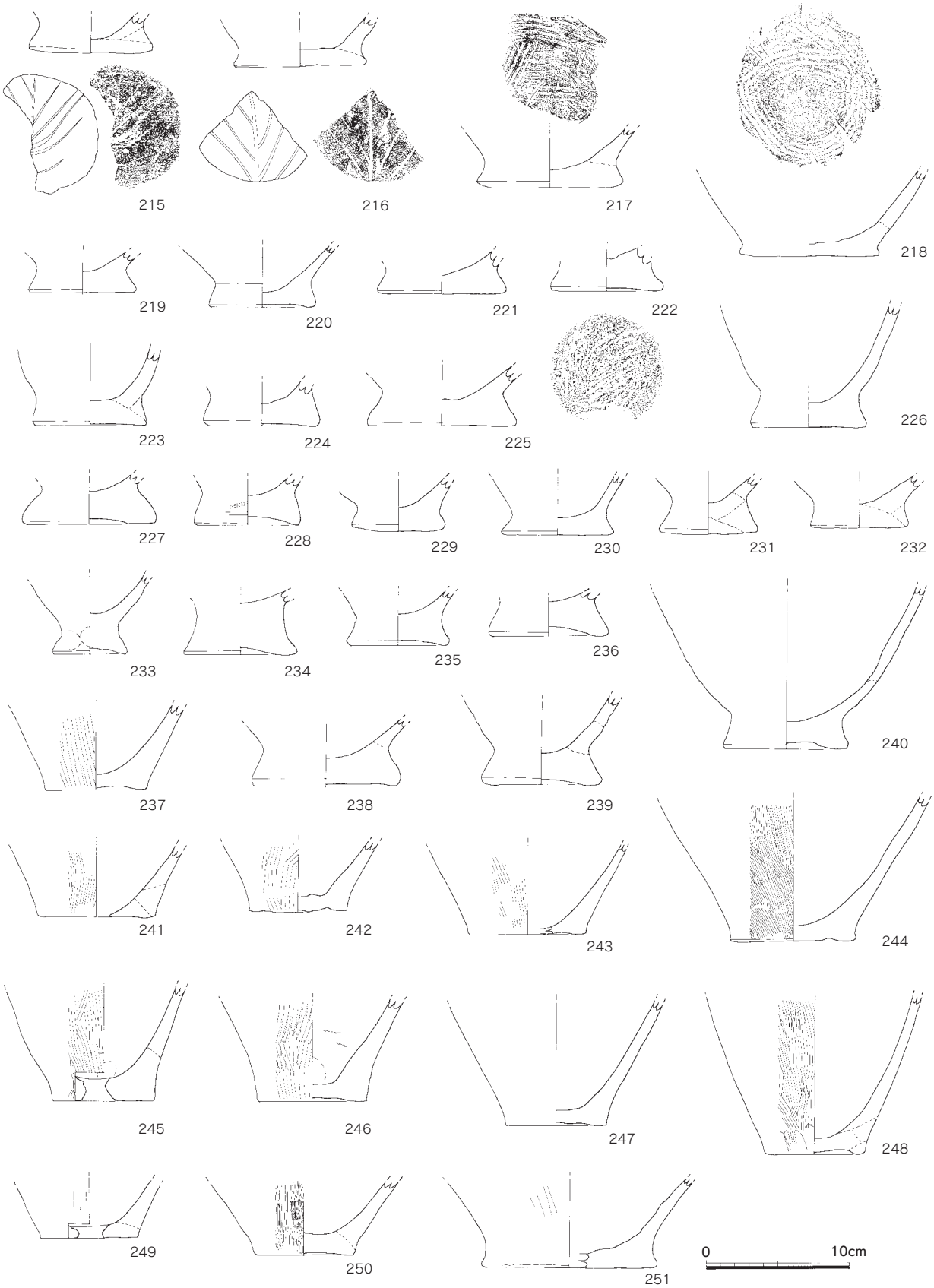


図29　包含層出土土器17（1/4）

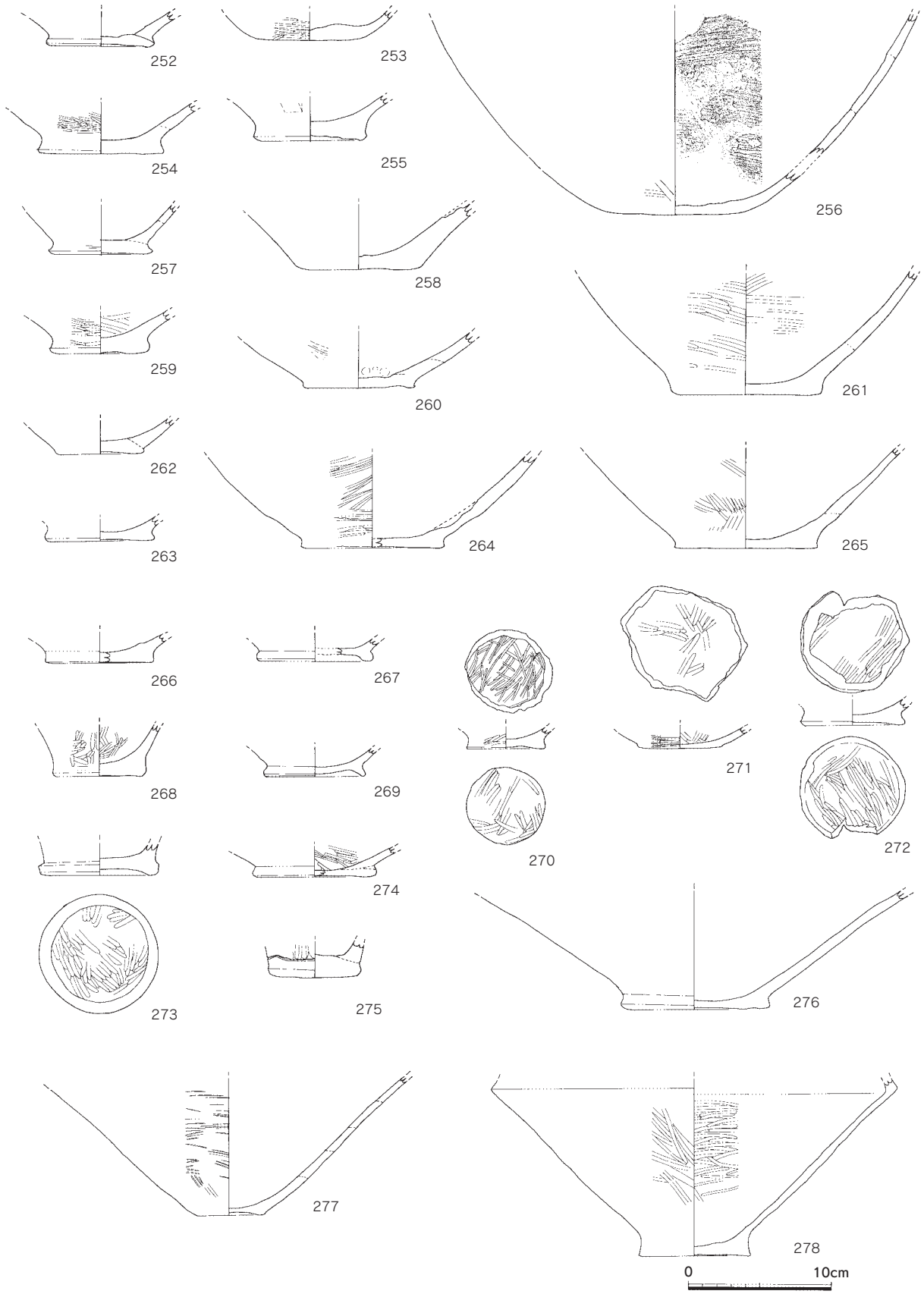


図30　包含層出土土器18（1/4）

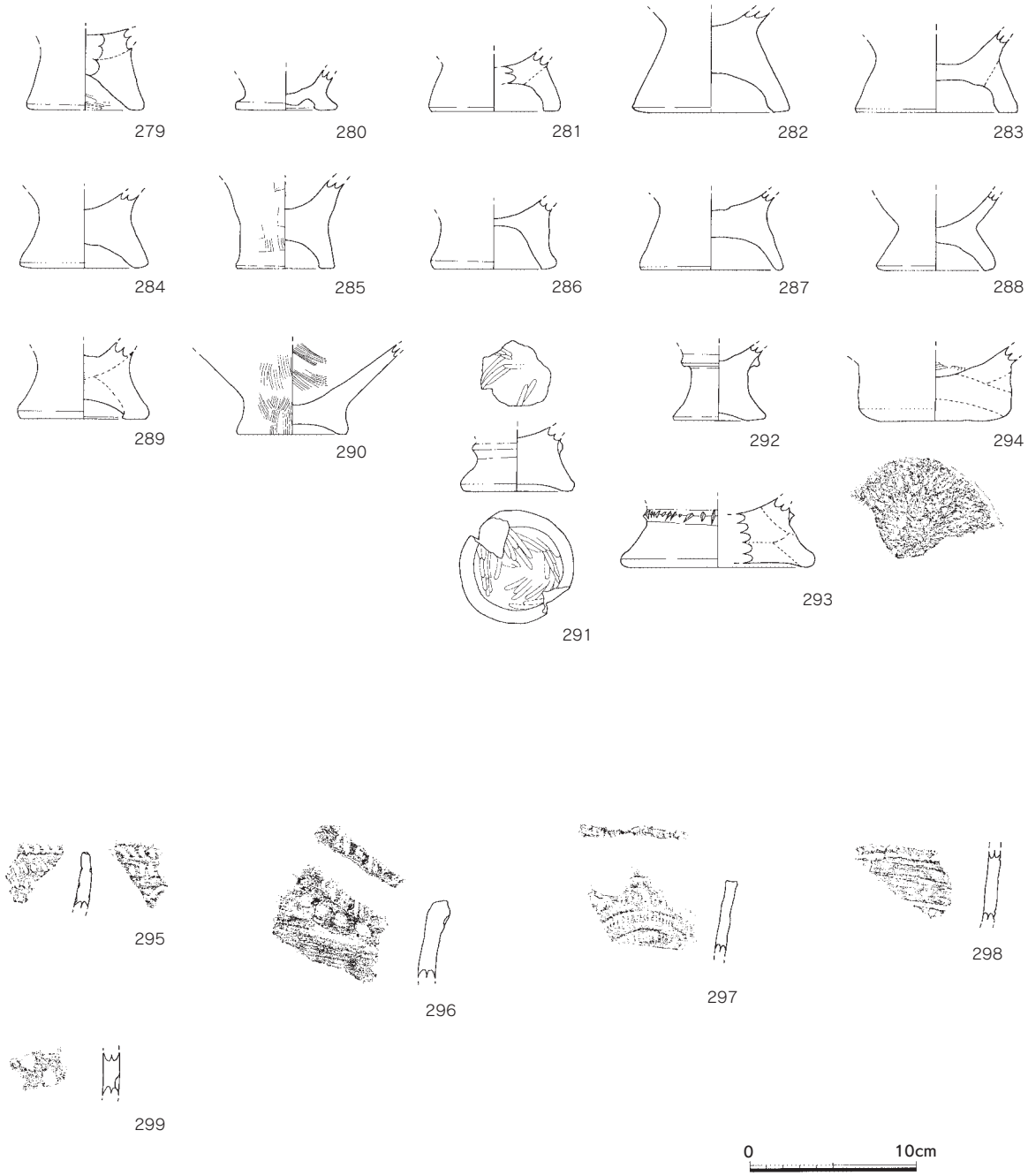


図31　包含層出土土器19（1/4）

図32　包含層出土石器１（1/3）

図33　包含層出土石器２（1/3）

図34　包含層出土石器３（1/3）

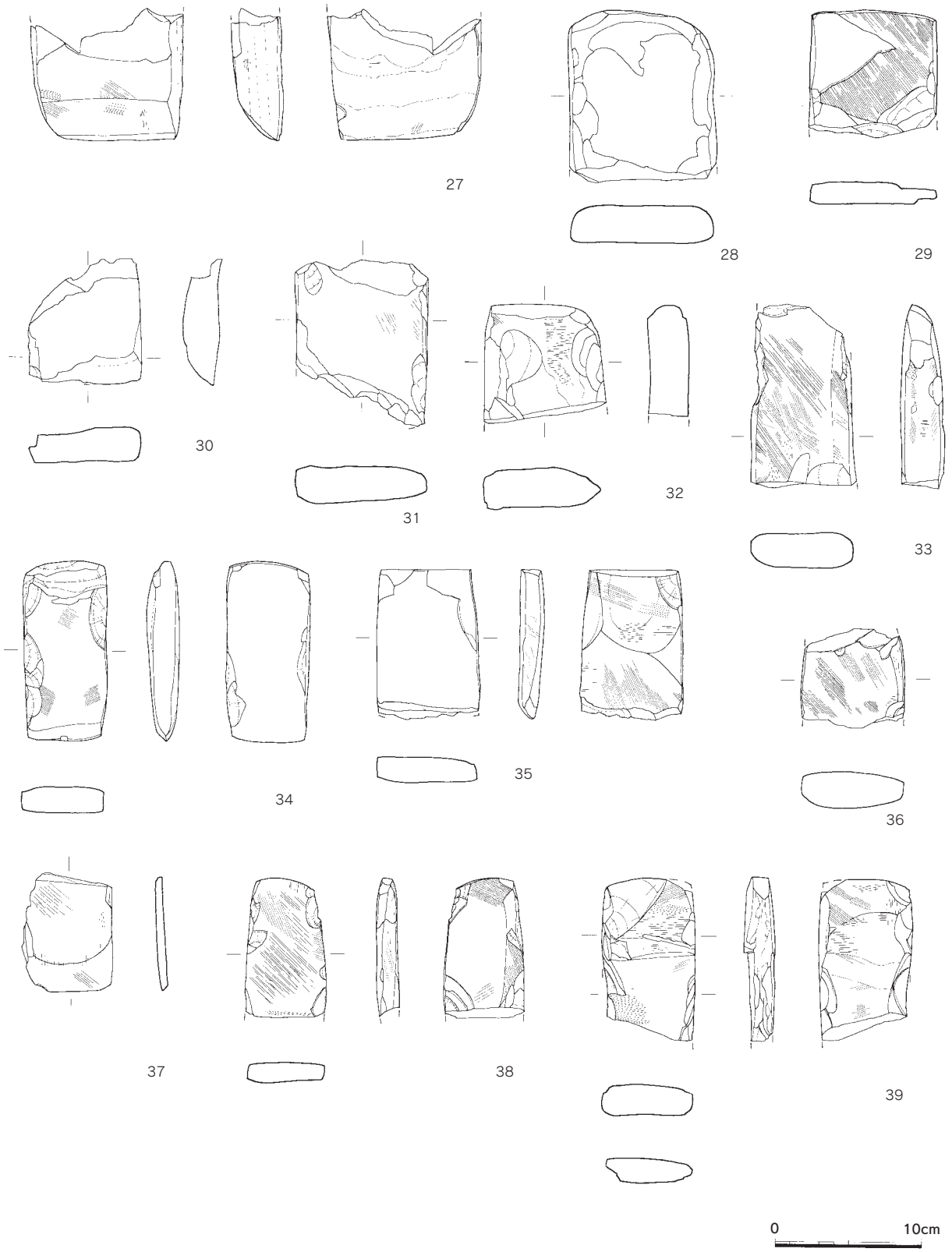


図35　包含層出土石器４（1/4）

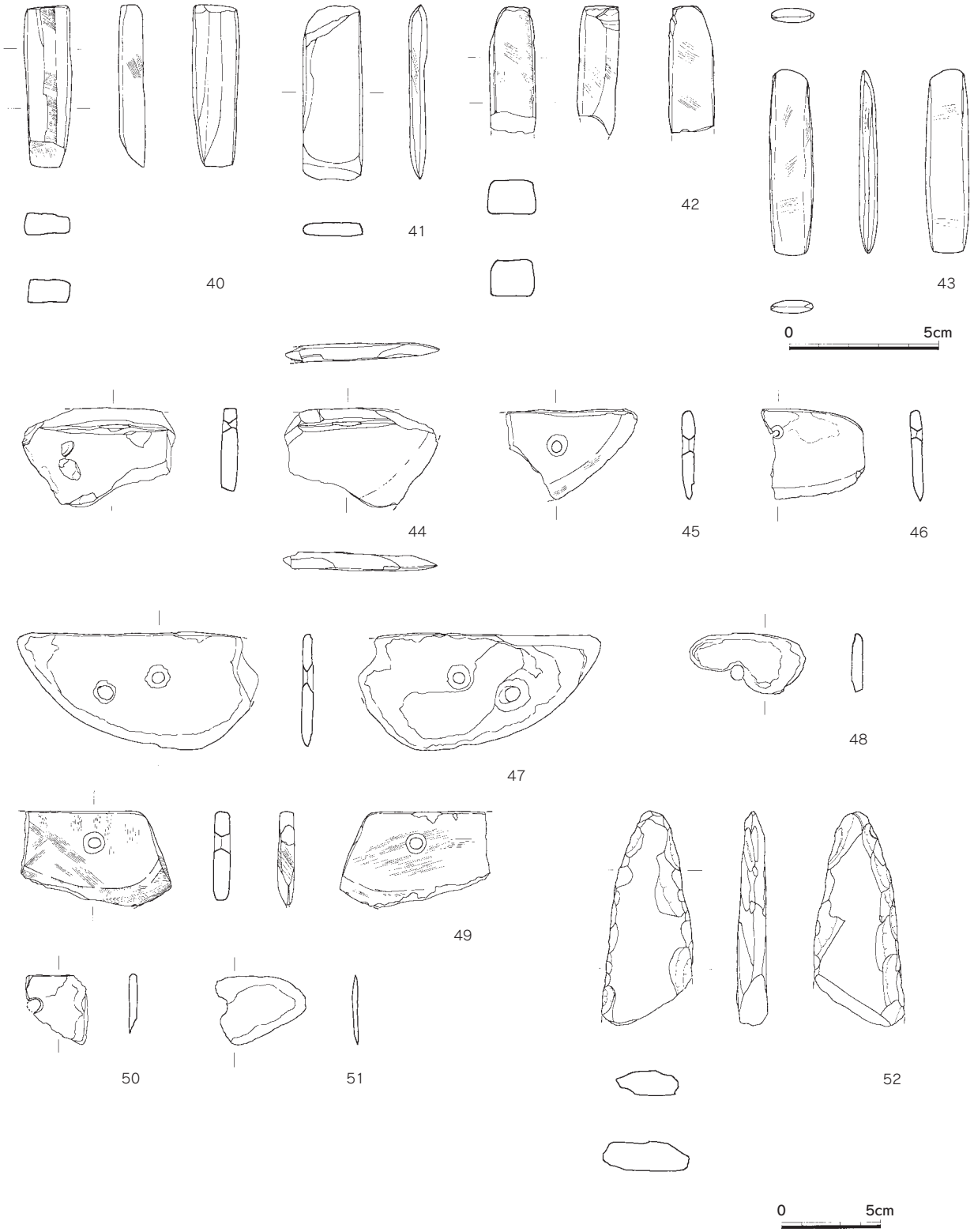


図36　包含層出土石器５　40～43（1/2）、47～52（1/3）

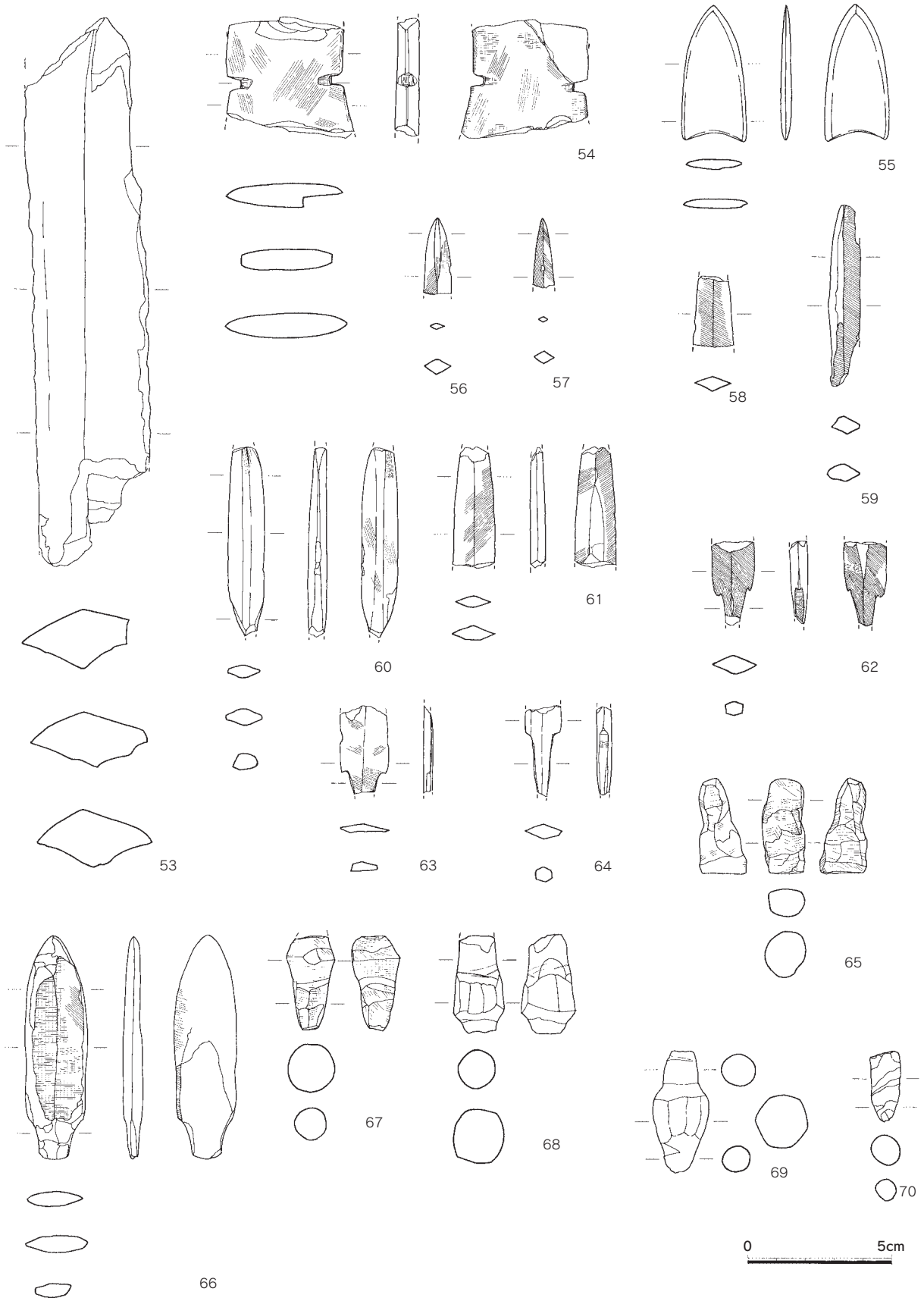


図37　包含層出土石器６（1/2）

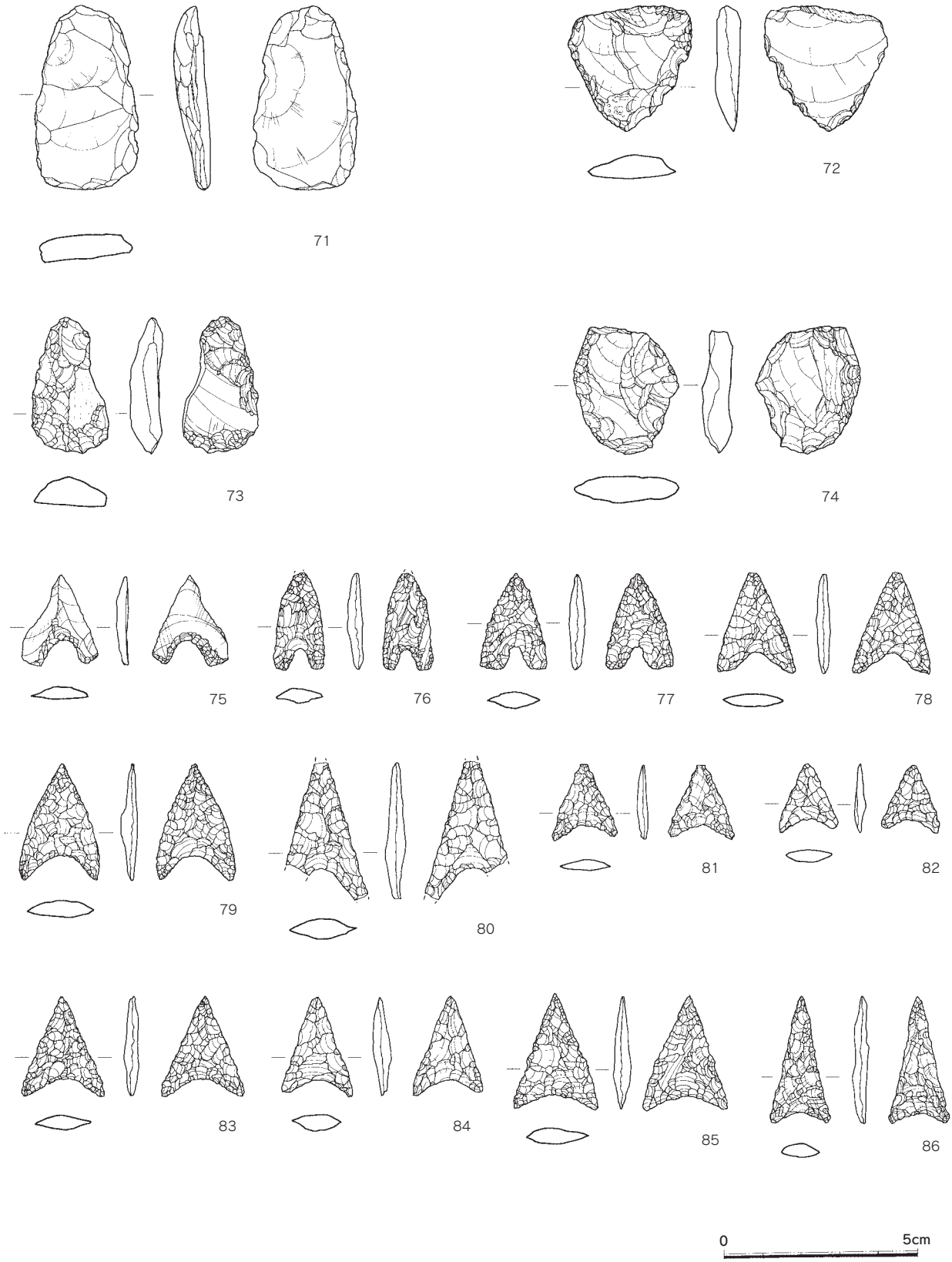


図38　包含層出土石器７（2/3）

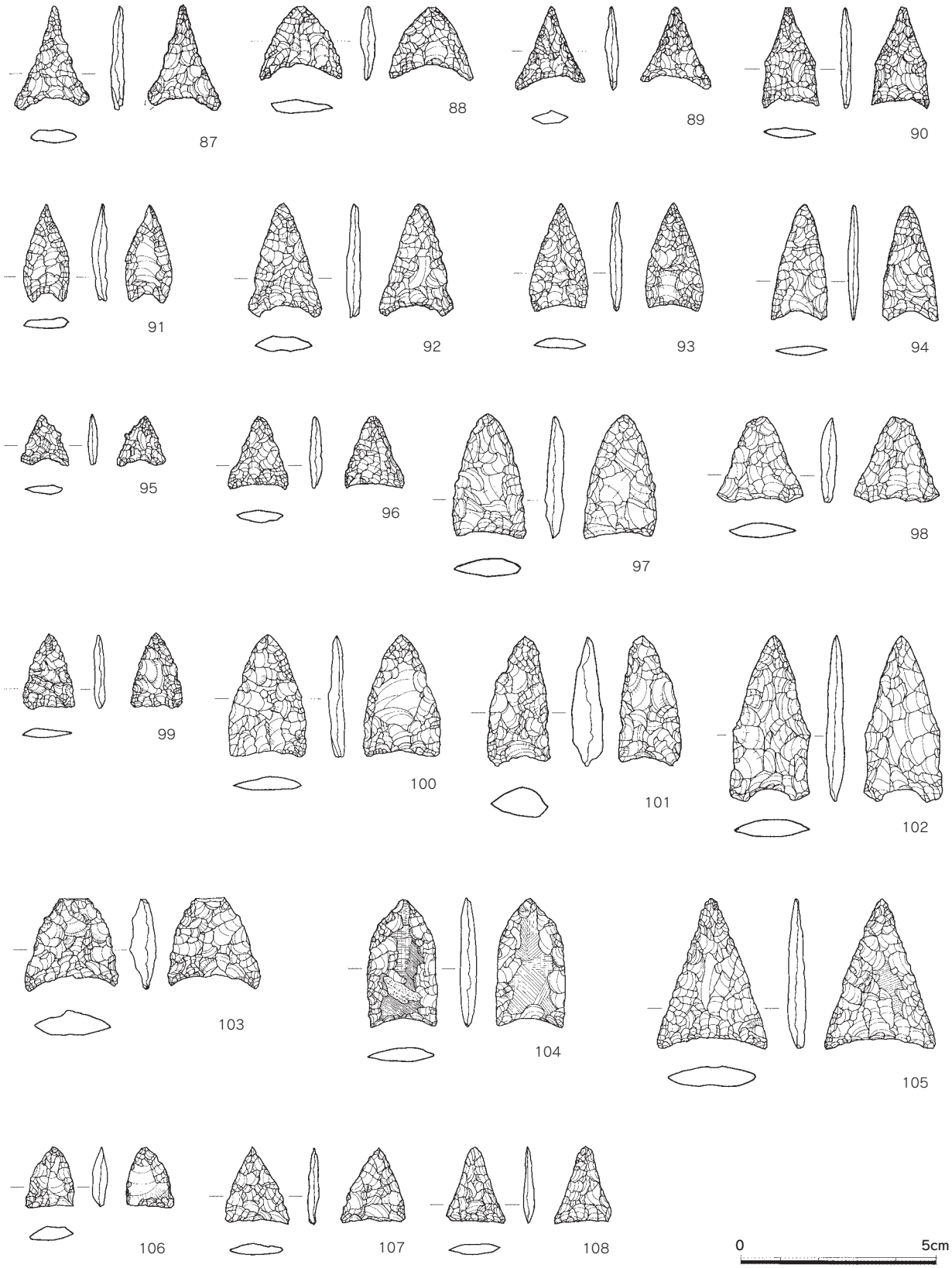


図39　包含層出土石器８（2/3）

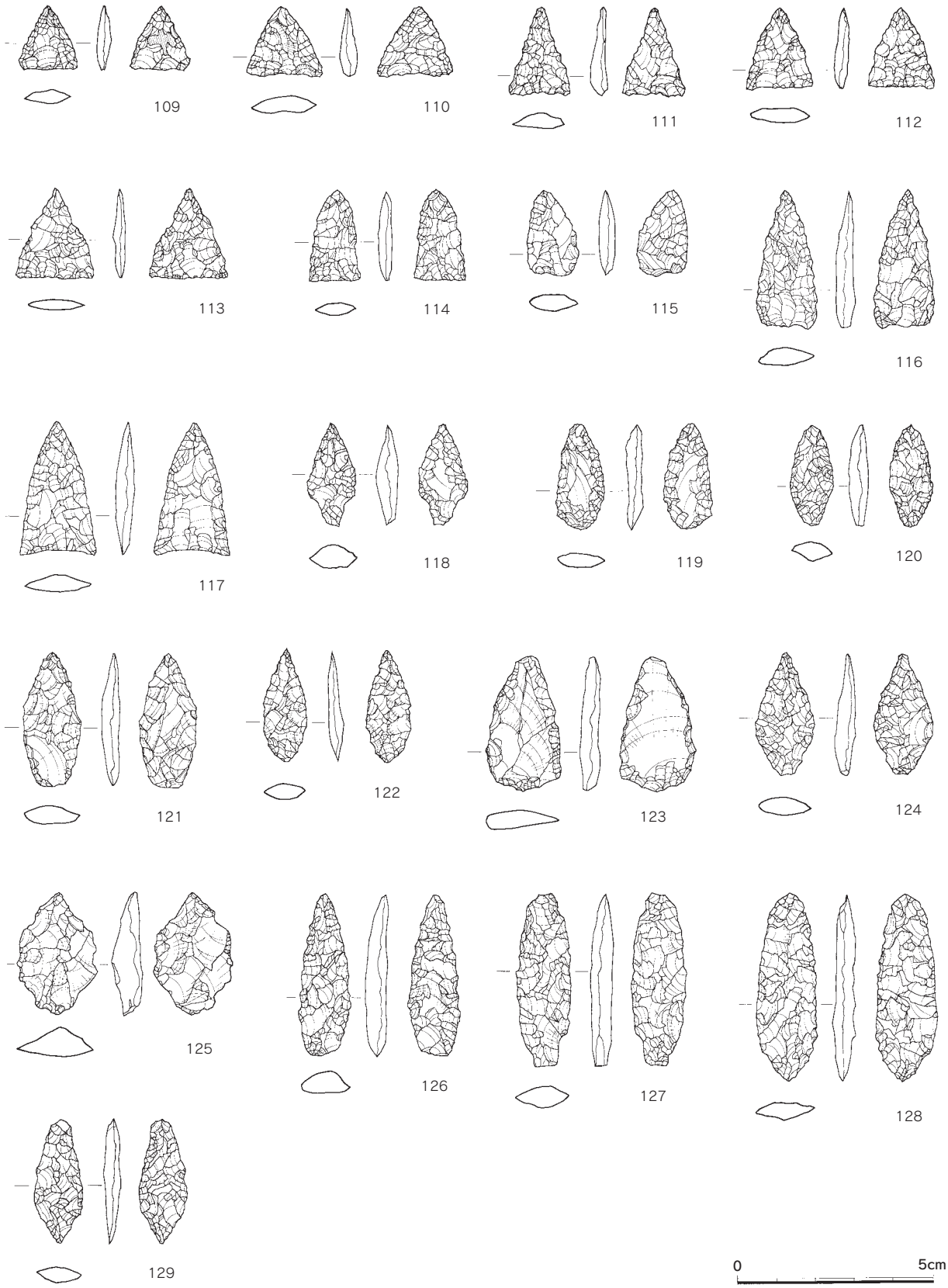


図40　包含層出土石器９（2/3）

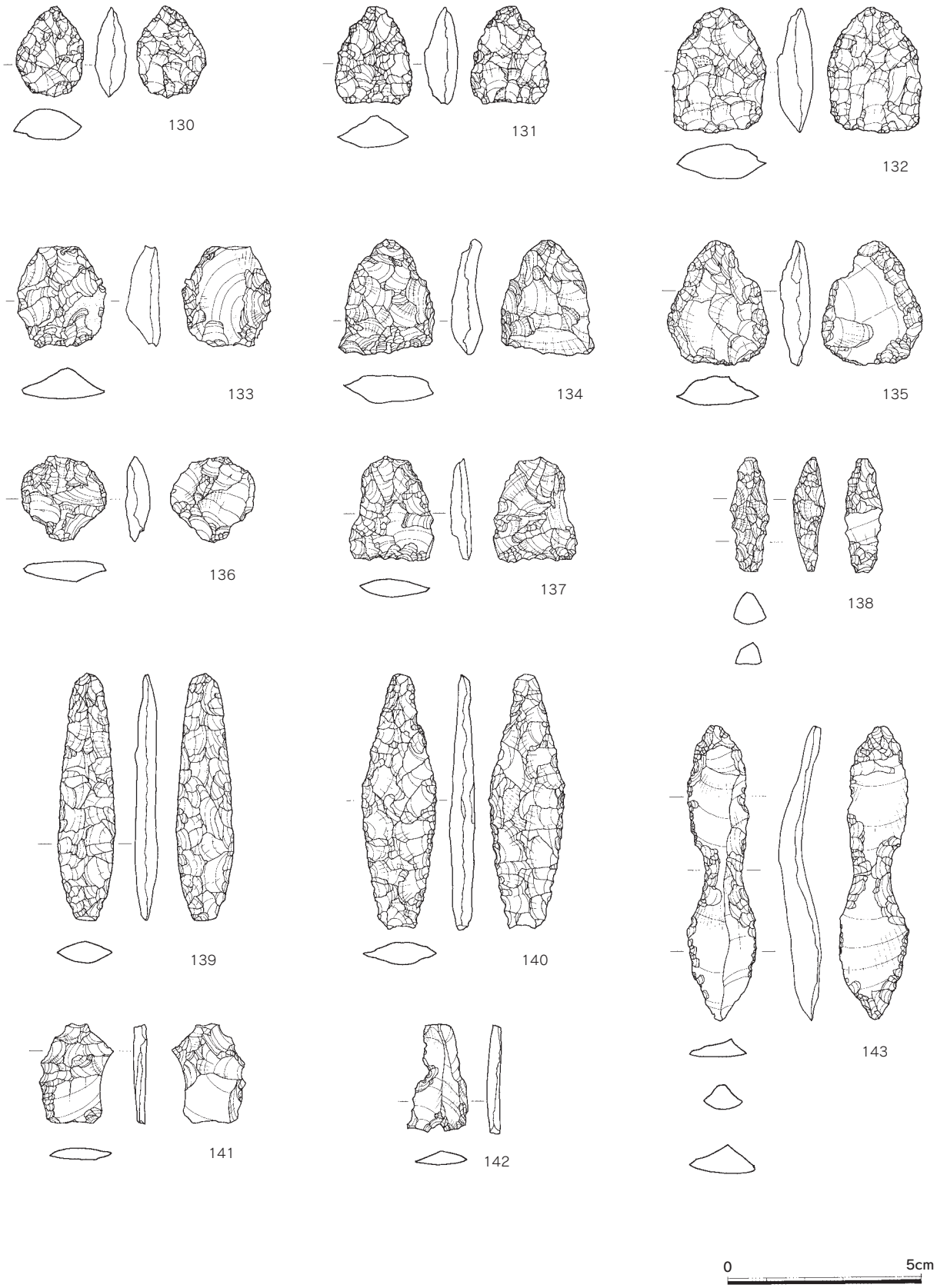


図41　包含層出土石器10（2/3）

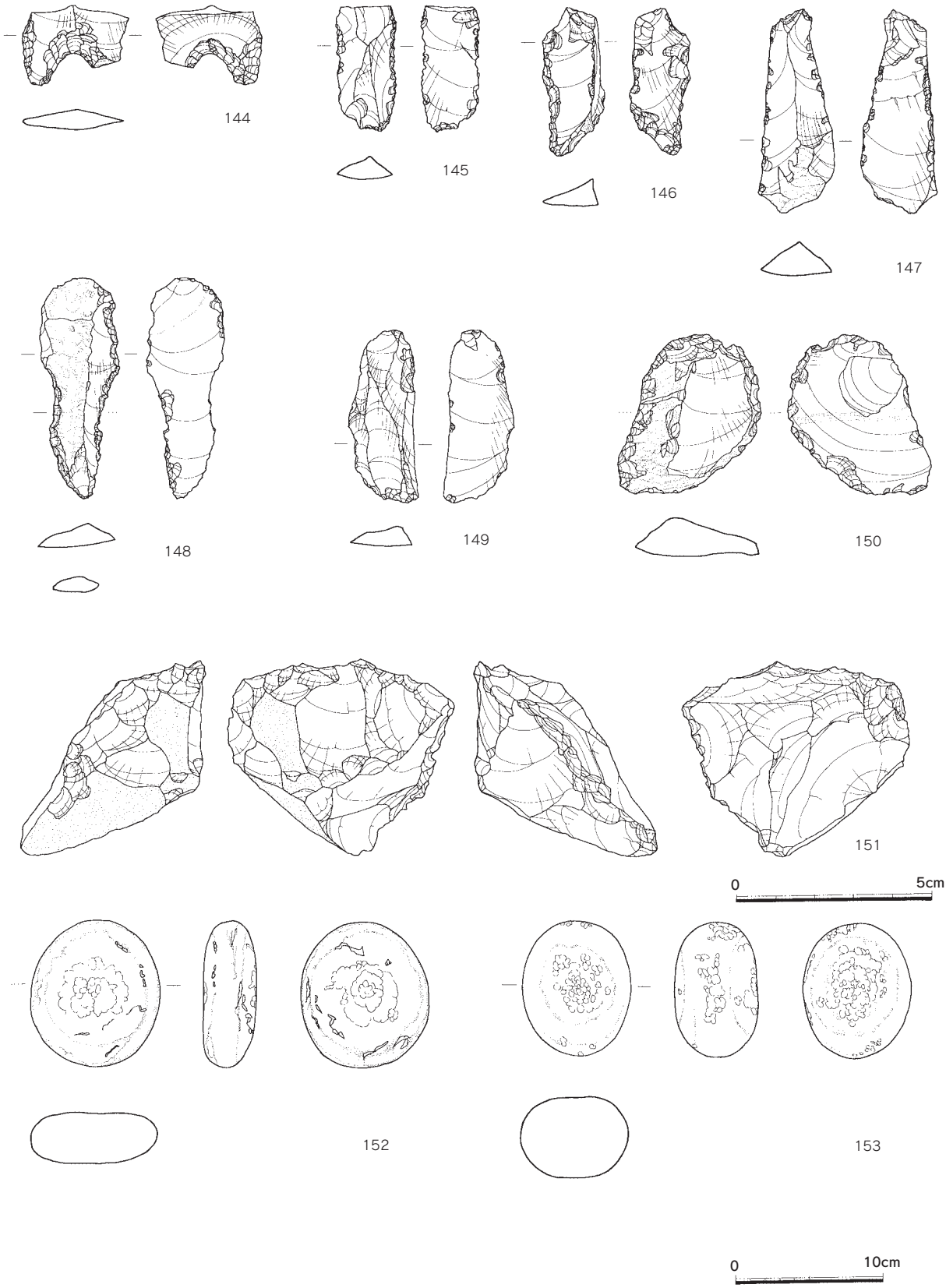


図42　包含層出土石器11　44～51（2/3）、52･53（1/4）

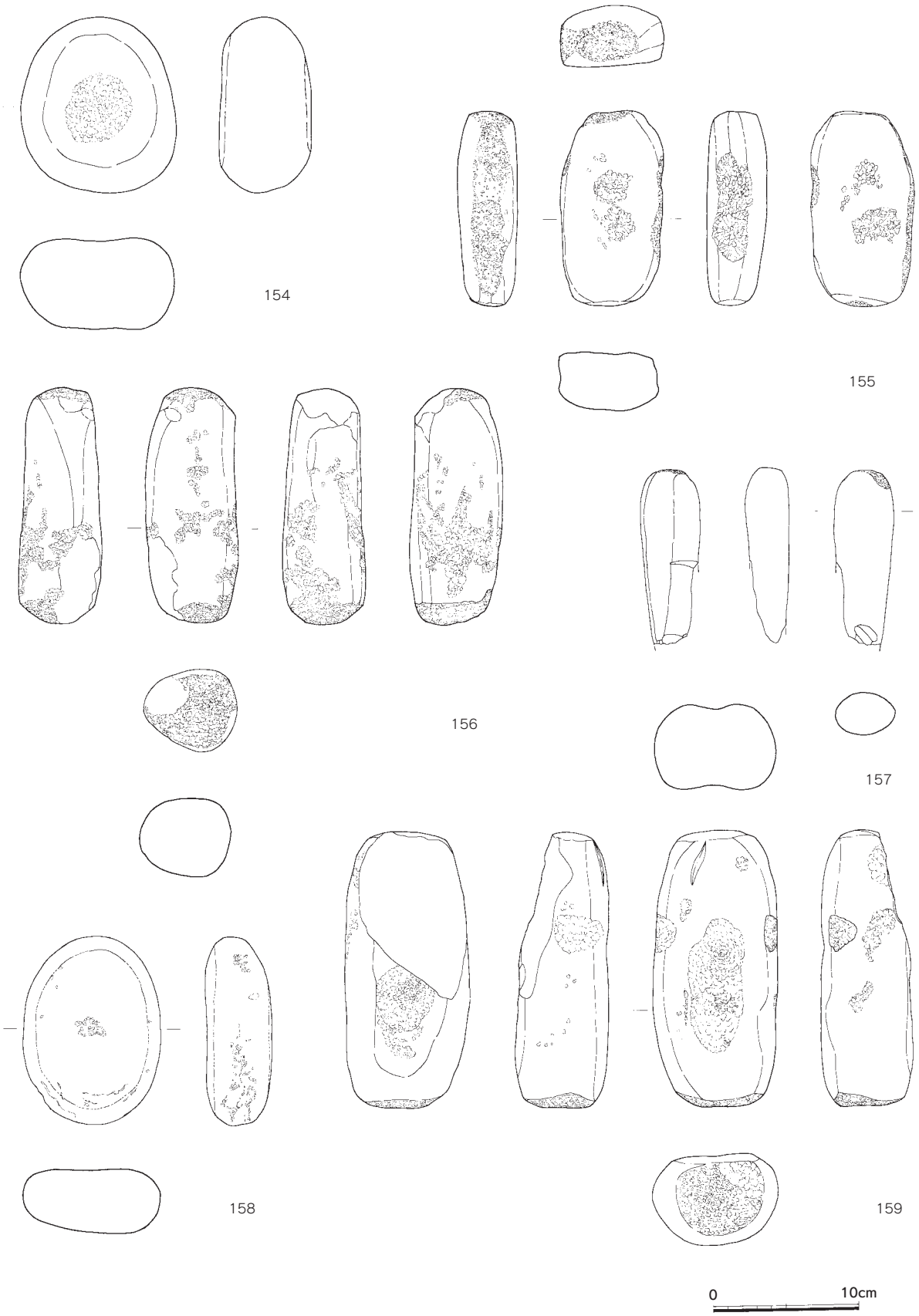


図43　包含層出土石器12（1/4）

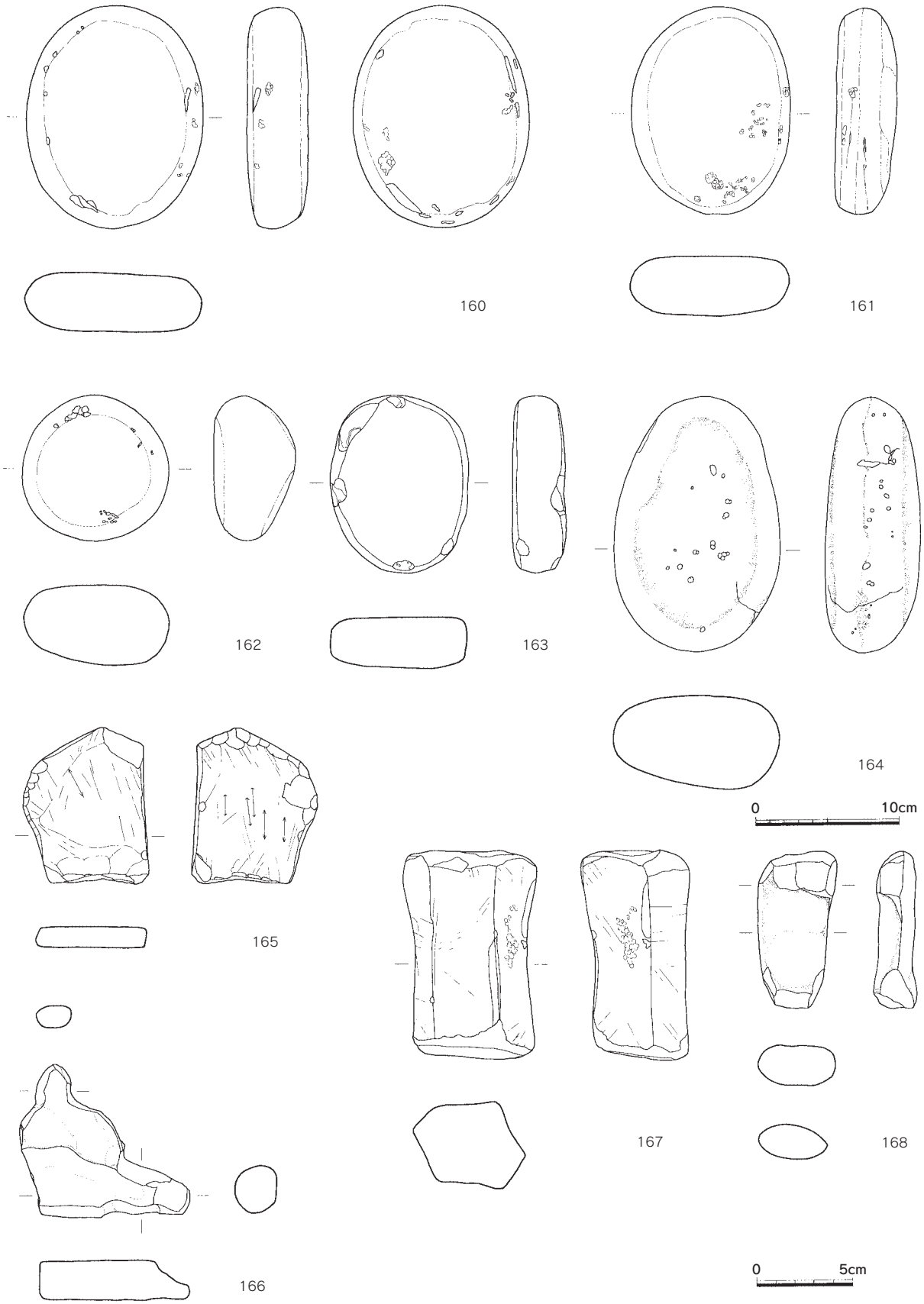


図44　包含層出土石器13　160～164（1/4）、163～166（1/3）

図45　包含層出土石器14　169（1/4）、170～178（1/3）、180（1/3）、181（1/6）

C，土製品・玉類（図46～48）

土製品は、紡錘車36点（1～36）、土錘４点（37～40）、投弾５点（41～45）、不明品３点（46～48）が出土した。玉類は勾玉１点（49）、小玉１点（50）が出土した。ほとんどは包含層からの出土であり、共伴遺物より弥生時代前期末から中期後半までのものとみられる。

紡錘車は形態よりＡ類・Ｂ類のふたつに大別できる。Ａ類は孔周辺部が最も厚く、周縁にいくにつれ厚みがなくなるもの、Ｂは孔から周縁部までほぼ一定の厚みのものである。

Ａ類は10点出土した（１～10）。調整方法よりＡ１・Ａ２類に分けられる。Ａ１類は５点出土した（１～５）。全て上面・下面とも孔周縁部が突起する。側面はほとんど調整されないため丸みを帯びる。表面にはナデ調整を施すが、指頭圧痕が残り凸凹がある。大きさはさまざまで、径3.75cmから6.4cmの間におさまる（図46参照）。４はＡ１類のなかでは径が最大で、表面に草本類の圧痕が付く。

Ａ２類は５点出土した（図６～10）。側面をつくり出し、孔周辺の突起を平坦に整えるなど、Ａ１類よりも丁寧につくっている。大きさはＡ１類同様さまざまである。６,８,９は表面にミガキ調整を施す。６は完形品で、側面は丸みを帯びる。７は焼成不良のため、表面の調整は不明である。

10は孔から周縁部にかけて厚みを減じるが、側面を平坦に作り出す。上面には孔を中心に同心円状に沈線をめぐらせ、側面にも稜と平行に沈線を２条めぐらせている。

Ｂ類は26点出土した（11～36）。径は3.2～5.8cm、厚さは0.9～2.05cmの間におさまり、とくに径4.0cm～4.6cm、厚さ1.2～1.7cmの範囲に遺物が集中する。11～15は孔周縁が突起し、Ｂ類の中でもＡに近い形態である。12の表面はナデ調整でミガキの痕跡はみられないが、かなり滑らかである。16と17は上面孔周辺が隆起し、下面孔周辺は逆に凹む。16はミガキを施した精製品である。上面の孔周辺は一部欠ける。17は側面の一部と下面に、繊維状の植物の圧痕がつく。18と19は他のものと比較して、径に対して厚さが薄い。20は他と比較して、厚さが2.05cmと厚い。径を復元すると、5.5～6.0cm程度の大きさにおさまり、Ｂ類のなかでは最大になるとみられる。21～34は厚みがあり、かつ径が小さめである。ちょうど散布図の集中部分にほぼ該当する。22～25は、上面のみ孔周縁が突起し、下面は平坦である。27は孔が中央よりわずかに外れ、上・下面とも孔の周辺が欠ける。22は側面に成形時のものと見られるひびがはいり、

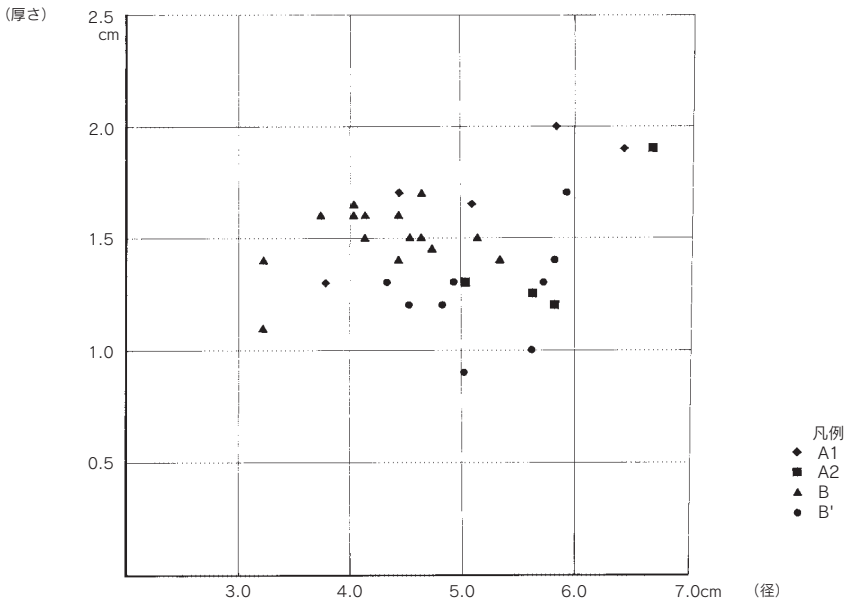


図46　紡錘車散布図

上面は孔周縁部が突起する。24は表面にミガキ調整を施し、上面孔周縁は一部欠ける。25は孔が中心よりわずかに外れる。29は指頭圧痕が残り、表面には成形時のものと見られるひびが入っており、かなり粗雑なつくりである。上面孔周縁が一部欠ける。30は孔から側面にかけての間がわずかに凹み、かつ側面が平坦であるため、側面にかけての稜が明瞭である。31も側面が平坦で稜が明瞭である。32は孔が中央よりわずかに外れる。両面とも平坦に仕上げる。33はSH231から出土したが、流れ込みとみられる。孔周縁は上面のみほぼ全周欠損する。35,36は径が小さめで、全体的に丸みを帯びる。36は厚さが厚く、上面は孔周縁が突起する。下面は孔に向かって凹む。

37～40は管状土錘である。37は約２分の１が欠損する。中央部には沈線が短軸方向に半周めぐる。38は指頭圧痕や爪痕が各所に残る。39も指頭圧痕が各所に残る。外径に対し孔径が大きいため錘以外の用途も考えられる。40は短軸方向に沈線が５本めぐる。上から1本目は背面から始まり４分の３周ほどめぐり、２本目は向かって正面左側から始まり、全周と少しめぐる。下位３本は正面のみ４分の1周めぐる。孔径は0.3mmと小さいため、錘以外の用途も考えられる。

41～45は投弾である。42は表面全体に布目痕様の圧痕が付く。41,44は成形時のものと見られるひびがはいり、焼成も良くない。43はSD174上層から出土した。

46～48は用途不明品である。46は上方から下方にいくにつれ厚みがなくなり、向かって正面左下方縁辺部は最も薄く、背面側にわずかに折れている。47は円錐状土柱底部の周縁に突起をつけたような形態である。底部を上面に据えると、上面中央には９mm、高さ３mm程度の突起があり、周囲には同じような大きさの突起が現状で６個並ぶ。欠損部も含めると７個程度並んでいたと推定される。その突起の下の側面部分は欠損が著しいため、どのような状態であったのか推定が難しいが、現状ではふたつの突起が確認できた。

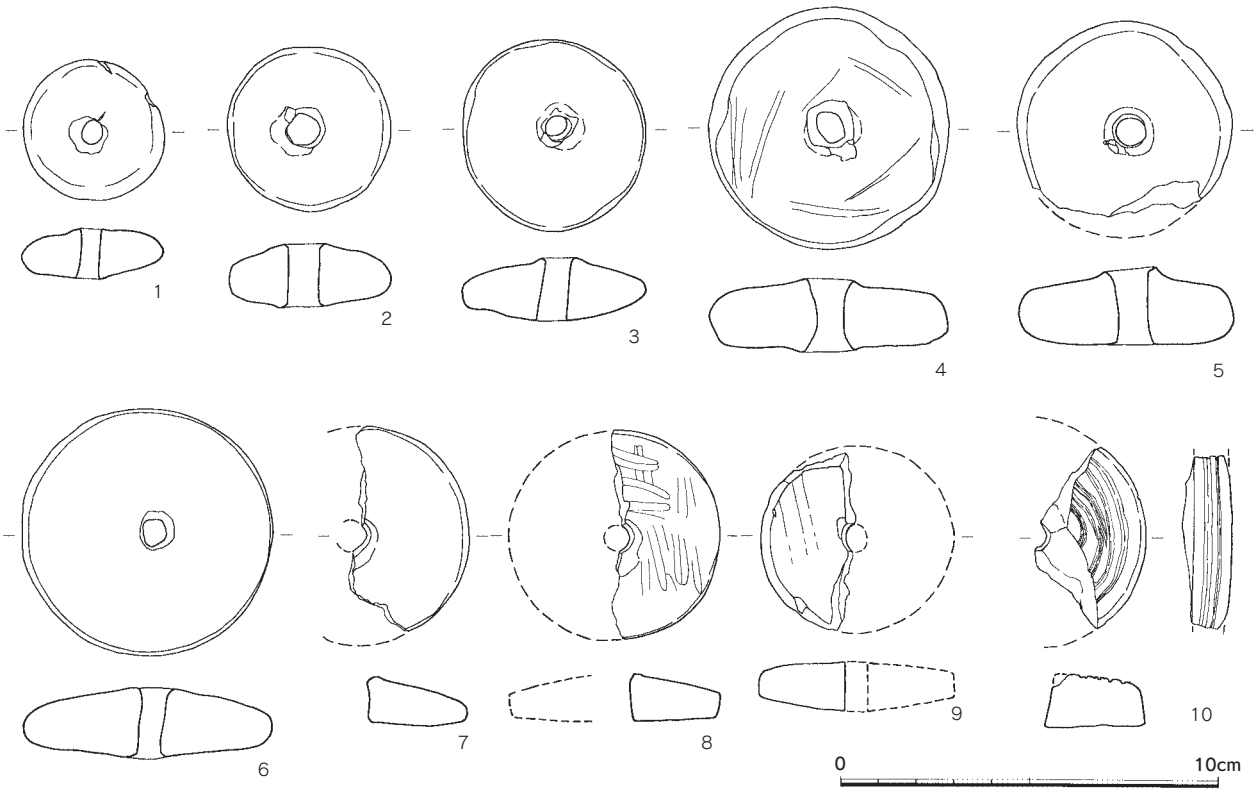


図47　包含層他出土紡錘車Ａ類（1/2）

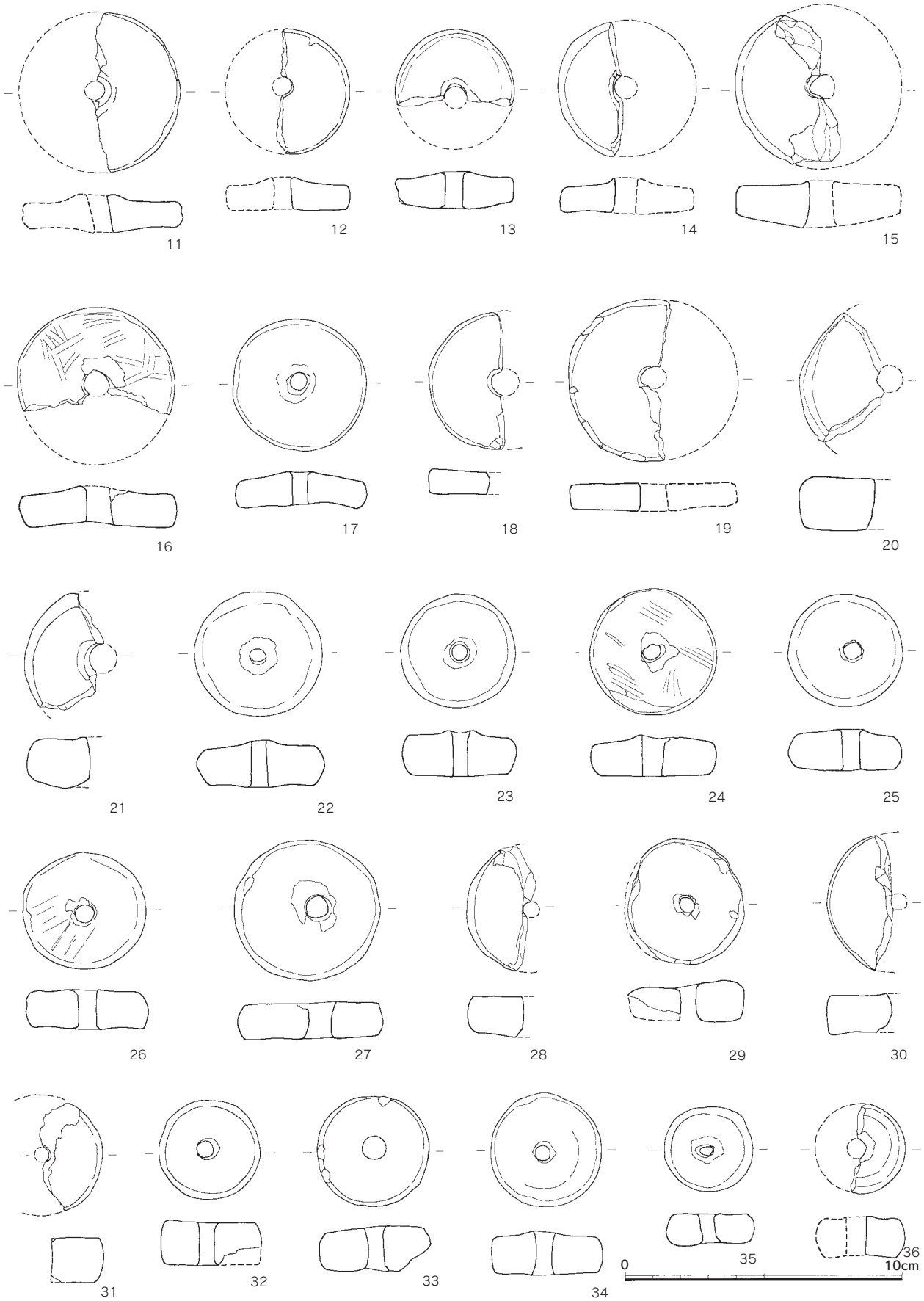


図48　包含層他出土紡錘車Ｂ類（1/2）

48は下位がふくれ、上位は細く作り出され、径0.3cmの孔が長軸方向に穿たれる。装身具の1種か。

49はヒスイの勾玉である。腰部が一部欠損する。おもて面からの片側穿孔である。50は小玉である。石材は天河石の可能性がある。

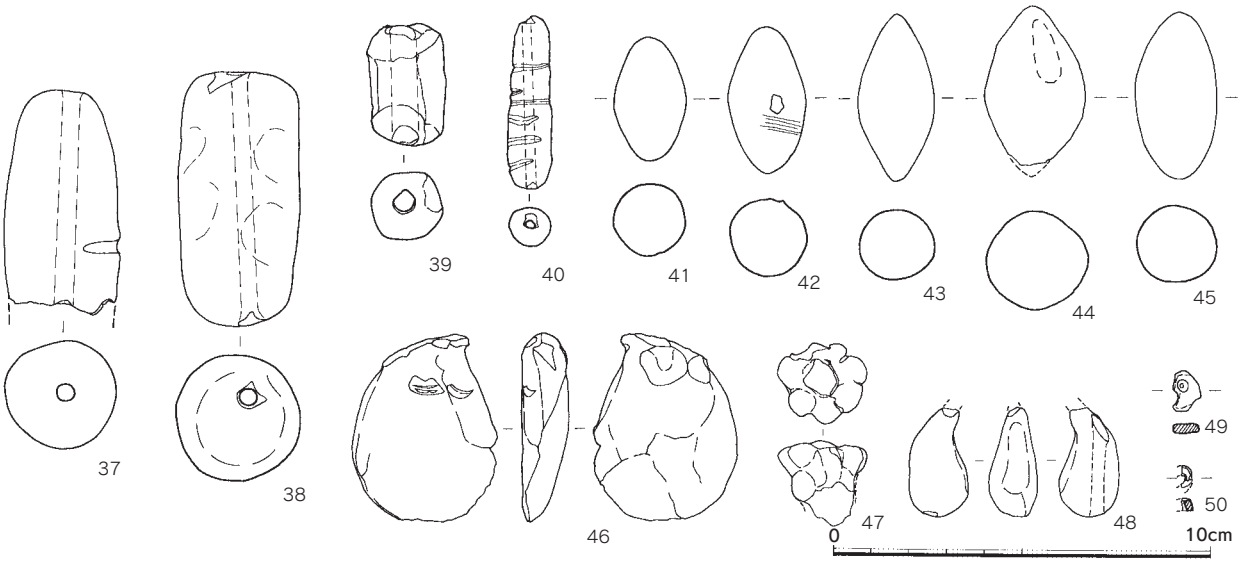


図49　包含層他出土土製品・玉類（1/2）

表２　弥生時代土製品・玉類一覧表（１）

挿図-番号	登録番号	種類	分類	遺構名	層位	グリッド	法量					所見	胎土・石材	色調
							全長（径）	全幅	厚	孔径	重量			
47 - 1	97-1882	紡錘車	A1		1～4	D-9	3.75		1.30	0.65	16.6		1～2mm砂粒、ウンモ	にぶい黄橙色
〃 - 2	99-2236	紡錘車	A1		7b	C-5	4.40		1.70	0.90	27.9	不整方向ナデ調整	1mm以下砂粒、ウンモ	黒褐色
〃 - 3	99-2238	紡錘車	A1		7	E-11	5.05		1.65	0.90	35.7	表面ミガキ？	1mm以下砂粒少量、ウンモ多量	にぶい黄橙色
〃 - 4	99-0345	紡錘車	A1		7	B-6	6.40		1.90	1.20	78.8	両面ナデ調整	1～3mm砂粒、ウンモ	にぶい黄褐色
〃 - 5	99-0342	紡錘車	A1		7b	B-3	5.80		2.00	0.90	(50.0)		1～3mm砂粒、ウンモ少量	灰黄褐色
〃 - 6	99-0350	紡錘車	A2		7	E-11	6.65		1.90	1.00	65.1	両側面磨き調整	1～2mm砂粒、ウンモ少量	にぶい黄橙色
〃 - 7	99-2235	紡錘車	A2		7	G-5	5.80		1.20		(17.9)		2～3mm砂粒	にぶい黄橙色
〃 - 8	97-1881	紡錘車	A2		7	D-7	5.60		1.25		(18.6)		3mm以下砂粒、ウンモ少量	黒褐色・灰黄褐色
〃 - 9	99-0332	紡錘車	A2		7b	D-8	5.00		1.30		(15.0)	片面磨き調整	1～2mm砂粒、金ウンモ	暗褐色
〃 - 10	01-0999	紡錘車	A2		7	E-10			1.40		(15.0)	上面のみ沈線あり	2mm以下砂粒、ウンモ少量	灰黄褐色
48 - 11	99-2239	紡錘車	B		7	D-9	5.80		1.40	0.70	(19.9)	両側面ナデ調整	1～3mm砂粒、ウンモ少量	にぶい黄橙色
〃 - 12	97-1886	紡錘車	B		7	D-5	4.50		1.20	0.70	(15.2)		1～2mm砂粒、ウンモ	にぶい黄橙色
〃 - 13	99-0337	紡錘車	B		7	E-10	4.90		1.30		(11.3)		1mm以下砂粒、ウンモ少	灰黄褐色
〃 - 14	99-2237	紡錘車	B		7	E-10	4.30		1.30	0.80	(12.3)		1～2mm砂粒少量	橙色
〃 - 15	99-0341	紡錘車	B		?	C-5・6	5.90		1.70		(28.4)		1～2mm砂粒少量ウンモ少量	暗褐色
〃 - 16	97-1883	紡錘車	B		7	E-10	5.70		1.30	1.00	(33.2)	両側面磨き調整	1～2mm砂粒、ウンモ	にぶい黄褐色
〃 - 17	99-2234	紡錘車	B		7	G-5	4.80		1.20	0.60	29.2	裏面圧痕付く	1mm以下砂粒、ウンモ	にぶい黄橙色
〃 - 18	99-0338	紡錘車	B	SD265			5.00		0.90		(13.9)		1mm以下砂粒少、ウンモ少	灰黄褐色
〃 - 19	99-0339	紡錘車	B		?	C･D-6･7	5.60		1.00		(20.9)	両側面ナデ調整	1～3mm砂粒、ウンモ少量	にぶい黄褐色

表３　弥生時代土製品・玉類一覧表（２）

挿図-番号	登録番号	種類	分類	遺構名	層位	グリッド	法量					所見	胎土・石材	色調
							全長（径）	全幅	厚	孔径	重量			
47 - 20	99-0336	紡錘車	B		7b	B-2			2.05		(26.2)		1～3mm砂粒、ウンモ	にぶい黄褐色
〃 - 21	99-0334	紡錘車	B		7b	C-5			1.80		(19.7)		1～2mm砂粒	灰黄褐色
〃 - 22	97-1885	紡錘車	B		5	C-5	4.60		1.70	0.60	37.0		1～2mm砂粒、ウンモ	にぶい黄橙色
〃 - 23	99-0347	紡錘車	B	P2113			4.10		1.60	0.90	30.4		1～2mm砂粒、ウンモ少量	灰黄褐色
〃 - 24	99-2233	紡錘車	B	廃土	7?	F-2	4.60		1.50	0.70	36.2	両側面磨き調整	1～2mm砂粒、ウンモ	灰黄褐色
〃 - 25	97-1887	紡錘車	B		1～4	E-9	4.10		1.50	0.60	27.6		1～2mm砂粒、ウンモ少量	にぶい橙色
〃 - 26	97-1879	紡錘車	B		7	C-9	4.40		1.40	0.70	31.9		1mm砂粒、ウンモ	にぶい黄橙色
〃 - 27	99-0343	紡錘車	B		7	E-11	5.30		1.40	1.00	45.1		1～4mm砂粒、ウンモ	灰黄褐色
〃 - 28	99-0335	紡錘車	B		6	D-6	4.70		1.45		(15.4)		1～3mm砂粒	灰黄褐色
〃 - 29	99-0340	紡錘車	B		7	E-11	4.50		1.50	0.60	(21.9)		2～4mm砂粒、ウンモ	にぶい黄褐色
〃 - 30	99-0333	紡錘車	B		7		5.10		1.50		(19.0)		1～2mm砂粒、金ウンモ	橙色
〃 - 31	97-1884	紡錘車	B	SK242			4.40		1.60		(15.7)		1～2mm砂粒	にぶい黄橙色
48 - 32	99-0348	紡錘車	B		6	G-2	3.70		1.60	0.85	23.0		1～2mm砂粒少量、ウンモ少量	にぶい黄褐色
〃 - 33	99-0349	紡錘車	B	SH231			4.00		1.65	0.85	(26.9)		1～3mm砂粒	淡黄色
〃 - 34	99-0344	紡錘車	B	SK264			4.00		1.60	0.80	30.1		1mm以下砂粒、ウンモ	暗褐色
〃 - 35	99-0346	紡錘車	B		7	E-8	3.20		1.10	0.70	12.8		1mm以下砂粒、ウンモ	にぶい黄褐色
〃 - 36	97-1880	紡錘車	B		7	D-6	3.20		1.40		9.3	両側面磨き調整	2mm以下砂粒、ウンモ少量	にぶい黄橙色
49 - 37	97-1878	土錘			6	E-9	5.90	3.00		0.50	50.0	ナデ　抉り半周回る	1～3mm砂粒、ウンモ	にぶい黄橙色
	97-1871	ミニチュア				B-4						刻み入る	1～2mm砂粒、ウンモ	灰黄褐色
	97-1872	ミニチュア				B-9							1mm以下砂粒少量+P22	にぶい黄褐色
〃 - 38	99-2232	土錘			7b	B-1	6.70	3.20			76.3	布目痕状のもの付く	1～2mm砂粒、ウンモ	褐色
〃 - 39	01-0997	土錘			1～4	D-10	3.20	2.00		0.70	11.6		1～2mm砂粒、ウンモ	灰黄褐色
〃 - 40	01-0998	土錘			?	D-10	4.60	1.20		0.30	5.3	溝数本入る	1～3mm砂粒、ウンモ	灰黄褐色、橙色
〃 - 41	99-2244	投弾			7	G-8	3.25	1.90			9.5		1～3mm砂粒	明褐色
〃 - 42	99-2243	投弾			7	D-10	3.90	2.00			13.1	ナデ(布目痕？)付く	1mm以下砂粒、ウンモ	褐色
〃 - 43	99-2240	投弾		SD174	上層		4.40	2.00			13.0		1mm以下砂粒、ウンモ	黒褐色
〃 - 44	99-2241	投弾			6	E-4	4.20	2.70			(21.4)		1～2mm砂粒	にぶい黄橙色
〃 - 45	99-2242	投弾			コモ下	F-2	4.40	2.10			16.3		1mm以下砂粒、ウンモ	にぶい黄褐色
〃 - 46	99-2246	不明			7	D-10	4.95	3.80	1.25		17.2	工具(爪？)痕付く	1～2mm砂粒、ウンモ	にぶい黄橙色
〃 - 47	99-2245	不明			7b	D-8	(2.30)	2.40			(6.5)		1～2mm砂粒、ウンモ少量	にぶい黄橙色
〃 - 48	99-2247	不明			7	E-10	2.90	1.60	1.30	0.30	3.8	玉の一種か	1～2mm砂粒、ウンモ	にぶい黄橙色
〃 - 49	01-0968	勾玉			6	E-11	1.05	0.70	0.20	0.20	0.4		ヒスイ	
〃 - 50	01-1033	小玉			7	E-11	0.70		0.30		0.1		天河石か？	

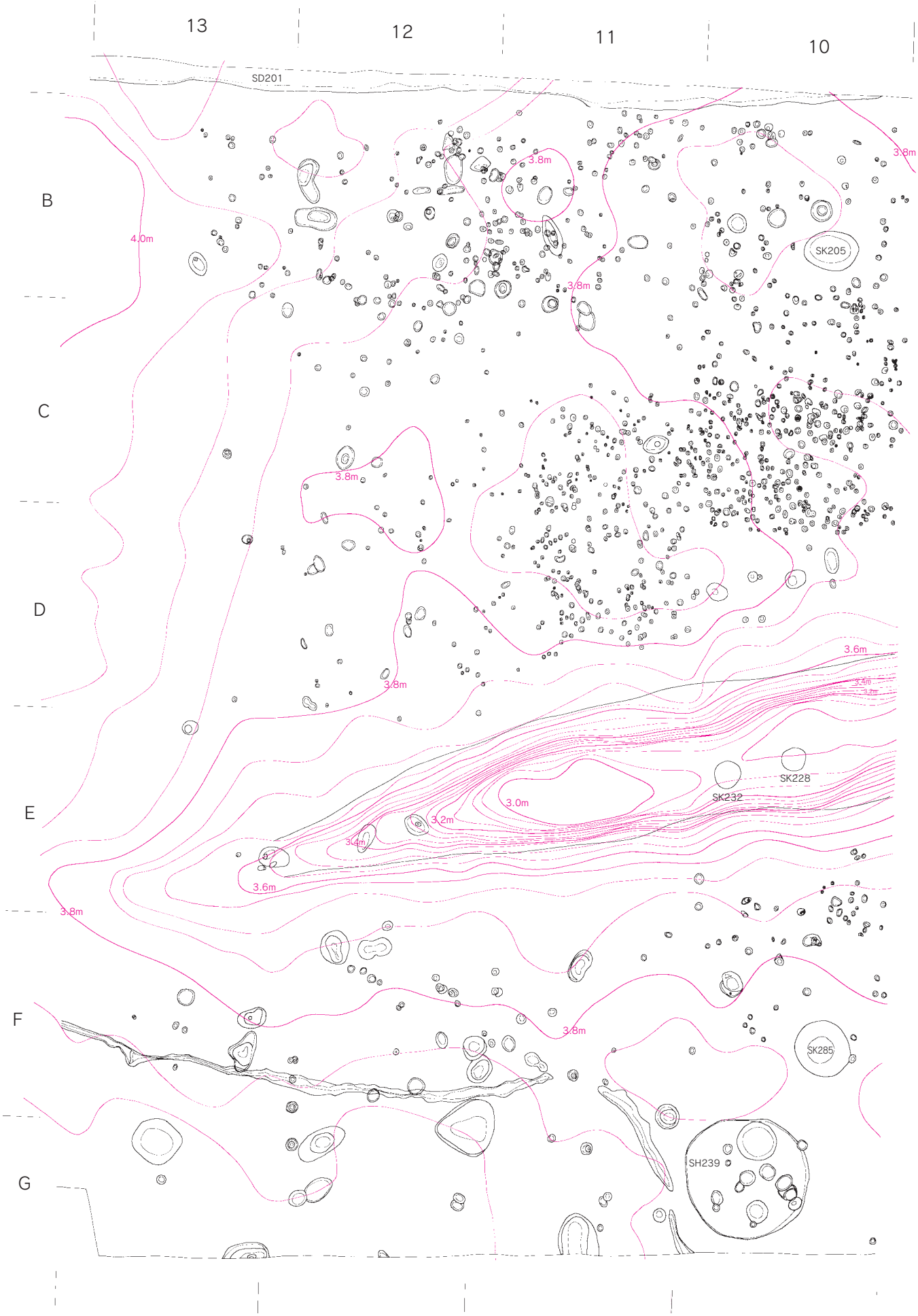


図50　集落部遺構配置図１（1/250）

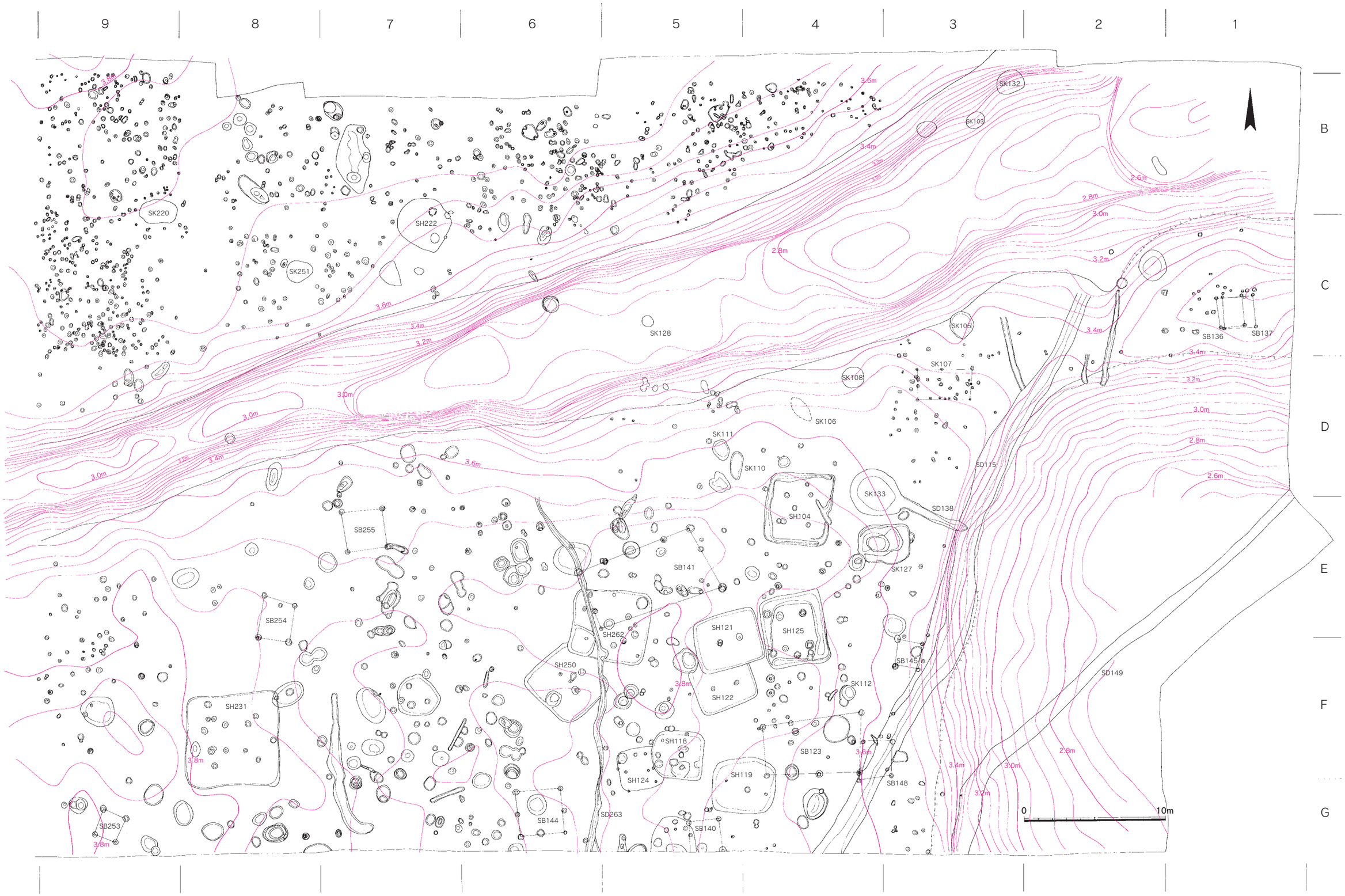


図51 集落部遺構配置図２（1/250）

（2）竪穴住居跡

SH119（図52～54）

Ｆ、Ｇ-４、５区画で検出した。同時代の住居跡であるSH222は北西41ｍにSH239は東方約51ｍに位置する。平面形態は隅丸方形で、規模は長軸4.52ｍ、短軸4.0ｍ、床面積は18.08㎡を測る。壁遺存高は32cmを測る。壁のたちあがりは比較的緩やかである。床面からは主柱穴は検出できず、平面円形で径約20cm～30cm、深さ約10cmの小穴３基を検出した。床面中央部は地山土と黒褐色砂が斑点状に検出された。埋土は茶褐色砂である。床面中央部には石囲い炉がある。

炉の平面形態は楕円形で断面形はレンズ状である。規模は長軸86cm、短軸70cm、深さ11cmで土坑の南端に玄武岩の割石、転石を４石、平面ハの字形にたてる。炉石は被熱した痕跡が認められず埋土は茶褐色中砂で炭化物はない。

出土遺物には甕などの口縁部、底部破片と扁平片刃石斧、磨製石鏃がある。床面から数cm浮いた状態でおもに住居跡の南から東側にかけて出土した。

１～５,７は甕Ⅲ類の口縁部～胴部片である。１は口縁端面の全面に刻み目を比較的密に。胴部の張りは弱い。２は口縁端面の下端に浅い刻み目を施す。４は浅い刻み目を口縁端面の全面に施す。口縁部が緩やかに外湾し、胴部は若干膨らむ。４,５は同一個体か。７は口縁端部に面をつくらず、丸く収める。土器表面が摩滅しているため刻み目はほとんど確認できないが、ごく浅い刻み目を施す。６,８,９は甕の底部。10は小型の扁平片刃石斧のほぼ完形品。薄型で刃部の角度も甘い。刃部が使用のため欠損する。11は小型の柱状片刃石斧のほぼ完形品。住居跡埋土中の上層から出土。身部に縛り跡がつく。身が厚く、刃の角度も大きく稜・鎬が鋭い。12は磨製石鏃。身部断面は菱形で、茎部も面取りして多角形を呈す。13は手持の砥石。上端部に敲打痕があり、敲石としても利用されている。14は黒曜石の石核。腰岳産と思われる。ランダムに打面を展開する。一部礫面が残る。15は置砥石で、刃器を研磨するために用いられたためＶ字形の溝を有する。中目砥石。

SH222（図55,56）

Ｂ、Ｃ-７区画で検出した。同時代の住居跡であるSH119は南東41mに、SH239は南西約48ｍに位置する。平面形態は不整円形で規模は長径3.92ｍで床面積は約10㎡を測る。住居跡南東側は削平のため平面検出が困難であり壁もほとんど残存しない。壁遺存高は北側で12cmを測り、壁のたちあがりは比較的緩やかである。床面からは柱穴は検出できなかった。埋土は黒褐色砂(2.5Y3/1)で５mm以下の砂礫を非常に多く含む。

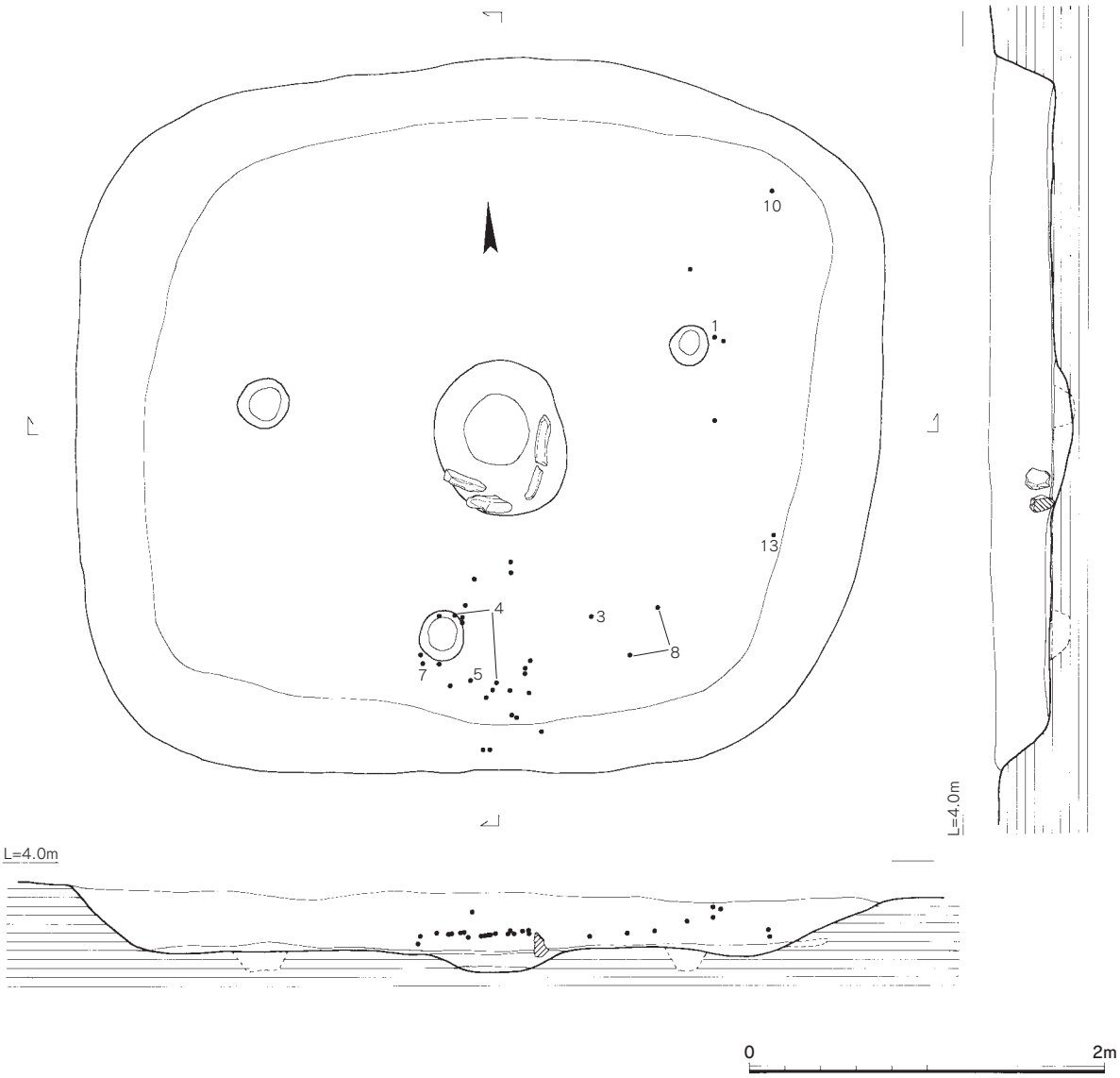
床面中央からやや南東部の位置に石囲い炉がつくられる。炉の掘り方は楕円形で断面形はレンズ状である。規模は長軸1.2ｍ、短軸1.05ｍ、深さ８cmで土坑の東側に玄武岩の扁平な割石、転石を６石、平面環状にたてる。炉石には被熱による赤化が内外ともにみられる。埋土に炭化物はみられない。床面直上から甕口縁部が出土した。

１は甕Ⅲ類。口縁部が短く、外反も弱い。口縁端面に全面刻み目を施し、刻み目の間隔は密。胴部の張りも弱い。板付祖形甕と呼ばれるものか。

SH239（図57）

Ｆ、Ｇ-10区画で検出した。同時代の住居跡であるSH119は西方約51ｍにSH222は北東約48ｍに位置する。平面形態はやや歪な円形で規模は長径6.33ｍで床面積は約28㎡を測る。壁遺存高は約10cmで壁のたちあがりは西壁付近は垂直に近く他は比較的緩やかである。

床面では径0.5ｍ～1ｍ、深さ15cm～30cmの平面円形、楕円形の土坑を検出した。最も大きい土坑は径



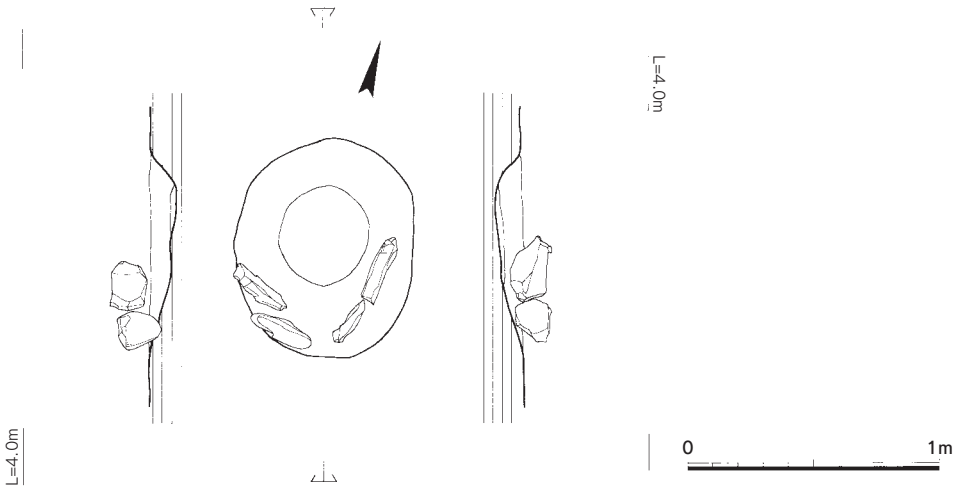


図52　SH119竪穴住居跡（1/40）・石囲い炉跡（1/30）

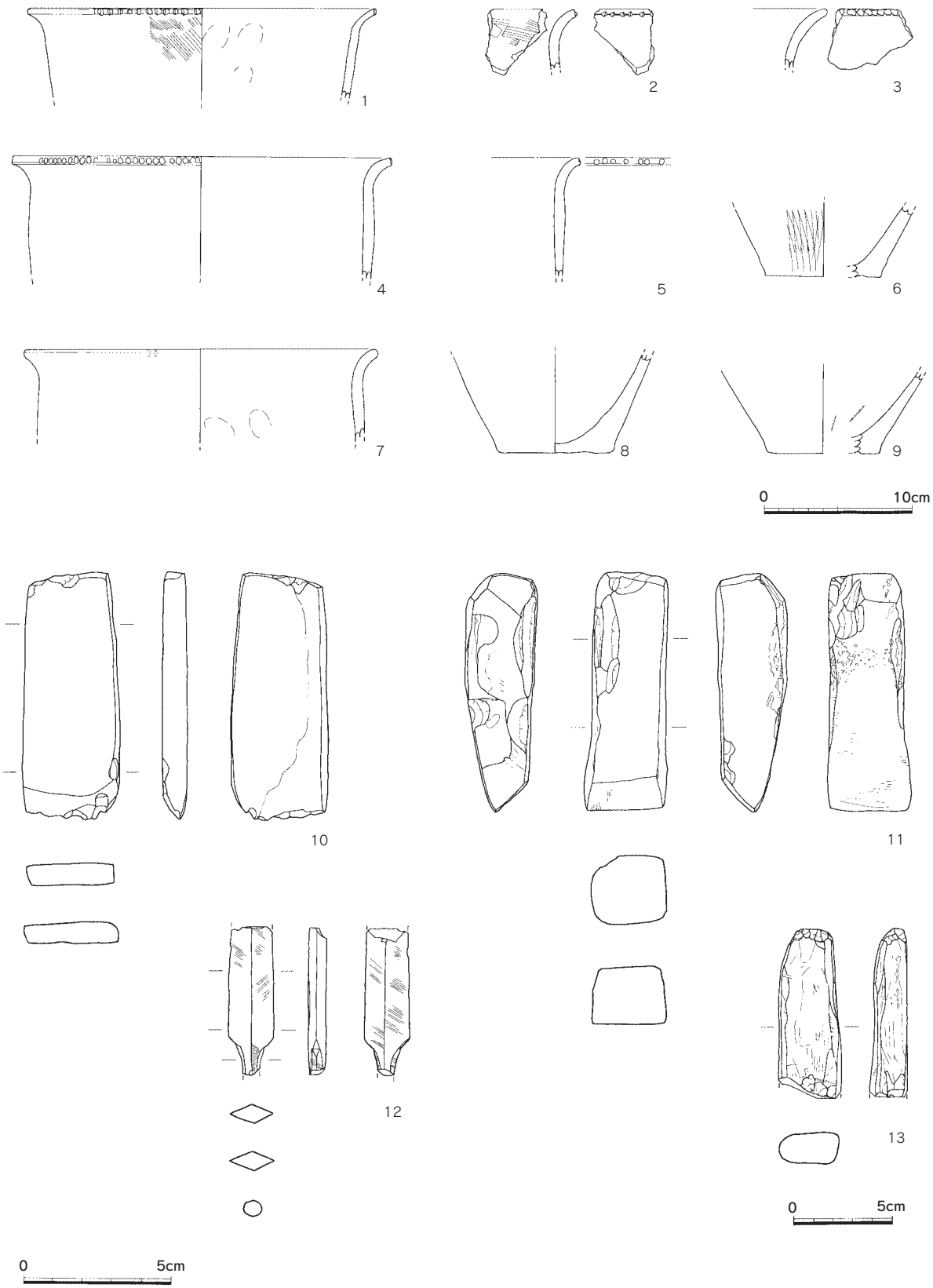


図53　SH119出土土器(1/4)・石斧(10、11)(1/2)、磨製石鏃(12)(1/2)、砥石(13)(1/3)

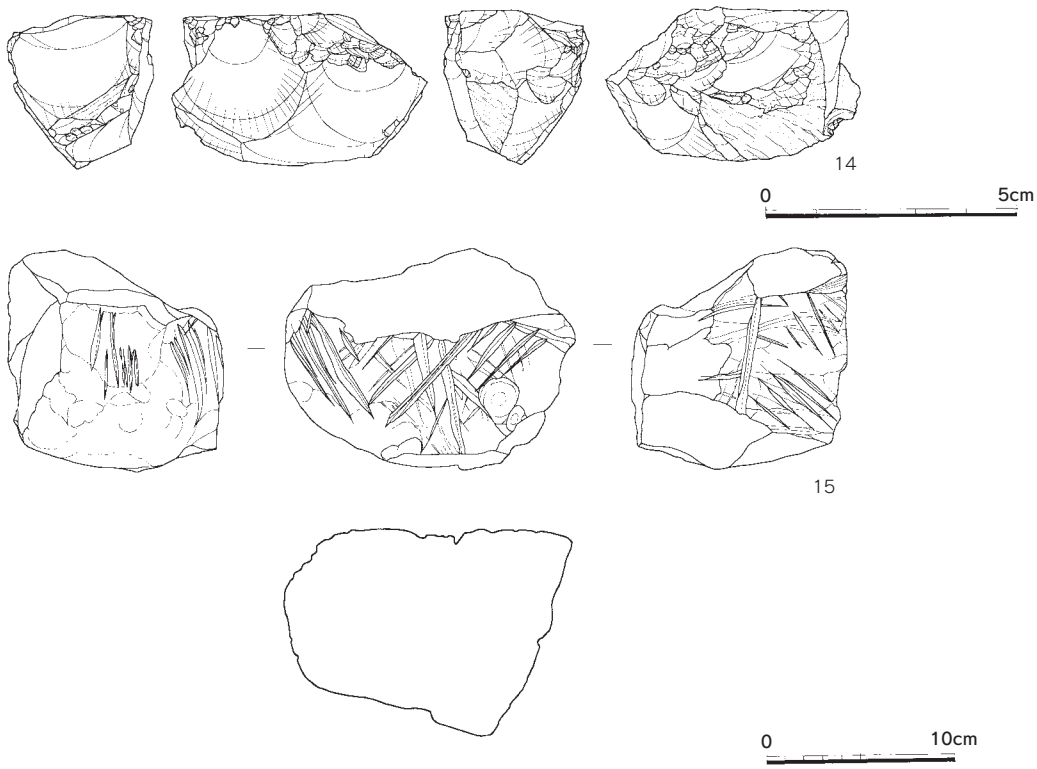


図54　SH119出土石器（石鏃2/3、砥石1/4）

約1.9mの円形土坑であり、これらがすべて住居に伴うかは不明である。埋土中から完形の磨製石剣などが出土した。

１は甕ⅡＢ②類。口縁端部を面取りして、外端部をつまみ出し直接ヘラ状工具による刻み目を施す。胴部の小さな断面三角形の突帯には浅く小さな刻み目を施す。肩部の屈曲はなく底部にかけて直線的にすぼまる。２は壺ⅢＢ類。口縁部が内湾し、内面が肥厚する。外器面はミガキの後ヘラ状工具による沈線文を施す。胴部には蓋を縛るための突起をつけ、小孔を二つ穿ち、刻み目を施す。図上復元。３は壺Ⅱ類の口縁部。外器面にミガキ調整を施す。７は磨製石剣のほぼ完形品。層灰岩製で、全面に丁寧な研磨を施す。鎬が柄部にまで及ぶ。一部表面が剥離する。刃部も側面から磨いているため、実用品ではなく祭祀用の可能性が考えられる。全長16.1cm。８は手持砥石で、仕上げに用いられた細目砥石。９は表面を敲打により調整しており、小型の磨製石斧か。打製石鏃が３点出土しており、１点がｂ類。10は裏面に押圧剥離をあまり施さず、剥片の形状をよく残す。

（３）土坑

①ドングリ土坑（図59）

Ｃ、Ｄ-－２区画に位置する。SD187の西側、あるいは一部切り合いながら10基の土坑が群集する。埋土から出土した種実はイチイガシおよびコナラ属アカガシ亜属と同定された。その比率はイチイガシが９％、アカガシが91％である。イチイガシの堅果は渋抜きなしで食用になり、アカガシは渋抜きすれば食用になることやこれらの土坑が低地につくられていることから、これらの土坑は渋抜きをかねた貯蔵穴と考えられる。

埋土中から時期決定できる人工遺物は出土していないが、これらの土坑は突帯文土器の包含層を切ってつくられており、さらには弥生下層水田の直下から検出されたことなどから弥生前期と考える。

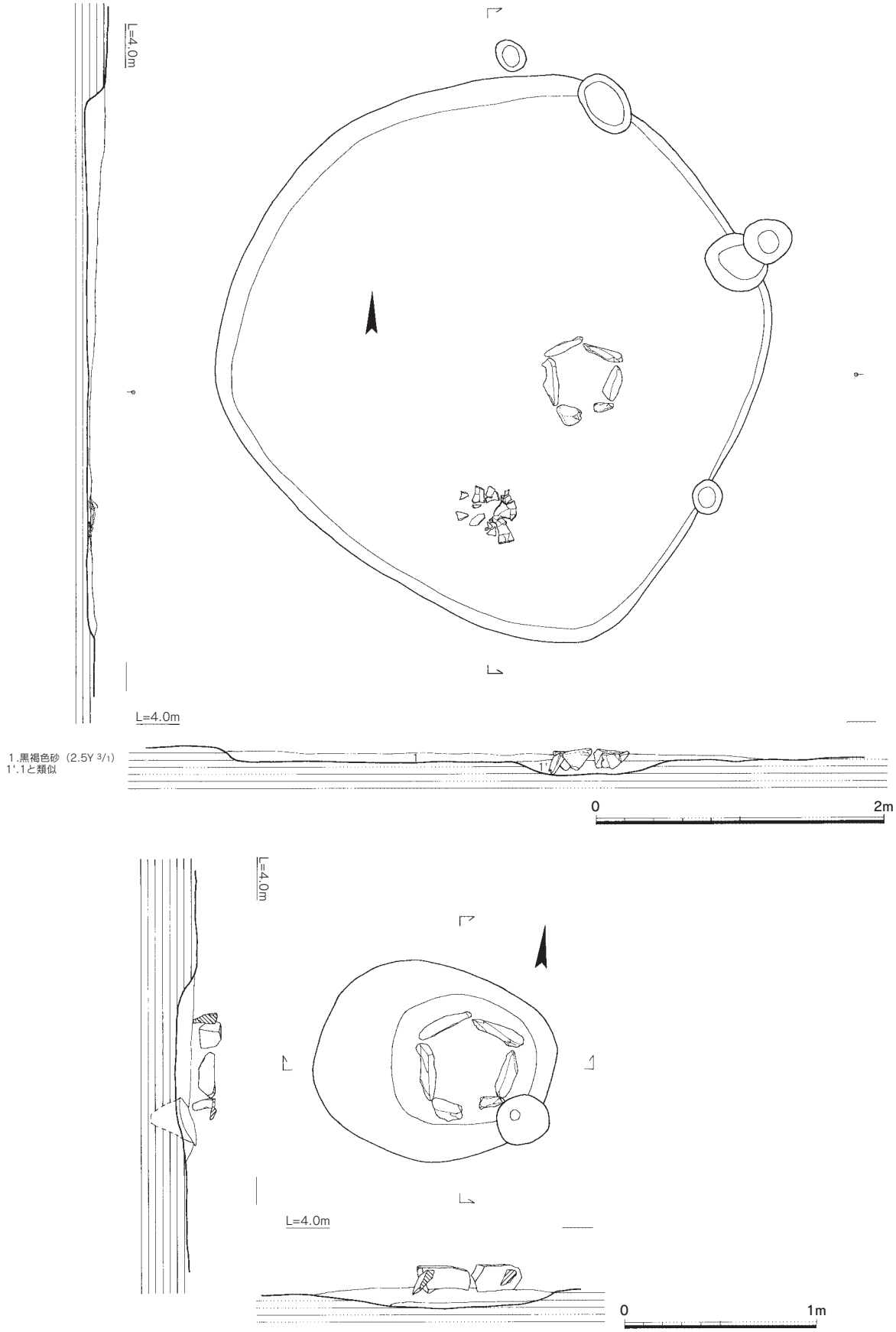


図55　SH222竪穴住居跡（1/40）・石囲い炉跡（1/30）

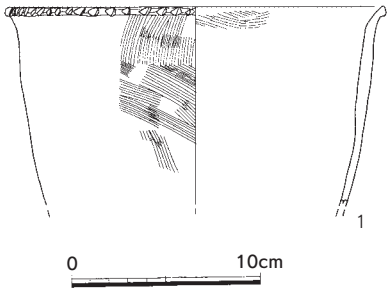


図56　SH222出土土器（1/4）

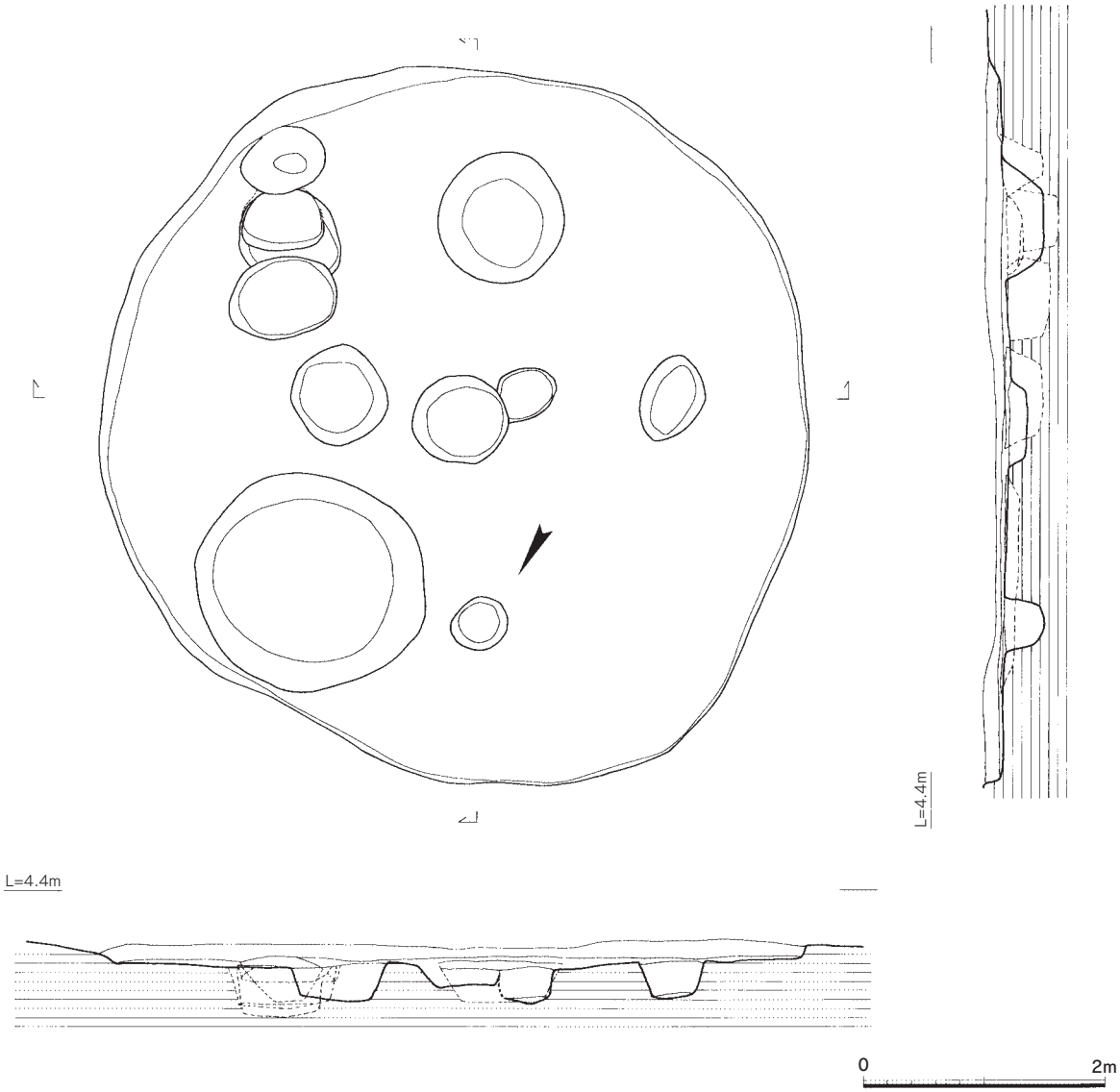


図57　SH239竪穴住居跡（1/60）

SK180

C-－２、－３区画に位置し、北側は調査区外にのびる。南方約２ｍにはSK181がある。平面形態は楕円形で推定長軸２ｍ、推定短軸1.6ｍ、深さ0.3ｍを測る。坑底の東側には壁を囲むように矢板状の杭が６本うたれる。矢板杭の幅は広いもので20数cmを測る。坑底は平坦で壁は垂直にたちあがる。埋土は黒褐色粘質土で中程に若干の砂が混じるが大部分は強い粘質土である。堅果類の表皮片を含むが他の土坑に

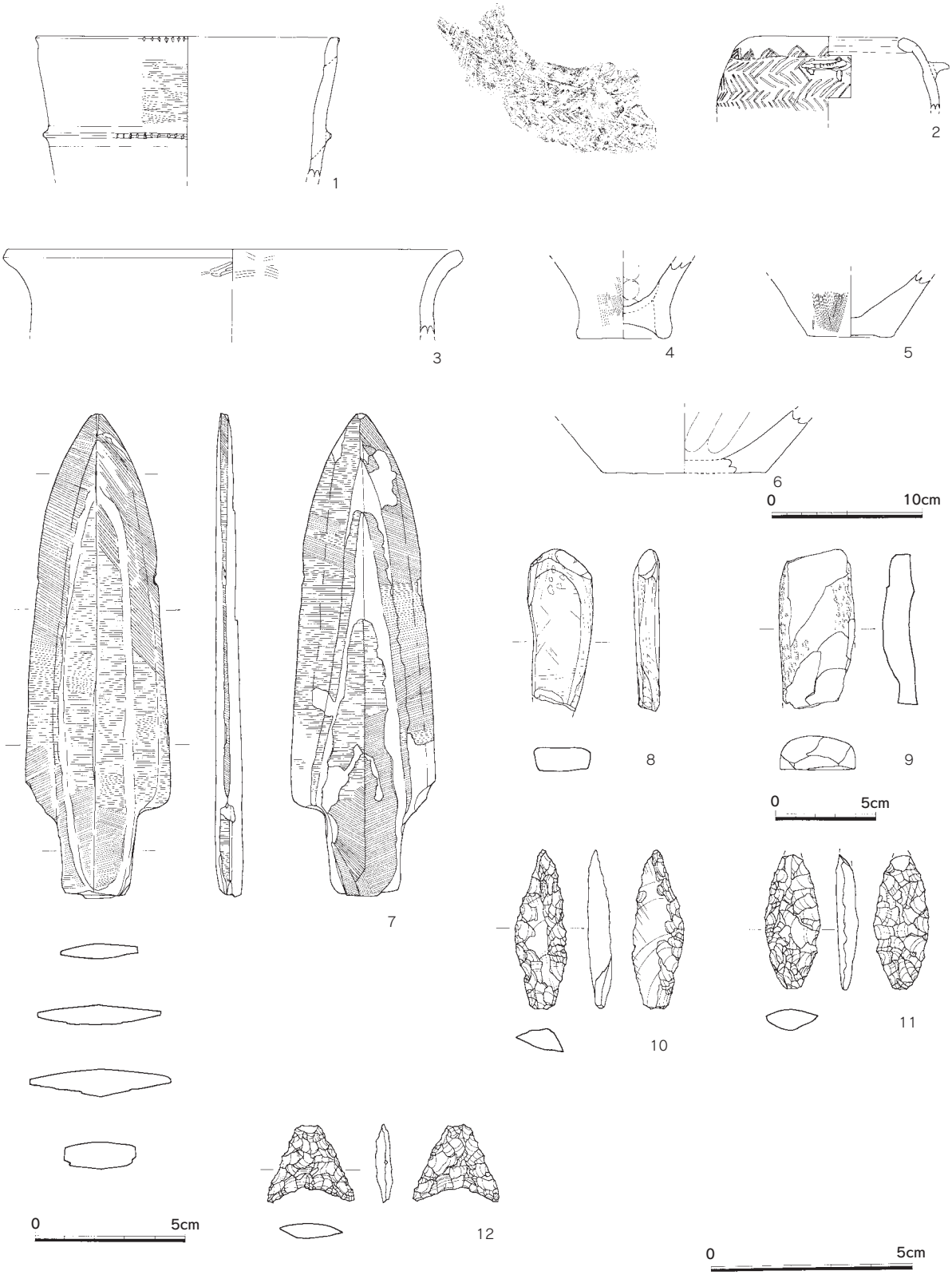


図58　SH239出土土器（1/4）、石剣（1/2）、砥石（1/3）、石鏃（2/3）

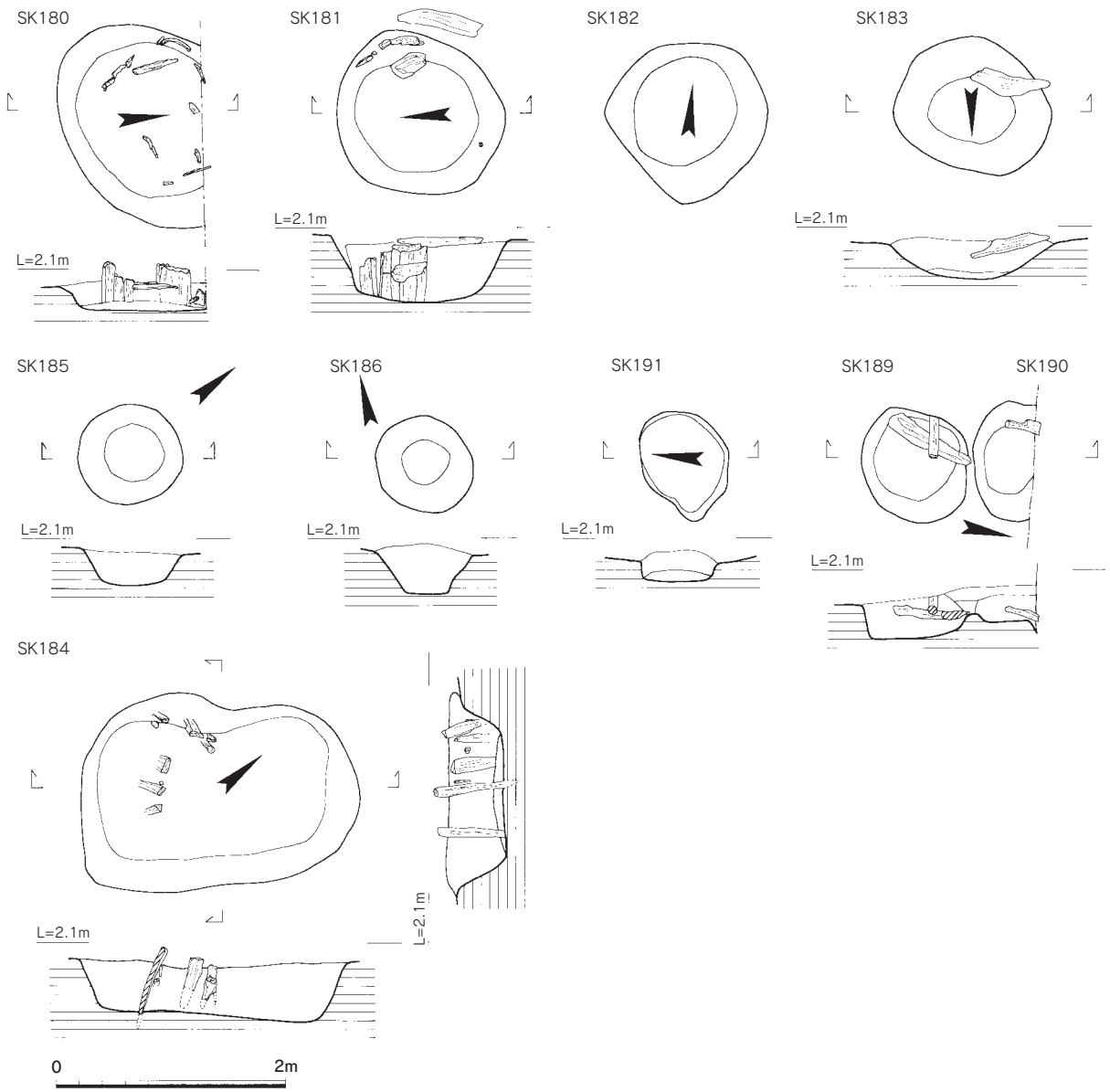


図59　ドングリ土坑（1/60）

比べると少ない。

SK181

C-－２区画に位置する。西方60cmにはSK182がある。平面形態は円形で長軸1.46m、短軸1.39m、深さ0.52mを測る。北東部の壁に沿って矢板杭数本が打ち込まれる。坑底は平坦で周壁は緩やかにたちあがる。

SK182

C-－２区画に位置する。東方60cmにはSK181が南西１mにはSK183がある。平面形態は不整円形で長軸1.42m、短軸1.4m、深さ0.4mを測る。坑底は平坦で周壁は緩やかにたちあがる。埋土は２層に分かれ、上層は黒褐色粘質シルトで下層からは多量の堅果類が出土した。

SK183

C-－２区画に位置する。南東2.5mにはSK190が北東１mにはSK182がある。平面形態は不整楕円形で長軸1.35m、短軸1.12m、深さ0.32mを測る。断面形はレンズ状である。埋土上層から自然木が出土した。

SK184

D-－２区画に位置する。東方0.4mにはSK189、190が西方0.5mにはSK185、191がある。平面形態は不整な隅丸長方形で長軸2.42m、短軸1.54m、深さ0.5mを測る。断面形は逆台形である。土坑内に杭が数本打ち込まれているが壁に沿ってはおらず、杭も矢板状ではない割杭である。

SK185

D-－２区画に位置する。北方0.4mにはSK191が東方0.5mにはSK184がある。平面形態は正円形で径約0.9m、深さ0.26mを測る。断面形は逆台形である。

SK186

D-－２区画に位置する。東方0.7mにはSD187が北方４mにはSK185がある。平面形態は楕円形で長軸0.9m、短軸0.8m、深さ0.34mを測る。断面形は逆台形状である。

SK189

D-－２区画に位置する。SD187を切っておりSK190と隣接する。平面形態は不整な円形で長軸1.08m、短軸0.94m、深さ0.32mを測る。坑底は平坦で壁は垂直にたちあがる。埋土上層から自然木が出土した。

SK190

D-－２区画に位置する。SD189と近接する。北側半分をトレンチにより削平した。平面形態は楕円形で長軸1.02m、短軸は不明、深さ0.3mを測る。土坑の上端が壊れ、周壁のたちあがりは不明である。埋土中から自然木が出土した。

SK191

D-－2区画に位置する。南方0.4mにはSK185が東方0.6mにはSK184がある。平面形態は不整楕円形で長軸1.0m、短軸0.77m、深さ0.16mを測る。坑底は平坦で壁は垂直にたちあがる。

②その他の土坑

SK223（図60）

B-７区画で検出した。南東7.5mにはSH222がある。平面形態は楕円形で、坑底の両端にさらに土坑がある。本来は２基の土坑として考えたほうがいいのかもしれない。北側の土坑の規模は長軸86cm、短軸76cm、深さ112cmで断面は二等辺三角形である。南側の土坑の規模は長径40cm、短径26cm、深さ25cmで断面逆台形である。

１は壺の底部と思われ、胴部の張りが強い。内外面は丁寧にミガキを施す。

SK248（図61）

E-７区画で検出した。北方21.5mにはSH222が、南東25.5mにはSH119がある。平面形態は不整な長楕円形で中位でくびれる。規模は長軸2.16mで長軸両端が深くなる。東端の深さは30cmである。

１は甕Ⅲ類。口縁端部に刻み目は施さない。口縁部の外湾が強く、胴部は若干張る程度。口縁部と胴部の境に沈線が１条巡る。２は大型の壺もしくは壺棺の口縁部片。口縁端面の上端と下端に刻み目を施す。

SK285（図62）

F-10区画で検出した。南方６mにはSH239がある。平面形態は円形で、規模は長軸2.9m、短軸2.56m、深さ0.44mである。断面形はレンズ状である。埋土は２層からなり色調、土質は上下層とも黒褐色砂質土(10YR2/2)で同じである。上層は炭化物を多く含み遺物の多くは上層から出土する。下層は炭化物を全く含まず、遺物も土器小破片数点のみである。また、上層から自然石数点も出土した。

１は甕Ⅲ類。口縁端面の下端を中心に浅い刻み目を施す。口縁部が外湾し、胴部の張りも強い。２は大型の壺の底部片。３も大型の壺の肩部～胴部で、肩部に沈線文を施す。胴部下半の内器面に煤と焦げ

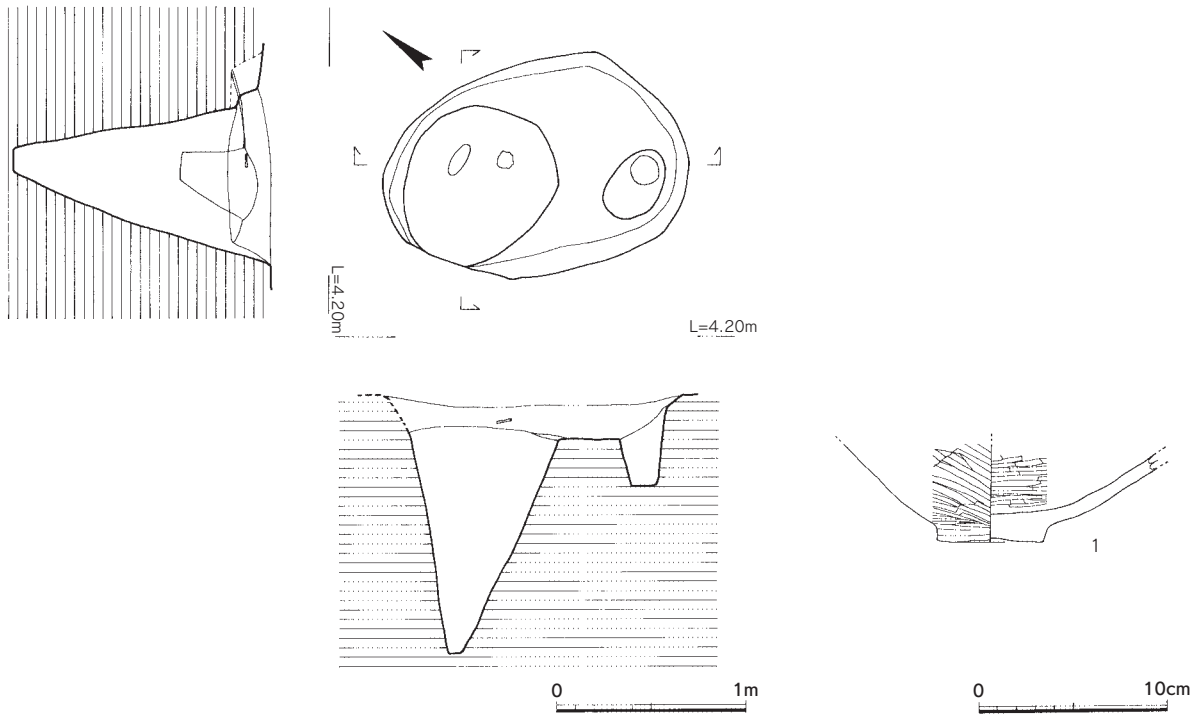


図60　SK223土坑（1/40）・出土土器（1/4）

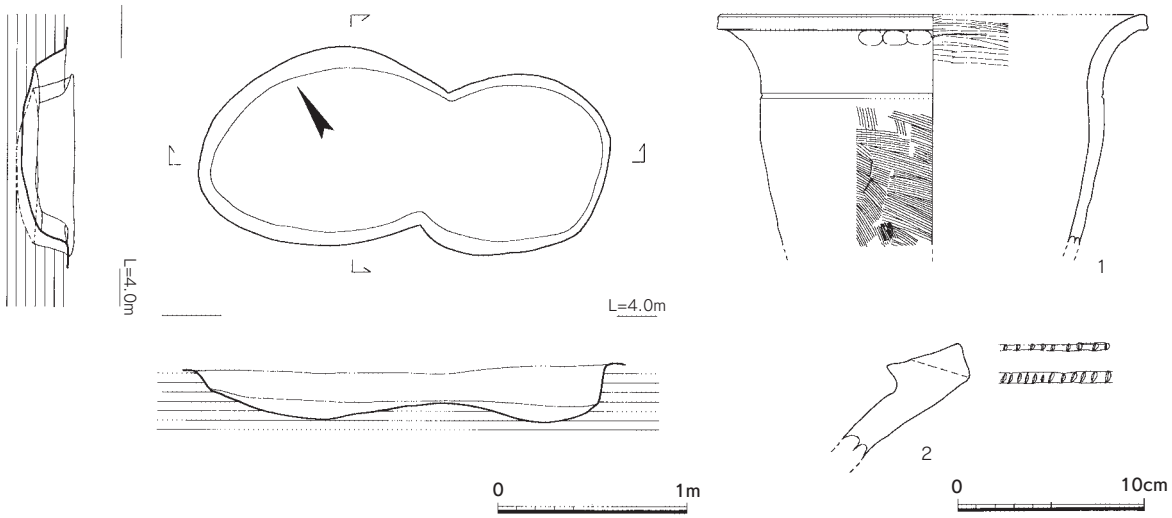


図61　SK248土坑（1/40）・出土土器（1/4）

が付着する。

SK291（図63）

Ｃ-17区画で検出した。南北溝であるSD280の1.7ｍ東側に位置し、南方16.5ｍにはSJ292がある。平面形態は不整楕円形で規模は長軸1.12ｍ、短軸0.93ｍ、深さ0.34ｍである。断面形はスリ鉢形で坑底は平坦気味である。埋土は２層からなり上層は黒色砂質土(10YR2/1)、下層は暗褐色砂質土で、上層から土器片が集中して出土した。土器片は同一個体である。下層からは遺物は出土していない。

１は壺Ⅳ類。Ｔ字状の口縁部を持ち、胴部の張りが強い。突帯を1条巡らす。

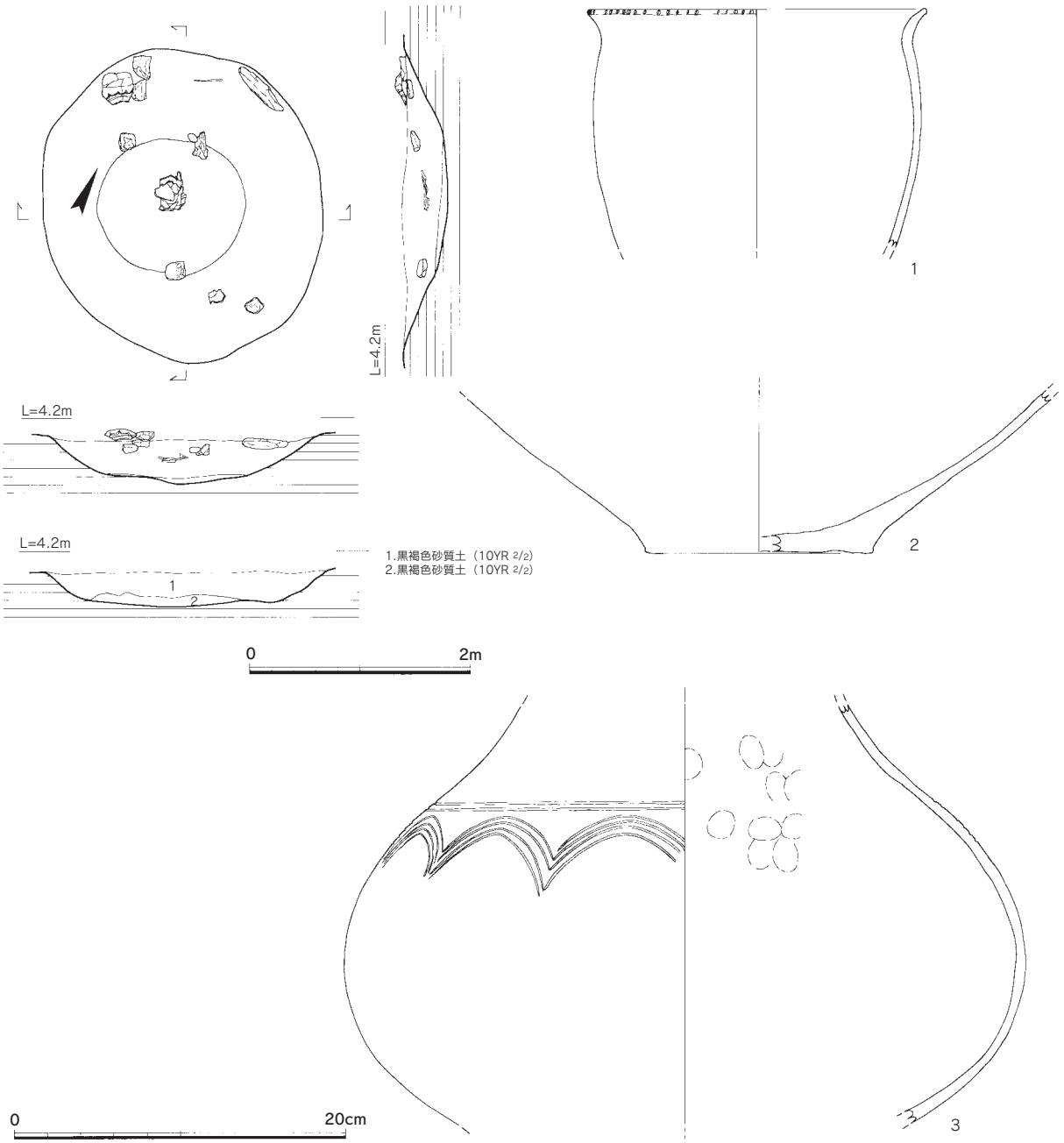


図62　SK285土坑（1/60）・出土土器（1/4）

③土器棺

SJ292（図64、65）

E-17区画で検出した。南北溝であるSD286とSD288の間に位置する。北方16.5mにはSK291がある。壺（上）＋壺（下）の複式棺で上下壺とも口縁部を打ち欠く。埋置角度は55.0°である。掘り方の平面形態は楕円形で規模は長軸1.0m、短軸0.82m、深さ0.33mである。

1は上壺。口縁端部を欠くためはっきりしないが、壺Ⅱ類と思われる。外器面には一部黒斑があり、丁寧な横方向のミガキを施す。肩部に沈線を一条巡らせ、直下に小孔を内外器面から穿つ。胴部の張りは2と比べて緩やか。2は下壺。完形に復元。壺ⅢA類。口縁部を若干肥厚させ、強く外湾させる。頸部はほぼ直線的にすぼまり、肩部との境に浅い沈線を巡らす。胴部の張りはやや強く、外器面の底部付

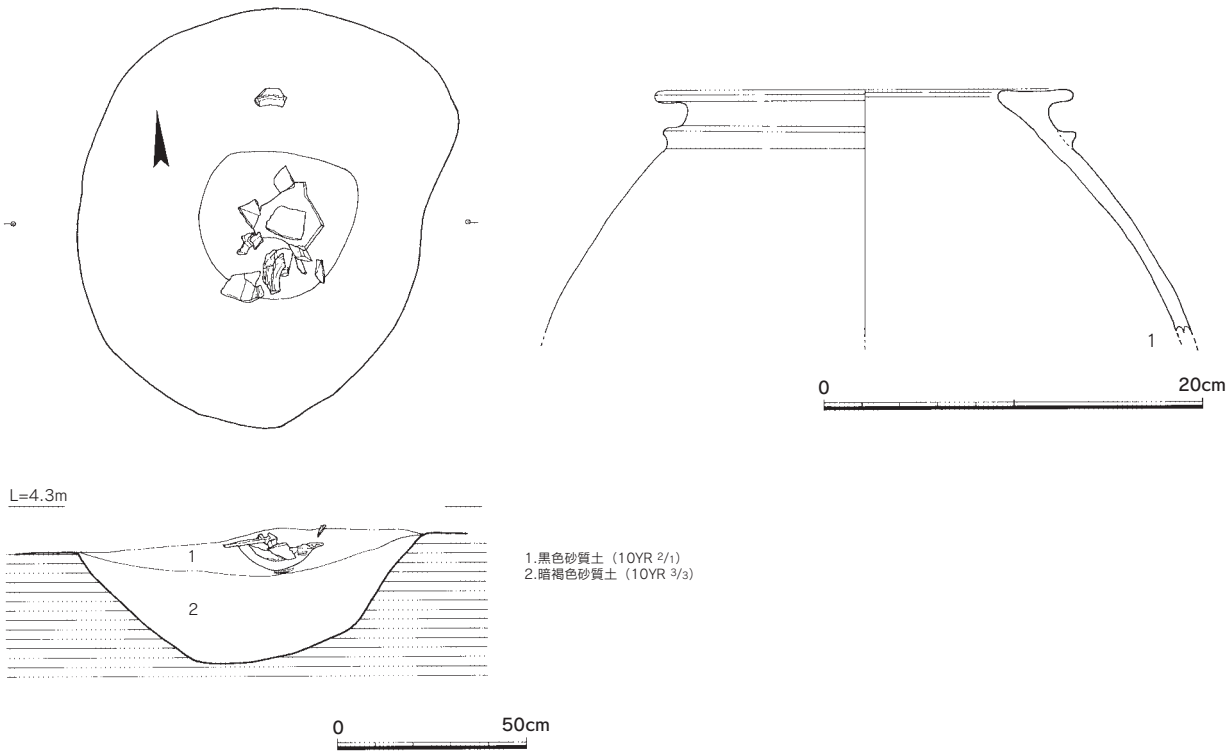


図63　SK291土坑（1/20）・出土土器（1/4）

近はハケ目調整を施し、それより上部は横、斜方向の丁寧なミガキを施す。内器面は口縁部のみミガキを施し、それより下部は施工具または指によるナデ調整を施す。

（4）溝跡

SD187（図66～69）

弥生下層水田の直下にて検出した。－２、－３ラインを南北方向に流れる自然流路である。幅４～５ｍ、深さ10cm～40cmの流路の中の中洲状のたかまりがみられる。したがって細かく観察するとやや蛇行する幅0.8ｍ～１ｍの二条の溝にわかれる。これらは断面がＵ字形で自然流路を人為的に掘削した可能性も考えられる。

中央ベルトをはさんで南側のSX179はSD187の中にある土坑であり、溜井の可能性もある。SD187流路の埋土はレンズ状の自然堆積で粗砂、中砂、シルトなどからなる。埋土中から土器、石庖丁、平鍬などが出土した。

Ｄ-－２区画にはSD187を切って杭列がある。流路に対して斜め方向に打たれて20数本の割杭がやや曲線を描きながら一列に打たれる。また、このSD187の西側にはドングリ土坑が群集する。

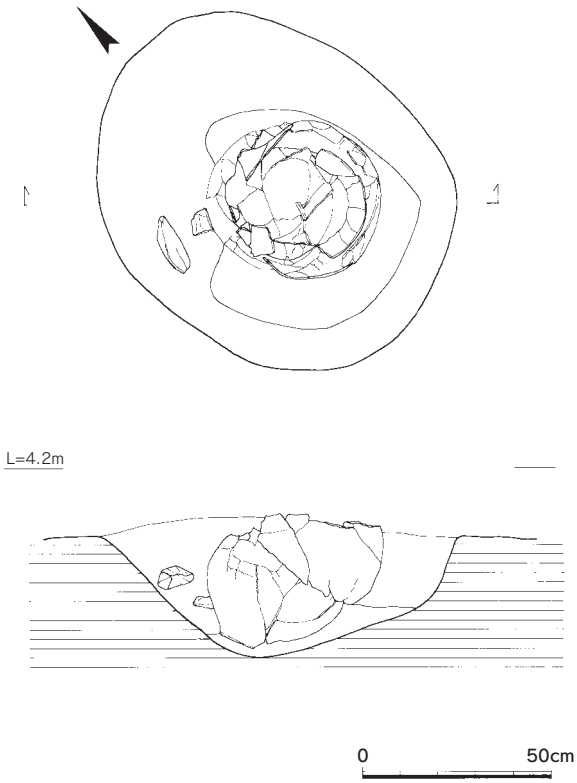


図64　SJ292土器棺墓（1/20）

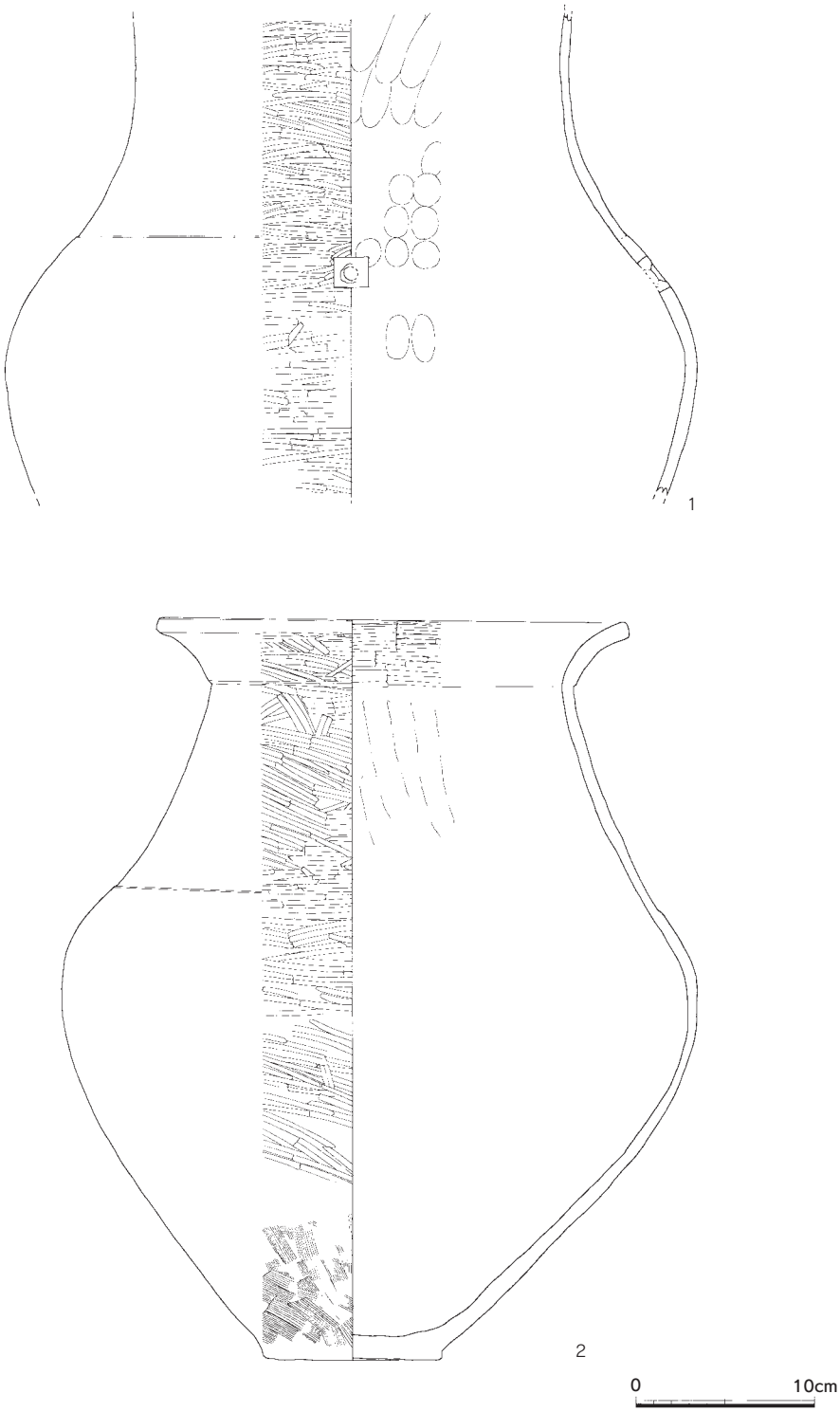


図65　SJ292出土土器（1/4）

1は甕ⅡB①類。小さな断面三角形の突帯が口縁端部から離れた位置に巡り、刻み目は小さく深く、密に施される。屈曲部から口縁部にむけて開き気味に立ち上がる。器高が低いため鉢に分類すべきものかもしれない。2,3はⅡB②類。2の胴部は断面三角形の突帯に深く密に施された刻み目、口縁部は横ナデ調整により面取りし、端部を外方へ突き出すように仕上げ、端部に大きく深い刻み目を密に施す。「く」の字状に屈曲した胴部を持つ。3の口縁部は面取りし、端部に浅く小さな刻み目を、胴部には小さ

な断面三角形の突帯に浅く小さな刻み目を密に施す。肩部の屈曲はなく、口縁部から底部にむけてほぼ直線的にすぼまる。４,５は甕Ⅲ類の口縁部。口縁端面の正面から全面に刻み目を施す。胴部はほとんど張らない。６は甕Ⅲ類。口縁部の外反はほとんどなく、底部にむけて直線的にすぼまる。口縁端部に浅く小さな刻み目を施す。いわゆる板付祖形甕。８は壺Ⅱ類の口縁部。内外器面に丁寧なミガキを施す。９は浅鉢Ⅰ類。口縁部が短く「く」の字状に屈曲する。口縁端部内面が肥厚するため、段を形成するが、段は甘くなっている。偏球形の胴部を持つ。10は浅鉢ⅡＢ類。口縁部は若干内傾し、端部の外反も弱い。11～16は甕の底部。11は底面に織物痕が残る。17～19は壺底部。

21は柱状片刃石斧の身部。緊縛するための突起を持つ。22は磨製石鏃。断面は厚い菱形で、茎部も多角形を呈する。鏑が茎部にまで達する。23は大形の石庖丁。未製品と思われ、未穿孔で仕上げまで達していない。残存長17.4cm。

SD192（図69）

弥生下層水田の直下にて検出した自然流路である。SD187から分岐した数条の流路のうちのひとつである。幅1.2ｍ～2.4ｍ、深さ10cm～40cmである。検出段階では土坑と流路の切り合いかと思ったが掘り下げていく段階で、土坑状の深まりは流路の一部と判明した。埋土は黒褐色細砂である。

24は甕Ⅲ類。口縁端部は面取りせず、口縁部の下端に浅く小さな刻み目を施す。口縁部の外反が強い。25も甕Ⅲ類で、口縁端面の下端部を中心に刻み目を施す。胴部が張るものか。26,27は甕の底部片と思われる。

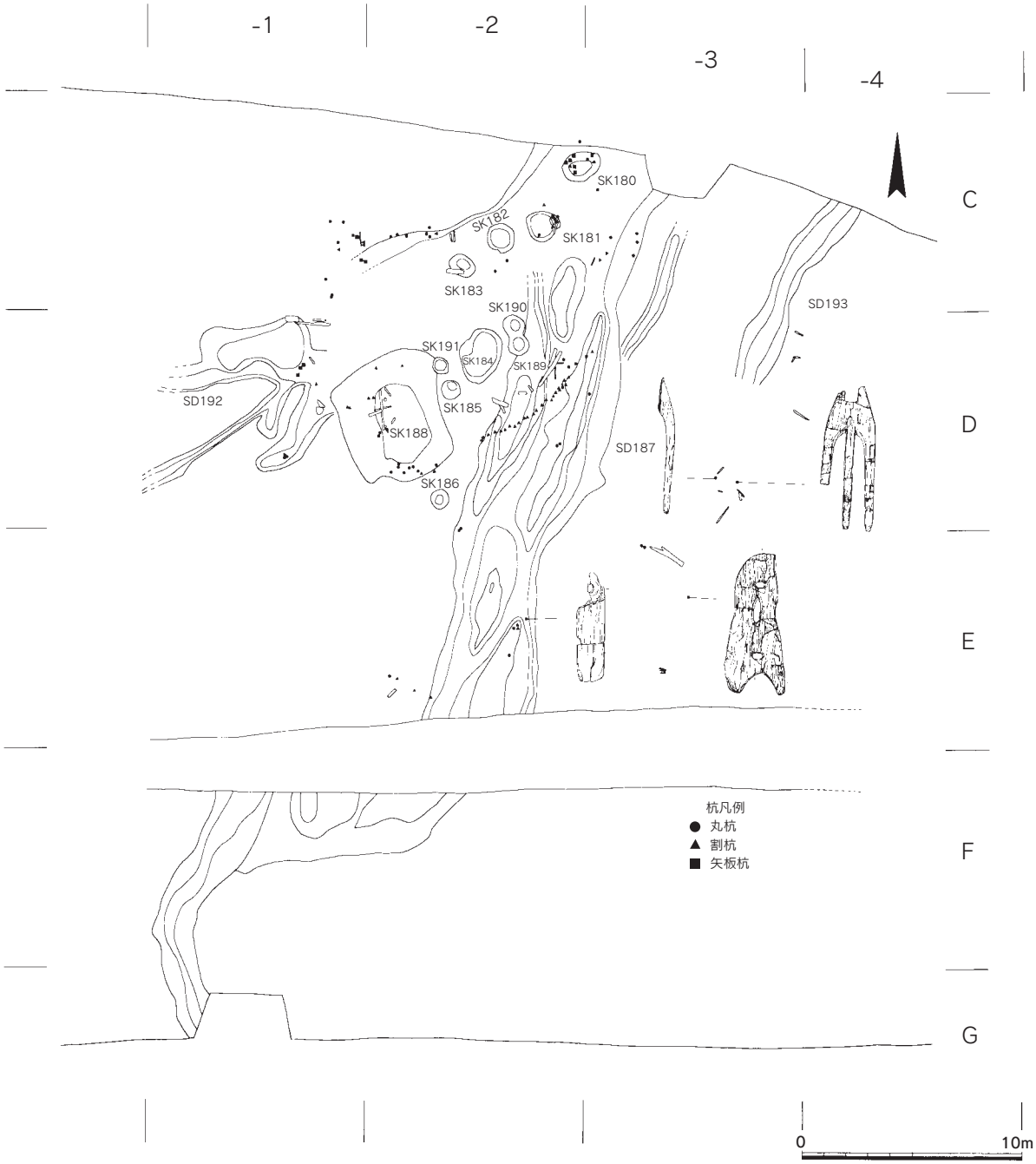


図66　弥生自然流路・ドングリ土坑（1/300）

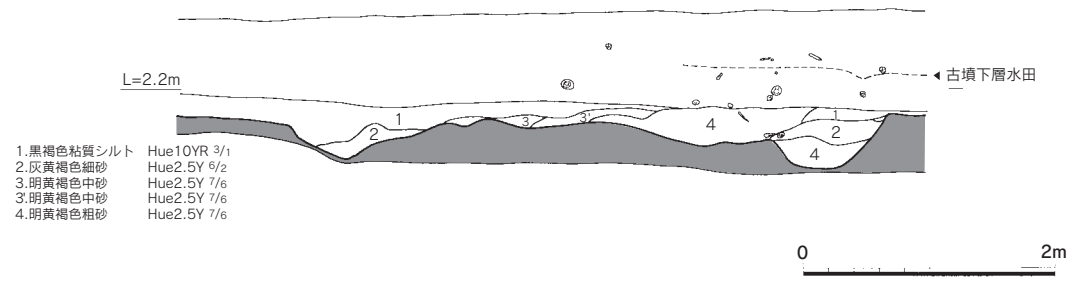


図67　SD187土層（1/60）

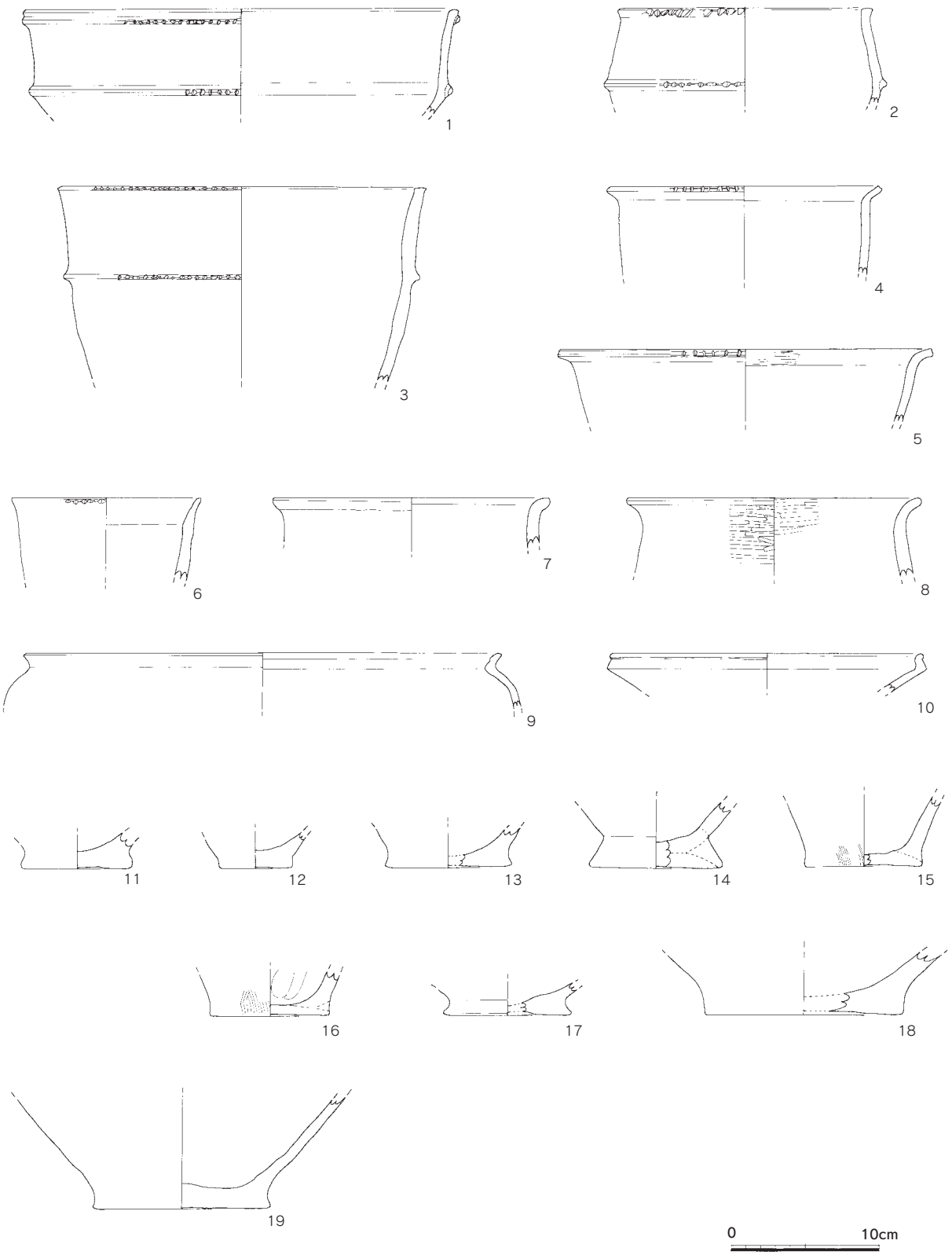


図68　SD187出土土器（1/4）

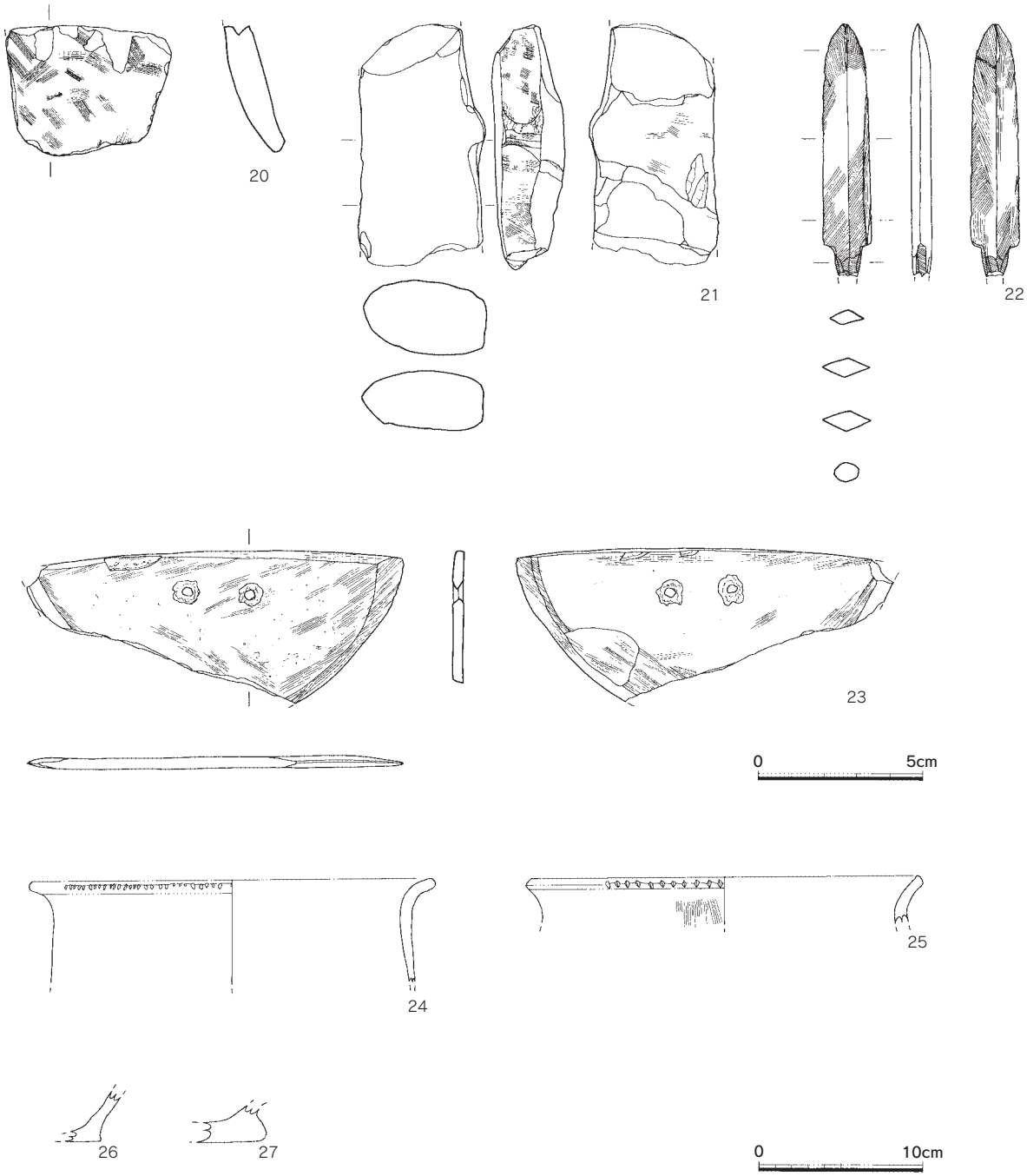


図69　SD187・SD192出土土器・石器（1/4・1/2）

表４　包含層・遺構出土土器一覧表（１）

挿図-番号	登録番号	出土地点	取上		器種	分類	法量(cm)		色調		胎土	焼成	調整		備考
			No.	層位			器高	口(底)径	外器面	内器面			外器面	内器面	
13-1	99431	D-10	63		甕	Ⅰ	9.9	25.8	黒褐色	黒褐色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	ナデ	条痕後ナデ	
〃-2	97311	D-8		7	甕	Ⅰ	12.9	20.2	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	1～２mmの砂粒を多く含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-3	99430	D-9	111		甕	Ⅰ	6.2	20.6	黒褐色	黒褐色	0.5～1mmの砂粒を多く含む	良好	ミガキ	ナデ	
〃-4	99429	D-9	24		甕	Ⅰ	9.8	26.2	橙色	灰黄褐色	0.5～5mmの砂粒を含む	不良	ナデ	ナデ	外器面に黒斑あり
〃-5	99428	D-8	85		甕	Ⅰ	7.5	19.1	黒褐色	黒褐色	0.5～5mmの砂粒を含む	良好	ミガキ	ナデ	精製品
〃-6	99433	E-10	47		甕	Ⅰ	7	25	暗褐色	黒褐色	0.5～3mmの砂粒を含む	やや不良	条痕後ナデ	条痕	
〃-7	99432	E-10	45		甕	Ⅰ	14.5	30.6	黒褐色	黒褐色	0.5～3mmの砂粒を含む	やや不良	条痕	条痕	
〃-8	99424	C-7		7	甕	Ⅰ	13.8	25	橙色	にぶい黄褐色	0.5～3mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-9	99425	C-7		7	甕	Ⅰ	12.4	21.5	橙色	黒褐色	0.5～4mmの砂粒を含む	やや不良	ナデ	条痕	
〃-10	99325	E-11	190	7ｂ	甕	Ⅰ	19	30.9	にぶい赤褐色	褐色	0.1～2mmの砂粒を多く含む	やや不良	条痕後ナデ	条痕後ナデ	
14-11	99420	B-4	3		甕	Ⅰ	11.2	21.8	にぶい黄褐色	黒褐色	0.5～4mmの砂粒を含む	良好	条痕後ナデ	ナデ	外器面に煤付着
〃-12	99434	E-11	138		甕	Ⅰ	13.5	19.5	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	ナデ	条痕後ナデ	外器面接合痕明瞭
〃-13	983323	D-9	111		甕	Ⅰ	13.5	18.2	橙色	黒褐色	1mmの砂粒を含む	良好	条痕後ナデ	条痕後ナデ	D-9のNo.101,103,104,106と接合
〃-14	99329	B-2	15		甕	Ⅰ	25	20.6	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	１mmの砂粒を多く含む	良好	ナデ	ナデ	指頭圧痕を残す
〃-15	981770	C-3	10		甕	ⅡA	7	16.8	にぶい黄褐色	灰黄色	0.5～1mmの砂粒を多く含む	やや不良	ナデ、条痕	ナデ、条痕	
〃-16	97313	D-8		7	甕	ⅡA	12.3		灰黒色	黄白色	1～3mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-17	981769	E-11	120		甕	ⅡA	6		にぶい黄褐色	黒褐色	0.5～1mmの砂粒を多く含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-18	99401	E-11	53		甕	ⅡB①	5.6	31.6	黒褐色	灰黄褐色	0.5～1mmの砂粒を多く含む	良好	ナデ	ナデ	ⅡB①の可能性もあり
〃-19	981773	E-11	153		甕	ⅡA	8.5	18	暗褐色	黒褐色	0.5～5mmの砂粒を含む	良好	ナデ、条痕	条痕後ナデ	
〃-20	981764	B-2	11		甕	ⅡB①	7.5	16.4	にぶい黄橙色	褐色	0.5～3mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-21	981775	E-11	147		甕	ⅡA	4.9	26.2	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	0.5～1mmの砂粒を多く含む	良好	ナデ、条痕	条痕	補修痕あり
〃-22	99403	E-10	42		甕	ⅡＢ①	14.9	27	褐色	にぶい黄橙色	0.5～3mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
15-23	97317	D-10		7	甕	ⅡB①	40.7	33.6	灰黄色	黒灰色	細砂粒～3mmの砂粒を含む	良好	ナデ、条痕	条痕	
〃-24	99408	C-6	9,10		甕	ⅡB②	8.2	17.2	黒褐色	にぶい黄褐色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-25	98209	C-6	52		甕	ⅡB②	20.6	22.6	にぶい黄褐色	黒褐色	0.5mm以下の砂粒を多く含む	良好	条痕後ナデ	条痕後ナデ	
〃-26	98210	E-11	83		甕	ⅡB①	25.3	30.4	にぶい橙色	にぶい橙色	１mm大の砂粒を多く含む	良好	条痕後ナデ	条痕、条痕後ナデ	
〃-27	99414	E-11	58		甕	ⅡB	11.7	22.6	にぶい黄橙色	黒褐色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	条痕後ナデ、ナデ	ナデ	
〃-28	99412	E-11	202		甕	ⅡB②	9.2	25	橙色	にぶい黄橙色	0.5～4mmの砂粒を含む	やや不良	条痕、ナデ	条痕後ナデ	
〃-29	99417	E-12	14		甕	ⅡB②	6.8	25.7	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	0.5～2mmの砂粒を含む	やや不良	条痕、ナデ	条痕	
16-30	97316	E-11	83		甕	ⅡB②	28.4	26.1	にぶい灰黄色	にぶい灰黄色	細砂粒～2mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-31	98203	E-11	161		甕	ⅡB②	12.2	19.5	褐灰色	にぶい褐色	1mm未満の砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	

表５　包含層・遺構出土土器一覧表（2）

挿図-番号	登録番号	出土地点	取上		器種	分類	法量(cm)		色調		胎土	焼成	調整		備考
			No.	層位			器高	口(底)径	外器面	内器面			外器面	内器面	
16-32	01836	F-16	19		甕	ⅡB②	10.6	20.8	灰褐色	灰褐色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	ハケ目	ハケ目、ナデ、条痕	
〃-33	99413	E-11	202		甕	ⅡB②	7.4	34.6	明褐色	にぶい黄橙色	0.5～3mmの砂粒を含む	やや不良	ナデ、条痕	ナデ	
〃-34	98207	C-6	42	7b	甕	ⅡB②	13.8		褐灰色	にぶい褐色	1mm未満の砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-35	97309	E-11	45		甕	ⅡB②	8.3	24.8	黄灰色	にぶい黄褐色	1mm未満の砂粒を含む	良好	ナデ、条痕	ナデ	
〃-36	98212	E-11	174		甕	ⅡB②	19	17.1	にぶい褐色	にぶい黄橙色	1mm未満の砂粒を含む	やや不良	ナデ、条痕	条痕後ナデ、ナデ	外器面全体に煤付着
〃-37	98211	C-6	42	7b	甕	ⅡB②	23.9	23	にぶい黄褐色	にぶい黄橙色	1mm未満の砂粒を多く含む	良好	ナデ	ナデ、条痕	
17-38	99407	F-15	21,53		甕	ⅡB②	12	22	にぶい黄褐色	黄褐色	0.5～5mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-39	98202	E-11	172		甕	ⅡB②	12.4	19.3	灰黄色	にぶい黄橙色	1mm前後の砂粒を多く含む	やや不良	ナデ	ナデ	
〃-40	98436	B-2		7b	甕	ⅡB②	15.4	19.9	橙色	橙色	0.5～4mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-41	983303	F-7			甕	ⅡB②	15.9	22.5	浅黄橙色	にぶい橙色	0.1～１mmの砂粒を多く含む	やや不良	ハケ目	ナデ	P2105出土
〃-42	99409	E-10	46		甕	Ⅱ	12.1	24.2	にぶい橙色	褐色	0.5～4mmの砂粒を含む	良好	条痕	条痕、条痕後ナデ	
〃-43	983304	F-15	27		甕	ⅡB②	7.3	19.4	浅黄色	にぶい黄橙色	１mm前後の砂粒を含む	良好	ナデ	?	
〃-44	981765	C-5	30,31		甕	Ⅱ	15.8	21.9	明黄褐色	にぶい黄橙色	0.5～1mmの砂粒を含む	やや不良	ナデ	ナデ	C-5のNo.42,43,44と接合
〃-45	971877	E-10		7？	甕	Ⅱ	14.1	32.2	黒褐色	黒褐色	5mm未満の砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
18-46	981772	E-10	52,53		甕	Ⅱ	9.9	18.6	にぶい黄橙色	灰黄褐色	0.5～5mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ、条痕	
〃-47	981768	E-11	10		甕	Ⅱ	7.3	14.6	にぶい黄橙色	橙色	0.5～2mmの砂粒を含む	やや不良	ナデ	条痕、ナデ	
〃-48	99402	E-12		7b	甕	Ⅱ	4	16.4	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	0.5～2mmの砂粒を含む	やや不良	ナデ	ナデ	
〃-49	99404	D-9		7b	甕	Ⅱ	6.7	24.8	黒褐色	にぶい黄橙色	0.5～5mmの砂粒を含む	良好	ナデ	条痕後ナデ	
〃-50	98438	C-5	6		甕	Ⅱ	7.1		黒褐色	暗褐色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	条痕	ナデ、条痕	
〃-51	981766	D-6		7b	甕	Ⅱ	4.6	24.2	黒褐色	黒褐色	0.5～5mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-52	99405	D-8	91		甕	Ⅱ	4.6		にぶい黄橙色	黒褐色	0.5～3mmの砂粒を含む	良好	条痕	条痕	D-9の7b層出土品と接合
〃-53	01837	F-16	64		甕	Ⅱ	14.0	17.8	赤褐色	赤褐色	1mm前後の砂粒を含む	良好	ハケ目	ナデ	
〃-54	99427	D-8	73		甕	Ⅲ	4.7		黒褐色	黒褐色	0.5～3mmの砂粒を含む	良好	条痕後ナデ	条痕後ナデ	
〃-55	98425	D-7	5		甕	Ⅲ	6.6	21.4	明赤褐色	暗褐色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-56	983305	F-15	63		甕	Ⅲ	6.6	29.3	灰黄褐色	灰黄褐色	1mm前後の砂粒を多く含む	良好	ハケ目	ハケ目、ナデ	
〃-57	98387	F-15	56		甕	Ⅲ	12.5	24.1	橙色	橙色	1mm未満の砂粒を多く含む	良好	ハケ目	ハケ目、ナデ	
〃-58	98428	G-7	3		甕	Ⅲ	21	23.4	赤褐色	にぶい黄橙色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	ハケ目	ハケ目、ナデ	
19-59	98427	F-7	2		甕	Ⅲ	22.2	23.6	灰黄褐色	にぶい黄褐色	0.5～3mmの砂粒を含む	良好	ナデ、ハケ目	ハケ目、ナデ	
〃-60	98400	G-10		7	甕	Ⅲ	14.6	22.6	橙色	橙色	0.5～1.5mmの砂粒を含む	良好	ハケ目	ハケ目、ナデ	
〃-61	983309	F-6	5		甕	Ⅳ	5.3	24.4	灰白色	にぶい黄橙色	1mm前後の砂粒を多く含む	良好	ナデ、ハケ目	ナデ	
〃-62	983302	C-14	1		甕	Ⅳ	7.6	27.2	にぶい橙色	にぶい橙色	1～2mmの砂粒を多く含む	良好	ナデ、ハケ目	ナデ	

表6　包含層・遺構出土土器一覧表（3）

挿図-番号	登録番号	出土地点	取上		器種	分類	法量(cm)		色調		胎土	焼成	調整		備考
			No.	層位			器高	口(底)径	外器面	内器面			外器面	内器面	
19-63	983307	F-6	5		甕	Ⅳ	6	26.2	にぶい橙色	橙色	1～2mmの砂粒を含む	良好	ナデ、ハケ目	ナデ	
〃-64	983308	F-6	12		甕	Ⅳ	4	25.4	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	0.5～3mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-65	983306	F-6	13		甕	Ⅳ	4.6	25.2	にぶい橙色	にぶい橙色	1～2mmの砂粒を多く含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-66	99480	C-5,6			壺	ⅡA	5.4	9.7	明赤褐色	明赤褐色	0.5～3mmの砂粒を含む	良好	ミガキ	ミガキ、ナデ	
〃-67	99496	E-11	65		壺	ⅡA	7.8	10.2	明赤褐色	明赤褐色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	ミガキ	ミガキ、ナデ	
〃-68	99498	E-11	118		壺	ⅡA	8.6	17	明赤褐色	明赤褐色	0.5～1mmの砂粒を含む	良好	ミガキ	ナデ	
〃-69	99483	D-9	22		壺	ⅡA	3.6		橙色	橙色	細砂粒を含む	良好	ミガキ	ミガキ	
〃-70	99489	E-11	152		壺	ⅡA	3.8	12.2	明赤褐色	明赤褐色	細砂粒を含む	良好	ミガキ	ミガキ	
〃-71	99483	D-7	27		壺	ⅡA	4.8	10.8	橙色	橙色	0.5～1mmの砂粒を含む	不良	ミガキ	ミガキ、ナデ	
〃-72	99485	D-10	55		壺	ⅡA	4.5	12	明赤褐色	明赤褐色	0.5～1mmの砂粒を含む	良好	ミガキ	ミガキ	
〃-73	99495	E-11	57,166		壺	ⅡA	10.7	17.8	明褐色	にぶい黄橙色	0.5～3mmの砂粒を含む	良好	ミガキ	ミガキ	
20-74	99500	F-7		7	壺	ⅡA	5.8	13.6	明赤褐色	明赤褐色	0.5～1mmの砂粒を含む	良好	ミガキ	ミガキ、ナデ	
〃-75	98411	D-8	64		壺	ⅡA	6.6	11	明赤褐色	明赤褐色	0.5～1mmの砂粒を含む	良好	ミガキ	ミガキ、ナデ	
〃-76	99497	E-11	93		壺	ⅡA	8.4	16	明赤褐色	にぶい赤褐色	0.5～3mmの砂粒を含む	良好	ミガキ後ナデ	ナデ	
〃-77	971870	E-11	60		壺	ⅡA	10.2	14.4	灰黄色	暗褐色	1mm以下の砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ、条痕	
〃-78	97295	D-10		8	壺	ⅡA	9	13.6	橙色	暗橙色	1mm以下の砂粒を含む	良好	ミガキ	ミガキ、ナデ	
〃-79	99493	C-6	42,64		壺	ⅡA	13.6	19.6	明赤褐色	橙色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	ミガキ	ミガキ、ナデ	
〃-80	99506	B-2		7b	壺	ⅡA	15	25.2	明赤褐色	明褐色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	ミガキ	ミガキ、ナデ	
〃-81	011032	F-16	34		壺	ⅡA	31.1	20.9	淡黄色	淡黄色	0.5mm前後の砂粒を含む	良好	ミガキ	ミガキ、ナデ、ハケ目	
21-82	99481	C-5	4		壺	ⅡA	4.5	9.8	明黄褐色	にぶい黄橙色	0.5～1mmの砂粒を含む	良好	ミガキ	ミガキ、ナデ	
〃-83	99491	D-8	72		壺	ⅡA	6.4	14.2	明赤褐色	明赤褐色	0.5～1mmの砂粒を含む	やや不良	ミガキ	ミガキ ミガキ、	
〃-84	99501	F-16	11		壺	ⅡA	9.4	27	暗褐色	明赤褐色	0.5～2mmの砂粒を含む	やや不良	ミガキ	ナデ ミガキ、	
〃-85	99486	E-10	4		壺	ⅡB	4.7	10.6	褐色	黒褐色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	ミガキ	ナデ	
〃-86	99490	B-2		7b	壺	ⅡB	6.4	18	褐色	にぶい黄橙色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	ミガキ	ナデ	
〃-87	99494	D-9	108		壺	ⅡB	12.1	19.6	にぶい黄橙色	暗灰黄色	0.5～4mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-88	99484	D-9	120		壺	ⅡB	8.9		灰黄色	灰黄褐色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	ミガキ	ミガキ、ナデ	
〃-89	99488	E-11	132		壺	ⅡB	9.2	8	黄褐色	にぶい黄橙色	0.5～1mmの砂粒を含む	良好	ミガキ	ミガキ、ナデ	
〃-90	99492	D-9	126		壺	ⅡB	10.3	14.8	褐色	灰黄褐色	0.5～1mmの砂粒を含む	良好	条痕後ナデ、ナデ	条痕後ナデ、ナデ	
〃-91	99487	E-11	34		壺	ⅡC	3.8	13.4	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	細砂粒を含む	良好	ミガキ	ミガキ	99502と同じ胎土、焼成
〃-92	99499	E-12	6		壺	ⅡC	8	25.6	明赤褐色	明赤褐色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	ミガキ	ミガキ、ナデ	
〃-93	98444	D-7	20		壺	ⅡC	8	21.2	暗褐色	黒褐色	0.5～1mmの砂粒を含む	良好	ミガキ後ナデ	ミガキ	鉢か？

表７　包含層・遺構出土土器一覧表（4）

挿図-番号	登録番号	出土地点	取上		器種	分類	法量(cm)		色調		胎土	焼成	調整		備考
			No.	層位			器高	口(底)径	外器面	内器面			外器面	内器面	
21-94	99479	E-12		7	壺	ⅡC	7.1	13	明赤褐色	明赤褐色	細砂粒を含む	良好	ミガキ	ミガキ	鉢か？
〃-95	971876	D-9	52,94		壺	ⅡC	10.3	19	にぶい黄褐色	灰黄褐色	5mm以下の砂粒を多く含む	良好	ナデ	ナデ	粗製品
22-96	99502	D-7		6	壺	ⅢA	4.6	12.6	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	細砂粒を含む	良好	ミガキ	ミガキ、ナデ	非常に焼成が良い。丁寧なつくり
〃-97	99504	D-7	15		壺	ⅢA	4.7	15.2	橙色	灰黄褐色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-98	99505	F-15	41		壺	ⅢA	3.5	18	にぶい黄褐色	橙色	0.5～1mmの砂粒を含む	良好	ミガキ	ミガキ	
〃-99	99504	F-6,7		6,7	壺	ⅢB	4.0		暗褐色	暗褐色	0.5～3mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-100	01839	E-24		7	壺	ⅢA	5.9		赤褐色	赤褐色	2mm前後の砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-101	99503	D-7	9		壺	ⅢA	7.2	23.2	にぶい黄橙色	にぶい黄褐色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	ミガキ	ミガキ、ナデ	
〃-102	98378	F-6	15		壺	ⅢA	10.8	6.8	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	細砂粒を含む	良好	ハケ目、ハケ目後ミガキ	ミガキ、ナデ	
〃-103	971873	D-7		6	浅鉢	Ⅰ	3.5	12.4	橙色	黒褐色	3mm以下の砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	補修痕あり
〃-104	99326	D-9	11		浅鉢	Ⅰ	5.4	12.3	黄灰色	暗灰黄色	細砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-105	971868	D-9	84		浅鉢	Ⅰ	3.2	20.7	暗灰黄色	浅黄色	0.5～1mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-106	992215	F-14		7	浅鉢	Ⅰ	3.6		灰黄色	灰黄色	0.5～1mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	甕の可能性もあり
〃-107	992213	D-8	54		浅鉢	Ⅰ	5.4		にぶい黄橙色	灰黄褐色	0.5～1mmの砂粒を含む	良好	ミガキ	ミガキ	甕の可能性もあり
〃-108	992214	D-9	124		浅鉢	Ⅰ	5.9		橙色	黒褐色	0.5～1mmの砂粒を含む	良好	ナデ	条痕後ナデ	甕の可能性もあり
〃-109	99328	B-4	6		浅鉢	Ⅰ	8.5	24.1	にぶい褐色	灰褐色	細砂粒を含む	良好	ミガキ	ミガキ	
〃-110	98435	E-11	22		浅鉢	Ⅰ	9.2	28.6	にぶい黄橙色	灰黄色	0.5～1mmの砂粒を含む	良好	ミガキ	ミガキ	
〃-111	99304	E-12		7	浅鉢	ⅡA①	4.4	20.2	橙色	にぶい黄橙色	0.5～1mmの砂粒を含む	やや不良	ミガキ	ナデ	
〃-112	983318	C-5	15		浅鉢	ⅡA①	5.1	24.2	灰黄褐色	黒褐色	5mm以下の砂粒を多く含む	良好	ナデ、条痕後ナデ	ナデ	
〃-113	983317	C-3	6		浅鉢	ⅡA①	4.2	21	黒褐色	灰黄色	0.5～1mmの砂粒を含む	良好	ナデ、ミガキ	ミガキ	
〃-114	983315	C-6	70		浅鉢	ⅡA①	4.3	25.6	褐色	褐色	1mmの砂粒を含む。赤斑あり	良好	ナデ、条痕後ミガキ	ナデ、ミガキ	
〃-115	983320	C-5	22		浅鉢	ⅡA①	5.6	19.1	黒褐色	灰黄褐色	0.5～1mmの砂粒を含む	良好	ミガキ	ナデ	
〃-116	99303	E-11		7	浅鉢	ⅡA①	6.2	23	灰黄褐色	黒褐色	細砂粒を含む	良好	ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ後ナデ	
23-117	983311	B-1		7	浅鉢	ⅡA①	5	24.6	黒褐色	黒褐色	細砂粒を含む	良好	ミガキ、ナデ	ミガキ、ナデ	
〃-118	99307	E-11	57		浅鉢	ⅡA①	4.5	30.5	黄灰色	黒褐色	0.5～1mmの砂粒を含む	良好	ミガキ	ミガキ	
〃-119	97308	E-11		7b	浅鉢	ⅡA①	8	23.4	黄灰色	黄灰色	細砂粒を含む	良好	ミガキ、条痕	ミガキ	
〃-120	99308	E-11	57		浅鉢	ⅡA①	8	30.1	にぶい黄橙色	黒褐色	0.5～1mmの砂粒を含む	良好	ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ	
〃-121	99311	F-15	19		浅鉢	ⅡA①	6	23.2	明黄褐色	にぶい黄橙色	0.5～1mmの砂粒を多く含む	良好	ナデ？	ナデ、ミガキ	
〃-122	98446	E-11	182		浅鉢	ⅡA①	4	20.2	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	0.5～1mmの砂粒を多く含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-123	97312	F-15	60		浅鉢	ⅡA①	8	19.2	灰黄褐色	灰黄褐色	0.5～1mmの砂粒を多く含む	不良	ナデ	ナデ	
〃-124	981767	D-9	2		浅鉢	ⅡA①	5.9	26.1	黒褐色	橙色	0.5～1mmの砂粒を含む	やや不良	ナデ	ナデ、条痕	口唇部、屈曲部に刻目あり

表８　包含層・遺構出土土器一覧表（5）

挿図-番号	登録番号	出土地点	取上		器種	分類	法量(cm)		色調		胎土	焼成	調整		備考
			No.	層位			器高	口(底)径	外器面	内器面			外器面	内器面	
23-125	983319	C-6	62		浅鉢	ⅡA①	9.5	19.2	黒褐色	黒褐色	0.5～1mmの砂粒を多く含む	良好	ミガキ、ナデ	ナデ	完形に復元
〃-126	99309	E-11	197		浅鉢	ⅡA①	11.7	25.6	黒褐色	黒褐色	細砂粒を多く含む	やや不良	ミガキ、条痕後ナデ	ナデ、条痕	完形に復元
〃-127	971850	E-11	150		浅鉢	ⅡA①	10.5	16.1	橙色	橙色	2mm以下の砂粒を含む	良好	ミガキ	ミガキ、ナデ	完形品
〃-128	98445	E-10	34		浅鉢	ⅡA①	8.3	25.6	暗褐色	にぶい黄褐色	0.5～1mmの砂粒を含む	やや不良	条痕	条痕	
〃-129	983325	D-9		7？	浅鉢	ⅡA①	6.3	17	黒褐色	灰黒色	細砂粒を含む	良好	ミガキ	ミガキ、ナデ	
〃-130	99310	E-11	126		浅鉢	ⅡA①	6.5	17	黄灰色	黄灰色	0.5～1mmの砂粒を含む	良好	ミガキ	ミガキ ミガキ後	
24-131	99305	E-8	57		浅鉢	ⅡA①	5	20.5	灰黄褐色	灰黄褐色	細砂粒を含む	良好	ミガキ	ナデ	
〃-132	983322	C-6	47		浅鉢	ⅡA①	6.9	22.2	灰黄褐色	黒褐色	細砂粒を含む	良好	ミガキ	ミガキ	
〃-133	971867	D-9	トレンチ		浅鉢	ⅡA②	7.3	21	暗褐色	黒褐色	2mm以下の砂粒を含む	良好	ミガキ	ミガキ	
〃-134	99301	D-10	30		浅鉢	ⅡA①	5.7	30.4	黄灰色	灰黒色	細砂粒を多く含む	良好	ミガキ後ナデ	ミガキ後ナデ	
〃-135	983321	C-6	17		浅鉢	ⅡA②	8	26.6	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	2mm以下の砂粒を含む	良好	ミガキ後ナデ	ミガキ	
〃-136	99361	B-2		7b	浅鉢	ⅡA②	9.7	30.5	にぶい黄褐色	黒褐色	1～2mmの砂粒を多く含む	良好	ミガキ	ミガキ	
〃-137	983316	C-4	6		浅鉢	ⅡA②	5.6	16	黄灰色	黒褐色	0.5～1mmの砂粒を多く含む	良好	ミガキ	ミガキ後ナデ	
〃-138	99306	E-10	32		浅鉢	ⅡA②	6	32.6	褐灰色	黒褐色	0.5～1mmの砂粒を含む	良好	ミガキ、条痕	ナデ	
〃-139	99351	C-5		7b	浅鉢	ⅡA②	4.6	19.4	灰黄褐色	灰黄褐色	0.5～1mmの砂粒を含む	良好	ミガキ	ミガキ	
〃-140	983324	D-8	30		浅鉢	ⅡA②	5.7	29.2	にぶい褐色	黒褐色	細砂粒を多く含む	良好	ミガキ	ミガキ	
〃-141	983312	B-2	2		浅鉢	ⅡA②	6.7	21.6	暗褐色	にぶい黄褐色	0.5～1mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-142	983313	B-1	3		浅鉢	ⅡA②	7.8	33.7	にぶい黄褐色	黒褐色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	ミガキ後ナデ	ミガキ後ナデ	
〃-143	983314	B-4	4		浅鉢	ⅡA②	10.3	25.4	灰黄褐色	明黄灰色	3mm未満の砂粒を含む	良好	ミガキ後ナデ、条痕	ナデ	
〃-144	99302	E-10	51		浅鉢	ⅡA②	5.1	32.5	暗灰黄色	暗灰黄色	0.5～1mmの砂粒を多く含む	やや不良	ミガキ	ナデ	
25-145	99511	B-1		7b	浅鉢	ⅡB	11.3		黒褐色	黒褐色	0.5～1mmの砂粒を含む	良好	条痕後ミガキ	ミガキ	B-2No.3、7b層出土品と接合
〃-146	99509	C-4		7b	浅鉢	ⅡB	6.3		黒褐色	黒褐色	0.5～1mmの砂粒を含む	良好	ミガキ、条痕	ミガキ	
〃-147	99525	E-11	103		浅鉢	ⅡB	6.6		明赤褐色	明赤褐色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	ミガキ	ミガキ	
〃-148	99521	E-10		7	浅鉢	ⅡB	5.4		黒褐色	黒褐色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	ミガキ、条痕後ナデ	ミガキ	
〃-149	99522	E-11		7b	浅鉢	ⅡB	7		黒褐色	黒褐色	0.5～1mmの砂粒を含む	良好	ミガキ	ミガキ	
〃-150	99507	B-1	5		浅鉢	ⅡB	3.9		暗褐色	暗褐色	細砂粒を含む	良好	ミガキ	ミガキ	
〃-151	99517	D-8		7b	浅鉢	ⅡB	5		黒褐色	黒褐色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	ミガキ、条痕	ミガキ	
〃-152	99526	E-11	172		浅鉢	ⅡB	2.4		明赤褐色	明赤褐色	0.5～1mmの砂粒を含む	良好	ミガキ	ミガキ	
〃-153	99513	B-7～9			浅鉢	ⅡB	3.4		黒褐色	黒褐色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	条痕後ミガキ	ミガキ	
〃-154	99508	B-5		7	浅鉢	ⅡB	3.1		黒褐色	黒褐色	0.5～1mmの砂粒を含む	やや不良	ナデ	ナデ	
〃-155	99514	C-5		7b	浅鉢	ⅡB	4.5		黒褐色	黒褐色	細砂粒を含む	良好	ミガキ、条痕	ミガキ	

表９　包含層・遺構出土土器一覧表（6）

挿図-番号	登録番号	出土地点	取上		器種	分類	法量(cm)		色調		胎土	焼成	調整		備考
			No.	層位			器高	口(底)径	外器面	内器面			外器面	内器面	
25-156	99520	E-10			浅鉢	ⅡB	7.3		橙色	にぶい黄橙色	0.5～1mmの砂粒を含む	良好	ミガキ、条痕後ミガキ	ミガキ	
〃-157	99515	C-5	8		浅鉢	ⅡB	7.1		黒褐色	黒褐色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	ミガキ、条痕後ミガキ	ミガキ	
26-158	99510	C-6	71		浅鉢	ⅡB	5.4		黒褐色	にぶい黄橙色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ミガキ後ナデ	
〃-159	99516	C-6	7		浅鉢	ⅡB	3.9		黒褐色	黒褐色	0.5～1mmの砂粒を含む	良好	ミガキ、条痕	ミガキ	
〃-160	99519	D-9	72		浅鉢	ⅡB	4.9		黒褐色	黒褐色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	ミガキ	ミガキ	
〃-161	99523	E-11		7	浅鉢	ⅡB	3.2		暗褐色	黒褐色	0.5～1mmの砂粒を含む	やや不良	ミガキ	ミガキ	
〃-162	992216	C-3		7b	浅鉢	ⅡB？	3.1		にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	0.5～1mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-163	99524	E-11			浅鉢	ⅡB	5		黒褐色	黒褐色	0.5～1mmの砂粒を含む	良好	ミガキ	ミガキ	
〃-164	99415	E-11	50		鉢	Ⅱ	5.3		黒褐色	黒褐色	0.5～5mmの砂粒を含む	良好	ナデ、条痕後ナデ	ミガキ	
〃-165	981771	C-5	13		鉢	Ⅱ	6	17.8	黒褐色	黒褐色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-166	99426	D-9	66		鉢	Ⅰ	10.5	14.2	黒褐色	にぶい黄褐色	0.5～5mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	完形に復元
〃-167	99421	C-6	72		鉢	Ⅰ	11.6	13.2	褐色	黒褐色	0.5～3mmの砂粒を含む	良好	ミガキ	ミガキ	完形に復元
〃-168	99423	D-6	17		鉢	Ⅰ	15.6	17.1	にぶい黄橙色	暗褐色	0.5～3mmの砂粒を含む	やや不良	ナデ	条痕、条痕後ナデ	完形に復元
〃-169	97314	D-8	63		鉢	Ⅰ	16.4	19.6	にぶい黄橙色	灰黒色	0.5～3mmの砂粒を多く含む	不良	条痕	条痕	完形に復元
〃-170	99320	D-6	17		鉢	Ⅱ？	5.1		にぶい黄褐色	灰黄色	0.5～1mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-171	99321	E-11	201		鉢	Ⅱ？	5.4	12	灰色	灰色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	ミガキ	ミガキ	完形に復元
〃-172	99317	C-4	11		鉢	Ⅱ？	5		赤褐色	にぶい褐色	0.5～1mmの砂粒を多く含む	良好	ミガキ	ミガキ	丹塗磨研
27-173	97307	D-8	58		鉢	Ⅱ？	6.2	10	橙色	橙色	細砂粒を含む	良好	ミガキ	ミガキ、ナデ	完形に復元、丹塗磨研
〃-174	99316	C-6	55		鉢	Ⅱ？	5.7	14	橙色	橙色	0.5～1mmの砂粒を含む	良好	ミガキ	ミガキ、ナデ	丹塗磨研
〃-175	99318	C-6	67		鉢	Ⅱ？	6.7	14.6	赤褐色	赤褐色	0.5～1mmの砂粒を含む	良好	ミガキ	ミガキ	丹塗磨研
〃-176	99315	B-2		7b	鉢	Ⅱ？	6.9	14	赤褐色	赤褐色	0.5～1mmの砂粒を含む	良好	ミガキ	ミガキ？、ナデ	丹塗磨研
〃-177	99314	B-3			鉢	Ⅱ？	5.8	16.2	にぶい橙色	灰褐色	1～4mmの砂粒を多く含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-178	99319	D-10	56		鉢	Ⅱ？	6.5	14.1	暗褐色	暗褐色	細砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-179	99323	E-11	200		鉢	Ⅱ？	5.6	28.2	暗赤褐色	黒褐色	1～4mmの砂粒を多く含む	良好		ナデ	
〃-180	99322	E-10	33		鉢	Ⅱ？	7.5	20.4	明赤褐色	にぶい赤褐色	1～4mmの砂粒を多く含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-181	99324	E-11	59		鉢	Ⅱ？	7.8	19.6	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	0.5～2mmの砂粒を含む	やや不良	条痕後ナデ	ナデ	鉢の可能性あり
〃-182	99313	G-15		6	鉢	Ⅱ？	6.6	25.5	黄灰色	黒褐色	細砂粒を含む	良好	ミガキ	ミガキ	
〃-183	992227	D-10	31		鉢		9		橙色	暗褐色	0.5～5mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	D-10No.32,34と接合組織痕をもつ。刷痕有り
〃-184	992225	B-3			鉢		5.5		にぶい黄橙色	黒褐色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好		ナデ	組織痕をもつ
〃-185	992230	E-10		7	鉢		1.9		橙色	褐色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好		ナデ	組織痕をもつ
〃-186	993326	C-5		7b	鉢		4.6		にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好		ナデ	組織痕をもつ

表10　包含層・遺構出土土器一覧表（7）

挿図-番号	登録番号	出土地点	取上		器種	分類	法量(cm)		色調		胎土	焼成	調整		備考
			No.	層位			器高	口(底)径	外器面	内器面			外器面	内器面	
27-187	993329	D-10		7	鉢		3		褐色	黒褐色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好		ナデ	組織痕をもつ
〃-188	992228	D-10	37		鉢		3.4		橙色	暗褐色	0.5～3mmの砂粒を含む	良好		ナデ	組織痕をもつ
〃-189	992223	B-1		7	鉢		6		灰黄褐色	にぶい黄橙色	0.5～1mmの砂粒を含む	良好		ナデ	組織痕をもつ
〃-190	992224	B-3		7	鉢		5.4		黒褐色	にぶい黄橙色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好		ナデ	組織痕をもつ
〃-191	992231	E-11	177		鉢		5.5		灰黄褐色	黒褐色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好		ナデ	組織痕をもつ
28-192	98206	E-11	188		高杯		11	17.5	にぶい黄橙色	浅黄色	0.5～1mmの砂粒を含む	やや不良	条痕後ナデ	ナデ	
〃-193	98443	C-6	42		高杯		4.5		灰黄褐色	にぶい褐色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	ナデ	条痕	
〃-194	98585	E-11	8		高杯		5	9	橙色	黒褐色	0.5～3mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-195	981751	C-5	16		高杯		5.8	9.2	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	0.5～3mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-196	01840	F-16	13		高杯		9.5		赤褐色	赤褐色	2mm前後の砂粒を含む	良好	ナデ、ミガキ	ナデ	
〃-197	981757	B-7～8		7	高杯		6.4		灰黄色	灰黄色	0.5～3mmの砂粒を含む	良好	ナデ？	ナデ	
〃-198	981758	F-15	14		高杯		7.3		橙色	にぶい橙色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ミガキ？、ナデ	
〃-199	99581	D-9		6 ～7	高杯		5.2	8.6	橙色	にぶい黄橙色	0.5～3mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-200	99579	D-8	61		蓋		2.4	4.9	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	0.5～1mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-201	99587	F-15		7	蓋？		4.1	5.9	明赤褐色	明赤褐色	0.5～5mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-202	981759	F-15	12		蓋		7.1	5.4	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	ハケ目、ナデ	ナデ	
〃-203	981753	E-11	173		蓋？		8.7	8.8	にぶい黄橙色	灰黄褐色	0.5～3mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-204	971869	D-9		7 b	高杯		8.6		橙色	橙色	0.5～3mmの砂粒を含む	良好	ナデ？	ナデ	
〃-205	971854	E-13		6	甕	底部	3.9	(9)	にぶい黄橙色	灰黄褐色	0.5～3mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	籾跡圧痕あり
〃-206	99472	E-11	195		甕	底部	12.2	(8.2)	橙色	にぶい黄橙色	0.5～5mmの砂粒を含む	良好	条痕後ナデ	条痕	
〃-207	98434	E-11	189		甕	底部	17.2	(7.4)	橙色	にぶい橙色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	ナデ	条痕、ナデ	
〃-208	99467	D-10	64		甕	底部	8.3	(7.1)	橙色	黒褐色	0.5～5mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-209	98433	D-8	78		甕	底部	7.5	(9.5)	にぶい黄褐色	にぶい橙色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-210	99442	C-6	5		甕	底部	3.9	(7.1)	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-211	99439	C-4	9,10		甕	底部	4.5	(8.9)	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	0.5～3mmの砂粒を含む	やや不良	ナデ	ナデ	
〃-212	99457	E-11	166		甕	底部	3	(7.3)	褐色	にぶい褐色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-213	99437	B-4	3		甕	底部	5.9	(8.3)	灰黄褐色にぶい	黒褐色	0.5～3mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-214	99438	C-3		7 b	甕	底部	9.7	(21.5)	黄橙色にぶい	暗褐色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
29-215	99564	E-11	171		甕	底部	2.6	(8.6)	橙色	にぶい橙色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-216	99565	E-11	186		甕	底部	3.4	(9.2)	褐色	にぶい褐色	0.5～3mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-217	99456	E-11	135		甕	底部	4.1	(10.2)	灰黄褐色	にぶい黄橙色	0.5～5mmの砂粒を含む	良好	ナデ	条痕	

表11　包含層・遺構出土土器一覧表（8）

挿図-番号	登録番号	出土地点	取上		器種	分類	法量(cm)		色調		胎土	焼成	調整		備考
			No.	層位			器高	口(底)径	外器面	内器面			外器面	内器面	
29-218	98441	C-6	42		甕	底部	5.9	(9.7)	にぶい黄橙色	暗褐色	0.5～3mmの砂粒を含む	良好	ナデ	条痕	
〃-219	99448	D-9	89		甕	底部	2.9	(7.5)	橙色	暗灰黄色	0.5～3mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-220	99450	D-10	36		甕	底部	4.3	(7.4)	暗褐色	にぶい黄橙色	0.5～1mmの砂粒を含む	やや不良	ナデ	ナデ	
〃-221	99559	E-10	37		甕	底部	3.1	(9)	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	0.5～3mmの砂粒を含む	やや不良	ナデ	ナデ	
〃-222	99569	E-13		6～7	甕	底部	3	(7.9)	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	0.5～2mmの砂粒を含む	不良	ナデ	ナデ	
〃-223	99447	D-9	58,60		甕	底部	5.3	(7.9)	明褐色	にぶい黄橙色	0.5～2mmの砂粒を含む	やや不良	ナデ	ナデ	
〃-224	99454	E-11	11		甕	底部	3.2	(8.1)	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	0.5～5mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-225	99460	E-11	191		甕	底部	4.2	(10.4)	赤褐色	橙色	0.5～5mmの砂粒を含む	良好	ナデ	条痕後ナデ	
〃-226	99445	D-8	27		甕	底部	8.5	(8)	にぶい褐色	灰黄褐色	0.5～3mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-227	99458	E-11	167		甕	底部	3.5	(9.3)	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	0.5～3mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-228	99557	C-6	43		甕	底部	3.3	(7.4)	橙色	黒褐色	0.5～3mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-229	99461	E-12	9		甕	底部	3.8	(6.4)	にぶい黄褐色	にぶい黄橙色	0.5～3mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-230	971864	D-8	52		甕	底部	4.1	(7.7)	にぶい黄橙色	にぶい黄褐色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-231	99563	E-11	141		甕	底部	4	(6.9)	橙色	黒褐色	0.5～4mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-232	99552	C-6	63		甕	底部	3.6	(6.8)	にぶい黄橙色	灰黄色	0.5～4mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-233	99436	B-3	6		甕	底部	5.5	(5.2)	にぶい黄橙色	橙色	0.5～5mmの砂粒を含む	やや不良	ナデ	ナデ	
〃-234	99573	B-3	9		甕	底部	4.5	(7.9)	にぶい黄橙色	黒褐色	0.5～3mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	B-1　7b層出土品と接合
〃-235	99441	C-5	32		甕	底部	3.8	(7.1)	橙色	にぶい橙色	0.5～3mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-236	99558	D-9	121		甕	底部	3.1	(8.4)	にぶい黄褐色	灰黄褐色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	ナデ	条痕	
〃-237	981747	D-10	58		甕	底部	5.8	(7.1)	橙色	にぶい黄橙色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	ハケ目	ナデ	
〃-238	99443	C-6	47		甕	底部	4.6	(10.3)	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	条痕、ナデ	条痕	
〃-239	99455	E-11	48,142		甕	底部	6.2	(8.4)	橙色	灰黄褐色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	ナデ	条痕、ナデ	
〃-240	99562	E-11	133		甕	底部	11.4	(8.6)	明赤褐色	にぶい黄橙色	0.5～5mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-241	99376	F-20		7	甕	底部	5	(8.2)	にぶい橙色	にぶい橙色	細砂粒を含む	良好	ハケ目	ナデ	焼成後に底部穿孔
〃-242	981746	D-6	7		甕	底部	4.9	(6.8)	にぶい黄橙色	黄橙色	0.5～2mmの砂粒を含む	やや不良	ハケ目	ナデ	
〃-243	981744	F-15	3		甕	底部	6.3	(8.2)	橙色	にぶい黄橙色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	ハケ目後ナデ	ナデ	
〃-244	981762	B-1		7	甕	底部	10.1	(8.8)	にぶい黄橙色	褐色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	ハケ目	ナデ	
〃-245	981750	E-7		7	甕	底部	8	(7.2)	橙色にぶい黄	明褐色	0.5～3mmの砂粒を含む	良好	ハケ目	ナデ	焼成後に底部穿孔
〃-246	981748	F-6	2		甕	底部	7.1	(7.6)	橙色	にぶい黄橙色	0.5～3mmの砂粒を含む	良好	ハケ目	ナデ	
〃-247	981743	F-15	5		甕	底部	8.7	(6.9)	にぶい黄橙色	にぶい黄褐色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-248	981745	G-10		7	甕	底部	11	(7)	暗褐色	暗褐色	0.5～3mmの砂粒を含む	良好	ハケ目	ナデ	

表12　包含層・遺構出土土器一覧表（9）

挿図-番号	登録番号	出土地点	取上		器種	分類	法量(cm)		色調		胎土	焼成	調整		備考
			No.	層位			器高	口(底)径	外器面	内器面			外器面	内器面	
29-249	981749	D-7	23		甕	底部	1.9	(6.8)	橙色	にぶい黄橙色	0.5～3mmの砂粒を含む	良好	ハケ目	ナデ	焼成後に底部穿孔
〃-250	99372	F-4		7	甕	底部	5.1	(6.8)	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	細砂粒を含む	良好	ハケ目	ナデ	
〃-251	98440	C-6	42		甕	底部	6.3	(12.2)	橙色	灰褐色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ？	
30-252	99353	C-6	47		壺	底部	2.5	(7.6)	褐灰色	褐灰色	0.5～1mmの砂粒を含む	良好	ミガキ	ミガキ	
〃-253	99464	D-7	13		壺	底部	2.1	(7.4)	にぶい黄橙色	灰黄色	0.5～3mmの砂粒を含む	良好	ミガキ	ナデ	
〃-254	99469	E-11	55		壺	底部	3.5	(8.8)	橙色	灰黄褐色	0.5～3mmの砂粒を含む	良好	ミガキ	ミガキ	
〃-255	99466	D-10	4		壺	底部	3.1	(7.9)	にぶい黄橙色	黒褐色	0.5～1mmの砂粒を含む	やや不良	ナデ	ミガキ	
〃-256	98447	E-11	182		壺	底部	13.9	(10)	明赤褐色	にぶい黄橙色	0.5～1mmの砂粒を含む	やや不良	ナデ	条痕	
〃-257	99474	E-11	202		壺	底部	3.5	(7.2)	褐色	黒褐色	0.5～3mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	甕の可能性あり
〃-258	981740	F-15	7		壺	底部	4.6	(8.6)	にぶい褐色	にぶい黄橙色	0.5～3mmの砂粒を含む	やや不良	ナデ	ナデ？	
〃-259	99475	E-12		7	壺	底部	3	(6.9)	にぶい黄褐色	にぶい黄橙色	0.5～3mmの砂粒を含む	良好	ミガキ	ミガキ	
〃-260	98432	D-7	18		壺	底部	3.9	(7.7)	にぶい褐色	にぶい黄褐色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	ミガキ	ナデ	
〃-261	98430	D-7	2		壺	底部	8.6	(10.4)	褐色	にぶい黄橙色	0.5～3mmの砂粒を含む	良好	ミガキ	ミガキ	
〃-262	99477	F-15	50		壺	底部	2.4	(6)	橙色	褐色	細砂粒を含む	不良	？	ナデ	
〃-263	99471	E-11	163		壺	底部	1.7	(7.6)	橙色	黒褐色	0.5～3mmの砂粒を含む	不良	ナデ	ミガキ？	
〃-264	981739	D-8	1		壺	底部	6.4	(10)	橙色	にぶい黄橙色	0.5～2mmの砂粒を含む	やや不良	ミガキ	ナデ	
〃-265	98431	D-7	8		壺	底部	7	(9.9)	にぶい黄褐色	にぶい黄橙色	0.5～2mmの砂粒を含む	やや不良	ミガキ	ナデ	
〃-266	99360	E-11	165		壺	底部	1.9	(7.6)	黒褐色	灰白色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-267	99357	E-11		7	浅鉢	底部	1.6	(8.2)	にぶい褐色	灰黄褐色	細砂粒を含む	良好	ナデ	ミガキ	
〃-268	99473	E-11	196		鉢？	底部	3.6	(6.5)	にぶい赤褐色	赤褐色	0.5～3mmの砂粒を含む	良好	ミガキ	ミガキ	
〃-269	99327	D-9	26		浅鉢	底部	2	(7.1)	黄灰色	黄灰色	細砂粒を含む	良好	ミガキ	ミガキ	
〃-270	99440	C-5	40		鉢？	底部	1.5	(5.5)	黒褐色	黒褐色	0.5～1mmの砂粒を含む	良好	ミガキ	ミガキ	
〃-271	99476	E-12	10		壺	底部	1.4	(5.8)	赤褐色	にぶい黄橙色	細砂粒を含む	良好	ミガキ	ミガキ	
〃-272	99465	D-7	30		浅鉢？	底部	1.8	(7.3)	灰黄褐色	黒褐色	0.5～1mmの砂粒を含む	良好	ミガキ	ミガキ	
〃-273	99462	C-5	5		浅鉢？	底部	2	(8.3)	黒褐色	黒褐色	0.5～1mmの砂粒を含む	良好	ミガキ	ミガキ	
〃-274	99352	C-4		7 b	浅鉢	底部	2.1	(8.4)	黒褐色	黒褐色	細砂粒を含む	良好	条痕	ミガキ	
〃-275	99470	E-11	78		浅鉢？	底部	2.6	(6.5)	橙色	橙色	0.5～2mmの砂粒を含む	やや不良	ミガキ	ナデ	
〃-276	98204	C-6	45		浅鉢	底部	8.3	(10.4)	灰褐色	にぶい橙色	0.5～1mmの砂粒を多く含む	良好	条痕	ナデ	
〃-277	99330	B-5	3		浅鉢	底部	9.7	(4.3)	灰黄褐色	にぶい黄橙色	細砂粒を多く含む	良好	ミガキ	ミガキ	
〃-278	98205	E-11	157		浅鉢	底部	12.4	(7.8)	黄褐色	浅黄色	0.5～1mmの砂粒を含む	やや不良	ミガキ	ミガキ	
31-279	99577	C-6		7 b	不明	底部	4.9	(7)	にぶい橙色	黒褐色	0.5～3mmの砂粒を含む	やや不良	ナデ	ミガキ？	

表13　包含層・遺構出土土器一覧表（10）

挿図-番号	登録番号	出土地点	取上		器種	分類	法量(cm)		色調		胎土	焼成	調整		備考
			No.	層位			器高	口(底)径	外器面	内器面			外器面	内器面	
31-280	99583	D-11		7	不明	底部	2.4	(6.1)	橙色	橙色	0.5～2mmの砂粒を含む	やや不良	ナデ	ナデ	
〃-281	99580	D-9		6 ～7	不明	底部	3.5	(7.8)	橙色	にぶい黄橙色	0.5～1mmの砂粒を含む	不良	ナデ	ナデ	
〃-282	99574	B-3	10		不明	底部	6.1	(9.4)	にぶい黄橙色	黒褐色	0.5～3mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-283	99578	C-5	21,23		高杯？	底部	4.9	(7)	にぶい橙色	黒褐色	0.5～3mmの砂粒を含む	やや不良	ナデ	ナデ	
〃-284	981752	E-11	3		甕？	底部	4.6	(7.7)	橙色	にぶい黄橙色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-285	981754	E-12		7	甕？	底部	5.3	(5.9)	橙色	橙色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	ハケ目後ナデ	ナデ	
〃-286	981761	C-3	10		不明	底部	4.2	(7.6)	にぶい橙色	にぶい黄褐色	0.5～3mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-287	981756	F-15	64		不明	底部	4.7	(8.6)	灰黄色	灰黄色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	？	？	
〃-288	99586	E-11	105		不明	底部	4.8	(7.1)	明赤褐色	褐色	0.5～3mmの砂粒を含む	やや不良	ナデ	ナデ	
〃-289	99580	D-9		6 ～7	不明	底部	3.5	(7.8)	橙色	にぶい黄橙色	0.5～1mmの砂粒を含む	不良	ナデ	ナデ	
〃-290	971832	D-10		7 b	鉢？	底部	5.5	(6.6)	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	ハケ目	ハケ目、ナデ	
〃-291	99451	D-7	26		不明	底部	3.9	(6.8)	橙色	にぶい黄橙色	0.5～5mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ミガキ？	E-10　No.44と接合
〃-292	981755	F-15	32		不明	底部	4.5	(5.6)	橙色	にぶい黄橙色	0.5～3mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-293	99452	E-11		7 ？	不明	底部	4.1	(11.6)	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	0.5～3mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-294	99555	C-4		7	不明	底部	4.5	(9.2)	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	0.5～5mmの砂粒を含む	やや不良	ナデ	ナデ	底面に織物痕あり
〃-295	01841				深鉢？		3.1		褐灰色	褐灰色	1mm未満の砂粒を含む	良好	ナデ？	ナデ？	曽畑式
〃-296	99722	D-9		7 b	深鉢？		4.7		黒褐色	黒褐色	0.5～5mmの砂粒を含む	良好	条痕	ナデ	
〃-297	01842	F-21		7	深鉢？		4.7		褐灰色	褐灰色	滑石粉を多く含む	良好	ナデ	ナデ	並木式
〃-298	01843	D-19		7	深鉢？		4.0		にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	滑石粉を多く含む	良好	ナデ	ナデ	並木式
〃-299	01844	E-2		7	深鉢？		2.2		にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	滑石粉を多く含む	良好	？	？	阿高式
53-1	981729	SH119	10		甕	Ⅲ	6.1	23.6	暗灰黄色	暗灰黄色	0.5～1mmの砂粒を含む	良好	ハケ目	ナデ	
〃-2	981732	SH119		壁直上	甕	Ⅲ	4.1		黒褐色	褐色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ハケ目、ナデ	
〃-3	981727	SH119	7		甕	Ⅲ	4.0		暗褐色	暗褐色	0.5～1mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-4	981730	SH119	15,17		甕	Ⅲ	8.2	25.6	にぶい黄橙色	橙色	0.5～1mmの砂粒を含む	良好	ナデ、ハケ目	ナデ	
〃-5	981731	SH119	16		甕	Ⅲ	8.0		橙色	にぶい黄橙色	0.5～1mmの砂粒を含む	良好	ナデ、ハケ目	ナデ	煤付着、981730と同一個体？
〃-6	981724	SH119			甕	底部	4.8	(7.8)	にぶい黄橙色	褐色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	ハケ目	ナデ	
〃-7	981728	SH119	9		甕	Ⅲ	6.3	23.8	にぶい黄橙色	黒褐色	0.5～1mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-8	981726	SH119	1,5,6		甕	底部	6.7	(7.7)	橙色	橙色	0.5～1mmの砂粒を含む	やや不良	ナデ	ナデ	
〃-9	981725	SH119			甕	底部	5.6	(7.6)	暗黄褐色	にぶい黄橙色	0.5mm以下の砂粒を含む	良好	ハケ目	ナデ	
56-1	980395	SH222			甕	Ⅲ	10.5	20.2	灰黄橙色	灰黄橙色	細砂粒を含む	良好	ハケ目	ハケ目、ナデ	
58-1	981734	SH239			甕	ⅡB②	9.8	20.2	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	0.5～1mmの砂粒を含む	良好	条痕,ナデ	ナデ	

表14　包含層・遺構出土土器一覧表（11）

挿図-番号	登録番号	出土地点	取上		器種	分類	法量(cm)		色調		胎土	焼成	調整		備考
			No.	層位			器高	口(底)径	外器面	内器面			外器面	内器面	
58-2	980394	SH239			壺	ⅢB	4.8	10.0	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	5mm未満の砂粒を含む	良好	ミガキ	ナデ	
〃-3	980390	SH239			壺	Ⅱ	5.7	30.4	にぶい橙色	にぶい橙色	約１mmの砂粒を多く含む	やや不良	ミガキ、ナデ	ハケ目	
〃-4	980393	SH239			甕	底部	5.1	6.2	にぶい橙色	褐灰色	約１mmの砂粒を含む	良好	ナデ、ハケ目	ナデ	P-1出土
〃-5	980391	SH239			壺	底部	4.2	5.8	にぶい橙色	にぶい橙色	約１mmの砂粒を含む	良好	ハケ目	ナデ	
〃-6	980393	SH239			壺	底部	4.2	10.8	にぶい褐色	にぶい褐色	約１mmの砂粒を多く含む	良好	ナデ	ナデ	
60-1	980388	SK223			壺?	底部	5.2	(5.6)	灰黒色	黒灰色	細砂粒を含む	良好	ミガキ	ミガキ	
61-1	980396	SK248			甕	Ⅲ	12.3	22.8	褐灰色	にぶい黄橙色	1mm前後の砂粒を多く含む	良好	ナデ、ハケ目	ナデ、ハケ目	
〃-2	980397	SK248			壺	底部	6.1		にぶい黄褐色	灰黄褐色	1mm前後の砂粒を多く含む	良好	ナデ	ナデ	
62-1	981738	SK285	1		甕	Ⅲ	14.5	20.4	にぶい黄褐色	褐色	0.5～1mmの砂粒を多く含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-2	981737	SK285	2		壺	底部	9.9	13.6	橙色	橙色	0.5～2mmの砂粒を多く含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-3	981736	SK285			壺		25.4		灰黄色	暗灰黄色	0.5～1mmの砂粒を含む	良好	ナデ	不明	内器面下部に煤付着
63-1	98384	SK291			壺	Ⅳ	13.0	22.0	淡黄橙色	淡黄橙色	細砂粒～3mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
65-1	980385	SJ292	1		壺	Ⅱ？	27.1		淡黄褐色	黒褐色	1mm前後の砂粒を多く含む	良好	ミガキ	ナデ	
〃-2	980386	SJ292	2		壺	Ⅲ	41.6	26.5	黄橙色	黄橙色	約1mmの砂粒を多く含む	良好	ミガキ、ハケ目後ナデ	ミガキ、ナデ	
68-1	992283	SD187			甕	2B①	7.1	19.3	黒色	灰黄褐色	細砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	外器面に煤付着
〃-2	992279	SD187			甕	2B②	6.5	17.2	暗灰黄色	黒色	約1mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-3	992280	SD187			甕	2B②	13.0	24.9	黒色	暗灰黄色	1mm以上の砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	外器面に煤付着、
〃-4	992372	SD187			甕	Ⅲ	6.2	18.7	黒褐色	灰黄褐色	約1mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-5	992364	SD187			甕	Ⅲ	5.9	23.8	黄灰色	黄灰色	細砂粒を含む	良好	ナデ	ハケ目、ナデ	
〃-6	992368	SD187			甕	Ⅲ	5.6	12.8	明黄褐色	明黄褐色	約1mmの砂粒を多く含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-7	992276	SD187			壺	Ⅱ	3.3	18.8	黄灰色	黄灰色	0.5～1mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-8	992270	SD187			壺	Ⅱ	5.2	20.0	灰黄褐色	灰黄褐色	細砂粒を含む	良好	ミガキ	ミガキ、ナデ	
〃-9	992278	SD187			浅鉢	Ⅰ	3.8		暗灰黄色	灰色	0.5～1mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-10	992273	SD187			浅鉢	ⅡA①	2.5	21.2	褐灰色	黒褐色	細砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-11	992282	SD187			甕	底部	2.5	7.2	黄灰色	黄灰色	0.5～1mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-12	992262	SD187			甕	底部	2.5	4.9	黒灰色	黒灰色	細砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	底面に織物圧痕？
〃-13	992263	SD187			甕	底部	2.7	8.5	灰黄色	灰黄色	0.5～1mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-14	992275	SD187			甕	底部	4.5	9.0	にぶい黄橙色	灰黄褐色	1～2mmの砂粒を多く含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-15	992269	SD187			甕	底部	4.7	8.0	にぶい褐色	黒色	0.5～1mmの砂粒を含む	良好	ハケ目、ナデ	ナデ	内器面に煤付着
〃-16	992274	SD187			甕	底部	3.1	8.0	灰黄褐色	灰黄褐色	細砂粒を含む	良好	ハケ目、ナデ	ナデ	内器面に煤付着
〃-17	992267	SD187			壺	底部	2.3	8.6	黄灰色	黄灰色	0.5～1mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	

表15　包含層・遺構出土土器一覧表（12）

挿図-番号	登録番号	出土地点	取上		器種	分類	法量(cm)		色調		胎土	焼成	調整		備考
			No.	層位			器高	口(底)径	外器面	内器面			外器面	内器面	
58-18	992281	SD187			壺	底部	4.2	18.2	にぶい黄褐色	にぶい黄橙色	0.5～1mmの砂粒を含む	良好	ハケ目後ナデ	ナデ	
〃-19	992270	SD187			壺	底部	7.7	11.9	黒褐色	黒褐色	約1mmの砂粒を多く含む	良好	ナデ	ナデ	
69-24	992294	SD192			甕	Ⅲ	6.4	24.7	灰黄褐色	褐灰色	1mm前後の砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-25	992291	SD192			甕	Ⅲ	2.9	24.2	灰黄色	灰黄色	細砂粒を含む	良好	ハケ目後ナデ	ナデ	
〃-26	992296	SD192			甕	底部	3.1		にぶい褐色	灰色	1mm前後の砂粒を含む	良好	ハケ目後ナデ	ナデ	
〃-27	992295	SD192			甕	底部	2.3		にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	1mm前後の砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	

表16　包含層・遺構出土石器一覧表（1）

挿図-番号	登録番号	出土地点	取上		器種	分類	法量(cm)				石材	備考
			No.	層位			長さ(残存)	幅(残存)	厚さ(残存)	重さ(g)(残存)		
32-1	000706	B-10		8層	両刃石斧		10	5.2	3.2	193.7		完形品
〃-2	992317	B-5	2		両刃石斧		(7.5)	(6.0)	(2.2)	(142.7)		基部のみ
〃-3	000710	D-7		7	両刃石斧		(5.9)	(4.9)	(2.9)	(69.5)		基部のみ
〃-4	000740	G-7	1		両刃石斧		(9.9)	(6.0)	(3.4)	(295.0)	硬質砂岩	基部のみ
〃-5	000738	G-6	1		両刃石斧		15.1	7.8	3.3	568.1	安山岩	ほぼ完形品
〃-6	000717	D-23	1		両刃石斧		(15.2)	7.2	(5.1)	(938.5)	安山岩	今山産か？
〃-7	000709	C-11		7	両刃石斧		(7.8)	(6.6)	3.5	(271.2)	硬質砂岩	基部のみ
〃-8	000737	F-22		7	両刃石斧		(9.1)	6.7	(2.6)	(235.5)	安山岩？	基部のみ
33-9	000741	G-9	2		両刃石斧		14.8	6.7	3.9	606.4	硬質安山岩	ほぼ完形品
〃-10	000742	G-13		7	両刃石斧		(14.8)	7.5	4.2	(577.2)	安山岩	
〃-11	000733	F-15	17		両刃石斧		13.6	7.9	4.3	(900.1)	安山岩	
〃-12	000705	B-10	1		両刃石斧		(9.1)	(8.0)	(3.4)	(384.4)		未製品か？
〃-13	00715	D-10		8層	両刃石斧		(9.4)	5.3	1.8	(158.5)	安山岩	
〃-14	992316	B-4	4		両刃石斧		(11.0)	(6.2)	(3.5)	(425.0)	安山岩	
〃-15	00695	D-5		6下～7上	両刃石斧		(15.3)	10.0	2.6	(631.5)	頁岩？	
34-16	000728	E-11	107		両刃石斧		(9.8)	(7.1)	(3.3)	(369.6)	玄武岩	
〃-17	000696	D-8		7	両刃石斧		(6.9)	5.3	3.6	(197.6)		刃部のみ
〃-18	000718	D-26		7	両刃石斧		8.5	(3.9)	(2.8)	(77.6)		
〃-19	000719	E-10		6	両刃石斧		(6.2)	(7.5)	(1.7)	(122.2)	玄武岩？	
〃-20	000743	D-10	12		両刃石斧		(7.2)	(6.7)	(1.0)	(64.7)	硬質安山岩	
〃-21	000723	E-11		7b	両刃石斧		(10.2)	(7.6)	3.0	(335.6)		
〃-22	000529	C-1			柱状片刃石斧		(12.0)	4.8	5.0	(306.4)		

表17　包含層・遺構出土石器一覧表（2）

挿図-番号	登録番号	出土地点	取上		器種	分類	法量(cm)				石材	備考
			No.	層位			長さ(残存)	幅(残存)	厚さ(残存)	重さ(g)(残存)		
34 -23	000536	F-7	1		柱状片刃石斧		(13.4)	(4.9)	5.0	(451.9)	硬質砂岩	
〃-24	000539	E-10	41		柱状片刃石斧		(13.8)	(1.8)	(3.4)	(108.8)	層灰岩	
〃-25	000534	G-15	12		柱状片刃石斧		(7.3)	(3.6)	(3.0)	(136.2)	層灰岩	
〃-26	992321	C-5,6		7 b	柱状片刃石斧		(7.8)	(3.1)	(3.2)	(120.4)		
35-27	000517	F-22		7	扁平片刃石斧		(4.5)	5.0	1.7	(56.1)		
〃-28	000513	G-6		7	扁平片刃石斧		(5.8)	5.0	1.3	(75.5)	層灰岩	
〃-29	000522	F-15		6下	扁平片刃石斧		(4.8)	4.3	0.7	(21.0)	層灰岩	
〃-30	000528	(SH125)			扁平片刃石斧		(4.3)	(3.9)	1.2	(28.2)		
〃-31	000519	E-10		6下	扁平片刃石斧		(5.5)	4.5	1.2	(47.3)	層灰岩	
〃-32	000527	B-2		7b	扁平片刃石斧		(4.0)	4.2	1.4	(41.8)	層灰岩	
〃-33	000518	D-6	15		扁平片刃石斧		(6.2)	3.6	1.5	(46.3)	層灰岩	
〃-34	000521	D-6		7	扁平片刃石斧		6.2	2.8	1.1	31.4	層灰岩	ほぼ完形品
〃-35	000520	F-15	34		扁平片刃石斧		5.1	3.5	(0.9)	(29.0)	層灰岩	片面ほとんど剥離
〃-36	992302	B-3	3		扁平片刃石斧		(5.1)	5.3	1.9	(83.4)	層灰岩	
〃-37	000525	F-8		7	扁平片刃石斧		(4.1)	(3.0)	(0.3)	(6.5)	層灰岩	
〃-38	000516	E-11		115	扁平片刃石斧		(4.8)	2.8	0.9	(16.1)	安山岩	
〃-39	000523	D-9	45		扁平片刃石斧		(5.5)	3.2	1.1	(28.3)	層灰岩	
36-40	000510	(SH231)			ノミ状片刃石斧		5.4	1.6	0.8	12.0	層灰岩	ほぼ完形品
〃-41	000515	D-8		7	ノミ状片刃石斧		5.9	2.0	0.6	(12.0)	粘板岩	ほぼ完形品
〃-42	000511	F-16		7	ノミ状片刃石斧		(4.2)	1.5	1.3	(14.8)	層灰岩	
〃-43	000509	E-11		7b	ノミ状片刃石斧？		6.2	1.5	0.6	9.6		ほぼ完形品
〃-44	992314	C,D-4		7	石庖丁		(7.8)	(5.1)	0.8	(43.1)		擦切技法を用いる
〃-45	992311	D-7		7	石庖丁		(6.7)	(3.4)	0.7	(22.1)	粘板岩	
〃-46	992331	廃土中			石庖丁		(5.3)	(4.6)	0.6	(21.6)	ホルンフェルス？	
〃-47	992335	G-7	2		石庖丁		(12.2)	5.9	(0.5)	(57.9)	粘板岩	表面ほぼ剥離
〃-48	992332	D-9		7b	石庖丁		(5.9)	(3.0)	(0.5)	(13.0)	粘板岩	表面ほぼ剥離
〃-49	992333	D-9	107		石庖丁？		(7.6)	(4.8)	0.8	(55.8)		破損後再研磨、片刃気味
〃-50	992334	F-14		7	石庖丁		(3.2)	(3.3)	(0.4)	(5.9)	粘板岩	
〃-51	992330	E-3		7	石庖丁		(4.6)	(3.5)	(0.3)	(7.2)	粘板岩	表面ほぼ剥離
〃-52	000739	G-6		6	磨製石剣		(10.9)	(4.4)	1.5	(99.1)	粘板岩	未製品か？
37-53	992326	E-3		6	磨製石剣		(19.2)	4.0	2.0	(169.4)	頁岩	

表18　包含層・遺構出土石器一覧表（3）

挿図-番号	登録番号	出土地点	取上		器種	分類	法量(cm)				石材	備考
			No.	層位			長さ(残存)	幅(残存)	厚さ(残存)	重さ(g)(残存)		
37-54	992310	E-12	16		磨製石剣		(4.2)	(4.5)	(0.9)	(21.2)	層灰岩	
〃-55	992347	F-6		7	磨製石鏃		4.7	2.2	(0.3)	5.3	層灰岩	
〃-56	992345	B-7		7b	磨製石鏃		(2.6)	(1.0)	0.4	(1.3)	頁岩	
〃-57	992337	(SH121)			磨製石鏃		(2.4)	(0.7)	(0.4)	(0.6)	頁岩	
〃-58	992344	B-7		6	磨製石鏃		(2.5)	(1.4)	(0.5)	(2.1)	頁岩	
〃-59	992338	C-4		7b	磨製石鏃		(6.3)	(1.1)	0.6	(4.3)	頁岩	
〃-60	992342	F-15	18		磨製石鏃		(6.6)	1.2	0.6	(8.0)	片麻岩？	
〃-61	992343	E-11	9		磨製石鏃		(4.2)	1.4	(0.5)	(3.3)	粘板岩？	
〃-62	992346	C-8		7	磨製石鏃		(2.9)	1.5	(0.7)	(2.8)	頁岩	
〃-63	992340	B-5		6～7	磨製石鏃		(3.1)	1.7	(0.3)	(2.3)	片麻岩？	
〃-64	992341	F-3		7	磨製石鏃		(3.1)	(1.3)	0.3	(2.3)	片麻岩？	
〃-65	010803	E-5		7	磨製穿孔具		(3.4)	1.5	1.7		泥岩？	
〃-66	992309	(F-8)			磨製石鏃		7.8	2.2	0.6	(15.4)	層灰岩	SK242出土
〃-67	010805	E-2		7	磨製穿孔具		(3.3)	1.7	1.7		砂岩	
〃-68	010804	E-9	3		磨製穿孔具		(4.5)	1.8	2.0		砂岩	
〃-69	010802	B-2		7b	磨製穿孔具		(2.7)	(1.4)	(1.5)		砂岩	
〃-70	010801	E-5		7	磨製穿孔具		(2.5)	(1.1)	(0.8)		砂岩	
38-71	000727	E-11	106		打製石斧		9.6	3.3	1.2		安山岩	
〃-72	002369	C‐5		7b	スクレイパー		6.6	6.5	1.3	54.6	安山岩	
〃-73	002370	E-11		6～7	スクレイパー		3.5	2.0	0.9	(5.4)	黒曜石	
〃-74	002368	E-11	146		スクレイパー		6.7	5.5	1.6	58.6	安山岩	
〃-75	002357	F-21		7	打製石鏃	a	2.4	2.0	0.3	0.8	黒曜石	
〃-76	002356	F,G‐15		6下	打製石鏃	a	2.5	1.3	0.5	1.0	黒曜石	
〃-77	002353	B-10		7	打製石鏃	a	2.5	1.8	0.5	1.2	黒曜石	
〃-78	002350	B-8		7b	打製石鏃	a	2.7	2.0	0.4	1.2	黒曜石	
〃-79	002354	E-7			打製石鏃	a	3.1	2.1	0.5	1.6	黒曜石	
〃-80	005352	C‐21		7	打製石鏃	a	(3.6)	(2.1)	0.6	(2.0)	黒曜石	
〃-81	002332	C‐5		7b	打製石鏃	b	2.0	1.7	0.3	0.8	黒曜石	
〃-82	002359	(SH231)			打製石鏃	b	1.8	1.5	0.3	0.4	サヌカイト	
〃-83	002349	D-8		7	打製石鏃	b	2.6	2.2	0.4	1.0	黒曜石	
〃-84	002362	(SH231)			打製石鏃	b	2.6	1.8	0.5	1.0	サヌカイト	

表19　包含層・遺構出土石器一覧表（4）

挿図-番号	登録番号	出土地点	取上		器種	分類	法量(cm)				石材	備考
			No.	層位			長さ(残存)	幅(残存)	厚さ(残存)	重さ(g)(残存)		
38-85	002331	F-11		7	打製石鏃	b	3.0	2.2	0.5	1.8	黒曜石	
〃-86	002334	C‐20		7	打製石鏃	b	3.3	1.6	0.5	1.4	黒曜石	
39-87	002336	F-15		6下	打製石鏃	b	(2.7)	(2.0)	0.4	(0.8)	黒曜石	
〃-88	002337	F-15		6下	打製石鏃	b	(1.9)	2.2	0.4	1.0	黒曜石	
〃-89	002338	F-7		7	打製石鏃	b	2.2	1.8	0.4	0.6	黒曜石	
〃-90	002347	B-4		7	打製石鏃	b	2.6	1.5	0.3	0.8	黒曜石	
〃-91	002339	B-7		7	打製石鏃	b	2.5	1.2	0.4	0.8	黒曜石	
〃-92	002348	B-9		7b	打製石鏃	b	(2.9)	(1.9)	0.4	(1.6)	黒曜石	
〃-93	002333	C-13		7	打製石鏃	b	2.8	1.5	0.4	1.4	黒曜石	
〃-94	002363	G-4			打製石鏃	b	3.0	1.5	0.3	1.0	サヌカイト	
〃-95	002335	G-15		6下	打製石鏃	b	(1.3)	1.3	0.3	0.2	黒曜石	
〃-96	002341	G-9		7	打製石鏃	b	1.9	1.6	0.4	0.6	黒曜石	
〃-97	002361	(SD149)			打製石鏃	b	3.2	1.9	0.5	2.4	サヌカイト	
〃-98	002323	(SH262)			打製石鏃	b	(2.2)	(2.2)	0.4	(1.6)	黒曜石	
〃-99	002330	C-12		7	打製石鏃	b	(1.9)	(1.3)	0.3	(0.8)	黒曜石	
〃-100	002343	E-12		7	打製石鏃	b	3.2	2.0	0.5	2.0	黒曜石	
〃-101	002342	E-11		7	打製石鏃	e	3.3	1.6	0.9	3.6	黒曜石	
〃-102	002364	F--5		Y水-2	打製石鏃	b	4.3	2.1	0.5	3.4	サヌカイト	大型品
〃-103	002346	D-15		7	打製石鏃	b	2.4	2.4	0.7	(2.6)	黒曜石	
〃-104	002344	(SD164)			打製石鏃	b	3.4	1.8	0.4	2.4	黒曜石	局部磨製石鏃
〃-105	002345	D,E-11		7	打製石鏃	b	3.9	2.9	0.5	3.6	黒曜石	
〃-106	002320	F-7		7	打製石鏃	c	1.6	1.3	0.4	0.6	黒曜石	
〃-107	002319	C-5		7	打製石鏃	c	2.0	1.6	0.3	0.6	黒曜石	
〃-108	002360	D-10		7b	打製石鏃	c	2.0	1.5	0.3	0.6	黒曜石	
40-109	002327	E-10		7	打製石鏃	c	1.7	1.5	0.4	0.6	黒曜石	
〃-110	002317	E-19		7	打製石鏃	c	1.8	2.0	0.5	1.0	黒曜石	
〃-111	002318	(SH231)			打製石鏃	c	2.3	1.6	0.5	1.0	黒曜石	
〃-112	002326	B-3		6	打製石鏃	c	2.1	1.7	0.4	0.8	黒曜石	
〃-113	002316	E-11		7b	打製石鏃	c	2.4	2.0	0.3	0.8	黒曜石	
〃-114	002321	D-2		7	打製石鏃	c	2.3	1.3	0.4	1.0	黒曜石	
〃-115	002324	D-5		7b	打製石鏃	c	2.2	1.3	0.4	1.0	黒曜石	

表20　包含層・遺構出土石器一覧表（5）

挿図-番号	登録番号	出土地点	取上		器種	分類	法量(cm)				石材	備考
			No.	層位			長さ(残存)	幅(残存)	厚さ(残存)	重さ(g)(残存)		
40-116	002329	D-4		6	打製石鏃	c	3.6	1.6	0.6	2.2	黒曜石	
〃-117	002322	G--2		K水-1,2	打製石鏃	b	3.4	2.0	0.5	2.4	黒曜石	
〃-118	002308	F-12		6	打製石鏃	d	2.6	1.3	0.6	1.4	黒曜石	
〃-119	002305	D-5		7b	打製石鏃	d	2.7	1.3	0.5	1.2	黒曜石	
〃-120	002304	F-18		7	打製石鏃	d	2.7	1.1	0.5	1.4	黒曜石	
〃-121	002358	E-13		6	打製石鏃	d	3.5	1.5	0.5	2.0	サヌカイト	
〃-122	002310	E-11		7	打製石鏃	d	2.9	1.1	0.4	1.0	黒曜石	
〃-123	002325	B-3		7	打製石鏃	d	(3.5)	2.0	0.6	3.2	黒曜石	
〃-124	002313	E-20		7	打製石鏃	d	3.2	1.6	0.5	1.6	黒曜石	
〃-125	002392	D-4		6下	打製石鏃	d	3.2	2.1	0.8	3.4	黒曜石	
〃-126	002303	C-10		7	打製石鏃	d	4.2	1.4	0.6	2.6	黒曜石	
〃-127	002307	G-15		検出面	打製石鏃	d	(4.5)	1.5	0.6	(3.2)	黒曜石	
〃-128	002309	E-22		7	打製石鏃	d	4.9	1.6	0.6	(3.6)	黒曜石	
〃-129	002302	(SK244)			打製石鏃	d	(3.2)	1.3	0.5	1.2	黒曜石	
41-130	002393	E-10			打製石鏃	e	2.4	1.8	1.8	2.9	黒曜石	
〃-131	002391	C-12		7	打製石鏃	e	2.6	2.0	0.9	3.7	黒曜石	
〃-132	002394	E-9		6～7	打製石鏃	e	3.3	2.5	1.0	6.4	黒曜石	
〃-133	002376	E-11		7	打製石鏃	e	2.7	2.3	0.9	(4.0)	黒曜石	
〃-134	002374	F-9		7	打製石鏃	e	3.0	2.5	0.8	4.6	黒曜石	
〃-135	002390	F-15		6	打製石鏃	e	3.3	2.6	0.8	(5.3)	黒曜石	
〃-136	002377	B-4		6下	つまみ形石器		2.3	2.2	0.7	2.4	黒曜石	
〃-137	002378	E-9		6	打製石鏃	e	2.7	2.2	0.6	2.8	黒曜石	
〃-138	002371	D-11		7	石錐		(3.0)	1.0	0.9	(1.8)	黒曜石	先端部磨耗
〃-139	002365	E-16		8上	石槍		(6.4)	1.5	0.6	(5.2)	サヌカイト	
〃-140	002395	F-15	6		石槍		(6.6)	2.0	0.7	(6.8)	黒曜石	
〃-141	002379	C,D-4		7b	不明石器		(2.6)	(1.9)	0.4	(1.5)	黒曜石	
〃-142	002373	E-11		7	不明石器		(2.8)	(1.6)	0.4	(1.2)	黒曜石	剥片鏃破損品？
〃-143	002372	E-11	99		不明石器		7.6	1.8	1.1	7.2	黒曜石	
42-144	002375	F-7		7	不明石器		(2.1)	(2.7)	0.5	(1.8)	黒曜石	破損品？
〃-145	002378	B-4		6	剥片		3.2	1.6	0.6	2.6	黒曜石	使用痕あり
〃-146	002383	F-9		7	剥片		3.9	1.6	0.8	3.0	黒曜石	使用痕あり

表21　包含層・遺構出土石器一覧表（6）

挿図-番号	登録番号	出土地点	取上		器種	分類	法量(cm)				石材	備考
			No.	層位			長さ(残存)	幅(残存)	厚さ(残存)	重さ(g)(残存)		
41-147	002384	(SD164)			剥片		5.2	2.0	1.3	7.6	黒曜石	
〃-148	002381	B,C-10～12			剥片		5.7	2.1	1.0	5.6	黒曜石	使用痕あり
〃-149	002386	E-11		7	剥片		4.4	1.8	0.5	3.4	黒曜石	
〃-150	002385	F-15		6下	剥片		4.0	3.7	1.3	13.2	黒曜石	使用痕あり
〃-151	002389	F-15		7	石核		5.0	5.8	4.7	90.5	黒曜石	
〃-152	010824	(SD115)	44		凹石		10.0	8.7	3.5	508.2	ホルンフェルス？	
〃-153	010823	(SE154)			凹石		9.1	7.4	5.7	554.6	砂岩	
43-154	010834	G-9	3		凹石		12.0	10.7	7.4	1240.0		
〃-155	010831			6～7	敲石		10.2	5.4	3.2	285.0	玄武岩	
〃-156	010832	B-7～8		7	敲石		12.3	4.9	4.3	370.0	細粒砂岩	
〃-157	992312	B-9		7b	敲石		9.1	3.1	2.2			
〃-158	010829	G-15		6	凹石		12.9	9.5	4.5	870.0	玄武岩	中央部敲打痕あり
〃-159	010832	E-3		6	敲石		14.4	6.5	4.8	675.0	玄武岩？	中央部敲打痕あり
44-160	010825	E-11		7	磨石		15.5	12.2	4.2	1190.0	砂岩	
〃-161	010830	E-11	97		磨石		14.4	11.0	4.3	950.0	砂岩	
〃-162	010827	E-11	61		磨石		10.1	10.2	5.7	860.0	玄武岩	
〃-163	010828	E,G-8,10			磨石		12.3	9.6	3.7	790.0	玄武岩？	
〃-164	010822	F-8		7	磨石		17.6	11.6	6.6	2250.0		
〃-165	010817	G-9	1		砥石		8.2	6.7	1.1	109.8	凝灰岩質砂岩？	
〃-166	010816	(SK267)			砥石		(8.1)	(8.9)	2.2	(125.0)	砂岩	
〃-167	010813	F-8		6	砥石		11.0	7.0	5.7	464.8	砂岩	
〃-168	010818	E-10		6	砥石		(8.2)	(4.2)	2.2	91.0	砂岩	
45-169	010821	D-8	92		砥石		23.0	(18.0)	7.8	(3340.0)	砂岩	
〃-170	992206	E-11	12				(3.2)	(4.1)	0.7		凝灰岩	擦切技法を用いる
〃-171	992298	D-6	95				(4.3)	(4.3)	0.9		硬質砂岩	刃器の一部
〃-172	010815	D-12		7	砥石？		5.8	4.1	0.8	25.4	砂岩	砥石の一種？
〃-173	992297	(SH231)	31				(3.9)	(4.2)	0.8	(129.6)	硬質砂岩	刃器の一部
〃-174	01814	D,E-6		7b	砥石		5.7	6.3	3.5		砂岩	
〃-175	992301	F-7		7	不明石器		(4.1)	(8.6)	1.8		ホルンフェルス？	刃器の一種？
〃-176	992299	C-12		7b	不明石器		(4.0)	(4.5)	0.8		硬質砂岩	石剣？刃器の一部？
〃-177	992303	E-11		7b	不明石器		(6.7)	(4.6)	0.8		層灰岩	

表22　包含層・遺構出土石器一覧表（7）

挿図-番号	登録番号	出土地点	取上		器種	分類	法量(cm)				石材	備考
			No.	層位			長さ(残存)	幅(残存)	厚さ(残存)	重さ(g)(残存)		
45-178	000514	C-19		7	不明石器		(4.6)	(3.1)	(0.5)		安山岩	両刃石斧の再利用品？
〃-179	992300	D-7		7	不明石器		(13.2)	5.5	0.8		粘板岩	石鎌の未製品？
〃-180	010809	(SH231)	4		砥石？		(3.5)	(2.6)	0.9		細粒砂岩	火鑽臼？
〃-181	010835	E-10	40		台石		(27.0)	(22.2)	7.9		花崗岩	
53-10	000526	SH119	13		扁平片刃石斧		8.3	3.3	0.8	41.2	硬質砂岩？	ほぼ完形品
〃-11	000531	SH119			柱状片刃石斧		8.0	2.7	2.3	95.2	層灰岩	ほぼ完形品
〃-12	992336	SH119			磨製石鏃		(5.0)	1.5	0.6	(5.8)	頁岩	
〃-13	010811	SH119	8		砥石		(8.7)	(3.2)	1.9	(76.6)		
54-14	002388	SH119	14		石核		3.1	5.1	2.9	(81.5)	黒曜石	
〃-15	010812	SH119			砥石		(8.9)	(11.7)	(8.6)	(821.4)	砂岩	
58-7	992327	SH239			磨製石剣		16.1	4.8	0.9	75.5	層灰岩	ほぼ完形品
〃-8	010820	SH239			砥石		(8.1)	(3.3)	1.3	(55.0)	硬質安山岩？	
〃-9	992305	SH239			石斧？		(8.0)	3.9	(1.7)	(64.8)	層灰岩	P-4出土
〃-10	002314	SH239			打製石鏃	d	4.0	1.3	2.2	2.2	黒曜石	
〃-11	002311	SH239			打製石鏃	d	(3.4)	1.4	0.6	(2.2)	黒曜石	
〃-12	002340	SH239			打製石鏃	b	(1.9)	2.2	0.5	(1.2)	硬質安山岩	
69-20	992315	SD187			両刃石斧		(6.0	(7.6)	(1.6)	(114.3)	頁岩？	
〃-21	000530	SD187			柱状片刃石斧		(11.0)	(5.8)	(3.3)	(311.7)		529と同じ石材
〃-22	992339	SD187	3		磨製石鏃		(7.8)	1.5	0.6	(8.2)	頁岩	
〃-23	992329	SD187	4		石庖丁		(17.4)	7.0	0.5	(93.8)	硬質頁岩	

２，古墳時代の遺構と遺物

（１）竪穴住居跡

ＳＨ104（図70）

Ｄ、Ｅ-４区画で検出した。竪穴住居群では北側に位置し、南方３ｍにはSH125が東方約1.5ｍにはSK133がある。東側壁面は溝と切り合う。

平面形態は方形で、規模は長軸5.08ｍ、短軸4.60ｍ、床面積は23.37㎡を測る。遺構検出面が住居床面にあたり、壁遺存高は５cm以下である。柱穴はＰ1～Ｐ4の４本柱である。柱間はＰ1－Ｐ4間1.4ｍ、Ｐ3－Ｐ4間1.8ｍ、Ｐ2－Ｐ3間1.4ｍ、Ｐ1－Ｐ2間1.5ｍである。柱穴は径0.3ｍ～0.4ｍの平面円形や楕円形である。Ｐ2にて径14cmの柱根を検出した。またＰ1では径約20cmの柱痕を検出した。Ｐ3にはほぼ完形の高杯が埋置されており柱の抜き跡らしき痕跡がみられた。この高杯は主柱を抜いた後の地鎮などの祭祀に使われたと考えられる。また、Ｐ4でも柱の抜き跡らしき痕跡がみられる。北壁、西壁、南壁沿いには幅0.6ｍ～１ｍ、深さ0.2ｍの溝がまわり、掘り方と考えられる。床面中央には平面不整円形の炉がつくられる。規模は37cm×30cmで粘土で固められていた。炉底には焼土がある。住居埋土は黒褐色細砂で多くの炭化物が混入する。

遺物は北壁付近の床面直上から高杯数個体が出土した。

表23　竪穴住居跡一覧表

遺構番号	長軸(m)	短軸(m)	床面積(㎡)	主柱穴
ＳＨ104	5.08	4.60	23.37	4
ＳＨ118	3.58	3.40	12.17	?
ＳＨ121	4.70	3.88	18.24	2
ＳＨ122	4.25	(3.40)	(14.45)	2
ＳＨ124	(3.13)	2.87	8.98	?
ＳＨ125	4.99	4.46	23.25	4
ＳＨ231	6.38	6.36	40.58	4
ＳＨ250	4.70	4.64	21.80	2
ＳＨ262	5.32	5.08	27.03	4

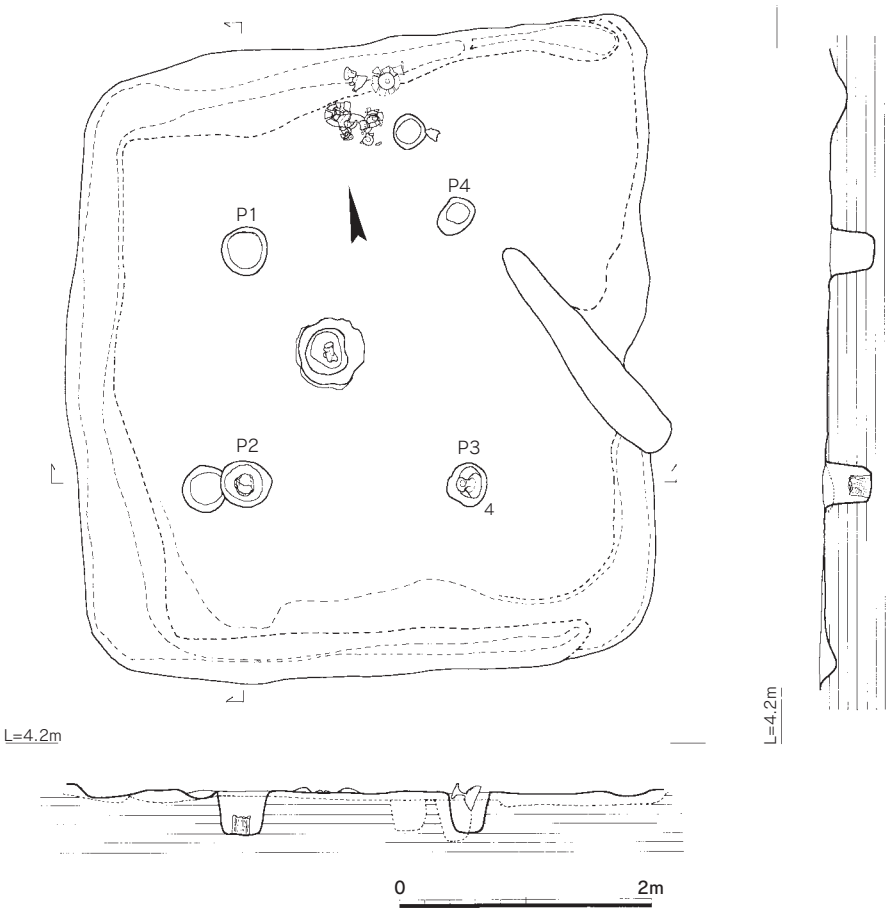


図70　SH104竪穴住居跡（1/60）

出土遺物（図71）

高杯（1～7）すべて土師器。いずれも遺存率がよく竪穴住居床面直上からの出土である。口径は18cm前後で法量的や形態的にも類似する。６はやや小型の口径16.0cm、７はやや大型の口径20.2cmである。表82，83に脚部形式分類表と杯部形式分類表を示す。脚部形式ではＡ２式が６点、Ｂ式が１点とＡ２式が圧倒的に多い。杯部形式では口縁部形態で①～④式がみられ、杯部外面の稜はａ式が１点で他はｂ式である。

１～５は杯・脚部接合手法は2,3,4,6でＡ手法がみられる。

また、3,5,7の杯部内面は全面が黒色である。焼成時に意識的に施した可能性もある。

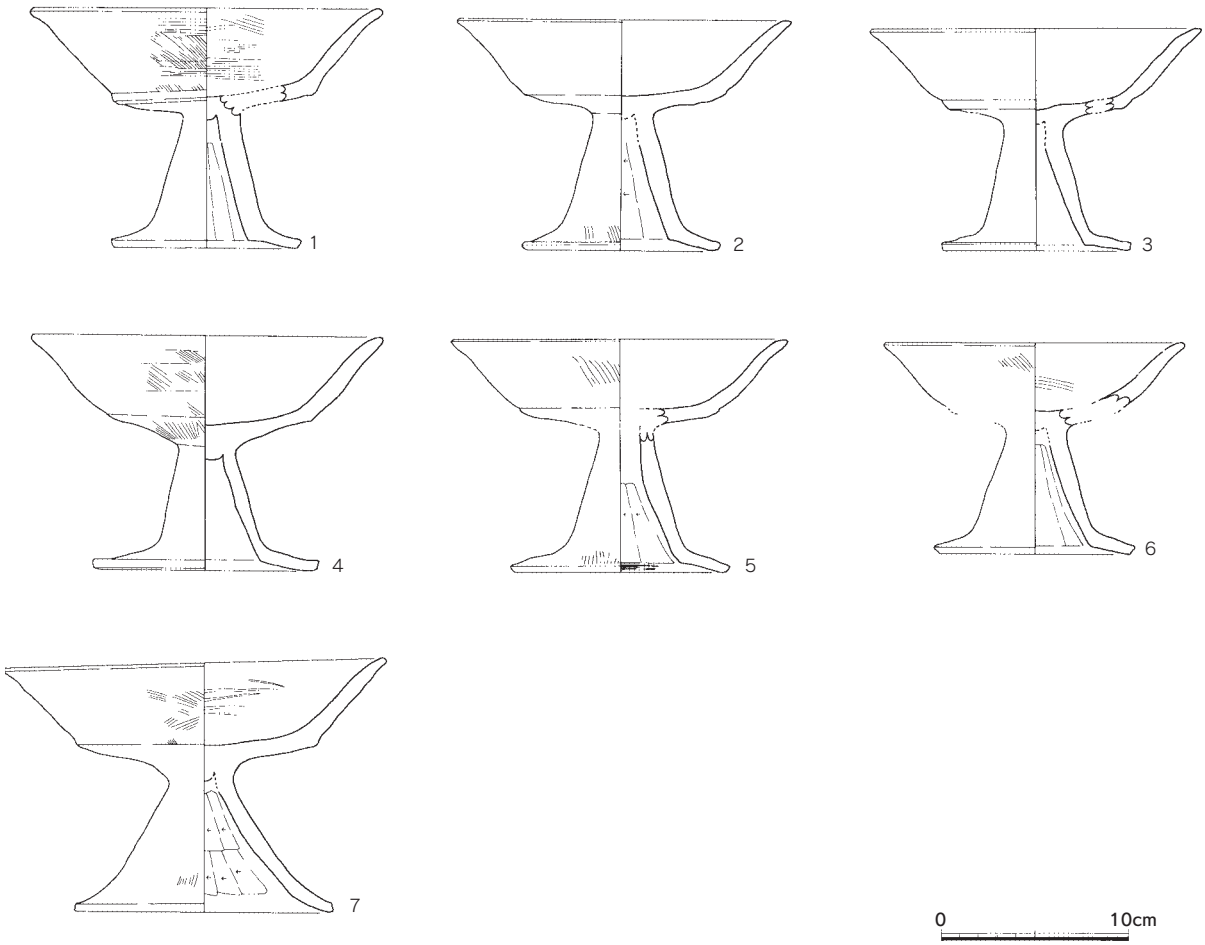


図71　SH104出土土器（1/4）

ＳＨ118（図72）

Ｆ-５区画で検出した。竪穴住居群では中央よりやや南側に位置し、住居跡西側をSH124と切り合う。北方約1.5ｍにはSH122が、南方約３ｍにはSB140がある。

平面形態はややいびつな方形で、規模は長軸3.58ｍ、短軸3.40ｍ、床面積は12.17㎡を測る。壁遺存高は約５cmである。主柱穴は不明で、柱穴と思われる小穴も少ない。南壁沿いに長径1.3ｍの屋内土坑がみられる。住居埋土は黒色砂(7.5YR2/1)でしまり、粘性ともになし。地山の黄褐色砂をブロック状に少量含む。

遺物は埋土中から甕、壺の破片が少量出土した。

出土遺物（図72）

甕、広口壺、直口壺、二重口縁壺、小型広口壺の破片が出土。

甕（1）土師器、口縁部破片。ＡⅡ②ｂ式。口縁端部は丸味をもち、粗雑なつくりである。

広口壺（2）土師器、口縁部破片。Ａ２ｂ式。口縁部長は4.6cmで端部は丸味をもつ。

直口壺（3）土師器、口縁部破片。FⅡ２式。口縁部外面中位は指押さえによりやや窪む。端部は丸味をもつ。

二重口縁壺（4）土師器、口縁部破片。Ｂ１Ｉａ式。口縁端部、二次口縁屈曲部は全体的にシャープである。

小型広口壺（5）土師器、口縁部から胴部にかけて残存。Ｃ１①式である。

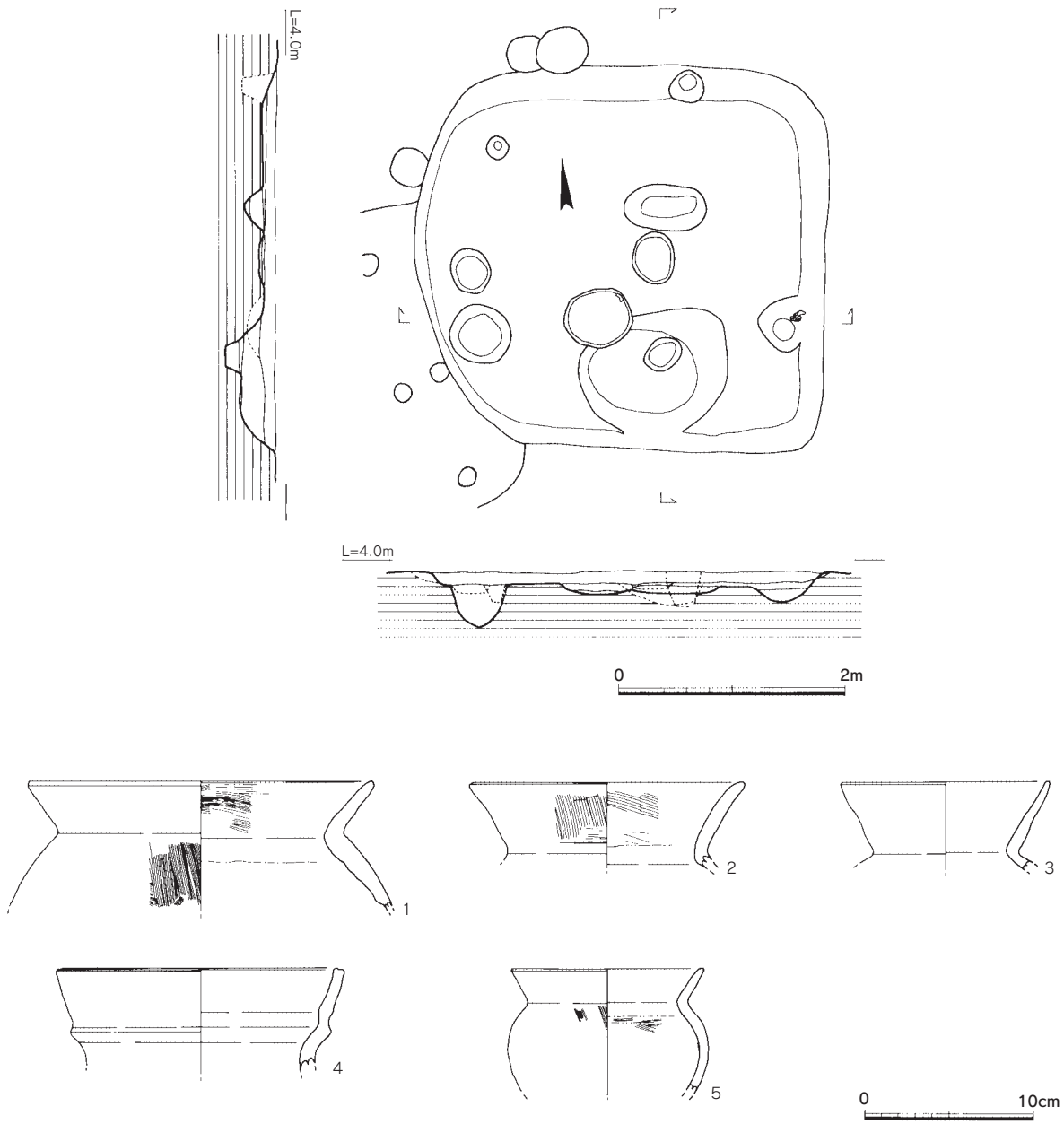


図72　SH118竪穴住居跡（1/60）・出土土器（1/4）

ＳＨ121（図73）

Ｅ、Ｆ-４、５区画で検出した。竪穴住居群の中央に位置し、住居跡南側をSH122ときりあう。東側には隣接してSH125が、西方約３ｍにはSH262がある。

平面形態は長方形で、規模は長軸4.70ｍ、短軸3.88ｍ、床面積は18.24㎡を測る。壁遺存高は20cm～28cmである。柱穴はＰ1、Ｐ2の２本柱であり柱間は1ｍを測る。柱穴はＰ1が長径48cm、深さ34cmの不整円形で、Ｐ2は径44cm、深さ44cmの円形である。

住居埋土は大きく２層からなるレンズ状堆積を示す。上層から多量の土器が出土した。これらの土器は比較的残存状態がよく中には完形の土器もみられる。そのほとんどは床面から浮いた状態で出土しており、炭化物が上層の住居中央付近に特に多く集中している。これらのことから、埋土中出土の土器はSH121廃絶後に廃棄されたと考えられる。

SH122との前後関係について調査段階ではベルト土層観察からSH122→SH121との所見を得ていた。しかしこれらの土器群の検討結果ではSH121→SH122である。

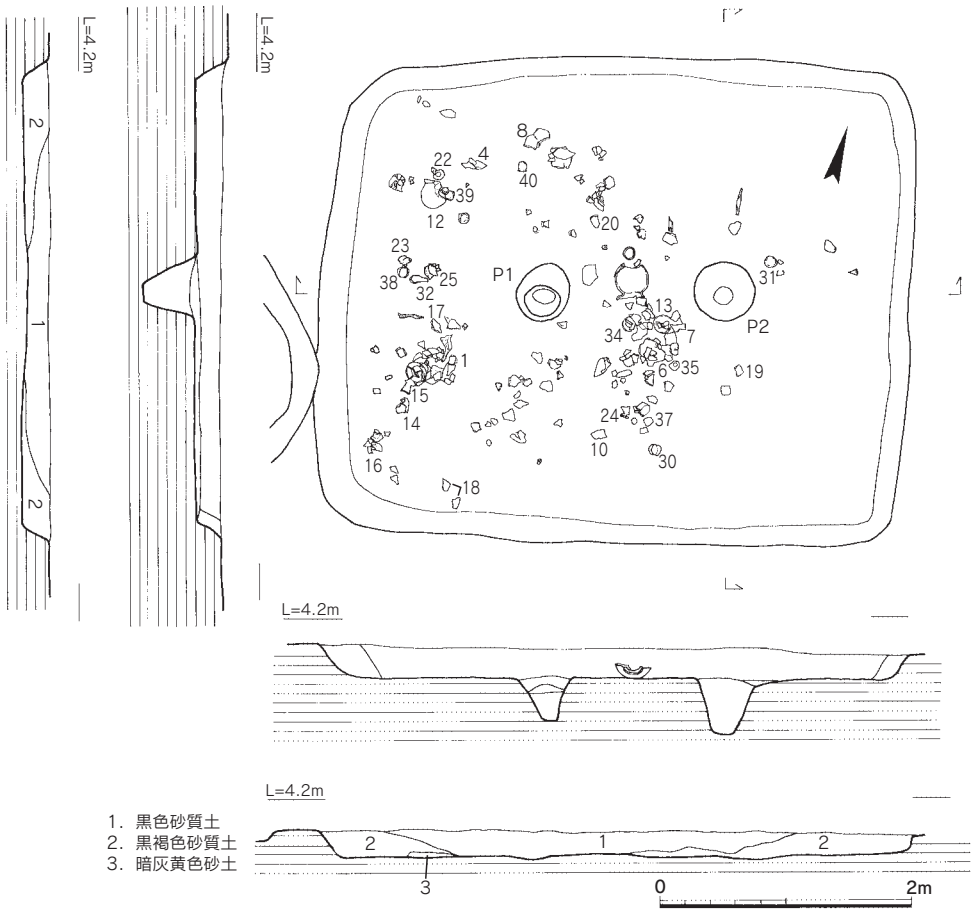


図73　SH121竪穴住居跡（1/60）

出土遺物（図74～76）

竪穴住居跡の中では土器出土量が最も多く、残存状態も比較的良好である。器種には甕、広口壺、二重口縁壺、高杯、小型丸底壺、鉢がある。新旧の時期の土器群が混じっている。

甕（1,2,4～9,12）すべて土師器。１は完形、12は口縁部のみ欠損、他は口縁部から肩部にかけて残る。

表84，85に体部形式分類表と口縁部形態・体部調整分類表を示す。器壁も厚く、やや大型であるⅡ式は1,2,4,5,6で器壁が薄く小型であるⅠ式に７，９がある。胴部形態は１式の砲弾胴部、２式の球形胴部ともにみられる。甕口縁部形態は①、②式がみられ胴部調整ではａ,ｂ式がある。Ⅰ式が調整も肩部ヨコハケでつくりも丁寧であり古式の要素をもつ。

８は肩部内面、口縁部内面に指押さえ痕を残し、端部側ではやや器壁が薄くなるなどこの甕の中では新式の要素をもち６→８が考えられる。

１のみが完形で他はすべて破片であり復元口径であるため確実なことはいえないが器壁も厚く、やや大型であるⅡ式に1,2,4,5,6がある。器壁が薄く小型であるⅠ式に７，９がある。胴部形態は全体がわかるものが少ないため肩部から判断して砲弾胴部の１式が6,7,8で球形胴部の２式が1,2,4,5である。口縁部形態は内湾する①式1,2,4で直線的な②式が5,6,7,8,9である。口縁端部は面取り気味が多い。１は肩部外面ヨコハケで口縁部も内湾気味と古式の要素をもつ。それに対して12は口縁部が欠損する。胴部は器壁も厚くつくりが粗雑で、SH121出土甕の中では新しい要素をもつ。

広口壺（3,10,11）土師器。すべてＡ２式である。口縁部長は３が5.2cm、10が4.5cm、11が4.2cmである。調整では口縁部の長い1が端部面取り、肩部ヨコハケのａ式で11がｂ式である。

小型広口壺（13）土師器。Ｄ２①式である。口縁部の器壁は薄く、肩部外面は部分的にヨコハケである。

二重口縁壺（14）土師器。Ｂ３式である。口縁部は直立し、肩部外面ヨコハケ。

高杯（15～27）すべて土師器。15，16は脚部から杯部にかけて残存。17～21は杯部のみ残存。22～27は脚部のみの残存である。表87，88に脚部形式分類表と杯部形式分類表を示す。脚部形式ではＡ３式が２点、Ｂ式が２点ある。杯部形式では口縁部形態が①～③式があり、杯部外面の稜はａ式が1点で他はｂ式である。特に15は杯部の深さが5.5cmと深い。

小型丸底壺（28,29）土師器。28は胴部のみ残存、29はほぼ完形。29はＣ２②式である。

鉢（30～41）土師器。表86に鉢Ａ、Ｂ形式分類図を示す。鉢はＡ、Ｂ式がある。素口縁であるＡ式が多く、屈曲口縁のＢ式は３点である。また、浅鉢である１式が多く、深鉢は３点のみである。口縁部形態はＡ①式、Ａ②式、Ｂ①式がある。底部形態は平底（30,34,35,37,38,39,40,41）丸底（32,33,36）がある。32は精製鉢であるが33,36,38,39,40,41は指頭圧痕が残る。

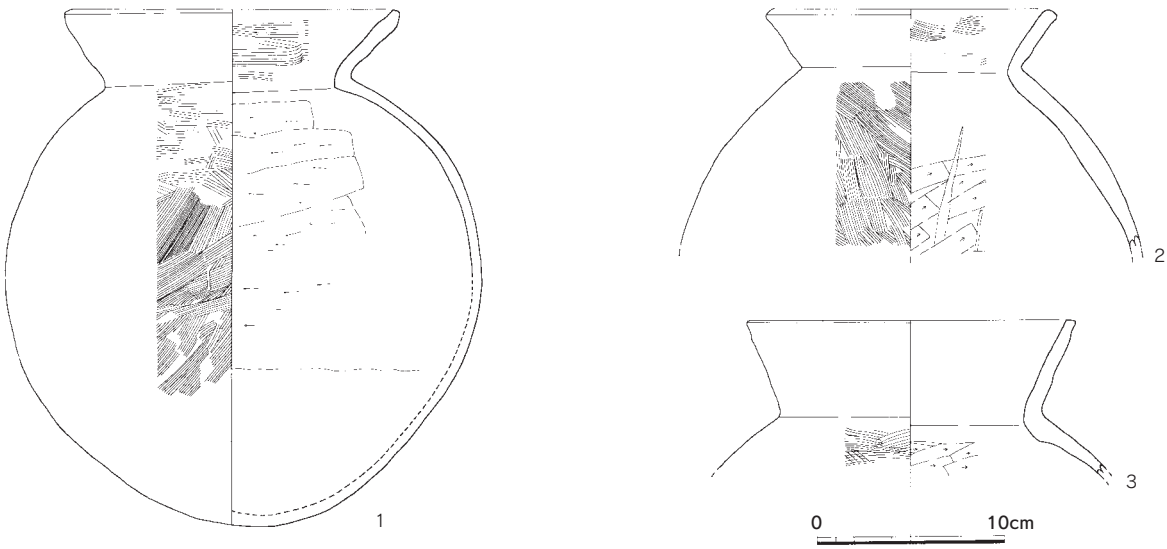


図74　SH121出土土器１（1/4）

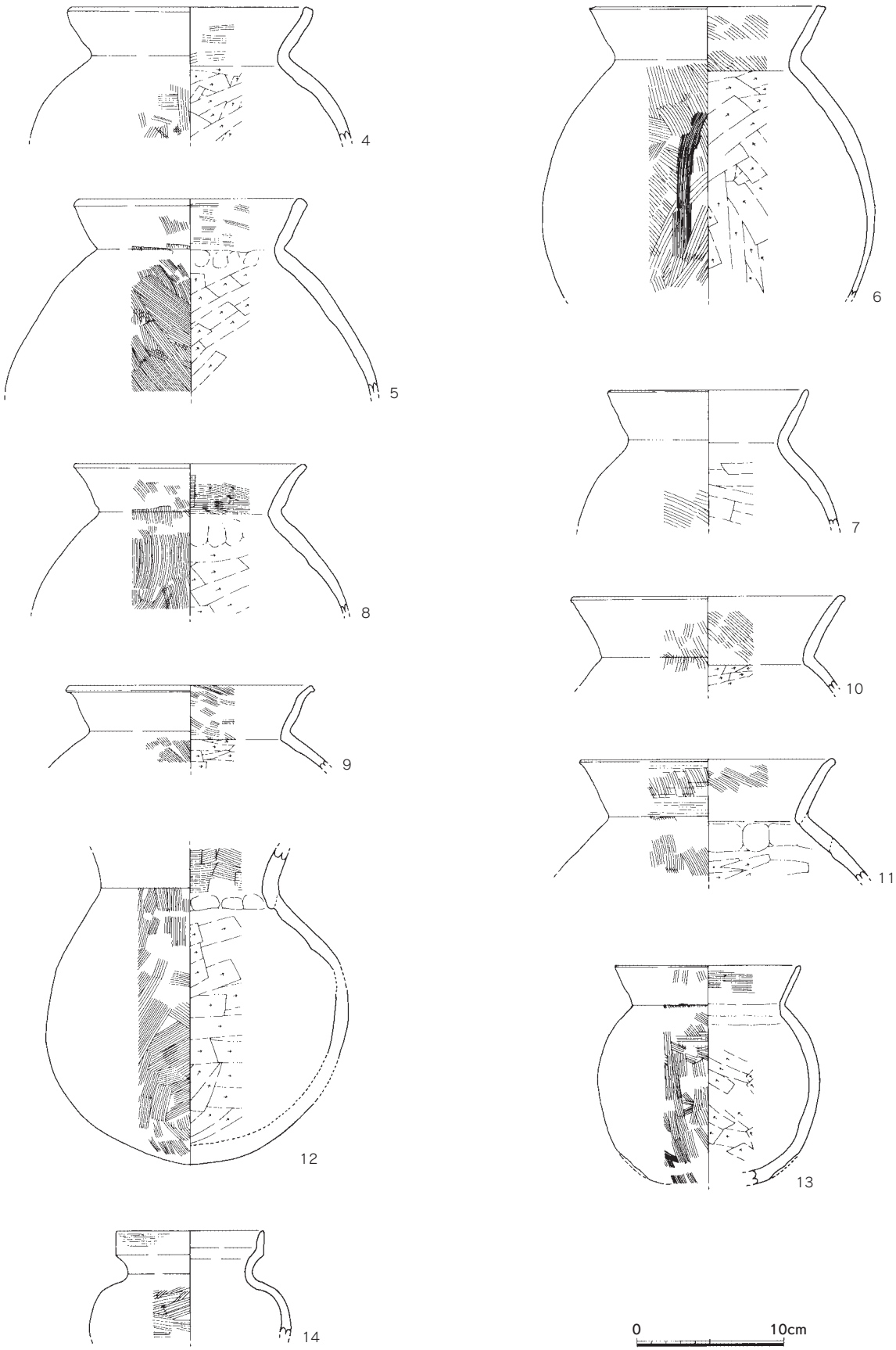


図75　SH121出土土器２（1/4）

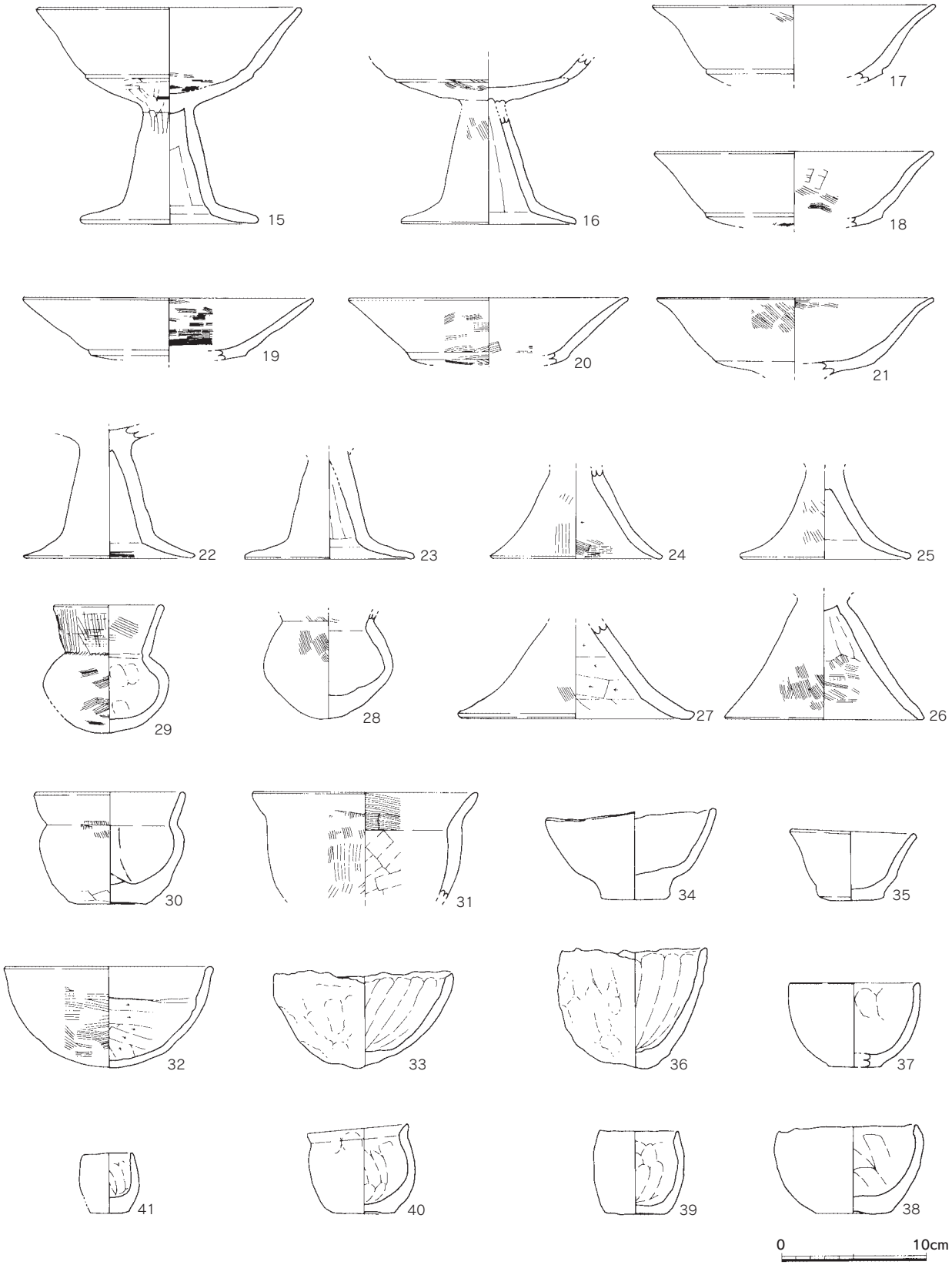


図76　SH121出土土器３（1/4）

ＳＨ122（図77）

Ｆ-４、５区画で検出した。竪穴住居群の中央に位置し、住居跡北側をSH121と切り合う。東方約1.5ｍにはSH125が、南方約1.5ｍにはSH118がある。

平面形態は長方形で、規模は長軸4.25ｍ、短軸はSH121と切り合うため推定で3.40ｍ、床面積は14.45㎡である。壁遺存高は10cm～20cmである。柱穴はＰ1、Ｐ2の２本柱で柱間1.4ｍである。柱穴はＰ1が長軸34cm、深さ32cm、Ｐ2が長軸36cm、深さ24cmの楕円形である。Ｐ1、Ｐ2ともに径約10cmの柱根が遺存していた。

住居埋土は黒色砂で炭化物を混入する。平面でSH121との切り合いを確認することはできなかった。遺物は壺、高杯、鉢などが出土した。

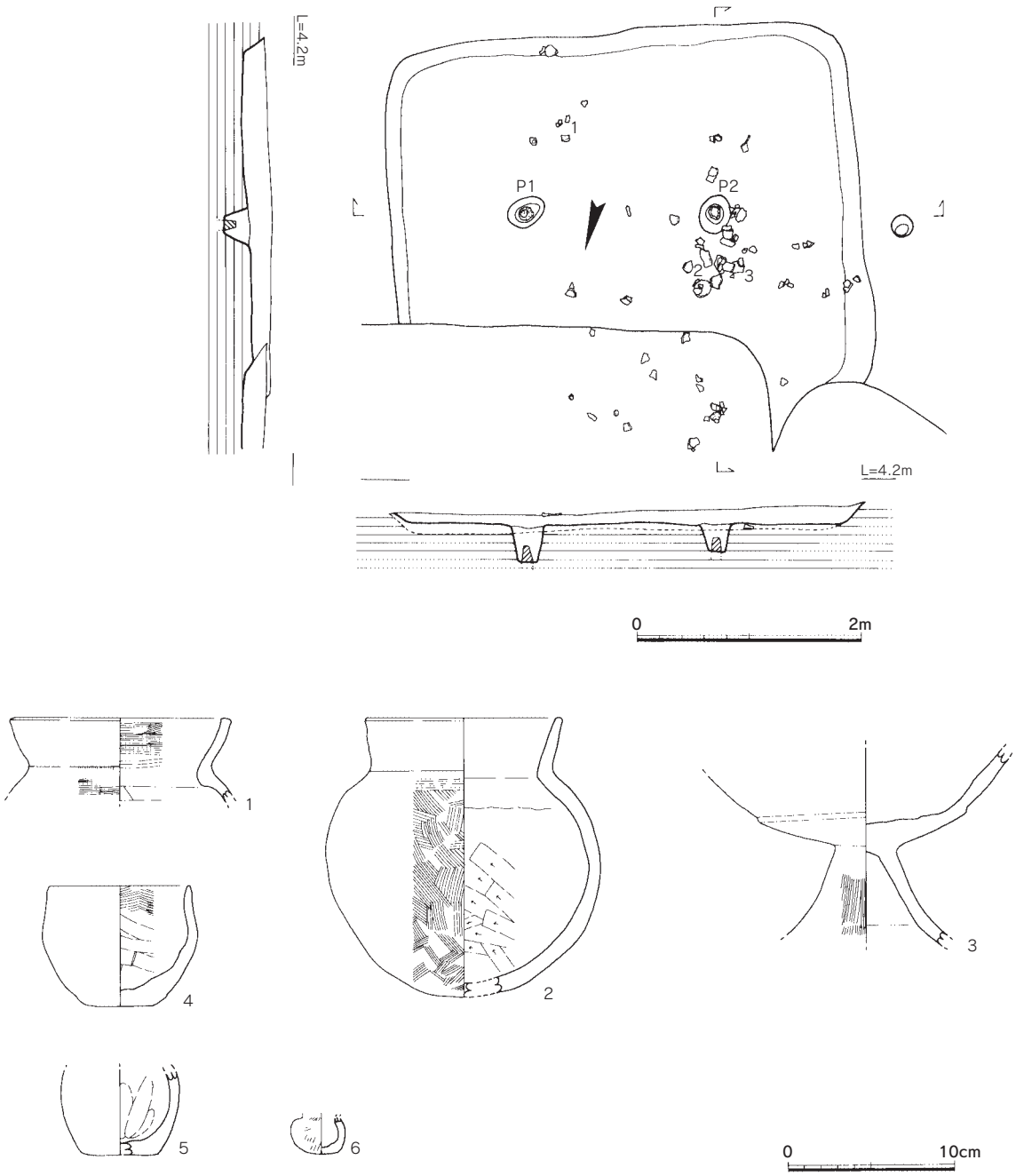


図77　SH122竪穴住居跡（1/60）・出土土器（1/4）

出土遺物（図77）

小型広口壺（1,2）土師器。１は口縁部破片。口縁部は内湾し、端部も内側に肥厚し古式の要素である。２はＤ２①式。口縁部は直立気味。底部に器壁剥離痕あり。底部に煤？付着。

高杯（3）土師器。脚部はラッパ状に開くＢ式で杯部外面の稜はｂ式である。杯部は深く新式の要素をもつ。

鉢（4～6）土師器。４は平底でＡ２②ｂ式。５は底部から胴部にかけて残存。平底でＡ２②式か。６はミニチュア土器。

ＳＨ124（図78）

Ｆ、Ｇ-５区画で検出した。竪穴住居群の南側に位置し、住居跡東側をSH118と切り合う。西方4.5ｍにはSB144が、北西約４ｍにはSH250がある。

平面形態は方形で、規模は長軸がSH118と切り合うため推定で3.13ｍ、短軸2.87ｍ、床面積は8.98㎡である。壁遺存高は６cm～８cmである。本遺跡検出の竪穴住居の中では最も小形である。床面には柱穴に相当する小穴があるが主柱穴にあたるものはない。住居埋土は暗オリーブ褐色砂（2.5YR3/3）で粘性、しまりともにない。

遺物は小破片が出土したのみである。

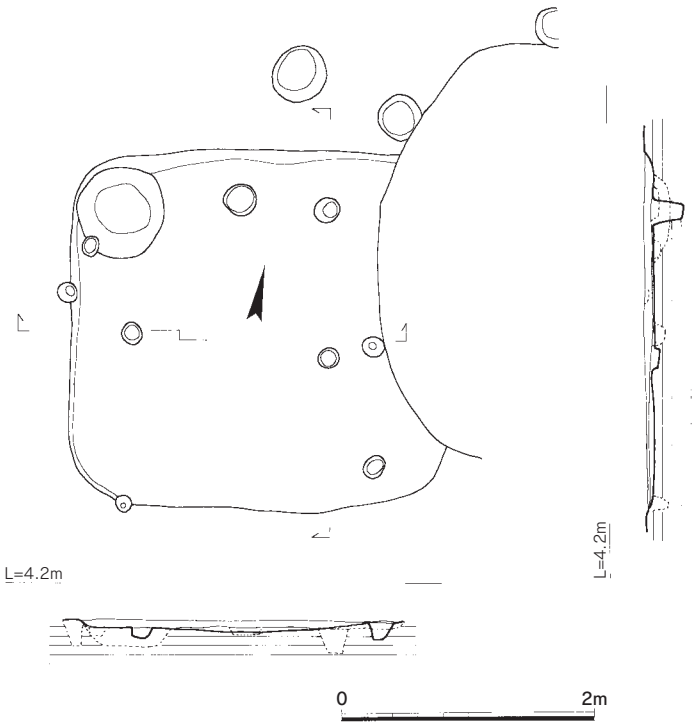


図78　SH124竪穴住居跡（1/60）

ＳＨ125（図79）

Ｅ、Ｆ-４区画で検出した。竪穴住居群の東側に位置し、住居跡西側はSH121と隣接する。西方1.5ｍにはSH122が、北方3ｍにはSH104がある。

平面形態は方形で、規模は長軸4.99ｍ、短軸4.46ｍ、床面積は23.25㎡を測る。壁遺存高は約10cmである。柱穴はＰ1～Ｐ4の４本柱で、柱間はＰ1－Ｐ2間1.15ｍ、Ｐ3－Ｐ4間1.25ｍ、Ｐ1－Ｐ3間1.76ｍ、Ｐ2－

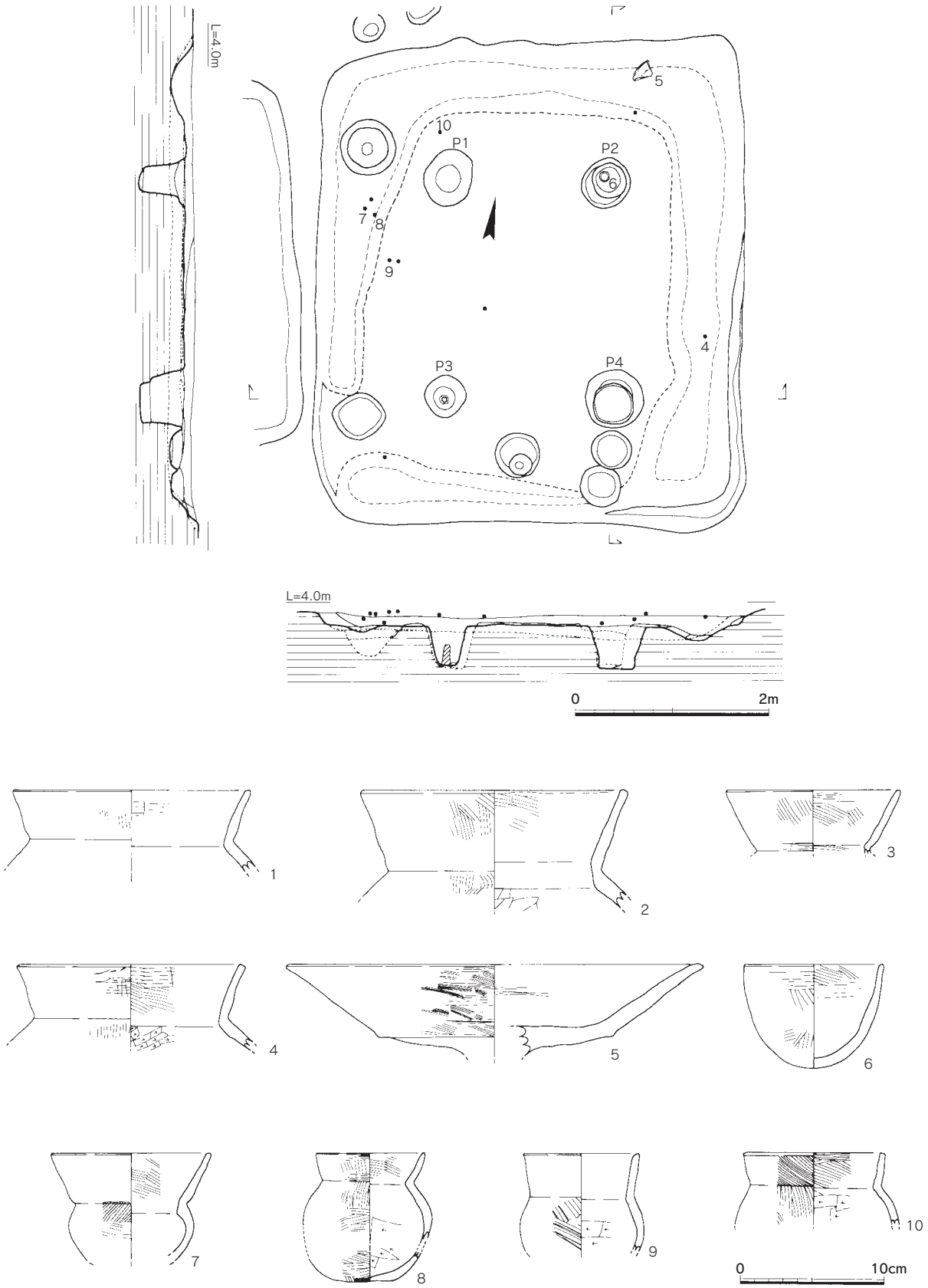


図79　SH125竪穴住居跡（1/60）・出土土器（1/4）

Ｐ4間1.70ｍである。柱穴平面形態はＰ1が楕円形で他は円形であり、規模は長径44cm～62cmである。Ｐ3には径約10cmの柱根が遺存する。また、Ｐ2埋土中から完形の土師器鉢（6）が出土しておりSH104、Ｐ3と同様の主柱を抜いた後の地鎮などの祭祀が考えられる。

床面周壁沿いには幅0.5ｍ～0.8ｍ、深さ約15cmの溝がまわり、床面掘り方と考えられる。住居埋土は黒褐色細砂で、炭化材を比較的多く含む。遺物は甕、高杯、小型丸底壺などが出土した。

出土遺物（図79）

出土土器群のなかで２，７は古い要素をもち、時期の混在が認められる。

甕（1,4）土師器。どちらも口縁部破片で胴部形態はともに不明。ともにＡⅠ②ａ式。

広口壺（2）土師器。口縁部破片、口縁部長6.0cm。ＡⅠａ式。

直口壺（3）土師器。口縁部破片。ＦⅡ２式。

高杯（5)土師器。杯部のみ1/4残存。復元口径は28.8cmで大型。ＡⅡ①ｂ式。

鉢（６）土師器。Ａ２②ａ式。精製の丸底鉢。

小型丸底壺（7～10）土師器。表89に形式分類表を示す。１式は７のみで２式は8，9，10である。７は口縁部も発達し、器形的には古式の要素をもつが調整はｂ式である。４点とも調整は粗雑なｂ式で小型丸底壺としては新式の要素をもつ。

ＳＨ231（図80）

Ｆ、Ｇ-８区画で検出した。他の竪穴住居群からやや離れた位置にあり、竪穴住居の中では最も大形である。最も近い竪穴住居として東方18ｍにSH250がある。また北方3.5ｍにはSB254が南西５ｍにはＳＢ253がある。

平面形態は方形で、規模は長軸6.38ｍ、短軸6.36ｍ、床面積40.58㎡を測る。壁遺存高は８cm～15cmである。柱穴はＰ1～Ｐ4とＰ5～Ｐ8の４本柱が２組あり、建て替えあるいは主柱、側柱などが考えられる。柱間はＰ1－Ｐ2間2.60ｍ、Ｐ1－Ｐ3間2.74ｍ、Ｐ3－Ｐ4間2.70ｍ、Ｐ2－Ｐ4間2.90ｍでＰ5－Ｐ6間1.17ｍ、Ｐ6－Ｐ8間1.37ｍ、Ｐ7－Ｐ8間1.02ｍ、Ｐ5－Ｐ7間1.50ｍである。床面東壁付近に平面楕円形の屋内土坑がある。長軸1.1ｍ、短軸0.64ｍ、深さ0.28ｍで完形の高杯(3)が出土した。また、床面には足跡らしき痕跡がみられた。

住居埋土は暗褐色細砂で炭化物を多く含む。遺物は床面からやや浮いた状態で出土した。

出土遺物（図81)

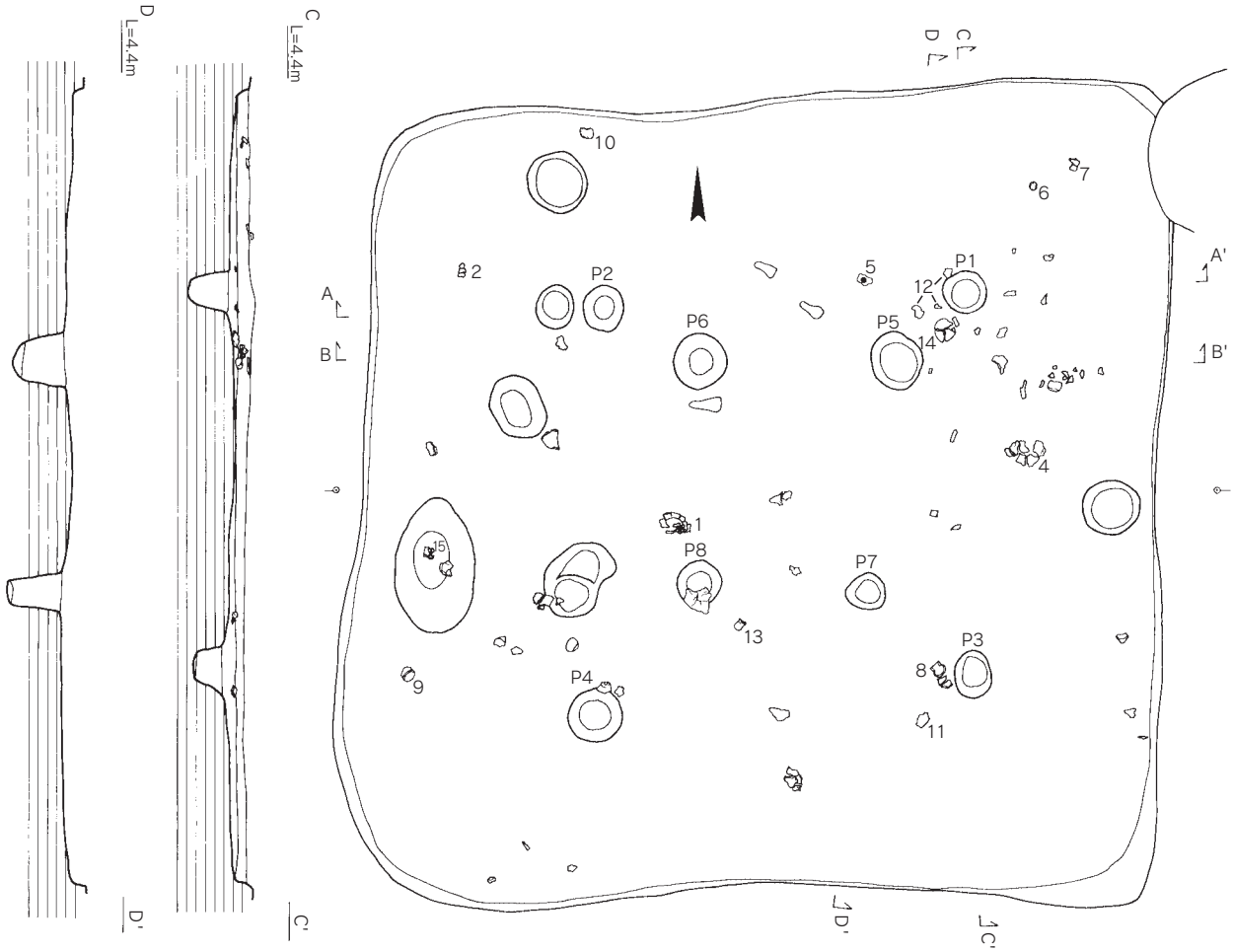
甕の口縁部は新式の要素をもち、椀２点を含む。また、小型丸底壺は粗製で形態的にも新しい要素をもつ。これらの土器群は本遺跡竪穴住居出土土器群の中ではもっとも新しい様相である。

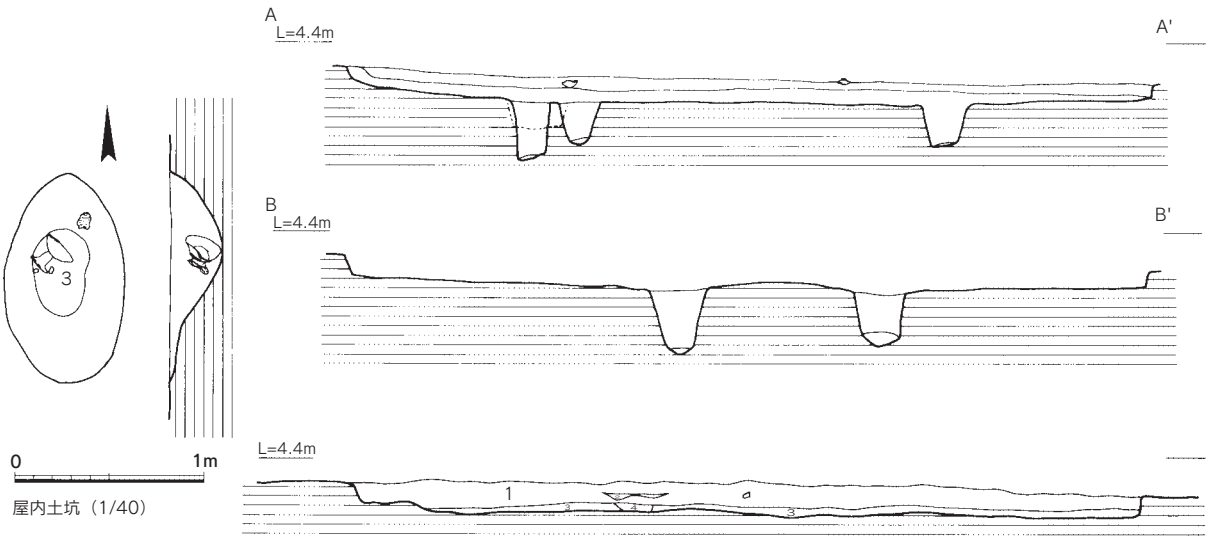
甕（1）土師器、口縁部から肩部にかけて残存。ＡⅡ③式。口縁部は外反し端部にかけて器壁がやや薄くなる。肩部タテハケ。このように甕としては新式の要素をもつ。

小型広口壺（2）土師器、口縁部から肩部にかけて一部残存。Ｃ２②式。口縁部長は3.5cmとやや長く直口壺に近い。

高杯（3,4,5）土師器。３はほぼ完形。ＡⅠ２①ｂ式。杯・脚部接合技法Ａ式。４は杯部のみ2/3残存、杯部形態は④ｂ式。内外面ナデ調整され丁寧なつくり。５は脚部のみ残存。Ｂ式。

鉢（6,7,11,13）土師器。素口縁のＡ式が２点、屈曲口縁のＢ式が２点あり、Ｂ式はともに粗製である。６は完形、比較的丁寧なつくり。ＡⅠ②式。７は口縁部から胴部にかけて約1/5残存。11は口縁部から底部にかけて1/5残存。Ｂ２②式。13はほぼ完形。Ｂ２①式。





屋内土坑（1/40）

1．暗褐色細砂（Hue 7.5YR　3/4）
2．黒色細砂（Hue 7.5YR　12/1）
3．黒褐色細砂（Hue 7.5YR　3/1）
4．暗褐色細砂（Hue 10YR　3/3）

図80　SH231竪穴住居跡（1/60）

小型丸底壺（8,9,10,12）土師器。いずれも粗製で、新式の要素をもつ。8,9,12は口縁部にのみヨコナデを施す。８は口縁部から胴部にかけて1/3残存。Ｃ２②式。９は口縁部のみ一部欠損。形態的には口縁部が開くなど古い要素をもつが全体的なつくり、調整は新式である。Ｃ１①式。10は胴部のみ1/2残存。底部内面に指頭圧痕がのこるなどつくりは雑である。頸部がわずかに残りそれから判断してＣ１①式か。12は底部および口縁部の一部を欠損する。Ｃ２②式。

椀（14,15）土師器。14は口縁部のみ一部欠損。平底でＩ５式。15は口縁部から胴部にかけて1/6残存。口縁部でわずかに屈曲し外反する。平底気味である。Ｉ３式。

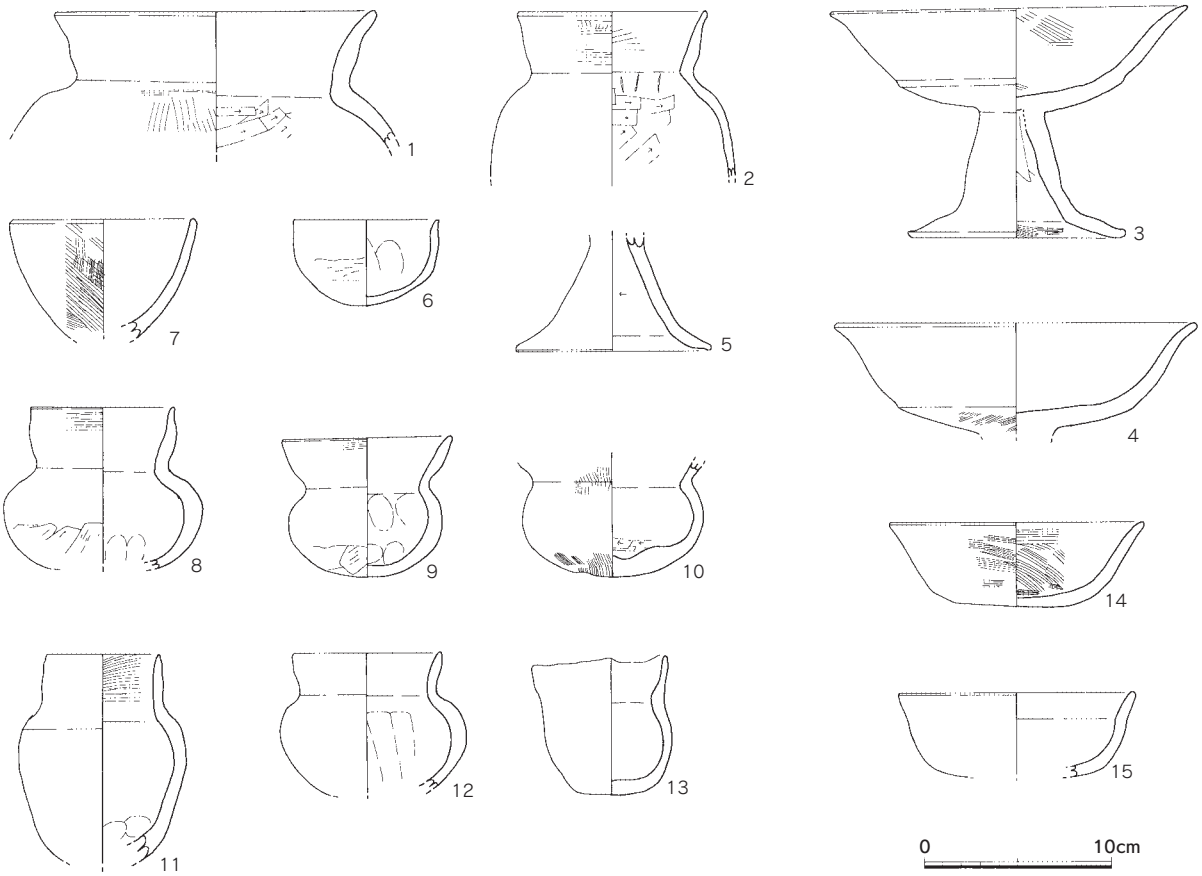


図81　SH231出土土器（1/4）

ＳＨ250（図82）

Ｆ-６区画で検出した。竪穴住居群の中では西側に位置し、住居跡北側をSH262と切り合う。南方４ｍにはSH124がある。

平面形態は方形で、規模は長軸4.70ｍ、短軸はSH262と切り合うため推定で4.64ｍ、床面積は21.80㎡である。壁遺存高は15cmを測る。柱穴はＰ1、Ｐ2の２本柱で柱間は1.17ｍである。Ｐ1は平面円形で直径22cm、深さ36cm、Ｐ2は不整円形で長軸59cm、短軸52cm、深さ50cmである。

床面南壁付近に平面円形の屋内土坑があり規模は長軸1.1ｍ、短軸1.13ｍ、深さ34cmである。住居埋土は黒色砂（7.5YR1.7/1）１層である。遺物は甕、壺、高杯などの破片が出土している。

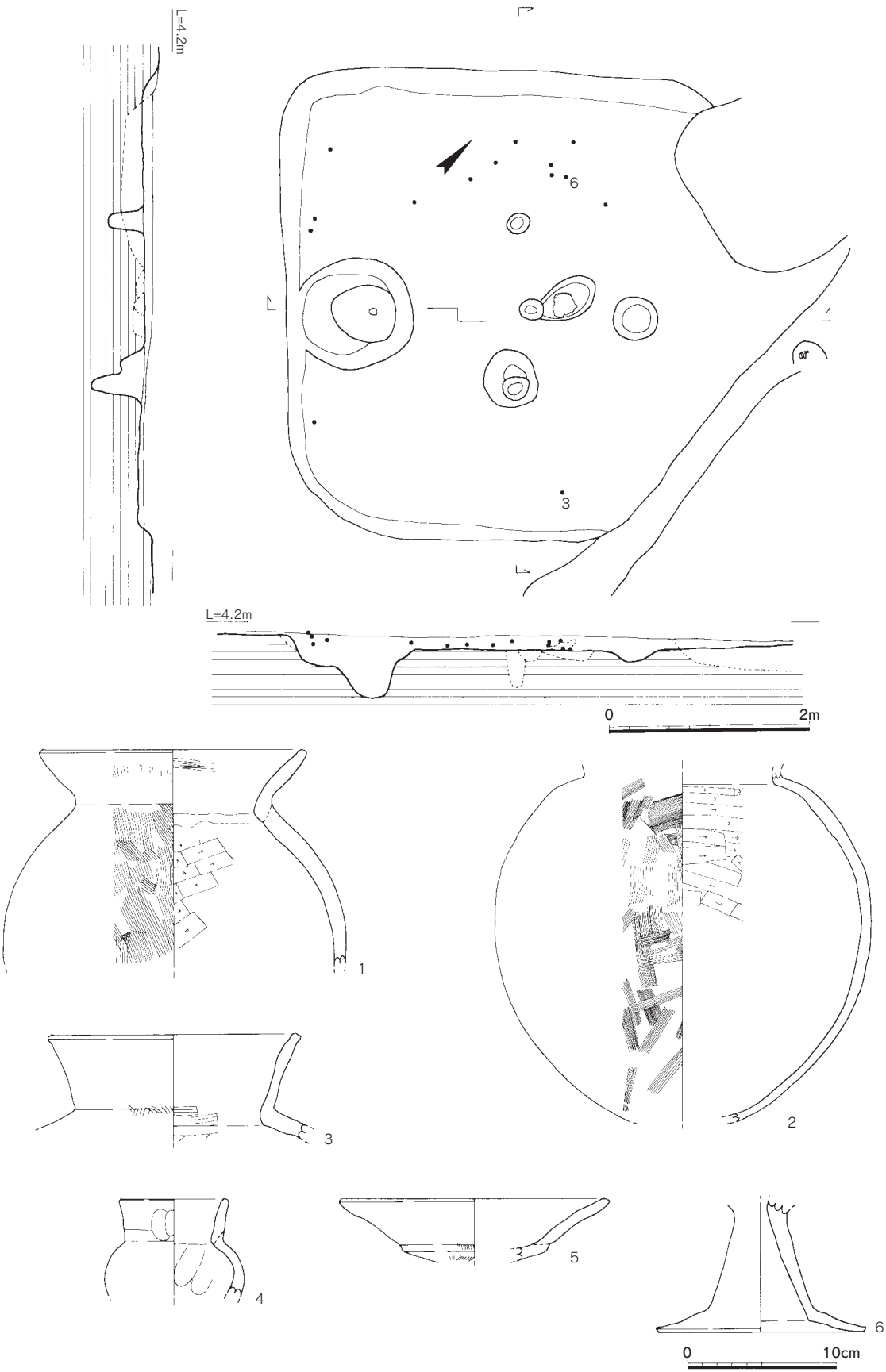


図82　SH250竪穴住居跡（1/60）・出土土器（1/4）

出土遺物（図82）

甕（1,2）土師器。１は口縁部から肩部にかけて1/6残存。肩部内面に粘土帯接合痕あり。ＡⅡ１②ｂ式。２は胴部のみ約1/3残存。肩部に部分的にヨコハケを残す。ＡⅡ２式か。

広口壺（3）土師器。口縁部のみ1/6残存。口縁部長5.0cm、Ａ２ａ式。

小型丸底壺（4）土師器。口縁部から肩部にかけて1/6残存。口縁部粘土帯接合痕が明瞭に残る。Ｃ２②式。

高杯（5,6）土師器。５は杯部のみ1/6残存。ＡⅠ③ｂ式。６は脚部のみ1/2残存。脚部形態は２式。

ＳＨ262（図83）

Ｅ、Ｆ-５、６区画で検出した。竪穴住居群の中では西側に位置し、住居跡南側をSH250と北側をＳＢ141と切り合う。西方3mにはSH121がある。

平面形態は方形で、規模は長軸5.32m、短軸5.08m、床面積は27.03㎡を測る。壁遺存高は10cm～14cmである。主柱穴はＰ1～Ｐ4の４本柱で柱間はＰ1－Ｐ2間2.30m、Ｐ2－Ｐ4間1.70m、Ｐ3－Ｐ4間2.0m、Ｐ1－Ｐ3間1.3mである。柱穴は平面円形および楕円形で長径42cm～48cm、深さ約45cmである。床面ほぼ中央には炉状の土坑がある。住居埋土は黒色砂である。遺物はほとんど床面から浮いた状態で出土して

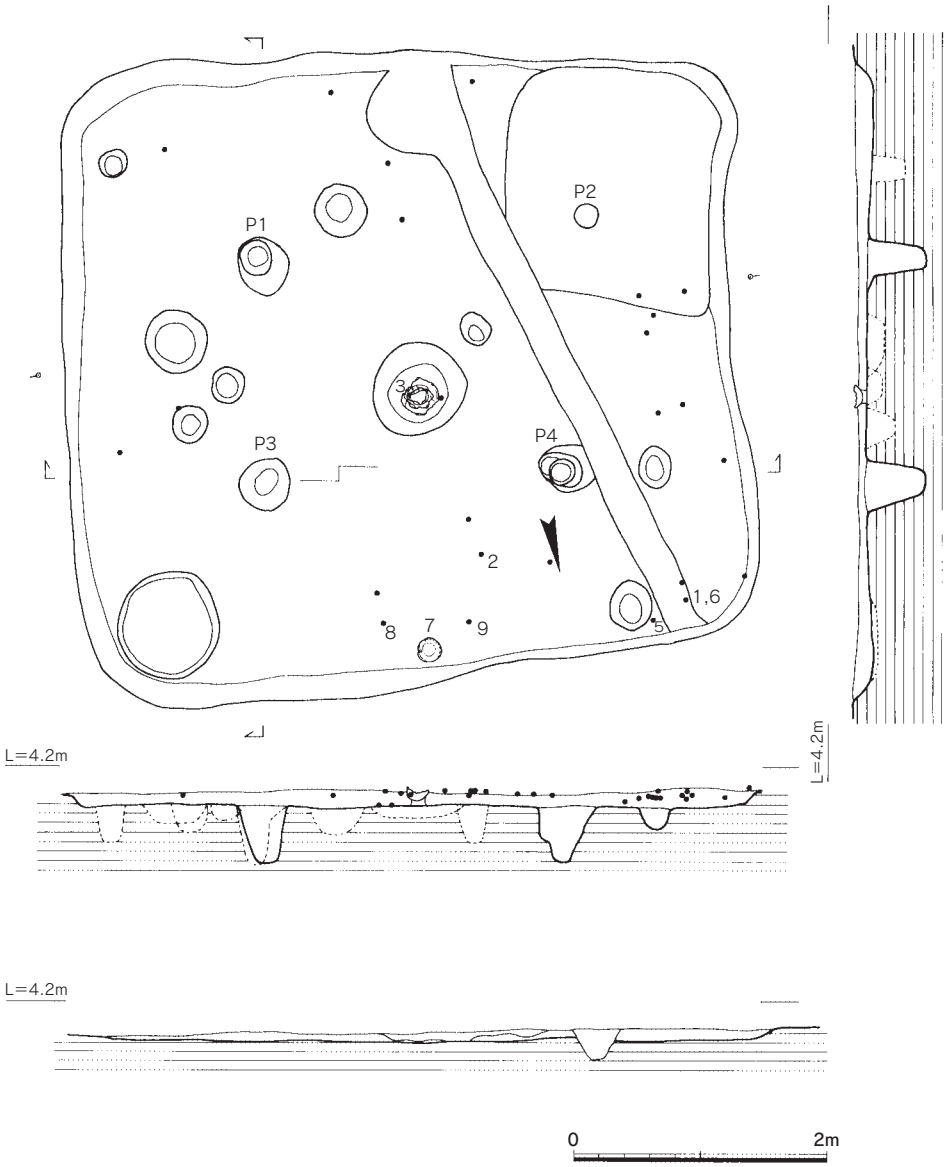


図83　SH262竪穴住居跡（1/60）

おり、甕、壺、高杯、鉢などがある。

出土遺物（図84）

1の口縁部内湾する甕や広口壺などは古い時期であるが3は新形式の甕で新旧時期の土器が混在する。また、高杯で８のように他の高杯群とは形態が異なるものがある。

甕（1,5）土師器。1は口縁部1/3残存。胴部は砲弾形か。ＡⅡ１①式。５は口縁部から肩部にかけて1/2残存。口縁部は直立気味に外反する。端部は丸味をもち口縁部成形技法Ｂ式である。器壁も口縁端部で7mmと厚い。甕としては新時期である。口縁部形式は③ｂ式。

広口壺（2,3,4）土師器。２は口縁部破片、口縁部長4.4cm。Ａ２式。３は口縁部から肩部にかけて残存。口縁部長6.0cm。Ａ１ａ式。４は口縁部破片、口縁部長5.5cm。Ａ２ａ式。

高杯（6,7,8,9）土師器。６は口縁部破片、ＡＩ①ｂ式。７は杯部のみ残存。杯部の深さ5.0cm、口縁部は外反し稜をナデ消す。杯・脚部接合技法Ｂ式。ＡＩ③′ａ式。８は口縁部1/3残存。粗製で外面の稜がない。形態的に他の高杯とは異なる。９は脚部のみ残存。２式。

鉢（11）土師器。1/3残存。Ａ１②式。

不明（10）土師器。口縁部として図化したが底部の可能性もある。

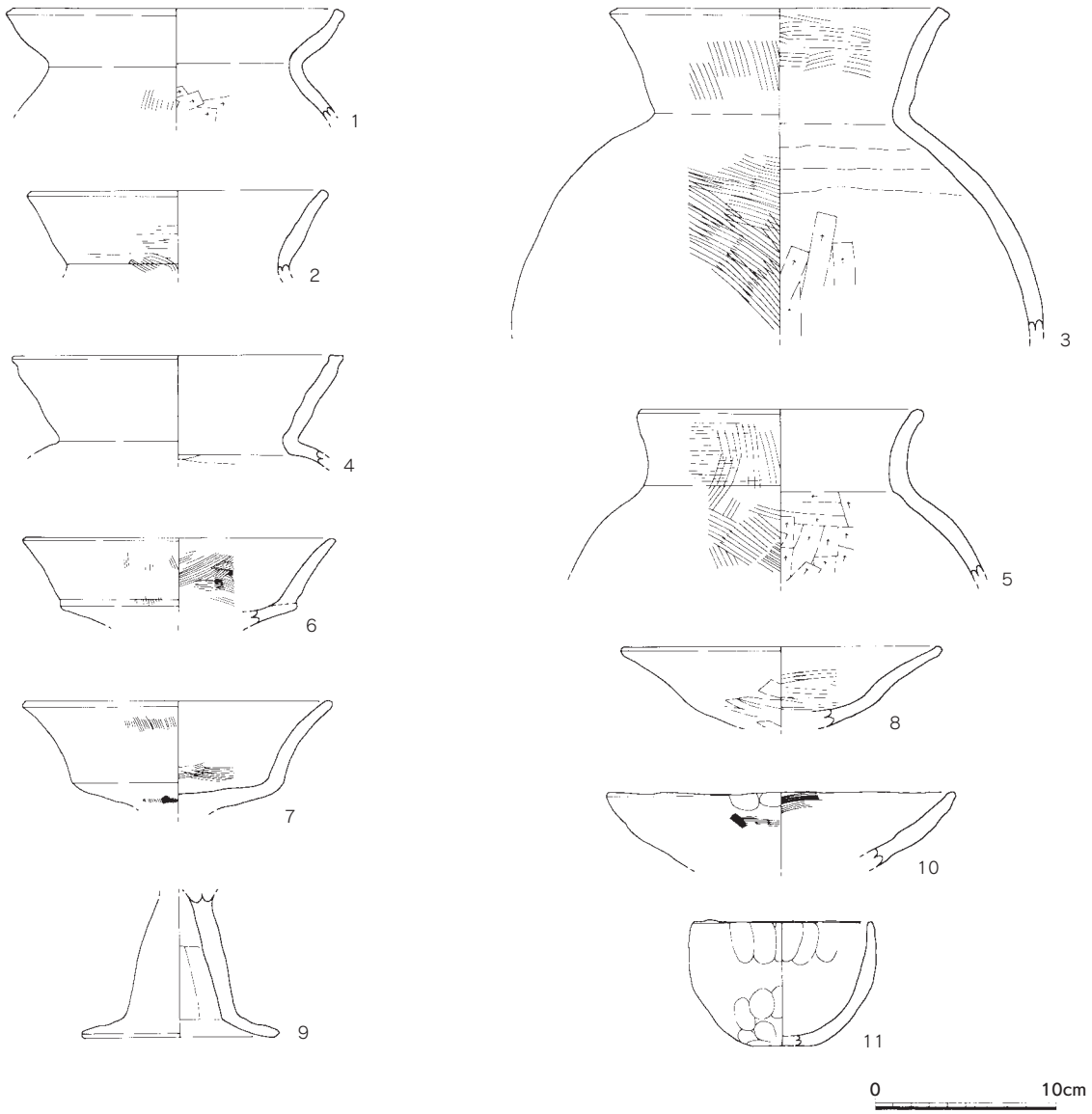


図84　SH262出土土器（1/4）

（2）掘立柱建物跡

表の桁行、梁行の長さは、両側のうちともに長い方を表記した。床面積はこの桁行×梁行で算出した。

表24　掘立柱建物跡一覧表

遺構番号	長軸方位	規模（桁行×梁行）	桁行（m）	梁行（m）	床面積（㎡）
ＳＢ107	N89°W	２×１	5.92	3.20	18.94
ＳＢ123	N88°E	２×１	5.30	3.24	17.17
ＳＢ136	N10°W	１×１	1.56	1.38	2.15
ＳＢ137	N 4°W	１×１	1.66	1.66	2.76
ＳＢ140	N 7°W	１×１？	1.76	1.60	2.81
ＳＢ141	N68°E	４×３	6.80	3.66	24.89
ＳＢ144	N85°E	２×２	2.40	2.36	5.66
ＳＢ145	N10°E	１×１	1.40	1.36	1.90
ＳＢ148	N 3°E	１×１	2.14	1.78	3.81
ＳＢ253	N25°E	１×１	1.46	1.32	1.93
ＳＢ254	N10°E	１×１	2.28	1.74	3.97
ＳＢ255	N 9°W	１×１	2.14	2.12	4.54

ＳＢ107（図85）

Ｄ-３区画で検出した。集落部の東端に位置し、北方約２ｍにはSK105が西方約4ｍにはSK108がある。方位はN89°Eをもつ２間×２間の掘立柱建物である。桁行5.92ｍ、梁行3.20ｍで床面積は18.94㎡である。南側の桁には小穴が５基並ぶがこれらがすべて柱穴になるかは疑問である。柱穴の平面形態はＰ１が不整円形、Ｐ2～Ｐ4、Ｐ6が円形、Ｐ5、Ｐ7、Ｐ8が楕円形である。柱穴の規模は最大のＰ１が0.4ｍ×0.33ｍ、最小のＰ3が0.2ｍ×0.2ｍである。柱穴の深さは0.12ｍ～0.25ｍである。

ＳＢ123（図87）

Ｆ-４区画で検出した。集落部の南東に位置し、Ｐ2はSD115と切り合う。またSB148が東に隣接し切り合う。方位はN88°Eをもつ２間×１間の掘立柱建物である。建物の平面形態は台形で北側の桁行5.30ｍ、南側桁行4.94ｍ、東側の梁行3.24ｍ、西側梁行2.62ｍで床面積17.17㎡である。北側桁にならぶＰ1、Ｐ3、Ｐ5のうちＰ3はやや内側にそれ一直線に並ばない。Ｐ1、Ｐ3～Ｐ6には径約10cm～18cmの柱根が遺存していた。Ｐ1の柱根の側面には工具痕があり、下端面は鋭利な工具で平坦に仕上げられている。また、Ｐ3、Ｐ4の柱根の下端面は平坦に切られている。樹種はＰ1がニレ属、Ｐ3～Ｐ6はアカマツである。柱穴の平面形態はＰ1、Ｐ6が円形でＰ2～Ｐ5が不整円形である。柱穴の規模は最大のＰ4が0.5ｍ×0.42ｍ、最小のＰ6が0.36ｍ×0.36ｍである。柱穴の深さは0.3ｍ～0.5ｍである。

ＳＢ136（図85）

Ｃ-１区画で検出した。集落部の東端に位置し、SB137と切り合う。方位はN10°Wをもつ１間×１間の掘立柱建物である。桁行1.56ｍ、梁行1.38ｍで床面積は2.15㎡である。

柱穴にはすべて径約10cm～15cmの柱根が遺存していた。柱根は木の皮を剥いで加工している。下端面はＰ1のみ中央が尖ったように加工しているが他の３本は平坦にしている。樹種は４本ともクリである。柱穴の平面形態はＰ1～Ｐ4ともに円形である。柱穴の規模は最大のＰ3が0.29ｍ×0.26ｍ、最小のＰ4が0.24ｍ×0.21ｍである。柱穴の深さは0.30ｍ～0.35ｍである。

ＳＢ137（図85）

Ｃ-１区画で検出した。集落部の東端に位置し、SB136と切り合う。方位はN4°Ｗをもつ１間×１間の掘立柱建物である。桁行、梁行ともに1.66ｍで床面積は2.76㎡である。柱穴にはすべて径15cm～17cmの柱根が遺存していた。柱根は木の皮を剥いでおらず、下端面を平坦に加工するのみである。樹種は４本ともクヌギである。柱穴の平面形態はＰ1、Ｐ2、Ｐ4が円形でＰ3が楕円形である。柱穴の規模は最大のＰ3が0.26ｍ×0.22ｍ、最小のＰ1が0.22ｍ×0.19ｍである。柱穴の深さは0.3ｍ～0.4ｍである。

ＳＢ140（図87）

Ｇ-５区画で検出した。集落部の南側に位置し、西方約9ｍにはSB144が北方約3ｍにはSH118、SH124がある。南側の梁が調査区にかかり建物全体は不明である。方位はN7°Ｗをもつ1間×1間の掘立柱建物である。桁行1.76ｍ、梁行1.60ｍで床面積は2.81㎡である。柱穴にはすべて径10cm～15cmの柱根が遺存していた。すべての柱根の下端面は平坦に仕上げられており、Ｐ1の柱根の外皮は剥がれている。樹種はＰ1がホルトノキ属でＰ2、Ｐ3はヤブツバキである。柱穴の平面形態はＰ1が円形でＰ2、Ｐ3が不整円形である。柱穴の規模は最大のＰ3が径0.47ｍ、最小のＰ1が0.34ｍ×0.33ｍである。柱穴の深さは0.3ｍ～0.4ｍで

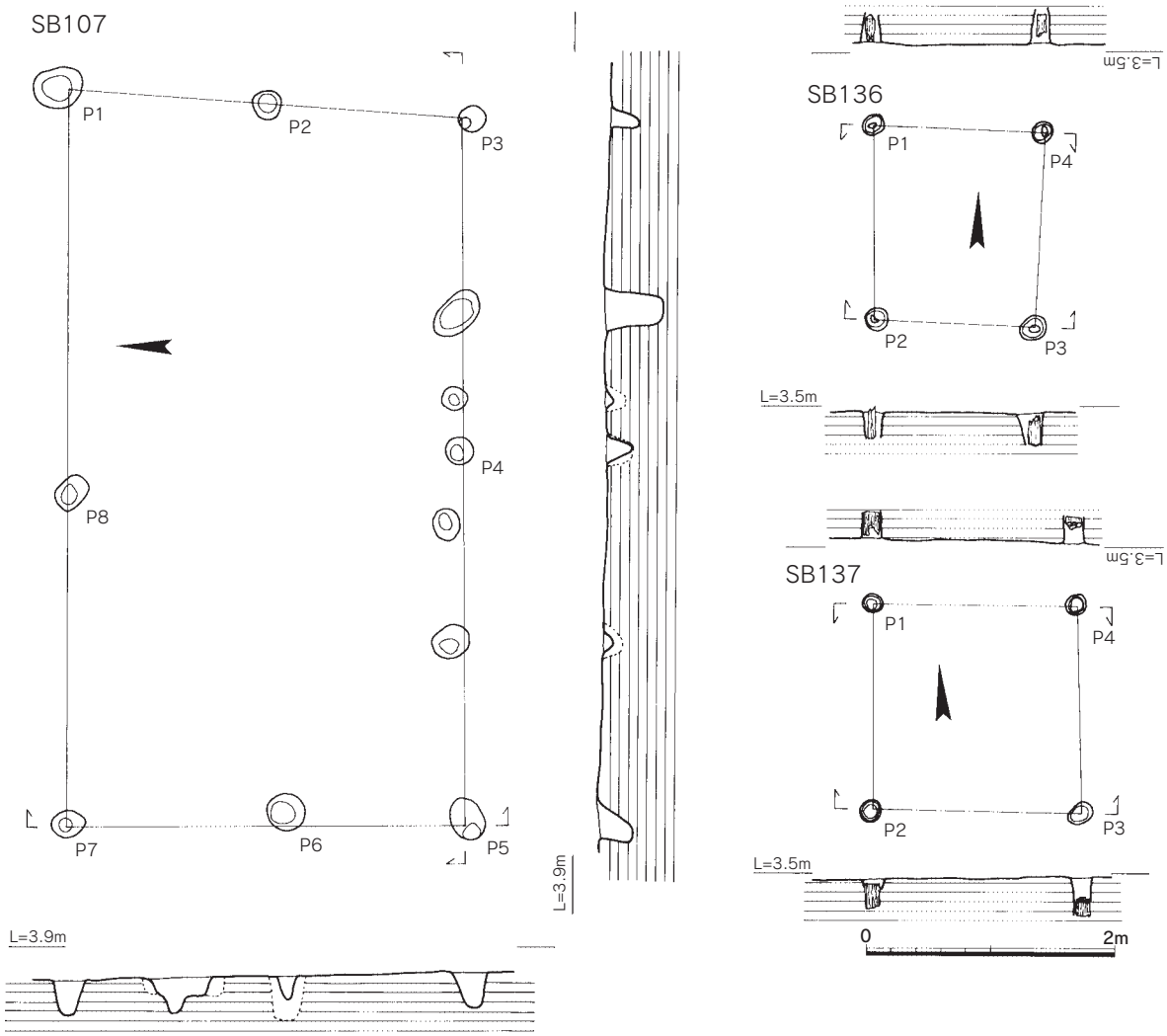


図85　掘立柱建物跡１（1/60）

ある。

ＳＢ141（図86）

Ｅ-５、６区画で検出した。集落部の中央に位置し、SH262と切り合う。南方約1.5ｍにはSH121が東方約５ｍにはSH104がある。方位はN68°Ｅをもつ４間×３間の掘立柱建物である。南側の桁行は３間で、東側の梁間は２間であるなど掘立柱建物としては柱穴が完全にはそろっていない。桁行6.80ｍ、梁行3.66ｍで床面積は24.89㎡である。柱根はＰ4、Ｐ6、Ｐ11に遺存していた。Ｐ4の柱根は長さ12cmの板状として残存。工具で斜めに切った跡がある。Ｐ6は断面三角形で表面は工具により加工される。端部は斜めに削られる。Ｐ11は小片で出土している。樹種はＰ6がツブラジイ、Ｐ11がクリである。柱穴の平面形態はＰ11が楕円形で他は不整円形である。柱穴の規模は様々で最大のＰ6は1.30ｍ×1.24ｍ、最小のＰ1が2.6ｍ×2.2ｍである。柱穴の深さは0.17ｍ～0.53ｍである。

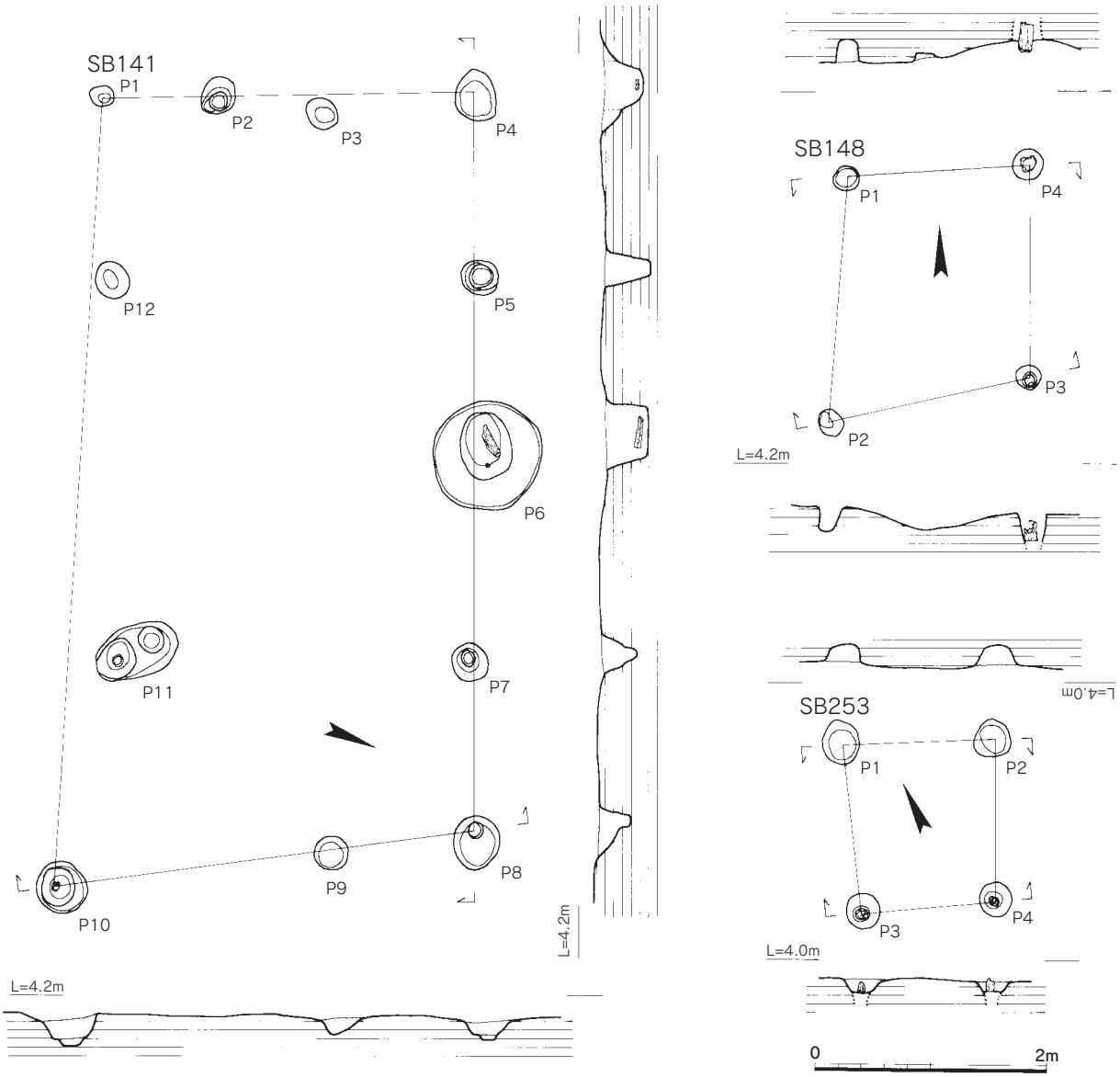


図86　掘立柱建物跡２（1/60）

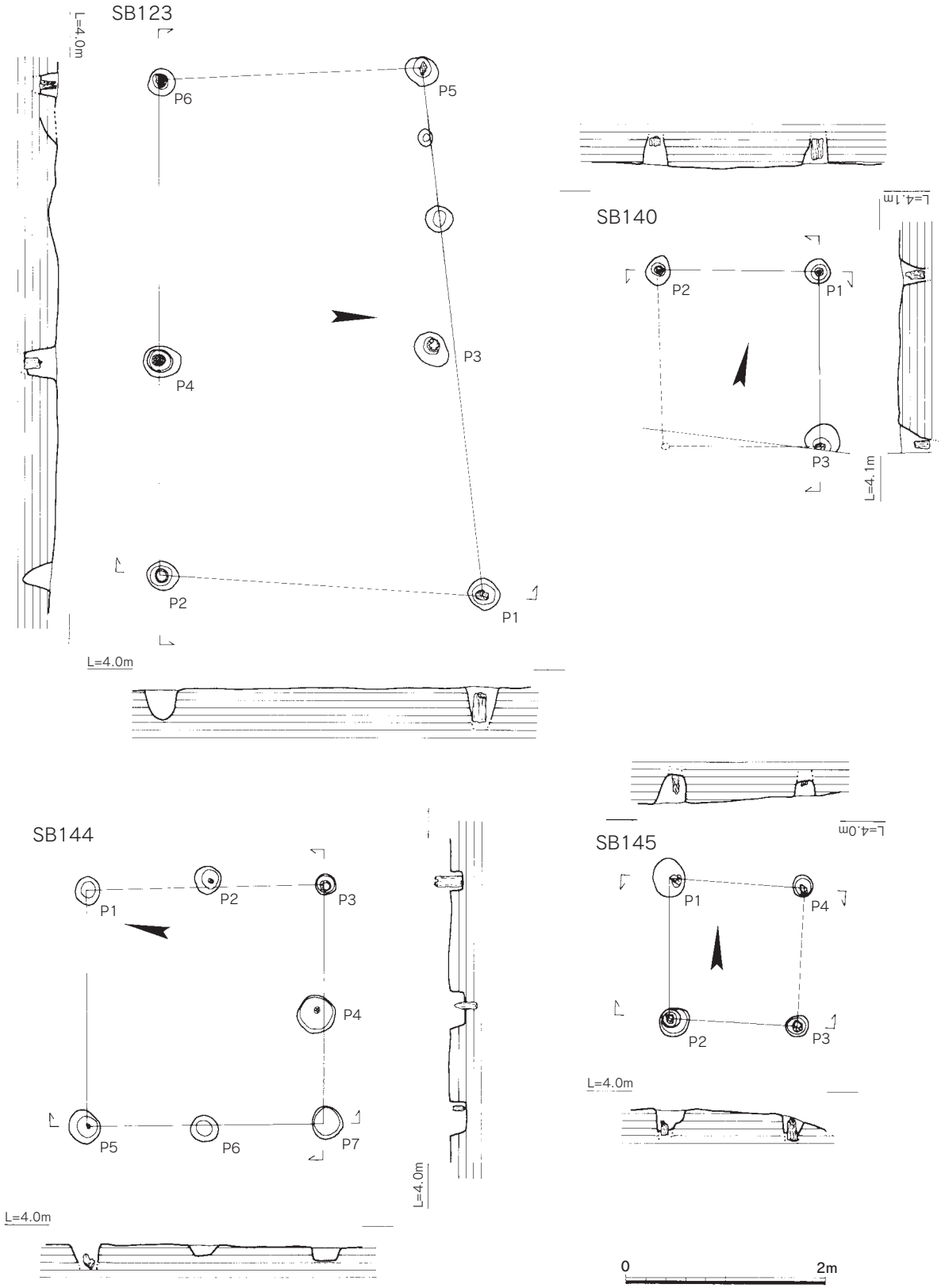


図87　掘立柱建物跡３（1/60）

ＳＢ144（図87）

Ｇ-６区画で検出した。集落部の南西部に位置し、北方約５ｍにはSH250が東方約４ｍにはSH124がある。Ｐ7の西方２ｍには柱根が遺存する小穴・Ｐ2165があるがSB144との関係は不明である。

方位はN85°Ｅで、北側の桁は１間であるが南側は２間であり、２間×２間の掘立柱建物とした。桁行2.40ｍ、梁行2.36ｍで床面積は5.66㎡である。Ｐ2～Ｐ5、Ｐ7には径８cm～16cmの柱根が遺存していた。柱根はいずれも下端面が平坦に仕上げられており外皮は剥がれている。樹種はＰ3、Ｐ5、Ｐ7がクリ、Ｐ4がシイ属である。柱穴の平面形態は円形である。柱穴の規模は最大のＰ4が0.5ｍ×0.5ｍ、最小のＰ3が0.28ｍ×0.26ｍである。柱穴の深さは0.15ｍ～0.3ｍである。

ＳＢ145（図87）

Ｆ-３区画で検出した。集落部の東端に位置し、SD115と切り合う。南方約5ｍにはSB148がある。方位はN10°Ｅをもつ１間×１間の掘立柱建物である。桁行1.40ｍ、梁行1.36ｍで床面積は1.90㎡である。すべての柱穴には径８cm～13cmの柱根が遺存していた。すべての柱根の下端面は平坦に仕上げられており、外皮はついた状態である。柱穴の平面形態は不整円形である。柱穴の規模は最大のＰ1が0.5ｍ×0.43ｍ、最小のＰ4が0.28ｍ×0.26ｍである。柱穴の深さは0.3ｍ～0.4ｍである。

ＳＢ148（図86）

Ｆ-３、４区画で検出した。集落部の南東部に位置し、SD115と切り合う。また、西にはSB123が隣接してつくられる。方位はN3°Ｅをもつ１間×１間の掘立柱建物である。桁行2.14ｍ、梁行1.78ｍで床面積は3.81㎡である。Ｐ3、Ｐ4には径約15cmの柱根が遺存していた。Ｐ4柱根の側面には工具痕があり、下端面は平坦に仕上げられる。柱穴の平面形態はＰ1、Ｐ4が円形、Ｐ2、Ｐ3が不整円形である。柱穴の規模は最大のＰ4が径0.34ｍ、最小のＰ1が0.29ｍ×0.29ｍである。柱穴の深さは約0.3ｍである。

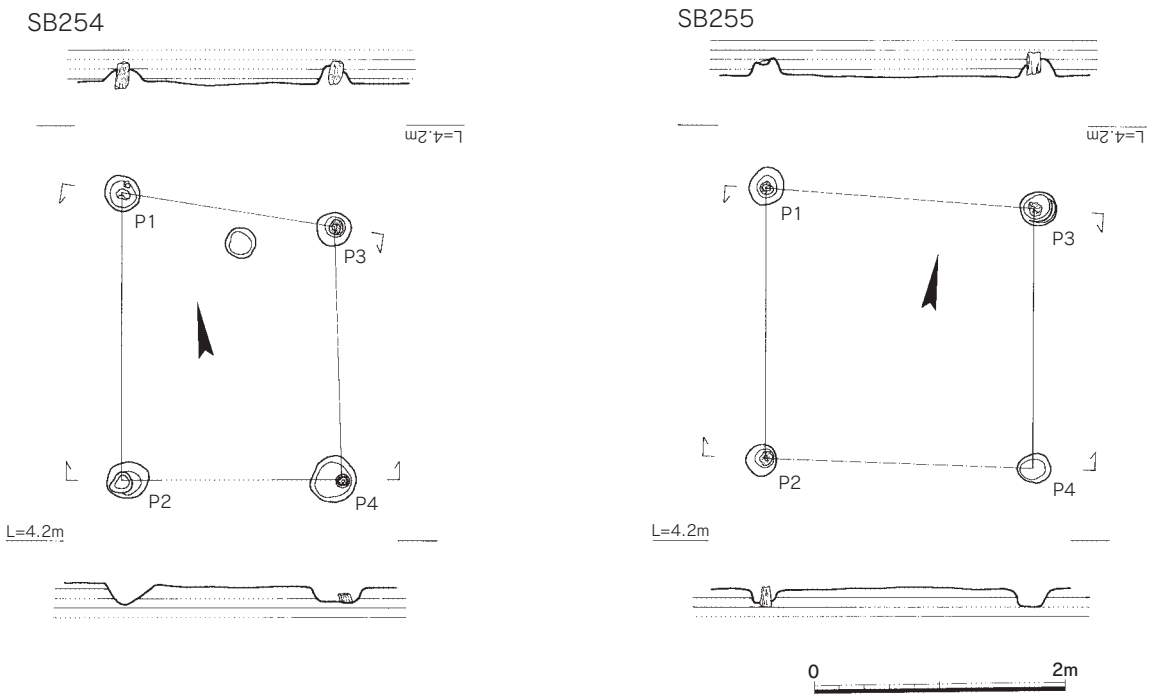


図88　掘立柱建物跡４（1/60）

ＳＢ253（図86）

Ｇ-９区画で検出した。集落部の南西端に位置し、北東５ｍにはSH231がある。方位はN25°Ｅをもつ１間×１間の掘立柱建物である。桁行1.46ｍ、梁行1.32ｍで床面積は1.93㎡である。Ｐ3、Ｐ4には径８cm～10cmの柱根が遺存するがどちらも腐食していた。樹種はともにヤブツバキである。柱穴の平面形態はＰ4が円形、Ｐ1、Ｐ2、Ｐ3が不整円形である。柱穴の規模は最大のＰ1が0.5ｍ×0.42ｍ、最小のＰ4が0.39ｍ×0.37ｍである。柱穴の深さは約0.2ｍである。

ＳＢ254（図88）

Ｅ-８区画で検出した。集落部の西端に位置し、北東5ｍにはSB255が南方4ｍにはSH231がある。方位はN10°Ｅをもつ１間×１間の掘立柱建物である。桁行2.28ｍ、梁行1.74ｍで床面積は3.97㎡である。Ｐ1～Ｐ3には径約12cmの柱根が遺存する。Ｐ3、Ｐ4の柱根は傾いており、下端面は３本ともに平坦に加工している。樹種はすべてヤブツバキである。建物の平面形態はやや台形気味である。柱穴の平面形態はＰ1、Ｐ3が円形、Ｐ2、Ｐ4が不整円形である。柱穴の規模は最大のＰ4が0.49ｍ×0.47ｍ、最小のＰ1が0.38ｍ×0.36ｍである。柱穴の深さは約0.2ｍである。

ＳＢ255（図88）

Ｅ-７区画で検出した。集落部の西端に位置し、南西5ｍにはSB254がある。方位はN9°Ｗをもつ１間×１間の掘立柱建物である。桁行2.14ｍ、梁行2.12ｍで床面積は4.54㎡である。Ｐ1～Ｐ3には径約12cmの柱根が遺存する。Ｐ1は炭化物として遺存、Ｐ2、Ｐ3の下端面は平坦に加工している。Ｐ2、Ｐ3の樹種はアワブキ属である。柱穴の平面形態は規模がそろった円形ある。柱穴の規模は最大のＰ1が0.42ｍ×0.38ｍ、最小のＰ2が0.32ｍ×0.31ｍである。柱穴の深さは約0.2ｍである。

（３）土坑

ＳＫ103（図89）

Ｂ-３区画で検出した。旧河道の北岸にあたり、北東２ｍにはSK132がある。旧河道のコモ層直下にて検出した。平面形態は不整円形で規模は長軸2.62ｍ、短軸2.14ｍ、深さ0.80ｍを測る。坑底は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がる。検出面である埋土上層は自然木が多数敷き詰められていた。幹状の材のほとんどは表面全体が炭化していた。この中から竪杵が出土した。下層からは斧柄のほか土師器壺・鉢などが出土している。このうち特筆される土器として線刻がある壺がある。これは包含層出土の破片と接合しており、明らかに土器を破砕した後、その一部を土坑内に投棄している。ミニチュアの手ずくね鉢も２点出土しており祭祀土坑と考えられる。埋土は自然堆積ではなく人為的に埋め、上層に自然木を配置したのであろう。

表25　土坑一覧表

遺構番号	平面形態	長軸（m）	短軸（m）	深さ（m）
ＳＫ103	不整円形	2.62	2.14	0.80
ＳＫ105	不整円形	1.98	1.70	0.14
ＳＫ106	?	?	?	?
ＳＫ108	円形	1.64	1.60	0.47
ＳＫ110	隅丸長方形	2.00	0.90	0.05
ＳＫ111	楕円形	2.80	2.28	1.24
ＳＫ112	不整円形	1.12	1.00	0.32
ＳＫ120	不整円形	1.70	1.70	0.22
ＳＫ127	隅丸長方形	3.50	2.50	0.60
ＳＫ128	円形	1.40	1.26	0.40
ＳＫ132	不整円形	1.94	1.68	0.44
ＳＫ133	楕円形	3.86	3.13	0.59
ＳＫ205	楕円形	2.59	1.94	0.46
ＳＫ220	隅丸長方形	2.22	1.73	0.28
ＳＫ228	円形	1.42	1.40	0.84
ＳＫ232	円形	1.71	1.68	0.79

出土遺物（図90）

直口壺（1）土師器、口縁部から胴部中位にかけて残存。口縁部長4.6cm。ＦⅡ１式。肩部外面に４つ

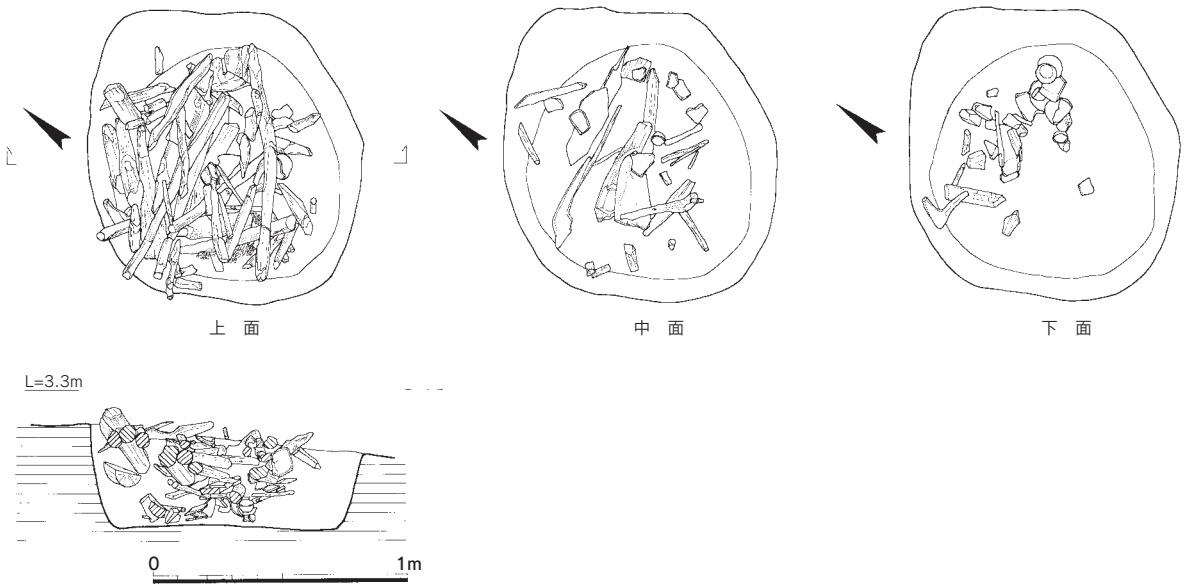


図89　SK103土坑（1/30）

の線刻がある。３つは渦巻きあるいは巴形を基調とし、さらに枝分かれした線刻を施す。１つは×の両側に縦の線刻を施す。

小型丸底壺（2）土師器、口縁部から胴部上半部残存。肩部外面は粗いヨコハケ。Ｃ２②式。

小型広口壺（3）土師器、胴部下半部残存。器壁も厚く胴径もやや大きいため小型広口壺とした。

二重口縁壺（5）土師器、口縁部破片。二次口縁は外傾気味に直立する、屈曲部はナデによりつくりだす。

鉢（4,6,7,8）土師器、４は口縁部から胴部にかけて1/5残存。Ｂ２②式。粗いタテハケでつくりは比較的丁寧である。6,7,8はＡ１②式。６がやや大形で7,8は小形である。８は底部に二条の沈線が入る。

斧柄（9）木製品、柄は折れる。台部先端は鋭角にＶ字形に尖る。台部片面には装着痕らしきくぼみがある。

杵（10,11）木製品、同一個体であろう。手持ち部分が破損している。11の手持ち部側は焼けて黒化する。

ＳＫ105（図91）

Ｃ-３区画で検出した。旧河道の南岸にあたり、南西７ｍにはSK108が、南方2ｍにはSB107がある。平面形態は不整円形で規模は長軸1.98ｍ、短軸1.70ｍ、深さ0.14ｍを測る。断面形はレンズ状をなす。坑底から浮いた状態で土製模造鏡・石錘のほか土器小破片が出土した。

出土遺物（図91）

石錘（1）石製品、中央に円孔を穿ち、先端部に溝を有する。表面は磨き、丁寧に仕上る。

模造鏡（2）土製品、紐の部分は貼り付けた後、片側から穿孔する。

ＳＫ106（図92）

Ｄ-４区画で検出した。東方約３ｍにはSK108が、西方約５ｍにはSK111が南方約４ｍにはSH104がある。重機で表土を掘削後、包含層を人力で掘削中、上層にて須恵器破片を多数検出した。破片は平面約３ｍ×1.7ｍ、深さ0.3ｍの範囲に広がる。接合の結果、須恵器甕１個体になった。出土状況から破砕して廃棄されたと思われる。須恵器に混じって土師器破片も出土した。

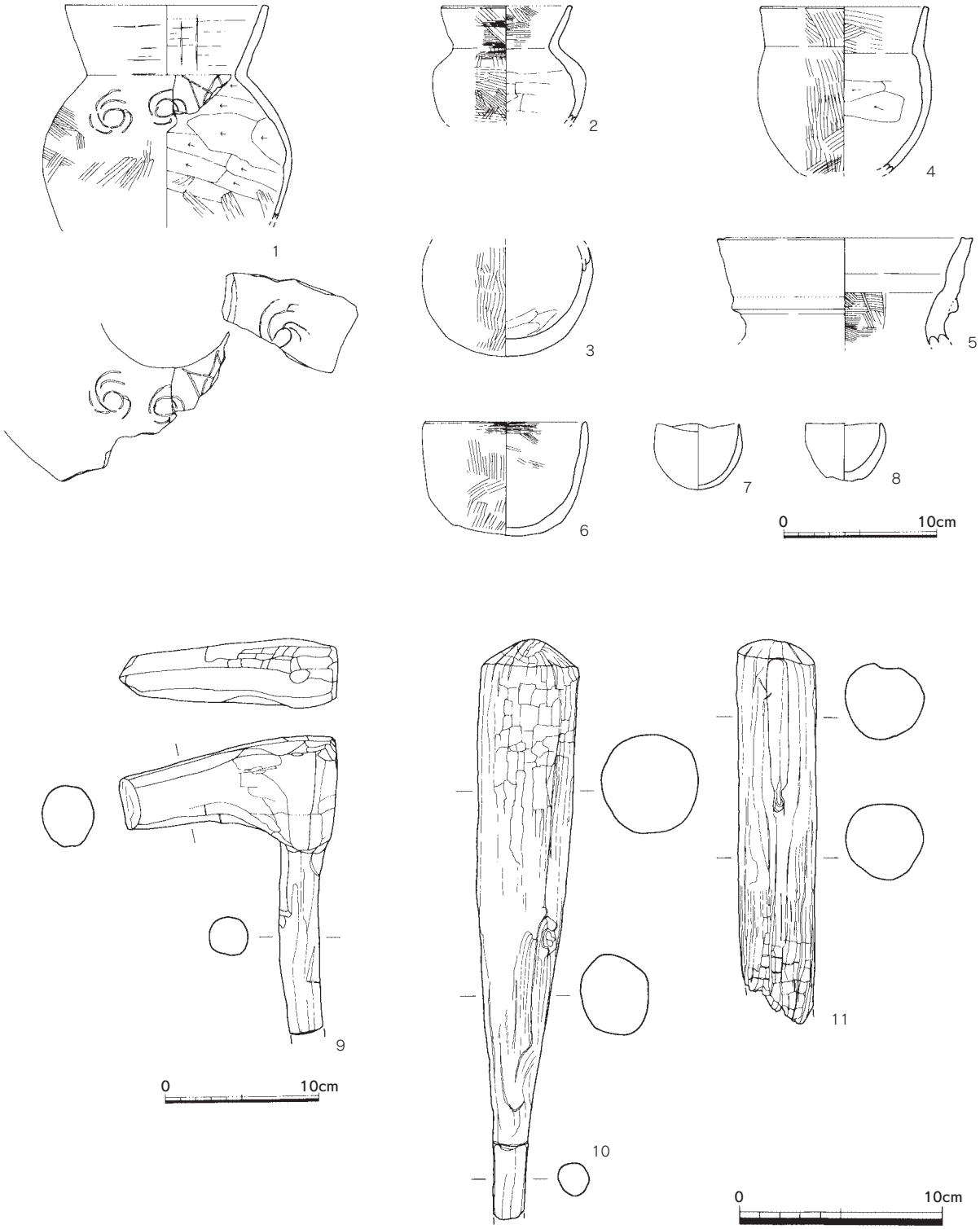


図90　SK103出土土器（1/4）・木器（1/4・1/6）

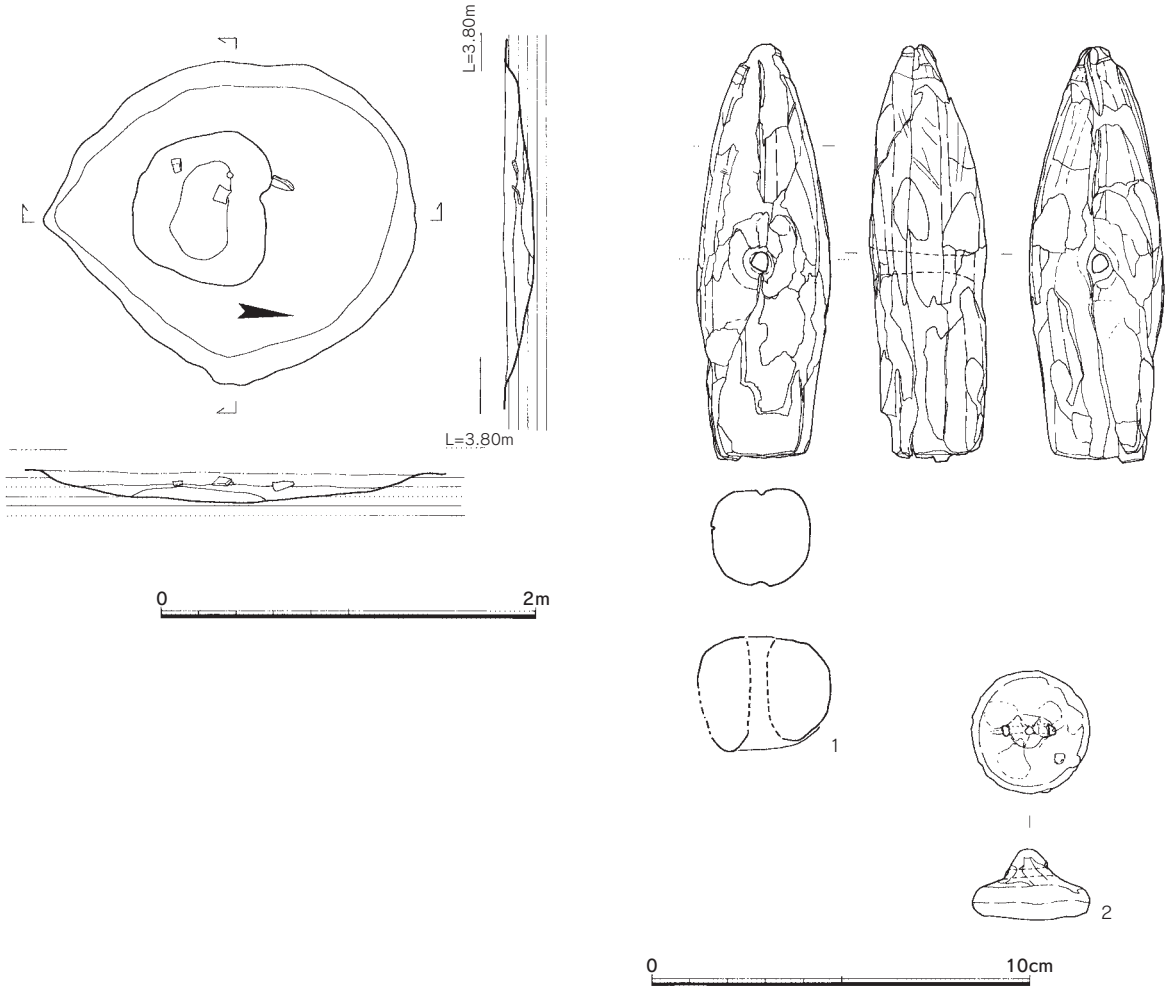


図91　SK105土坑（1/40）・出土石器、土製品（1/2）

土坑としての平面プランは確認できなかったが、遺物の出土状況から土坑として報告する。

出土遺物（図92）

甕（1,2）１は須恵器、胴部欠損。口縁端部は上方につまみあげ口縁部直下に断面三角形の突帯をつける。底部はゆがみ、須恵器破片が釉着する。体部外面平行タタキのち部分的にカキ目を入れる。内面タタキをほぼ完全にナデ消す。２は土師器、口縁部破片。端部は面とりされ外側に肥厚する。口縁部形態は２ａ式。

高杯（3）土師器、脚部。Ｂ式で杯部接合技法はＡ式。

ＳＫ108（図93）

Ｄ-４区画で検出した。西方約３ｍにはSK106が、東方約４ｍにはSB107がある。平面形態は円形で規模は長軸1.64ｍ、短軸1.60ｍ、深さ0.47ｍを測る。断面形は逆台形で坑底は平坦、壁は緩やかに立ち上がる。坑底から約40cm浮いた状態で甕が出土した。埋土は黒褐色土である。

出土遺物（図93）

甕（1）土師器、口縁部から肩部にかけて一部欠損。器壁はやや厚めで、内面のヘラケズリも雑である。胴部外面のハケ目は細かい。ＡＩ１②ｂ式。

小型広口壺（2）土師器、口縁部から胴部にかけて1/6残存。口縁部は内湾気味。器壁が薄く、肩部内面の稜は明瞭につく。Ｄ２①式。

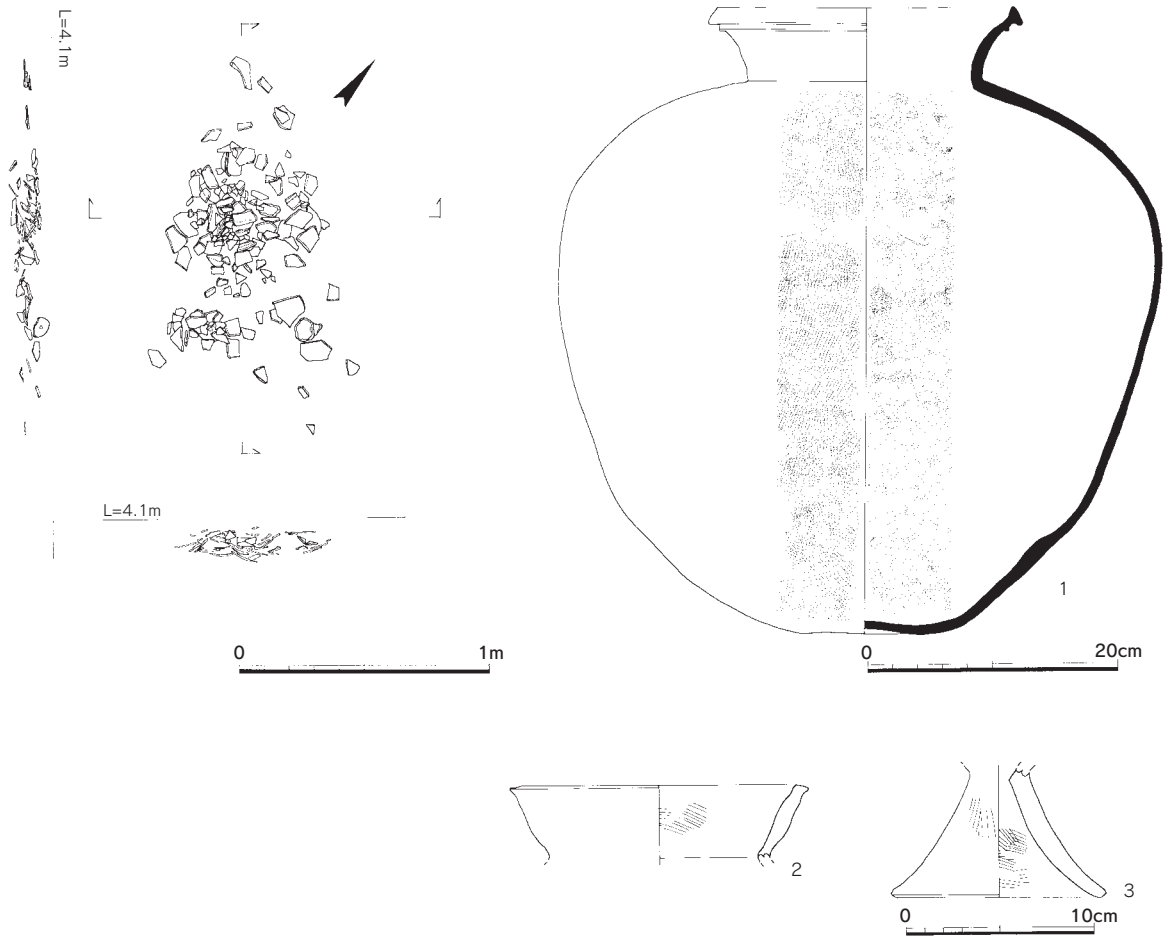


図92　SK106土坑（1/30）・出土土器（1/6・1/4）

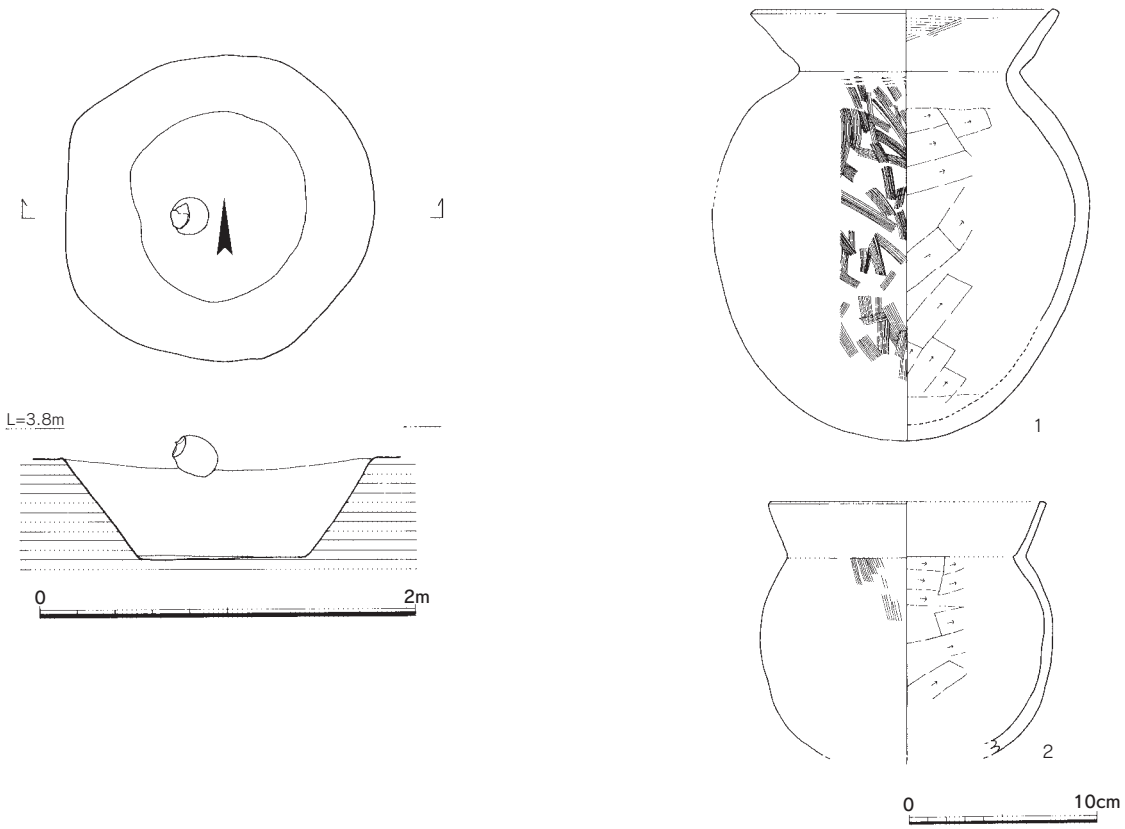


図93　SK108土坑（1/40）・出土土器（1/4）

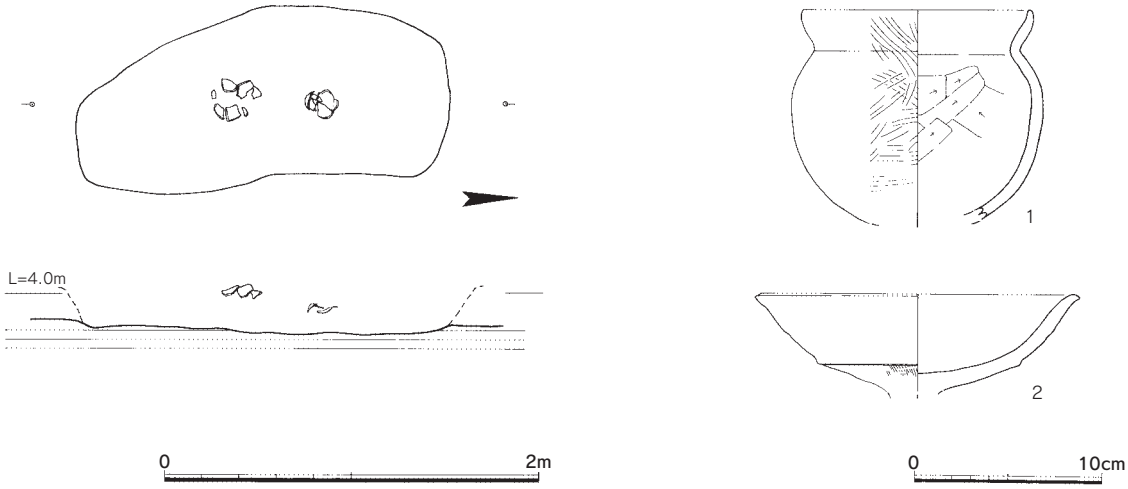


図94　SK110土坑（1/40）・出土土器（1/4）

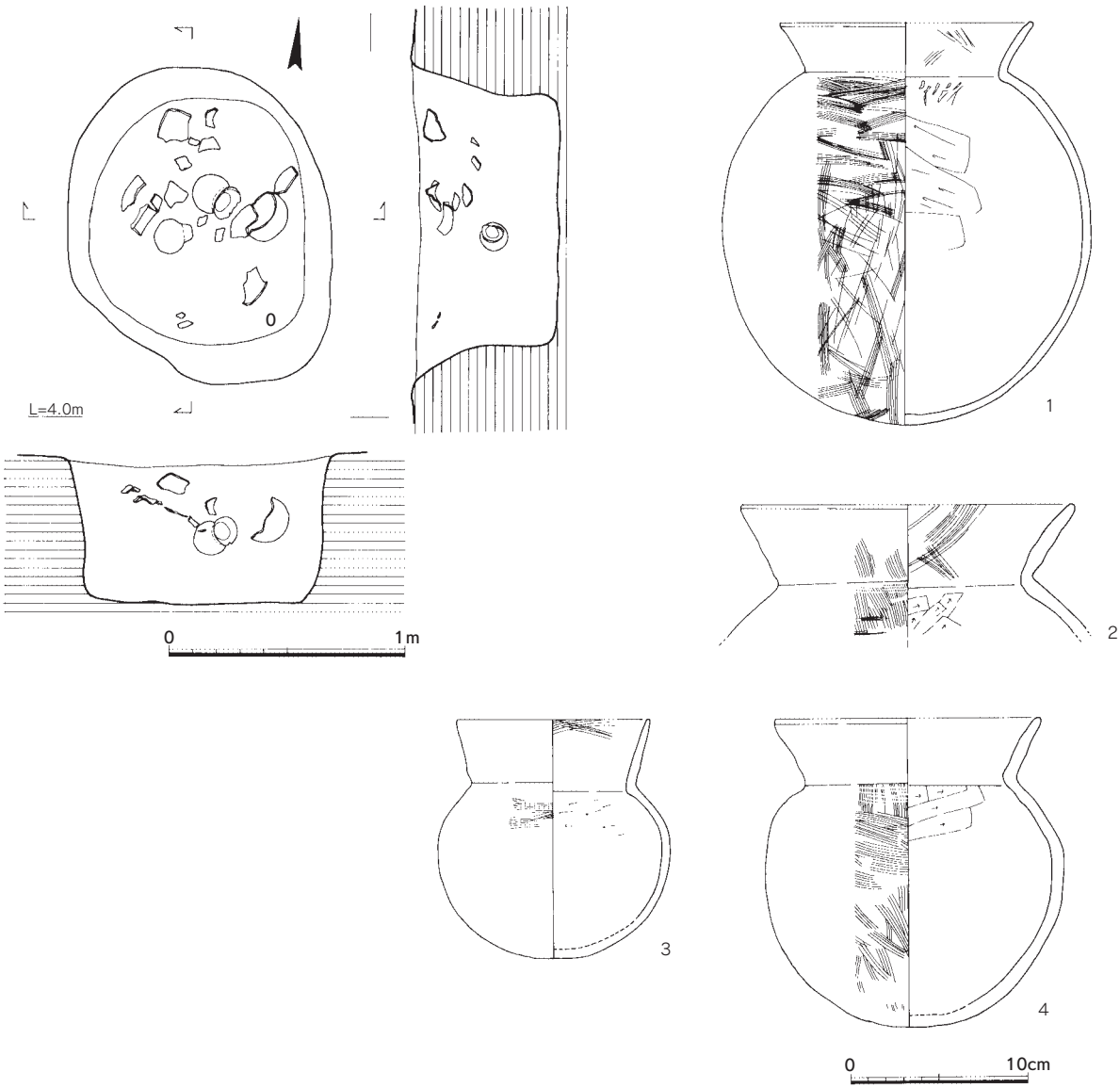


図95　SK111土坑（1/30）・出土土器（1/4）

ＳＫ110（図94）

Ｄ-５区画で検出した。西方約0.5ｍにはSK111がある。平面形態は隅丸長方形で規模は長軸2.0ｍ、短軸0.90ｍ、深さ0.05ｍを測る。遺構の平面検出が困難であり、結果的に遺存状態が極めて悪くなった。遺物が坑底から10cm～20cm浮いた状態で出土している。

出土遺物（図94）

小型広口壺（1）土師器、口縁部から胴部にかけて1/2残存。体部外面不定方向の粗いハケ。内面の稜は弱いが口縁部はやや内湾するなど古式の要素をもつ。Ｄ１式。

高杯（2）土師器、杯部。杯部の深さ4.5cm。ＡＩ④式。

ＳＫ111（図95）

Ｄ-５区画で検出した。東方約0.5ｍにはSK110がある。平面形態は楕円形で規模は長軸2.80ｍ、短軸2.28ｍ、深さ1.24ｍを測る。断面形は長方形で坑底は平坦、壁の下半部は垂直で、上半部はやや緩やかに立ち上がる。遺物は坑底から浮いた状態で甕、壺が出土している。出土状況から土坑が埋没する過程でこれらの土器を投棄したと思われる。

出土遺物（図95）

体部内面ヘラケズリのちナデ消しが1,3,4に見られ土器群として古式の要素をもつ。

甕（1）土師器、口縁部から肩部にかけて一部欠損。器壁は薄く、つくりはシャープ。体部内面ヘラケズリのちナデ消し。ＡＩ１②ａ式。

広口壺（2）土師器、口縁部2/3残存。口縁部長4.7cm。Ａ２ｂ式。

直口壺（3）土師器、口縁部一部欠損、ほぼ完形。口縁部長3.7cm。体部内面ヘラケズリのちナデ消す。ＦⅡ１式。

小型広口壺（4）土師器、完形。体部内面ヘラケズリのちナデ消すが底部では指頭圧痕が残る。Ｄ２①式。

ＳＫ112（図96）

Ｆ-４区画で検出した。北方約２ｍにはSH125が、南方約３ｍにはSB148がある。土坑の南側を小穴と切り合う。平面形態は不整円形で規模は長軸1.12ｍ、短軸1.00ｍ、深さ0.32ｍを測る。断面形は逆台形で坑底は平坦、壁はやや緩やかに立ち上がる。

出土遺物（図96）

高杯（1）土師器、杯部。杯部の稜はナデ調整を施す。杯部復元深さ3.5cm。ＡＩ③ａ式。

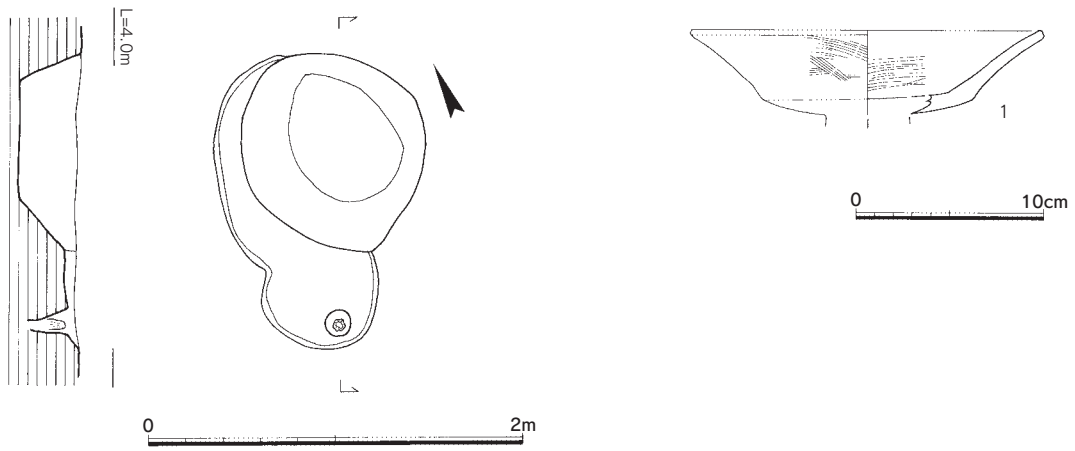


図96　SK112土坑（1/40）・出土土器（1/4）

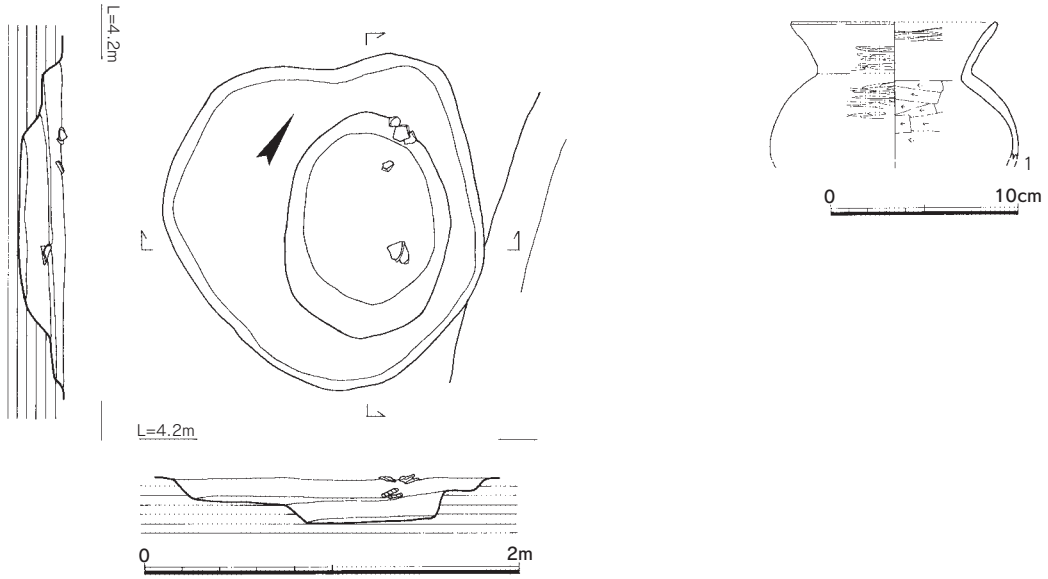


図97　SK120土坑（1/40）・出土土器（1/4）

ＳＫ120（図97）

Ｆ-５区画で検出した。SH122と切り合い、SH121と隣接する。南方約４ｍにはSH118が、北方約３ｍにはSB141がある。平面形態は不整円形で規模は長軸、短軸ともに1.70ｍ、深さ0.22ｍである。断面形は二段掘りになる。坑底は平坦で、遺物は浮いた状態で出土している。

出土遺物（図97）

直口壺（1）土師器、口縁部から肩部にかけて1/2残存。口縁端部は丸味をもつ。体部内面ヘラケズリのちナデ。ＦⅡ２式。

ＳＫ127（図98）

Ｅ-３、４区画で検出した。北方約0.5mにはSK133が、西方約１ｍにはSH104が、東方約３ｍにはSD115がある。平面形態は隅丸長方形で規模は長軸3.5ｍ、短軸2.5ｍ、深さ0.60ｍである。断面形はスリ鉢状で壁は緩やかに立ち上がる。坑底ちかくから長さ約１ｍの自然木が出土した。また、桃の種子が10個以上出土している。埋土は３層からなり、中層である２層は褐色粗砂で地山状の黄褐色粗砂をブロック状に混入しており、堆積状況は自然堆積ではなく人為的に一度に埋め戻したかのような状況である。遺物はこの２層上から主に土師器破片が出土している。貯蔵穴の可能性がある。

出土遺物（図98）

甕（1）土師器、口縁部破片。肩部内面のケズリは雑。口縁部形態は②式。

高杯（2～5）土師器。２，３は高杯杯部。２は杯底面の脚部接合面にヘラによる放射状の刻みあり。ＡⅠ①ｂ式。３は杯部外面の稜にナデを施す。ＡⅠ③ａ式。４，５は脚部。４はＢ式。５はＡ２式かＡ３式か迷う。

小型丸底壺（6）土師器、完形。口縁部中位が屈曲する。外面ナデで比較的丁寧なつくりである。Ｃ２③ａ式。

ＳＫ128（図99）

Ｃ-５区画で検出した。旧河道中央にあたり周辺には遺構はない。最も近い遺構であるSK111でも南方に約９ｍ離れる。旧河道の埋土であるコモ層を重機で掘削後、人力掘削していたところ完形の甕が出土

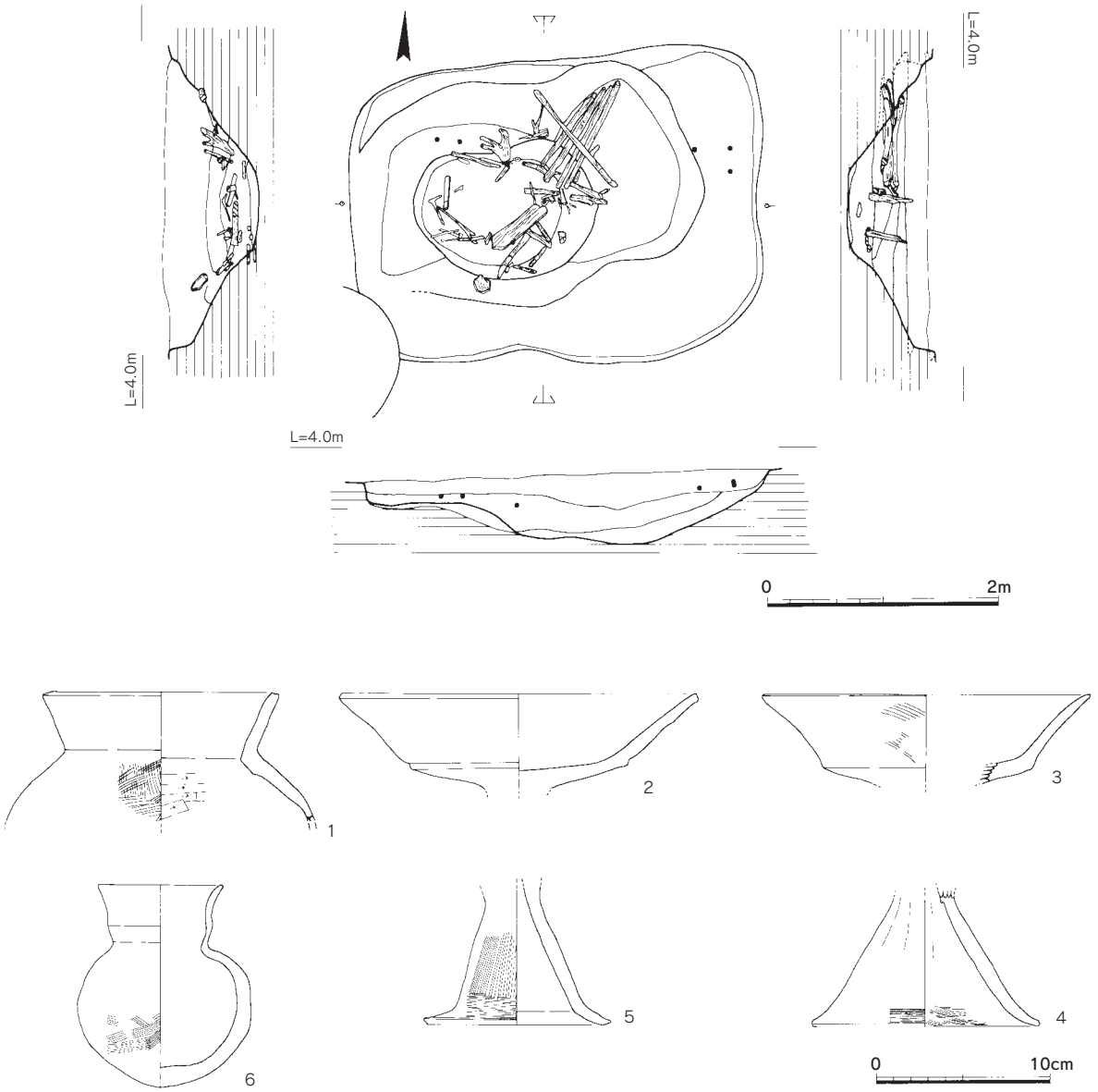


図98　SK127土坑（1/60）・出土土器（1/4）

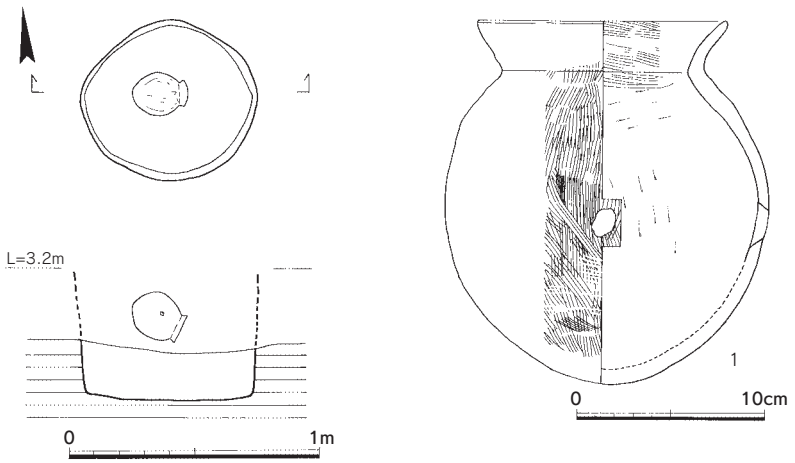


図99　SK128土坑（1/30）・出土土器（1/4）

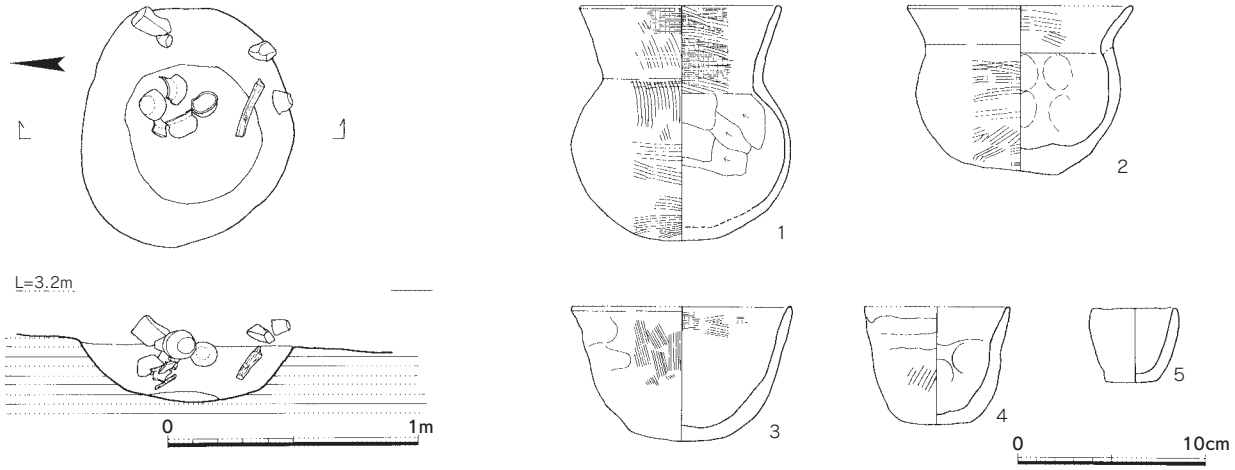


図100　SK132土坑（1/30）・出土土器（1/4）

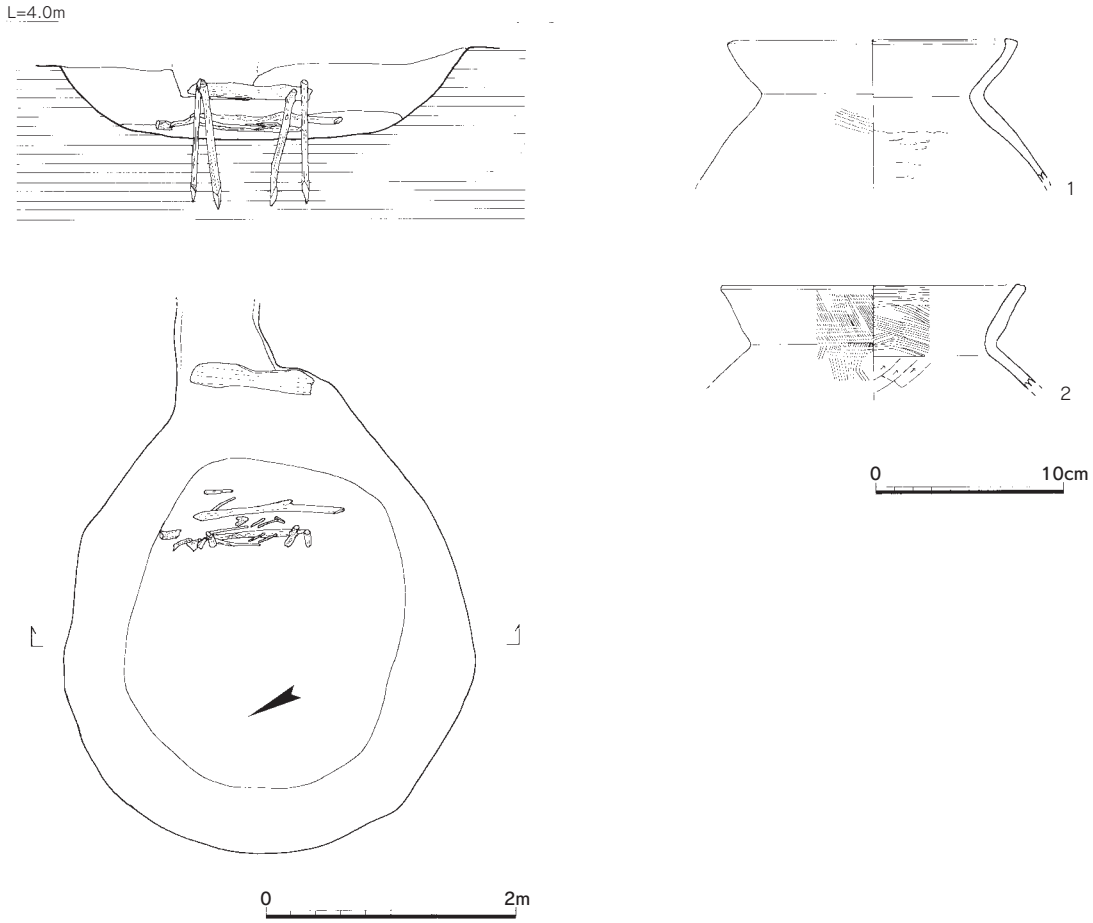


図101　SK133土坑（1/60）・出土土器（1/4）

し、遺構であることが判った。従って遺構の上部は削平したことになる。平面形態は円形で規模は長軸1.40m、短軸1.26m、深さ0.40mで、推定の深さは約0.7mである。坑底は平坦で壁は垂直に立ち上がる。埋土は黒褐色粗砂である。井戸の可能性がある。

出土遺物（図99）

甕（1）土師器、完形。口径13.3cm、器高19.4cmと小型である。口縁端部は丸味をもち、肩部内面の稜は比較的鋭い。体部内面ヘラケズリのちナデ。B①a式。

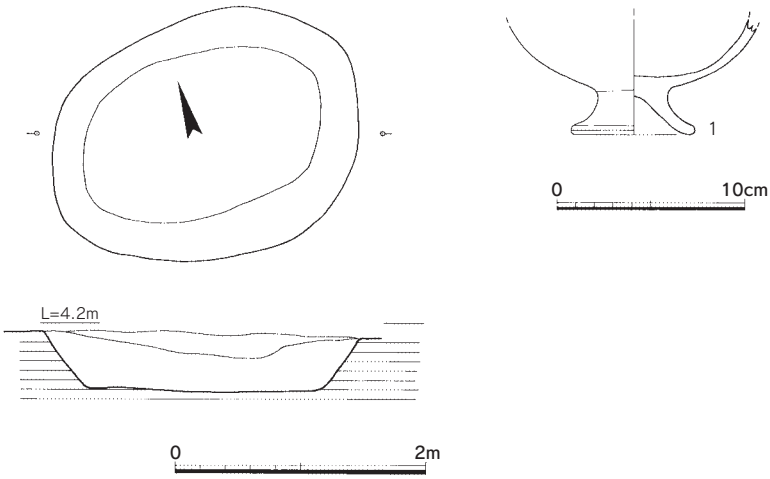


図102　SK205土坑（1/60）・出土土器（1/4）

ＳＫ132（図100）

Ｂ-３区画で検出した。旧河道の北岸にあたり南方約２ｍにはSK103がある。平面形態は不整円形で規模は長軸1.94ｍ、短軸1.68ｍ、深さ0.44ｍである。坑底は平坦で壁は緩やかに立ち上がる。坑底からやや浮いた状態で完形の小型広口壺、鉢が出土した。

出土遺物（図100）

直口壺（1）土師器、ほぼ完形。内外面黒色で口縁部外面は光沢をもつ。つくりが丁寧。口縁部長４cm。ＦⅡ１式。

鉢（2～5）土師器。すべて平底あるいは平底気味。２は完形、屈曲外反口縁のＢ１①式。3,4,5は素口縁で指頭圧痕が残りつくりは比較的雑である。３はＡ１①ｂ式。４はＡ２①ｂ式。５はＡ２②ｂ式。

ＳＫ133（図101）

Ｄ、Ｅ-３、４区画で検出した。SD138と連結し、それはさらにSD115とつながる。南方約0.5mにはSK127が、西方約１ｍにはSH104がある。平面形態は楕円形で長軸3.86ｍ、短軸3.13m、深さ0.59mである。坑底は平坦で周壁は緩やかに立ち上がる。SD138との連結部に溝を塞ぐかのように板材を斜めにたてる。坑底には四本の杭を立てさらに材を横たえる。埋土は３層からなるが１、２層の層界はやや不明瞭である。SD138から流れ込むように砂層が堆積しており、SK133は水溜場と考えられる。遺物は小破片が出土した。

出土遺物（図101）

甕（1,2）土師器、口縁部破片。１はＡⅠ①ａ式。2は口縁端部は面取りし肩部はタテハケ、ＡⅠ②式。

ＳＫ205（図102）

Ｂ-10区画で検出した。周辺には小穴はあるものの大きな遺構は少なく東方約9.5ｍにSK220があるのみである。平面形態は楕円形で長軸2.59ｍ、短軸1.94ｍ、深さ0.46ｍである。坑底は平坦で周壁は緩やかに立ち上がる。埋土は黒色砂質土と黒褐色砂質土の２層からなる。

出土遺物（図102）

台付鉢（1）土師器、台部から鉢底部にかけて残存。台部外面ヨコナデ、鉢部外面タテナデ。

ＳＫ220（図103）

Ｃ、Ｂ-９区画で検出した。西方約9.5ｍにSK205が南東約8.5ｍにSK251があるが、周辺の遺構密度は希

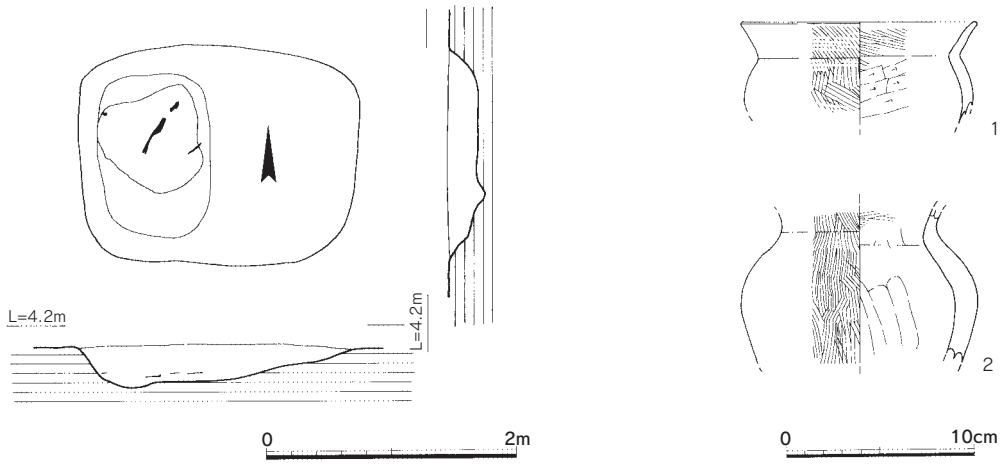


図103　SK220土坑（1/60）・出土土器（1/4）

薄である。平面形態は隅丸長方形で長軸2.59m、短軸1.94m、深さ0.46mである。坑底は平坦で東～南壁は緩やかに北～西壁は垂直気味に立ち上がる。埋土は黒色砂土１層である。坑底に焼土、やや浮いた状態で炭化物が出土した。

出土遺物（図103）

小型広口壺（1,2）土師器、破片。１は器壁は薄く外面ハケ、Ｄ１①式。２は器壁厚く、粗製。Ｄ２式か。

ＳＫ228（図104）

Ｅ-10区画で検出した。旧河道の中央部近くにあたり西方約２ｍにはSK232がある。平面形態は円形で長軸1.42ｍ、短軸1.40ｍ、深さ0.84ｍである。坑底は平坦で周壁は垂直気味に立ち上がる。坑底から約30cmほど浮いた状態で完形の小型広口壺や割れた状態の甕が出土した。この土器に混じって植物繊維で編んだ籠も出土した。さらに上層から横槌も出土した。埋土は２層からなり上層はコモ層で、下層は黒褐色砂で下層が堆積した後に小型広口壺や籠などが廃棄されたようである。立地および土坑形態から井戸の可能性がある。

出土遺物（図104）

甕（1～3）土師器。１は全体の2/3残存。器壁は薄く、口縁部は内湾気味。２，３にくらべ精製である。肩部斜めハケ。体部内面ケズリのちナデ。外面煤、内面炭化物付着。ＡⅡ２①ａ式。２は全体の1/2残存。体部は球胴化している。外面煤付着。ＡⅡ２②式。３は口縁部のみ残存。ＡⅡ②式。

小型広口壺（4）土師器、完形。肩部内面の稜は鋭い、器壁は薄くつくりはシャープ。古式である。Ｄ①式。

槌の子（5）木製品、自然木の両端を切り、中央に溝状に削る。

籠（6）草本類を袋状に編む。現物は取り上げたものの乾燥したため処分した。出土状態を図化した。

ＳＫ232（図105）

Ｅ-10区画で検出した。旧河道の中央部近くにあたり東方約２ｍにはSK228がある。平面形態は円形で長軸1.71ｍ、短軸1.68ｍ、深さ0.79ｍである。坑底は平坦で周壁は垂直気味に立ち上がる。坑底から約50cmほど浮いた状態で小口面を加工した板材が出土した。土坑形態や規模、旧河道内という立地などSK228と類似し井戸の可能性がある。

出土遺物（図105）

甕（1）土師器、口縁部から肩部にかけて残存。ＡⅡ②式。

不明木製品（2,3,4,5）板状に表面を加工する。５は周縁部を面取り加工する。

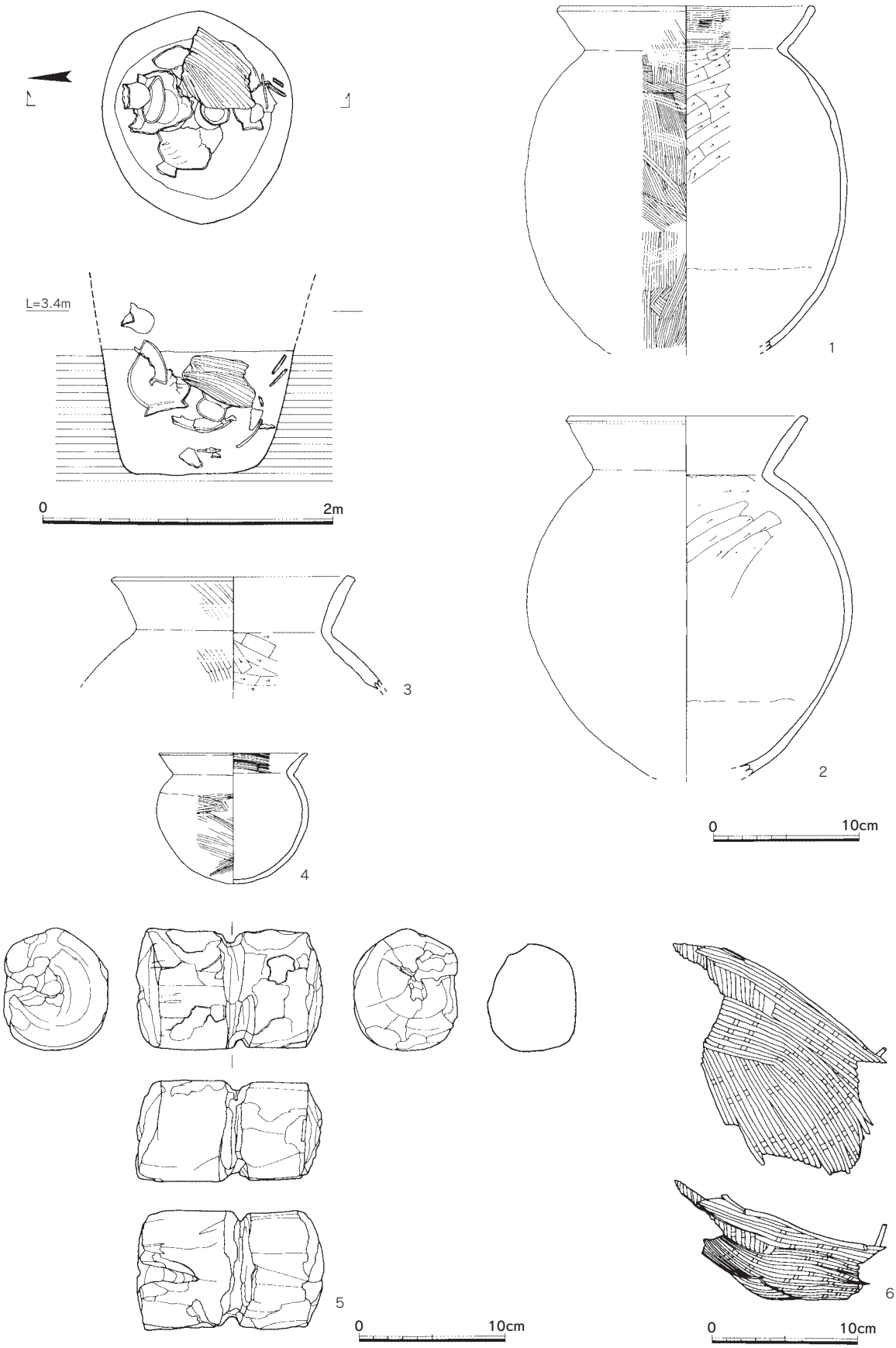


図104　SK228土坑（1/40）・出土土器、木器（1/4）

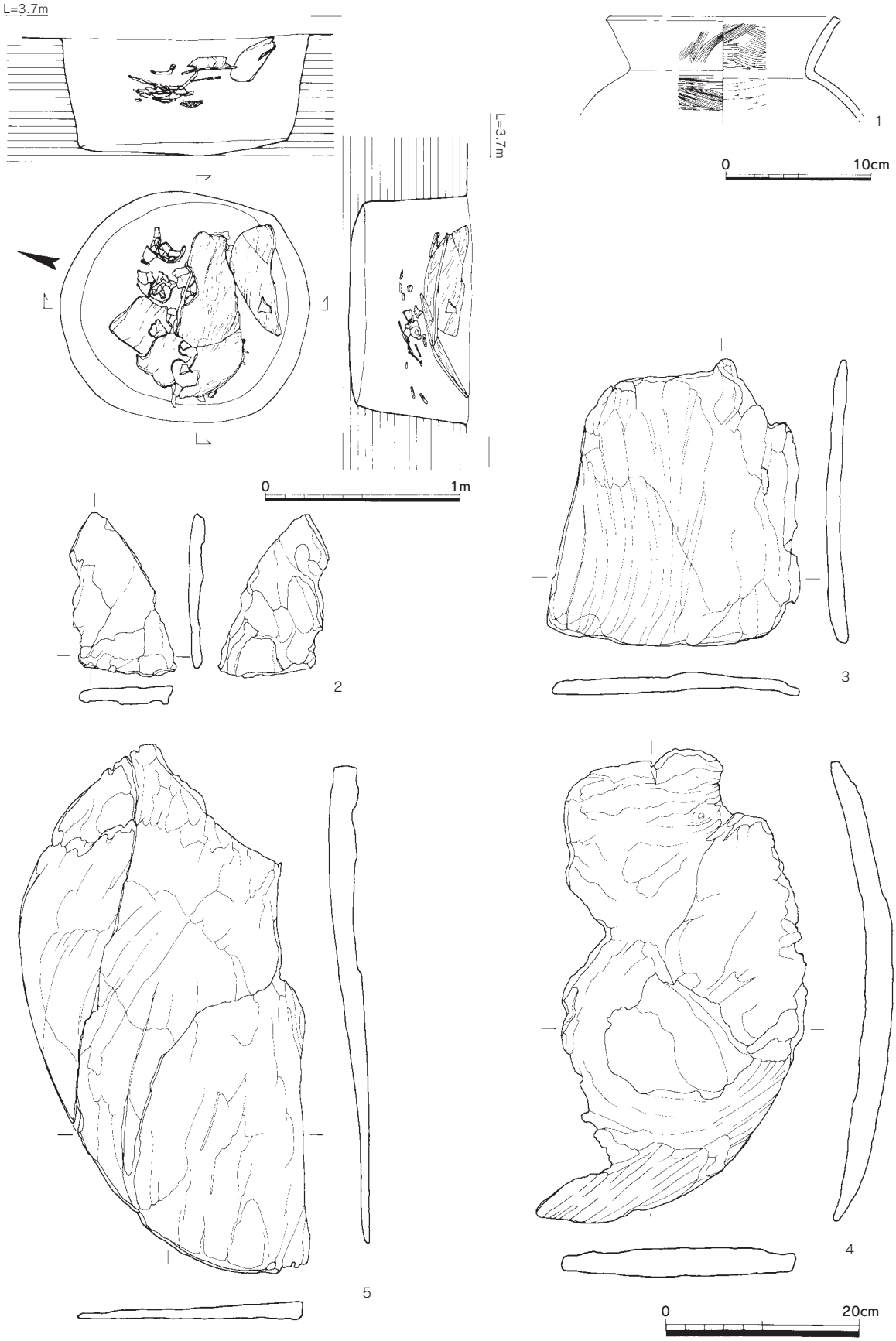


図105　SK232土坑（1/30）・出土土器（1/4）・木器（1/6）

（4）井戸跡

ＳＥ251（図106）

Ｃ-８区画で検出した。西方約8.5ｍにはSK220が、東方約７ｍにはSH222がある。

古墳時代の遺構は希薄な一帯である。井戸の掘り方の平面形態は不整円形で規模は長軸1.67ｍ、短軸1.45ｍ、計測できた深さは0.74ｍである。掘り方の西側壁面は直線的で勾配もきついが東側壁面はやや緩

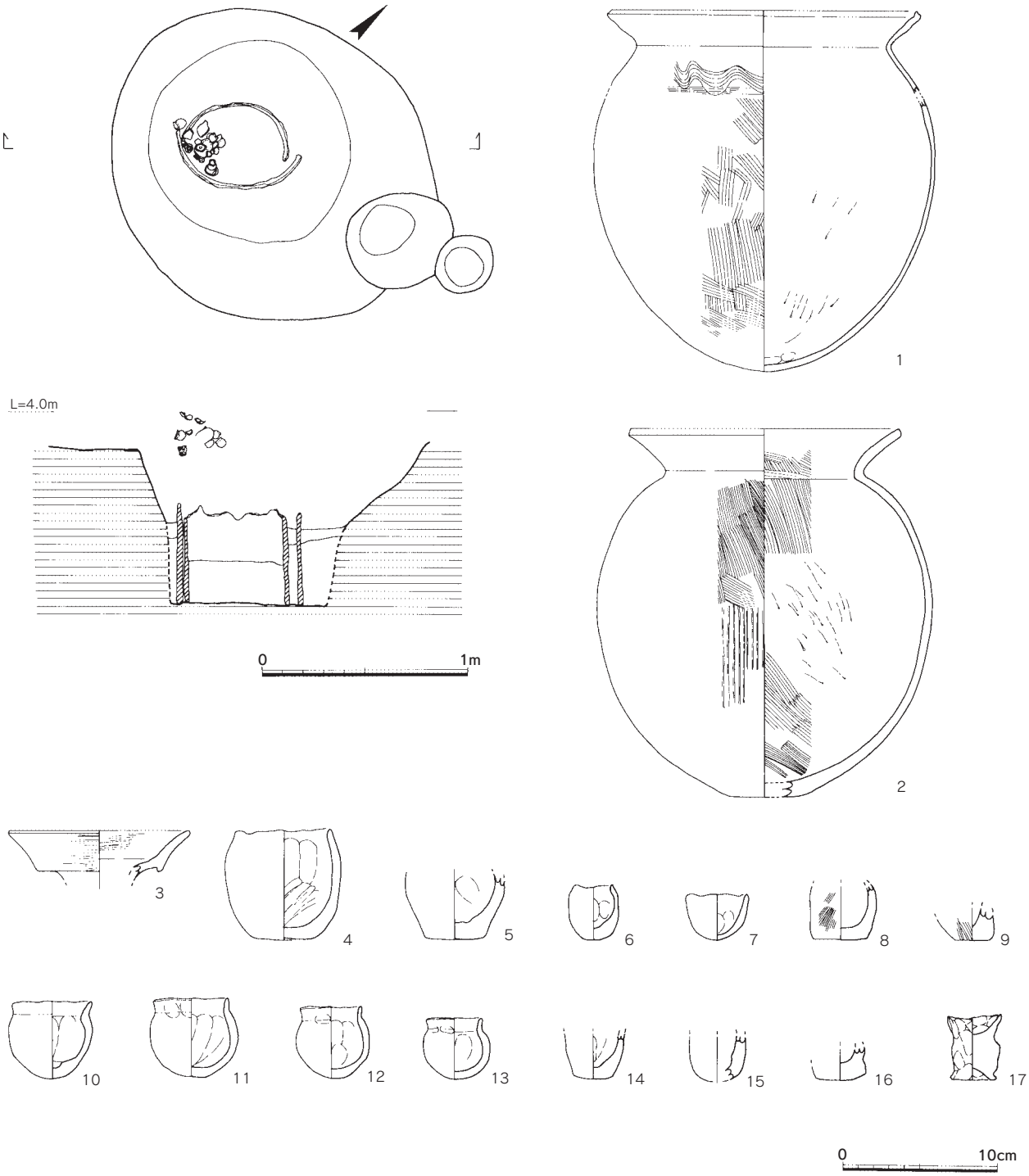


図106　SE251井戸（1/30）・出土土器（1/4）

やかである。

井戸枠は丸太を２分割したもので規模は内径長軸50cm、短軸40cmである。この井戸枠は遺構検出面下35cmから出土した。

井戸枠内から土器が出土した。土器出土地点は上、中、下の３群にわかれる。上層の手ずくね鉢、小型器台（4～17）は遺構検出面から出土した。中層下部からは甕、二重口縁壺（2，3）が出土した。甕の遺存率は約1/2である。下層からは甕（1）が出土した。これは梅白遺跡出土古墳時代土師器の中では最も古式である。

遺構埋土は１層がオリーブ褐色砂、２層が黒褐色粘質土、３層はオリーブ灰砂である。

出土遺物（図106）

甕、二重口縁壺と土器群の中では最も古段階に属する。

甕（1,2）土師器、１は口縁部および底部、約1/3残存。色調が他の土器と異なり明橙色で器壁も薄い。体部内面ハケのちナデ。口縁端部は内側上方に肥厚し、肩部外面波状文。ＡⅠ１①ａ式。２は1/2残存。体部内面ケズリのち肩部内面、底部内面はハケ。器壁は比較的薄く、つくりはシャープ。ＡⅡ２③式になるが同分類の他の甕とは異なる。

二重口縁壺（3）土師器、口縁部破片。二次口縁下端部が下方に突出する。

鉢（4～16）土師器、5,9,14,15,16は底部のみ残存。５～16はミニチュア土器。いずれも指頭圧痕が残る。３つに分類できる。素口縁、深鉢のＡ２②式（4,5,8,9,14,15,16）。屈曲口縁、深鉢のＢ２②式（10,11,12,13）。丸底、素口縁で色調が前二者と異なるもの（6,7）である。６，７は形態的にはＡ式に分類できるが色調やつくりから分類できる。

器台（17）土師器、完形。ミニチュアの器台である。色調、胎土は６，７と類似する。

（５）溝跡

ＳＤ115（図107）

Ｃ-２区画からＧ-４区画にかけて検出した。集落の東端にあたり、水田部に移行する落ち込みの肩部に沿って流れる。SD138と垂直に連結しさらにはSK133と繋がる。またSB145、SB148、SB123掘立柱建物跡と切り合う。溝跡は幅約１ｍ～2.7ｍで深さ約0.8ｍである。調査の当初、土器が列をなして出土したが溝であるとは判らなかった。調査が進む過程で溝であることが判った。

溝断面形はレンズ状である。埋土は２層からなり１層、２層は黒褐色中砂で２層は１層よりやや色調が暗く、２層の最下層に黄褐色粗砂粒子がブロック状に薄く堆積する。水流が想定できる。また、溝埋土を覆うようにコモ層が堆積する。

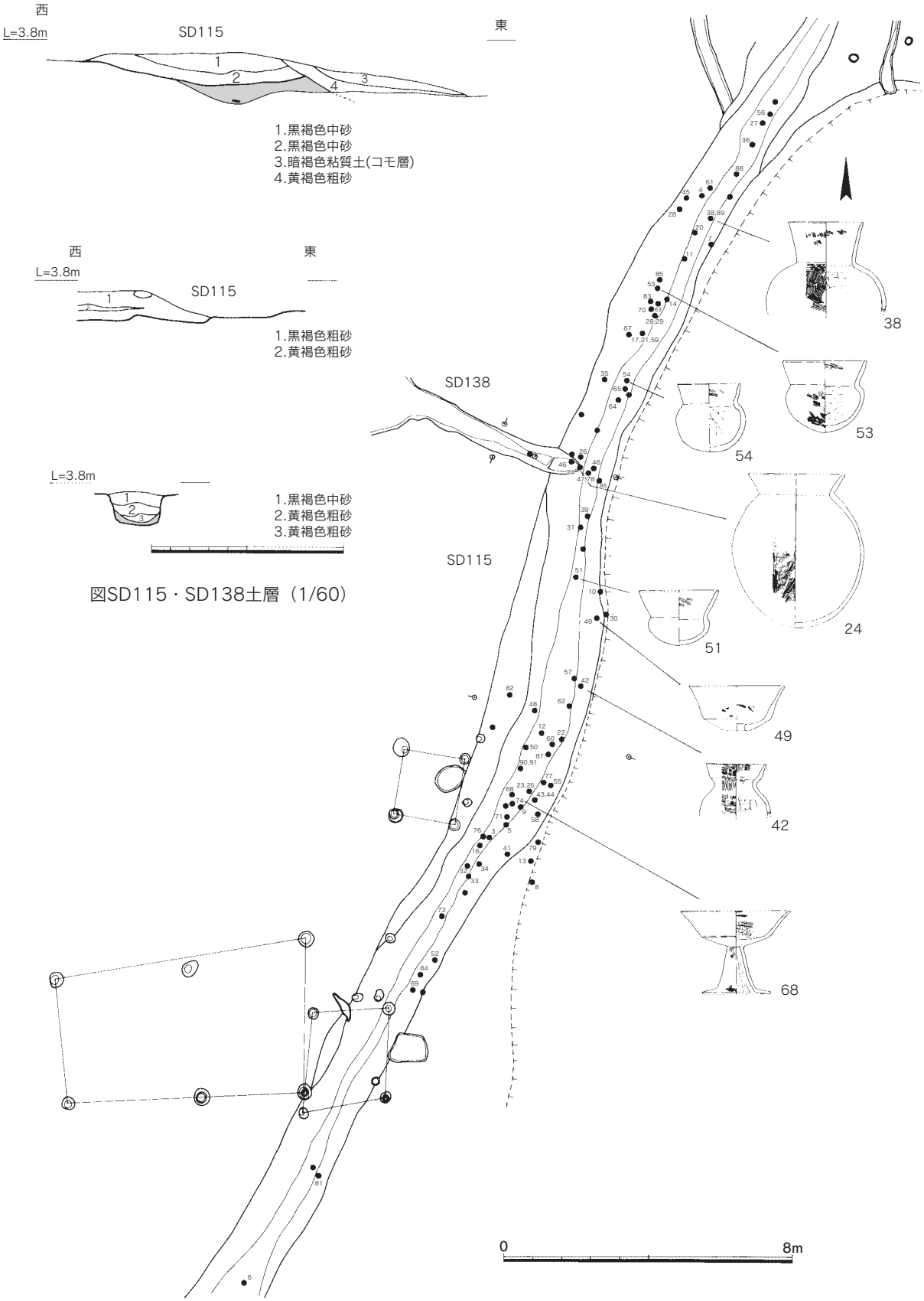
遺物は１層中から面をなして多量に出土した。土器が集中して分布する範囲があり、土器の遺存率も高く、なかには完形の土器もみられた。これらのことから溝に土器を投棄したことが想定できる。

出土遺物（図108～114）

集落跡のなかでは最も多くの土器が出土した。

甕（1～32）土師器、10,11,12,20,24が完形で他は口縁部から肩部にかけて残存する。Ａ式が圧倒的に多く小型甕であるＢ式は10のみ１点である。

表90に体部形式分類表と口縁部・体部調整分類表を示す。口縁部破片が多く復元口径であり、口縁部から肩部までの残存状態であることから法量差や体部の形態も確実にはわからない。法量はやや小形のⅠ式は７点で大形のⅡ式が18点と多い。体部形態は砲弾形の１式は18点で球胴の２式は７点である。口縁部形態は①式から④式すべてがあり直線口縁である②式が18点と多い。細部調整ではａ式が７点、ｂ式



図SD115・SD138土層（1/60）

図107　SD115溝遺物出土状況（1/160）

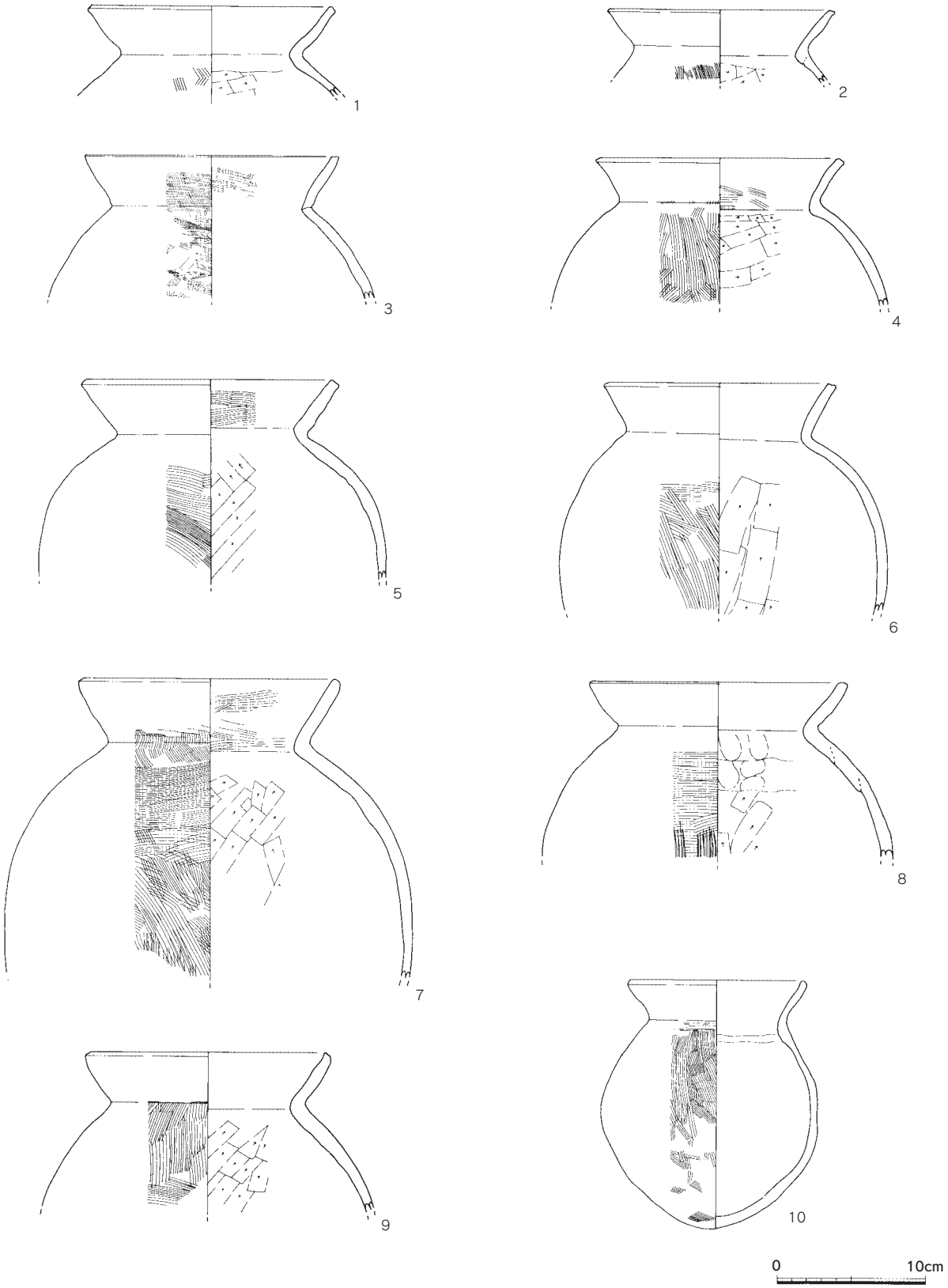


図108　SD115出土土器１（1/4）

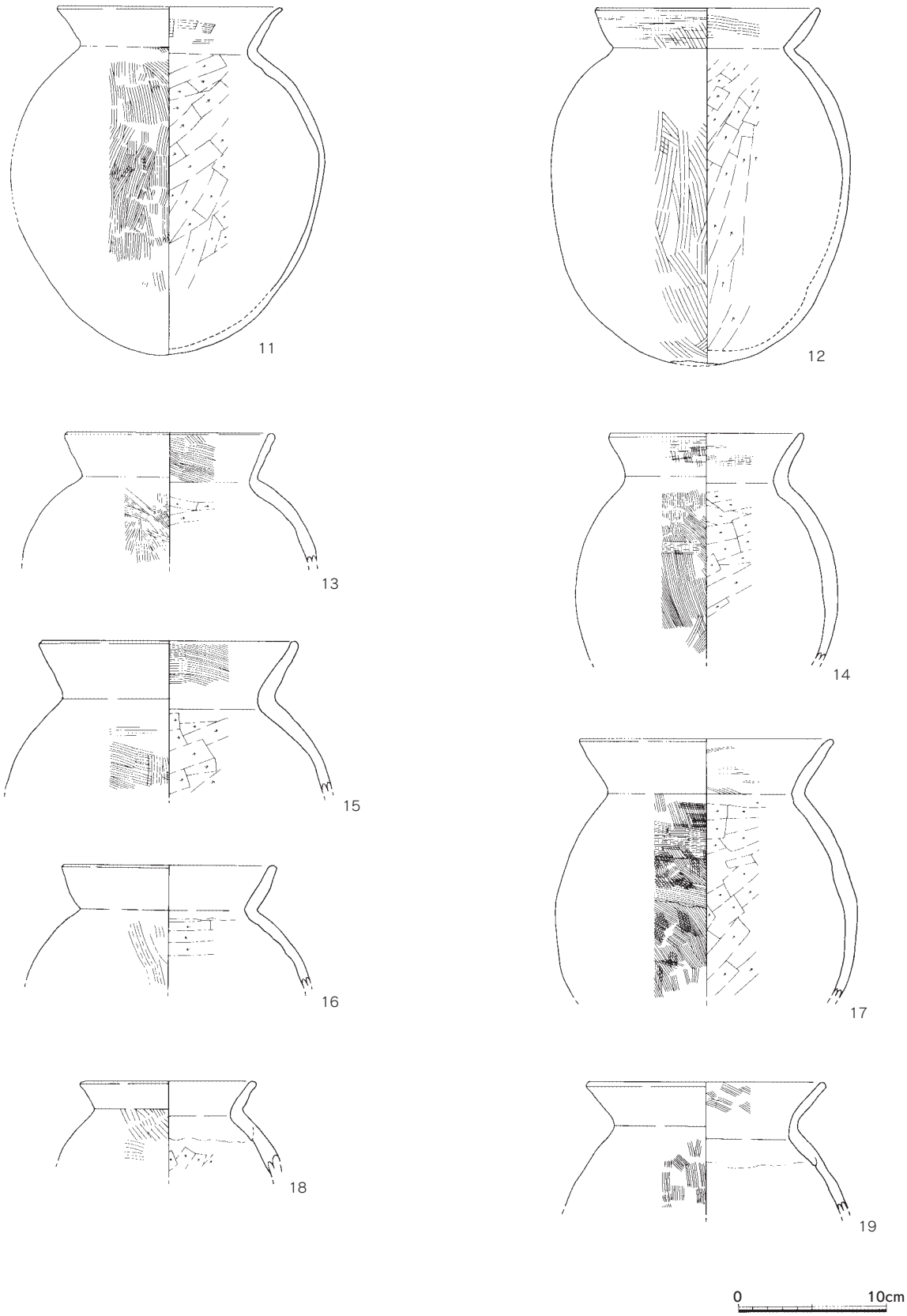


図109　SD115出土土器２（1/4）

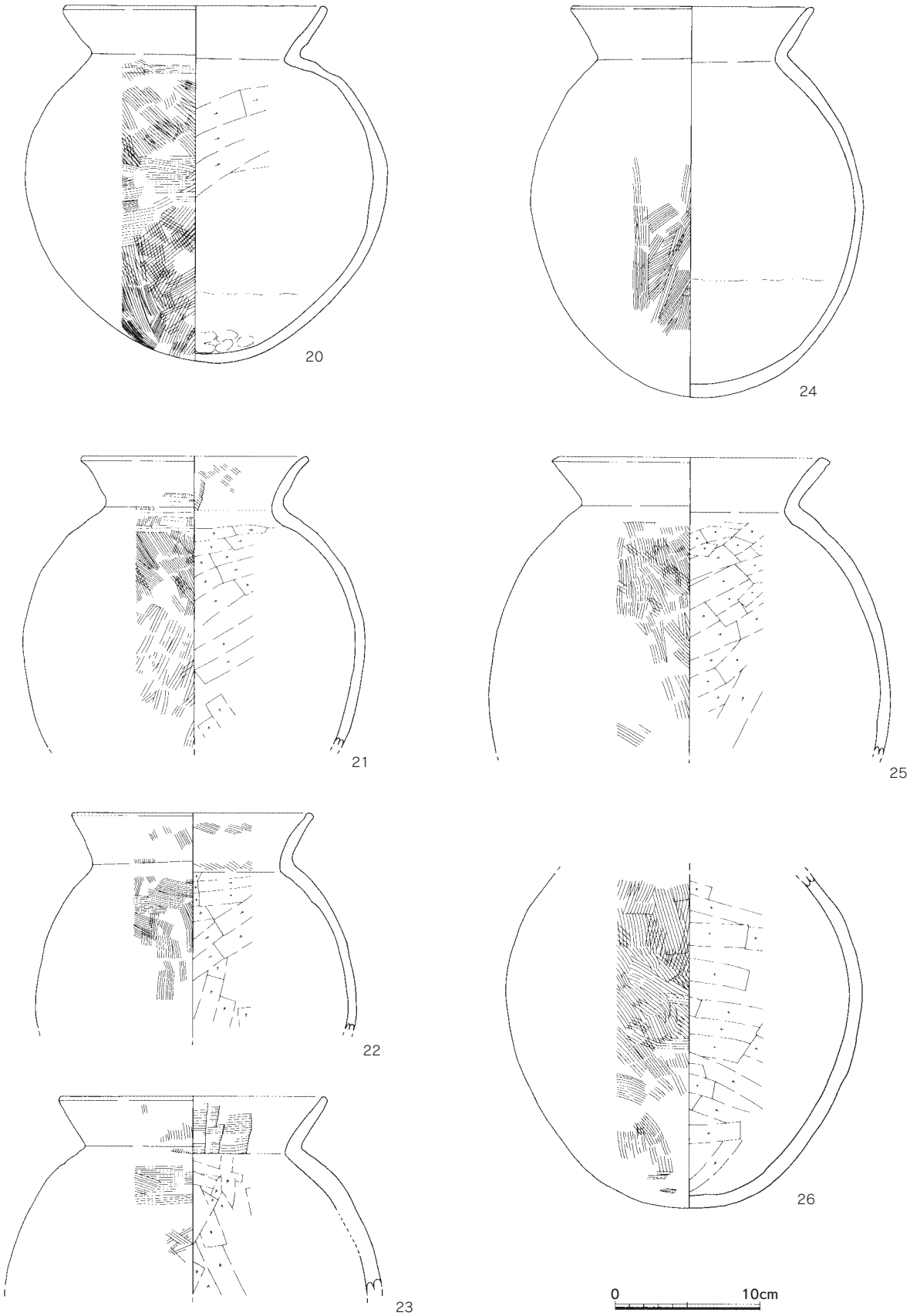


図110　SD115出土土器３（1/4）

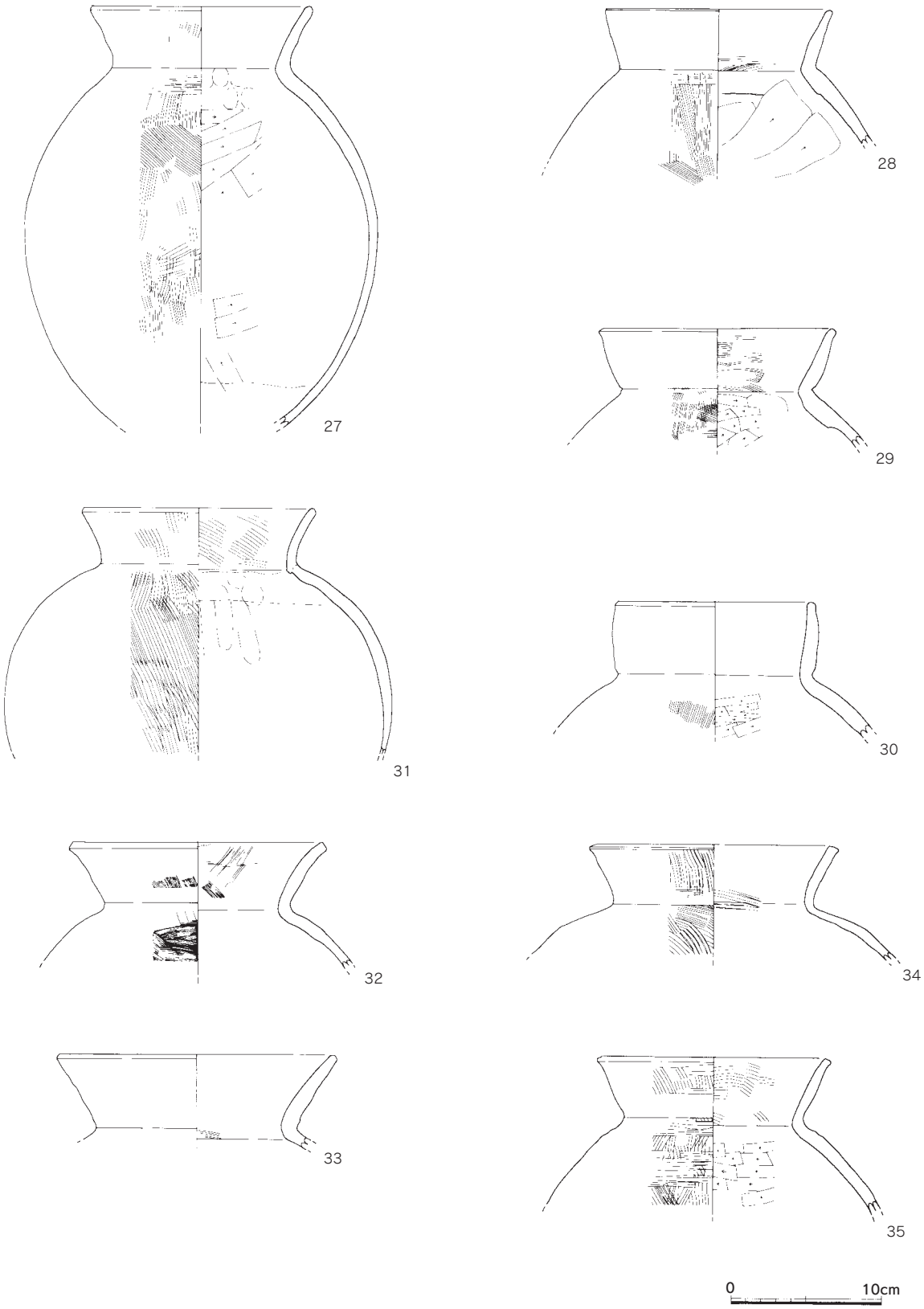


図111　SD115出土土器４（1/4）

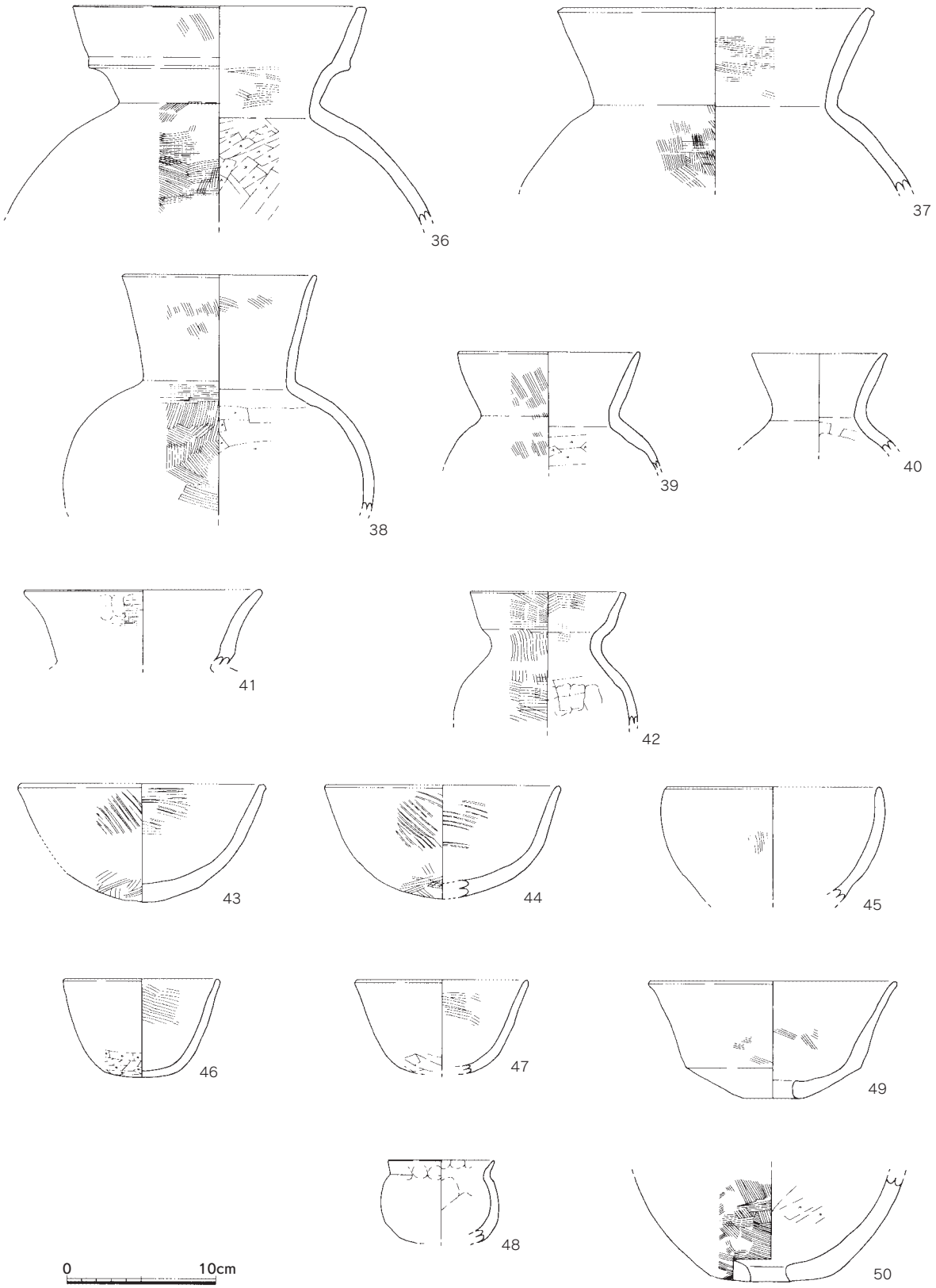


図112　SD115出土土器５（1/4）

は22点であり、②ｂ式が最も多い。③ａ式、④ａ式以外すべての属性がみられ、複数型式の甕が混在していると思われる。

全体的なつくりが粗雑化するという型式変化を考えれば１，２は器壁も薄く口縁端部もシャープで古式の要素をもつ。次に５～９は器壁は厚いものの口縁端部は面とりされるか肩部外面ヨコハケ、あるいは内湾口縁という古い要素をもつ。７と８は形態、調整が類似するが、８は肩部内面に粘土帯接合痕跡が残り内面調整の省略化がみられる。11～26は粗製化が進む。11，12は完形でともにＡＩ１式である。

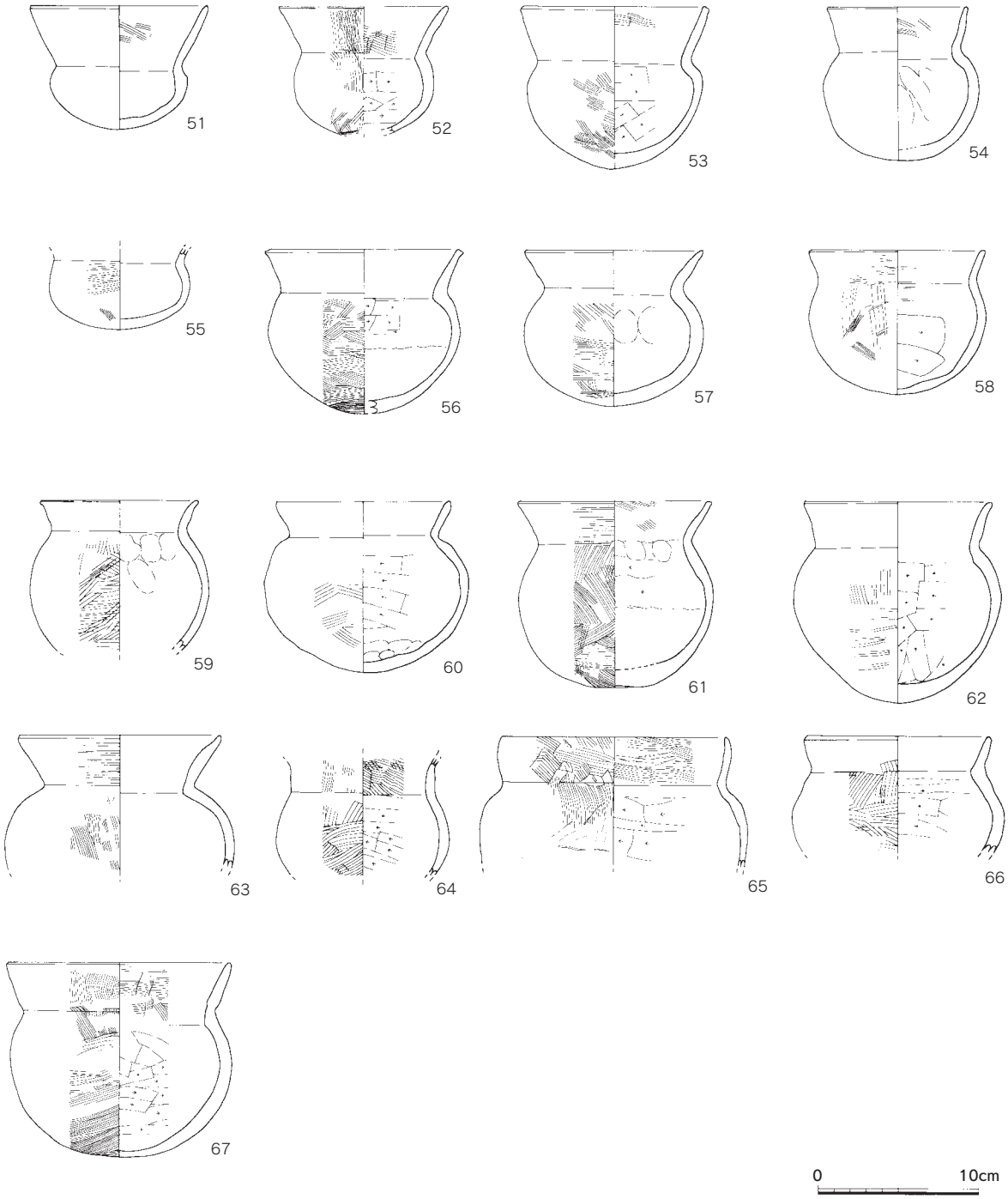


図113　SD115出土土器６（1/4）

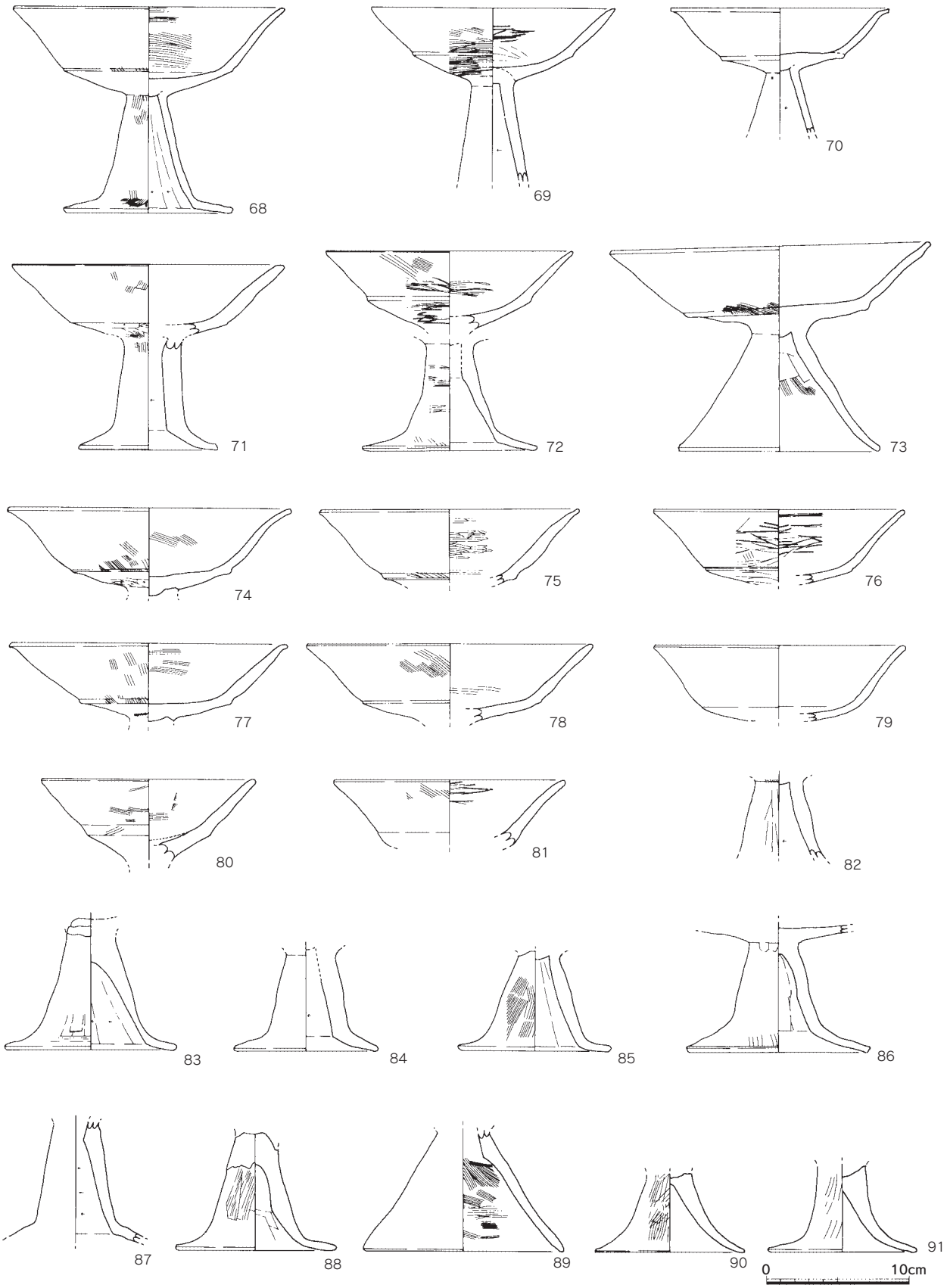


図114　SD115出土土器７（1/4）

11は器壁がやや薄いものの肩部外面タテハケで口縁端部は丸味をもつなど新式の要素をもつ。20，24は完形でともにＡⅡ式である。20は球胴で24は砲弾胴である。27～30は④ｂ式である。30は口縁部が直立し、口縁端部も丸味をもち器壁も厚い。31は器壁はやや薄く、球胴で外反口縁である。肩部外面タテハケで部分的にタタキ痕？が残る。

広口壺（32～35,37,41）土師器、すべて口縁部破片。32,34,35はＡ２ａ式。34は口縁部外面タテハケ。33はＡ２ｂ式。端部は丸味をもつ。37は口縁部長6.8cm、Ａ１ａ式。41はＡ２ｂ式。

二重口縁壺（36,42）土師器、36は口縁部から肩部にかけて残存。二次口縁屈曲部はナデにより断面三角形になる。42は二次口縁屈曲部が緩やか。Ｂ３ｂ式。

直口壺（38～40）土師器、38は口縁部から胴上半部残存。口縁部長7.0cm、ＦⅠ式。39は口縁部長4.5cm、ＦⅡ２式。40はやや小形、ＦⅡ１式。

鉢（43～48）土師器。素口縁で浅鉢のＡ１式が５点、屈曲口縁で浅鉢のＢ１式が1点ある。43，44は法量、形態、調整ともきわめて類似する。46，47は同一個体か。底部平底気味。Ａ１①ａ式。45はＡ１②ａ式。48は指にて短く外反させる。Ｂ１①式。

有孔鉢（49,50）土師器、ともに単孔の甑。49は1/2残存、焼成前穿孔。径３cmの円形の穴である。50は底部のみ残存。平底で焼成前穿孔。２cm×2.5cmの方形の穴である。

小型丸底壺（51～55）土師器、51は2/3残存、52は1/6残存、53，54は完形。55は胴部のみ2/3残存。口径＞器高で口径≧胴径のＣ１①式が４点、口径＜器高で口径＜胴径のＣ２式が１点ある。51は胴部高より口縁部が長い。53は口縁部より胴部が高い。51,53,55はＣ１①ａ式。52は口縁部外面タテハケでＣ１①ｂ式。54は器壁はやや厚いものの調整は比較的丁寧でＣ２③ａ式。

小型広口壺（56～67）土師器、表93に形式分類表を示す。口径＞器高の１式は６点（56,57,58，60,66,67）、口径＜器高の２式は４点（59,61,62,63）である。口縁端部を面とりし外面ヨコハケのａ式は56のみで他はｂ式である。

60のみ色調が異なり橙色である。56，61は外面に煤が付着し、底部内面は炭化物？により黒化する。63は直口壺に類似するが口縁部器壁は厚く短いことから小型広口壺とした。
64は欠損した頸端部が外傾し二重口縁壺の可能性もある。65は口縁部破片で全体の器形がよくわからない。口縁端部のつくりは粗雑で肩部外面タテハケ。66は口縁部は短く直立気味。外面タテハケで器壁はやや厚い。色調は赤褐色で新式の要素をもつ。

高杯（68～71）土師器、68～73は杯部から脚部にかけて残存、74～81は杯部のみ残存、82～91は脚部のみ残存する。表91，92に脚部、杯部形式分類表を示す。

脚部がラッパ状に開くＢ式は73，89で90はやや外反する。68,69,70は脚部器壁が薄く細いＡ１式である。Ａ１式は明橙色で胎土も緻密である。71,72,83,84,85,86,87,88,91は脚部器壁がやや厚く太いＡ２式である。杯部形態は①～④式がある。76，79は杯部器壁が薄く、76は杯部粘土接合部で沈線状になる。79は稜にナデ、ミガキを施す。

杯・脚部接合技法は68,73,74,77がＡ式で83，88はＢ式である。83，88は類似するが83は内面ヘラケズリし稜がつくが88は内面に稜はつかない。90，91は小形の高杯脚部で大きさ、形態とも類似する。90は裾部外反、91は裾部でわずかに屈曲し内面にかすかな稜がつく。

ＳＤ138（図107､115）

Ｅ-３区画で検出した。SD115と垂直に連結しさらにSK133と繋がる。溝幅は約60cmで、深さ約30cmである。溝断面形はＵ字形で埋土は３層からなる。最下層の黄褐色粗砂は非常に粗い砂からなり水成堆積

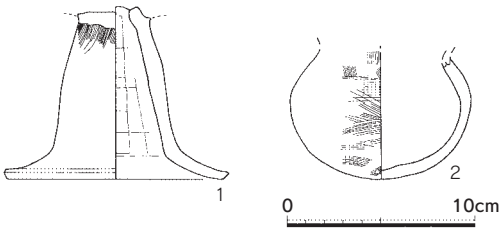


図115　SD138出土土器（1/4）

と思われる。SD138の溝底はSD115より深くSD115からSD138へと水は流入しさらにSK133に溜めるようにつくられる。SD115との連結部埋土上層に径20cmの粘土ブロックが混入していた。

出土遺物は土器破片が少量出土した。

（6）包含層出土遺物

①土器（図116～122）

集落跡の包含層出土土器を掲載する。1～123は土師器で124,125が須恵器である。以下器種ごとに記述する。

甕（1～31）土師器、完形の土器はなく口縁部破片が多い。その残存率も約1/3～1/6である。その中で2,6,15,29は口縁部から肩部まで残存している。甕分類ではＡ式が大半で口径、器高が小型のＢ式が２点（13,14）、分類に入らない甕が２点（30,31）ある。表94に分類表を示す。口縁部破片がほとんどであり、復元口径が多いため法量、胴部形態の分類は不明瞭のものが多い。

Ａ式では口縁部形態が内湾する①式が３点（1,3,5）、直線的な②式が18点（2,4,6,7,8,9,10,11,12,15,16,17,19,21,24,26,27,28）、外反する③式が６点（18,20,22,23,25,29）あり②式が多い。

内湾口縁の1,3,5は口縁端部が内側に肥厚し、外面もヨコハケである。また、直線口縁のうち4，6～8は口縁端部が内側にわずかに肥厚し古式の要素をもつ。また、直線口縁と外反口縁では区別が不明瞭なものもある。外反口縁③式は外面調整タテハケが多くみられる。タテハケでも長さが短く不連続のものと15,18,19,29のような連続した長いタテハケがみられる。

口径、器高が小形のＢ式は13，14である。小型広口壺にはいるのかもしれない。

30は口縁部破片1/6残存。口縁部長は2.8cmと短く器壁が厚い。口縁端部は丸味をもつ。

31は口縁部から体部にかけて残存。胴部最大径は下位にあり、口縁部は直立気味に立ち上がる。口縁部外面から胴部にかけて長いタテハケを施す。つくりは粗雑で胴部外面下半部に煤付着。

二重口縁壺（32～36）土師器、32は口縁部から胴部にかけて残存、33は口縁部欠損、34は口縁部から肩部にかけて1/3残存。35は口縁部破片、36は口縁部から体部にかけて1/3残存。

二次口縁が傾く1式と直立する2式、小型の3式がある。32は二次口縁屈曲部はナデにより断面三角形になる。１Ⅰａ式。34は二次口縁屈曲部が退化する。１Ⅱｂ式。35は二次口縁が直立し二次口縁屈曲部が退化する。２Ⅱｂ式。36は復元口径10.7cmの小型である。口頸部外面タテハケ。

広口壺（37～41）土師器、口縁部から肩部にかけて1/6～1/3残存。すべて口縁部長６cm以上の１式である。口縁端部が面とりされ、肩部ヨコハケの１ａ式は39,40,41で、端部は丸味をもち外反気味に屈曲する１ｂ式は37，38である。

直口壺（42～46,99）土師器、42,45,46は口縁部から肩部にかけて残存。43，44は口縁部のみ残存。大型のⅠ式（44）と小型のⅡ式（42,43,45,46）がある。44は復元口径25.8cm、口縁部長17.5cmを測る。Ⅱ式は

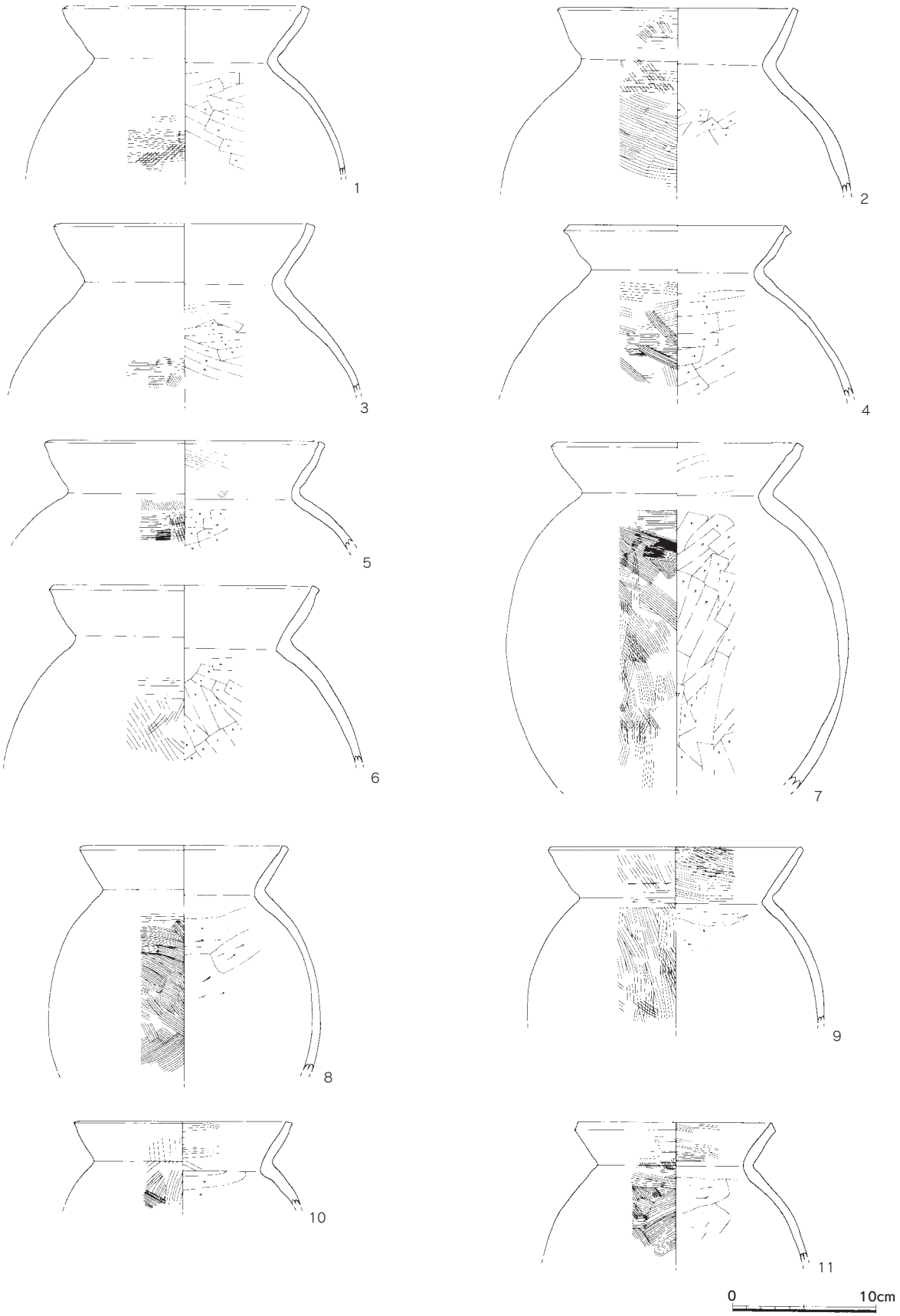


図116　包含層出土土器１（1/4）

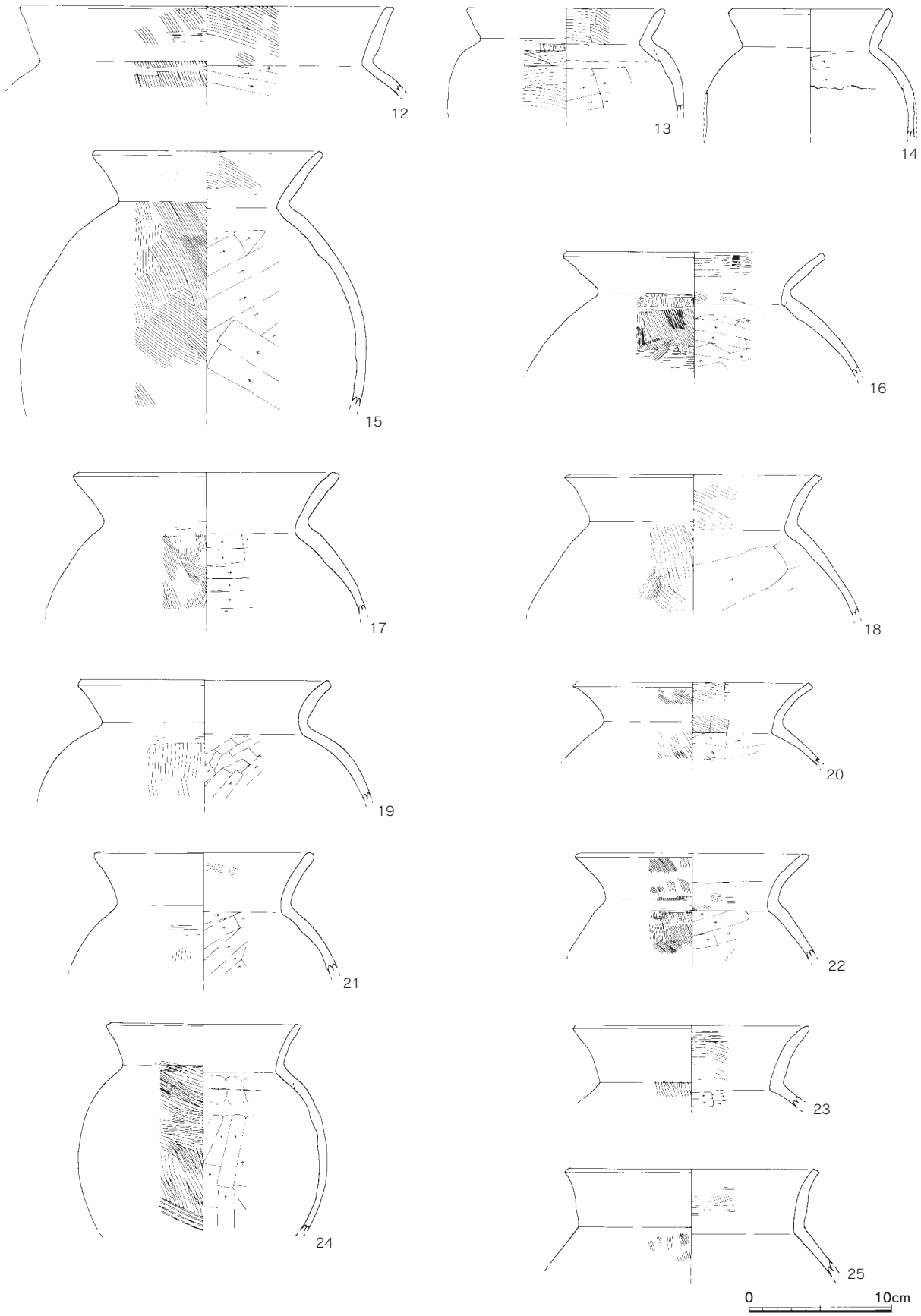


図117　包含層出土土器２（1/4）

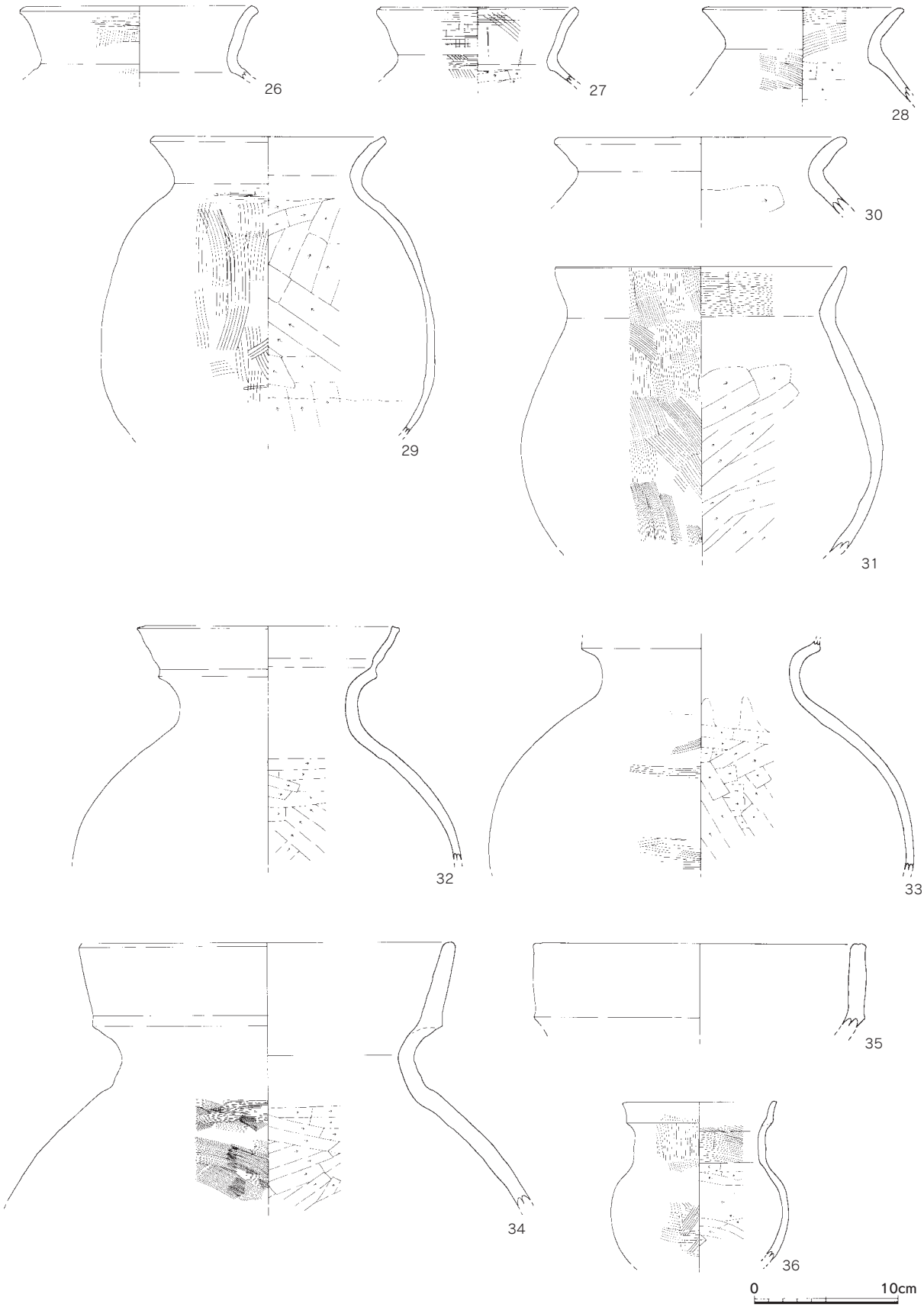


図118　包含層出土土器３（1/4）

口縁部がわずかに外傾する１式（43,46）と外反気味に外傾する２式（42,45）がある。42は肩部タテハケで器壁もやや厚いが、45は肩下半部ヨコハケで内面のヘラケズリも入念で器壁も薄い。型式変化は45→42である。46は肩部タテハケで内面のケズリも雑である。99は口縁部長3.2cmと短く口縁部は直立する。

小型丸底壺（47～60）土師器、47～56は比較的よく残存する。57は口縁部から肩部1/6残存。58～60は口縁部欠損。表95に形式分類表を示す。口径＞器高で口径≧胴径の１①式は47,48,49で外面ナデ、ヨコ、ナナメハケのａ式である。口径＜器高、口径≧胴径の２①式は50，53である。50は器壁が部分的に剥落、器壁は薄い。53は器壁が厚く粗雑なｂ式である。口径＜器高で口径＜胴径の２②式は51，52で口径＜器高で口縁部が直立する54,55,56である。このうち54はハケ、ナナメハケを施し比較的丁寧なつくりであるが、他はタテハケなどで粗雑なつくりである。また57は頸部のくびれが弱く鉢に分類してもよい。

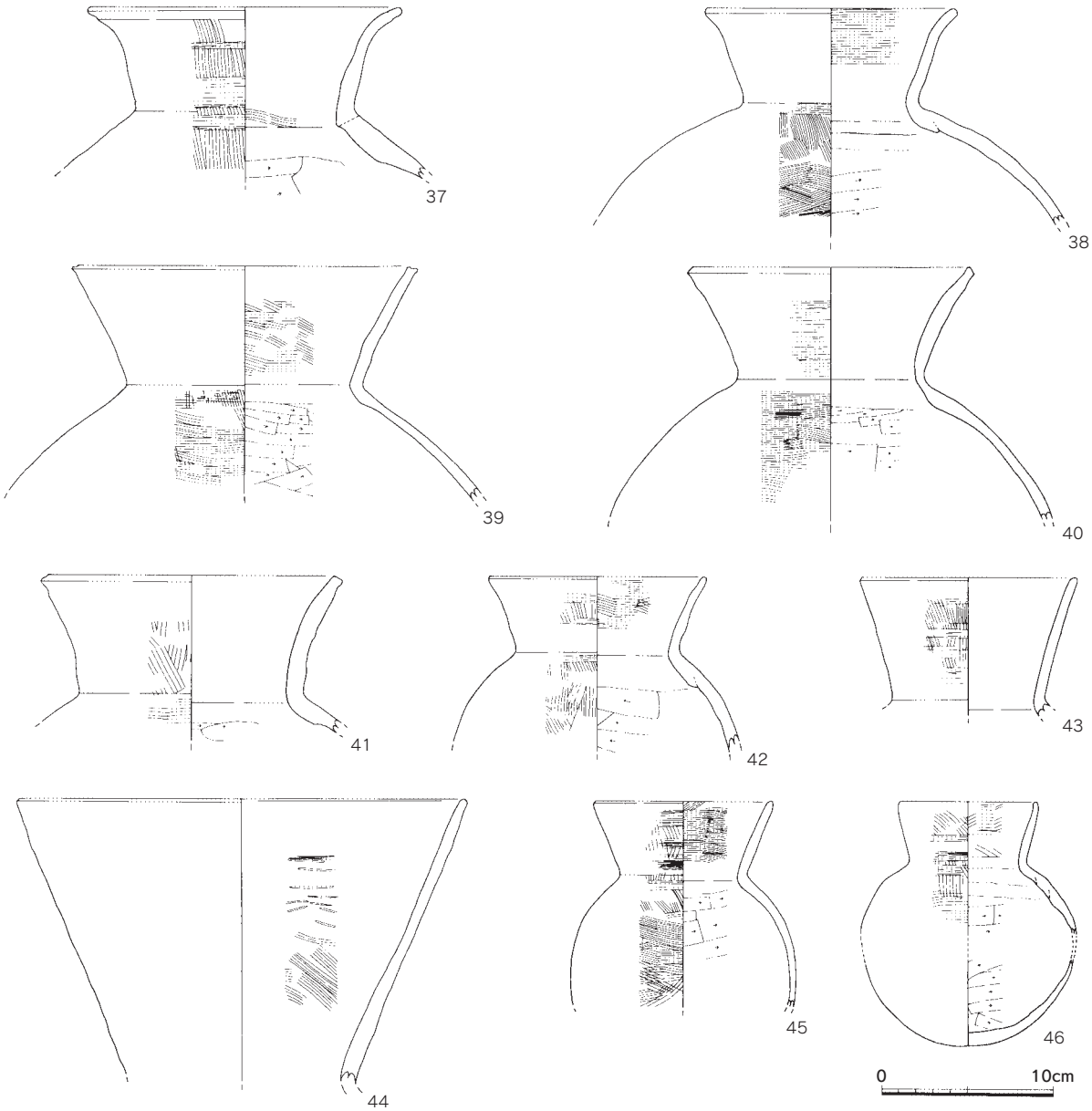


図119　包含層出土土器４（1/4）

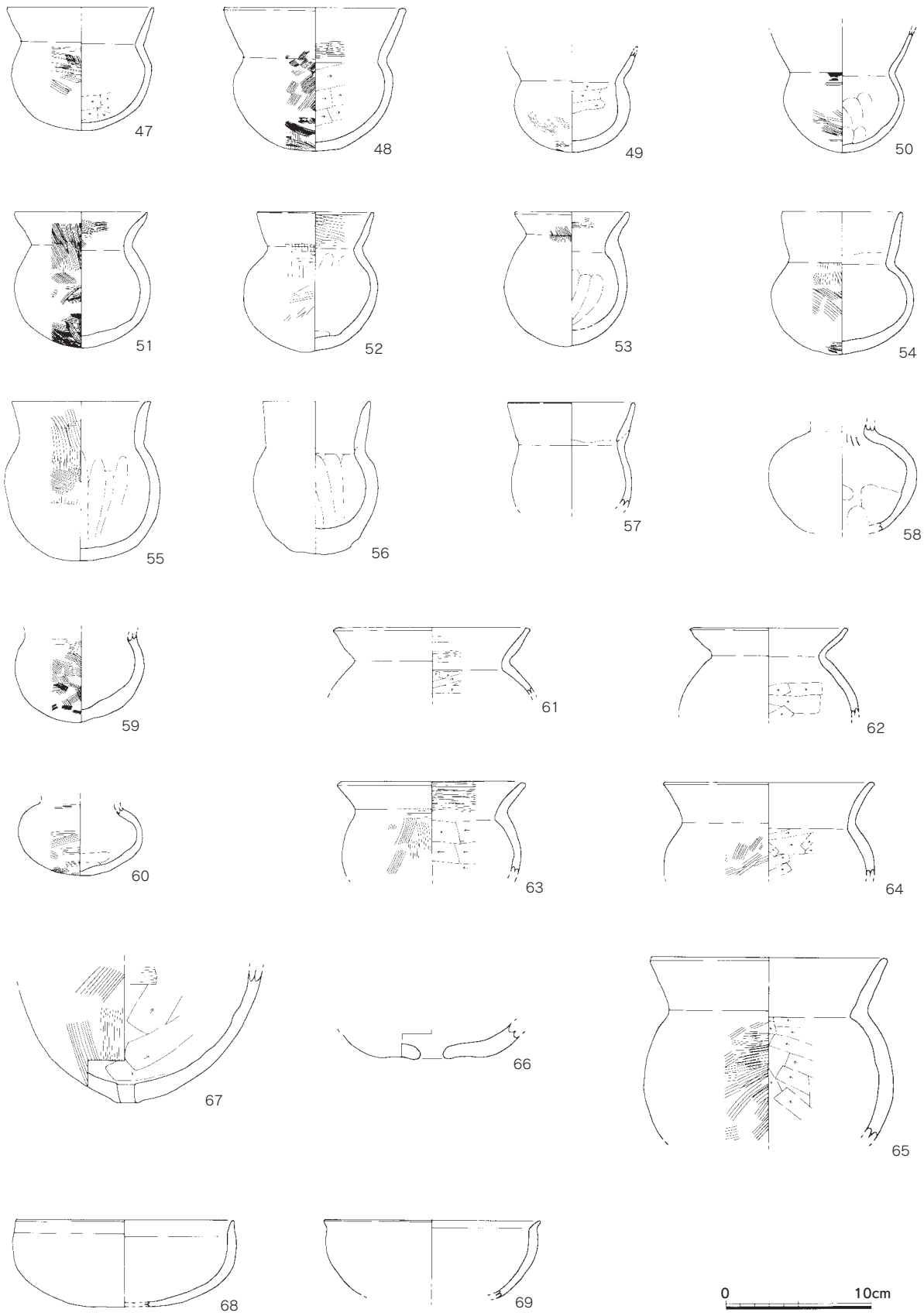


図120　包含層出土土器５（1/4）

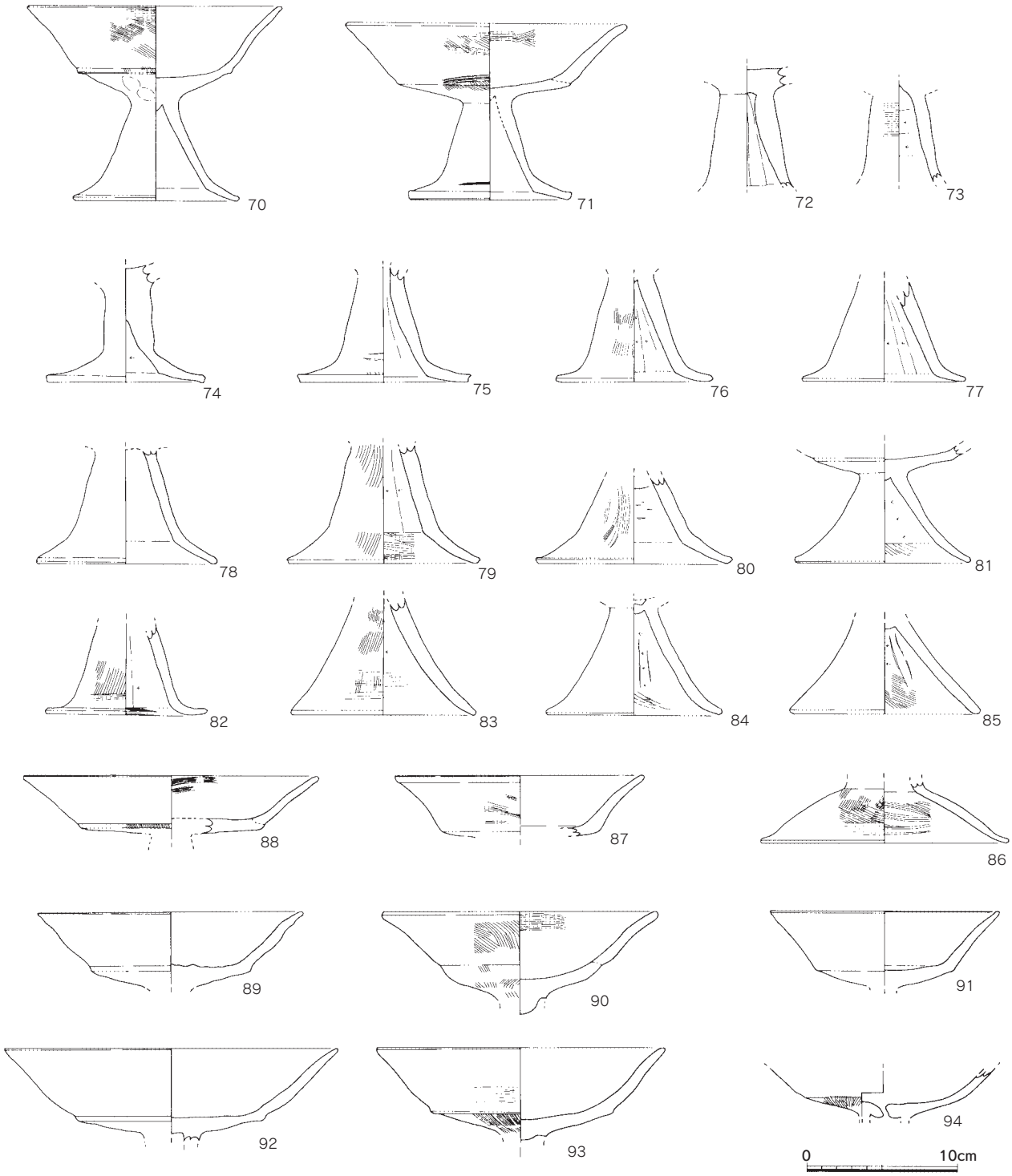


図121　包含層出土土器６（1/4）

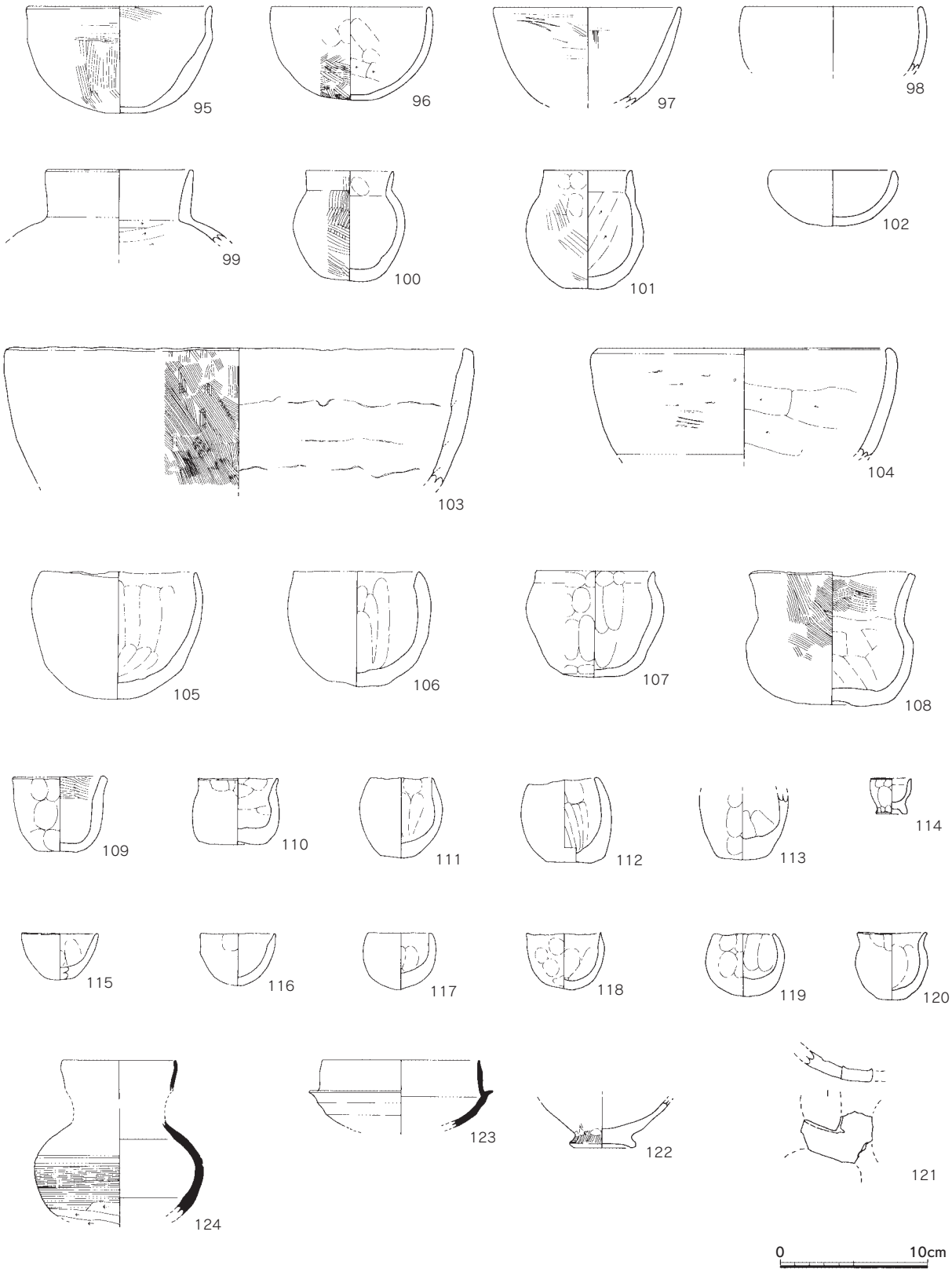


図122　包含層出土土器７（1/4）

小型広口壺（61～65）土師器、62～64は口縁部約1/5残存、65は口縁部から胴部にかけて1/3残存。61、63～65は内面ヘラケズリは頸部内側まで施すが、比較的雑である。

有孔鉢（66,67）土師器、66は底部破片、67は底部残存、66は底部に径1.6cmの円形の孔を穿つ。平底。67は底部に径１cmの円形の孔を穿つ。丸底、外面ハケ。ともに内側から穿孔する、焼成前穿孔。

椀（68,69）土師器、68は1/6残存。69は口縁部1/4残存。68は口縁部内外面にわずかな稜線がはいる。Ⅰ１式。69は口縁端部でわずかに外反する。Ⅰ２式。

高杯（70～94）土師器、70，71は杯、脚部ともに残存。72～86は脚部残存。87～94は杯部残存。表96，97に脚部・杯部形式分類表を示す。

脚部形式は屈曲し器壁がやや厚く太いＡ２式は６点（71,75,76,77,79,82）。ラッパ状に開き裾部近くで外反、内側に稜がつくＡ３式は４点（70,78,80,81）である。ラッパ状に開くＢ式は３点（83,84,85）。74，86はこの分類には入らず、74は脚部中実で裾部で開く。86は裾部のみ残存。やや内湾気味に外方に大きく開き、端部はわずかに上方に外反する。外面ナナメハケ。

杯部形式はわずかに外反あるいは内湾するために明瞭に分類できないが杯部口縁部には直線的な①式、直線的で端部で外反する②式、外反する③式、内湾し端部で外反する④式がある。87，91は外反する③式で外面屈曲部に有段の稜をつくらない。他のほとんどは有段の稜をつくるが90は沈線状になる。杯・脚部接合技法では90，93がＡ式、94は杯底部に小孔が穿たれＣ式である。

鉢（95～98,100～120,122）土師器、素口縁のＡ式と屈曲口縁のＢ式がある。素口縁で浅鉢のＡ１式が13点（96,97,98,102,103,104,105,106,107,115,116,117,118）と多くさらに口縁部が直立するか内湾する②式が多い。103，104は大形の粗製の鉢である。105,106,107は粗製で指頭圧痕が残る。110～120は口径、器高とも約５cm以内のミニチュア鉢で指頭圧痕が残り、口縁部形態は逆ハの字形、直立するか内湾、あるいは端部を外反させるものがある。122は台付鉢である。

有孔甑（121）土師器、底部片、中央の円孔の周囲に楕円形の孔を穿つ。

杯身（123）須恵器、1/7残存。たちあがり長は2.0cm、口縁端部は丸味をもつ。底部3/4回転ヘラケズリ。

壺（124）須恵器、底部、口縁部一部残存。肩部に二条の沈線あり、胴部カキ目、底部回転ヘラケズリ。

②土製品・玉類・石製品（図123）

土製品は土人形・勾玉、玉類は勾玉・管玉、石製品は錘・砥石が出土した。

１は土人形の頭部片である。顔面は平坦なつくりで、鼻梁と顎がわずかに突起し、頭頂部から後頭部にかけては緩やかに丸みを帯びる。顔面の造形は鼻梁が造り出されている以外は、眼はへら書きによって書かれており、鼻孔と口も刺突によって描かれる。顎の部分は径３～４mm程度の縄状の粘度帯を、耳の付け根から顔の曲線にそって貼り付けたあとなで消す。耳は貼り付けたあとをきれいになで消しており、耳朶には径２mmの孔が、顔面側から穿たれる。

勾玉は４点出土し、２,３は土製、４,５は石製である。２,３は成形時のものとみられるひびがはいり、表面をナデ調整で仕上げる。４は流紋岩を素材とする。頭部に孔に向かって３条の沈線がはいる。
片面の孔周縁は欠けて丸みを帯びる。５は滑石製勾玉である。孔周辺が1.5～2mmの範囲が周囲と比べ擂鉢状にくぼんでいる。

６,７は管玉である。６の側面はほぼ直線的であるが、わずかにエンタシス状となる。７は両側穿孔の管玉である。孔は中心からわずかに外れる。

８,９は用途不明の滑石製品である。側面と上・下面との境の稜は、面取りされ丸みを帯びる。９は全周縁が折損しているため、もともとの径は不明である。両面とも一定方向に擦痕が入るが、表・裏では

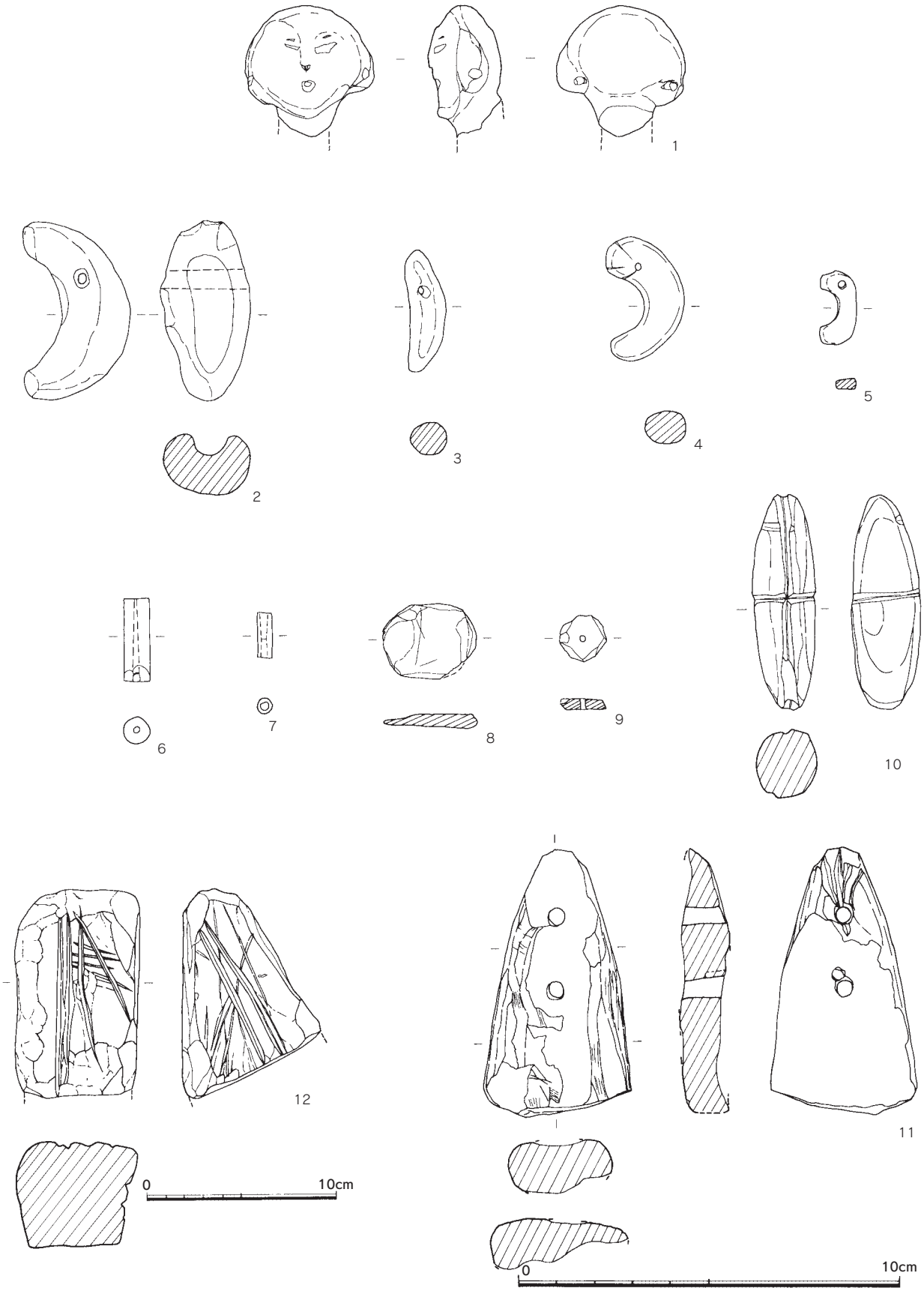


図123　包含層他出土土製品・玉類・石製品（2/3・1/3）12のみ1/3

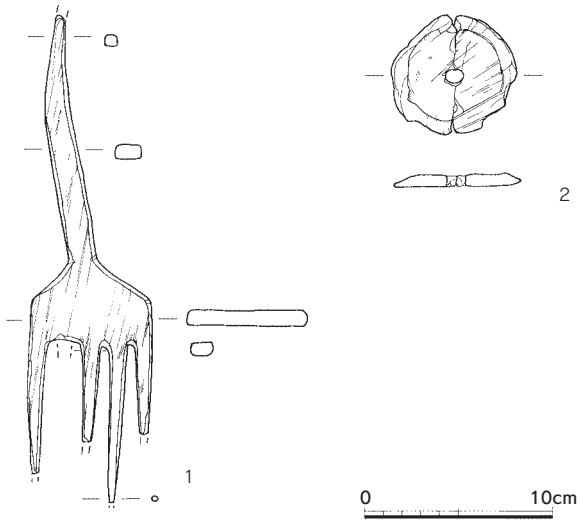


図124　包含層出土木製品（1/4）

その方向が直行する。模造鏡であろうか。

10,11は石錘である。10は中央部がふくれて、細長い杏仁形をしている。断面は楕円形である。長軸方向と短軸方向の中央部にはそれぞれ１周ずつ沈線がめぐる。長軸方向の沈線は、断面の幅が狭い側面側にめぐる。頂部には短軸方向にもう１本沈線が半周めぐる。11は平面形が二等辺三角形状を呈し、中央部１箇所と中央部と頂部の間１箇所に孔が穿たれる。中央部の孔には一部重なるように孔を穿った痕跡があり、はじめに孔を半分の厚さまで穿って、新しく孔を穿ち直したことがわかる。頂部からは上方の孔に向かって沈線が４条入り、孔直下までのびている。沈線をいれたあとに、孔を穿ったとみられる。側面は幅２～４mm間隔で細かく面取りされており、緩やかに丸みを帯びる。両面とも大きく剥離しており、細かな調整は不明である。

12はSD164から出土した砂岩製粗砥石である。下半は欠損する。おもて面と左側面を利用しており、両面とも幅約３mm、深さ５mmほどの深めの溝状研磨痕が数条はいる。

③木製品（図124）

２点ともに集落東側の古墳水田へ向って低くなる斜面からの出土である。１はフォーク状であり、柄の先端部分が曲る。簪かと思われる。２は木製の紡錘車である。断面台形である。

表26　集落跡出土土師器一覧表（1）

挿図-番号 (登録番号)	出土地点	器種 種別	法量 (cm)	形態・成形・調整の特徴	胎土	色調
71 - 1 (971844)	SH04	高杯 (土師器)	口径（18.7） 器高（12.7）	杯口縁部は外反する。脚裾部は外方に開く。杯部内外面ハケのちヨコナデ。	中～大粒砂混入	内外面赤褐色
〃 - 2 (971840)	SH04	高杯 (土師器)	口径（17.7） 器高　12.2	杯口縁部は外反する。脚裾部は外方に開く。杯部内外面ヨコナデ。	中粒砂少量混入	内外面赤褐色
〃 - 3 (971841)	SH04	高杯 (土師器)	口径（17.6） 器高（11.8）	杯口縁部は外反する。脚裾部は外方に開く。杯部内外面ヨコナデ。	中粒砂混入	内面黒色 外面赤褐色
〃 - 4 (980379)	SH04	高杯 (土師器)	口径（17.7） 器高　12.2	杯下部に稜あり。口縁部は外反する。脚裾部は外方に開く。杯部外面ヨコナデのち斜めハケ目。	中粒砂少量混入	内外面明褐色
〃 - 5 (971843)	SH04	高杯 (土師器)	口径（17.8） 器高（12.4）	杯下部に稜あり。口縁部はわずかに外反する。脚裾部は外方に開く。杯部内外面ヨコナデ。	中粒砂少量混入	内面黒色 外面明褐色
〃 - 6 (971842)	SH04	高杯 (土師器)	口径（16.0） 器高（11.2）	口縁部は外上方に開く。脚裾部は外方に開く。杯部内外面ヨコナデ。	中粒砂少量混入	内外面赤褐色
〃 - 7 (971808)	SH04	高杯 (土師器)	口径　20.2 器高　13.5	杯下部に稜あり。口縁部は外上方に開く。脚裾部はラッパ状に開く。杯部内外面ヨコナデ。	中粒砂少量混入	内面黒色 外面明褐色
72 - 1 (980360)	SH118	高杯 (土師器)	口径（20.4）	口縁部は外上方に直線的に開く。端部は丸みをもつ。肩部外面タテハケ。	小～中粒砂混入	内外面褐色
〃 - 2 (980357)	SH118	広口壺 (土師器)	口径（16.2）	口縁部は外反気味に外上方に開く。口頸部外面タテハケ。	小粒砂混入	内外面明褐色
〃 - 3 (980358)	SH118	直口壺 (土師器)	口径（12.3）	口縁部は波うちながら外上方に開く。内外面ヨコナデ。	小粒砂混入	内外面明褐色
〃 - 4 (980359)	SH118	二重口縁壺 (土師器)	口径（17.0）	口頸部中位で屈曲し、端部は面とりされる。内外面ヨコナデ。	中粒砂少量混入	内外面褐色
〃 - 5 (980356)	SH118 P-2	小型広口壺 (土師器)	口径（11.4）	胴部最大径はやや上位より。口縁部内外面ヨコナデ。のち肩部外面ハケ。	中～大粒砂混入	内外面明褐色
74 - 1 (980525)	SH121	甕 (土師器)	口径　17.7 器高　27.5	胴部は球形で最大径は中位にあり。肩部外面ヨコナナメハケ。外面煤付着。	中～大粒砂多量混入	内面褐色 外面黒褐色
〃 - 2 (980524)	SH121	甕 (土師器)	口径（15.4）	口縁端部面とりされる。肩部ナナメハケ。	大粒砂多量混入	内外面褐色
〃 - 3 (980523)	SH121	広口壺 (土師器)	口径（17.4）	口縁端部面とりされる。肩部ヨコハケ。	大粒砂混入	内外面褐色
75 - 4 (980505)	SH121	甕 (土師器)	口径（16.6）	なで肩。肩部外面ナナメハケ。口縁端部は丸みをもつ。	大粒砂多量混入	内外面褐色
〃 - 5 (980566)	SH121	甕 (土師器)	口径（15.8）	口縁端部面とり気味。肩部外面ナナメハケ。煤付着。	中粒砂混入	内外面黒褐色
〃 - 6 (980495)	SH121	甕 (土師器)	口径（16.0）	口縁端部面気味。肩部外面ハケ。	中粒砂混入	内面橙色 外面黒褐色
〃 - 7 (980492)	SH121	甕 (土師器)	口径（13.6）	口縁端部は丸味をもつ。肩部外面ヨコハケ。	中～大粒砂混入	内外面灰黄色
〃 - 8 (980508)	SH121	甕 (土師器)	口径（15.8）	口縁部は外反、指押さえで成形。肩部外面タテハケ。煤付着。	中粒砂混入	内外面橙色
〃 - 9 (980562)	SH121	甕 (土師器)	口径（16.8）	口縁部中位でわずかに内湾し端部にかけて外反する。肩部外面ナナメハケ。	中～大粒砂混入	内外面明褐色
〃 - 10 (980488)	SH121	広口壺 (土師器)	口径（18.6）	口唇部外面はわずかに肥厚、口縁部はわずかに外反する。口縁部内外面ハケ。	細～中粒砂混入	内外面明褐色
〃 - 11 (980568)	SH121	広口壺 (土師器)	口径　17.3	口縁部はわずかに外反気味。肩部外面タテハケ。口縁部内外面ヨコナデのち内面ナナメハケ。	金雲母混入 中～大粒砂混入	内外面赤褐色
〃 - 12 (980510)	SH121	甕 (土師器)	胴径　20.2	胴部は下ぶくれ。体部外面ハケ。口縁部内面ハケ。	中粒砂混入	内外面黄褐色
〃 - 13 (980493)	SH121	小型広口壺 (土師器)	口径（12.6） 器高（14.9）	体部は球形、口縁部は直線的に開く。体部外面ハケ。	中粒砂混入	内外面褐色
〃 - 14 (980498)	SH121	二重口縁壺 (土師器)	口径（10.0）	口縁部は直立する。口縁部内外面ナデ。	細砂混入	内外面黒褐色
76 - 15 (980499)	SH121	高杯 (土師器)	口径（18.2） 器高（14.9）	杯部外面に稜あり。脚裾部は屈曲して外方に開く。	細砂混入	内外面橙色
〃 - 16 (980497)	SH121	高杯 (土師器)	底径（12.0）	杯部外面は粘土接合面が沈線になる。脚裾部は屈曲して外方に開く。	細砂混入	内外面橙色
〃 - 17 (980500)	SH121	高杯 (土師器)	口径（19.4）	杯部外面は粘土接合面が沈線になる。口縁部は外反する。	細砂混入	内外面橙色
〃 - 18 (980496)	SH121	高杯 (土師器)	口径（19.2）	杯部外面に稜あり、口縁部は外反する。杯部内面ハケ。	細砂混入	内面赤褐色 外面黒褐色
〃 - 19 (980486)	SH121	高杯 (土師器)	口径（20.0）	杯部外面に稜あり、口縁部は直線的に開く。杯部内面ハケ。	細砂混入	内面黄褐色 外面橙色

表27　集落跡出土土師器一覧表（2）

挿図-番号 (登録番号)	出土地点	器種 種別	法量 (cm)	形態・成形・調整の特徴	胎土	色調
76 - 20 (980507)	SH121	高杯 （土師器）	口径（19.2）	杯部外面に緩やかな稜あり。口縁部はわずかに外反する。口縁部外面ハケのちナデ。	細砂混入	内外面黄褐色
〃 - 21 (980565)	SH121	高杯 （土師器）	口径（19.0）	口縁部は外反。外面ナナメハケ。杯部下部外面ミガキ状。	緻密、砂粒の混入ほとんどなし。	内外面褐色
〃 - 22 (980570)	SH121	高杯 （土師器）	底径　11.7	脚部はエンタシス状。裾部は外下方に開く。裾部内外面ヨコナデ。	大粒砂混入	内外面明褐色
〃 - 23 (980502)	SH121	高杯 （土師器）	底径（11.6）	脚裾部は外方に開く。内外面ナデ。	細砂混入	内外面橙色
〃 - 24 (980490)	SH121	高杯 （土師器）	底径（11.8）	脚部はラッパ状に開く。裾部外面タテハケ、内面ヨコハケ。	中粒砂混入	内外面橙色
〃 - 25 (980503)	SH121	高杯 （土師器）	底径（11.7）	脚裾部内面はわずかに屈曲しラッパ状に開く。外面ハケ。	細砂混入	内外面黄褐色
〃 - 26 (980564)	SH121	高杯 （土師器）	底径　13.7	脚部はラッパ状に開く。裾部外面タテハケ。内面ヨコハケ。	金雲母混入 中粒砂混入	内外面褐色
〃 - 27 (980572)	SH121	高杯 （土師器）	底径（16.2）	脚部はラッパ状に開き裾部でわずかに屈曲する。裾部外面タテハケ。内面ヨコハケ。	大粒砂混入	内外面赤褐色
〃 - 28 (980563)	SH121	小型丸底壺 （土師器）	胴径（ 8.9）	胴部最大径は中位。肩部外面ナナメハケ。	大粒砂混入	内外面褐色
〃 - 29 (980569)	SH121	小型丸底壺 （土師器）	口径　7.6 器高　8.9	胴部最大径はやや上位より。口縁部外面タテハケのちヨコナデ。内面ヨコナデ。胴部外面ヨコハケ	小粒砂混入	内外面褐色
〃 - 30 (980487)	SH121	鉢 （土師器）	口径　10.4 器高　7.7	平底で口縁部は外上方に開く。内外面ナデ。	細～中粒砂混入	内面褐色 外面橙色
〃 - 31 (980509)	SH121	鉢 （土師器）	口径（15.4）	口縁部は屈曲し外上方に開く。外面粗いハケ、口縁部内面ハケ。	細砂混入	内外面黄褐色
〃 - 32 (980504)	SH121	鉢 （土師器）	口径（14.4） 器高（ 6.9）	丸底で体部は内湾する。外面ハケ。	中粒砂混入	内面橙色 外面黒褐色
〃 - 33 (980560)	SH121	手ずくね鉢 （土師器）	口径　12.2 器高　6.7	口縁部形態はいびつ。内外面に指頭圧痕あり。	大粒砂多量混入	内外面褐色
〃 - 34 (980494)	SH121	鉢 （土師器）	口径　11.8 器高　6.3	平底で素口縁、体部は内湾気味に開く。体部外面ナデ。	中～大粒砂混入	内外面黄褐色
〃 - 35 (980491)	SH121	鉢 （土師器）	口径　8.7 器高　5.0	平底で素口縁、口縁部は外反気味。	中～大粒砂混入	内外面黒褐色
〃 - 36 (980561)	SH121	手ずくね鉢 （土師器）	口径　9.9 器高　8.3	形はいびつ。内外面に指頭圧痕あり。	大粒砂多量混入	内外面褐色
〃 - 37 (980489)	SH121	鉢 （土師器）	口径（ 9.0） 器高　5.8	平底で素口縁。体部は丸味をもつ。内外面ナデ。	細砂混入	内外面黄褐色
〃 - 38 (980501)	SH121	鉢 （土師器）	口径　9.6 器高　6.1	平底で素口縁。体部は内湾する。内外面ナデ。	中粒砂混入	内外面明褐色
〃 - 39 (980571)	SH121	鉢 （土師器）	口径（ 5.3） 器高　5.8	底部は平坦。内面に指頭圧痕あり。	中粒砂混入	内外面褐色
〃 - 40 (980506)	SH121	鉢 （土師器）	口径　7.0 器高　6.2	平底で口縁部は短く屈曲する。内面指押さえ痕あり。	中～大粒砂混入	内外面黄褐色
〃 - 41 (980567)	SH121	鉢 （土師器）	口径　3.4 器高　4.1	底部は平坦で比較的厚い。	中粒砂混入	内外面褐色
77 - 1 (980528)	SH122	小型広口壺 （土師器）	口径（13.2）	口縁部は内湾し、端部は内側に若干肥厚する。肩部内面ヨコハケ。	小～中砂混入	内外面明褐色
〃 - 2 (980527)	SH122	小型広口壺 （土師器）	口径（11.8） 器高（16.7）	口縁部は短く直立気味、胴部は球形で外面ハケ。	大粒砂多量混入	内外面明褐色
〃 - 3 (980526)	SH122	高杯 （土師器）		脚部はラッパ状に開く。杯部外面タテハケ。内面ヘラケズリ、裾部内面ヨコナデ。	中粒砂混入	内面黄褐色 外面赤褐色
〃 - 4 (981584)	SH122	鉢 （土師器）	口径（ 8.4） 器高（ 7.2）	平底で口縁部はやや内傾、内面部分的にヨコハケ。	中粒砂多量混入	内外面黄褐色
〃 - 5 (981583)	SH122	鉢 （土師器）	底径（ 4.4）	平底で体部は丸味をもつ。内面指ナデ。	中粒砂多量混入	内外面褐色
〃 - 6 (981585)	SH122	鉢 （土師器）	胴径（ 3.2）	ミニチュアの手ずくね鉢。外面ヘラ状工具によるケズリ痕あり。	緻密、砂粒の混入ほとんどなし。	内外面褐色
79 - 1 (980581)	SH125	甕 （土師器）	口径（16.4）	口縁端部は面とりされる。内外面ヨコナデ。	中～大粒砂混入	内外面褐色
〃 - 2 (980580)	SH125	広口壺 （土師器）	口径（18.4）	口縁部は長く直線的に外上方に開く。端部内面は若干肥厚、ヨコハケ。	中粒砂混入	内外面橙色
〃 - 3 (980582)	SH125	直口壺 （土師器）	口径（12.0）	口縁部は若干内湾する。内外面ヨコナデのちハケ。	小～中粒砂混入	内外面褐色

表28　集落跡出土土師器一覧表（3）

挿図-番号 (登録番号)	出土地点	器種 種別	法量 (cm)	形態・成形・調整の特徴	胎土	色調
79 - 4 (980577)	SH125	甕 （土師器）	口径（15.8）	口縁端部は面とりされる。内面ヨコハケ。肩部外面タテハケ。	大粒砂混入	内外面褐色
〃 - 5 (980578)	SH125	高杯 （土師器）	口径（28.8）	杯下部外面に断面三角形の稜あり。外面ヨコナデのちハケ。	小～中粒砂少量混入	内外面黄褐色
〃 - 6 (980579)	SH125	鉢 （土師器）	口径　9.7 器高　7.2	丸底、体部外面ハケのちナデ消し。口縁部内面ハケ。	中粒砂少量混入	内面黄褐色 外面橙色
〃 - 7 (980574)	SH125	小型丸底壺 （土師器）	口径（11.0）	肩部外面ナナメハケ。胴下半部ヘラ状工具によるケズリ。口縁部内面ハケ。	小粒砂混入	内外面褐色
〃 - 8 (980575)	SH125	小型丸底壺 （土師器）	口径　7.5 器高（ 9.0）	口縁部は内湾気味。肩部外面タテハケ、口縁部内面ヨコハケ。	中～大粒砂混入	内外面褐色
〃 - 9 (980576)	SH125	小型丸底壺 （土師器）	口径（ 8.0）	口縁部は直立、肩部外面ナナメハケ、口縁部内外面ヨコナデ。	中粒砂混入	内外面褐色
〃 - 10 (980583)	SH125	小型丸底壺 （土師器）	口径　9.7	口縁部は直立、口縁部内外面ナナメハケ、肩部外面タテハケ。	中粒砂混入	内外面褐色
81 - 1 (980415)	SH231	甕 （土師器）	口径　17.0	口縁部は外反、内外面ヨコナデ。肩部外面タテハケ。	大粒砂多量混入	内外面赤褐色
〃 - 2 (980515)	SH231	小型広口壺 （土師器）	口径（10.1）	口縁部は外上方に直線的に開く。内外面ヨコナデ。	中～大粒砂混入	内外面橙色
〃 - 3 (980522)	SH231	高杯 （土師器）	口径　19.0 器高　12.3	杯下部に稜あり、脚裾部は外方に開く。杯部内側面ハケのちヨコナデ、外側面ヨコナデ。	中粒砂混入	内外面赤褐色
〃 - 4 (980416)	SH231	高杯 （土師器）	口径（19.2）	杯下部にわずかな稜あり。杯下部外面ハケ、内外面ヨコナデ。	中～大粒砂混入	内外面橙色
〃 - 5 (980513)	SH231	高杯 （土師器）	底径　10.4	脚部は小さくラッパ状に開く。内面ヘラケズリ、裾部内外面ヨコナデ。	中～大粒砂混入	内外面褐色
〃 - 6 (980511)	SH231	鉢 （土師器）	口径　3.7 器高　4.5	丸底、口縁部内外面ヨコナデ。底部外面ヘラケズリ。	細～中粒砂混入	内外面赤褐色
〃 - 7 (980521)	SH231	鉢 （土師器）	口径（10.0）	体部は内湾する。外面ハケ、内面ヨコナデ。	細～中粒砂混入	内外面褐色
〃 - 8 (980518)	SH231	小型丸底壺 （土師器）	口径（ 7.6） 器高	口頸部はやや内湾気味に直立する。内外面ヨコナデ。胴部外面下半部ヘラケズリ。	中粒砂混入	内外面黄褐色
〃 - 9 (980520)	SH231	小型丸底壺 （土師器）	口径（ 9.0） 器高　7.5	口縁部は内湾気味に外上方に開く。内外面ヨコナデ。	大粒砂多量混入	内外面橙色
〃 - 10 (980514)	SH231	小型丸底壺 （土師器）	胴径　9.6	口頸部、底部外面ハケ。底部内面指頭圧痕あり。	中粒砂混入	内外面褐色
〃 - 11 (980519)	SH231	鉢 （土師器）	口径（ 5.9）	口縁部内面ヨコナデ。内外面ヨコナデ。	中粒砂混入	内外面褐色
〃 - 12 (980512)	SH231	小型丸底壺 （土師器）	口径　7.9	口頸部はやや内湾気味に直立する。内外面ヨコナデ。胴部外面下半部ヘラケズリ。	中～大粒砂混入	内外面黄褐色
〃 - 13 (980516)	SH231	鉢 （土師器）	口径　7.2 器高　7.4	平底で全体的に指頭により成形する。	中粒砂混入	内外面褐色
〃 - 14 (980417)	SH231	椀 （土師器）	口径　13.5 器高　4.5	平底で口縁部は外上方に開く。内外面ハケ。	中粒砂少量混入	内外面褐色
〃 - 15 (980517)	SH231	椀 （土師器）	口径（12.6）	口縁部はわずかに屈曲し外傾する。口縁部内外面ナデ。	中～大粒砂混入	内外面赤褐色
82 - 1 (980585)	SH250	甕 （土師器）	口径（17.8）	肩部外面ヨコナデ、口縁部外面ハケのちヨコナデ、口縁部内面ヨコナデ。	中～大粒砂混入	内外面褐色
〃 - 2 (980349)	SH250	甕 （土師器）	胴径（25.0）	肩部外面部分的にヨコハケ、胴下半部ハケナデ消し。	中～大粒砂混入	内外面褐色
〃 - 3 (980586)	SH250	広口壺 （土師器）	口径（16.8）	端部は面とりされる。口縁部内外面ヨコナデ。	中粒砂混入	内外面褐色
〃 - 4 (980348)	SH250	小型丸底壺 （土師器）	口径（ 7.2）	口縁部は直立する。口縁部内外面ヨコナデ。	中粒砂混入	内面赤褐色 外面褐色
〃 - 5 (980584)	SH250	高杯 (土師器)	口径（18.0）	杯下部に稜あり、口縁部は外反する。外面ヨコナデ。	中～大粒砂混入	内外面褐色
〃 - 6 (980587)	SH250	高杯 (土師器)	底径（13.9）	裾部は外方に開く。裾部内外面ヨコナデ。	中粒砂混入	内面褐色 外面明褐色
84 - 1 (980588)	SH262	甕 （土師器）	口径（18.6）	口縁部は内湾する。端部面とり。口縁部内外面ヨコナデ。	大粒砂混入	内外面褐色
〃 - 2 (980340)	SH262	広口壺 （土師器）	口径（16.6）	口縁部はわずかに外反する。口縁下部ナナメハケ、内外面ヨコナデ。	中粒砂混入	内外面褐色
〃 - 3 (980530)	SH262	広口壺 （土師器）	口径　18.6	口縁部外面タテハケのちヨコナデ、内面ヨコハケ、肩部外面ヨコハケ。	中～大粒砂混入	内面黒褐色 外面橙色

表29　集落跡出土土師器一覧表（4）

挿図-番号 (登録番号)	出土地点	器種 種別	法量 (cm)	形態・成形・調整の特徴	胎土	色調
84 - 4 (980590)	SH262	広口壺 （土師器）	口径（18.2）	口縁部は外上方に直線的に開く。端部は面とりされる。口縁部内外面ヨコナデ。	中粒砂混入	内外面褐色
〃 - 5 (980589)	SH262	甕 （土師器）	口径（15.7）	口縁部は外反する。口縁部外面タテハケのちヨコナデ、肩部外面ナナメハケ。	中～大粒砂混入	内外面黒褐色
〃 - 6 (980591)	SH262	高杯 （土師器）	口径（17.2）	杯下部に稜あり、口縁部は外反気味。杯部外面ヨコナデ、内面ヨコナデのちハケ。	細砂混入	内外面赤褐色
〃 - 7 (980529)	SH262	高杯 （土師器）	口径　17.0	口縁部は外反して開く。内外面ヨコナデ。	中砂少量混入	内外面赤褐色
〃 - 8 (980593)	SH262	高杯 （土師器）	口径（17.6）	口縁部内外面ヨコナデ、杯下部外面ケズリ、内面ハケ。	中粒砂混入	内外面褐色
〃 - 9 (980592)	SH262	高杯 （土師器）	底径（10.8）	裾部は外方に開く。裾部内外面ヨコナデ。	中粒砂混入	内面黒褐色 外面明褐色
〃 - 10 (980344)	SH262	不明 （土師器）	口径（19.2）	下部で若干屈曲する。内面不定方向ナデ、外面部分的ナデ。	緻密、砂粒の混入ほとんどなし。	内外面明褐色
〃 - 11 (980343)	SH262	鉢 （土師器）	口径（ 9.9） 器高　7.0	丸底で体部は丸味をもつ。内面ナデ、外面部分的にナデ。	中粒砂混入	内面黒褐色 外面褐色
89 - 1 (003053)	SK103	直口壺 （土師器）	口径（13.1）	口縁部内外面ヨコナデ、肩部外面ハケ、線刻あり。	大粒砂混入	内外面明褐色
〃 - 2 (980597)	SK103	小型丸底壺 （土師器）	口径（ 8.5）	肩部がはり口縁部は外上方に開く。肩部外面ヨコハケのちナデ。	中～大粒砂混入	内外面明褐色
〃 - 3 (980598)	SK103	小型広口壺 （土師器）	胴径　11.0	丸底で胴部外面タテハケ。	中～大粒砂少量混入	内面赤褐色 外面明褐色
〃 - 4 (980599)	SK103	鉢 （土師器）	口径（11.0）	口縁部直立気味、体部外面タテハケ、口縁部内面ヨコハケ。体部外面煤付着。	細砂混入	内面褐色 外面黒褐色
〃 - 5 (981577)	SK103	二重口縁壺 （土師器）	口径（16.6）	端部は面とりされる。口縁部内外面ヨコナデ。頸部内面ヨコハケ。	中～大粒砂多量混入	内面黒褐色 外面褐色
〃 - 6 (980596)	SK103	鉢 （土師器）	口径（10.6） 器高　7.4	平底で体部外面下半部はハケ、口縁部外面ハケのちヨコナデ。	中粒砂混入	内面褐色 外面黒褐色
〃 - 7 (980600)	SK103	鉢 （土師器）	口径（ 5.4） 器高　4.3	丸底で素口縁、内外面指ナデ。	中粒砂混入	内外面褐色
〃 - 8 (981576)	SK103	鉢 （土師器）	口径　5.0 器高　3.8	平底気味で底部に二条の沈線あり。素口縁、内面指ナデ。	中粒砂混入	内外面明褐色
92 - 1 (980450)	SK106	甕 （須恵器）	口径　23.8 器高（49.0）	口縁端部を上方につまみ上げる。体部全面タタキ、内面タタキのちナデ消し。	中粒砂混入	内外面灰色
〃 - 2 (980449)	SK106	甕 （土師器）	口径（15.8）	端部は面とりされる。口縁部内外面ヨコナデ。	中粒砂混入	内外面明褐色
〃 - 3 (980448)	SK106	高杯 （土師器）	底径（11.3）	脚部はラッパ状に開く。外面タテハケ、内面ヨコハケ。	中粒砂混入	内外面明褐色
93 - 1 (980594)	SK108	甕 （土師器）	口径（16.4） 器高　22.9	端部は面取りされる。口縁部内外面ヨコナデ、肩部外面タテハケ。	金雲母混入 中～大粒砂多量混入	内外面褐色
〃 - 2 (980595)	SK108	小型広口壺 （土師器）	口径（14.4）	体部は球形、肩部外面ヨコナデ。	中粒砂混入	内面明褐色 外面褐色
94 - 1 (971838)	SK110	小型広口壺 （土師器）	口径（12.0）	体部は球形、内湾気味の短い口縁がつく。外面全面ハケ。	中粒砂混入	内外面褐色
〃 - 2 (971839)	SK110	高杯 （土師器）	口径　17.2	杯下部に稜あり、杯上部は内湾気味、内外面ヨコナデ。	中粒砂混入	内外面赤褐色
95 - 1 (980420)	SK111	甕 （土師器）	口径（14.2） 器高　22.5	口縁部は外反気味、口縁部内外面ヨコハケ、肩～胴部外面ヨコハケ。	中粒砂混入	内外面明褐色
〃 - 2 (980418)	SK111	広口壺 （土師器）	口径（18.8）	口縁部は直線的に外上方に開く。口縁部内外面ヨコナデ、肩部外面タテハケ。体下部外面ナデ消し。	中～大粒砂混入	内外面明褐色
〃 - 3 (971846)	SK111	小型広口壺 （土師器）	口径　10.9 器高　13.5	体部は球形、肩部外面ヨコハケ、下半部ナデ、口縁部内外面ヨコナデ。	細～中粒砂混入	内外面明褐色
〃 - 4 (971845)	SK111	広口壺 （土師器）	口径　15.0 器高　17.4	体部は球形、外面上半部ヨコハケ、口縁部内外面ヨコナデ。	中～大粒砂多量混入	内外面褐色
96 - 1 (980363)	SK112	高杯 （土師器）	口径　18.7	杯下部で屈曲し、口縁部は外反する。内外面ハケのちヨコナデ。	細砂混入	内面明褐色 外面黒褐色
97 - 1 (981578)	SK120	直口壺 （土師器）	口径　11.0	口縁部は外反気味、口縁部から肩部外面にかけてヨコ方向ミガキ状、口縁部内面ミガキ。	中粒砂混入	内外面明褐色
98 - 1 (981579)	SK127	甕 （土師器）	口径（13.6）	口縁部は直線的に外上方に開く。端部面とり。口縁部内外面ヨコナデ、肩部外面ハケ。	中～大粒砂混入	内面黒褐色 外面褐色
〃 - 2 (981581)	SK127	高杯 （土師器）	口径　20.6	杯下部に稜あり、口縁部は直線気味に外上方に開く。口縁部外面ナデ。	中～大粒砂多量混入	内外面明褐色

表30　集落跡出土土師器一覧表（5）

挿図-番号 (登録番号)	出土地点	器種 種別	法量 (cm)	形態・成形・調整の特徴	胎土	色調
98 - 3 (981582)	SK127	高杯 （土師器）	口径　18.8	杯下部で屈曲し、口縁部は外反する。外面ハケのちヨコナデ。	中粒砂混入	内外面明褐色
〃 - 4 (981580)	SK127	高杯 （土師器）	底径　13.1	脚部はラッパ状に開く。裾部内外面ハケのちヨコナデ。	中粒砂混入	内外面明褐色
〃 - 5 (980381)	SK127	高杯 （土師器）	底径　10.8	裾部は外方に開く。脚部外面タテハケ、裾部内外面ヨコナデ。	中粒砂混入	内面明褐色 外面赤褐色
〃 - 6 (980380)	SK127	小型丸底壺 （土師器）	口径　7.1 器高　11.6	体部は球形で口頸部は屈曲する。口縁部内外面ナデ、体部下半部ハケ。	細砂少量混入	内外面明褐色
99 - 1 (981586)	SK128	甕 （土師器）	口径　13.3 器高　19.4	胴部最大径は中位にあり。体部タテハケ、口縁部外面ヨコナデ。内面ハケ。	細砂混入	内面褐色 外面明褐色
100 - 1 (981588)	SK132	直口壺 （土師器）	口径　10.7 器高　12.6	体部は球形で口頸部は外反気味。口縁部内外面ハケのちナデ、体部上半部ハケ。	緻密	内外面黒色
〃 - 2 (981587)	SK132	鉢 （土師器）	口径　12.0 器高　8.9	底部は平底気味、体部外面ハケ、口縁部外面ハケ、内面ハケのちナデ。	中粒砂混入	内面赤褐色 外面黒褐色
〃 - 3 (981589)	SK132	鉢 （土師器）	口径　11.7 器高　7.1	平底気味、素口縁。指頭圧痕あり。口縁部外面ハケのちナデ消し。口縁部内面ハケ。	中粒砂混入	内外面褐色
〃 - 4 (981591)	SK132	鉢 （土師器）	口径　7.8 器高　6.3	平底、素口縁、口縁部はわずかに屈曲し開く。胴部ハケ、口縁部内面ヨコナデ。	中粒砂混入	内外面褐色
〃 - 5 (981590)	SK132	鉢 （土師器）	口径　4.5 器高　4.0	平底、素口縁、内面ヨコナデ。	中粒砂混入	内外面褐色
101 - 1 (980362)	SK133	甕 （土師器）	口径　15.4	口縁部は内湾する、端部面とりされ内側に肥厚する。口縁部内外面ヨコナデ。	中粒砂混入	内外面明褐色
〃 - 2 (980361)	SK133	甕 （土師器）	口径　16.2	口縁部は直線的に外上方に開く。端部面とり。口縁部内外面ハケ。	中粒砂混入	内外面褐色
102 - 1 (980382)	SK205	台付鉢 (土師器)	底径　6.5	体部は丸味をもち脚部は外反する。内外面ナデ。	中粒砂混入	内外面明褐色
103 - 1 (980532)	SK220	小型広口壺 （土師器）	口径（12.6）	外面ハケ、口縁部内面ハケ。	中粒砂混入	内面黒褐色 外面褐色
〃 - 2 (980533)	SK220	小型広口壺 （土師器）		外面タテハケ。	中粒砂混入	内外面黒褐色
104 - 1 (980354)	SK228	甕 （土師器）	口径　17.6	口縁部内湾気味、肩部外面部分的にナナメハケ、他タテハケ。煤付着。	中粒砂混入	内面褐色 外面黒褐色
〃 - 2 (980355)	SK228	甕 （土師器）	口径　16.5	口縁部は直線的に外上方に開く。端部面とり。口縁部内外面、体部外面ナデ。煤付着。	細砂混入	内面褐色 外面黒褐色
〃 - 3 (980353)	SK228	甕 （土師器）	口径　16.7	口縁部は直線的に外上方に開く。端部面とり。口縁部外面ナナメハメのちヨコナデ。	中粒砂混入	内面褐色 外面黒褐色
〃 - 4 (980352)	SK228	小型広口壺 （土師器）	口径　10.1 器高　8.9	体部は丸味をもつ。肩部～口縁部外面はヨコナデ、口縁部内面、体下半部外面はハケ。	緻密	内外面褐色
105 - 1 (980534)	SK232	甕 （土師器）	口径　16.1	口縁部は直線的に外上方に開く。端部面とり。口縁部外面ナデのちハケ。内面ハケ。	細～中粒砂混入	内外面明褐色
106 - 1 (980383)	SE251	甕 （土師器）	口径　15.2	口縁端部は内側上方に肥厚する。肩部外面波状ハケ。肩部内面ヨコナデ。	細～中粒砂混入	内外面明橙色
〃 - 2 (980350)	SE251	甕 （土師器）	口径　17.6 器高　23.9	口縁部は外反する。体部中位はヘラケズリ、他ハケ、体部外面下半部はナデ消し。	細～中粒砂混入	内外面明褐色
〃 - 3 (980351)	SE251	二重口縁壺 （土師器）	口径（11.8）	口縁部内外面ヨコナデ。	細砂混入	内外面黄褐色
〃 - 4 (980541)	SE251	鉢 （土師器）	口径　6.0 器高　7.2	平底で素口縁、内面指ナデ。	細～中粒砂混入	内外面黒褐色
〃 - 5 (980540)	SE251	鉢 （土師器）	底径　3.8	平底、内面指ナデ。	細～中粒砂混入	内外面黒褐色
〃 - 6 (980535)	SE251	鉢 （土師器）	口径（2.4） 器高　3.5	丸底気味、素口縁、内面指ナデ。	中～大粒砂混入	内外面明褐色
〃 - 7 (980547)	SE251	鉢 （土師器）	口径　3.8 器高　3.0	丸底、素口縁。	中～大粒砂混入	内外面明褐色
〃 - 8 (980538)	SE251	鉢 （土師器）	底径　3.5	平底、体部部分的にハケ。	中粒砂少量混入	内外面黒褐色
〃 - 9 (980542)	SE251	鉢 （土師器）	底径　1.3	平底、体部部分的にハケ。	中粒砂少量混入	内外面黒褐色
〃 - 10 (980539)	SE251	鉢 （土師器）	口径　5.0 器高　5.1	体部は丸味をもち口縁部は短く直立する。内面指ナデ。	細～中砂混入	内外面黒褐色
〃 - 11 (980546)	SE251	鉢 （土師器）	口径　4.8 器高　5.1	体部は丸味をもち口縁部は短く直立する。内面指ナデ。	細砂混入	内外面黒褐色

表31　集落跡出土土師器一覧表（6）

挿図-番号 (登録番号)	出土地点	器種 種別	法量 (cm)	形態・成形・調整の特徴	胎土	色調
106 - 12 (980545)	SE251	鉢 （土師器）	口径　4.0 器高　4.7	体部は丸味をもち口縁部は短く直立する。内面指ナデ。	細～中砂混入	内外面黒褐色
〃 - 13 (980544)	SE251	鉢 （土師器）	口径　3.6 器高　4.0	体部は丸味をもち口縁部は短く直立する。内面指ナデ。	細～中砂混入	内外面黒褐色
〃 - 14 (980537)	SE251	鉢 （土師器）	底径　2.6	平底、内面指ナデ。	細砂混入	内外面明褐色
〃 - 15 (980536)	SE251	鉢 （土師器）		平底気味。側面一部残存。	中粒砂混入	内外面黒褐色
〃 - 16 (980543)	SE251	鉢 （土師器）	底径　3.2	平底で体部は垂直にたちあがる。	中粒砂混入	内外面黒褐色
〃 - 17 (980548)	SE251	器台 （土師器）	口径　3.4 器高　4.3	指頭にて成形、ミニチュア土器。	中～大粒砂混入	内外面明褐色
108 - 1 (981594)	SD115	甕 （土師器）	口径（16.6）	口縁部は内湾し、端部面とり。口縁部内外面ヨコナデ。	中粒砂混入	内面褐色 外面黒褐色
〃 - 2 (981681)	SD115	甕 （土師器）	口径（15.2）	肩部外面ハケ、口縁部内外面ヨコナデ。端部面とり。	細～中粒砂混入	内外面明褐色
〃 - 3 (980334)	SD115	甕 （土師器）	口径（16.9）	肩部外面ヨコハケ、端部は内傾した面とり。	中粒砂粒多量混入	内外面黒褐色
〃 - 4 (981649)	SD115	甕 （土師器）	口径（16.6）	口縁部外反気味、端部面取り。口縁部内外面ヨコナデ、肩部外面タテハケ。	金雲母混入 細～中粒砂混入	内外面明褐色
〃 - 5 (980335)	SD115	甕 （土師器）	口径　17.2	肩上半部外面ハケのちナデ消し。下半部ヨコハケ。端部面とり。	中～大粒砂混入	内外面褐色
〃 - 6 (981639)	SD115	甕 （土師器）	口径　15.6	肩上半部外面ハケのちナデ消し、口縁部内外面ヨコナデ、端部面とり。	中～大粒砂混入	内外面明褐色
〃 - 7 (981652)	SD115	甕 （土師器）	口径（17.4）	体部外面ハケ、肩部はヨコハケ。口縁部内外面ヨコナデ。	中～大粒砂混入	内面明褐色 外面褐色
〃 - 8 (980336)	SD115	甕 （土師器）	口径（17.3）	口縁部は内湾気味、端部面とり。肩上半部外面ナハケのちナデ消し。下半部ヨコハケ。	中～大粒砂混入	内面明褐色 外面褐色
〃 - 9 (981625)	SD115	甕 （土師器）	口径（16.4）	肩部外面タテハケ、口縁部内外面ヨコナデ。端部面とり。	大粒砂混入	内外面明褐色
〃 - 10 (981607)	SD115	甕 （土師器）	口径　12.0 器高　16.7	胴部最大径は下位より、体部上半部ハケ、下半部ハケのちナデ。口縁部内外面ナデ。	中粒砂混入	内外面明褐色
109 - 11 (981654)	SD115	甕 （土師器）	口径　15.0 器高　23.4	胴部最大径は中位にあり。体部外面ハケ、下半部ハケのちナデ消し。	中粒砂混入	内外面赤褐色
〃 - 12 (981614)	SD115	甕 （土師器）	口径　15.0 器高　23.9	口縁部内湾気味。口縁部外面ナデ、内面ハケ、肩部外面ハケのちナデ、体部ハケ。	中～大粒砂混入 細～中粒砂混入	内外面褐色
〃 - 13 (980331)	SD115	甕 （土師器）	口径（14.1）	肩上半部外面ハケのちナデ消し。端部は丸味をもつ。	中粒砂混入	内面明褐色 外面黒褐色
〃 - 14 (981657)	SD115	甕 （土師器）	口径（13.0）	肩部外面ハケのちヨコナデ、口縁部内外面ヨコナデ、端部は丸味をもつ。外面煤付着。	中粒砂混入	内外面褐色
〃 - 15 (980531)	SD115	甕 （土師器）	口径（17.4）	肩上半部ハケのちナデ消し、下半部ハケ。口縁部外面ナデ、内面ハケ。	中粒砂多量混入	内外面黒褐色
〃 - 16 (980333)	SD115	甕 （土師器）	口径（14.3）	口縁部は内湾気味、肩部外面ナナメハケのちナデ消し。	中粒砂混入	内外面褐色
〃 - 17 (981663)	SD115	甕 （土師器）	口径（17.0）	体部外面上半部ハケ、肩部はヨコ方向、口縁部内外面ヨコナデ。	中粒砂混入	内外面褐色
〃 - 18 (981682)	SD115	甕 （土師器）	口径（11.8）	口縁部は短く上外方に開く。肩部外面ナナメハケ。	中粒砂混入	内外面褐色
〃 - 19 (981596)	SD115	甕 （土師器）	口径（16.0）	肩部外面ハケのちヨコナデ、口縁部内外面ヨコナデ。端部は丸味をもつ。	細～中粒砂混入	内面黒褐色 外面褐色
〃 - 20 (981653)	SD115	甕 （土師器）	口径　18.1 器高　24.7	口縁部若干内湾、体部は球形で外面全面ハケ。口縁部内外面ヨコナデ。体部下半部煤付着。	中～大粒砂混入	内外面明褐色
〃 - 21 (981664)	SD115	甕 （土師器）	口径　15.6	口縁部は外反気味、端部面取り。肩部外面上半部ハケのちヨコナデ、他ハケ、煤付着。	金雲母混入 中粒砂混入	内外面明褐色
〃 - 22 (981616)	SD115	甕 （土師器）	口径　16.5	口縁端部は丸味をもつ。口縁部内外面ハケのちヨコナデ。肩部外面タテ、部分的にヨコハケ。	中～大粒砂混入	内面黒褐色 外面明褐色
〃 - 23 (981640)	SD115	甕 （土師器）	口径（18.4）	肩部外面ヨコハケ、口縁部内外面ハケのちヨコナデ、端部は丸味をもつ。	中～大粒砂混入	内面黒褐色 外面褐色
〃 - 24 (981598)	SD115	甕 （土師器）	口径　16.6 器高　27.0	体部中位はハケ、ほかハケのちナデ消し。口縁部内外面ヨコナデ。	金雲母混入	内外面橙色
〃 - 25 (981641)	SD115	甕 （土師器）	口径（19.0）	体部外面ハケ、口縁部内外面ヨコナデ。端部面とり。	中～大粒砂混入	内外面褐色

表32　集落跡出土土師器一覧表（7）

挿図-番号 (登録番号)	出土地点	器種 種別	法量 (cm)	形態・成形・調整の特徴	胎土	色調
110 - 26 (981672)	SD115	甕 （土師器）	胴径（24.4）	体部外面中～上半部ハケ、下半部ナデ消し。	細～中粒砂混入	内面褐色 外面黄褐色
111 - 27 (981645)	SD115	甕 （土師器）	口径（14.6）	口縁端部は丸味をもつ。体部外面中位ハケ、他ハケのちナデ消し。煤付着。	金雲母混入 中～大粒砂混入	内外面明褐色
〃 - 28 (981662)	SD115	甕 （土師器）	口径　15.0	口縁端部は丸味をもつ。口縁部内外面ヨコナデ。肩部外面タテハケ。煤付着。	中粒砂多量混入	内外面明褐色
〃 - 29 (981661)	SD115	甕 （土師器）	口径（15.6）	肩部外面ハケのちナデ、口縁部内外面ヨコナデ。	細砂混入	内外面褐色
〃 - 30 (981609)	SD115	甕 （土師器）	口径（13.2）	口縁部は内湾気味に直立、口縁部内外面ヨコナデ、肩部外面ハケのちナデ。	中～大粒砂混入	内外面明褐色
〃 - 31 (981604)	SD115	甕 （土師器）	口径（15.4）	口縁部は外反気味、口縁部ハケのちナデ。体部外面ハケ。煤付着。	細～中粒砂混入	内外面明褐色
〃 - 32 (980330)	SD115	広口壺 （土師器）	口径　17.0	口縁部外反、端部面とり。肩部外面ヨコハケ。	中粒砂混入	内外面褐色
〃 - 33 (981632)	SD115	広口壺 （土師器）	口径（18.4）	端部は面とり気味。口縁部内外面ナデ。	細～中粒砂混入	内外面明褐色
〃 - 34 (980332)	SD115	広口壺 （土師器）	口径（16.4）	口縁部外反気味、端部面取り。口縁部内外面ハケのちヨコナデ、肩部外面タテハケ。	中粒砂混入	内外面褐色
〃 - 35 (981670)	SD115	広口壺 （土師器）	口径（15.4）	口縁部外反、端部面とり。肩部外面ハケのちヨコナデ。	中粒砂混入	内面明褐色
112 - 36 (981646)	SD115	二重口縁壺 （土師器）	口径　19.5	口縁部下端に断面三角形の稜あり。肩部外面ヨコハケ、口頸部内外面ハケのちナデ。	中～大粒砂混入	内面明褐色 外面褐色
〃 - 37 (981595)	SD115	広口壺 （土師器）	口径（21.0）	長頸で端部面とり。肩部外面ハケのちナデ。口縁部ヨコナデ。	細砂混入	内外面明褐色
〃 - 38 (981651)	SD115	直口壺 （土師器）	口径（13.0）	長頸で端部面とり。肩部外面ハケのちナデ。口縁部ヨコナデ。	金雲母混入 中粒砂混入	内面明褐色 外面褐色
〃 - 39 (981603)	SD115	直口壺 （土師器）	口径（12.2）	口縁部わずかに内湾気味、口縁部外面ハケのちナデ、内面ナデ。	中粒砂混入	内外面明褐色
〃 - 40 (981680)	SD115	直口壺 （土師器）	口径（ 9.0）	口縁部は直線的に外上方に開く。口縁部内外面ヨコナデ。	細砂混入	内外面明褐色
〃 - 41 (980339)	SD115	広口壺 （土師器）	口径　15.9	口縁部は外反する。内外面ヨコナデ。	細砂混入	内外面明橙色
〃 - 42 (981611)	SD115	二重口縁壺 （土師器）	口径　10.4	頸部で屈曲、口縁端部面とり。口縁部内外面ハケ、肩部外面ハケ。	中～大粒砂混入	内外面明褐色
〃 - 43 (981622)	SD115	鉢 （土師器）	口径　16.6 器高　7.9	丸底で口縁部は内湾気味に外上方に開く。内外面粗いハケ。	中粒砂混入	内外面赤褐色
〃 - 44 (981623)	SD115	鉢 （土師器）	口径　15.8 器高（ 7.5）	底部外面粗いハケ、口縁部外面ハケのちナデ、内面ハケ？。	中粒砂混入	内外面赤褐色
〃 - 45 (981674)	SD115	鉢 （土師器）	口径（14.4）	口縁部は内湾する。内外面ナデ。	中粒砂少量混入	内面橙色 外面明褐色
〃 - 46 (981671)	SD115	鉢 （土師器）	口径　10.5 器高　6.6	平底で口縁部は外上方に開く。底部外面ヘラケズリ、口縁部内面ハケ。	中粒砂混入	内外面橙色
〃 - 47 (981601)	SD115	鉢 （土師器）	口径（11.6）	底部外面ヘラケズリ、口縁部ハケ。４７と同一個体か。	中粒砂混入	内外面橙色
〃 - 48 (981675)	SD115	鉢 （土師器）	口径　7.1	口縁部は指頭にて成形、平底気味。内外ナデ。	中粒砂少量混入	内外面明褐色
〃 - 49 (981608)	SD115	有孔鉢・甑 （土師器）	口径（16.6） 器高　7.8	体部下位で屈曲する、底部に楕円形の孔を穿つ。内外面ナデ。	中粒砂混入	内外面橙色
〃 - 50 (981613)	SD115	有孔鉢・甑 （土師器）	底径（ 7.9）	平底気味、底部に方形の孔を穿つ。外面ハケ。	中～大粒砂混入	内外面褐色
113 - 51 (981606)	SD115	小型丸底壺 （土師器）	口径（11.0） 器高　7.6	胴径より口径が大きい。口縁部内外面ハケのちナデ消し。	細砂混入	内外面明橙色
〃 - 52 (981635)	SD115	小型丸底壺 （土師器）	口径（10.4）	口縁部～体部上半部外面タテハケ、下半部ハケのちナデ消し。口縁部内面ハケ。	中粒砂少量混入	内外面褐色
〃 - 53 (981656)	SD115	小型丸底壺 （土師器）	口径　11.6 器高　10.0	口縁端部面とり。体部外面中～下半部ハケ、肩部～口縁部外面ナデ、内面ハケのちナデ。	中粒砂少量混入	内外面褐色
〃 - 54 (981667)	SD115	小型丸底壺 （土師器）	口径　8.7 器高　9.5	口径より胴径が大きい。外面ナデ、口縁部内面ハケのちナデ。	細～中粒砂混入	内外面明橙色
〃 - 55 (981618)	SD115	小型丸底壺 （土師器）	胴径　8.7	体部外面ナデ。	細砂少量混入	内面褐色 外面明褐色
〃 - 56 (981644)	SD115	小型広口壺 （土師器）	口径（12.2） 器高　10.1	口縁端部面とり。口縁部内外面ヨコナデ、体部全面ハケ。外面煤付着、内面炭化物付着。	中～大粒砂混入	内面黒褐色 外面黄褐色

表33　集落跡出土土師器一覧表（8）

挿図-番号 (登録番号)	出土地点	器種 種別	法量 (cm)	形態・成形・調整の特徴	胎土	色調
113 - 57 (981610)	SD115	小型広口壺 （土師器）	口径（11.0） 器高　9.6	体部外面中～下半部ハケ、肩部ハケのちナデ、口縁部ナデ。	細～中粒砂混入	内外面明褐色
〃 - 58 (981624)	SD115	小型広口壺 （土師器）	口径（11.0） 器高　8.9	口縁部は緩やかに外上方に開く。体部外面ハケのちナデ。口縁部内外面ナデ。	中粒砂混入	内外面褐色
〃 - 59 (981665)	SD115	小型広口壺 （土師器）	口径（ 9.8）	体部は球形。体部ハケ、口縁部内外面ヨコナデ。	中粒砂少量混入	内外面明褐色
〃 - 60 (981615)	SD115	小型広口壺 （土師器）	口径（10.6） 器高　10.7	体部外面ハケのちナデ消し。	緻密	内外面橙色
〃 - 61 (981648)	SD115	小型広口壺 （土師器）	口径　12.0 器高　11.6	胴部最大径は中位。体部外面全面ハケ。煤付着、内面炭化物付着。	金雲母混入 中粒砂少量混入	内面明褐色 外面黒褐色
〃 - 62 (981676)	SD115	小型広口壺 （土師器）	口径　11.7 器高　12.5	胴部最大径は上位より。体部外面上半部ハケのちナデ。	中粒砂混入	内外面褐色
〃 - 63 (981658)	SD115	小型広口壺 （土師器）	口径（12.6）	体部外面ハケのちナデ、口縁部内外面ナデ。	中粒砂混入	内外面褐色
〃 - 64 (981669)	SD115	小型広口壺 （土師器）	胴径（10.6）	頸部直立、体部ハケ、口頸部内面ハケ。	細～中粒砂混入	内面褐色 外面明褐色
〃 - 65 (981668)	SD115	小型広口壺 （土師器）	口径（14.0）	口縁部～肩部外面ハケ、体部下半部ナデ消し。口縁部内面ハケ。	中粒砂混入	内面黒褐色 外面明褐色
〃 - 66 (981683)	SD115	小型広口壺 （土師器）	口径（11.6）	口縁部直立気味。肩部外面タテハケ、胴部外面ヨコハケ、口縁部内外面ヨコナデ。	細砂少量混入	内面褐色 外面赤褐色
〃 - 67 (981666)	SD115	小型広口壺 （土師器）	口径（13.8） 器高　12.0	口縁部～肩部外面ハケのちナデ。体部下半部ハケ。口縁部内面ハケ。	中粒砂混入	内面褐色 外面明褐色
114 - 68 (981627)	SD115	高杯 （土師器）	口径（19.0） 器高　14.5	杯部下位よりにわずかな稜あり、口縁部外反。背部内面ハケのちナデ。外面ナデ消し。	緻密	内外面明橙色
〃 - 69 (981637)	SD115	高杯 （土師器）	口径（17.0）	杯部中位にわずかな稜あり、内外面ナデ。	緻密	内外面橙色
〃 - 70 (981660)	SD115	高杯 （土師器）	口径（15.2）	口縁は外上方に屈曲する。杯下部に稜あり。内外面ナデ。杯底部内面ハケ。	細砂少量混入	内外面明橙色
〃 - 71 (981628)	SD115	高杯 （土師器）	口径（19.0） 器高　13.0	杯部下位よりで屈曲、口縁部内外面ナデ。杯底部ヘラケズリ。	中粒砂混入	内外面褐色
〃 - 72 (981633)	SD115	高杯 （土師器）	口径（17.2） 器高（14.0）	杯部中位に稜あり。口縁部外面、裾部外面ハケのちナデ。	緻密	内外面橙色
〃 - 73 (981677)	SD115	高杯 （土師器）	口径　22.4 器高　14.7	脚部はラッパ状に開く。杯部下位に稜あり。口縁部外面、裾部外面ハケのちナデ。	細～中粒砂混入	内外面明褐色
〃 - 74 (981626)	SD115	高杯 （土師器）	口径　19.9	杯部下位よりに稜あり、口縁部は外反する。口縁部内外面ハケのちナデ消し。杯底部外面ケズリ。	中粒砂混入	内外面褐色
〃 - 75 (981678)	SD115	高杯 （土師器）	口径（18.2）	杯部下位よりに稜あり、口縁端部は内側にわずかに肥厚する。内外面ナデ。	緻密	内外面明橙色
〃 - 76 (980338)	SD115	高杯 （土師器）	口径（17.6）	杯部下位よりに稜あり、口縁部は外反する。内外面ナデ。	中粒砂少量混入	内外面橙色
〃 - 77 (981619)	SD115	高杯 （土師器）	口径（19.4）	杯部下位よりに稜あり、口縁部は内湾気味、口縁端部は外反する。杯外面ハケのちナデ消し。	中粒砂少量混入	内外面褐色
〃 - 78 (981599)	SD115	高杯 （土師器）	口径　20.0	杯部下位よりに稜あり、口縁部外反。口縁部内外面ハケのちナデ。杯底部外面ヘラケズリ。	中粒砂混入	内外面褐色
〃 - 79 (980337)	SD115	高杯 （土師器）	口径（17.6）	杯部下位で屈曲、口縁部は外反する。杯部内外面ナデ。	中粒砂少量混入	内外面橙色
〃 - 80 (981679)	SD115	高杯 （土師器）	口径（15.0）	杯部下位よりに稜あり。杯部内面ハケのちナデ。外面ナデ。	中粒砂少量混入	内外面褐色
〃 - 81 (981634)	SD115	高杯 （土師器）	口径（16.2）	杯部中位で屈曲、口縁部は外反。口縁部内外面ナデ。	細砂少量混入	内外面橙色
〃 - 82 (981612)	SD115	高杯 （土師器）		脚柱部のみ残存、外面ハケのちナデ。	中粒砂混入	内外面明褐色
〃 - 83 (981659)	SD115	高杯 （土師器）	底径　12.0	裾部は外反し外方に開く。内外面ナデ。	中～大粒砂混入	内外面褐色
〃 - 84 (981636)	SD115	高杯 （土師器）	底径　10.1	裾部は外方に開く。脚部中位がわずかにふくらむ。内外面ナデ。	細～中粒砂混入	内外面褐色
〃 - 85 (981655)	SD115	高杯 （土師器）	底径　10.6	裾部は外方に開く。脚柱部外面ハケのちナデ、裾部内外面ハケ。	細砂混入	内面黒褐色 外面褐色
〃 - 86 (981602)	SD115	高杯 （土師器）	底径　12.8	裾部は外方に開く。内外面ナデ。	細～中砂粒混入	内外面橙色
〃 - 87 (981617)	SD115	高杯 （土師器）		脚柱部内面丁寧なケズリ。内外面ナデ。	中粒砂混入	内外面明褐色

表34　集落跡出土土師器一覧表（9）

挿図-番号 (登録番号)	出土地点	器種 種別	法量 (cm)	形態・成形・調整の特徴	胎土	色調
114 - 88 (981647)	SD115	高杯 （土師器）	底径　11.2	裾部は外方に開く。外面タテ方向ナデ、内面ナデ。	中粒砂混入	内外面明褐色
〃 - 89 (981650)	SD115	高杯 （土師器）	底径　14.0	脚部はラッパ状に開く。脚部内面ハケ、裾部内面ハケのちナデ。	金雲母混入 細砂混入	内外面明褐色
〃 - 90 (981621)	SD115	高杯 （土師器）	底径　10.4	脚部は外反して開く。外面ハケのちナデ、内面ナデ。	中粒砂混入	内外面橙色
〃 - 91 (981620)	SD115	高杯 （土師器）	底径（10.4）	脚部は外反気味に開く。脚柱部外面ハケ、裾部内外面ナデ。	中粒砂混入	内外面橙色
115 - 1 (980365)	SD138	高杯 （土師器）	底径　11.8	脚柱部はエンタシス状、外面ハケのち下半部はナデ消し。	中粒砂混入	内外面明褐色
〃 - 2 (980364)	SD138	小型丸底壺 （土師器）	胴径　9.6	胴部最大径は中位で肩部外面タテハケ、胴部ヨコハケ。底部ハケのちナデ消し。	中粒砂混入	内外面橙色
116 - 1 (971810)	B - 3 6，7層	甕 （土師器）	口径（17.0）	口縁部は内湾気味、口縁端部は面とりされ内側にわずかに肥厚する。肩部外面下半部ヨコハケ。	中粒砂混入	内外面明褐色
〃 - 2 (981631)	D - 5 6，7層	甕 （土師器）	口径（16.6）	口縁部は直線的に外上方に開く。肩部外面下半部ナナメハケ、上半部ハケのちナデ。	中～大粒砂混入	内外面明褐色
〃 - 3 (971809)	B - 3 6，7層	甕 （土師器）	口径（18.0）	口縁部は内湾気味、口縁端部は面とりされ内側にわずかに肥厚する。肩部外面下半部ヨコハケ。	中粒砂混入	内外面褐色
〃 - 4 (971813)	B - 3 6層	甕 （土師器）	口径（15.8）	口縁部は内湾気味、口縁端部は面とりされ内側にわずかに肥厚する。肩部ヨコハケ。	中粒砂混入	内面褐色 外面黒褐色
〃 - 5 (980376)	D -10	甕 （土師器）	口径（19.3）	口縁部は内湾気味、口縁端部は面とりされ内側に肥厚する。肩部タテのちヨコハケ。	細～中粒砂混入	内外面明褐色
〃 - 6 (980422)	D - 6	甕 （土師器）	口径　18.6	口縁端部は面とりされ内側にわずかに肥厚する。肩部外面ハケのちナデ消し。	中～大粒砂混入	内外面橙色
〃 - 7 (971834)	E - 9 1～4層	甕 （土師器）	口径（17.4）	口縁部はわずかに内湾し、端部面とり。肩部外面ヨコハケ。胴部タテハケ。	中粒砂多量混入	内外面黄褐色
〃 - 8 (971819)	6～7層	甕 （土師器）	口径（14.4）	口縁端部は面とり気味で内側にわずかに肥厚する。体部外面ハケ。煤付着。	中粒砂混入	内外面明橙色
〃 - 9 (980556)	E -10 6，7層	甕 （土師器）	口径（17.6）	口縁端部は丸味をもつ。肩部外面タテハケ、口縁部内面ハケのちナデ。体部内面ケズリのちナデ。	中粒砂少量混入	内面褐色 外面明橙色
〃 - 10 (980413)	E - 8 6層	甕 （土師器）	口径（15.0）	口縁端部面とり、肩部外面ナナメハケ、口縁部内外面ハケのちナデ。	中粒砂混入	内面明褐色 外面黒褐色
〃 - 11 (981700)	P 2191	甕 （土師器）	口径（13.8）	口縁部は直線的に外上方に開く。口縁端部面とり。肩部外面ヨコハケ。煤付着。	中～大粒砂混入	内面明褐色 外面黒褐色
117 - 12 (970274)	D - 4 6，7層	甕 （土師器）	口径（26.0）	口縁端部面とり、肩部外面ハケ、口縁部内外面ハケのちナデ。	中粒砂混入	内面明褐色 外面黒褐色
〃 - 13 (970290)	E - 1 1～4層	甕 （土師器）	口径（13.8）	肩部外面下半部から胴部にかけて粗いヨコハケ、口縁部内面ハケのちナデ。	中粒砂混入	内外面明橙色
〃 - 14 (971853)	B - 4 6層	甕 （土師器）	口径（11.4）	口縁端部面とり。口縁部内外面、肩部外面ナデ。	中粒砂混入	内外面明褐色
〃 - 15 (970294)	C - 4	甕 （土師器）	口径　16.4	口縁部は波うつ。体部全面タテハケ、口縁部内外面ハケのちナデ。	中～大粒砂多量混入	内外面黄褐色
〃 - 16 (980555)	D - 8 6層	甕 （土師器）	口径（18.2）	口縁端部面とり、肩部外面ハケ、口縁部内外面ヨコナデ、体部内面ケズリのちナデ消し。煤付着。	中粒砂混入	内外面明褐色
〃 - 17 (970283)	C，D - 1 7層	甕 （土師器）	口径（18.5）	口縁端部面とり、肩部外面ハケ、口縁部内外面ヨコナデ、体部内面ケズリのちナデ消し。	大粒砂混入	内外面赤褐色
〃 - 18 (971787)	D - 4	甕 （土師器）	口径（17.8）	口縁部外反、端部とり。肩部外面タテハケ、口縁部内面ハケのちナデ。	中粒砂混入	内外面褐色
〃 - 19 (980401)	6，7層	甕 （土師器）	口径（17.6）	口縁端部は面とり気味。肩部外面タテハケ、口縁部内外面ヨコナデ。	中粒砂混入	内面褐色 外面赤褐色
〃 - 20 (980412)	E - 8 6層	甕 （土師器）	口径（16.7）	口縁部は外反、端部面とり。肩部外面ハケ、口縁部内外面ハケのちナデ。	細砂少量混入	内外面明褐色
〃 - 21 (980405)	D - 4	甕 （土師器）	口径（15.4）	口縁端部面とり気味。肩部外面ハケのちナデ、口縁部内外面ハケのちナデ。	金雲母混入 中～大粒砂混入	内外面褐色
〃 - 22 (980558)	6，7層	甕 （土師器）	口径（16.2）	口縁部は外反気味。肩部外面タテハケ、口縁部内外面ハケのちナデ。	中粒砂少量混入	内面明褐色 外面黒褐色
〃 - 23 (980409)	C - 4 6層	甕 （土師器）	口径（16.4）	口縁部は外反。肩部外面タテハケ、口縁部内面ハケのちナデ。外面ナデ。	細砂混入	内外面明褐色
〃 - 24 (971805)	6層	甕 （土師器）	口径（13.6）	口縁端部面とり。体部外面粗いヨコハケ、口縁部内面ハケのちナデ。外面ナデ。煤付着。	中粒砂混入	内外面褐色
〃 - 25 (971811)	B - 3 6，7層	甕 （土師器）	口径（17.6）	口縁部は直立気味で端部は若干外反。肩部外面ハケのちナデ消し、口縁部内外面ハケのちナデ。	細砂少量混入	内面褐色 外面明褐色

表35　集落跡出土土師器一覧表（10）

挿図-番号 (登録番号)	出土地点	器種 種別	法量 (cm)	形態・成形・調整の特徴	胎土	色調
118 - 26 (970300)	6層	甕 （土師器）	口径（16.4）	口縁端部は丸味をもつ。口縁部内外面ハケのちナデ。	中粒砂混入	内面黄褐色 外面明褐色
〃 - 27 (970302)	E - 9 1 ～ 4 層	甕 （土師器）	口径（14.0）	口縁端部は丸味をもつ。口縁部内外面ハケのちナデ、肩部外面ナナメハケ。	中粒砂少量混入	内外面明褐色
〃 - 28 (970282)	B - 5 6 層	甕 （土師器）	口径（14.0）	口縁端部面とり。口縁部内面ハケのちナデ、外面ナデ、肩部外面ヨコハケ。	中粒砂少量混入	内外面明褐色
〃 - 29 (970293)	D - 5 6 層	甕 （土師器）	口径（16.4）	口縁端部面とり気味、口縁部内外面ナデ、体部外面タテハケ。	金雲母混入 細～中粒砂混入	内面明褐色 外面橙色
〃 - 30 (980366)	E，F，G-2 コモ層直下	甕 （土師器）	口径（20.3）	口縁端部は丸味をもつ。口縁部内外面ナデ。	金雲母混入 細砂混入	内面黒褐色 外面褐色
〃 - 31 (970305)	E - 9 1 ～ 4 層	甕 （土師器）	口径（20.2）	胴部最大径は下位にある。口縁部～胴部外面タテハケ、口縁部内面ヨコハケ。	中粒砂多量混入	内面黒褐色 外面褐色
〃 - 32 (971822)	D - 4	二重口縁壺 （土師器）	口径（18.2）	口縁部下端外面は断面三角形の稜がつく。口縁端部面とり。体部外面ハケのちナデ消し。	細～中粒砂混入	内面褐色 外面明褐色
〃 - 33 (980410)	C - 4 6 層	二重口縁壺 （土師器）		口縁部を欠損。体部外面ヨコハケのちナデ消し。	細砂混入	内外面黄褐色
〃 - 34 (971823)	D - 4	二重口縁壺 （土師器）	口径（26.0）	口縁部下端外面はナデにより稜をつくる。肩部外面ヨコハケ。体部内面ケズリのちナデ。	中粒砂混入	内外面明褐色
〃 - 35 (971779)	C，D - 2 7 層	二重口縁壺 （土師器）	口径（22.7）	口縁端部は面とりされ外側に肥厚する。口縁部下端外面はナデにより稜をつくる。口縁部内外面ナデ。	中粒砂混入	内面褐色 外面明褐色
〃 - 36 (990331)	E - 3	二重口縁壺 （土師器）	口径（10.7）	外面ハケ、のち肩部のみナデ消し。頸部内面ハケ。	中粒砂混入	内外面明褐色
119 - 37 (970288)	表土	広口壺 （土師器）	口径（18.2）	口縁部は外反し端部は丸味をもつ。口縁部～肩部外面ハケのちナデ。	細砂混入	内外面明褐色
〃 - 38 (970306)	E - 9 1 ～ 4 層	広口壺 （土師器）	口径（14.6）	口縁部は外反し端部は丸味をもつ。口縁部内外面ナデ、肩部外面ハケ。	中粒砂混入	内外面黄褐色
〃 - 39 (971814)	B - 4 6，7 層	広口壺 （土師器）	口径（20.0）	口縁端部は面とりされる。口縁部内面ハケのちナデ。肩部外面ハケのちナデ。	細砂混入	内外面明褐色
〃 - 40 (980414)	D - 5 6，7 層	広口壺 （土師器）	口径（16.6）	口縁端部面とり、口縁部～肩部外面ヨコハケ。のち口縁部外面のみヨコナデ、口縁部内面ナデ。	中粒砂混入	内外面明褐色
〃 - 41 (971818)	D - 4	広口壺 （土師器）	口径（17.4）	口縁端部は面とりされる。口縁部外面ハケのちナデ。口縁部内面ナデ。	中～大粒砂混入	内外面明褐色
〃 - 42 (980404)	C - 3	壺 （土師器）	口径　12.6	口縁部内外面ハケのちナデ。体部外面タテハケ。	中粒砂混入	内外面明褐色
〃 - 43 (971768)	表土	壺 （土師器）	口径（12.6）	口頸部外面ハケのちナデ。内面ナデ。	金雲母混入 中粒砂混入	内外面褐色
〃 - 44 (970285)	D - 4 7 層	壺 （土師器）	口径（25.8）	口頸部は長く外上方に開く。口頸部内面ハケのちナデ。外面ナデ。	中～大粒砂少量混入	内面明褐色 外面明橙色
〃 - 45 (971855)	C - 4 6 層	直口壺 （土師器）	口径（10.4）	口頸部外面ハケのちナデ。内面ハケ。体部外面ハケ。	中～大粒砂混入	内面褐色 外面明褐色
〃 - 46 (971825)	D - 4	直口壺 （土師器）	口径（ 8.1） 器高（14.2）	体部は球形。肩部外面タテハケ、口縁部内外面ハケのちナデ。	中粒砂少量混入	内外面明褐色
120 - 47 (971765)	表土層	小型丸底壺 （土師器）	口径　10.0 器高　8.4	胴部最大径は上位より。口縁部内外面ナデ、体部外面ミガキ状。	中粒砂混入	内面黒褐色 外面褐色
〃 - 48 (971856)	P 2062	小型丸底壺 （土師器）	口径　12.4 器高　9.9	胴部最大径は上位より。口縁部内外面ナデ、体部外面ハケ。	中～大粒砂混入	内外面明褐色
〃 - 49 (980370)	G - 3 コモ層	小型丸底壺 （土師器）	胴径（ 7.9）	口縁部内外面ナデ。体部外面ナデ。	細砂混入	内外面褐色
〃 - 50 (980421)	D - 6	小型丸底壺 （土師器）	胴径（ 8.2）	口径が胴径より若干大きい。口縁部内外面ナデ、体部外面ハケのちナデ消し。体部器壁剥落。	細砂混入	内外面橙色
〃 - 51 (981697)	D - 9 6 層	小型丸底壺 （土師器）	口径（ 9.1） 器高　9.3	口径より胴径が若干大きい。口縁部外面～体部外面ハケ、口縁部内面ハケ。	細～中粒砂混入	内面黒褐色 外面明褐色
〃 - 52 (980552)	C - 3	小型丸底壺 （土師器）	口径（ 8.0） 器高　9.6	口径より胴径が大きい。肩部外面ハケ、胴部外面ハケのちナデ消し。口縁部内面ハケ。	細～中粒砂混入	内面褐色 外面明褐色
〃 - 53 (971848)	P 2095	小型丸底壺 （土師器）	口径　7.8 器高　9.2	口径より胴径が大きい。口縁部外面～体部外面ハケのちナデ消し。	中～大粒砂多量混入	内面褐色 外面明橙色
〃 - 54 (980424)	F - 3 6 層	小型丸底壺 （土師器）	口径　8.0 器高　9.8	口径より胴径が大きい。体部外面ハケのちナデ、口縁部内外面ナデ。	細～中粒砂混入	内外面明褐色
〃 - 55 (971827)	D - 5 6，7 層	小型丸底壺 （土師器）	口径（ 9.5） 器高　10.9	口縁部は直立気味、体部は球形。口縁部外面～体部外面ハケ、体部外面下半部ハケのちナデ消し。	中～大粒砂混入	内外面褐色
〃 - 56 (971800)	旧河道	小型丸底壺 （土師器）	口径（ 7.2） 器高　10.5	口縁部は直立する。口縁部外面～体部外面ナデ。	中粒砂混入	内外面褐色

表36　集落跡出土土師器一覧表（11）

挿図-番号 (登録番号)	出土地点	器種 種別	法量 (cm)	形態・成形・調整の特徴	胎土	色調
120 - 57 (980557)	P 2182	小型丸底壺 （土師器）	口径（ 8.7）	口縁部はわずかに外上方に開く。内外面ナデ。	細砂混入	内外面褐色
〃 - 58 (970275)	B - 5 6 層	小型丸底壺 （土師器）	胴径（10.1）	胴部最大径は中位。体部外面ナデ。	細砂混入	内外面褐色
〃 - 59 (971820)	D - 4	小型丸底壺 （土師器）	胴径　8.8	体部外面ハケ。	金雲母混入 細砂混入	内外面明褐色
〃 - 60 (970264)	B - 5 6 層	小型丸底壺 （土師器）	胴径　8.5	体部は扁球形。体部外面ハケのちナデ消し。	細砂混入	内外面明褐色
〃 - 61 (971852)	B - 3 6，7 層	小型広口壺 （土師器）	口径（13.4）	口縁端部面とり。口縁部内外面、肩部外面ナデ。	細砂混入	内外面明褐色
〃 - 62 (971851)	B - 3 6 層	小型広口壺 （土師器）	口径（10.8）	口縁部はわずかに内湾する。口縁部内外面、肩部外面ナデ。	細砂混入	内外面褐色
〃 - 63 (970281)	D - 4	小型広口壺 （土師器）	口径　12.9	口縁端部面とり、口径と胴径はほぼ同じ。口縁部内外面ナデ、体部外面ハケのちナデ。	大粒砂混入	内外面明褐色
〃 - 64 (971770)	調査区南側 6 層	小型広口壺 （土師器）	口径（14.4）	口縁端部面とり、口径と胴径はほぼ同じ。口縁部内外面ナデ、体部外面ハケのちナデ。	中粒砂混入	内外面褐色
〃 - 65 (971806)	調査区南側 6 層	小型広口壺 （土師器）	口径（16.2）	口縁部は直線的に外上方に開く。口縁部内外面ナデ、体部外面ハケ。	中～大粒砂 多量混入	内外面褐色
〃 - 66 (970286)	6 層	有孔鉢・甑 （土師器）		底部に不整円形の孔を穿つ。平底気味。	中粒砂混入	内外面褐色
〃 - 67 (980337)	P 2077	有孔鉢・甑 （土師器）		底部に円形の孔を内側から穿つ。底部外面ハケ。	中～大粒砂 混入	内外面褐色
〃 - 68 (980371)	G - 3 コモ層下	椀 （土師器）	口径（14.9） 器高（ 6.0）	口縁部内側にわずかな稜あり。内外面ナデ。	金雲母混入 細砂混入	内外面黒褐色
〃 - 69 (971771)	調査区南側 6 層	椀 （土師器）	口径（14.8）	口縁端部は外反し、体部は丸味をもつ。内外面ナデ。101と同一個体か。	金雲母混入 中粒砂混入	内外面褐色
121 - 70 (971836)	E - 9 6 層	高杯 （土師器）	口径（16.8） 器高　12.9	杯部下位に稜あり。口縁部は外反する。口縁部外面ハケのちナデ。内面ナデ。	中粒砂混入	内外面明褐色
〃 - 71 (971766)	表土	高杯 （土師器）	口径　18.6 器高　11.8	口縁部は外反気味。杯底部内面ハケ、口縁部内外面ハケのちナデ。	中～大粒砂 混入	内外面赤褐色
〃 - 72 (980372)	G - 3 コモ層下	高杯 土師器）		脚柱部のみ残存。	細砂混入	内面褐色 外面黒褐色
〃 - 73 (980374)	G - 3 コモ層下	高杯 （土師器）		脚柱部のみ残存。脚柱部外面ハケのちナデ消し。	中粒砂混入	内外面褐色
〃 - 74 (980553)	D - 3 6 層	高杯 （土師器）	底径（10.4）	脚柱部は中実、裾部は屈曲して大きく開く。裾部内外面ナデ。	中粒砂混入	内外面明橙色
〃 - 75 (971817)	D - 3 6 層	高杯 （土師器）	底径　11.4	脚裾部は屈曲して外方に開く。裾端部面とり。脚外面、裾部内面ナデ。	細砂混入	内外面橙色
〃 - 76 (980406)	D - 4	高杯 （土師器）	底径（10.4）	脚裾部は屈曲して外方に開く。脚柱部外面ハケのちナデ、裾部内面ナデ。	中～大粒砂 混入	内外面明褐色
〃 - 77 (971776)	C - 3 6 層	高杯 （土師器）	底径（10.8）	脚裾部は屈曲して外方に開く。脚外面、裾部内面ナデ。	金雲母混入 大粒砂混入	内外面明褐色
〃 - 78 (980373)	G - 3 コモ層下	高杯 （土師器）	底径（11.9）	脚裾部は屈曲して外方に開く。内外面ナデ。	緻密	内外面明褐色
〃 - 79 (971782)	D - 3 6 層	高杯 （土師器）	底径（12.7）	脚裾部は屈曲して外方に開く。裾部内面ハケ、脚柱部外面ハケのちナデ。	細砂混入	内外面明褐色
〃 - 80 (980367)	F - 3 コモ層下	高杯 （土師器）	底径（13.0）	脚裾部は屈曲して外反する。端部は面とり気味。	中粒砂少量 混入	内外面黒褐色
〃 - 81 (970276)	6 層	高杯 （土師器）	底径（ 6.5）	脚部は外反して開く。裾部内面にわずかな稜あり。裾部内面ハケ。	中～大粒砂 混入	内外面明褐色
〃 - 82 (980407)	D - 4	高杯 （土師器）	底径（10.6）	脚裾部は屈曲してはね上げ気味に外方に開く。裾部内面ハケのちナデ。脚柱部外面ハケのちナデ。	中粒砂混入	内面褐色 外面明褐色
〃 - 83 (971807)	表土	高杯 （土師器）	底径（12.2）	脚部は外反気味に開く。裾部ナデ、外面ハケのちナデ消し。	金雲母混入 中～大粒砂混入	内外面明褐色
〃 - 84 (970277)	検出面	高杯 （土師器）	底径（11.6）	脚部は外反して開く。裾部内面ハケのちナデ。	大粒砂少量 混入	内外面明褐色
〃 - 85 (971835)	E - 9 1～4 層	高杯 （土師器）	底径（12.6）	脚部はラッパ状に開く。裾部内面ケズリのちナデ。	中～大粒砂 混入	内外面明褐色
〃 - 86 (970301)	D - 4 6 層	高杯 （土師器）	底径（16.3）	裾部は内湾気味に外方に開く。外面ハケ、裾端部外面ナデ。	細～中粒砂 混入	内面明褐色 外面灰色
〃 - 87 (980369)	G - 3 コモ層下	高杯 （土師器）	口径（16.4）	杯部中位で屈曲し口縁部は外反する。口縁部内外面ナデ。	細～中粒砂 混入	内外面黒褐色

表37　集落跡出土土師器一覧表（12）

挿図-番号 (登録番号)	出土地点	器種 種別	法量 (cm)	形態・成形・調整の特徴	胎土	色調
121 - 88 (970291)	C - 9 7 層	高杯 （土師器）	口径　19.5	杯底部は平坦、稜あり。杯部外面ハケのちナデ。	中粒砂混入	内外面橙色
〃 - 89 (980559)	6，7 層	高杯 （土師器）	口径（17.5）	杯部中位の接合面に稜あり。口縁部内外面ナデ。	大粒砂混入	内面褐色 外面明褐色
〃 - 90 (980423)	D - 6	高杯 （土師器）	口径（18.2）	杯部中位の接合面で窪む。口縁部外反。杯部外面ハケのちナデ、口縁部内面ハケ。	大粒砂混入	内面明褐色 外面黒褐色
〃 - 91 (980368)	G - 3 コモ層下	高杯 （土師器）	口径（15.1）	杯部中位で屈曲し口縁部は外反する。口縁部内外面ナデ。	細～中砂混入	内外面黒褐色
〃 - 92 (970292)	表土層	高杯 （土師器）	口径（22.0）	杯部下位よりに稜あり。内外面摩耗のため調整不明瞭。	中粒砂混入	内外面橙色
〃 - 93 (971816)	D - 4 6，7 層	高杯 （土師器）	口径（19.0）	杯部下位よりに稜あり。杯底部外面ハケ、口縁部内外面ナデ。	細砂少量混入	内外面橙色
〃 - 94 (970289)	B - 4 6 層	高杯 （土師器）		杯底部中央に孔あり。外面ハケ。	細～中砂混入	内面褐色 外面明褐色
122 - 95 (980551)	C - 3	鉢 （土師器）	口径　12.5 器高　7.2	体部は内湾し口縁部は直立する。体部外面ハケ、口縁部内外面ハケ。	細～中粒砂混入	内外面黒褐色
〃 - 96 (971773)	P 14	鉢 （土師器）	口径　10.7 器高　6.4	体部は内湾する。体部下半部から底部外面にかけてハケ。	中粒砂多量混入	内外面褐色
〃 - 97 (980403)	B - 3 6 層	鉢 （土師器）	口径（12.6）	体部は内湾し口縁端部は丸味をもって丁寧につくられる。体部内外面ナデ。	細～中粒砂混入	内外面褐色
〃 - 98 (971777)	C - 3 6 層	鉢 （土師器）	口径（12.0）	体部から口縁部にかけて内湾する。端部面取り気味。	緻密	内外面明褐色
〃 - 99 (970258)	B - 4 6，7 層	直口壺 （土師器）	口径（10.0）	口縁部は直立する。口縁部内外面ナデ。	金雲母混入 細砂混入	内外面褐色
〃 - 100 (971812)	B - 4	鉢 （土師器）	口径　5.8 器高　7.5	胴部最大径は中位で口縁部は短く直立する。体部外面ハケ。	中粒砂少量混入	内外面明褐色
〃 - 101 (971775)	B - 5	鉢 （土師器）	口径（ 6.0） 器高　8.0	体部は球形､肩部で若干屈曲し口縁部は直立する。体部外面ハケのちナデ消し。	中粒砂混入	内外面褐色
〃 - 102 (971815)	B - 5 6 層	鉢 （土師器）	口径（ 8.1） 器高　3.8	体部から口縁部にかけて内湾する。	中粒砂混入	内外面明褐色
〃 - 103 (971824)	D - 4	鉢 （土師器）	口径（31.4）	体部から口縁部にかけてわずかに内湾する。内面に粘土接合痕あり。外面ハケ。	中～大粒砂混入	内外面褐色
〃 - 104 (971866)	D - 8 7 層	鉢 （土師器）	口径（20.4）	体部から口縁部にかけてわずかに内湾する。内外面ケズリのち口縁部内面ハケ。	中粒砂混入	内外面褐色
〃 - 105 (981698)	P 2190	鉢 （土師器）	口径　10.2 器高　8.6	胴部から口縁部にかけて内湾する。内面指押さえ痕あり。	中粒砂多量混入	内外面褐色
〃 - 106 (971821)	D - 4	鉢 （土師器）	口径　8.3 器高　7.8	胴部から口縁部にかけて内湾する。内面指押さえ痕あり。	中～大粒砂多量混入	内外面褐色
〃 - 107 (980375)	D - 6	鉢 （土師器）	口径（ 7.9） 器高　7.1	平底で口縁部は短く直立する。	中粒砂混入	内外面明褐色
〃 - 108 (971772)	調査区南側 6 層	鉢 （土師器）	口径　11.2 器高　9.1	平底で口縁部は外方に開く。口縁部から体部外面ハケ、口縁部内面ハケ。	中～大粒砂混入	内外面明褐色
〃 - 109 (970287)	6 層	鉢 （土師器）	口径　6.5 器高　5.1	平底で口縁部は外反する。端部面とり。口縁部内面ハケ。	中粒砂混入	内外面明褐色
〃 - 110 (981692)	C - 8 7 層	鉢 （土師器）	口径（ 5.4） 器高　4.5	平底で口縁部は指おさえにてつくり出す。	細砂混入	内外面褐色
〃 - 111 (971849)	D - 6 6 層	鉢 （土師器）	口径　4.2 器高　5.4	平底で体部は丸味をもつ。	細砂混入	内外面褐色
〃 - 112 (971828)	D - 5 6，7 層	鉢 （土師器）	口径　4.8 器高　5.7	平底で体部は丸味をもつ。	細砂混入	内外面褐色
〃 - 113 (970279)	廃土中	鉢 （土師器）	底径　3.4	平底で体部は丸味をもつ。	中粒砂混入	内外面褐色
〃 - 114 (970304)	B - 9 1 ～ 4 層	鉢 （土師器）	口径　2.7 器高　2.4	ミニチュア土器、底部は高台ふうに指おさえにてつくりだす。	緻密	内外面明褐色
〃 - 115 (981693)	C - 8 7 層	鉢 （土師器）	口径　5.2 器高　3.1	体部は丸味をもつ。	中～大粒砂混入	内外面褐色
〃 - 116 (980554)	C - 7 7 層	鉢 （土師器）	口径　5.0 器高　3.5	丸底で体部は丸味をもつ。内面ナデ。	細砂混入	内外面明褐色
〃 - 117 (981694)	C - 8 7 層	鉢 （土師器）	口径（ 4.4） 器高　3.8	体部は丸味をもつ。内外面ナデ。	中粒砂混入	内外面明褐色
〃 - 118 (981696)	C - 8 7 層	鉢 （土師器）	口径　5.0 器高　3.8	底部内外面に指頭圧痕あり。	細砂混入	内外面明褐色

表38　集落跡出土土師器一覧表（13）

挿図-番号 (登録番号)	出土地点	器種 種別	法量 (cm)	形態・成形・調整の特徴	胎土	色調
122 - 119 (970278)	廃土中	鉢 （土師器）	口径　4.0 器高　4.3	平底気味で体部は丸味をもつ。内面指頭痕あり。	細砂混入	内外面褐色
〃 - 120 (981695)	C - 8 7 層	鉢 （土師器）	口径（ 4.7） 器高　4.5	体部は丸味をもち口縁部は指おさえにてつくりだす。	細砂混入	内外面明褐色
〃 - 121 (971788)	D - 4 6 層	不明 （土師器）		L字形で端部は面とりされる。	中粒砂混入	内外面明褐色
〃 - 122 (981699)	P 2191	台付鉢 （土師器）	底径　4.5	台部は指頭にてつくりだす。上げ底気味。台部外面ハケ。	細 ～ 中 粒 砂 粒混入	内外面明褐色
〃 - 123 (003054)	G - 7 7 層	杯身 （須恵器）	口径　10.6	受け部は水平にのび、たちあがりは直立する。端部は丸味をもつ、底部約3／4ヘラケズリ。	細砂混入	内外面灰色
〃 - 124 (003055)	S D 283	壺 （須恵器）	口径（ 7.7）	肩部に二条の沈線あり。胴部カキ目、底部外面回転ヘラケズリ。	細砂混入	内面褐色 外面灰色

表39　古墳時代土製品・玉類・石製品一覧表

挿図-遺物 番号 番号	登録番号	種類	遺構名	層位	グリッド	法　量（cm、g）					所見	胎土・石材	色調
						全長(径)	全幅	厚	孔径	重量			
91　-1	01-0807	石錘	SK105			11.00	3.55	3.01	0.50	139.9		頁岩？	
〃　-2	99-2250	模造鏡	SK105			3.20		1.90	0.30	12.9	ナデ調整	2mm以下の砂粒少量、金雲母	黒褐色・灰黄色
123 - 1	99-2308	土人形	旧河道	6		(3.45)	3.40	1.90		(17.2)		2mm以下の砂粒少量、金雲母	灰黄色
〃 - 2	01-0963	勾玉		1～4		4.80	2.30	1.60	0.50	21.2	ナデ調整	1mm以下の砂粒少量、金雲母	暗黄橙色
〃 - 3	01-0964	勾玉		7	G-9	3.20	0.95	0.90	0.30	3.1		2mm以下砂粒	にぶい黄橙色
〃 - 4	01-0962	勾玉		6	E-9	3.30	1.10	0.90	0.15	8.2		蛇紋岩	
〃 - 5	01-0961	勾玉		6	D-5	1.95	0.50	0.25	0.20	1.2		滑石	
〃 - 6	01-0965	管玉	SD280	4		2.20	0.70		0.12	(2.2)	片側穿孔	碧玉	
〃 - 7	01-0966	管玉	試掘トレンチ		E-5	1.20	0.40		0.15	0.4	両側穿孔	碧玉	
〃 - 8	99-2313	滑石製品	SK219			2.00	2.50	0.40		2.8		滑石	
〃 - 9	99-2248	滑石製品	SD280	最下層		1.20		0.30	0.15	0.7		滑石	
〃 - 10	01-0806	石錘			D-3	5.65	1.65	1.80		18.7		砂岩	
〃 - 11	01-0808	石錘		6	D-8	7.10	3.95	(1.30)		35.7		頁岩	
〃 - 12	01-0810	砥石	SD164			10.70	7.50	6.10		627.5		砂岩	

表40　古墳時代集落跡出土木製品一覧表

挿図－遺物番号	登録番号	遺構名	器種	法　量　(cm)	樹種
90 - 9	99001481	SX103	斧柄	残存長19.5　台部長14.0　台部厚3.3 柄部径2.6×2.5	
〃 - 10	99001505	SX103	杵	残存長56.2　最大径9.4×9.6	
〃 - 11	99001504	SX103	杵	残存長37.5　最大径7.8×7.4	
104 - 5	99001472	SK228	槌の子	残存長12.8　最大径8.5×7.0	ヤブツバキ
105 - 2	01000972	SK232	不明	残存長17.1　残存幅10.8　最大厚2.0	
〃 - 3	01000971	SK232	不明	残存長29.8　残存幅26.0　最大厚1.8	
〃 - 4	01000970	SK232	不明	残存長49.0　残存幅25.2　最大厚3.0	
〃 - 5	01000969	SK232	不明	残存長54.8　残存幅28.2　最大厚2.8	
124 - 1	99001452	包含層	かんざし	残存長26.0　幅6.5　最大厚0.8	コナラ属 アカガシ亜属
〃 - 2	99001453	包含層	紡錘車	径6.0×5.0	コナラ属 アカガシ亜属

Ⅴ，水田跡の調査

１，概要

調査区東側の低地部から弥生時代と古墳時代の水田跡を検出した。弥生時代の水田面は下層、上層の２面、古墳時代の水田面は下層、中層、上層の３面であった。弥生水田は自然流路を水路として使うなど自然地形に沿ったものであったが古墳水田はおおまかな地形の制約を受けながらも規格性のあるものであった。図125には弥生水田造成以前の地形図を示す。これによると南東に向って低くなる地形であったことがわかる。また、根拠はやや乏しいものの、調査区西側の砂丘微高地上からも弥生水田を確認した。

２，弥生時代水田跡

調査区の２地点から水田跡を検出した。ひとつは調査区東側の低地部からで古墳水田の直下から検出した。あとひとつは調査区西側の砂丘微高地上からである。

（１）低地部水田跡

①概要

調査区東側から、弥生時代の水田面を２面確認した。土層より下層水田が廃絶した後、上層水田の水田土壌である７ａ層が堆積し、その後上層水田が営まれたことが確認できた（第135図）。

下層水田は弥生時代前期後半、上層水田は中期中頃～後葉にかけてのものである。遺構は、上層・下層とも流路跡と畦畔（杭列を含む）を検出した。上層水田面の遺構のなかには、下層水田面のものを踏襲して造られたものがある。本章で畦畔としたものは全て流路脇に造られており、小区画を示すような小畦畔等は確認できなかった。

②下層水田（図126）

下層水田はかなり粘度の高い黒色粘質土（７ｂ層）を土壌とする。この層は、SD167以東では厚さ10～20cmほど堆積するが、SD167以西では上層水田７ａ層との層界が明確でなくなる。下層水田上面のSD167以東での現存標高は2.2～2.3mである。ただし上層水田造成時に、層上面が撹乱を受けた可能性が高く、上面はかなり波打っている。遺構には畦畔２条（SF176下層、SD167西側）と、流路４条（SD162下層、SD163、SD167、SD174下層）がある。

Ａ，流路跡

ＳＤ162下層

調査区東側、Ｅ～Ｇ-－７に位置する。流路の東肩は調査区壁面下にあり、検出できなかった。SD162下層西肩に沿って、畦畔SF176下層が造られる。SD162下層は幅1.7m以上、SF176下層上端から流路底面までの深さ40cmで、流路底面の標高は下層水田面とほぼ同じ高さである。埋土は粗砂を主体とし、流木が多量に混入する。

ＳＤ163下層

SF162の西側、Ｄ～Ｇ-－６に位置する。流路は南北方向に流れ、中央ベルト付近で東側に蛇行し、調査区南側で西側に蛇行する。流走方向は不明。幅約2.6m、下層水田面からの深さ30～40cmで、埋土は黄褐色中砂層を主体とし、流木が混入する。

ＳＤ167

Ｄ～Ｇ-－５に位置する。流路はほぼ南北方向に流れ、流路の中央付近には中洲が形成される。流走方向は不明。

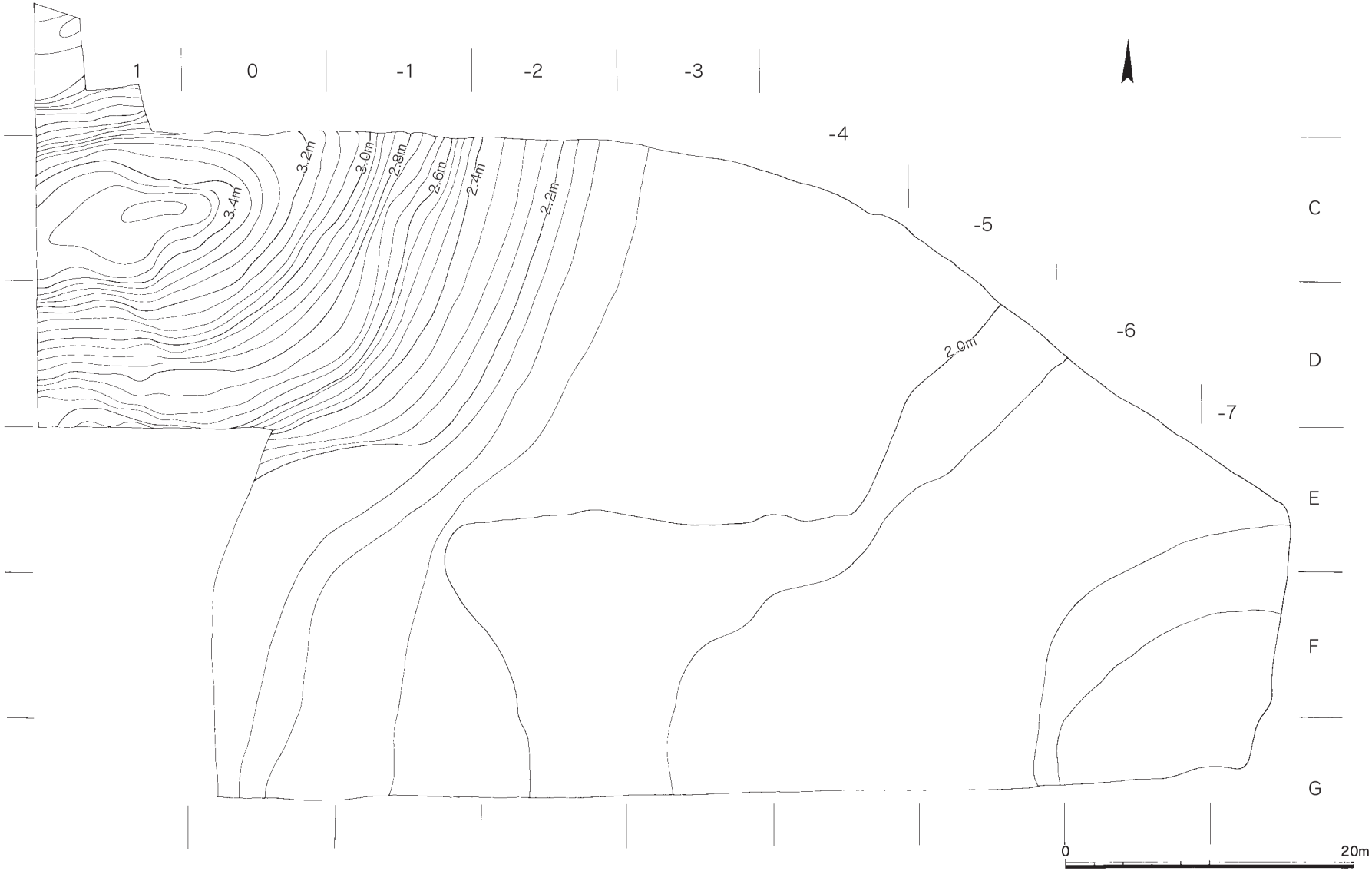


図125　水田跡地山地形図（1/400）

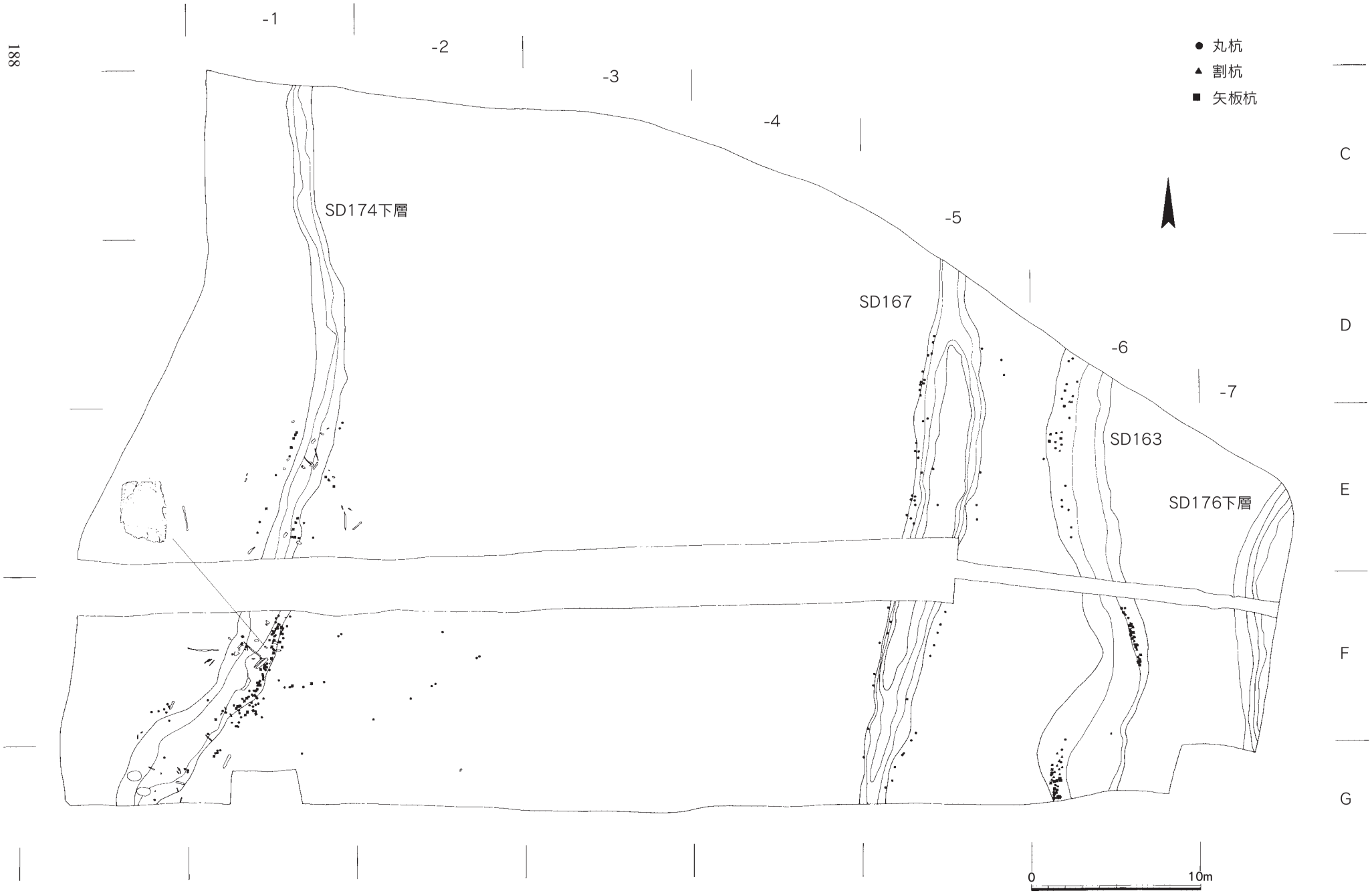


図126　弥生下層水田（1/300）

中央ベルトより南側では流路西肩に沿って、下端幅約1.7m、上端幅約0.65m、下層水田面からの高さ７～11cmの小規模な畦畔を確認した。この畦畔は中央ベルトより北側では検出できなかったものの、畦畔は流路西肩全域に造られていたとみられる。杭は打ち込まれていない。

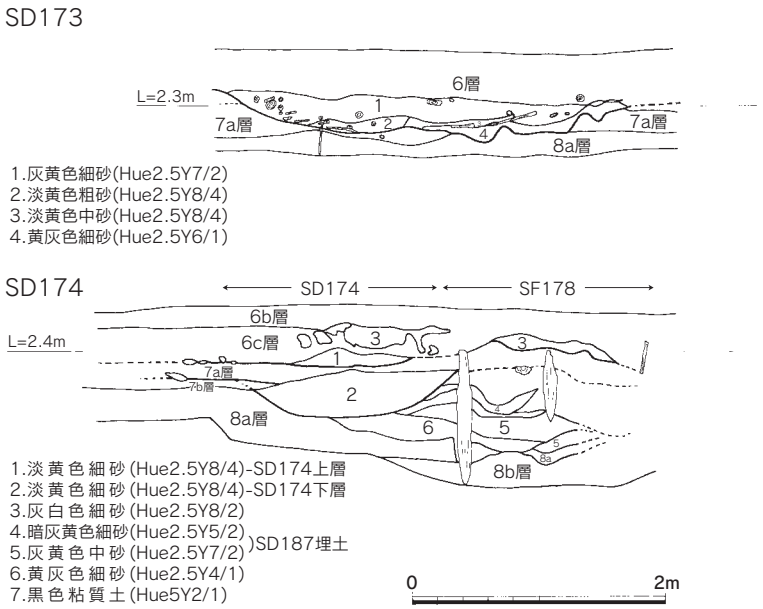


図127　SD173・174土層（1/60）

ＳＤ174下層

調査区水田部西側、Ｃ～Ｇ-０、－１に位置し、集落部との境界部に近い。南端で西側に屈曲し、その部位の幅が最も広く3.65m、北側で幅1.65～1.8m、下層水田面からの深さは30～50mである。SD174は底面の高さが南に向かって下がっているため、北から南に流れていたとみられる。

Ｂ，畦畔

ＳＦ176下層

SF176下層は、SD162下層西肩に造られた畦畔で、上端幅約0.9m、下端幅1.4m、下層水田面から上端までの高さ20cmである。盛土と下層水田土壌である７ｂ層との層界は不明瞭である。両肩には杭列が1条ずつ走っていたとみられるが、上層水田面からも杭が打ち込まれており明確ではない。杭列についてはSF176上層で詳述することにする。

③上層水田（図136）

下層水田が廃絶され、上層水田土壌である７ａ層が堆積したあとに時期をおかずに造られた。７ａ層は粘質シルトで、７ｂ層よりも粘度が低く、調査区集落部との境界付近から以東、水田部全域に堆積する。層上面の標高は水田部全域で2.3～2.4mである。下層には７ｂ層が堆積するが、SD167以西では７ｂ層との層界が曖昧となる。SD167以東では、下層（主に７ｂ層）との層界が波打ち、上層水田造成時に下層を巻き上げた痕跡が確認できた（第135図）。層の厚さは調査区水田部東側で10～15cmである。

遺構は流路跡４条（SD162上層、SD163上層、SD173、SD174上層）、畦畔３条（SF175、SF176、SF178）を検出し、うちSD173以外の流路３条、畦畔SF176は、下層水田のものを踏襲して造られていた。流路跡には導水あるいは排水の役割を果たしていたとみられるものもある。

Ａ，流路跡

ＳＤ162上層（図128）

SD162下層が廃絶し７ａ層が堆積したあと、その直上に造られる。下層水田面と同様に、西側に畦畔SF176上層が取り付けられる。埋土は粗砂を主体とする。SD162上層は、幅2.3m以上、隣接するSF176上層上端からの深さ約40cmで、底面のレベルが上層水田面よりも５～10cmほど高い。隣接する畦畔SF176上層も水田面から30～50cmほどの高さに盛ってあり、水田面からの比高差20cm前後のSF175などと比べるとかなり高いことがわかる（第135図）。これらよりSD162上層は、導水の役割を果たしていた可能性が

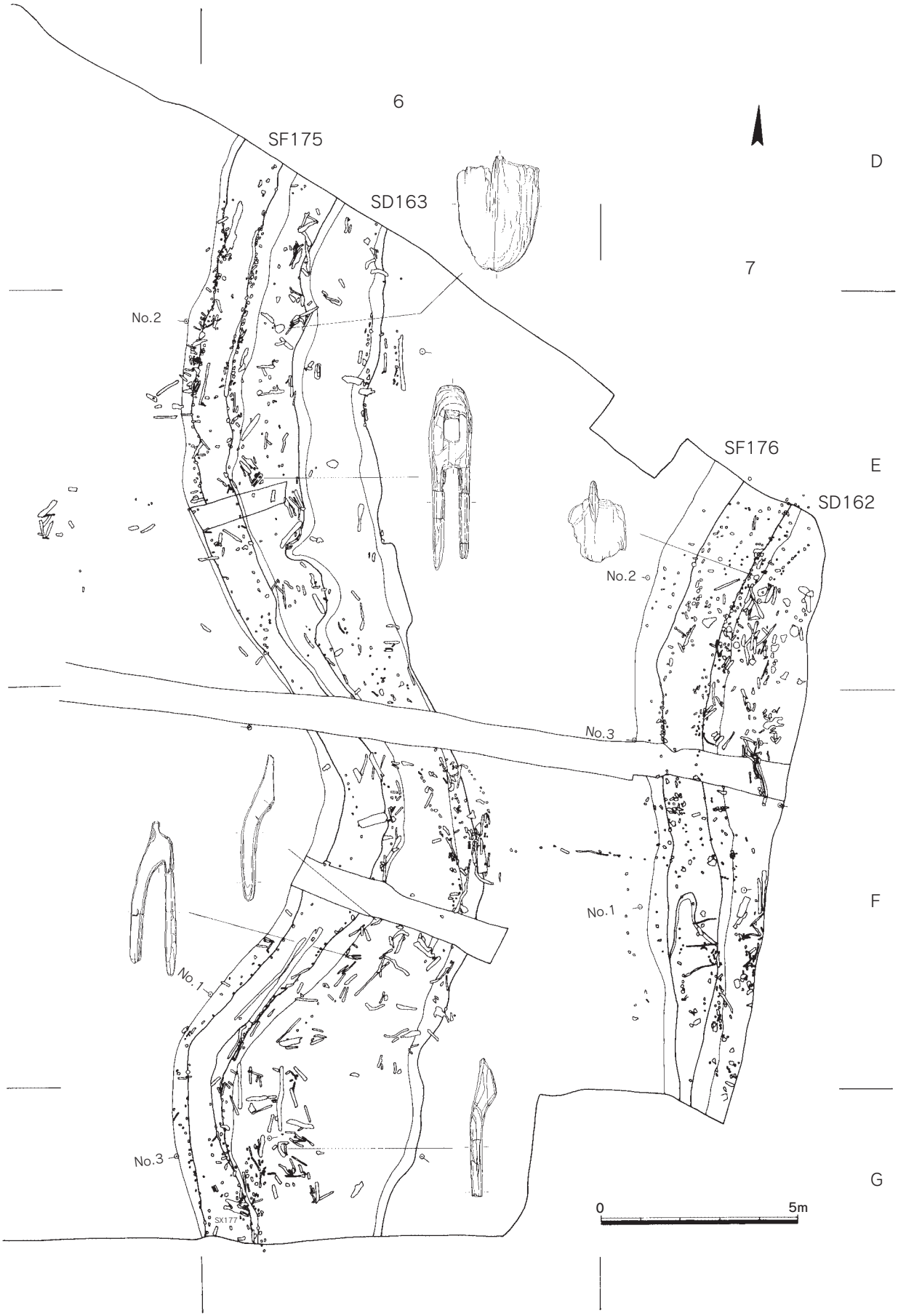


図128　SF175・176・SD162・163遺物出土状況（1/140）

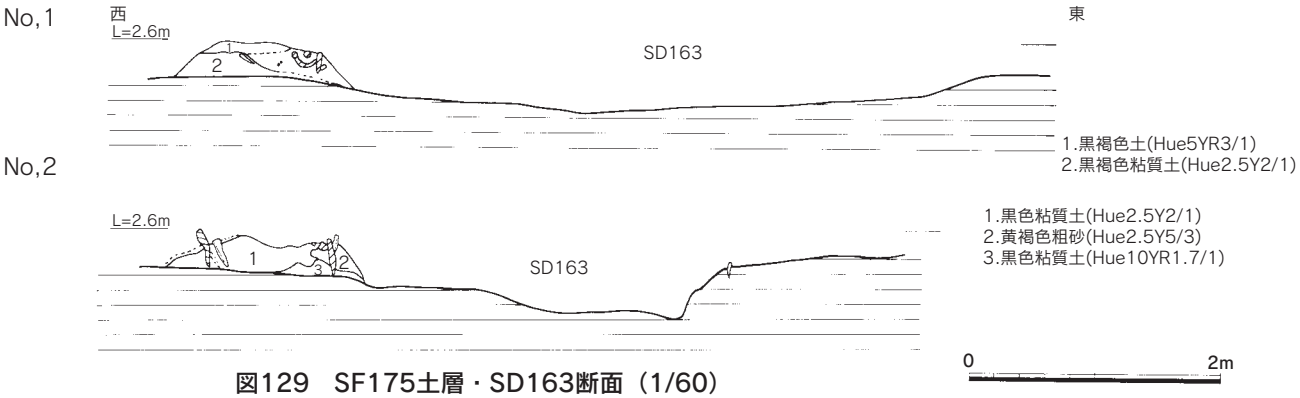


図129　SF175土層・SD163断面（1/60）

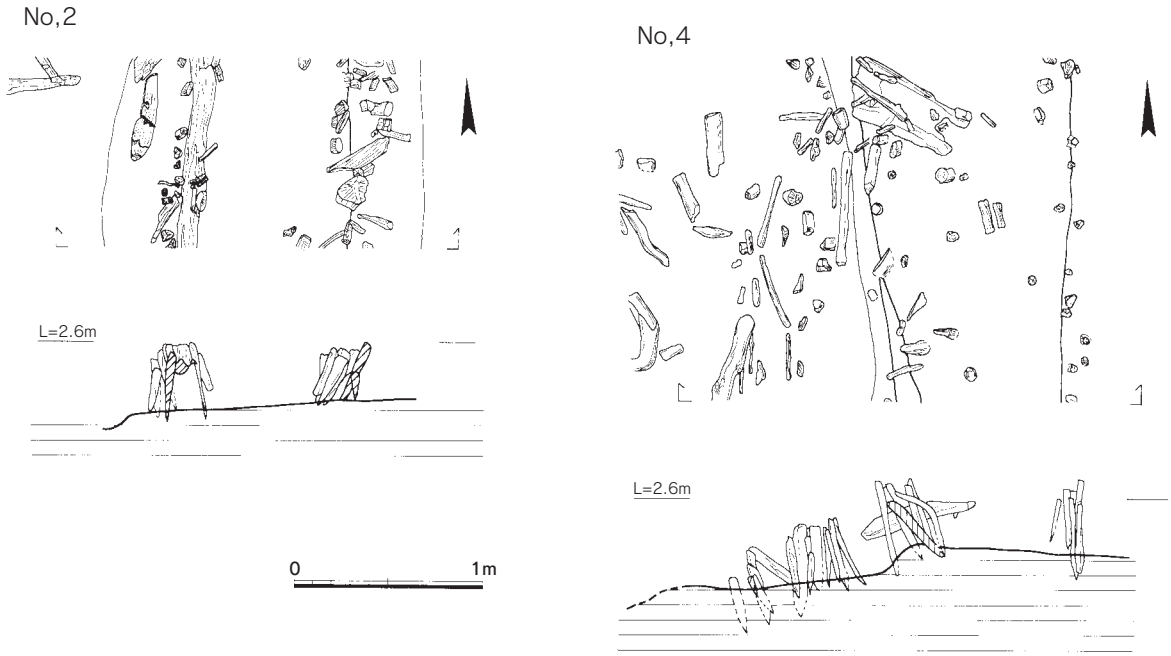


図130　SF175畦畔杭列出土状況（1/40）

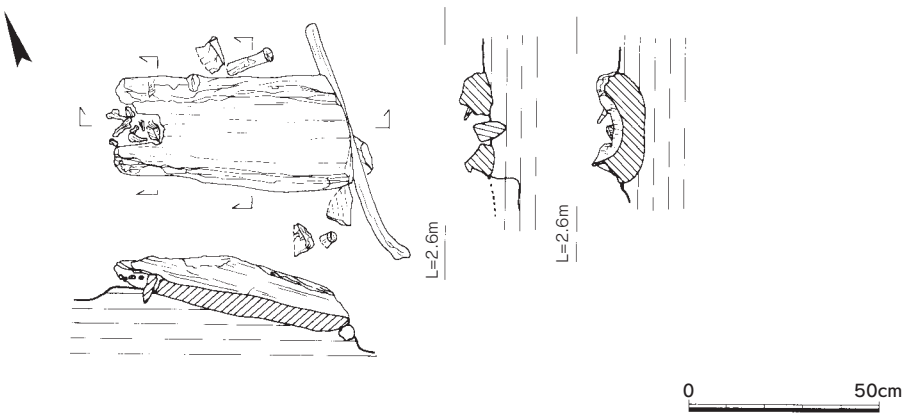


図131　SX177出土状況（1/20）

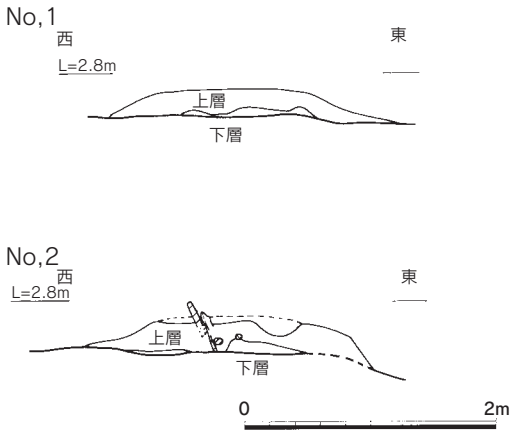


図132　SF176畦畔土層（1/60）

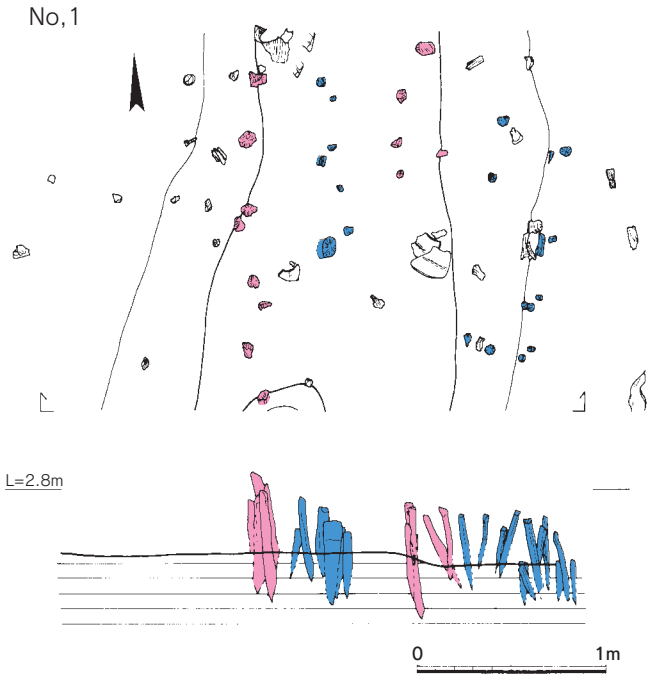


図133　SF176畦畔杭列出土状況１（1/40）

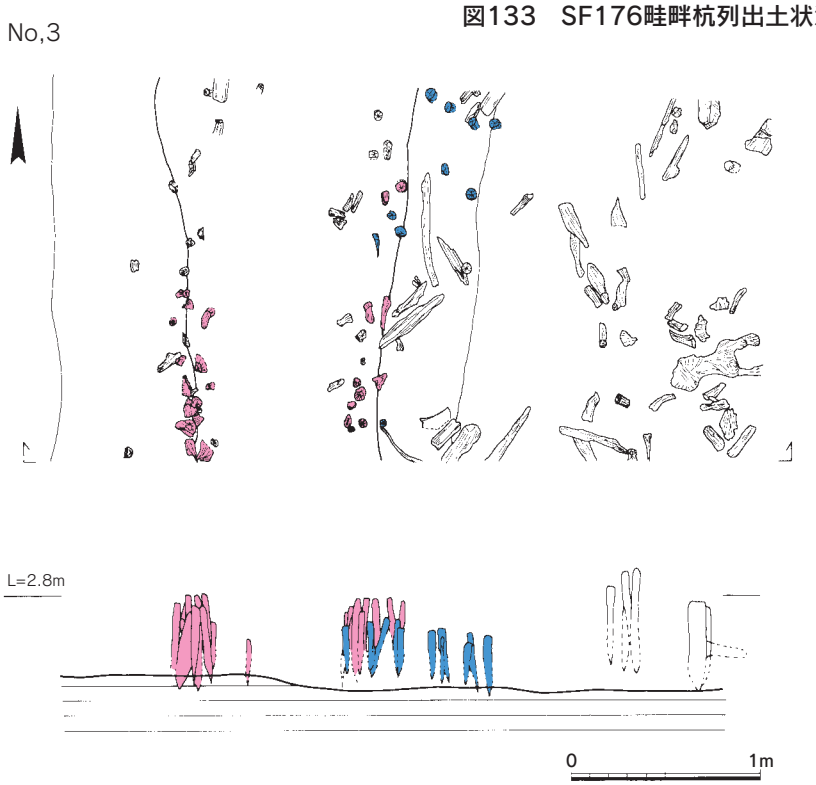


図134　SF176畦畔杭列出土状況２（1/40）

考えられる。

ＳＤ163上層（図128）

中央ベルト付近で東に蛇行し、南側では流路西肩が西側に張り出すため流路幅が広くなる。調査区北側から中央ベルト付近にかけて流路西側斜面にテラス状の高まりがある。流走方向は不明。流路西肩に沿って畦畔SF175が取り付けられる。SF175上層は西下端のラインがSD163下層の西肩ラインに重なるように位置している。またSD163上層東肩も下層と比較すると、西側に寄っている。このためSD163上層の流路幅は、SD163下層と比較すると狭くなっている。さらに流路東肩にも、平面で盛土は検出できなかったが散漫な杭列が分布しており、畦畔が取り付けられていた可能性がある。中央ベルト土層でも盛土らしき層の高まりを確認できた（図135）。SD163の流路幅は北側では3.0m前後、中央ベルト付近で2.1m、流路幅が最大になる南側で5.0mとなる。底面は上層水田面から30～40cmの深さにある。埋土は中砂を主体とする。

ＳＤ173（図127）

調査区水田部のほぼ中央、Ｃ～Ｇ-－３、－４に位置し、ほぼ南北方向に流れる。Ｄ-－４～Ｆ-－４では東肩が東側に張り出すため、流路幅が広くなる。流路幅は最も広い中央ベルト付近で4.0m、北・南壁付近で2.1～3.0m、上層水田面から底面までの深さは25～30cmである。埋土は細砂主体で、流木が多量混入する。流走方向は不明である。

遺物は木製品などが出土している。

ＳＤ174上層（図127）

幅1.1～1.4m、上層水田面から底面までの深さ約10cm。Ｃ～Ｇ-０、－１に位置する。中央ベルトより北は、南北にほぼまっすぐ流れるが、中央ベルト付近から南は、西側に蛇行する。ＳＤ174東肩に沿ってSF178が造られる。

Ｂ，畦畔跡

ＳＦ175（図128～130）

SF175は、SD163上層の西肩に造られる。下端幅1.3～1.5m、上端幅0.6～1.2m、上端は上層水田面より20cm前後の高さに位置する。

SD163下層が廃絶し、上層水田土壌である７ａ層が堆積した後に、黒褐色粘質シルトで盛土を行なっていることが中央ベルト土層・南壁土層から確認できた。西下端ラインがSD163下層西肩ラインに沿うように盛土を盛っているため、SD163下層の西側部分直上に造られた形となる。畦畔両肩には杭列を１条ずつ打ち込む。杭列の内側に心材として横木を渡している箇所もあり、中央ベルト南では臍のあいた柱などの建築部材も転用している。

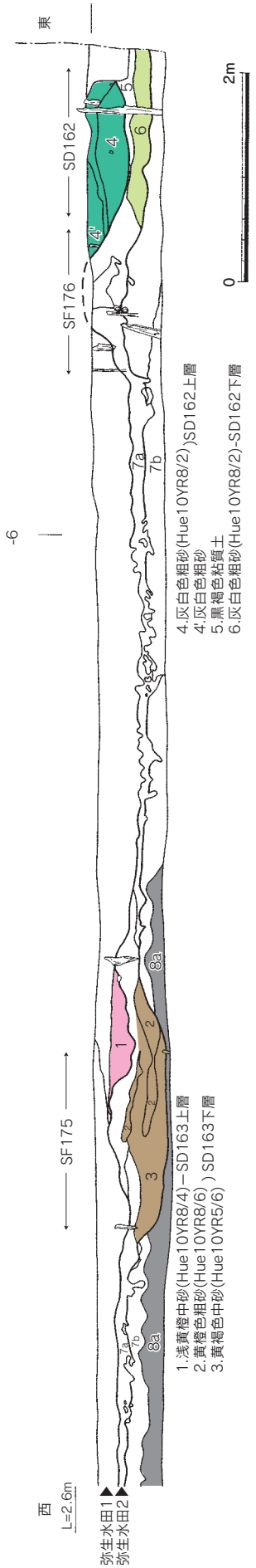


図135　弥生水田中央ベルト土層（1/60）

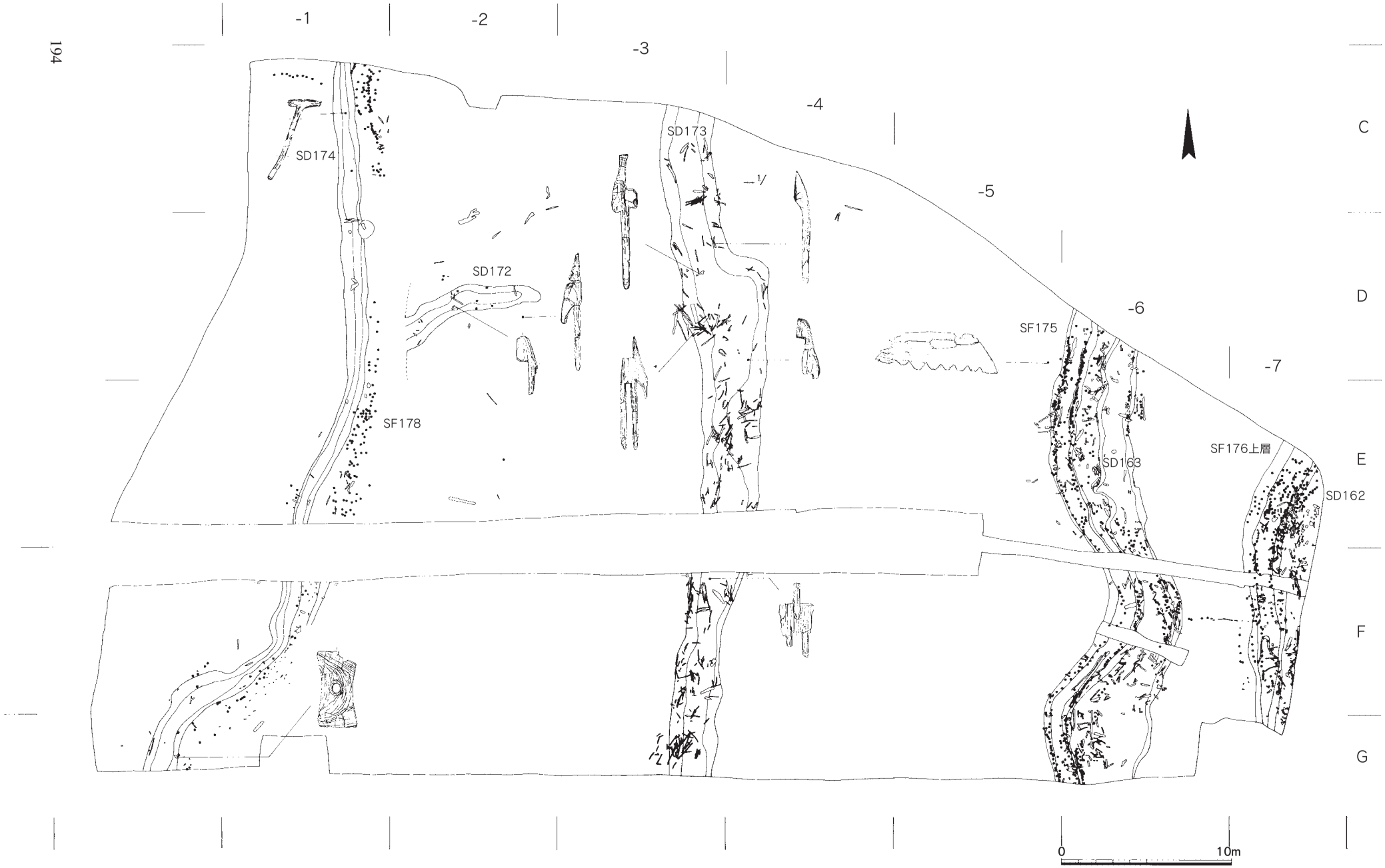


図136　弥生上層水田（1/300）

杭は調査区北壁・南壁付近の東肩に密に打ち込まれる（図128）。北壁付近では畦畔の両肩に整然と１列ずつ並んでいる。この箇所のみ、芯材として径10cm、長さ１ｍ程度の自然木を杭のすぐ内側に渡しており、特に畦畔の補強が必要な箇所であったことが窺える。南壁付近では畦畔の肩からSD163の底面にかけての斜面に散漫に打ち込んでいる。これは後述するSX177との関連が考えられる。杭の種類は、中央ベルト付近で丸杭の占める割合が８割程度に達するのに対し、この２箇所では丸杭は全体の５～６割程度で、矢板杭・割杭の占める割合が４割以上にものぼる。

ＳＸ177（図131）

SF175の南側杭列付近（Ｇ-－６）にはSX177がある。SX177は丸木を半裁して、内側のみを刳り貫いて加工した樋状のもので、SF175上面の中心付近から、畦畔の傾斜に沿ってSD163に向かって下りる形で取り付けられる。現状では上端部が欠損しているが、樋の上方に穿った約10cm平方の方形の穴に幅７cmの割杭を打ち、SX177がSD163上層内にずり落ちるのを防いでいる。法量は外側が幅30cm、長さ63cm、厚さ５cmで、内側が幅20cm、深さ５cmである。その性格は水田の水位を一定に保つための排水路のようなものが考えられる。このSX177からSD163底面にかけて杭が密集しているのも（図130）、この排水の機能を保全するための補強であると推測できる。

これらのことより、導水の役割のSD162上層に対し、SD163上層は排水の役割を果たしていたと想定できる。これに関してSD163上層はSD162上層と異なり、底面レベルが水田面よりも30～40cmほど低くなっている。

ＳＦ176上層（図128,132～134）

SF176上層はSF176下層同様、SD162西肩に沿って造られる。盛土はSF176下層よりもやや西寄りに盛られる。調査区北壁付近で下端幅2.5ｍ、上端幅1.3ｍである。上層水田面から盛土上端までの高さは30～50cmである。畦畔の両肩には杭列が１条ずつ走っており、特に北壁付近で密に打ち込まれる。北壁付近の盛土内には径10cm、長さ1.3ｍ程度の自然木の芯材を杭列のすぐ内側に渡して補強している。上層と下層の杭列は、畦畔盛土の位置にともない、下層杭列が東側に、上層杭列が西側に分布する。杭が重なる箇所では杭頭のレベルでおよそ上層と下層に分離できる。

杭の種類は、全体に占める丸杭の割合が下層では５～６割であるのに対し、上層では７～８割にのぼる。丸杭以外には矢板杭、割り杭が用いられている。丸杭、割り杭、矢板杭は畦畔内での分布の偏りはない。

ＳＦ178

SD174上層東肩に沿って造られた、丸杭で構成された杭列。盛土は平面では確認できなかったものの、土層では不明瞭ながらも確認できたため（図127）、この箇所に畦畔があった可能性がある。

（２）微高地水田跡（図137）

標高3.7ｍ～4.10ｍで東むきにさがる緩斜面に位置する。弥生時代前期の集落の西側にあたり、低地部水田との比高差は約２ｍである。検出した遺構は平面コの字形にまわる溝跡がある。周辺の遺構にはSD280の東方約２ｍにはSK291がSD288の西方約1ｍにはSK292がある。

図137に遺構配置図を示す。

SD202、SD203、SD204は東西方向の溝跡で、本来同一の溝であろう。その南方約35ｍには東西方向にはしるSD265がある。SD265とSD230、SD267は同一溝であり、南方に屈曲する。東西方向にはしるSD204、SD265は南北方向にはしるSD280、SD288と連結する。したがってこれらSD202、SD203、SD204、SD230、

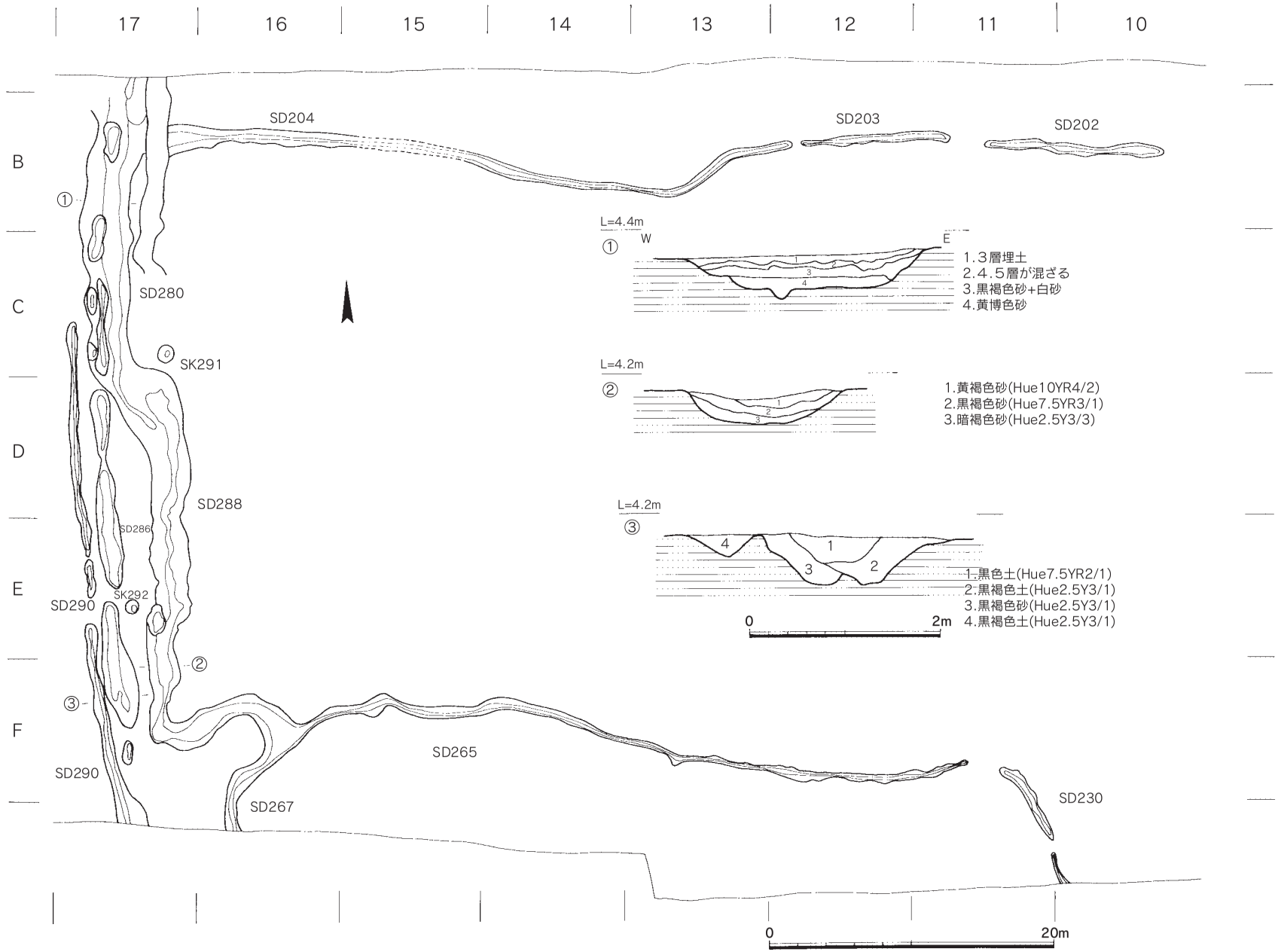


図137　弥生水田溝（1/400）・土層（1/60）

SD265、SD267、SD280、SD288は平面コの字形にまわり長方形の大きな区画をつくる。この区画の規模は東西約70m、南北約35m、面積約2450㎡をはかる。

さらにこの区画の南側にはSD265、SD230、SD267で囲まれた区画もある。

SD280はレンズ状の堆積で上層からは中・近世の陶磁器類が出土し、下層は砂層である。南北溝であるSD280とSD288は同一溝であり、屈曲して連結するが埋土である砂層の堆積状態により平面ではきりあっているかのようにみえたため遺構番号を変えた。

それぞれの溝の規模はSD204は幅約１m、深さ約10cm、SD280は幅約５m、深さ約40cm、SD265は幅約50cm、深さ約15cmである。

これらの方形にめぐる溝は埋土に砂層が堆積していることなどから水路として掘削された可能性もあり、根拠は薄いものの水田の大区画を想定した。

出土遺物はSD265、SD267、SD288から弥生時代前・中期の甕、壺、高杯の口縁部、底部破片が出土している。図化した土器以外にも小破片が出土しており、遺物の出土状況などから考えて溝の時期は弥生時代中期と判断した。

また、SD286、SD290はSD288と併行する南北溝である。SD286は幅１m～２m、深さ約50cmの細長い溝が一列に並んでおり、北側ではSD280と切り合う。

SD286の西側0.5～１mにSD290が平行してはしる。SD290は幅約70cm、深さ約20cmである。出土遺物は弥生時代中期の甕、壺、高杯、器台である。

３，古墳時代水田跡

（１）概要

調査区東側の低地部分で水田跡を検出した。古墳時代の集落跡とはSD115溝を挟んで近接する。水田は調査区全域に広がっており、さらに調査区外にまでのびることは確実である。調査区内で検出した水田面積は3141㎡である。宇木川と半田川の間でもコモ層下に畦畔があることを確認した。この畦畔の時期は定かでないものの水田跡であることはほぼ確実であり、広範囲の水田跡が予想される。

古墳時代の水田跡は３面検出した。調査時は上層から古墳水田１、古墳水田２、古墳水田３としたが、本書ではそれぞれ上層水田、中層水田、下層水田と呼称する。

このうち上層水田は厚さ約20cm～40cmのコモ層に覆われていたために畦畔の遺存状態が良好で水田区画が明瞭に検出できた。中層水田の水路であるSD160、SD166の直上に上層水田の大畦畔SF157、SF158、SF156がつくられ中層水田の区画を踏襲して上層水田の大区画がつくられていることが判った。また、中層・下層水田を蛇行して流れる水路であるSD164からは多量の土師器が出土し水田の時期を決定するのに貴重な資料になった。

（２）下層水田（図139）

弥生上層水田の約15cm上層にて検出した。標高は約2.5ｍである。土層断面では部分的に層界が確認できただけで明瞭な水田面は判らなかった。平面でも小区画は検出できず遺構としては蛇行する流路(SD164)と大畦畔(SF171)があるだけである。図139に遺構配置図を示す。

①水路

ＳＤ164

調査区をＳ字状に蛇行して南流する。自然流路を水田の水路として利用しており、溝底には堰状の杭や階段状の遺構もある。溝内から多量の土師器が出土した。

規模は中央付近がやや狭く幅約2.5ｍで蛇行する北側付近は幅約５ｍと広い。溝の断面形は上層、下層ともレンズ状である。

図138に土層断面を示す。すべての土層壁面で間層を挟んで上層と下層に分けられた。遺物の出土状況も上層と下層に分けられ、そのたちあがりも中層水田と下層水田に対応することからSD164上層を中層水田、SD164下層を下層水田とした。土層色調は地点によりやや異なるので代表的なN0２土層の観察所見を記す。１層（上層）は灰白色粗砂（Hue7.5YR8/1）で径２～３mmの粗砂からなる。砂粒は全体的に

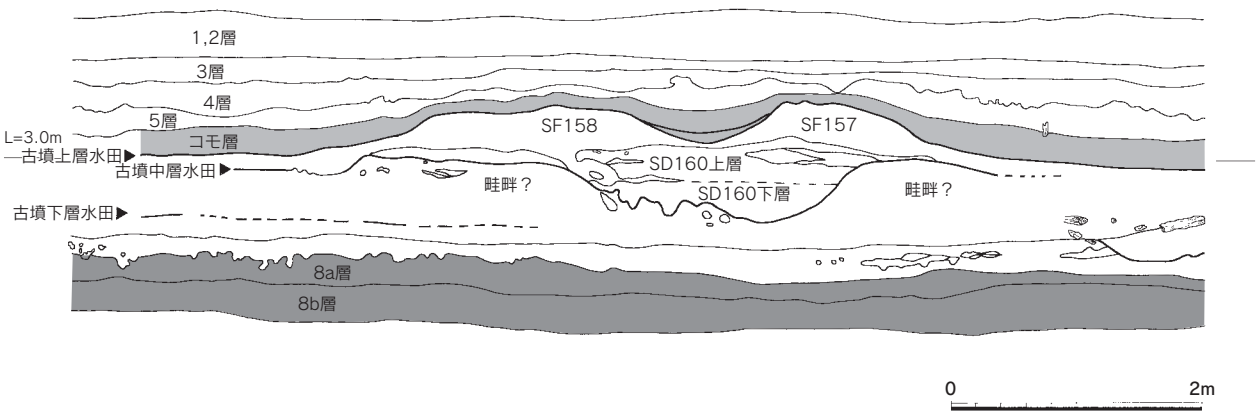


図138　調査区南壁土層（1/60）

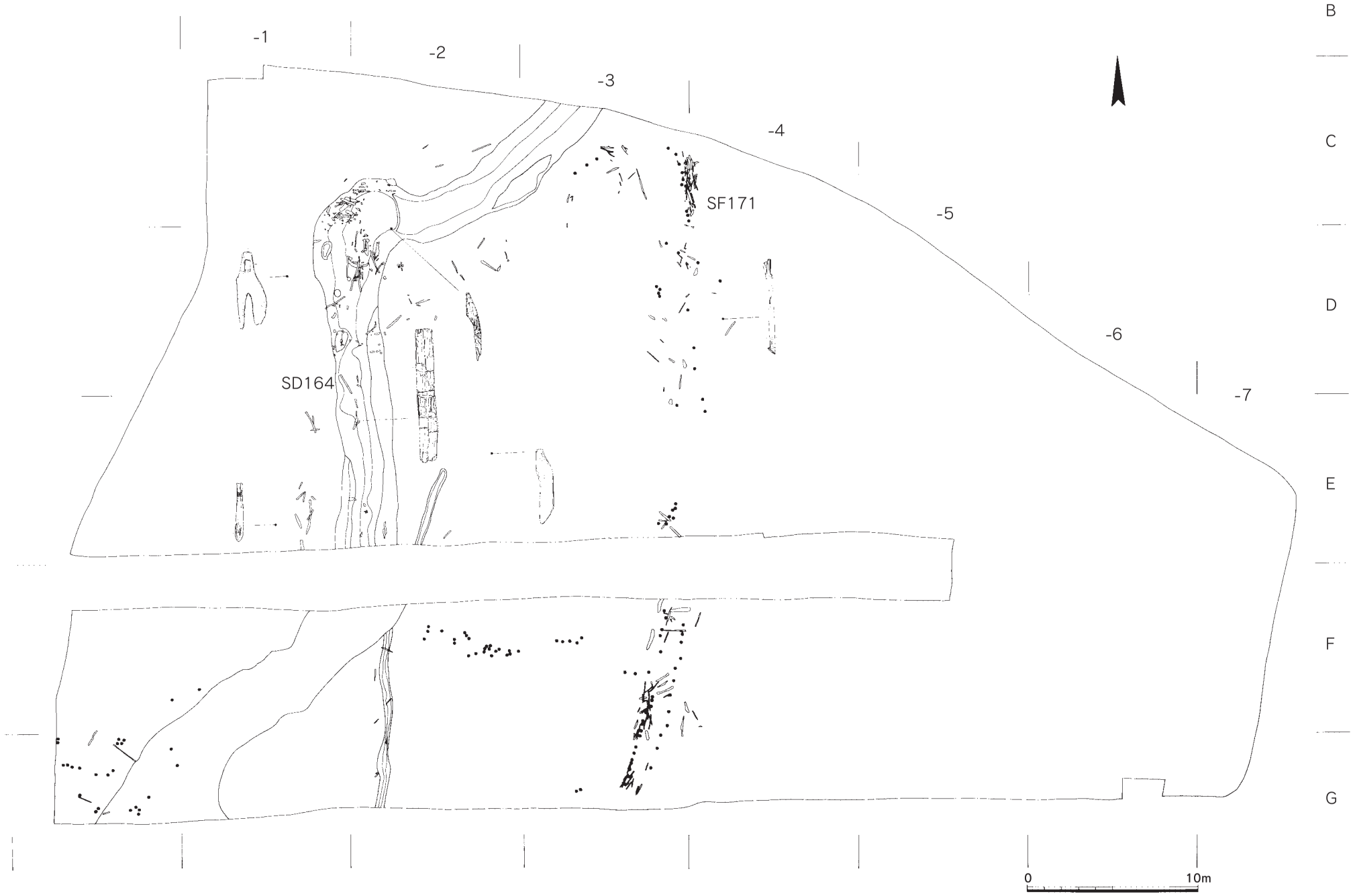


図139　古墳下層水田（1/300）

同じ大きさ。径10cm前後の自然木が溝と平行して出土した。流水により堆積したものであろう。２層の直上から面をもって土器が出土した。３層（下層）は灰白色粗砂(Hue7.5YR8/1)で１層と類似。自然木は１層より少ないが出土しており、粒子も斜め方向にはしる。最下層から小型丸底壺が出土した。

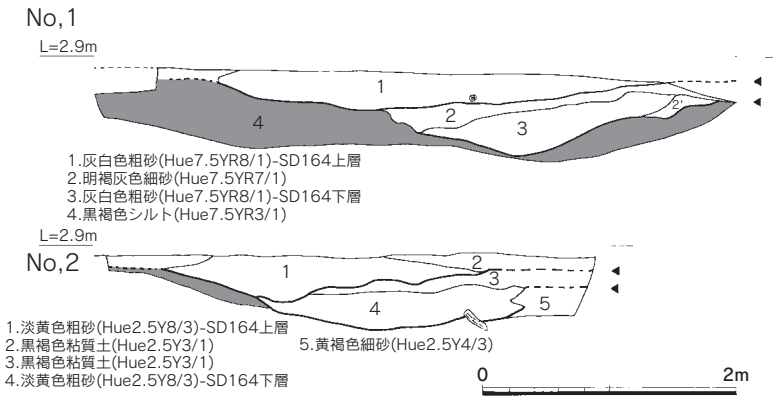


図140　古墳中層・下層水田・SD164土層（1/60）

遺構配置図にはいれていないがSD164の流路が大きく曲がるD-－２、－３グリッドにはSD164につながる弓なりの溝がある。埋土は砂層でSD164が洪水などでオーバーフローしてできた溝であろう。

流路が大きく曲がる地点の溝底で堰状の木組や階段状の遺構を検出した。図141に出土状況を示す。堰状の木組は流路に対して平行に長さ約80cmの自然木を両側に数段積み上げ、さらにこれらを杭で固定している。両側の材の間は約50cmである。この堰状の木組の北側で流路の肩部には階段状の遺構がある。

図141　SD164下層遺物出土状況（1/80）

長さ約60cm～１ｍの木を階段状に組み杭で固定している。階段の中には長さ約50cmの長方形石材１石を用いている。水路の上端から堰状の遺構に降りていくための施設であろう。（巻頭図版７）

②大畦畔

ＳＦ171

－３ラインと－４ラインの間を南北にはしる大畦畔である。平面精査によりＦ-－３、Ｇ-－３グリッドから幅0.6ｍ～1.1ｍ、長さ約10ｍの灰色粘土の帯を検出した。これはＳＦ168の平面検出状況と類似していた。SF171の直下には弥生上層水田のSD173が流れており、この埋土・砂層上にSF171はつくられる。

この灰色粘土帯の直下から平行する二条の杭列を検出した。杭は径約３cm～約５cm、長さ約30cmから約１ｍで樹皮がついた自然木の先端を鋭利に尖らしたものを用いている。また、二条の杭列の間は約１ｍ～1.5ｍである。

杭列の北側でＣ-－４グリッドからは芯材らしき横木を検出した。図142に検出状況を示す。横木はすべて自然木で杭は横木の西側にのみ打ち込まれる。杭には二条に打ち込まれた丸杭の延長のものと横木を固定するように斜めに打ち込まれたものがある。後者は割材を用いる。

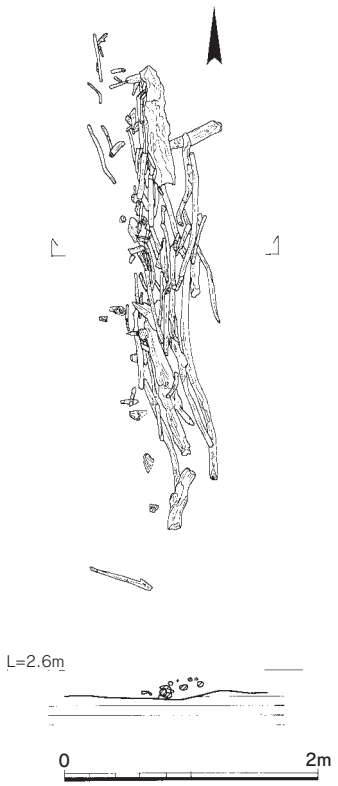


図142　古墳下層水田・SF171芯材
（1/60）

（３）中層水田（図143）

下層水田の約40cm上方にて中層水田を検出した。標高2.8ｍ～2.9ｍである。土層断面では部分的に層界が確認できただけである。平面でも小区画は検出できず直線的な水路２条（SD160、SD166）と蛇行する流路（SD164）とそれに沿った畦畔（SF168）を検出した。

SD160とＳD166は計画的に掘削された直線的な水路であり大区画を設定している。中層水田の埋没後、SD160とSD166の直上に上層水田の大畦畔がつくられ区画の踏襲がなされている。

①水路

ＳＤ160

SD160は幅1.5ｍ～1.8ｍ、深さ50cm、断面逆台形の直線水路である。調査区を南北方向に縦断するがSD160の南側は人力掘削をしなかったため遺構配置図は点線で示す。SD160の直上には上層水田のSF157、SF158がつくられる。図138にSD160とSF157、SF158の位置関係を示した土層図を示す。

埋土は浅黄橙色粗砂（Hue7.5YR8/3）である。下層にしたがい砂粒は粗になる。埋土中程に黒色粘質土の帯状の土層が２、３枚ある。この黒色粘質土はSD160すべての埋土内で観察でき、水路の掘り返しと思われる。

調査時の平面精査では検出できなかったが土層精査ではSD160の東西両側に畦畔らしきたかまりが調査区の南壁、北壁の両壁で確認できた。その畦畔状たかまりの規模は東側が幅1.3ｍ～1.9ｍ、高さ10cm～15cmである。西側は幅1.3ｍ～1.5ｍ、高さ15cm～30cmである。

ＳＤ166

SD166の北側は切れるが南側はSD164と連結する。SD166の直上には上層水田のSF156がつくられる。規模は長さ35ｍ、幅0.72ｍ～1.7ｍ、深さ0.1ｍ～0.3ｍ、断面逆台形である。

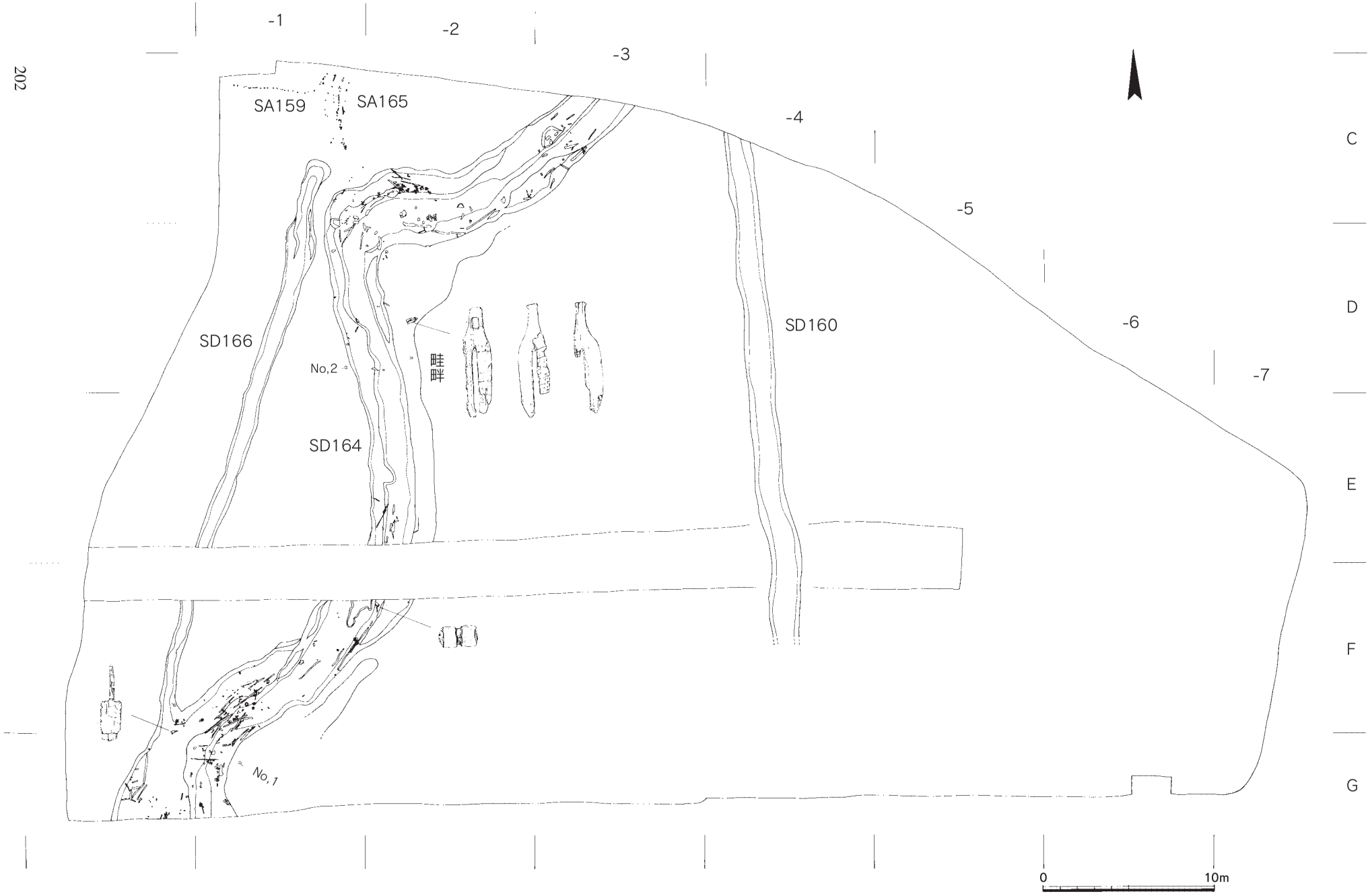


図143　古墳中層水田（1/300）

図144　SD164上層遺物出土状況（1/80）

ＳＤ164

SD164の上層が中層水田の水路にあたる。規模や埋土については前述したのでここでは割愛する。

水路が西流から南流に大きく曲がるＣ-－２グリッドから多量の土器がまとまって出土した。出土状況を図144に示す。溝の肩部から小型広口壺、小型丸底壺、甕などの完形土師器が出土した。４ｍ×0.5mほどの範囲に集中しており、正置の状態で出土した土器もみられた。

②畦畔

ＳＦ168

SD164の東縁にそって畦畔がはしる。土層断面で明瞭な畦畔状の盛りあがりは観察できないが遺構検出面で、平面幅約1.5m、厚さ数cmの灰色粘質土の帯が観察できた。この灰色粘質土は南北両側では不明瞭となる。灰色粘質土中のＤ-－２グリッドからは二又鍬３本が埋納されていた。出土状況を図145に示す。190-7の上に191-9を同じ向きで置きさらにその上に刃部の向きを逆にして191-10を置く。

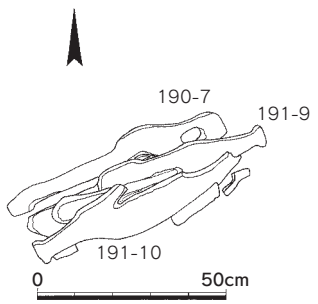


図145　畦畔内埋納農具（1/20）

（4）上層水田（図147）

水田面の標高は約３ｍ前後であり集落との比高差は約１ｍである。

①被覆土と耕作土

被覆土は植物遺体層であるコモ層である。水田面はこのコモ層に覆われていたため大畦畔、小畦畔とも遺存状態は良好であった。水田区画はほぼ完全に検出できた。コモ層は水田域東側が約40cmと比較的厚く堆積しており、西側にいくにしたがって約20cmとやや薄くなる。コモ層は湿地性の植物が完全に腐食せずに堆積しているもので水平方向のラミナが走る。水田面を覆うコモ層をさらに細かく観察した土層模式図が図146である。コモ層は水田面直上と中層、上層の３枚にわかれ、これらに挟まれて黒色粘質土が２枚ある。水田面直上のコモ層は厚さ１cm～２cmであり水田面を覆うコモ層の堆積状態は同じである。畦畔部分はコモ層が盛り上がっており土層壁面での畦畔の発見につながった。

水田面はコモ層を剥ぐことにより検出できた。水田床面を精査したが足跡などの痕跡は確認できなかった。水田床面には部分的に白色砂粒がみられた。

耕作土は褐灰色粘質シルト（Hue7.5YR6/1）で植物遺体層を少量混入する。この植物遺体層は明瞭なラミナ状にはならない。砂粒は混入せず灰色粘質土をブロック状に混入する。このブロック状の灰色粘質土は調査区北壁側に多くみられ大畦畔盛土とも類似する。床土と耕作土の分層は壁面観察や調査時の精査でもできなかったが、この灰色粘質土ブロックは自然堆積物の中ではみられない土層であり床土の耕作によるまきあげ痕とも考えられる。

②大小区画水田面積と大小畦畔の規模・形態・走行

２条に併走する大畦畔により３つの大区画にわけられる。その中をさらに小畦畔で整然と区画されこれを小区画水田と呼ぶ。２条の大畦畔は地形にあわせて南北方向に走る。大区画は西の方から大区画１、大区画２、大区画３と呼称した。検出した大区画水田の面積は大区画１が521.84㎡、大区画２が1277.78㎡、大区画３が845.48㎡である。

小区画水田は調査区内で51区画を検出した。１枚ごとに１～51の番号を付け、畦は挟まれた水田区画番号で表記した。図152に水田区画番号とさらに想定される水流方向を示す。小区画水田の平面形態、面積と畦の規模を表41～44に示す。このうち、調査区外に広がる水田を除外した小区画水田面積は最大が小区画27の58.60㎡で最小は小区画16の8.41㎡である。平均小区画水田面積は35.62㎡である。小畦畔の規模は下幅0.9ｍ～2.45ｍ、高さ0.05ｍ～0.25ｍと幅があるが、大方上幅約0.4ｍ、下幅約1.2ｍ、高さ約0.15ｍである。断面形態はカマボコ形である。

大畦畔は２条に併走し水田を大きく区画する。西側からSF153、SF154、SF155、SF156、SF157、SF158の６条がある。SF153とSF154の西側は掘りすぎてしまった。SF154は南壁壁面で明瞭に確認できたが

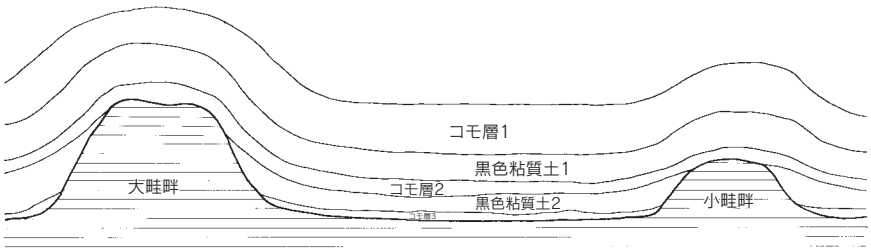


図146　上層水田面被覆土模式図

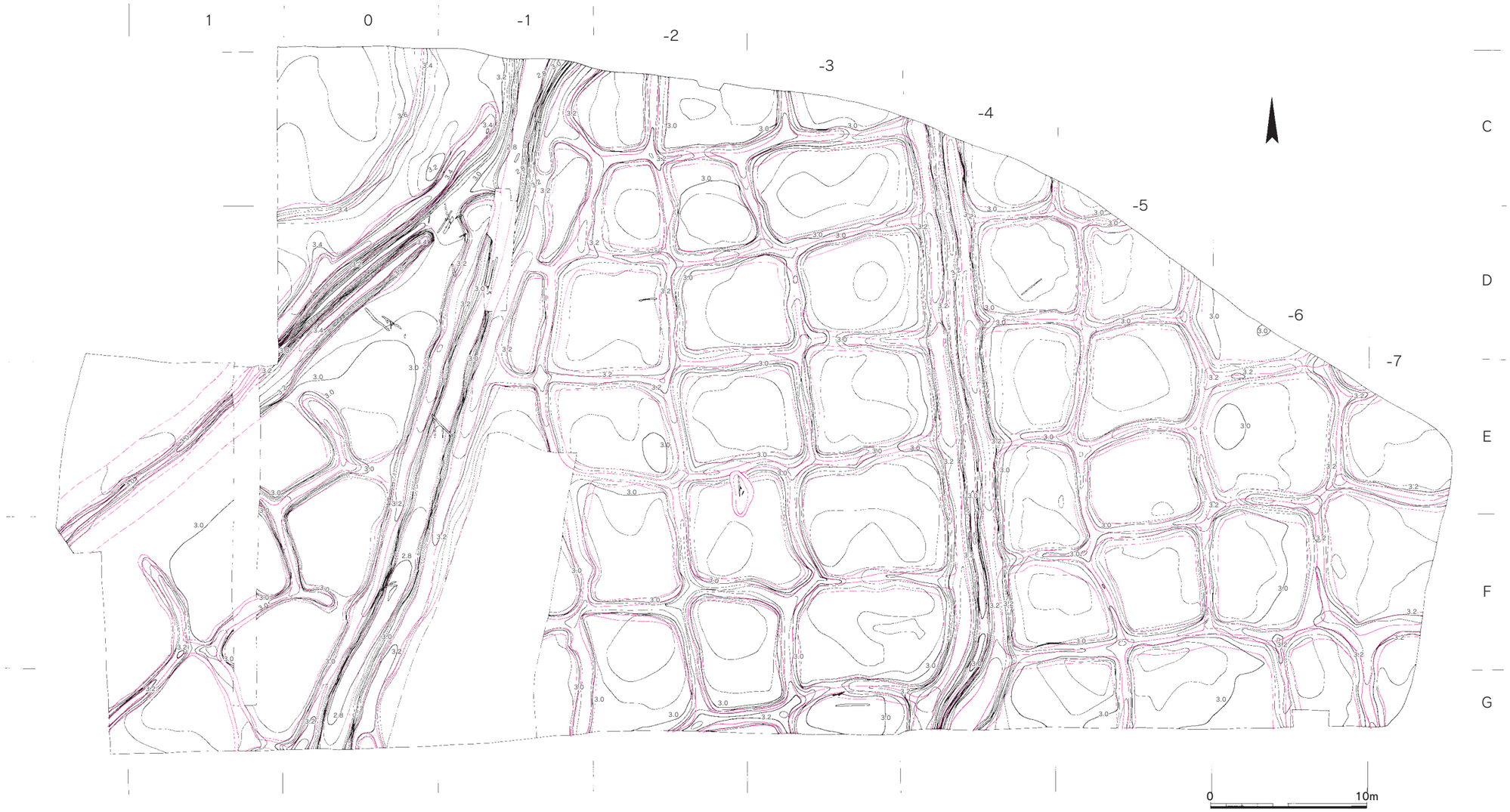


図147　古墳上層水田（1/300）

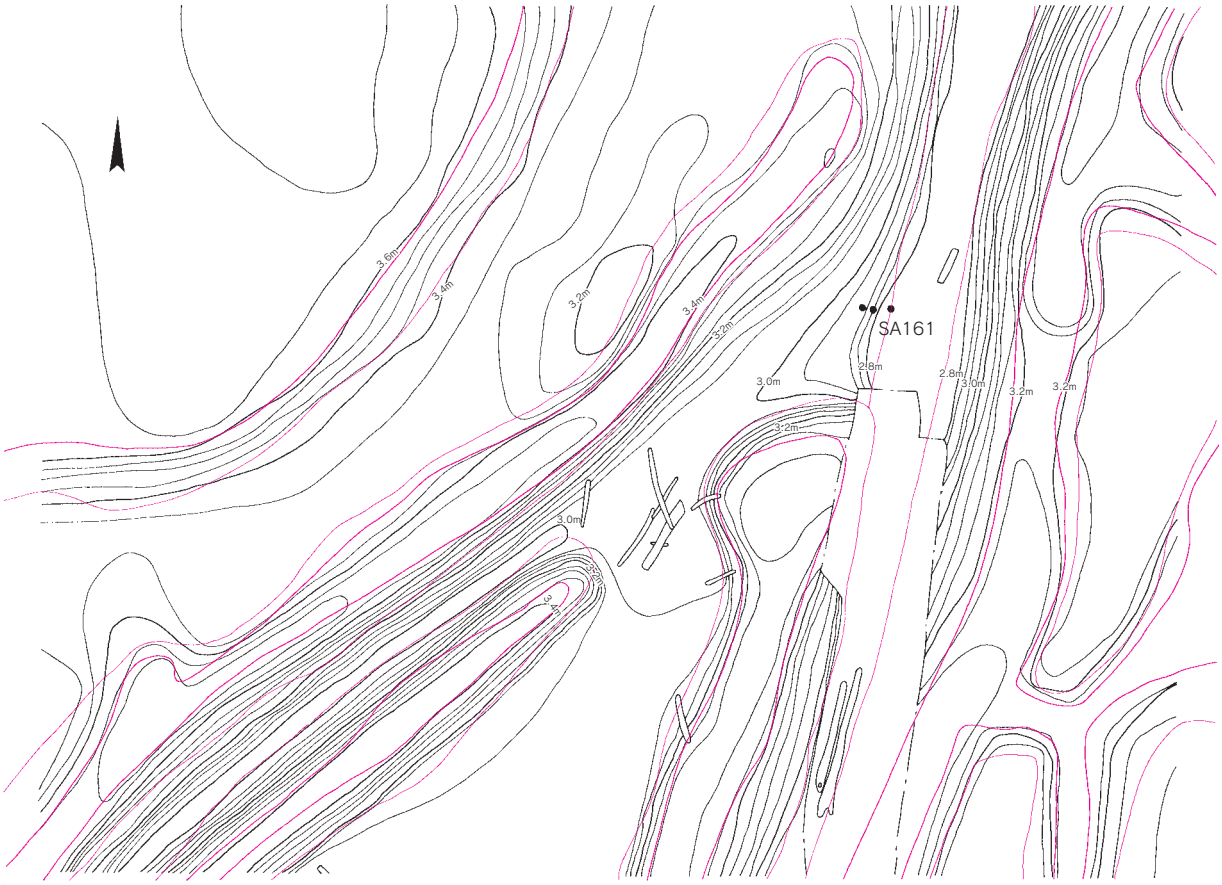


図148　大区画１水口（1/120）

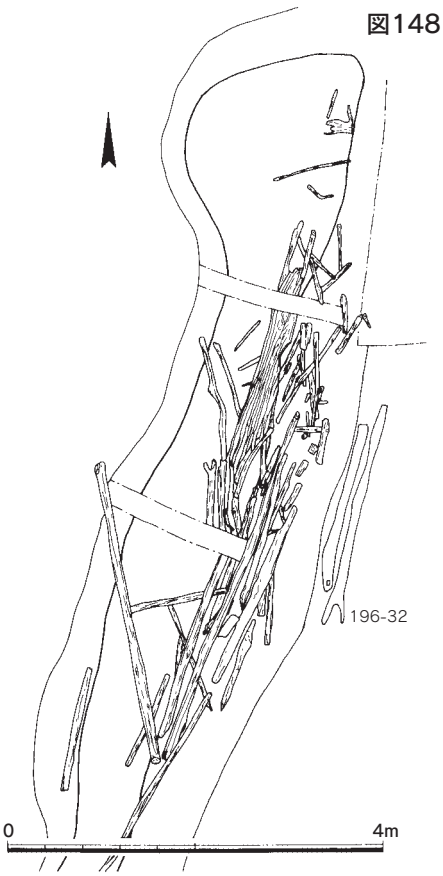


図149　上層水田・SF155芯材（1/80）

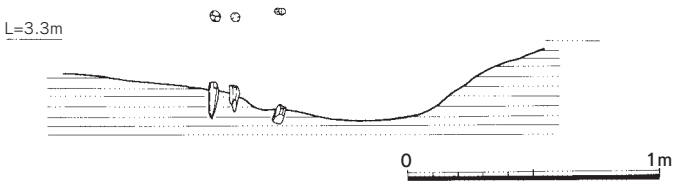


図150　SA161杭列（1/30）

SF153はできなかった。SF155とSF156は直線的に併走するがSF154やSF157、SF158は調査区南側で弓なりに曲がり、調査区外の大区画を予想させてくれる。

大畦畔の規模は上幅約0.6m～0.8m、下幅約1.5m～２m、高さ約0.3mである。断面形態は台形で上面は平坦で硬化面がみられた。踏みかためられたように窪んだ痕跡もあり農道として使用された可能性がある。

水田はそれぞれ大畦畔を基軸とした小区画の設定がなされている。大区画１の西側を区画するSF154に接する小畦畔は垂直にのびておりSF154を基軸として小区画の設定がなされている。従ってSF155に接する小区画の平面形態は不整形が多くなる。１－２畦は調査時に掘りすぎたもので水田面には自然木の芯材が横たわる。大区画１で検出した小区画は８区画である。

大区画２、３でみればそれぞれSF157とSF158を基軸として小区画がつくられる。大区画２のうち大半は平面正方形や長方形であるがSF156と接する小区画である12、16などは不整形に近くなる。大区画３の東側を区画する大畦畔は調査区内では検出できなかった。また、小区画49、50、51の小畦畔はやや幅が広い。大区画２で検出した小区画は25区画で大区画３は18区画である。

③取水口と堰

中層水田の10cm～20cm上方に上層水田はつくられる。下層水田や上層水田がつくられる段階で比高差は10cm内外の平坦地になっており、その上に上層水田がつくられたため、その水田面も比高差は10cm内外である。弥生水田以前の地山地形は図125に示すが南東側にむかって低くなる。宇木川・半田川流域のコモ層分布をみても梅白遺跡の南方にその堆積が確認されており、南側にむかって低くなることが予想される。従って上層水田の水懸かりも北から南の水流方向が予想される。

大区画１の北側では取水口がみられる。SF153とSF156間は水路になっており、分岐してSD149、SD150とさらに大区画１に注ぎ込む。SF153とSF156間の水路にはSA161杭列が垂直方向に打たれる。また、SF155北側先端部は肥厚しSD150側は芯材を入れて補強する。図148に水口の平面図、図149にSF155芯材、図150にSA161杭列を示す。

水口であるSF154とSF155の間は1.83cmで水田面から数cm浮いた状態で斧柄192-15、部材195-26が出土した。周辺から自然木も数本出土した。

SF155先端部は水口側に肥厚し幅約2.4mである。畦畔内のSD150側は芯材による補強がなされていた。芯材に用いられた材は枝おとしされた径10cm前後の直線的な丸太材である。これらの芯材は畦畔の方向を向くものの比較的雑然と溝の斜面側に置かれる。芯材は自然木が大半で長方形のほぞ穴がある部材が１点出土した。SF155から不明木製品２点196-32が出土した（PL48-2）。

SA161杭列はSF153とSF156間の水路に垂直方向に打たれる。杭先端部は鋭い工具により削られている。現存する杭は３本しかないが重機による掘削時にSA161と思われる杭を数本検出した。

④水路

SD149はSF153とSF154の間を流れる溝で水田面での幅50cm～１m、深さ約15cm～20cmである。溝の断面形態は南側はレンズ状であるが北側は深い皿状になる。埋土は褐灰色粗砂で基盤土である黒褐色粘質土と青灰色粗砂の混合土層で青灰色粗砂の割合が多い。北側に従い粗砂の量が多いことは水流が北→南であることを示す。

SD150はSF155とSF156の間を流れる溝で水田面での幅約90cm、深さ14cmである。溝の断面形は逆台形である。埋土は３層からなりSD149埋土とは異なり粗砂を含まない。１層は暗赤褐色粘質土（Hue2.5YR3/2）で植物遺体層である。２層は黒褐色粘質土（Hue5YR2/2）で褐色粘土と黒色粘土がまだ

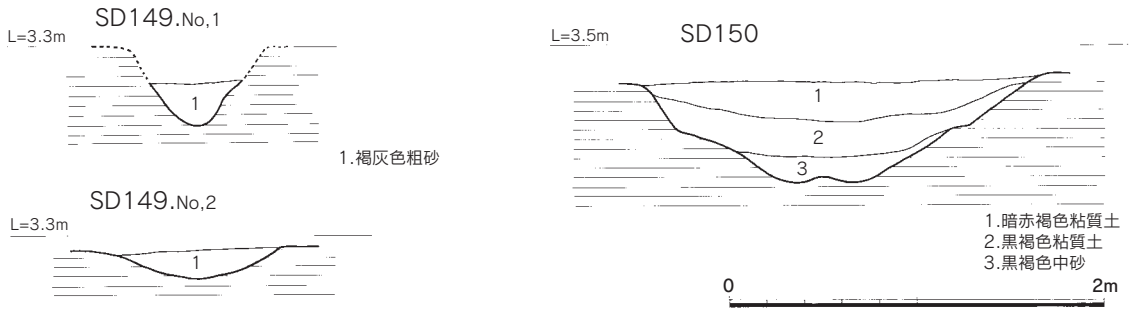


図151　SD149・SD150土層図（1/40）

ら状に混入する。粒子は極めて緻密で礫、砂粒は全く含まない。植物遺体を若干含む。３層は黒褐色中砂（Hue10YR3/1）で粘性がある。埋土中から部材195-28が出土した。

SF157とSF158の間も水路状になるが溝底が水田面より12cm高く、埋土はコモ層ａ，ｂからなる。コモ層ａは植物遺体層でコモ層ｂは植物遺体層と茶褐色粘質土の混合土である。大区画２，３水田への入水のための水路の可能性が十分考えられるが調査区内でSF157、SF158大畦畔がきれた箇所はない。

⑤配水

水懸かりは北から南への水流方向が予想されることや大区画内への取水口は大区画１でのみみられることは前述した。ここでは、大区画内での配水についてのべる。

小区画内への配水は畦畔をきって水口をつくるもの（Ａ類）と畦畔の上面を少し窪ませ水が順次隣りの田へ移っていく方法をとるもの（Ｂ類）がある。Ｂ類は「田越し」や「懸け流し潅漑」とよばれているものである。

Ａ類は大区画１でのみみられる。２－３畦とSF154の間は60cm、４－５畦とSF154の間は推定1.5ｍ、６－７畦とSF155の間は55cmである。Ｂ類は大区画１、大区画２、大区画３すべてでみられる。その窪ませ方は数cm～10数cmである。このＡ類、Ｂ類の水口をもとに水田間の配水系統を復元したのが図152である。まず、Ａ類、Ｂ類の水口は東西方向にはしる畦につくられる。これは北から南への水懸かりと一致する。例外が46－47畦、49－50畦、50－51畦でみられるがこれは水田面の高低による。

大区画１では１→２→３→４→５と１→２→６→７→８の２つの配水系統がある。大区画２では10→14→18→22→26→30や11→15→19→23→27→31→33などの配水系統が考えられ、大区画３でも同様の水懸かりである。

⑥畦畔内埋納農具、芯材

大畦畔、小畦畔とも土を盛りあげてつくる。大畦畔の盛土は明褐灰色粘質土で灰色粘質土をベースとして中砂を含む。下層の土を盛り上げて畦畔をつくる。畦畔盛土内から二又鍬４点、建築部材や自然木を使った芯材、小型丸底壺１が出土した。この出土状況を示したのが図153である。

二又鍬は大畦畔から３点、小畦畔から１点出土している。４点のうち２点が完形の二又鍬で２点は欠損した鍬を埋納していた。大畦畔としてはSF154直下から二点出土している。190-6は完形で遺存状態も良好である。畦畔に対して垂直方向に置かれ周辺には自然木や小石も出土した。189-2は刃部、基部を欠損する。正確な出土地点がわからなくなった。SF157直下から189-4が出土した。ほぼ完形である。小畦畔では46－50畦と46－49畦の交差地点から190-5が出土した。

この他の畦畔内埋納遺物としてSF156から小型丸底壺（13）が出土した。

芯材をいれて畦畔を補強しているSF155先端部については前述した。SD150側に芯材をいれており水流

図152　上層水田　水田区画番号・水流方向想定図（1/400）

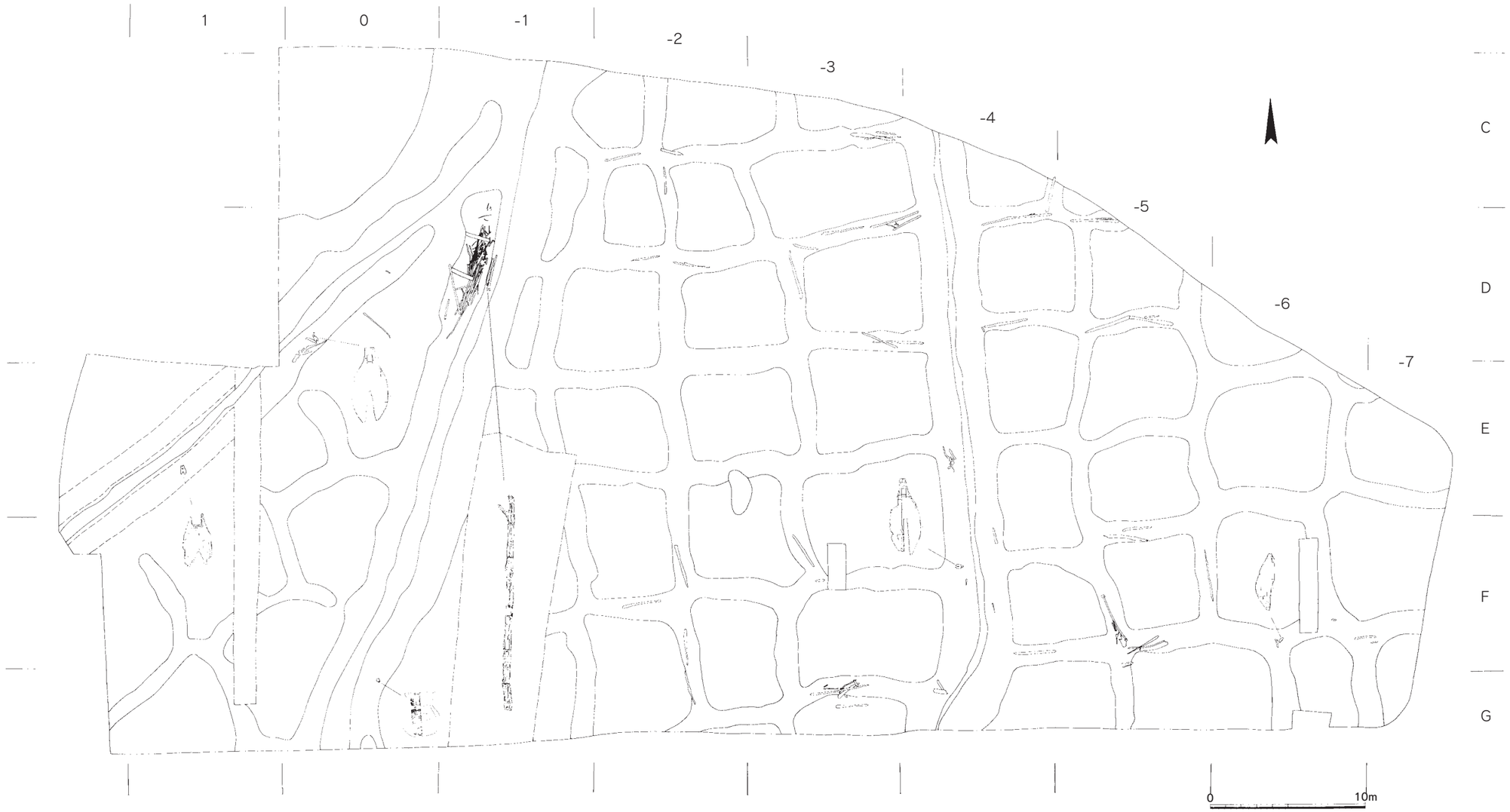


図153　古墳上層水田畦畔内芯材・埋納農具（1/300）

に対する補強が考えられる。これ以外の芯材の大部分は小畦畔に配置している。芯材はほぞ穴をあけた建築部材もあるが自然木が大半である。195-27、196-29、196-30、196-31が芯材として使われた建築部材である。ほぞ穴に杭を打ち固定したものもあった。

これら芯材は図153をみてもわかるように小畦畔すべてに置いたものではなく小畦畔の交差する付近を中心として置いている。また、畦畔内の中央に置くといった規則性はなく雑然と置かれる。芯材の中には径数cmの細い自然木もある。これらのことから芯材は畦畔の補強を目的としたものではなく、畦畔をつくる前の割付的な役割を果たしたものと考えられる。９－13畦の芯材は杭を打ち固定していた（PL50-4）。

表41　古墳上層水田計測表（１）

番号	標高（m）	面積	平面形態	畦		畦		畦		畦		備考
1	3.05 ～ 3.10	21.27	三角形	ＳＦ１５５		ＳＦ１５４		１－２				北に水口
				長	10.60	長	6.20	長	5.00	長		
				幅	2.30	幅	1.75	幅	(1.10)	幅		
				高	0.20	高	0.25	高		高		
2	2.95 ～ 3.05	41.46	四角形	ＳＦ１５５		ＳＦ１５４		２－３		２－６		南西に尻水口
				長	6.00	長	5.60	長	5.00	長	2.70	
				幅	1.90	幅	1.55	幅	1.95	幅	1.25	
				高	0.25	高	0.30	高	0.20	高	0.10	
3	2.95	22.75	四角形	３－２		３－６						北に水口
				長	4.50	長	3.80	長		長		
				幅	1.95	幅	1.40	幅		幅		
				高	0.20	高	0.15	高		高		
4	3.00	53.68	不整形	４－６		４－７		４－５				西に尻水口
				長	5.00	長	6.65	長	6.50	長		
				幅	1.05	幅	1.05	幅	1.45	幅		
				高	0.25	高	0.10	高	0.10	高		
5	3.00	32.98	不明	５－４		５－８						北に水口
				長	6.25	長		長		長		
				幅	1.45	幅	1.05	幅		幅		
				高	0.10	高	0.10	高		高		
6	2.90	34.47	五角形	６－２		６－３		６－４		６－７		南に尻水口
				長	2.60	長	4.20	長	4.55	長	2.30	
				幅	1.45	幅	1.40	幅	1.05	幅	1.15	
				高	0.10	高	0.20	高	0.20	高	0.10	
7	2.95	42.31	四角形	７－６		７－４		７－８		ＳＦ１５５		北に水口
				長	2.90	長	5.60	長	6.00	長	8.40	
				幅	1.10	幅	1.10	幅	1.30	幅	1.35	
				高	0.10	高	0.10	高	0.05	高	0.20	
8	3.05 ～ 3.10	33.41	不明	８－５								
				長	7.10	長		長		長		
				幅	1.05	幅		幅		幅		
				高	0.15	高		高		高		
9	3.05 ～ 3.10	18.57	三角形？	９－１０		９－１３		９－１２				
				長	4.35	長	2.40	長	2.90	長		
				幅	1.60	幅	1.20	幅	1.35	幅		
				高	0.10	高	0.10	高	0.10	高		
10	2.95	26.50	四角形？	１０－１１		１０－９		１０－１４		１０－１５		１０－１４畦に窪みあり
				長	2.45	長	4.60	長	4.65	長	2.40	
				幅	1.30	幅	1.60	幅	1.10	幅	1.40	
				高	0.10	高	0.15	高	0.10	高	0.15	

表42　古墳上層水田計測表（2）

番号	標高（m）	面積	平面形態	畦		畦		畦		畦		備考
11	2.95	9.96	不明	１１－１０		１１－１５						１１－１５畦に窪みあり
				長	2.30	長	6.40	長		長		
				幅	1.40	幅	1.25	幅		幅		
				高	0.15	高		高		高		
12	3.15	11.55	三角形	１２－９		１２－１３		１２－１６		１２－１７		
				長	2.10	長	5.20	長	0.70	長	1.80	
				幅	1.35	幅	1.60	幅	1.00	幅	1.50	
				高	0.05	高	0.10	高	0.10	高	0.10	
13	3.05	16.98	四角形	１３－９		１３－１２		１３－１４		１３－１７		
				長	2.00	長	4.40	長	5.10	長	3.70	
				幅	1.15	幅	1.25	幅	1.10	幅	1.50	
				高	0.10	高	0.15	高	0.05	高	0.10	
14	2.95 ～ 3.00	27.17	四角形	１４－１０		１４－１５		１４－１３		１４－１８		
				長	3.70	長	4.75	長	5.50	長	5.00	
				幅	1.10	幅	1.15	幅	1.10	幅	1.35	
				高	0.10	高	0.05	高	0.10	高	0.10	
15	2.85	48.15	長方形	１５－１１		１５－１０		１５－１４		１５－１９		
				長	7.15	長	2.45	長	4.95	長	8.90	
				幅	1.25	幅	1.40	幅	1.15	幅	1.15	
				高	0.15	高	0.15	高	0.10	高	0.10	
16	3.15	8.41	長方形	１６－１２		１６－１７		１６－２０		ＳＦ１５６		
				長	0.80	長	5.75	長	1.75	長	5.20	
				幅	1.00	幅	1.50	幅	1.20	幅	1.90	
				高	0.10	高	0.10	高	0.10	高	0.20	
17	3.05	38.16	正方形	１７－１３		１７－１６		１７－１８		１７－２１		
				長	5.15	長	6.15	長	5.60	長	6.15	
				幅	1.50	幅	1.50	幅	1.70	幅	1.15	
				高	0.15	高	0.15	高	0.15	高	0.15	
18	2.95	32.57	長方形	１８－１４		１８－１７		１８－１９		１８－２２		
				長	5.70	長	4.45	長	5.10	長	6.30	
				幅	1.35	幅	1.70	幅	1.35	幅	1.70	
				高	0.10	高	0.20	高	0.05	高	0.10	
19	2.85 ～ 2.90	44.86	台形	１９－１５		１９－１８		１９－２３		ＳＦ１５７		
				長	7.50	長	4.55	長	7.20	長	6.05	
				幅	1.10	幅	1.40	幅	1.20	幅	1.70	
				高	0.10	高	0.05	高	0.15	高	0.25	
20	3.10	10.94	不明	２０－１６		２０－２１		ＳＦ１５６				
				長	2.55	長	4.15	長	3.20	長		
				幅	1.20	幅	1.30	幅	2.10	幅		
				高	0.10	高	0.15	高	0.20	高		
21	3.00 ～ 3.05	31.72	長方形	２１－１７		２１－２０		２１－２２		２１－２５		
				長	5.85	長	4.20	長	4.95	長	5.75	
				幅	1.15	幅	1.30	幅	1.50	幅	1.05	
				高	0.10	高	0.15	高	0.10	高	0.05	
22	2.90	37.39	長方形	２２－１８		２２－２１		２２－２３		２２－２６		
				長	6.45	長	5.20	長	5.30	長	6.65	
				幅	1.80	幅	1.50	幅	1.50	幅	1.60	
				高	0.15	高	0.15	高	0.15	高	0.10	
23	2.90	46.32	長方形	２３－１９		２３－２２		２３－２７		ＳＦ１５７		２３－１９畦に窪みあり ２３－２７畦に窪みあり
				長	7.60	長	6.45	長	7.40	長	4.95	
				幅	1.20	幅	1.50	幅	1.30	幅	2.20	
				高	0.15	高	0.15	高	0.10	高	0.25	
24	2.95	5.11	不明	２４－２５								
				長	4.85	長		長		長		
				幅	1.30	幅		幅		幅		
				高	0.10	高		高		高		

表43　古墳上層水田計測表（３）

番号	標高（m）	面積	平面形態	畦		畦		畦		畦		備考
25	2.95	36.55	長方形	２５－２１		２５－２４		２５－２６		２５－２９		
				長	4.85	長	5.25	長	6.20	長	5.25	
				幅	1.10	幅	1.30	幅	1.30	幅	1.55	
				高	0.05	高	0.10	高	0.15	高	0.10	
26	2.85 ～ 2.90	40.21	五角形	２６－２２		２６－２５		２６－２７		２６－３０		
				長	5.50	長	5.70	長	6.35	長	5.65	
				幅	1.60	幅	1.30	幅	1.45	幅	1.45	
				高	0.10	高	0.15	高	0.15	高	0.20	
27	2.85 ～ 2.90	58.60	長方形	２７－２３		２７－２６		２７－３１		ＳＦ１５７		２７－２３畦に窪みあり
				長	8.35	長	6.20	長	7.65	長	7.25	
				幅	1.30	幅	1.45	幅	1.50	幅	1.65	
				高	0.15	高	0.15	高	0.10	高	0.25	
28	2.95	15.51	不明	２８－２４		２８－２９						
				長	1.60	長	6.55	長		長		
				幅	1.30	幅	1.30	幅		幅		
				高	0.05	高	0.05	高		高		
29	2.90 ～ 2.95	43.91	台形	２９－２５		２９－２８		２９－３０				
				長	5.40	長	7.80	長	6.20	長		
				幅	1.55	幅	1.30	幅	1.25	幅		
				高	0.15	高	0.10	高	0.15	高		
30	2.90 ～ 2.95	34.77	長方形	３０－２６		３０－２９		３０－３１		３０－３２		
				長	5.20	長	6.80	長	5.70	長	4.65	
				幅	1.45	幅	1.25	幅	1.60	幅	1.05	
				高	0.15	高	0.10	高	0.15	高	0.15	
31	2.90	51.52	長方形	３１－２７		３１－３０		３１－３３		ＳＦ１５７		３１－３３畦に窪みあり
				長	8.55	長	5.55	長	8.35	長	5.50	
				幅	1.50	幅	1.60	幅	1.40	幅	2.40	
				高	0.10	高	0.15	高	0.15	高	0.30	
32	3.05	4.77	不明	３２－２９		３２－３０		３２－３３				
				長	1.50	長	4.30	長	1.00	長		
				幅	1.05	幅	1.05	幅	1.10	幅		
				高	0.10	高	0.10	高	0.10	高		
33	3.00	17.87	不明	３３－３１		３３－３２		ＳＦ１５７				３３－３１畦に窪みあり
				長	7.30	長	2.10	長	1.60	長		
				幅	1.40	幅	1.10	幅	2.10	幅		
				高	0.10	高	0.10	高	0.20	高		
34	2.90	14.72	正方形？	３４－３５		ＳＦ１５８						３４－３５畦に窪みあり
				長	4.55	長	4.10	長		長		
				幅	1.30	幅	1.60	幅		幅		
				高	0.10	高	0.25	高		高		
35	2.90	34.36	正方形	３５－３４		３５－３６		３５－３７		ＳＦ１５８		３５－３７畦に窪みあり
				長	5.10	長	5.65	長	5.65	長	5.10	
				幅	1.30	幅	1.05	幅	1.15	幅	1.75	
				高	0.10	高	0.10	高	0.10	高	0.25	
36	2.90 ～ 2.95	26.48	正方形	３６－３５		３６－３８						３６－３８畦に窪みあり
				長	5.35	長	5.40	長		長		
				幅	1.00	幅	1.25	幅		幅		
				高	0.10	高	0.05	高		高		
37	2.90 ～ 2.95	35.52	長方形	３７－３５		３７－３８		３７－４０		ＳＦ１５８		３７－４０畦に窪みあり
				長	5.70	長	5.90	長	4.30	長	6.35	
				幅	1.15	幅	1.00	幅	0.90	幅	1.85	
				高	0.10	高	0.10	高	0.05	高	0.30	
38	2.90	39.57	不整形	３８－３６		３８－３７		３８－４１				３８－４１畦に窪みあり
				長	5.05	長	6.60	長	6.80	長		
				幅	1.25	幅	1.00	幅	1.10	幅		
				高	0.10	高	0.10	高	0.10	高		

表44　古墳上層水田計測表（4）

番号	標高（m）	面積	平面形態	畦		畦		畦		畦		備考
39	3.00	16.17	正方形	３９－３６		３９－３８		３９－４２				３９－４２畦に窪みあり
				長	2.25	長	3.00	長	5.60	長		
				幅	1.50	幅	1.15	幅	1.45	幅		
				高	0.10	高	0.10	高	0.10	高		
40	2.85 ～ 2.90	32.00	長方形	４０－３７		４０－４１		４０－４４		ＳＦ１５８		４０－４４畦に窪みあり
				長	4.10	長	5.90	長	4.85	長	6.35	
				幅	1.15	幅	1.10	幅	1.00	幅	1.45	
				高	0.05	高	0.10	高	0.10	高	0.30	
41	2.90	32.34	長方形	４１－３８		４１－４０		４１－４２		４１－４５		
				長	6.20	長	4.00	長	4.40	長	6.10	
				幅	1.10	幅	1.10	幅	1.50	幅	1.35	
				高	0.10	高	0.10	高	0.20	高	0.05	
42	3.0 ～ 3.05	50.99	正方形	４２－３９		４２－４１		４２－４３		４２－４６		４２－４６畦に窪みあり
				長	6.45	長	6.05	長	6.45	長	6.30	
				幅	1.45	幅	1.50	幅	1.20	幅	1.75	
				高	0.10	高	0.10	高	0.15	高	0.10	
43	3.10	30.75	正方形	４３－４２		４３－４７						
				長	4.20	長	6.35	長		長		
				幅	1.20	幅	1.15	幅		幅		
				高	0.10	高	0.10	高		高		
44	2.85	26.46	不整形	４４－４０		４４－４５		４４－４８		ＳＦ１５８		４４－４８畦に窪みあり
				長	4.25	長	4.35	長	6.00	長	4.60	
				幅	1.00	幅	1.35	幅	1.30	幅	1.60	
				高	0.10	高	0.05	高	0.15	高	0.30	
45	2.85	29.76	台形	４５－４１		４５－４４		４５－４６		４５－４９		
				長	5.60	長	5.50	長	5.30	長	4.50	
				幅	1.35	幅	1.35	幅	1.30	幅	1.70	
				高	0.10	高	0.10	高	0.15	高	0.15	
46	2.95 ～ 3.00	38.61	五角形	４６－４２		４６－４５		４６－４７		４６－４９		
				長	4.75	長	6.30	長	6.00	長	3.40	
				幅	1.75	幅	1.30	幅	1.45	幅	1.60	
				高	0.15	高	0.10	高	0.15	高	0.10	
47	3.05 ～ 3.15	48.29	不整形	４７－４２		４７－４３		４７－４６		４７－５０		
				長	1.50	長	6.75	長	5.90	長	1.65	
				幅	1.30	幅	1.15	幅	1.45	幅	2.00	
				高	0.05	高	0.05	高	0.10	高	0.10	
48	2.90 ～ 3.00	30.10	不明	４８－４４		４８－４９		ＳＦ１５８				
				長	5.80	長	4.15	長	4.65	長		
				幅	1.30	幅	1.15	幅	2.90	幅		
				高	0.10	高	0.10	高	0.30	高		
49	2.90 ～ 3.00	45.86	長方形？	４９－４５		４９－４６		４９－４８		４９－５０		
				長	4.80	長	3.50	長	4.80	長	4.80	
				幅	1.70	幅	1.60	幅	1.15	幅	1.60	
				高	0.10	高	0.10	高	0.10	高	0.10	
50	3.05 ～ 3.10	20.74	長方形	５０－４６		５０－４７		５０－４９		５０－５１		
				長	2.50	長	1.70	長	5.25	長	4.90	
				幅	2.45	幅	2.00	幅	1.60	幅	1.70	
				高	0.10	高	0.10	高	0.10	高	0.10	
51	3.15	11.17	不明	５１－４７		５１－５０						５１－５０畦に窪みあり
				長	2.85	長	4.90	長		長		
				幅	2.00	幅	1.70	幅		幅		
				高	0.05	高	0.10	高		高		

３，中世・近世水田跡

（１）中世水田跡（図154）

地形にそった溝跡SD281、SD282、SD283を検出した。調査区西側の自然流路と同じ方向であり、中世の溝も地形に沿い蛇行して流れることから自然流路であろうが、明らかな掘り直しがみられたことやSD289のようにこれらに取り付けるような溝がみられる。これらの溝跡をもって水田と認定するにはやや躊躇するが、水田あるいは畑作に伴う水路と考えた。

SD281～283の埋土は基本的に同じで３～４層がレンズ状に堆積する。最下層は黒褐色粗砂で上層に基本土層の４層、５層が堆積する。溝の規模はSD281の幅約２ｍ、深さ約20cm、SD282の幅約１ｍ、深さ約30cm、SD283の幅約３ｍ、深さ約30cmを測る。

出土遺物は土師器皿や中国産磁器が出土しており、図197に掲載する。

（２）近世水田跡（図155）

近世の溝跡４条と杭列、足跡を検出した。図156に遺構配置図を示す。SD101とSD102溝跡は併行しており、さらにこれら二条の溝跡に併行する杭列がうたれ、その周辺には足跡が多数みられる。やや地点をかえて方形に区画された杭列もあり積極的な根拠は少ないものの水田跡と考えた。

①溝跡・杭列・足跡

SD101・102

二条に並んで調査区を斜めに横切る溝跡である。平面検出と掘り下げ、調査はD-４、５区画のみであったが、両溝跡の延長状の調査区壁面で溝の断面が確認でき二条の溝は直線的に併走して調査区を斜めに横切ることが判った。二条の溝の方位はN38°Wで、SD101とSD102間は約２ｍ～2.5ｍである。

SD101は幅60cm、深さ20cm、断面レンズ状である。埋土は黄褐色、明黄褐色粗砂からなり炭化物、小礫を混入する。溝埋土から流水が考えられる。埋土中から近世陶磁器片が出土した。

SD102は幅70cm～95cm、深さ16cm、断面逆台形状である。埋土は灰白色シルト、細砂でレンズ状堆積である。埋土中から近世陶器片、寛永通宝が出土した。

SD101とSD102の間を主として溝と平行して杭列が並ぶ。この杭列は溝の間だけでなく溝の両側にも一列にうたれる。

また、SD101、SD102周辺には多数の足跡を検出した。この足跡は基本層序の４層を重機掘削し５、６層直上で平面検出した。斑点状に多数検出でき、中には人の足跡以外にも牛馬の足跡痕らしきものもみられた。部分的に検出し、1/20で図化した。この足跡は４層から踏みこんでおり近世の所産であることが判る。５～７ライン付近では４層がブロック状に混入されており現状では７ライン付近までは足跡が検出できる。さらに調査区西側では4層が削平されているため本来あったかどうかは不明である。

以上の遺構の状況からSD101、102は水田に関連する水路でありその護岸保護の杭列と水田面の足跡などから水田跡とした。

SD201

Ｂ-10～14区画の調査区北壁沿いで検出した。溝は直線的に東西方向に走る。調査区外にまたがるため溝幅は不明であり深さは約10cmである。埋土中から陶磁器片、銭貨が出土した。

SD266

Ｂ、Ｃ-14区画で検出した。本来、溝が直線的にはしるのだろうが、上部が削平されて土坑状に並ぶ。溝幅は0.8ｍ～1.9ｍで深さは0.15ｍ～0.3ｍである。溝の走向方位はN12°WでSD101、102と似る。埋土中から陶磁器片が出土した。

杭列

SD201の南方を溝と同じ方位に杭列がうたれる。さらにこの杭列と垂直にもうたれ、杭列による区画がつくられる。区画の東西幅は32mである。これらの溝や杭列も水田と関係する遺構の可能性がある。

４，水田跡の出土遺物

（１）弥生時代の遺物

①低地部水田出土土器（図157～159）

水田跡からは少量であるが、上層と下層水田の溝跡を中心に土器が出土している。ここでは一括して報告する。

１～23は甕類。１は甕Ⅰ類の口縁部片。２～４は甕ⅡＢ②類。２は口縁端部を丁寧に面取りし、端部を外方につまみ出し、浅く小さな刻目を施す。胴部突帯の整形は粗い。３は口縁端部の整形が他とは違い、上方に向けて尖らせ、ヘラ状工具による刻目を正面から施す。９～15は甕Ⅲ類。９は口縁部の外反がほとんどなく、端部に向かって薄く仕上げる。端部に正面から全面に棒状工具による刻目を施す。板付祖形甕と呼ばれるものか。10は口縁部の外反が大きく、端部の正面から密に刻目を施す。胴部が若干張る。外器面に煤が付着する。12は口縁部と思われるが、外反が強く口縁端面の下端部に刻目を施し、胴部にも浅く小さな刻目を施す。13は口縁端面の下端部をつまみ出し、密に刻目を施す。胴部が欠損するため確実ではないが、口縁下端凸状甕といわれるものか。その場合はⅢ類に含まれなくなる。14，15は無刻目の甕。16～23は甕Ⅳ類。23は口縁部の一部を欠くものの、底部付近までわかる個体。胴部に無刻目の突帯を巡らす。24～29，32は壺。24～26は壺ⅡＡ類。28，29は大型品の口縁部片で、壺棺の口縁部か。30，31，33～36は浅鉢。30，31，33，36はⅡＡ①類。34，35はⅡＢ類。37は蓋の端部片。38～68は底部。38～62は甕の底部と思われ、甕Ⅲ、Ⅳ類の底部が多い。

②低地部水田出土石器（図160～161）

１～８は両刃石斧。１は太型蛤刃石斧の基部。３，４は片方もしくは両方の割れ面を平坦にしており、破片を再加工したものか。５は小型の両刃石斧のほぼ完形品。基部の一部を欠く。身部が薄く、刃部は明確な鎬をつくり出しておらず、稜も甘い。７，８は基部にむかいすぼまる縄文系伐採斧の基部の細片。９は石庖丁の完形品。古墳時代の溝跡SD149から出土。片刃の石庖丁。重さ37.6g。10～14は打製石鏃。10，13はａ類で、13は剝片の形状をそのまま利用したいわゆる剥片鏃と呼ばれるもの。

③微高地水田出土土器・石器（図162～163）

SD265出土の1は高杯Ⅲ類か。２は底面に籾跡圧痕が残る。３は底面に木葉圧痕が残り、その後沈線を施す。４，５はⅣ類の底部。６はほぼ完形のノミ状片刃石斧であり、重さ11.9g。斧頭部にむけて広がる刃部が両刃気味になる。７，８は打製石鏃。７はｄ類のほぼ完形品。基部と先端部の一部を欠く。８はｂ類。SD267出土の9は刻目の位置が他とは違うことから、別形式の可能性がある。10は甕Ⅲ類の口縁部。口縁端面の下端部を中心に全面に刻目を施す。11，13は甕の底部。14は壺の底部。16は先端部を欠く打製石鏃ｄ類。SD286出土17～20は甕Ⅳ類の須玖式土器。21も同じくⅣ類の高杯。SD288出土の24は壺の底部。25は甕の底部。26は若干寸詰まりの打製石鏃ｄ類。SD289出土の27は両刃石斧の刃部先端。SD290出土の28は甕Ⅳ類の口縁部。

図154　中世溝(1/400)・土層(1/60)

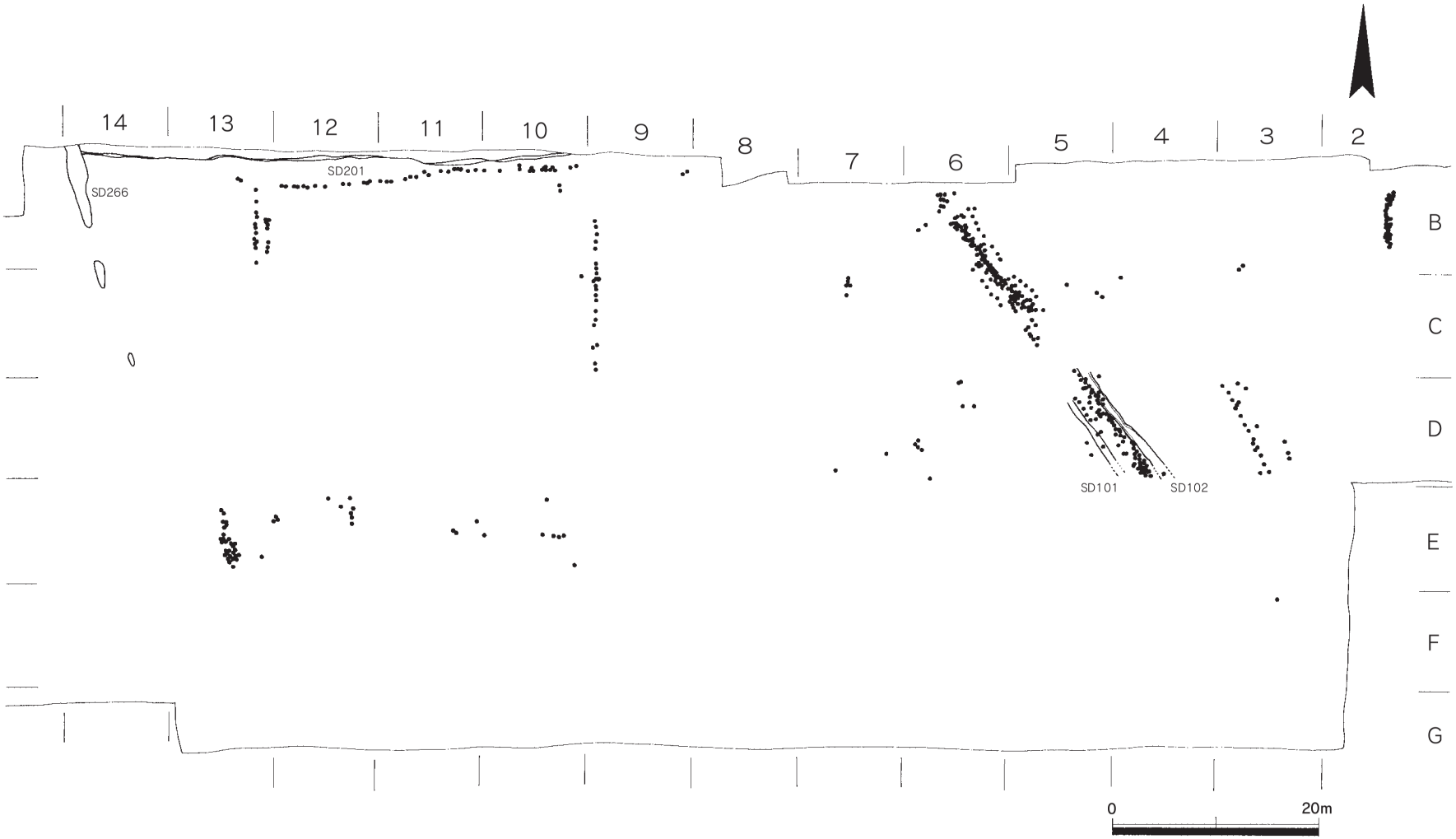


図155　近世溝・杭列(1/600)

図156　ＳＤ101・102溝・足跡(1/80)・土層(1/30)

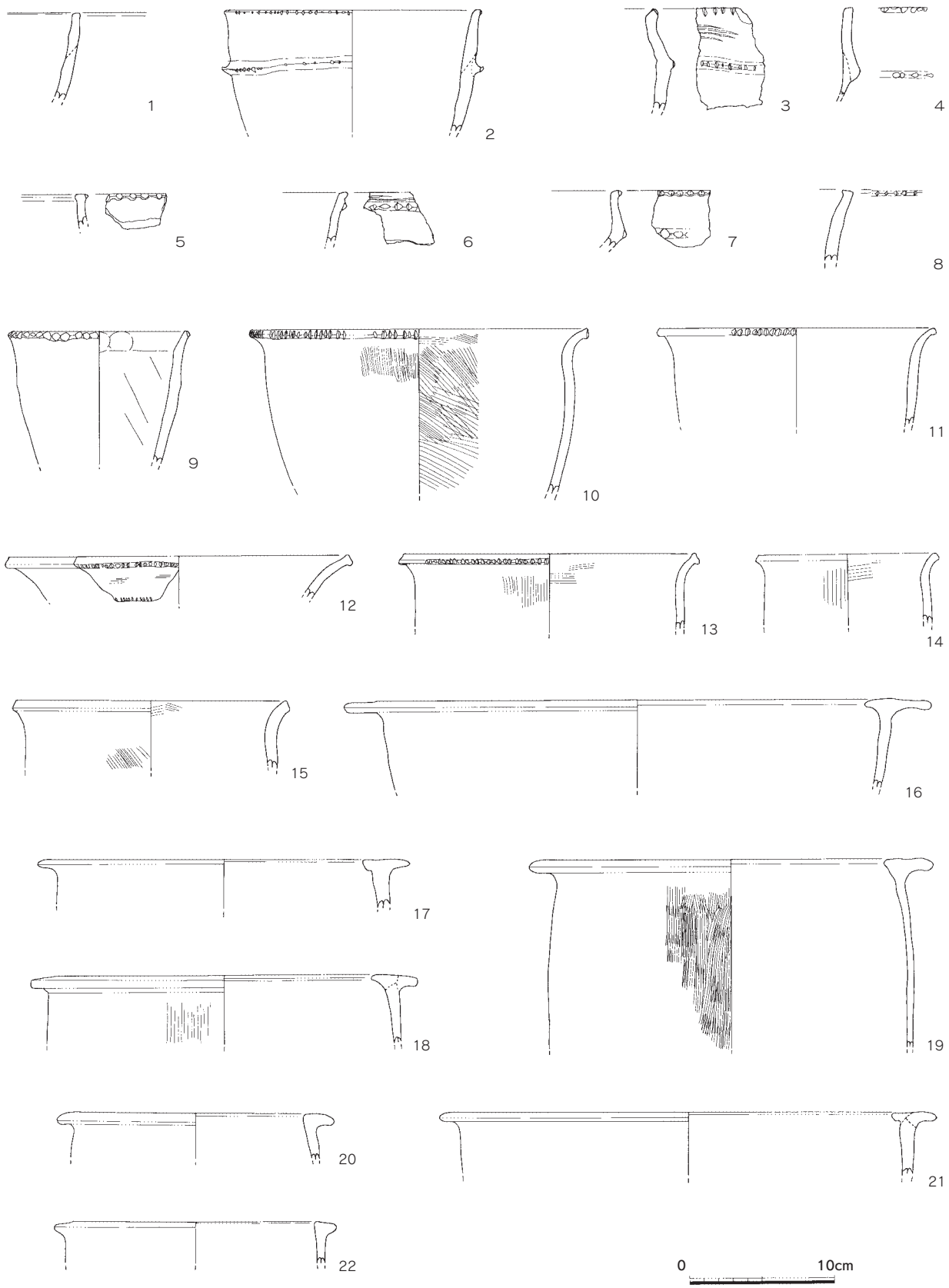


図157　低地部弥生水田出土土器１(1/4)

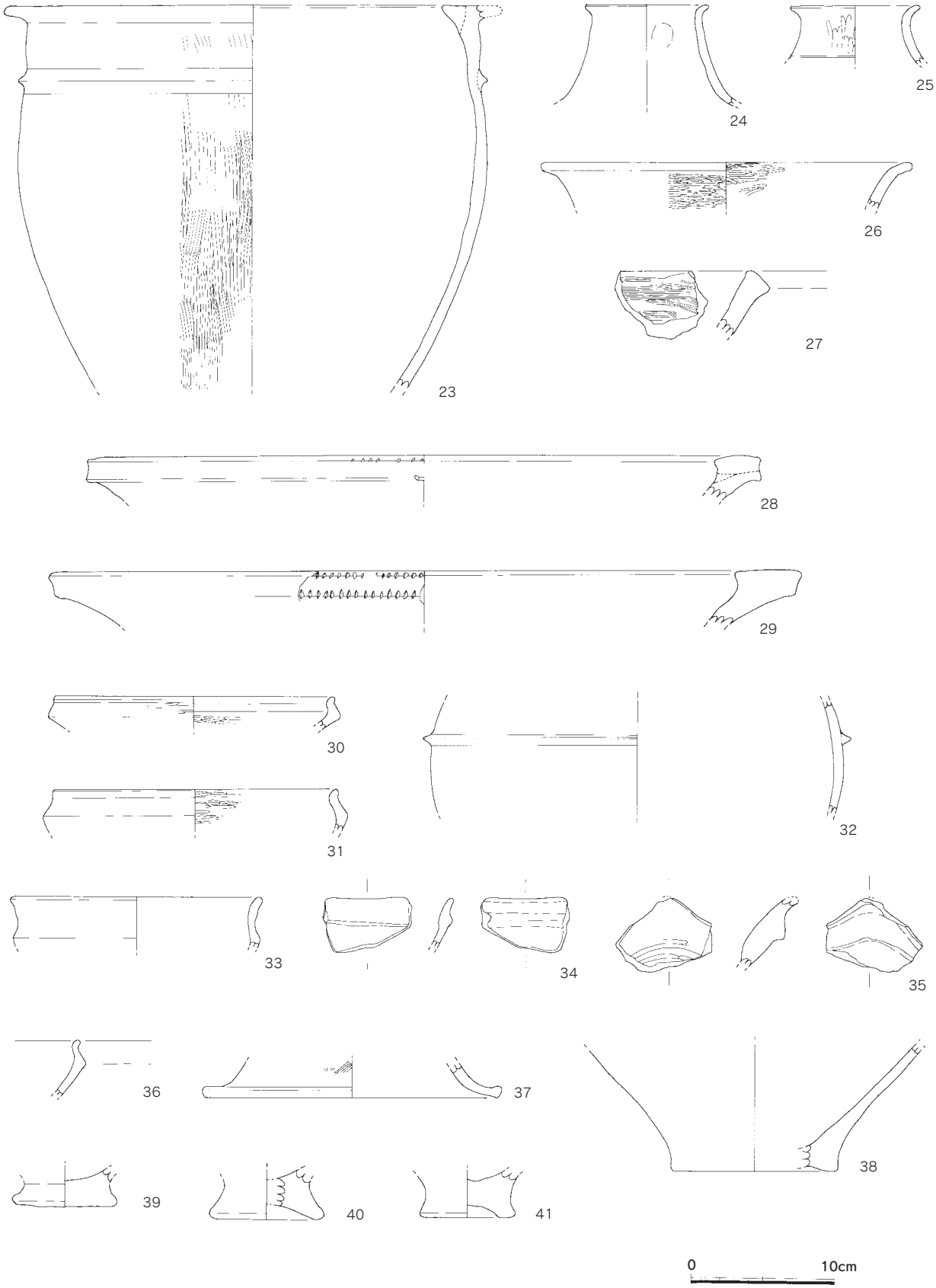


図158　低地部弥生水田出土土器２(1/4)

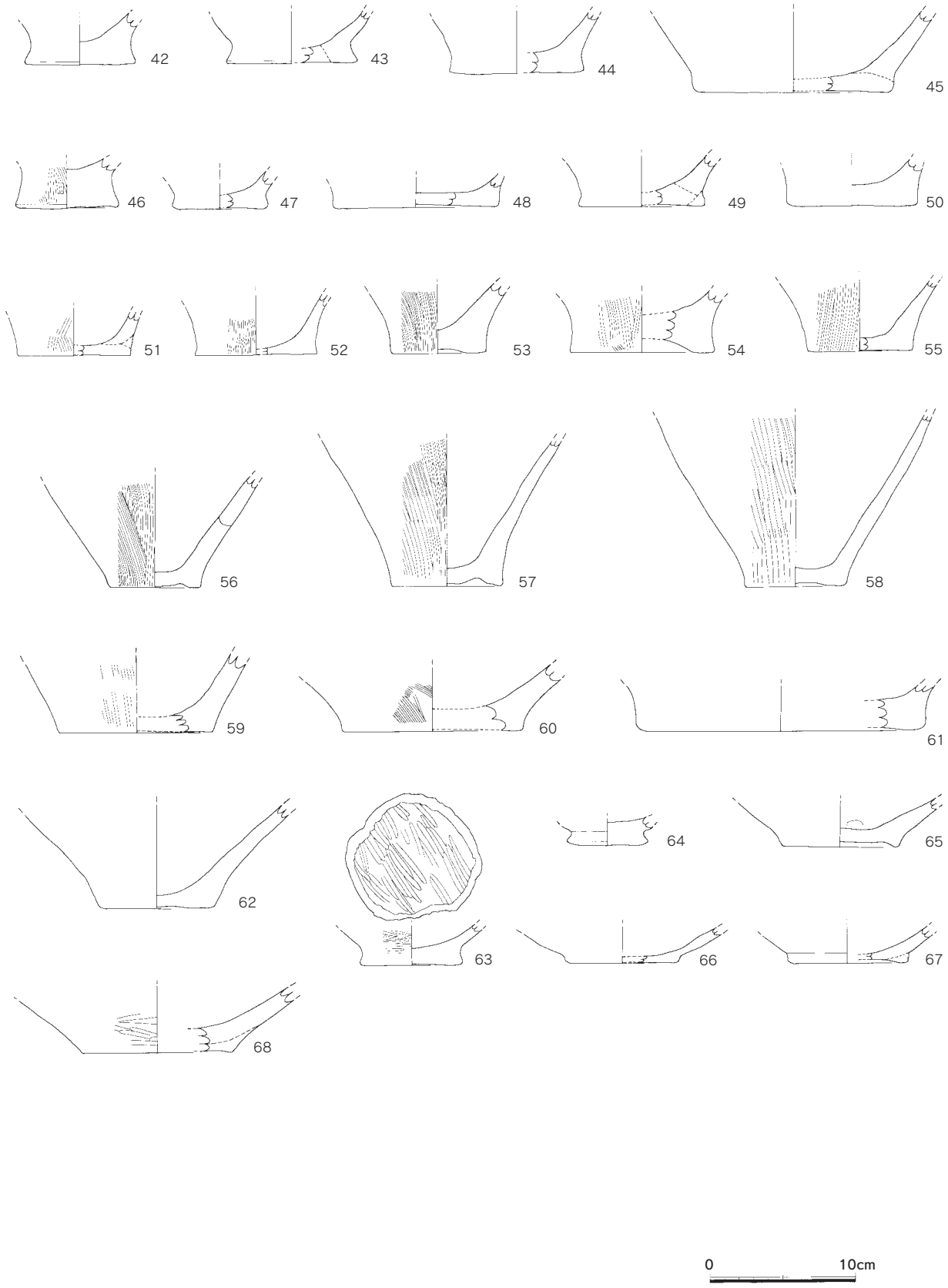


図159　低地部弥生水田出土土器３(1/4)

図160　低地部弥生水田出土石器１(1/3)

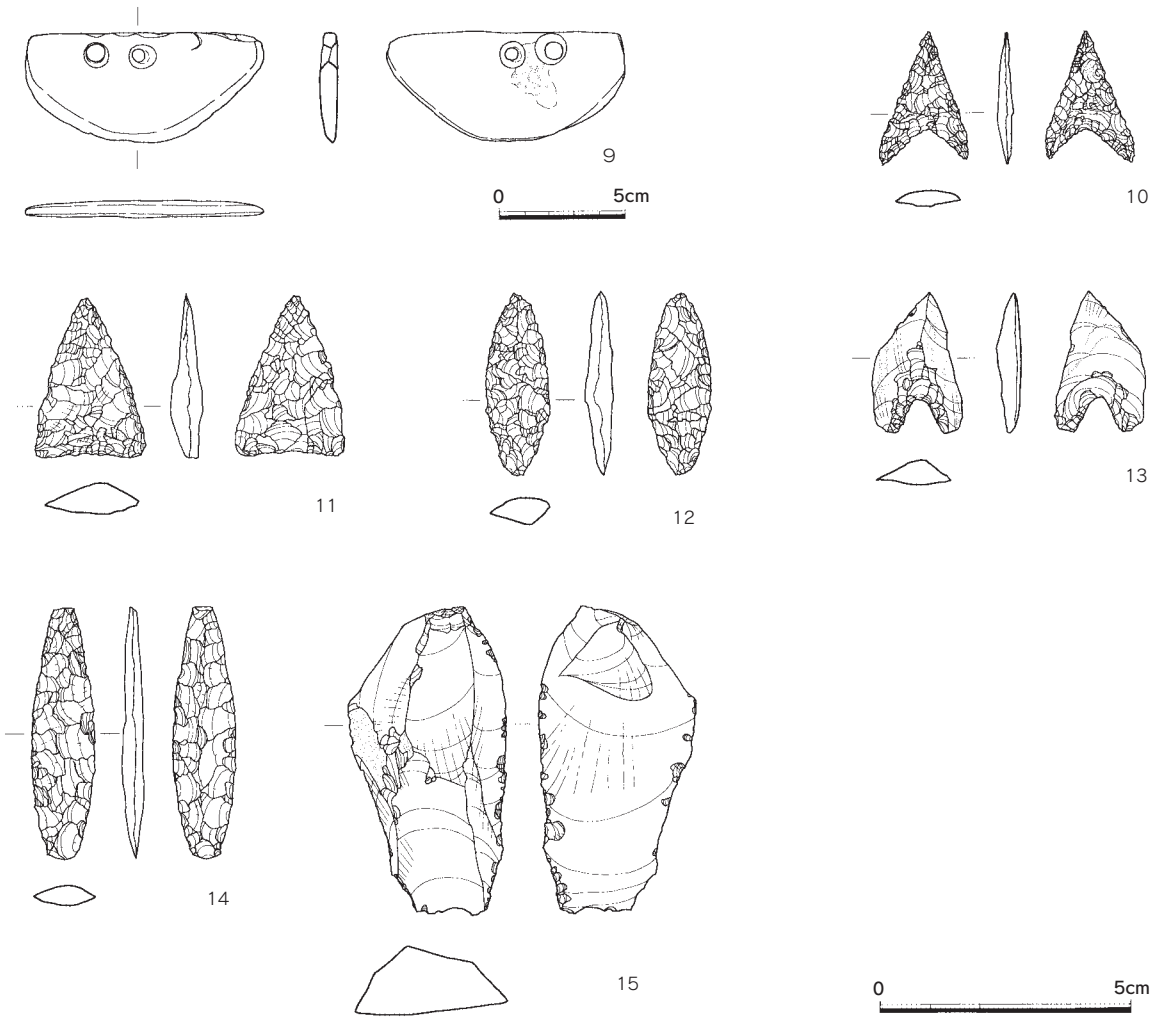


図161　低地部弥生水田出土石器２(1/3･2/3)

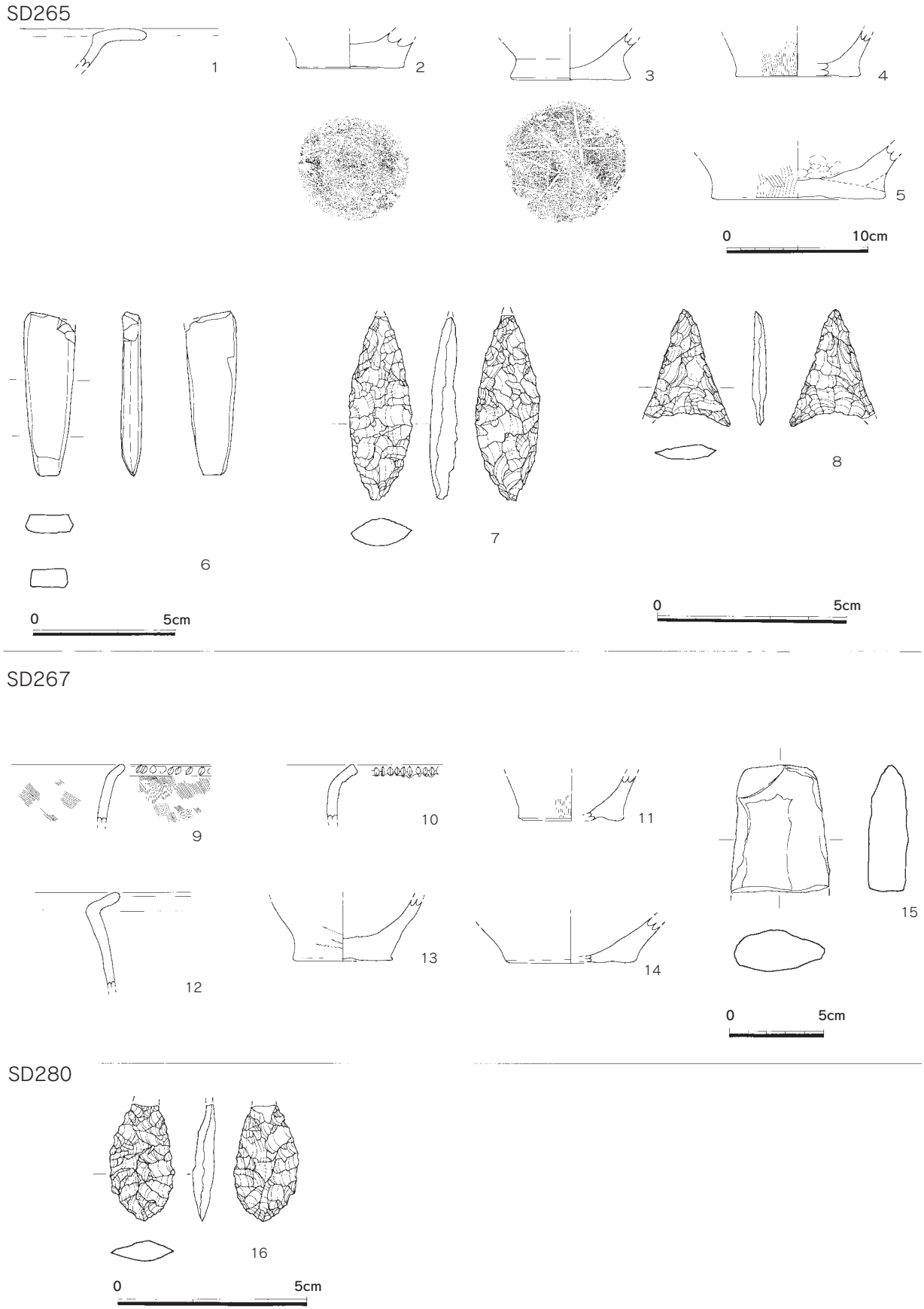
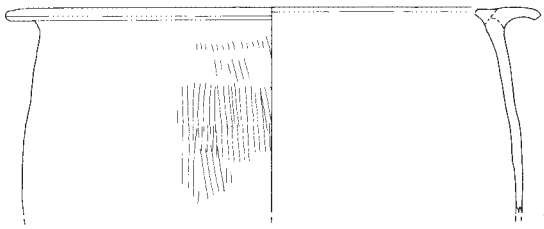
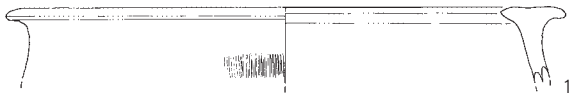
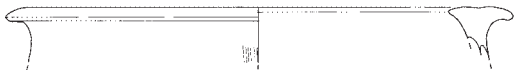


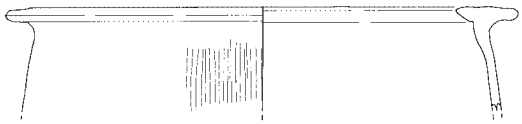
図162　微高地水田出土土器・石器1

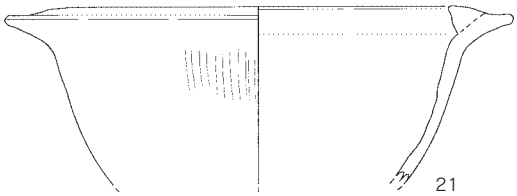
SD286

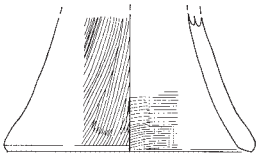

17

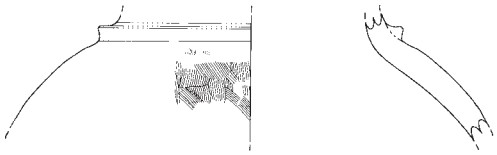

18


19

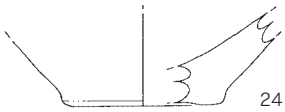

20


21

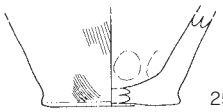

22

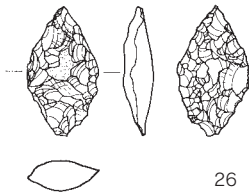

23

SD288


24

0 10cm


25


26

0 5cm

SD289

27

0 5cm

SD290

28

0 10cm

図163　微高地水田出土土器・石器２

④木製品

木製品や建築部材、杭などがある。ほぞ穴のあいた建築部材などは水田のSF175大畦畔の芯材として出土したが図化していない。農具などの木製品や大畦畔に打ち込められた杭について記す。表51，52にそれらの一覧表を掲載する。

１,２は平鍬でほぼ完形である。柄穴は１が正方形、２は円形隆起部に円孔で着柄角はほぼ垂直である。３,４,５は諸手鍬で、３は両刃部を欠き、４は柄穴周辺のみ残存、５はほぼ完形である。３,４,５は円形隆起部に円孔で着柄角はほぼ垂直である。６は諸手鍬未製品である。

７,８は鍬の基部のみ残存。９,10は四又鍬、９の刃部長は43.9cmと本遺跡出土の多又鍬の中では最も長い。９の刃部断面形は長方形で10は台形である。11は又鍬で基部から刃部にかけて一部残存する。

12,13は三又鍬、ともに刃部と基部の一部を欠く。刃部断面形は12は長方形で13は台形気味である。

14は四又鍬、基部から刃部にかけて一部残存、刃部断面形は台形である。15,16,18,19は又鍬で刃部のみ残存する。15,16,19の刃部断面形は台形で18はやや不整な長方形である。17は三又鍬で刃部のひとつと基部を欠く。刃部断面形は台形気味である。

20は二又鍬でほぼ完形である。柄穴は方形で刃部断面形は台形～蒲鉾形である。21は多又の鋤か？刃先端部を欠損する。22,23,24は長柄鋤、刃部のみ残存する。刃部はスコップ状である。25は停泥で、1/2残存。柄穴周辺を窪ませる。

26はエブリ、ほぼ完形。柄穴は長方形である。27は杓子か。

28,29は舟形容器で半裁刳りぬきである。29は握手をつける。30は斧柄、ほぼ完形である。着柄部は凸形である。

31～37は不明木製品。31は端部に円形の孔を穿つ。32は算盤玉状の身に柄？がつく。つくりは丁寧である。33は長方形の板材の長辺に抉りを入れる。34は棒に抉り込みを入れる。36は片方の端部を残し周囲を削る。35,37は柾目材に円形、不整形の孔を穿つ。

38～80は杭である。大畦畔やSD187内に打ち込まれたものである。杭については後述するとおり分類を行い畦畔・時代ごとの形式比率を出してみた。一覧表の分類もそれによる。この中で70,71,72は先端部を加工した特異な杭である。他の杭と同様、大畦畔に打ち込まれていたが祭祀的意味をもつのか転用材かは不明である。

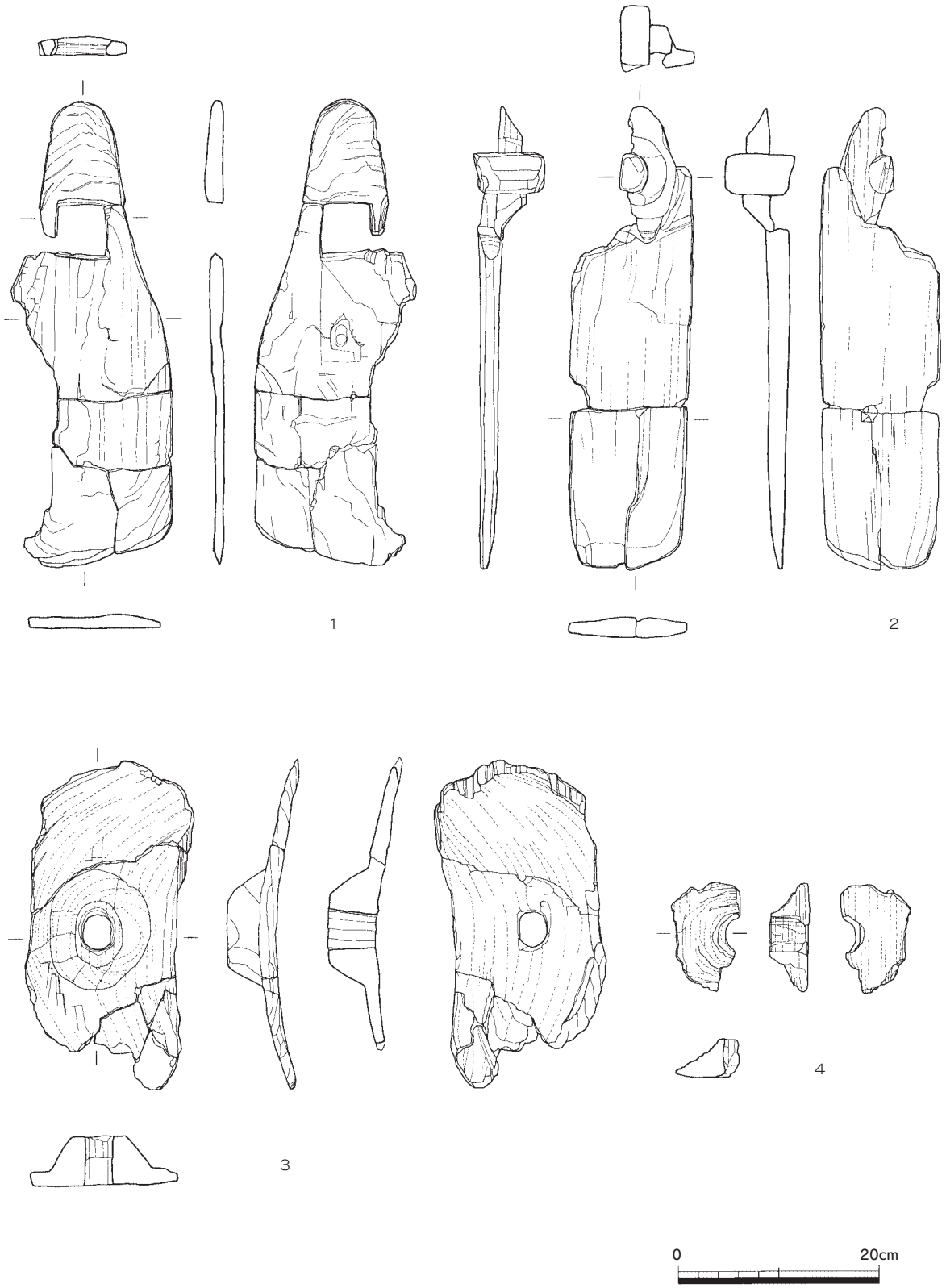


図164　弥生水田出土木製品１(1/6)

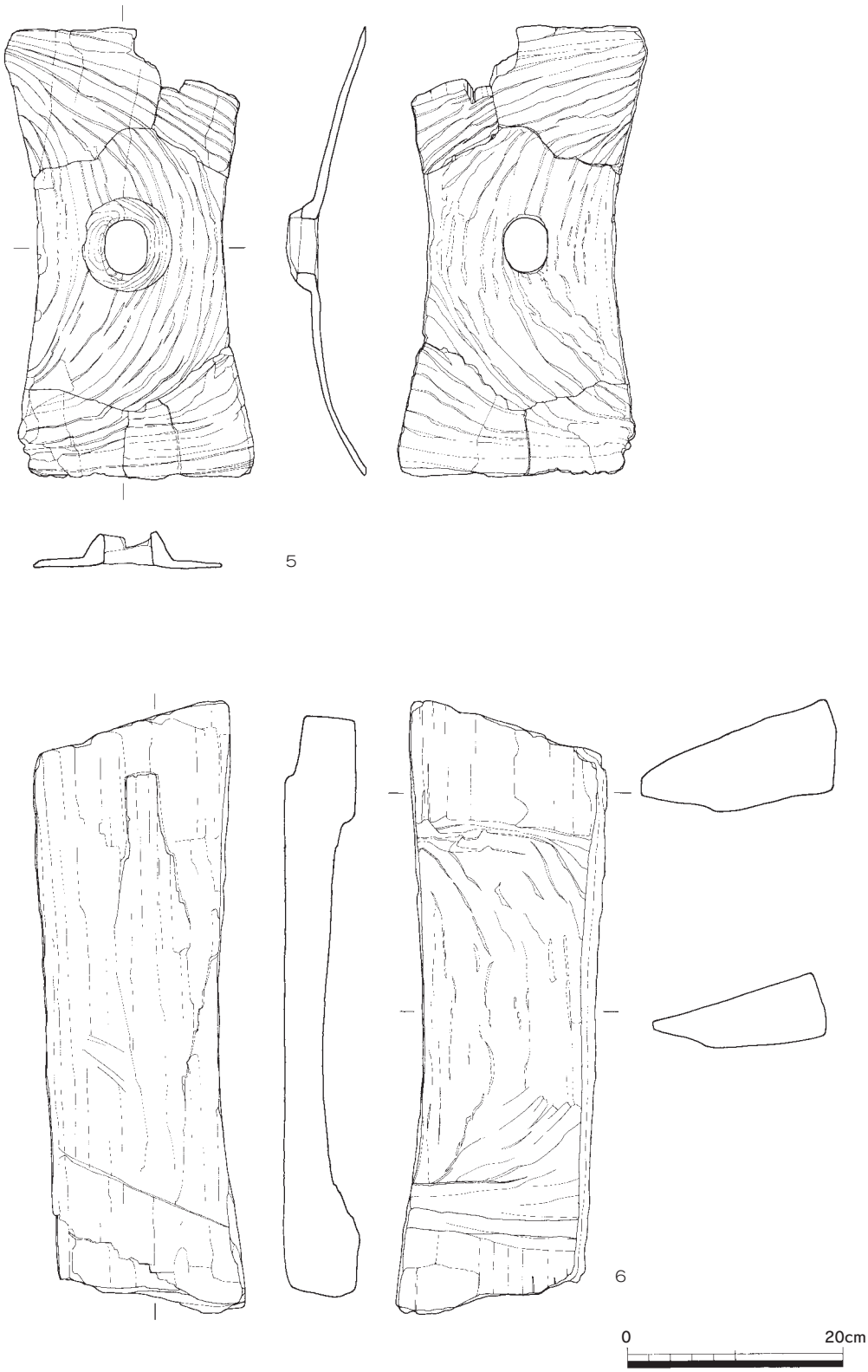


図165　弥生水田出土木製品２(1/6)

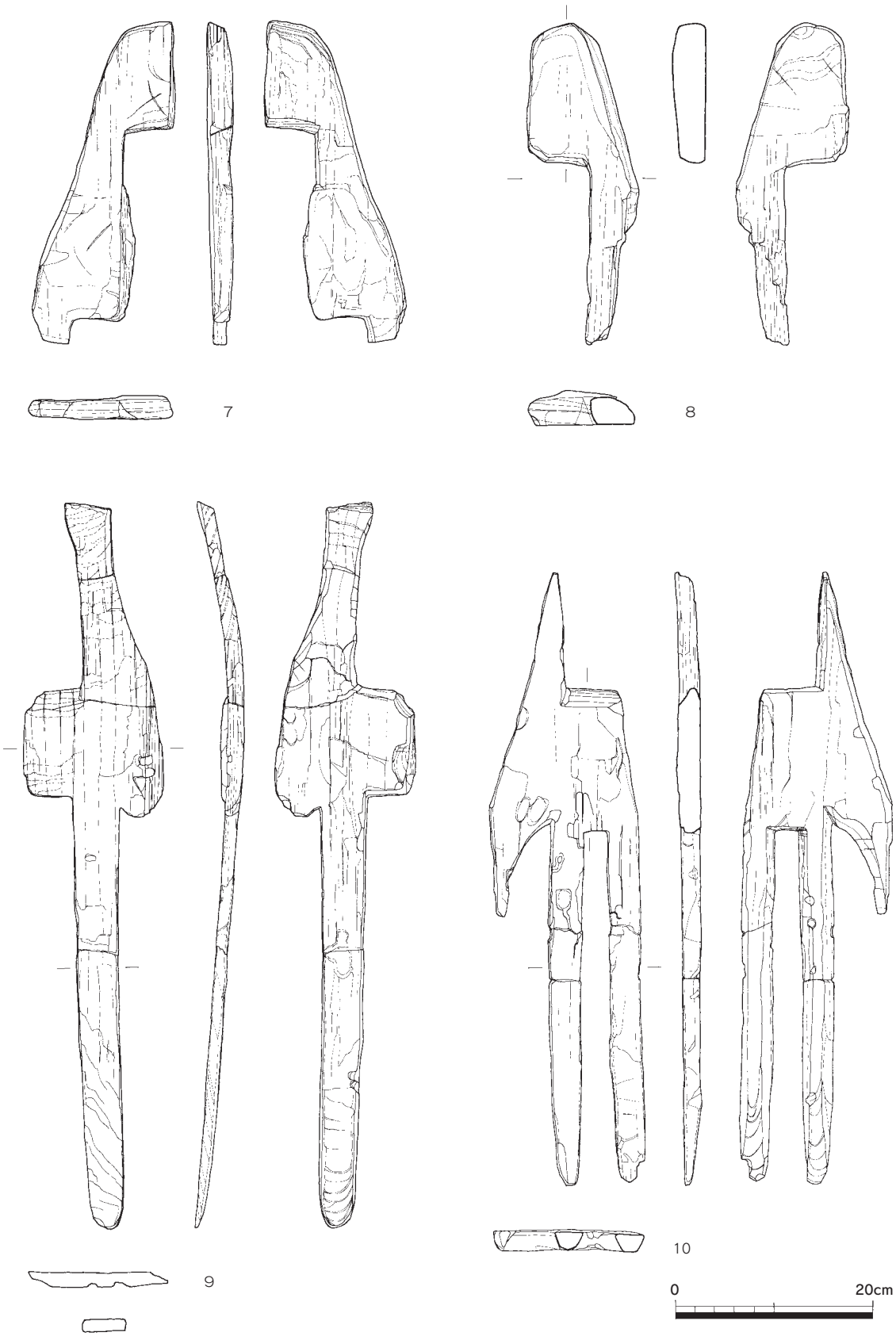


図166　弥生水田出土木製品３(1/6)

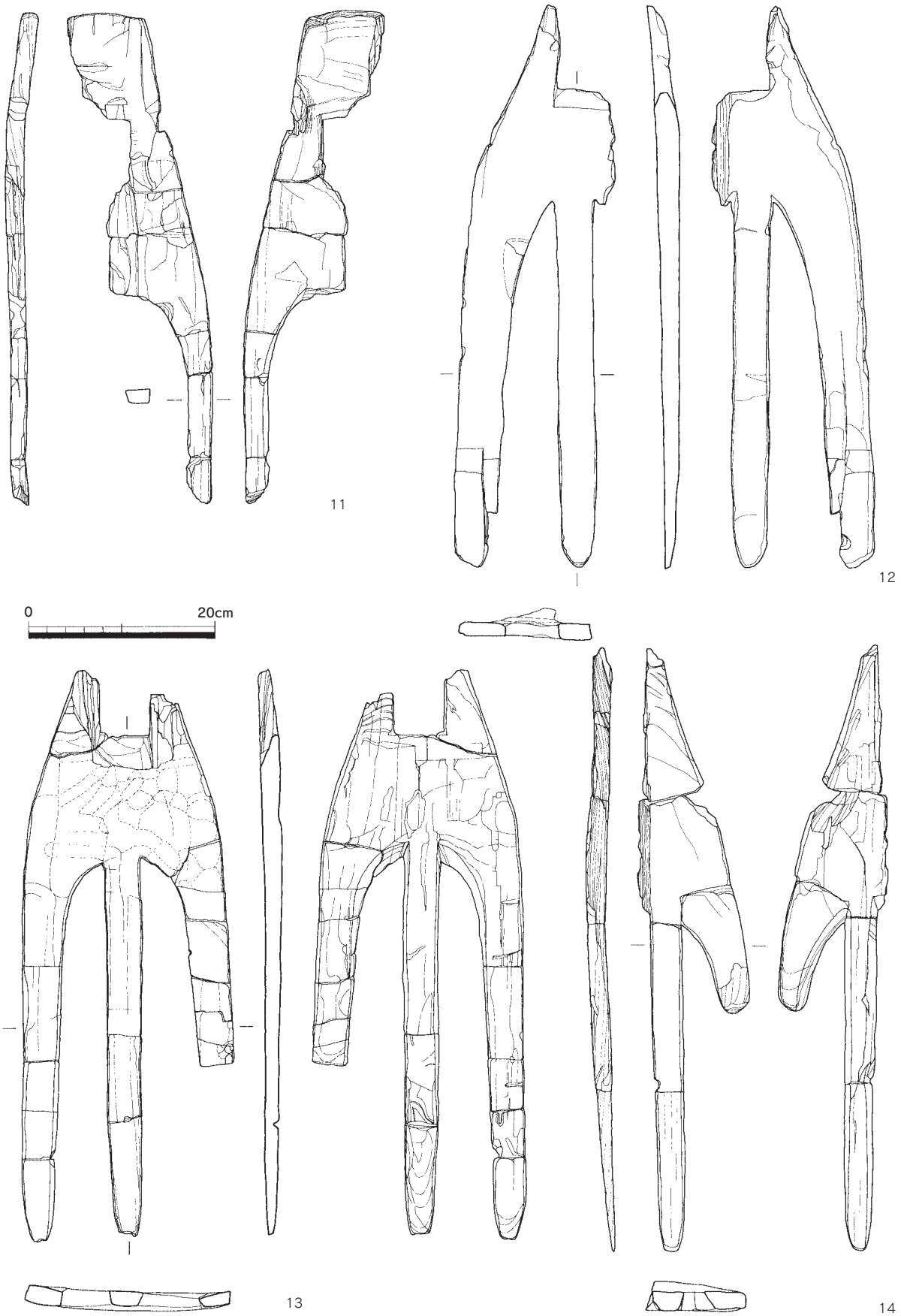


図167　弥生水田出土木製品４(1/6)

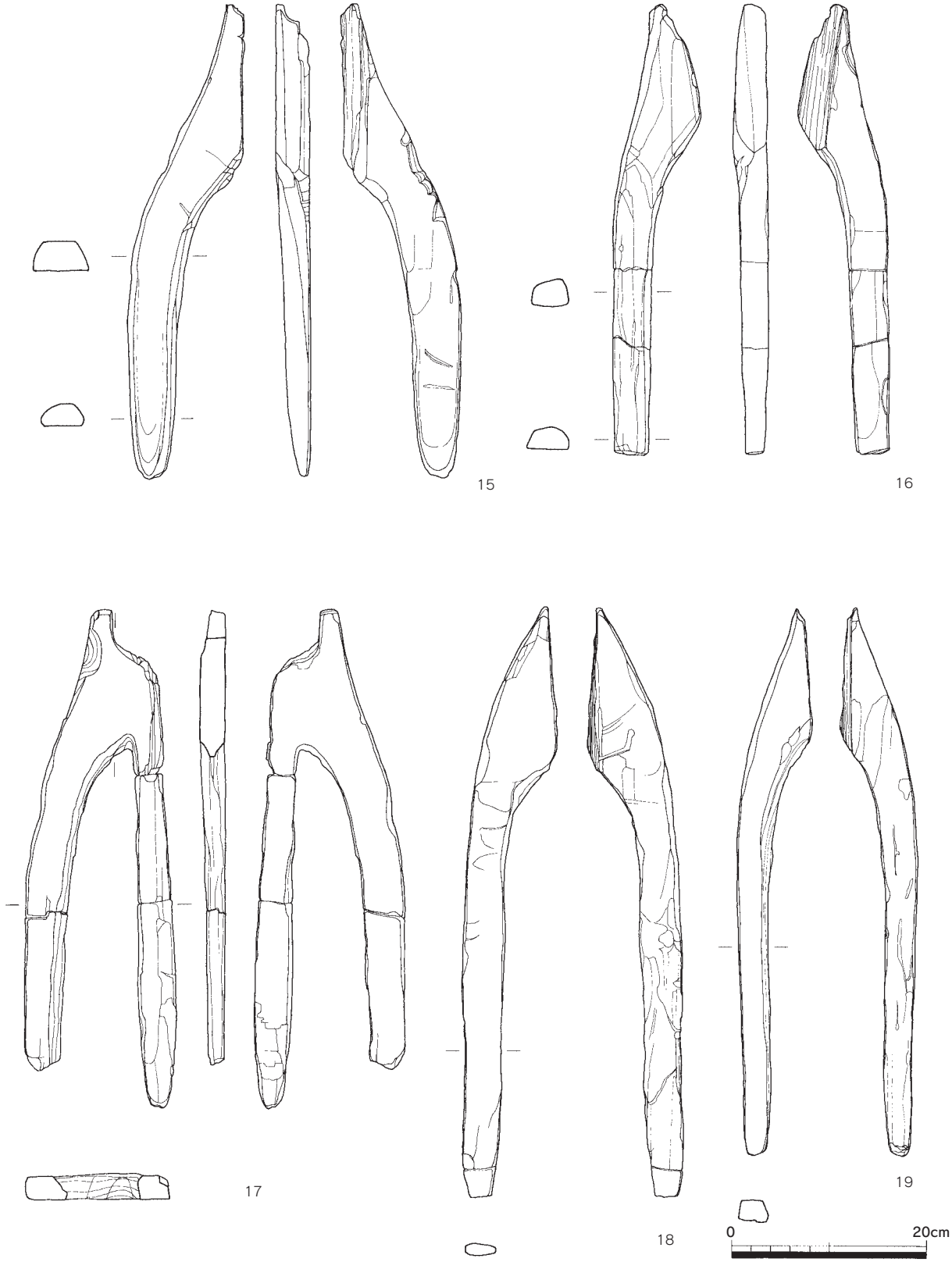


図168　弥生水田出土木製品５(1/6)

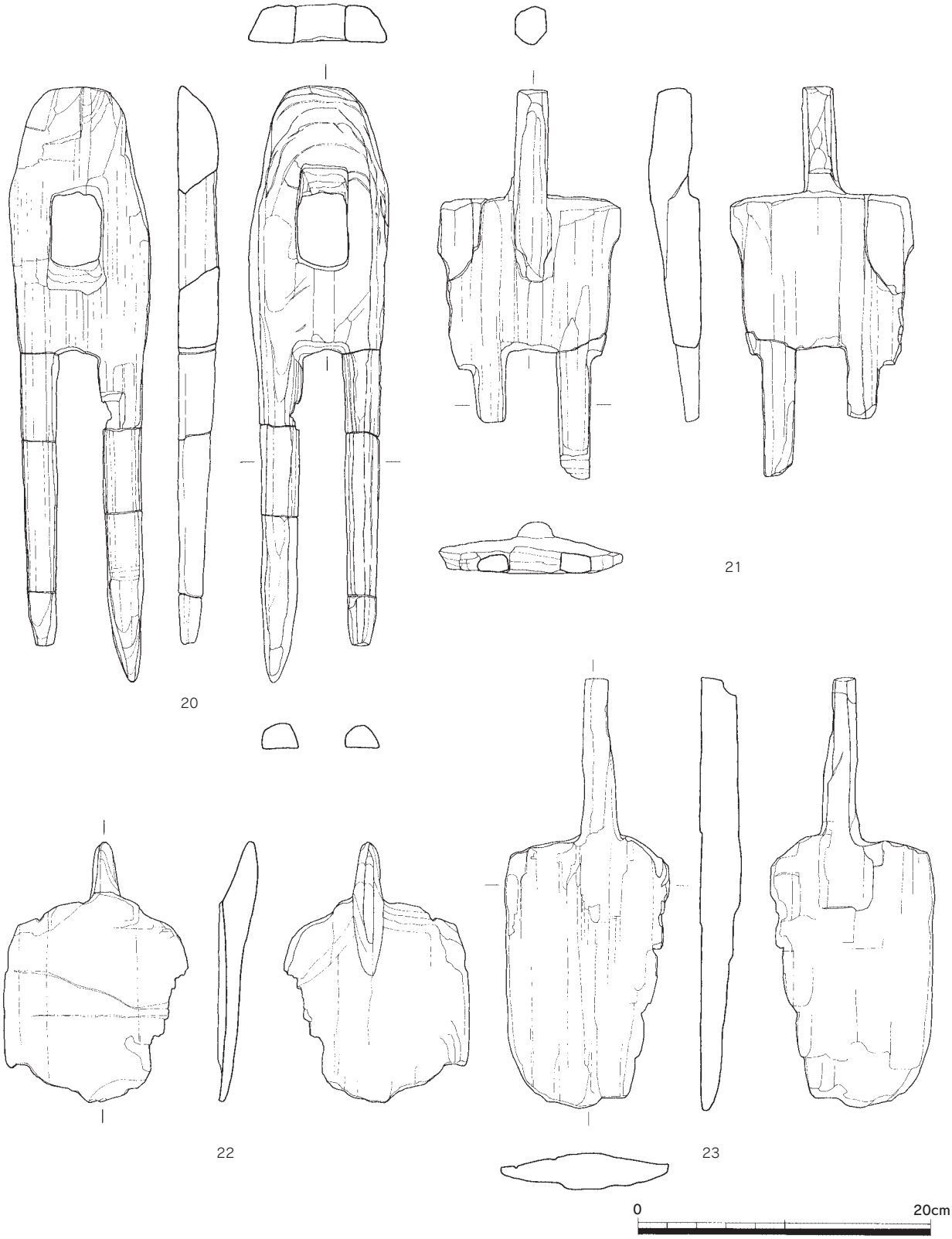


図169　弥生水田出土木製品６(1/4)

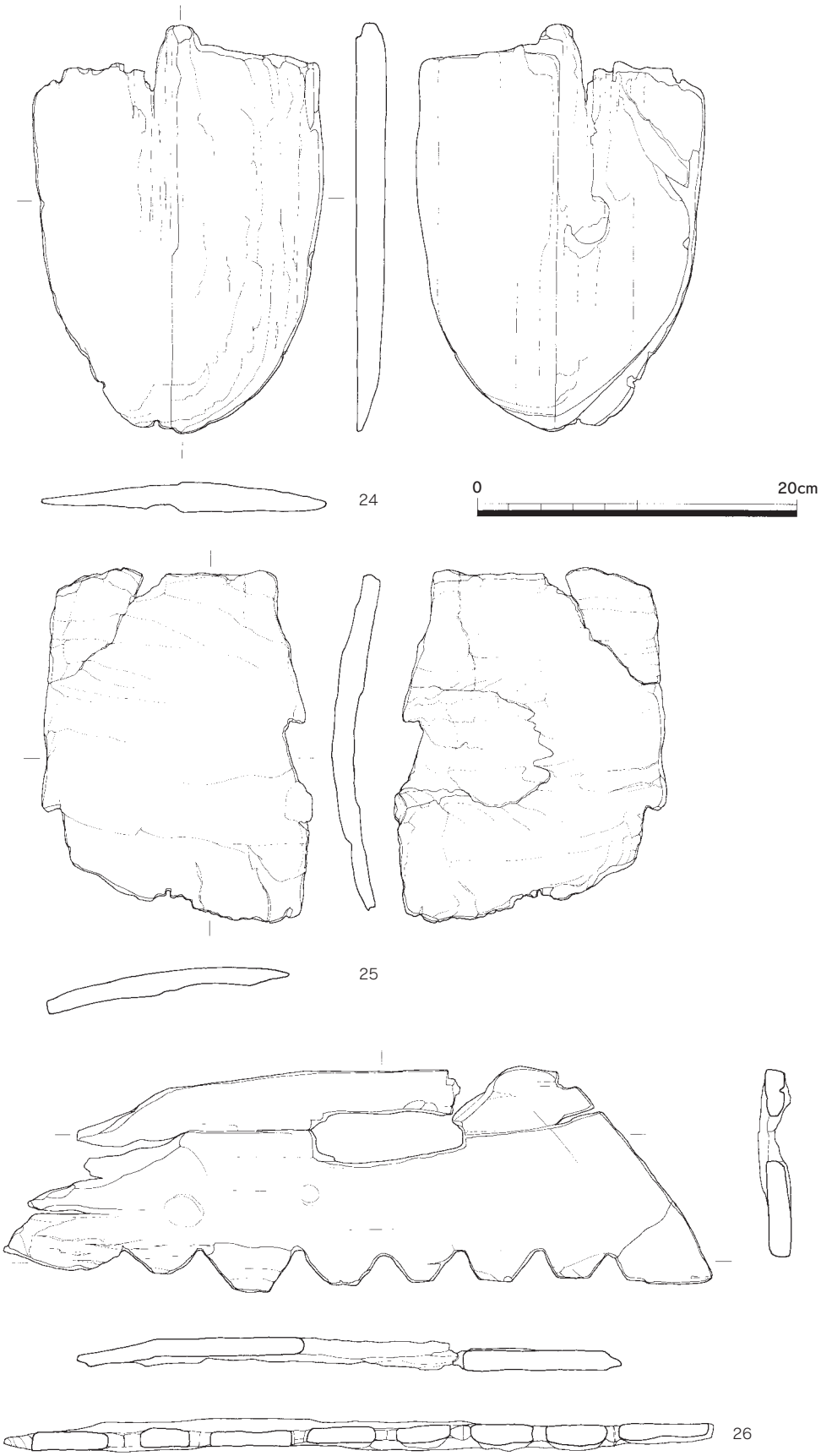


図170　弥生水田出土木製品７(1/4)

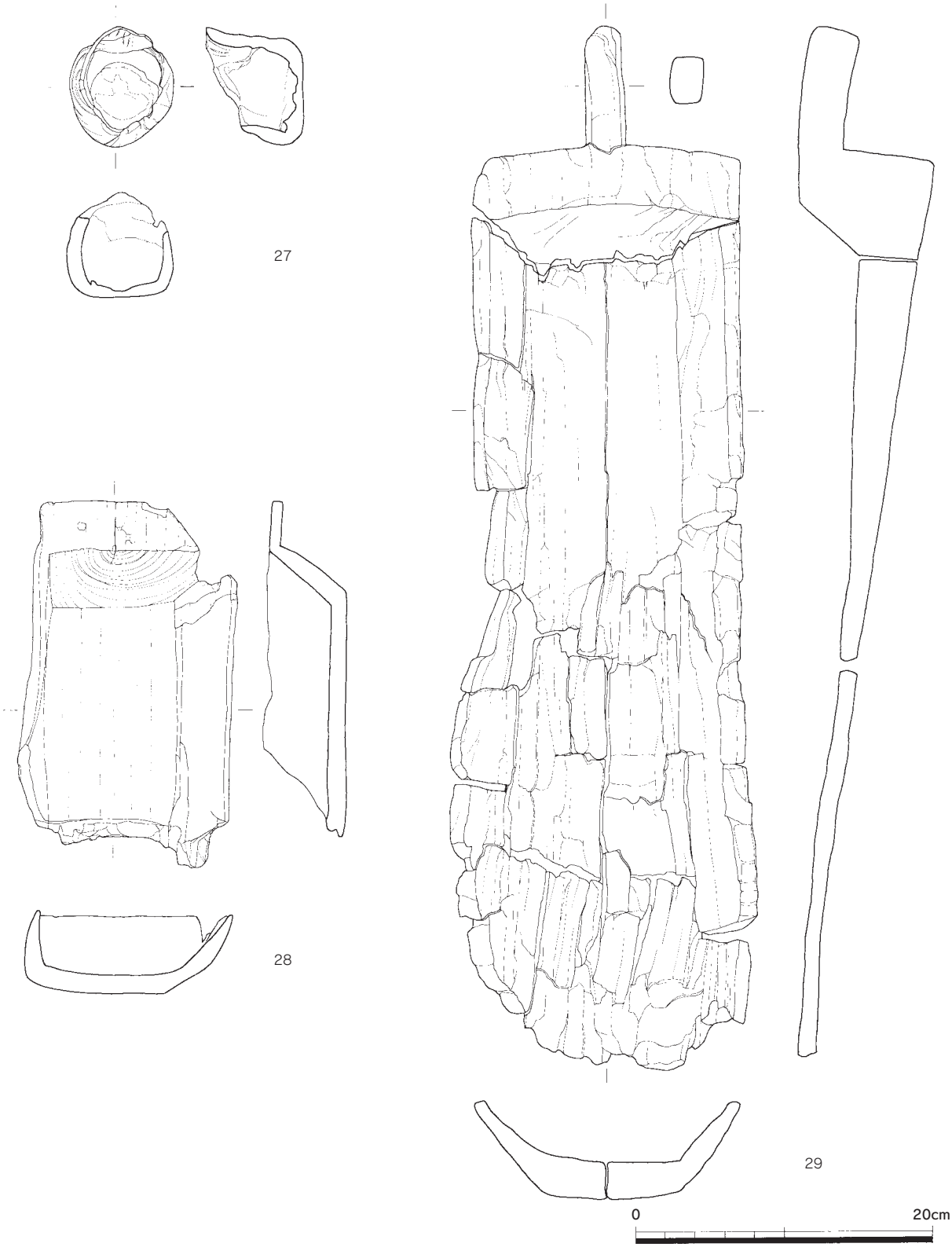


図171　弥生水田出土木製品８(1/4)

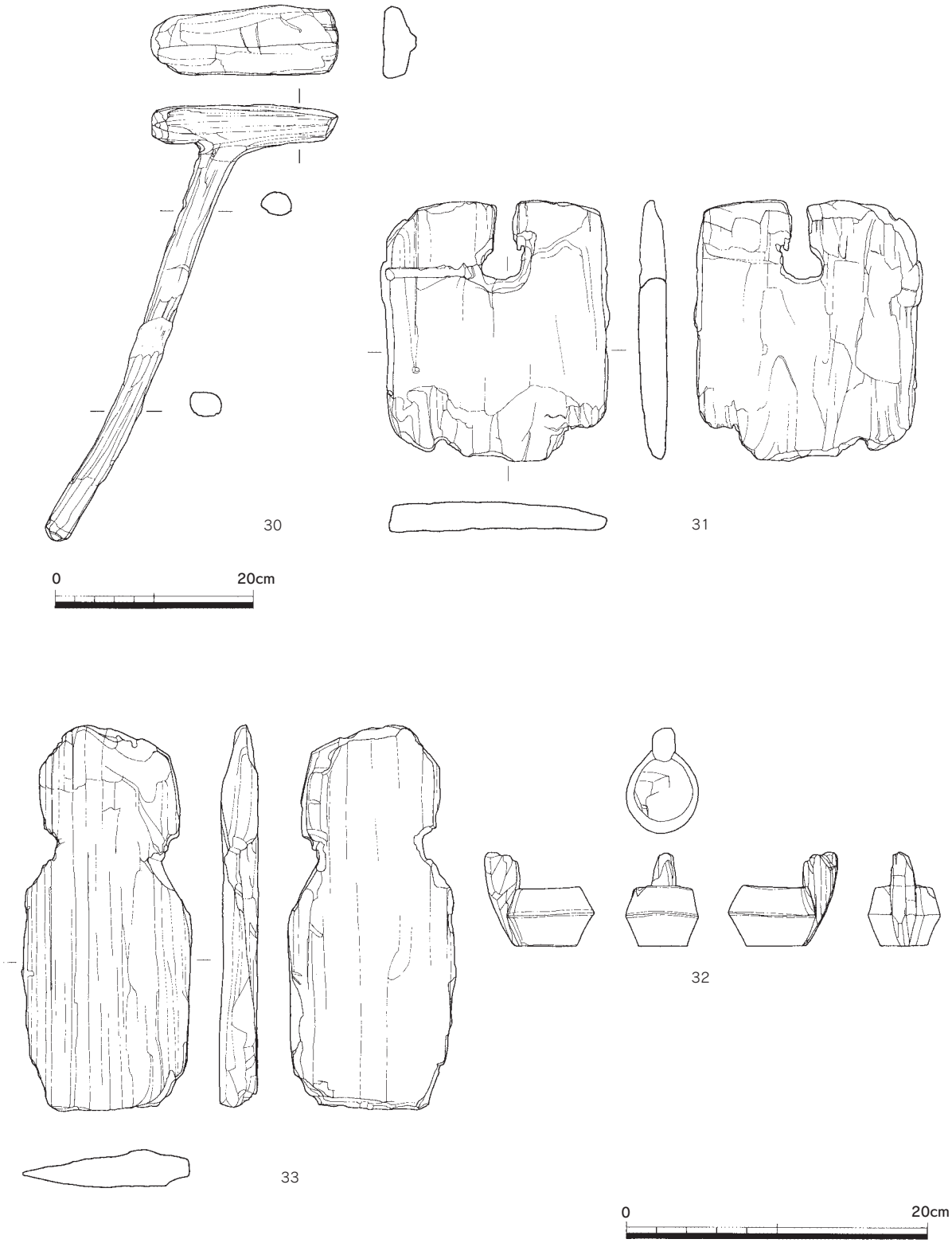


図172　弥生水田出土木製品９(1/6・1/4)

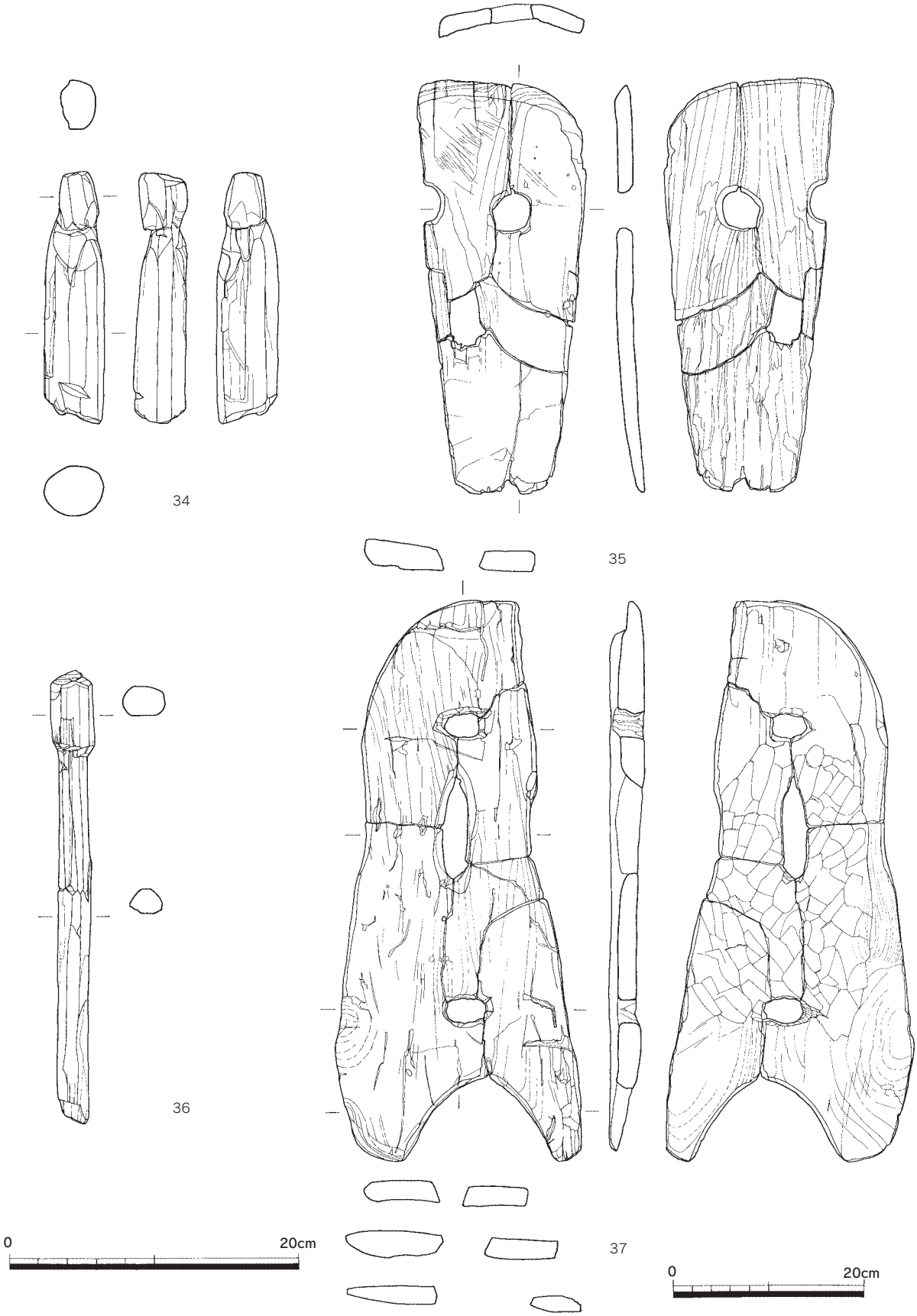


図173　弥生水田出土木製品１０(1/6・1/4)

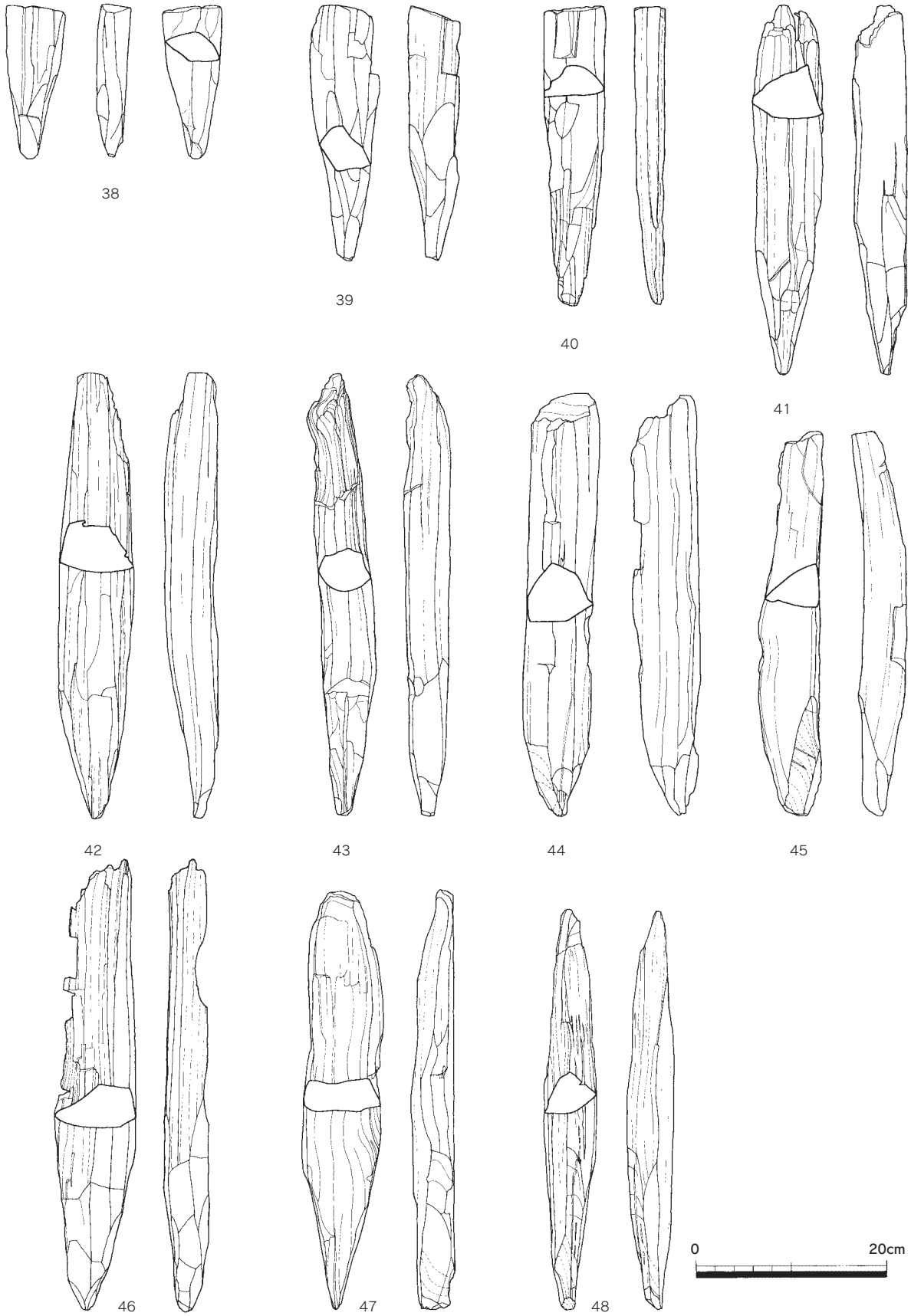


図174　弥生水田出土木製品１１(1/6)

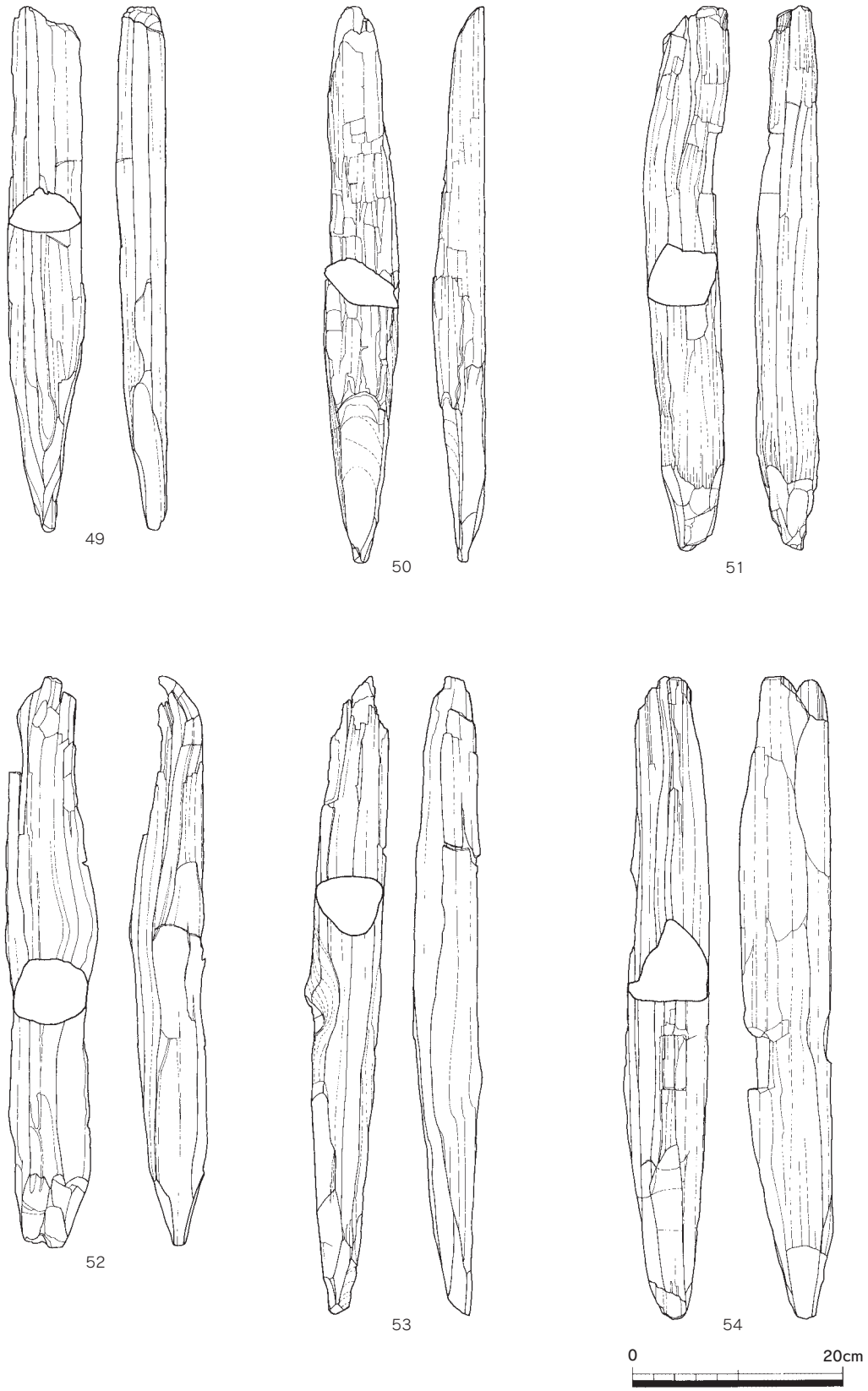


図175　弥生水田出土木製品１２(1/6)

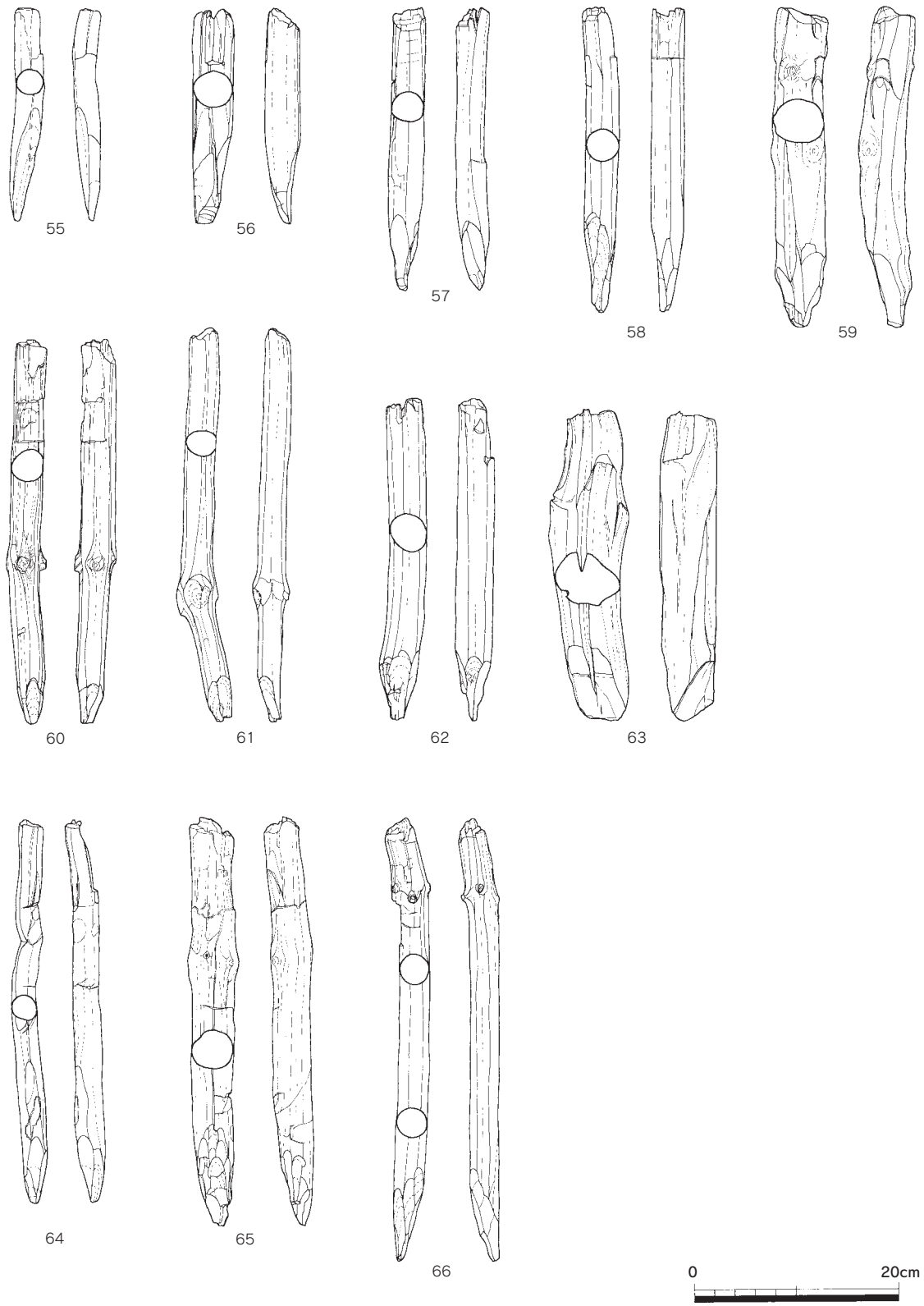


図176　弥生水田出土木製品１３(1/6)

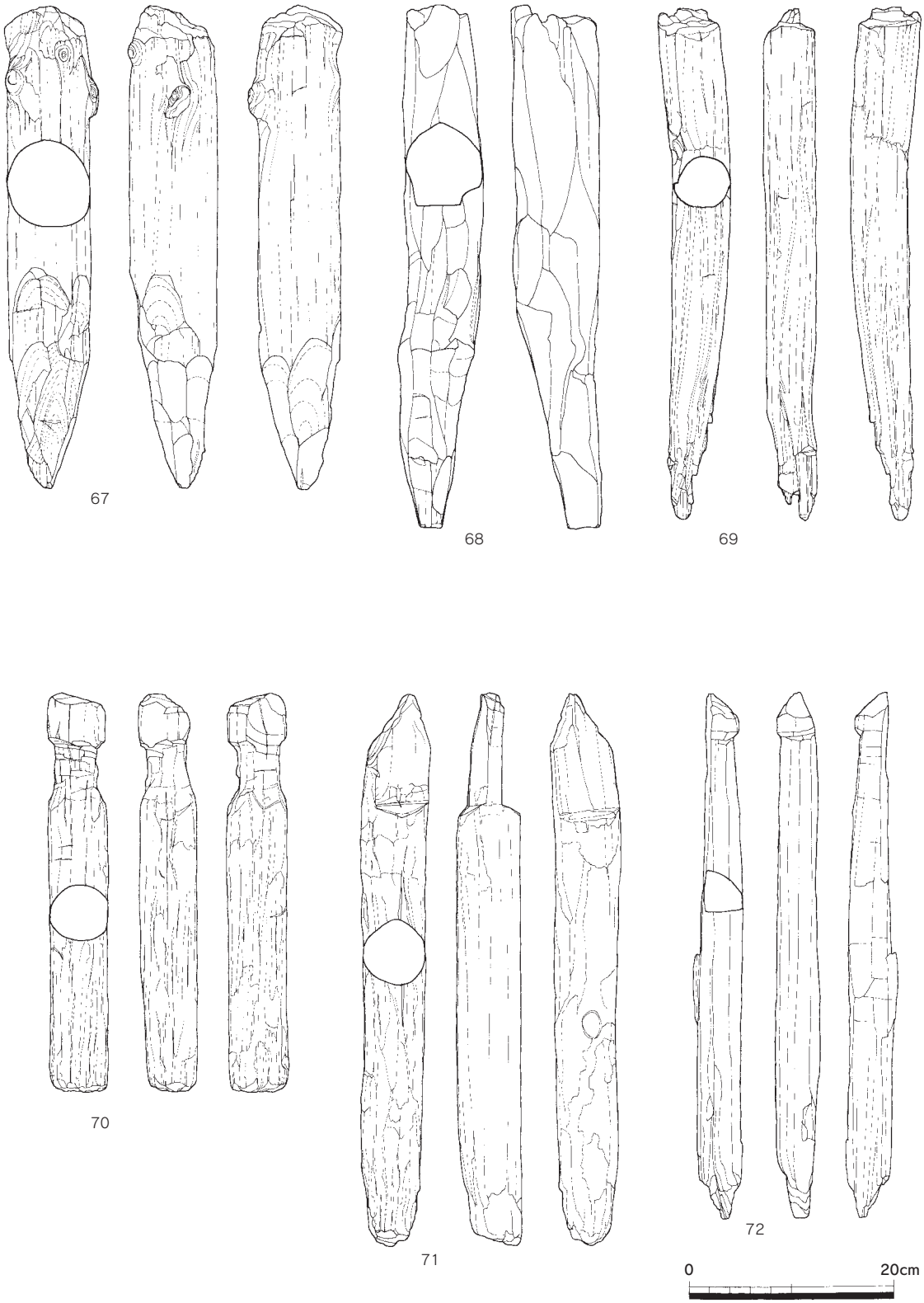


図177　弥生水田出土木製品１４(1/6)

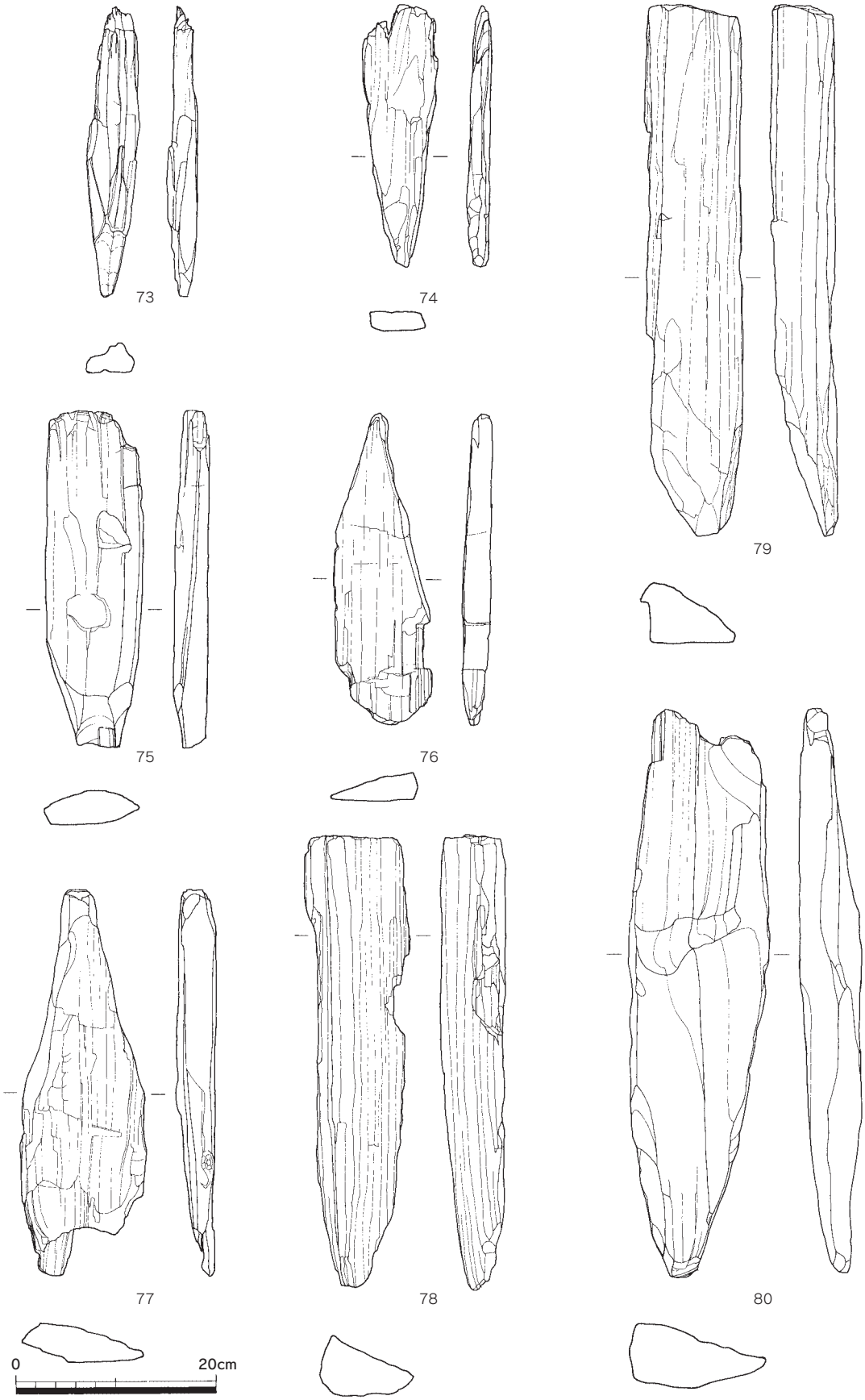


図178　弥生水田出土木製品１５(1/6)

表45　低地部水田出土弥生土器一覧表（1）

挿図-番号	登録番号	出土地点	取上		器種	分類	法量(cm)		色調		胎土	焼成	調整		備考
			No.	層位			器高	口(底)径	外器面	内器面			外器面	内器面	
157-1	992182	SD174		上層	甕	Ⅰ	6.0		黒褐色	黒褐色	0.5～3mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-2	992206	C-2		Y水-2	甕	2B②	8.4	17.8	にぶい黄橙色	黒褐色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-3	992207	C-2		Y水-2下層	甕	2B②	7.0		黒褐色	黒褐色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	ナデ、条痕	条痕	
〃-4	992288	SF178			甕	2B②	6.1		にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	細砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-5	992185	SD174		下層	甕	Ⅱ	2.4		暗褐色	褐色	細砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-6	992186	SD174		下層	甕	Ⅱ	3.5		黒褐色	黒褐色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-7	992190	SX177			甕？	Ⅱ	3.9		黒褐色	黒褐色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-8	992253	SD164		上層	甕	Ⅱ？	4.9		黒色	黒色	約1mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-9	992184	SD174		下層	甕	Ⅲ	9.1	12.6	褐色	褐色	0.5～3mmの砂粒を含む	良好	不明	ナデ	F-1　Y水-2出土品と接合
〃-10	992183	SD174	1		甕	Ⅲ	11.3	23.5	黒褐色	黒褐色	0.5～3mmの砂粒を多く含む	良好	ハケ目、ナデ	ナデ、ハケ目	外器面煤付着
〃-11	992205	E-2		Y水-1	甕	Ⅲ	6.8	19.2	黒褐色	黒褐色	0.5～1mmの砂粒を多く含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-12	992202			Y水-2	甕	Ⅲ	3.1	24.0	暗灰黄色	黒褐色	0.5～前後の砂粒を多く含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-13	992203	D-1		Y水-2	甕	Ⅲ	5.2	20.8	黒褐色	黒褐色	0.5～1mmの砂粒を含む	良好	ナデ、ハケ目	ナデ	外器面煤付着、K水-2出土品と接合
〃-14	992178	SD174		上層	甕	Ⅲ	4.9	12.7	黒褐色	明褐色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	ナデ、ハケ目	ナデ	
〃-15	992204	E-2		Y水-1	甕	Ⅲ	4.7	19.2	黒褐色	暗褐色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	ナデ、ハケ目	ナデ	外器面に煤付着
〃-16	992165	SD162			甕	Ⅳ	6.2	40.4	灰黄褐色	灰黄褐色	細砂粒を含む	やや不良	ナデ	ナデ	
〃-17	992151	E-2		Y水-1	甕	Ⅳ	3.4	25.6	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	0.5～3mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-18	990397	SD164		下層	甕	Ⅳ	4.7	26.8	灰黄褐色	灰黄褐色	0.5～1mmの砂粒を含む	良好	ナデ、ハケ目	ナデ	
〃-19	992152	F-2		Y水-1	甕	Ⅳ	13.1	27.8	灰黄褐色	灰黄褐色	0.5～3mmの砂粒を含む	良好	ナデ、ハケ目	ナデ	
〃-20	992166	SD162			甕	Ⅳ	3.2	19.2	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-21	992150	C-1		Y水-1	甕	Ⅳ	4.5	34.2	黒褐色	黒褐色	0.5～3mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-22	992169	SD163			鉢	Ⅳ	2.9	19.5	暗褐色	暗褐色	0.5～3mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	外器面に煤付着
158-23	992284	SD173	16		甕	Ⅳ	(26.2)	26.8	にぶい黄橙色	灰白色	0.5～1mmの砂粒を含む	良好	ナデ、ハケ目	ナデ	
〃-24	992209	C-2		Y水-1	壺	Ⅱ	7.0	8.6	橙色	にぶい黄褐色	0.5～1mmの砂粒を含む	やや不良	ナデ	ナデ	
〃-25	992179	SD174		下層	壺	Ⅱ	4.1	7.1	黒褐色	黒褐色	0.5～1mmの砂粒を含む	良好	ミガキ	ナデ	
〃-26	992208	C-2		Y水-2	壺	Ⅱ	3.2	25.9	にぶい赤褐色	褐色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	ナデ、ミガキ	ミガキ、ナデ	
〃-27	992187	SD174		下層	壺？		4.5		にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ、ハケ目	
〃-28	992154			Y水-1	壺		3.1	46.9	灰黄色	灰黄色	0.5～3mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-29	992168	SD163			壺		3.8	52.5	灰黄色	灰黄色	細砂粒を含む	やや不良	ナデ	ナデ	
〃-30	992210	G-1～2			浅鉢	ⅡA①	2.3	19.6	黒褐色	黒褐色	0.5～1mmの砂粒を含む	やや不良	ミガキ	ミガキ	
〃-31	992211	C-2		Y水-2	浅鉢	ⅡA①	3.0	19.8	黒褐色	黒褐色	0.5～3mmの砂粒を含む	良好	ミガキ	ミガキ	

表46　低地部水田出土弥生土器一覧表（2）

挿図-番号	登録番号	出土地点	取上		器種	分類	法量(cm)		色調		胎土	焼成	調整		備考
			No.	層位			器高	口(底)径	外器面	内器面			外器面	内器面	
158-32	992256	SD164		上層	壺	Ⅳ	7.3	29.5	黄灰色	灰黄色	1～2mmの砂粒を多く含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-33	992187	SX177			浅鉢	ⅡA①	3.5	17.6	橙色	橙色	0.5～1mmの砂粒を含む	良好	ミガキ？	ミガキ？	
〃-34	992212	C-2		Y水-1	浅鉢	ⅡB	3.8		黒褐色	明褐色	0.5～1mmの砂粒を含む	やや不良	ナデ	ナデ	
〃-35	992188	SD174		上層	浅鉢	ⅡB	5.1		黒褐色	黒褐色	0.5～1mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ミガキ？	
〃-36	992181	SD174		下層	浅鉢	ⅡA①	3.9		にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	0.5～1mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-37	992180	SD174		下層	蓋		3.5	20.8	黒褐色	黒褐色	1～2mmの砂粒を含む	良好	ナデ、ハケ目	ナデ	
〃-38	992163	SD162	3		甕	底部	7.7	6.4	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-39	992193	SX177			甕	底部	2.7	7.3	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	0.5～3mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-40	992177	SD174		下層	甕	底部	3.5	8.0	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	0.5～1mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-41	992195	C-2		Y水-1？	甕	底部	3.3	6.7	灰黄褐色	黒褐色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
159-42	992196	C-2		Y水-2	甕	底部	3.6	7.6	暗灰黄色	暗灰黄色	0.5～4mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-43	992197	C-2		Y水-1？	甕	底部	3.6	9.0	黒褐色	暗灰黄色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-44	992201	G,F-0		Y水-2	甕	底部	4.2	9.2	暗灰黄色	暗灰黄色	0.5～3mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-45	990400	SD164		下層	甕	底部	5.6	13.7	にぶい黄褐色	黒色	細砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	内器面に煤付着
〃-46	992194	C-2		K水2～3	甕	底部	3.4	7.2	にぶい黄橙色	にぶい黄褐色	0.5～3mmの砂粒を含む	良好	ハケ目	ナデ	
〃-47	992285	SD173			甕	底部	2.6	6.6	灰黄褐色	灰黄褐色	1～2mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-48	992289	SF178			甕？	底部	1.9	11.2	橙色	橙色	細砂粒を含む	やや不良	ナデ	ナデ	
〃-49	992286	SD173			甕	底部	3.5	8.6	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	0.5～1mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-50	992159	E-3		Y水-1	甕	底部	3.2	7.0	にぶい黄橙色	灰黄色	0.5～5mmの砂粒を含む	やや不良	ナデ	ナデ	
〃-51	992157	D-1		SK169	甕	底部	3.0	7.8	灰黄褐色	黒褐色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	ハケ目	ナデ	内器面に煤付着
〃-52	992199	F-1		Y水-2	甕	底部	4.2	8.4	黒褐色	暗灰黄色	0.5～1mmの砂粒を含む	良好	ハケ目	ナデ	
〃-53	992158	E-2		Y水-1	甕	底部	4.8	6.5	灰黄色	灰黄色	0.5～4mmの砂粒を含む	良好	ハケ目	ナデ	
〃-54	992259	SD164			甕	底部	4.1	10.0	灰黄褐色	黒褐色	0.5～1mmの砂粒を含む	良好	ハケ目	不明	
〃-55	992258	SD164			甕	底部	4.8	7.2	黒褐色	灰黄褐色	0.5～1mmの砂粒を含む	良好	ハケ目	ナデ	
〃-56	992164	SD162	5		甕	底部	7.7	6.4	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	ハケ目	ナデ	
〃-57	992160	SD173			甕	底部	10.1	7.7	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	0.5～4mmの砂粒を含む	良好	ハケ目	ナデ	
〃-58	992174	SD172	2		甕	底部	11.7	7.0	暗灰黄色	暗灰黄色	0.5～3mmの砂粒を含む	良好	ハケ目	ナデ	
〃-59	992251	SD164		下層	甕	底部	5.4	10.6	にぶい黄褐色	黄灰色	1～2mmの砂粒を含む	良好	ハケ目後ナデ	ナデ	内器面に煤付着
〃-60	992252	SD164		中層	甕？	底部	4.5	12.4	黄灰色	黄灰色	細砂粒を含む	良好	ハケ目	ナデ	
〃-61	992260	SD164	83		甕？	底部	3.1	20.0	黒褐色	にぶい黄褐色	細砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-62	992257	SD164		上層	甕	底部	7.0	7.9	灰黄色	黄灰色	細砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	

表47　低地部水田出土弥生土器一覧表（3）

挿図-番号	登録番号	出土地点	取上		器種	分類	法量(cm)		色調		胎土	焼成	調整		備考
			No.	層位			器高	口(底)径	外器面	内器面			外器面	内器面	
159-63	992162	SD173			壺？	底部	2.9	7.0	暗褐色	黒褐色	0.5～5mmの砂粒を含む	良好	ミガキ	ミガキ	
〃-64	992191	SX177			壺？	底部	1.9	5.6	灰黄褐色	灰黄褐色	0.5～1mmの砂粒を含む	やや不良	ナデ	ナデ	
〃-65	990399	SD164	82	下層	壺	底部	3.4	7.9	黄灰色	黄灰色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	ハケ目後ナデ	ナデ	
〃-66	990398	SD164		下層	壺	底部	1.4	7.8	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	細砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-67	992176	SD174		下層	壺	底部	2.5	8.4	黒褐色	黒褐色	0.5～1mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-68	992175	SD174		上層	壺	底部	4.5	10.4	にぶい黄橙色	にぶい黄褐色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	ミガキ	ナデ	

表48　微高地水田出土弥生土器一覧表（1）

挿図-番号	登録番号	出土地点	取上		器種	分類	法量(cm)		色調		胎土	焼成	調整		備考
			No.	層位			器高	口(底)径	外器面	内器面			外器面	内器面	
162-1	981701	SD265			高杯	Ⅲ	2.8		にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-2	981703	SD265			甕	底部	2.4	(7.6)	橙色	にぶい黄橙色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	ハケ目	ナデ	底面に籾跡圧痕あり
〃-3	981705	SD265			甕	底部	3.3	(8.4)	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	0.5～3mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-4	981704	SD265			甕	底部	3.2	(8.8)	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	ハケ目	ナデ	
〃-5	981703	SD265			甕	底部	3.8	(12.2)	橙色	にぶい黄橙色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	ハケ目	ナデ	
162-9	981706	SD267			甕？		4.1		褐色	にぶい黄橙色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	ハケ目	ナデ、ハケ目	
〃-10	981707	SD267			甕	Ⅲ	3.9		にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	0.5～1mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-11	981711	SD267			甕	底部	3.2	(7.4)	橙色	橙色	0.5～1mmの砂粒を含む	良好	ハケ目	ナデ	
〃-12	981709	SD267			甕	Ⅳ	7.0		にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	0.5～1mmの砂粒を含む	良好	ハケ目？	ナデ	
〃-13	981710	SD267			甕	底部	4.4	(7.0)	橙色	明黄褐色	0.5～1mmの砂粒を含む	やや不良	ナデ	ナデ	
〃-14	981712	SD267			壺	底部	3.2	(9.2)	橙色	にぶい黄橙色	0.5～1mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
163-17	981714	SD286	2,3,9		甕	Ⅳ	11.0	28.2	橙色	にぶい黄橙色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	ナデ、ハケ目	ナデ	
〃-18	981713	SD286	1		甕	Ⅳ	4.1	29.6	橙色	にぶい黄橙色	0.5～3mmの砂粒を含む	良好	ナデ、ハケ目	ナデ	
〃-19	981715	SD286	4		甕	Ⅳ	2.9	26.8	灰黄色	にぶい黄橙色	0.5～1mmの砂粒を含む	良好	ナデ、ハケ目	ナデ	
〃-20	981716	SD286	5		甕	Ⅳ	5.5	27.0	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	0.5～3mmの砂粒を含む	良好	ナデ、ハケ目	ナデ	
〃-21	981718	SD286	9,10,11		鉢		9.4	26.8	橙色	橙色	0.5～3mmの砂粒を含む	良好	ナデ、ハケ目	ナデ	
〃-22	981719	SD286	15		器台		(7.4)	13.2	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	ハケ目	ナデ、ハケ目	
〃-23	981718	SD286	6,7		壺		6.8		にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	0.5～3mmの砂粒を含む	良好	ハケ目	ナデ	
〃-24	981720	SD288			壺	底部	4.9	8.6	橙色	にぶい黄橙色	0.5～3mmの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
〃-25	981721	SD288			甕		4.8	7.4	にぶい黄橙色	灰黄褐色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	ハケ目後ナデ	ナデ	
〃-28	981723	SD290	1		甕	Ⅳ	6.0	27.4	橙色	橙色	0.5～1mmの砂粒を含む	良好	ナデ、ハケ目	ナデ	

表49　低地部水田出土弥生石器一覧表

挿図－番号	登録番号	出土地点	取上		器種	分類	法量(cm)				石材	備考
			No.	層位			長さ(残存)	幅(残存)	厚さ(残存)	重さ(g)(残存)		
160-1	992320	C-2		K水-2,3	両刃石斧		(10.9)	(8.7)	5.0	(697.1)	玄武岩	
〃-2	992318	C-2		Y水-2	両刃石斧		(13.1)	(7.8)	(3.0)	(454.4)	安山岩	
〃-3	992324	D-2		Y水-2	両刃石斧？		(11.7)	(5.2)	(1.5)	(163.1)	安山岩？	再利用品？
〃-4	992323	D-2		Y水-2	両刃石斧？		(6.9)	(8.0)	3.2	(308.4)		再利用品？
〃-5	992350	SD174		下層	両刃石斧		13.9	5.0	1.9	208.9	硬質砂岩	ほぼ完形品
〃-6	992325	D-3		Y水-2	両刃石斧		(7.7)	(6.8)	(2.2)	(164.8)		
〃-7	992319	C-2		Y水-2	両刃石斧		(5.7)	(3.2)	(3.8)	(66.6)		
〃-8	000694	D-3		Y水-2	両刃石斧		(4.1)	(4.7)	(2.8)	(73.8)		
161-9	992328	SD149			石庖丁		9.5	4.4	0.7	37.6		ほぼ完形品
〃-10	002355	SD174		上層	打製石鏃	a	2.7	1.8	0.4	0.8	黒曜石	
〃-11	002328	SD166			打製石鏃	c	3.2	2.2	0.6	2.8	黒曜石	
〃-12	002301	G-2		Y水-1	打製石鏃	d	(3.7)	1.4	0.6	2.0	黒曜石	
〃-13	002351	F-5		Y水-2	打製石鏃	a	2.8	1.8	0.5	1.6	黒曜石	
〃-14	002366	SD174		上層	打製石鏃	d	(5.0)	1.3	0.4	(2.4)	サヌカイト	
〃-15	002387	G-1		Y水-1	剥片		6.2	3.1	1.4	19.2	黒曜石	

表50　微高地水田出土弥生石器一覧表

挿図－番号	登録番号	出土地点	取上		器種	分類	法量(cm)				石材	備考
			No.	層位			長さ(残存)	幅(残存)	厚さ(残存)	重さ(g)(残存)		
162-6	000512	SD265			ノミ状片刃石斧		5.7	1.8	0.7	11.9		ほぼ完形品
〃-7	002315	SD265			打製石鏃	d	(4.9)	1.7	0.7	4.6	黒曜石	
〃-8	002367	SD265			打製石鏃	a	3.1	(2.3)	0.4	2.0	サヌカイト	
〃-15	000700	SD267			両刃石斧?		(5.8)	(5.2)	(2.2)	(122.1)	粘板岩	表面は剥離
〃-16	002306	SD280			打製石鏃	d	(3.1)	1.7	0.6		黒曜石	
163-26	002312	SD288			打製石鏃	d	2.6	1.4	0.7	1.6	黒曜石	
〃-27	000701	SD289			両刃石斧		(2.4)	(7.2)	(1.1)	(23.5)		

表51　弥生水田出土木製品一覧表（1）

挿図-番号	登録番号	出土地点	器種	法量（cm）	樹種	木取り	備考
164 - 1	99001486	弥生水田 (SD173)	平鍬	全長45.4　残存幅7.0　基部厚0.6 柄孔長5.0　柄孔幅5.0　刃部厚1.0		柾目	ほぼ完形。柄孔部分が正方形で着柄角はほぼ垂直。
〃 - 2	99001487	弥生水田 （SD187）	平鍬	残存長45.3　幅11.8　最大厚2.6 隆起部高4.4　隆起部長12.0 柄の径4.0×2.8	コナラ属 アカガシ亜属	柾目	ほぼ完形。柄が装着された状態で出土。着柄角はほぼ垂直。
〃 - 3	99001489	弥生水田 （SD164）	諸手鍬	残存長11.0　残存幅6.8　隆起部高3.8 隆起部長6.0	コナラ属 アカガシ亜属	柾目	柄孔周辺のみ2分の1程度残存。刃部を欠く。着柄角はほぼ垂直。
〃 - 4	99001475	弥生水田 （SD164）	諸手鍬	残存長32.4　幅14.5　隆起部長12.0 隆起部幅10.0　隆起部高5.5　柄孔長4.2 柄孔幅2.8	コナラ属 アカガシ亜属	柾目	柄孔周辺のみ残存。刃部を欠く。着柄角はほぼ垂直。
165 - 5	99001485	弥生水田 (SD174)	諸手鍬	全長41.0　幅21.5　最大厚0.6 隆起部長8.3　隆起部幅8.0　隆起部高3.0 柄孔長4.5　　柄孔幅3.8　刃部厚0.3	コナラ属 アカガシ亜属	柾目	ほぼ完形。隆起部、柄孔共に円形。着柄角は垂直に近い。刃部が非常に薄い。刃部腹面のみ削り。
〃 - 6	00001675	弥生水田	諸手鍬未製品	全長56.4　幅16.4　最大厚6.6	樹皮	柾目	
166 - 7	99001478	弥生水田 (SD173)	鍬	残存長32.4　残存幅8.4　最大厚2.4 柄孔長5.0	コナラ属 アカガシ亜属	柾目	基部のみ残存。着柄角は約50度。四又鍬か？
〃 - 8	99001488	弥生水田 （SD172）	鍬	残存長21.6　残存幅6.7　最大厚2.3	コナラ属 アカガシ亜属	柾目	基部のみ残存。着柄角は不明。
〃 - 9	99001474	弥生水田 (SD173)	多又鍬	全長68.5　残存幅13.4　基部厚1.4 刃長43.9　刃厚1.4	コナラ属 アカガシ亜属	柾目	基部から刃部にかけて四又鍬の中央部分が残存。
〃 - 10	99001473	弥生水田 (SD173)	多又鍬	残存長62　残存幅15.0　最大厚2.4 刃長35.0　刃幅3.1	コナラ属 アカガシ亜属	柾目	基部から刃部にかけて四又鍬の中央部分が残存。着柄角は約60度。
167 - 11	99001506	弥生水田	又鍬	残存長51.8　残存幅　　最大厚2.0 刃厚1.6	コナラ属 アカガシ亜属	柾目	基部から刃部にかけて一部残存。
〃 - 12	99001463	弥生水田	三又鍬	残存長59.5　残存幅14.8　最大厚2.5 刃長39.0　刃幅3.2-4.7　刃厚1.8	コナラ属 アカガシ亜属	柾目	刃部の一つと基部の一部を欠く。
〃 - 13	99001501	弥生水田	三又鍬	残存長60.7　幅21.0　最大厚2.1 刃長40.7　刃幅3.8-4.4　刃厚1.8	コナラ属 アカガシ亜属	柾目	基部の一部を欠く。着柄角70度。
〃 - 14	99001477	弥生水田	又鍬	残存長63.7　残存幅10.0　最大厚2.0 刃長34.2　刃幅3.0　刃厚2.0	コナラ属 アカガシ亜属	柾目	基部から刃部にかけて一部残存。
168 - 15	99001469	弥生水田 (SD163)	又鍬	残存長32.1　残存幅9.0　最大厚2.4 刃長22.1　刃幅3.3	コナラ属 アカガシ亜属	柾目	刃部のみ残存。
〃 - 16	99001500	弥生水田 (SD163)	又鍬	残存長30.5　残存幅9.0　最大厚2.1 刃幅2.6	コナラ属 アカガシ亜属	柾目	刃部のみ残存。
〃 - 17	99001460	弥生水田 (SD163)	三又鍬	残存長33.8　残存幅9.4　最大厚1.8 刃長24.4　刃幅2.7	コナラ属 アカガシ亜属	柾目	三又の一つと基部を欠く。
〃 - 18	99001496	弥生水田 (SD173)	又鍬	残存長60.1　残存幅7.4 刃長43.2　刃厚2.0	コナラ属 アカガシ亜属	柾目	刃部のみ残存。
〃 - 19	99001497	弥生水田	又鍬	残存長55.4　残存幅3.5 刃幅3.0　　刃厚2.4	コナラ属 アカガシ亜属	柾目	刃部のみ残存。
169 - 20	99001476	弥生水田 (SD163)	二又鍬	全長40　幅18.4　最大厚2.8 刃長　柄孔長6.6　柄孔幅3.6	コナラ属 アカガシ亜属	柾目	刃部先端をを欠くが、ほぼ完形品。柄孔は方形で着柄角は40度。
〃 - 21	99001492	弥生水田 (SD173)	鋤？	残存長27.2　残存幅12.5　刃部厚2.6	コナラ属 アカガシ亜属	柾目	柄部と思われる部分が隆起する。組み合わせて使うものか？
〃 - 22	99001467	弥生水田 （SD162）	鋤	残存長17.9　幅13.0　最大厚2.2	コナラ属 アカガシ亜属	柾目	長柄鋤の刃部のみ残存。スコップ状。
〃 - 23	99001455	弥生水田	鋤	残存長28.0　幅18.3　最大厚2.3	コナラ属 アカガシ亜属	柾目	長柄鋤の刃部のみ残存。スコップ状。
170 - 24	99001454	弥生水田 (SD163)	鋤	残存長25.6　幅18.0　最大厚1.9	コナラ属 アカガシ亜属	柾目	長柄鋤の刃部のみ残存。スコップ状。
〃 - 25	99001512	弥生水田 (SD174)	停泥	全長22.1　残存幅17.0　最大厚1.6		柾目	2分の1程度残存。柄孔周辺を窪ませる。
〃 - 26	99001459	弥生水田	エブリ	全長41　幅13.0　最大厚1.5	クスノキ	柾目	ほぼ完形。
171 - 27	99001484	弥生水田 (SD163)	杓子	全長8.2　幅7.1　最大厚1.0	イスノキ		
〃 - 28	99001483	弥生水田	舟形容器	残存長24.7　幅14.0　底の厚さ2.4	クリ	半さい 刳り貫き	ほぼ完形。
〃 - 29	00003058	弥生水田	舟形容器	全長70.4　幅20.6　底の厚さ4.0 柄の長さ8.0　柄部径2.2×3.2		半さい 刳り貫き	ほぼ完形。片方に握手をもつ。
172 - 30	99001502	弥生水田 (SD174)	斧柄	全長42.0　台部長18.6　台部幅7.0 台部厚3.5　持ち手の径3.2×2.6	サカキ	芯持ち材	枝の部分を利用したもの。一部樹皮が残る。着装部は凸形を呈し、鉄斧の装着も考えられる。
〃 - 31	99001508	弥生水田 (SD174)	不明	残存長15.4　幅15.2　孔径2.5×1.9		柾目	

表52　弥生水田出土木製品一覧表（2）

挿図-番号	登録番号	出土地点	器種	法量（cm）	樹種	木取り	備考
172 - 32	99001511	弥生水田 (SD173)	不明	残存長6.2　幅4.0	マキ属		作りは丁寧だが用途は不明。
〃 - 33	99001510	弥生水田（SF178）	不明	残存長26.6　幅11.2　最大厚2.5		柾目	用途不明。両側からえぐりが入る。
173 - 34	99001509	弥生水田（SF178）	不明	残存長17.3　径4.3×3.7		芯持ち材	用途不明。刳り込みを施す。
〃 - 35	99001498	弥生水田	不明	残存長43.1　残存幅16.7　最大厚1.4		柾目	2分の1程度残存か？2箇所に円形の穿孔。
〃 - 36	99001482	弥生水田	不明	残存長31.4　径2.9×2.1		芯持ち材	
〃 - 37	99001507	弥生水田	不明	全長58.3　幅　　最大厚2.8		柾目	用途不明。3箇所に穿孔。

表53　弥生水田出土杭一覧表（1）

挿図－番号	登録番号	出土地点	分類	法量（cm）			樹種	木取り	備考
				残存長	長径	短径			
174 - 38	00001647	弥生水田（SF175）	割杭A	16.1	5.6	3.1			
〃 - 39	00001648	弥生水田（SF175）	割杭A	26.8	6.4	5.2			
〃 - 40	00001649	弥生水田（SF175）	割杭A	31.3	6.7	3.1			
〃 - 41	00001665	弥生水田（SF178）	割杭A	38.6	7.3	5.7			
〃 - 41	00001655	弥生水田（SF175）	割杭A	32.5	2.2	2.1			
〃 - 42	00001663	弥生水田（SF176）	割杭A	46.6	7.8	5.5			
〃 - 43	00001660	弥生水田（SF176）	割杭A	46.1	5.5	4.5			
〃 - 44	00001651	弥生水田（SF175）	割杭A	44.3	7.1	6.9			
〃 - 45	00001650	弥生水田（SF175）	割杭A	40.1	6.2	4.5			
〃 - 46	00001667	弥生水田（SF178）	割杭A	47.4	8.5	4.6			
〃 - 47	00001661	弥生水田（SF176）	割杭A	41.8	5.5	4.9			
〃 - 48	00001662	弥生水田（SF176）	割杭A	44.4	8.2	4.5			
175 - 49	00001666	弥生水田（SF178）	割杭A	44.8	6.8	4.4			
〃 - 50	00001664	弥生水田（SF176）	割杭A	52.9	7.07.3	4.8			
〃 - 51	00001652	弥生水田（SF175）	割杭A	51.7	6.6	6.0			
〃 - 52	00001653	弥生水田（SF175）	割杭A	53.8	8.7	6.5			
〃 - 53	00001668	弥生水田（SF178）	割杭A	60.1	7.2	6.5			
〃 - 54	00001654	弥生水田（SF175）	割杭A	60.5	8.3	7.7			
176 - 55	00001635	弥生水田（SF175）	丸杭（小）	20.8	2.7	2.2			
〃 - 56	00001636	弥生水田（SF175）	丸杭（小）	21.0	3.9	3.5			
〃 - 57	00001637	弥生水田（SF175）	丸杭（小）	27.6	3.2	2.9			
〃 - 58	00001638	弥生水田（SF175）	丸杭（小）	30.9	3.2	3.2			
〃 - 59	00001646	弥生水田（SF175）	丸杭（大）	31.4	5.3	4.3			

表54　弥生水田出土杭一覧表（2）

挿図－番号	登録番号	出土地点	分類	法量（cm）			樹種	木取り	備考
				残存長	長径	短径			
176- 60	00001641	弥生水田（SF175）	丸杭（小）	37.5	3.3	3.1			
〃 - 61	00001639	弥生水田（SF175）	丸杭（小）	31.5	3.6	3.6			
〃 - 62	00001642	弥生水田（SF175）	丸杭（小）	38.5	2.9	2.6			
〃 - 63	00001645	弥生水田（SF175）	丸杭（大）	30.4	8.0	5.0			
〃 - 64	00001640	弥生水田（SF175）	丸杭（小）	37.5	2.8	2.5			
〃 - 65	00001643	弥生水田（SF175）	丸杭（小）	40.1	4.1	3.8			
〃 - 66	00001644	弥生水田（SF175）	丸杭（小）	44.3	2.9	2.9			
177 - 67	00001659	弥生水田（SF176）	丸杭（大）	47.0	8.4	8.0			
〃 - 68	00001658	弥生水田（SF176）	丸杭（大）	50.9	8.2	7.5			
〃 - 69	00003065	弥生水田（SF175）	杭	50.0	5.1	5.0	サカキ		
〃 - 70	00003067	弥生水田（SF175）	杭	38.8		5.6	サクラ属		
〃 - 71	00003068	弥生水田（SF176）	杭	53.6			散孔材		
〃 - 72	00003066	弥生水田（SF178）	杭	51.1	5.6	4.3	マキ属		
178 - 73	01000974	弥生水田（SF178）	杭	57.4	10.0	6.0			
〃 - 74	01000973	弥生水田（SF178）	矢板	52.0	15.0	4.0			
〃 - 75	00001670	弥生水田（SF175）	矢板	28.6	9.8	3.3			
〃 - 76	00001671	弥生水田（SF175）	矢板	31.0	9.5	2.7			
〃 - 77	00001672	弥生水田（SF175）	矢板	38.5	12.5	3.5			
〃 - 78	00003047	弥生水田（SD187）	杭				クリ		
〃 - 79	00003046	弥生水田（SD187）	杭	52.9	9.5	6.3	クリ		
〃 - 80	00001673	弥生水田（SF175）	矢板	56.0	14.0	16.1			

（２）古墳時代の遺物

①土器

水田面出土の土器（図179,180）

古墳時代の上層・中層・下層水田出土の土器である。水田面および水路、畦畔内出土の土器もあわせて掲載している。ただし、上層水田の水路であるSD149出土土器は別図に掲載した。土器の出土地点は表中に示す。

甕(１～８)土師器、１は口縁部から肩部にかけて1/5残存。２は口縁部から肩部にかけて1/6残存。３～４は口縁部から肩部にかけて残存。５～８は口縁部破片。すべて甕Ａで口縁部形態は直線的な②式が多く１,２,６,７,８がそれにあたる。１は口縁端部が外側に肥厚する。６,７は同一個体の可能性がある。口縁部外反の③式は３,４で、口縁部内湾の①式は５である。口縁端部は３が丸味をもち他は面取りおよび面取り気味である。

二重口縁壺(９)土師器、口縁部破片。二次口縁屈曲部は断面が鈍い三角形である。

小型広口壺(10,11)土師器、10はほぼ完形。11は口縁部1/5残存。10，11ともに口径＞器高の１式で10は肩部のくびれが弱いが11は強い。

小型丸底壺(12,13)土師器、12は口縁部1/4残存。13は完形。12は口縁部直立の③式である。13は口径＜器高で口径＜胴径の１②式である。器壁も厚く口頸部はタテハケである。

椀(14)土師器、口縁部はわずかに内湾する。底部ヘラケズリ。外面にタール状の黒色の付着物あり。Ｉ４式。

鉢(15,16)土師器、15は素口縁の深鉢、平底。Ａ２②ｂ式。16はミニチュア土器。

高杯(17～27)土師器、24は弥生土器。17～19は杯部で19は口縁部破片。20～27は脚部。17は口縁部外反、杯部外面稜ありのＩ③ｂ式。18は口縁部直線的、杯部外面稜にナデ、Ｉ①ａ式。19は口縁部内湾、杯部外面稜ありの⑤ｂ式。17,18は杯部・脚部接合技法Ａ式。

脚部形態は器壁が薄いＡ１式は１点(20)、器壁がやや厚く太いＡ２式は５点(21,22,23,25,26)である。27は裾部欠損。24は弥生土器で裾部に円形透かしあり。

SD149出土土器（図181）

上層水田の水路であるSD149出土土器である。

甑(1)土師器、口縁部は外反し端部は丸味をもつ。体部外面タテハケ、煤付着。内面ヨコ、ナナメ方向のヘラケズリ。口縁部内面ナデ。

小型広口壺(2)土師器、約1/2残存。口縁端部は丸味をもつ、胴部外面タテハケ、肩部内面中位までヘラケズリを施す。Ｄ２②ｂ式。

甕(３)弥生土器、底部のみ残存。断面台形で若干上げ底。

高杯(４,５)土師器、脚裾部のみ残存。裾部にかけて大きく開き、裾部内面に稜をもつ。ともにＡ３式。

椀(６,７)土師器、６は口縁部1/6残存。口縁部でわずかに屈曲し外反する。外面タテハケ、Ｉ３式。７は1/2残存。口縁端部を上方につまみ上げる。内外面ナデ。Ｉ１式。

SD164出土土器（図182～188）

多量の土器が出土した。遺構の項で前述したとおりSD164は上層と下層に分層できたため遺物取り上げもそれに従った。

上層の出土土器は４,５,10,13,14,18,19,23,25,26,34,37,38,39,40,41,44,45,46,48,50,51,52,54,56,59,61,62,64,65,66,67,71,72,73,74,77,78,79,84,85,87,96,98である。

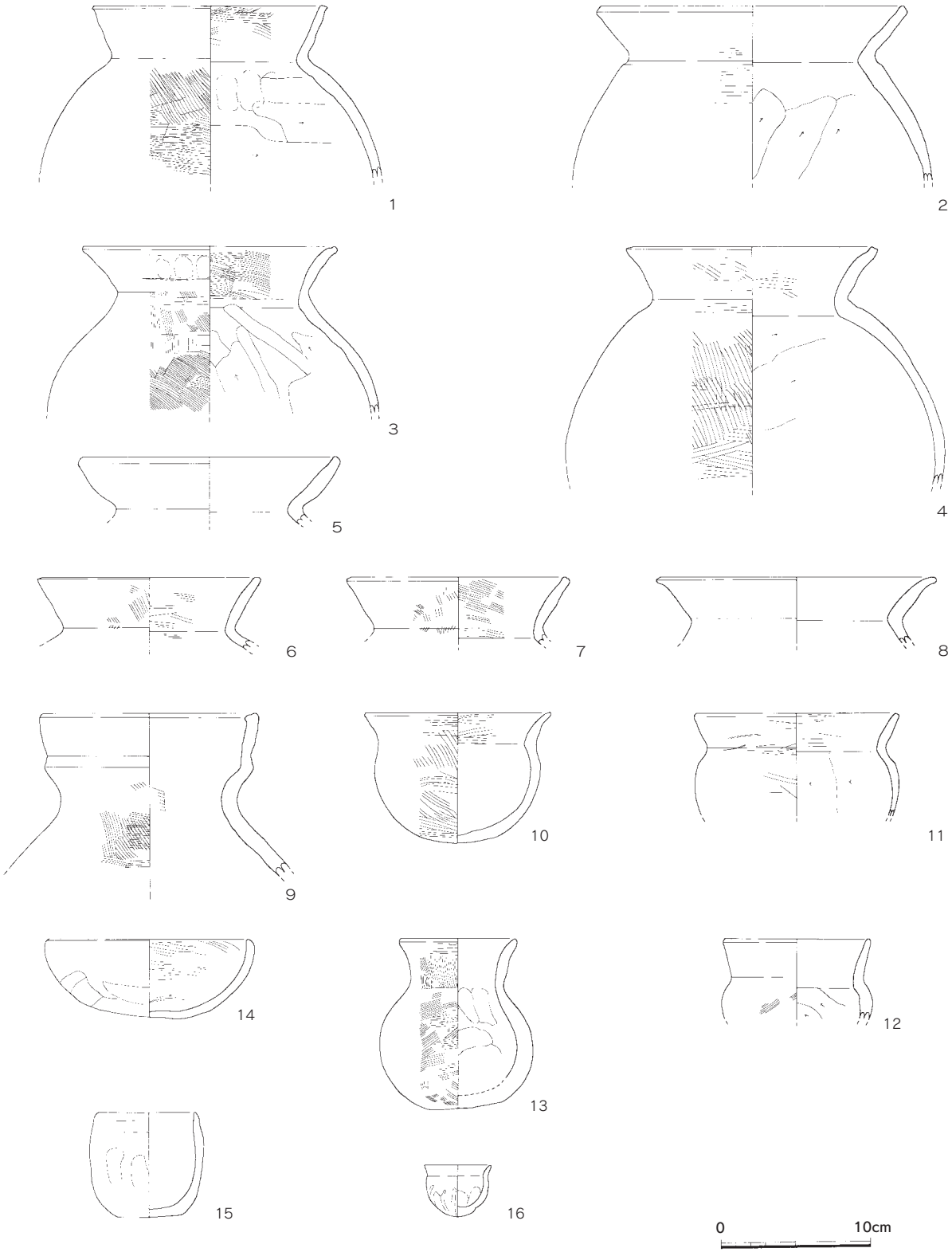


図179　古墳水田出土土器１(1/4)

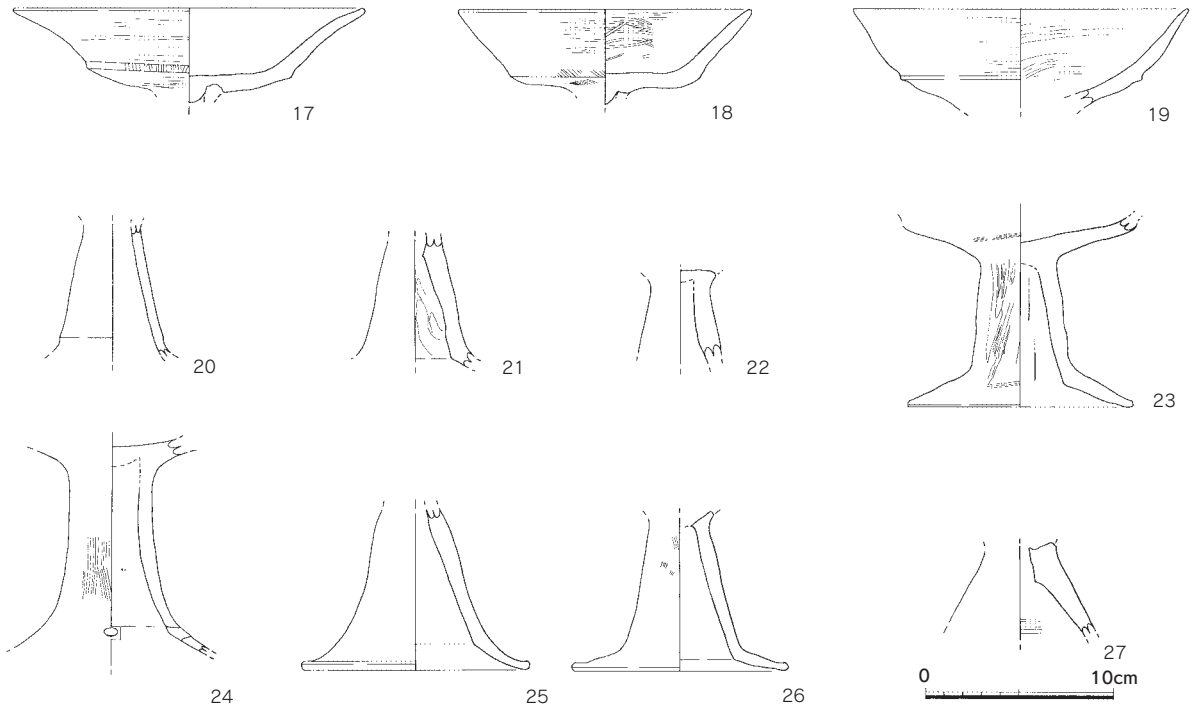


図180　古墳水田出土土器２(1/4)

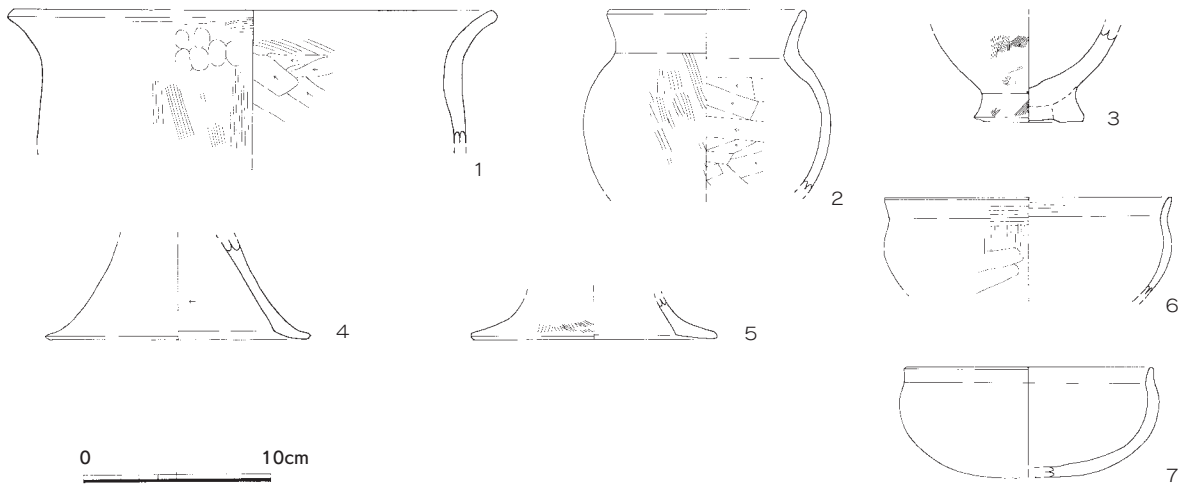


図181　SD149出土土器(1/4)

下層出土土器は7,9,11,16,17,22,24,27,28,29,31,33,36,42,43,49,53,55,57,58,75,88,90,99である。

上層出土土器のうち4,5,10,13,23,25,34,38,41,44,45,46,48,50,52,54,61,67,71,72,73,74はまとまって出土しており一括性が高い。

甕(１～14,17,18)土師器、５，９はほぼ完形、17，18は胴部のみ残存、他は肩部から口縁部にかけて残存。表99，100に形式分類表を示す。内湾口縁の①式は４点（1,2,3,4)で外面調整は１,４はタテハケ、２はヨコナデである。直線口縁の②式は6点(5,6,7,8,12,14)で外面調整は８は肩部不明瞭ながらヨコナデ、胴部ヨコハケで口縁端部面とりする。12は粗く長いタテハケ、５,７,14はナナメハケである。外反口縁の③式は

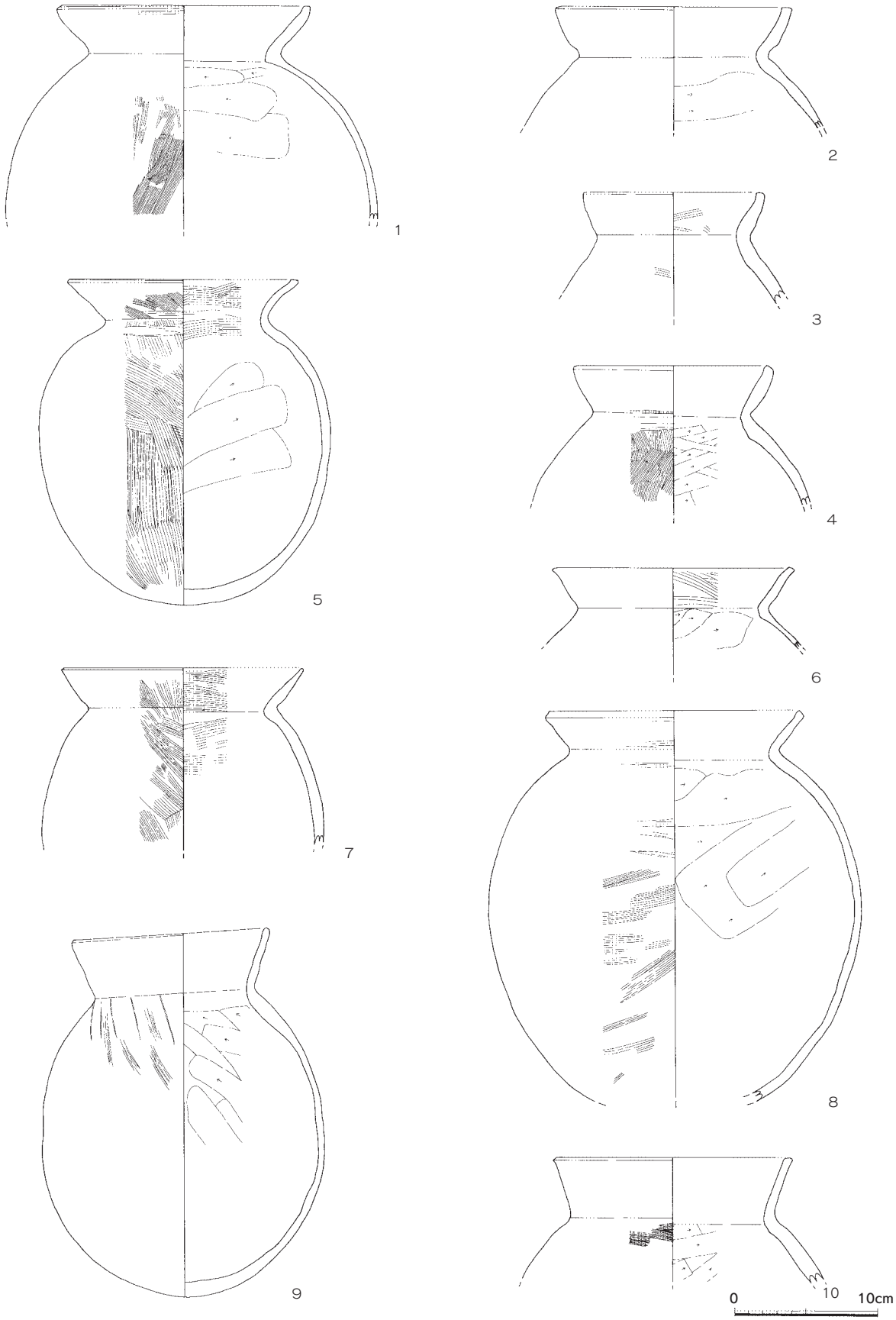


図182　SD164出土土器１(1/4)

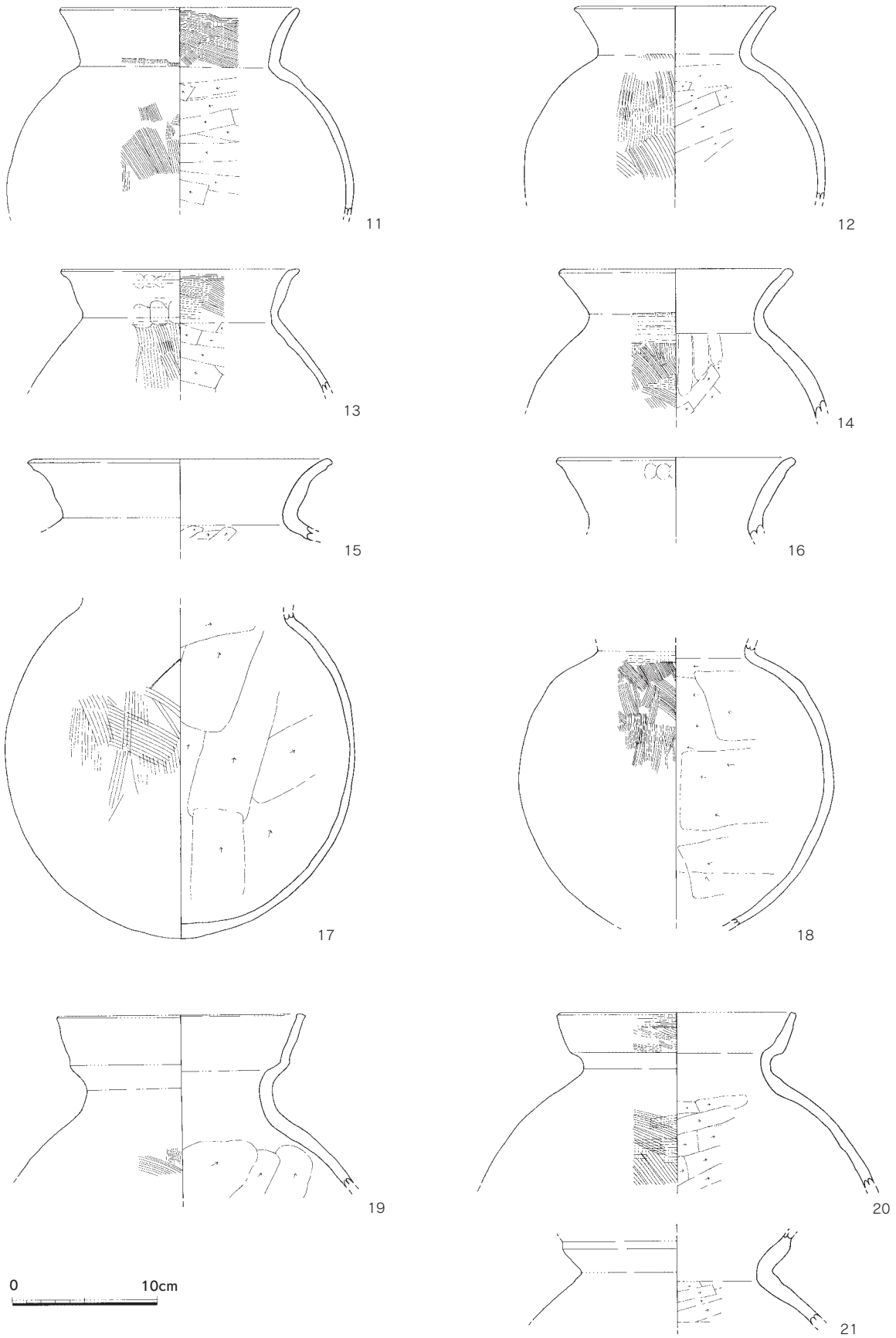


図183　SD164出土土器２(1/4)

２点(11,13)で外面調整は11はナナメハケ、13は粗く長いタテハケである。④式は２点(９,10)で外面調整は９は不明瞭、胴部中位に煤付着。口縁端部は１～８が面とり、９～14は丸味をもつ。

12,13,14は口縁部形態や外面調整などから新式の要素をもつ。

広口壺(15,16)土師器、口縁部破片。15は口縁部長4.5cm、端部は面取り気味。16は口縁部長5.0cm、端部は丸味をもつ、外面に指頭圧痕あり。

二重口縁壺(19～21)土師器、19は口縁部から肩部にかけて残存。20は口縁部1/6残存。19,20は二次口縁屈曲部は比較的明瞭である。口縁端部面とり。20は口縁部外面黒色で光沢がある。21は口縁上部欠損。口縁屈曲部は退化する。

大形壺（22）土師器、口径22.9cm、復元器高50.6cmの大形の壺である。同形式の類例として唐津市東谷山遺跡出土壷がある。胴部中位を欠損。丸底で体部は球形、口縁部は直立気味にたちあがりわずかに外反する。内外面ハケ。煮沸の痕跡はみられない。

図184　SD164出土土器３(1/6)

小型丸底壺（23～36）土師器、23～31,36はほぼ完形、32は口縁部から胴上半部残存、33～35は体部のみ残存。形態はすべて口径＜器高の２式である。口径≧胴径の①式が23,25,26,27,28,30,31で口径＜器高の②式が29で、②式のうち口縁部が直立するものが24,32,36である。このうち30は肩部でくびれ、器壁も薄い。31は底部平底で口頸部も長くやや異質である。調整は全体的に不明瞭で胴部ヨコハケは24,30で胴部ナナメおよびタテハケは29,32である。

小型広口壺(37～42,52～55)土師器、37～39はほぼ完形に復元できる。40は約1/3残存、41は約1/2残存。42は口縁部欠損。表101に分類表を示す。口径＞器高の１式は37,38、口径＜器高の２式は39～42,52,53である。頸部内面の稜までヘラケズリを施すのは37,39,52,53で肩部内面中位までヘラケズリを施すのは38,41,42である。40は内面に指頭圧痕が残り、器壁も厚くつくりは粗雑である。外面調整はタテハケは38,40,42で、他はヨコ、ナナメハケである。52は直口壺か迷うが口縁部長から小型広口壺とした。

中型広口壺(56)土師器、ほぼ完形。口径16.2cm、器高21.5cmで口径＜器高である。肩部内面中位までヘラケズリを施し、外面はナナメハケである。

直口壺(43～51)土師器、口縁部がわずかに外傾する１式は46～51でこのうち48,51は直立気味である。48は外面タテハケでつくりも粗雑である。口縁部が外反気味に外傾する２式は43,44,45である。
胴部形態はすべて球形である。

台付鉢(57,58)土師器、脚部を欠損。57,58は口縁部は屈曲し外傾する。

鉢（59～74,76）土師器、表102に分類表を示す。素口縁で浅鉢のＡ１式は７点(60,61,62,63,64,68,69)、素口縁で深鉢のＡ２式は３点(67,70,71)、屈曲口縁で浅鉢のＢ１式は４点(59,65,66,73)、屈曲口縁で深鉢のＢ２式は２点(72,74)ある。素口縁のＡ式は口縁部が逆ハの字形に開くものと直立するか内湾するものがある。60,61,62は口縁端部が外反し形態的に類似する。また、65，66は口縁端部でわずかに屈曲、直立し形態的

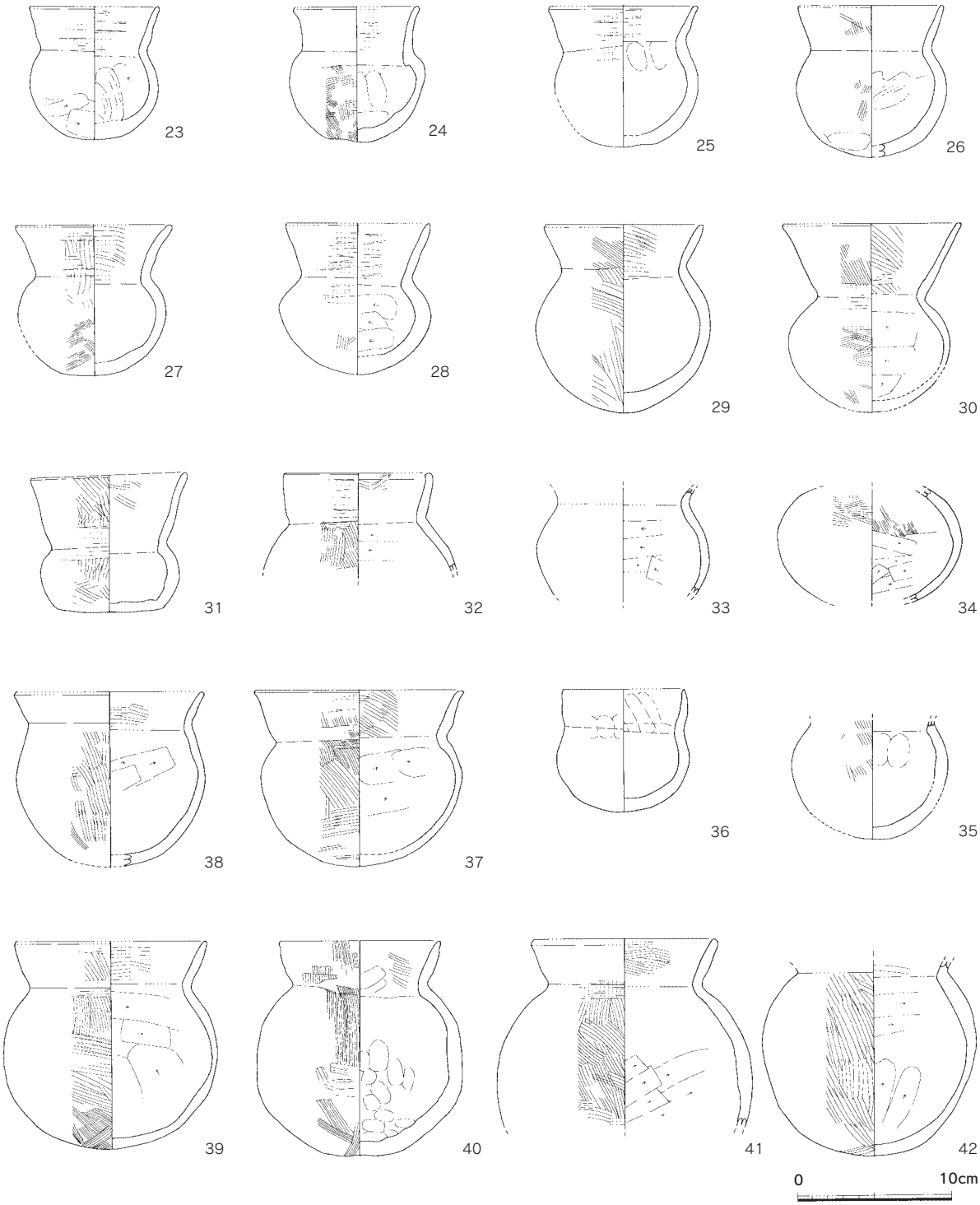


図185　SD164出土土器４(1/4)

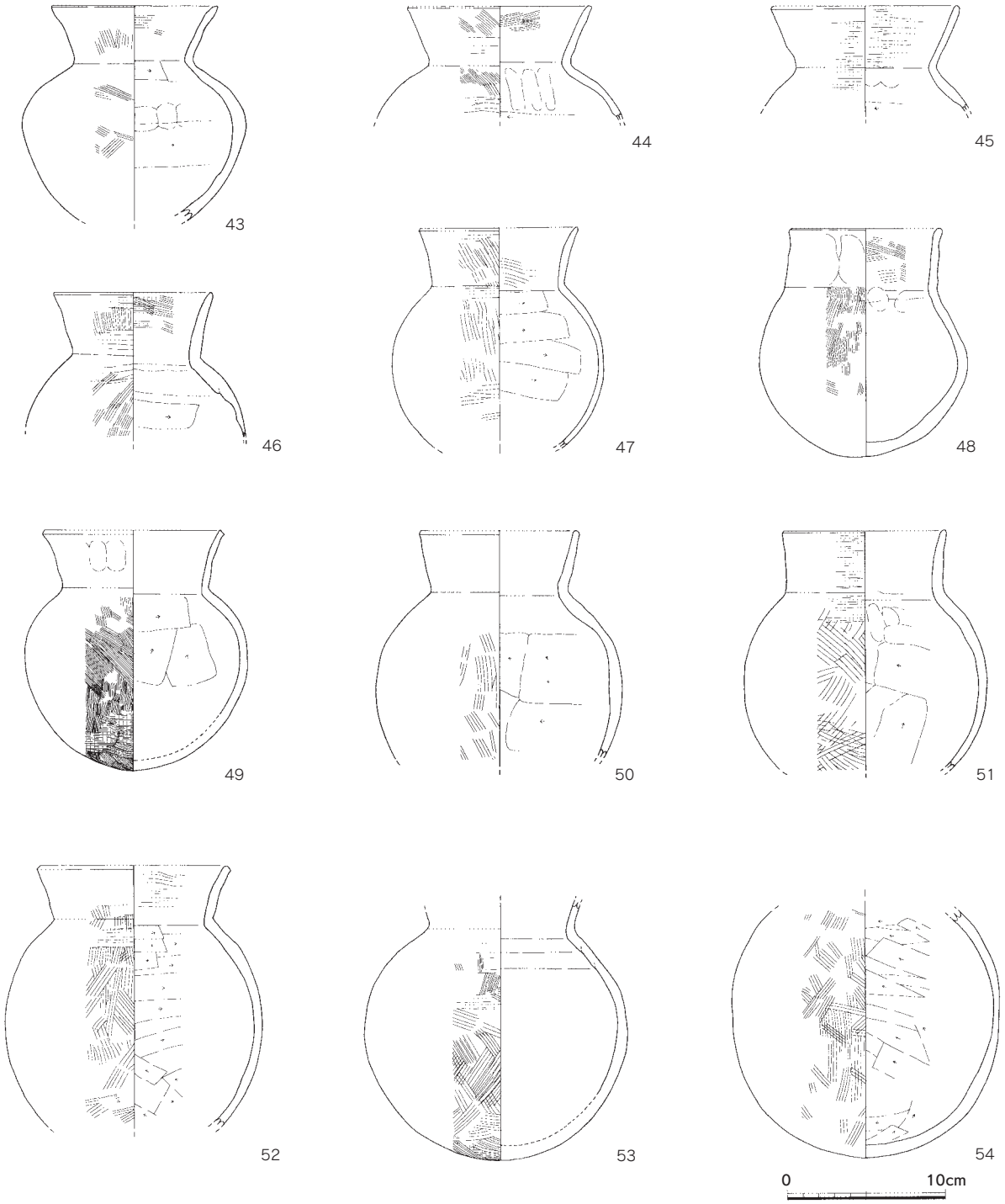


図186　SD164出土土器５(1/4)

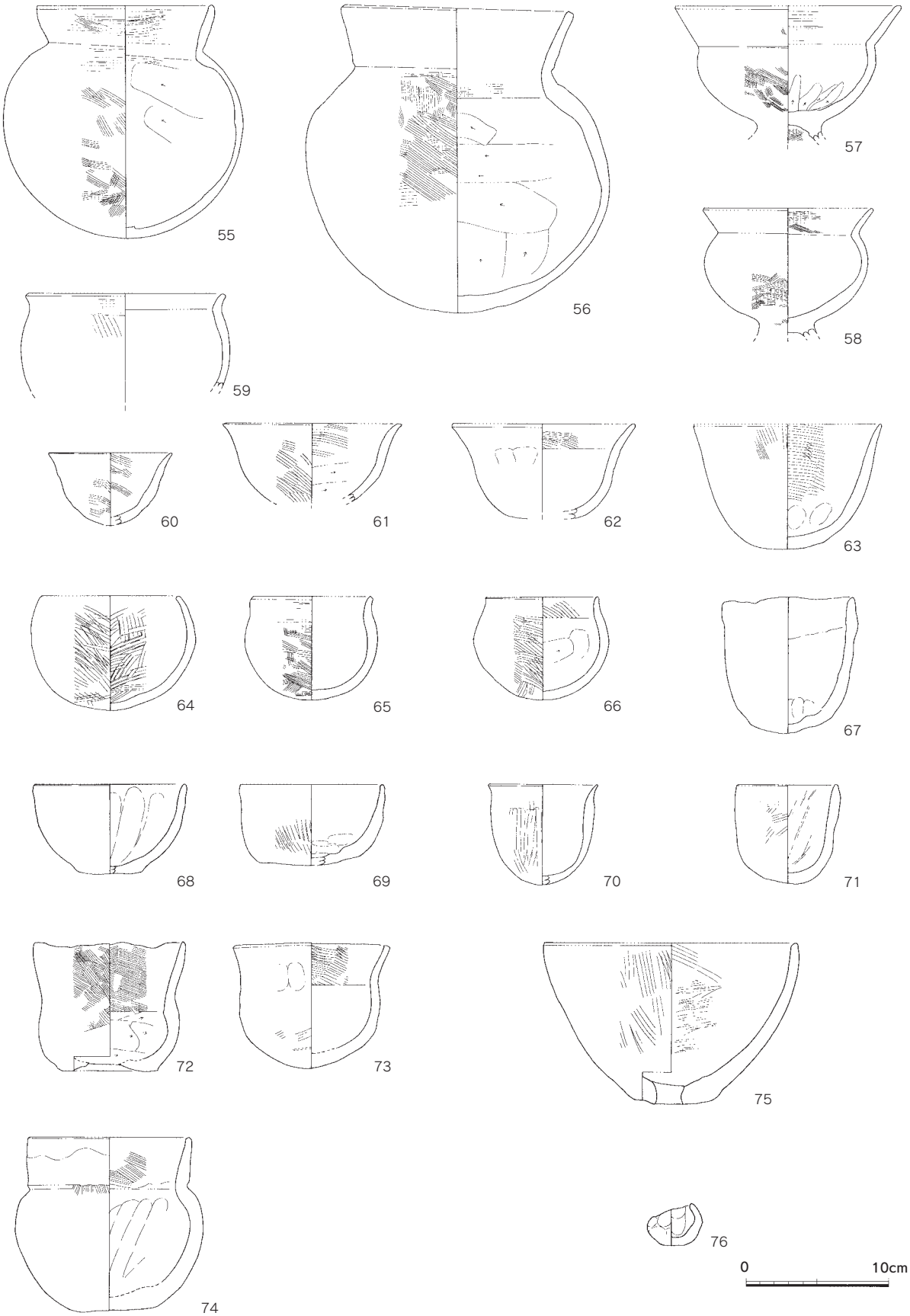


図187　SD164出土土器6(1/4)

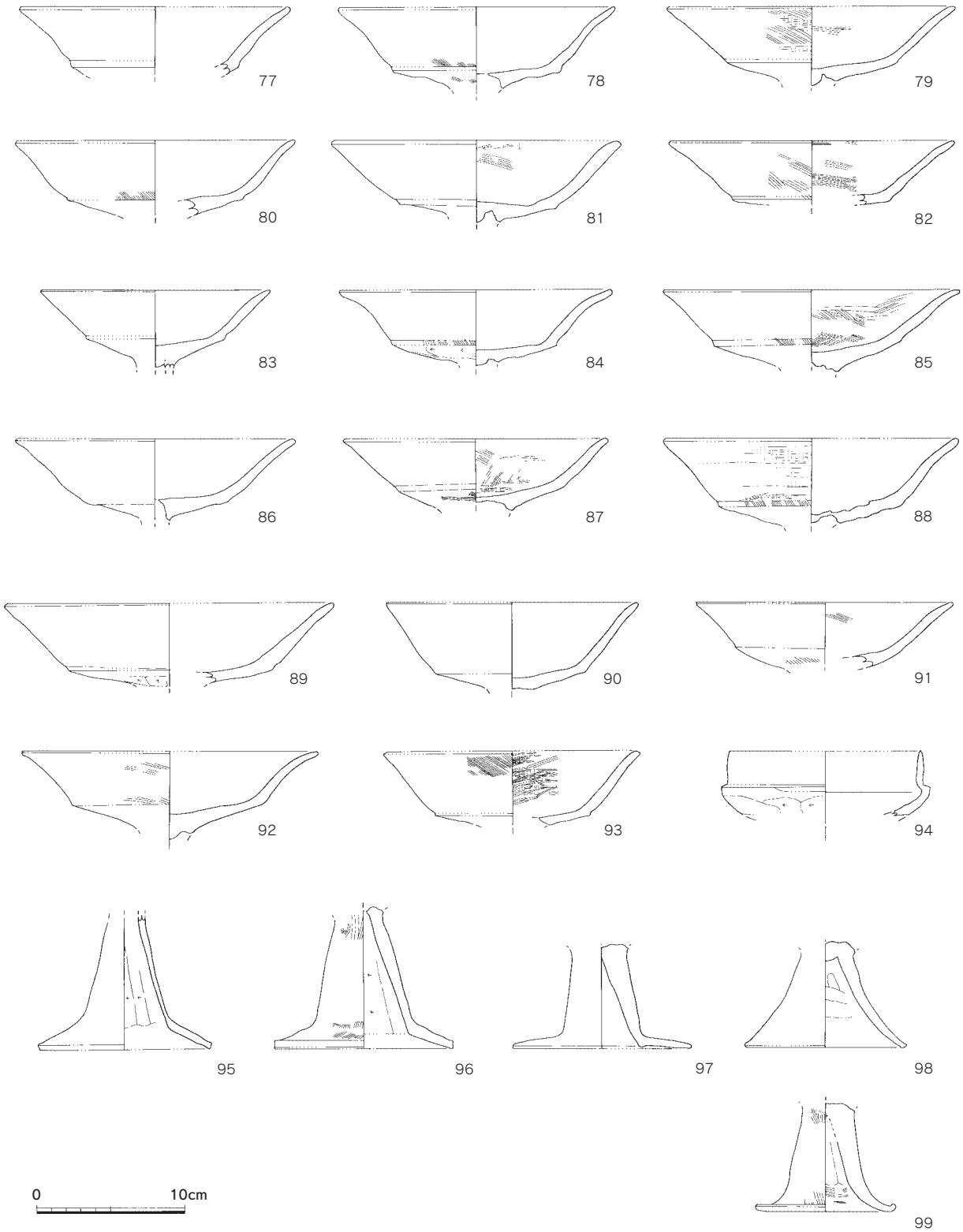


図188　SD164出土土器７(1/4)

に類似する。67，71は粗製の素口縁深鉢で形態的に類似する。

76はミニチュアの鉢である。

有孔鉢（甑）(75)土師器、完形。鉢の底部に径約2cmの円形の孔を穿つ。焼成前穿孔。

高杯(77～99）土師器、77～94は杯部のみ残存。95～99は脚部のみ残存。表103，104に脚部、杯部形式分類表を示す。杯口縁部形態は①式の直線的(79,80,81,82,83,85,89,90,91,93)②式の直線的で端部で外反する(84,88)③式の外反(77,78,92)④式の内湾し端部で外反する(86,87)がある。このうち91は杯部外面の稜はほとんどみられない。脚部形式は脚裾部で屈曲するＡ式で器壁が薄いＡ１式(95)、器壁がやや厚く太いＡ２式(96,97,99)がある。また、ラッパ状に開くＢ式(98)もある。杯・脚部接合技法はソケット状のＡ式は79,81,84,92であり、Ｂ式に86がある。

94は須恵器杯身を模倣したような形態であり、たちあがりの内外面にナデを施す。底部は粘土接合帯で割れる。類例としては基山町伊勢山３区１号住居出土高杯がある。

表55　古墳水田出土土師器一覧表(1)

挿図-番号 (登録番号)	出土地点	器種 種別	法量 (cm)	形態・成形・調整の特徴	胎土	色調
179 - 1 (992148)	古墳水田2, 3,F-－2	甕	口径（１５.６）	口縁端部面とり、口縁部内面ハケのちナデ。肩部外面ナナメハケ、胴部ヨコハケ。	中～大粒砂混入	内外面褐色
〃 - 2 (992145)	古墳水田2	甕	口径（２０.６）	口縁端部は面とり気味。口縁部内外面、肩部外面ハケ。	中粒砂混入	内外面褐色
〃 - 3 (992146)	古墳水田2, 3,D-－2	甕	口径　１６.９	口縁部は外反気味、端部は丸味をもつ。口縁部内面ハケ、肩部外面ハケのちナデ。	中粒砂混入	内外面明褐色
〃 - 4 (992147)	古墳水田2, 3,D-－2	甕	口径　１６.７	口縁端部は面とり気味。肩部外面ナナメハケ、胴部ヨコハケ。	中～大粒砂混入	内外面明褐色
〃 - 5 (992134)	古墳水田1 ＳＤ150	甕	口径（１７.４）	口縁部は内湾気味、端部面とり。内外面ナデ。	中粒砂混入	内外面黒褐色
〃 - 6 (992132)	古墳水田1 Ｃ-－1	甕	口径（１４.８）	口縁端部は面とりされる。口縁部内外面ハケのちナデ。	細砂混入	内外面褐色
〃 - 7 (992135)	古墳水田1 ＳＤ150	甕	口径（１４.８）	口縁端部は面とりされる。口縁部内外面ハケのちナデ。	細砂混入	内外面褐色
〃 - 8 (992133)	古墳水田1 Ｄ-－3	甕	口径（１８.６）	口縁端部でわずかに屈曲、外反する。端部面とり気味。口縁部外面ナデ。	中粒砂混入	内外面明褐色
〃 - 9 (992149)	古墳水田3 Ｄ-－1	二重口縁壺	口径（１４.６）	口縁部下端は緩やかに屈曲する。端部は面とりされ内傾する。肩部外面ハケ。	中粒砂混入	内外面褐色
〃 - 10 (992136)	古墳水田2	小型広口壺	口径　１２.４ 器高　　８.６	口縁部は短く外反する。体部外面ハケのち口縁部のみナデ。	中～大粒砂混入	内面褐色 外面黒褐色
〃 - 11 (992137)	古墳水田2, 3,D-－1	小型広口壺	口径（１３.６）	口縁部内外面ナデ、体部外面ハケのちナデ。	中粒砂混入	内外面黒褐色
〃 - 12 (992130)	古墳水田1 Ｇ-－1	小型丸底壺	口径（　９.８）	口縁部は直立気味、体部外面ハケのちナデ。	金雲母混入 細砂混入	内外面褐色
〃 - 13 (992131)	古墳水田1 SF156盛土内	小型丸底壺	口径　　７.８ 器高　１１.５	口縁端部は指押さえにて外反、口縁部外面タテハケ、のち端部外面ナデ、体部外面ハケ。	細砂混入	内外面明褐色
〃 - 14 (992140)	古墳水田2, 3,F-－1	椀	口径　１３.６ 器高　　５.３	体部から口縁部にかけて内湾する。外面ケズリのちナデ、内面ナデ。	中粒砂混入	内面褐色 外面黒褐色
〃 - 15 (992138)	古墳水田2, 3,F - 0	鉢	口径（　６.５）器高 ７.０	平底で体部から口縁部にかけて内傾する。	中粒砂混入	内外面褐色
〃 - 16 (992139)	古墳水田2, 3,F-－1	鉢	口径（　４.４）器高 ３.４	体部は指頭にて成形、口縁部は短く外反。	細砂混入	内外面明褐色
180 - 17 (992142)	古墳水田2, 3,D-－2	高杯	口径（１８.６）	杯部下位よりに稜あり、口縁部は外反する。内外面ナデ。	中粒砂混入	内外面褐色
〃 - 18 (992141)	古墳水田2, 3,D-－2	高杯	口径　１５.６	杯部中位で屈曲、内外面ナデ。	細砂混入	内外面明褐色
〃 - 19 (992129)	古墳水田1	高杯	口径（１７.７）	杯部下位よりに稜あり、内外面ナデ。	細砂混入	内外面明褐色

表56　古墳水田出土土師器一覧表(2)

挿図-番号 (登録番号)	出土地点	器種 種別	法量 (cm)	形態・成形・調整の特徴	胎土	色調
180- 20 (992144)	古墳水田2	高杯		脚柱部のみ残存。器壁は薄い。	緻密	内外面明褐色
〃 - 21 (992128)	古墳水田1 SF155	高杯		裾部内側に稜あり。	細砂混入	内外面褐色
〃 - 22 (992127)	古墳水田1 ＳＤ150	高杯		脚柱部のみ残存。	緻密	内外面明褐色
〃 - 23 (992143)	古墳水田2, 3,Ｆ - 0	高杯	底径　１１.９	裾部は下外方に開く。裾部内側に稜あり。杯底部ハケのちナデ。	中～大粒砂混入	内外面褐色
〃 - 24 (992126)	古墳水田1 SD150	高杯 （弥生土器）		裾部は外反して開く。裾部に円形の孔を穿つ。柱部外面タテハケのちナデ消し。	細砂混入	内外面明褐色
〃 - 25 (992123)	古墳水田1 Ｃ-－1	高杯	底径　１２.１	脚裾部は外反して開く、裾部内側に稜あり。裾部内外面ナデ。	中粒砂混入	内外面明褐色
〃 - 26 (992124)	古墳水田1 G-1～0	高杯	底径　１１.４	裾部は下外方に開く。裾部内側に稜あり。裾部内外面ナデ。	緻密	内外面明褐色
〃 - 27 (992125)	古墳水田1	高杯		脚部はラッパ状に開く。	中～大粒砂混入	内外面明褐色
181 - 1 (981684)	ＳＤ１４９	甑	口径（２４.６）	口縁部は外反し、端部は丸味をもつ。体部外面タテハケ。煤付着。	金雲母混入 細砂混入	内面褐色 外面黒褐色
〃 - 2 (981685)	ＳＤ１４９	小型広口壺	口径（１０.６）	体部上半部タテハケ、下半部ナデ消し。	中粒砂混入	内外面褐色
〃 - 3 (981688)	ＳＤ１４９	甕？	底径　　５.８	底部は断面台形でやや上げ底。体部外面タテハケ。	大粒砂混入	内外面褐色
〃 - 4 (981690)	ＳＤ１４９	高杯	底径（１４.０）	裾部は外反して開く。裾部内側に稜あり。	中粒砂混入	内外面褐色
〃 - 5 (981689)	ＳＤ１４９	高杯	底径（１３.０）	裾部は外反して開く。裾部内側に稜あり。裾部外面ハケのちナデ。	緻密	内外面明褐色
〃 - 6 (981686)	ＳＤ１４９	椀	口径（１５.２）	口縁部で緩やかに屈曲して外反する。体部上半部タテハケのちヨコナデ。	細砂混入	内外面褐色
〃 - 7 (981687)	ＳＤ１４９	椀	口径（１３.７）	口縁部で緩やかに屈曲し短く直立する。	金雲母混入 細砂混入	内外面黒褐色
182 - 1 (990390)	ＳＤ１６４	甕	口径　１７.６	口縁部は内湾し、端部は面とりされる。口縁部内外面ナデ、肩部外面タテハケのちナデ。	中～大粒砂混入	内外面明褐色
〃 - 2 (990387)	ＳＤ１６４	甕	口径（１６.４）	口縁部は内湾し、端部は面とりされる。口縁部内外面ナデ、肩部外面ハケのちナデ。	中粒砂混入	内外面明褐色
〃 - 3 (990596)	ＳＤ１６４	甕	口径（１２.６）	口縁部は内湾し、端部は面取りされる。内外面ヨコナデ。	中粒砂混入	内外面赤褐色
〃 - 4 (990589)	ＳＤ１６４ 上層	甕	口径　１３.９	口縁部は内湾気味、端部面取り。肩部外面タテハケ。	細～中粒砂混入	内外面明褐色
〃 - 5 (990385)	ＳＤ１６４ 上層	甕	口径　１６.０ 器高　２２.８	口縁端部よりは外反気味。端部面とり。肩部外面ナナメハケ、胴部から底部にかけてタテハケ。	金雲母混入 中～大粒砂混入	内外面褐色
〃 - 6 (990389)	ＳＤ１６４	甕	口径（１６.８）	口縁端部は面とりされ、外反気味。口縁部内面、肩部外面ハケのちナデ。煤付着。	細砂混入	内面黄褐色 外面黒褐色
〃 - 7 (990391)	ＳＤ１６４ 下層	甕	口径（１６.８）	口縁部は端部にかけて薄くなる。端部面とり。口縁部から体部外面ハケ、口縁部内面ハケ。煤付着	中粒砂混入	内外面褐色
〃 - 8 (990388)	ＳＤ１６４	甕	口径（１７.６）	口縁端部面とり。体部外面ヨコハケのち肩部のみナデ消し。	中～大粒砂多量混入	内外面明褐色
〃 - 9 (990383)	ＳＤ１６４ 下層	甕	口径　１３.８　器高 ２５.７	胴部最大径は下位より。体部外面ナデ、口縁部は直線的に外上方に開く。煤付着。	中粒砂混入	内外面褐色
〃 - 10 (990591)	ＳＤ１６４ 上層	甕	口径（１６.６）	口縁端部面とり気味。肩部外面ヨコハケ。煤付着。	金雲母混入 中粒砂多量混入	内外面褐色
183 - 11 (990594)	ＳＤ１６４ 下層	甕	口径（１６.４）	口縁部は外反し、端部は丸味をもつ。口縁部内面ハケ、肩部外面ハケのちナデ。煤付着。	中粒砂混入	内外面明褐色
〃 - 12 (990595)	ＳＤ１６４	甕	口径（１３.８）	口縁端部面とり気味。体部外面タテハケ。	中～大粒砂多量混入	内外面褐色
〃 - 13 (990590)	ＳＤ１６４ 上層	甕	口径　１６.４	口縁部は外反気味。口縁部内面、肩部外面ハケ。	中粒砂混入	内面黄褐色 外面黒褐色
〃 - 14 (990592)	ＳＤ１６４ 上層	甕	口径　１６.０	口縁端部は丸味をもつ。体部外面ハケ。	中粒砂混入	内面褐色 外面黒褐色
〃 - 15 (990598)	ＳＤ１６４	広口壺	口径（２０.８）	口縁部は端部よりで屈曲し外反する。端部面取り気味。内外面ナデ。	中～大粒砂混入	内外面褐色
〃 - 16 (990593)	ＳＤ１６４ 下層	広口壺	口径（１６.４）	口縁部は外反気味、端部は部分的に面取り気味。内外面ヨコナデ。	細砂少量混入	内外面黄褐色

表57　古墳水田出土土師器一覧表(3)

挿図-番号 (登録番号)	出土地点	器種 種別	法量 (cm)	形態・成形・調整の特徴	胎土	色調
183- 17 (990384)	ＳＤ１６４ 下層	甕	胴径　２３.９	体部は球形。胴部外面ハケ、肩部、底部はナデ消し。煤付着。	中粒砂混入	内外面褐色
〃 - 18 (990382)	ＳＤ１６４ 上層	甕	胴径（２１.５）	体部は球形。肩部から胴部外面ハケ、底部はナデ消し。煤付着。	中～大粒砂混入	内外面褐色
〃 - 19 (990395)	ＳＤ１６４ 上層	二重口縁壺	口径（１７.０）	口縁基部で屈曲し、口縁部は外上方に開く。端部面取り。	中～大粒砂多量混入	内外面明褐色
〃 - 20 (990392)	ＳＤ１６４	二重口縁壺	口径（１６.４）	口縁基部で屈曲し内湾気味に立ち上がる。口縁部から体部外面ハケ、のち肩部のみナデ消し。	中～大粒砂混入	内外面黒褐色
〃 - 21 (990597)	ＳＤ１６４	二重口縁壺		口縁基部で屈曲、緩やかな稜がつく。口縁部ナデ。	中～大粒砂多量混入	内外面黒褐色
184 - 22 (990386)	ＳＤ１６４ 下層	大形壺	口径　２２.９	体部は球形で口縁部は外反する。端部面とり。口縁部から体部外面ハケ、体部下半部内面ハケ。	中～大粒砂混入	内外面褐色
185 - 23 (992053)	ＳＤ１６４ 上層	小型丸底壺	口径　　８.４ 器高　　８.６	口縁部は外面中位でやや屈曲し、外上方に開く。底部外面ヘラケズリ。	中粒砂混入	内外面褐色
〃 - 24 (992055)	ＳＤ１６４ 下層	小型丸底壺	口径　　８.１ 器高　　８.７	口縁部は直立気味に立ち上がり端部で外反。口縁部内外面ナデ、体部外面ハケ。	中～大粒砂混入	内外面明褐色
〃 - 25 (992054)	ＳＤ１６４ 上層	小型丸底壺	口径　　９.６ 器高　　９.１	口縁部は外面中位でやや屈曲し、外上方に開く。口縁部内外面ナデ。	中粒砂混入	内外面黒褐色
〃 - 26 (992098)	ＳＤ１６４ 上層	小型丸底壺	口径（　９.４） 器高（　９.８）	口径と胴部最大径はほぼ同じ。口縁部から体部外面ハケのちナデ消し。底部ヘラケズリ。	中粒砂少量混入	内外面褐色
〃 - 27 (992058)	ＳＤ１６４ 下層	小型丸底壺	口径　１０.１ 器高　　９.７	口縁部は外上方に開く。口縁部外面ハケのちナデ、内面ハケ。	中粒砂混入	内外面褐色
〃 - 28 (992057)	ＳＤ１６４ 下層	小型丸底壺	口径　　９.３ 器高　　９.８	口径と胴部最大径はほぼ同じ。口縁部内外面ナデ。	中粒砂混入	内外面褐色
〃 - 29 (990393)	ＳＤ１６４ 下層	小型丸底壺	口径　１０.２ 器高　１２.１	口縁部内外面、体部外面ハケ。	中粒砂混入	内外面褐色
〃 - 30 (992060)	ＳＤ１６４	小型丸底壺	口径　１１.５ 器高　１２.２	肩部でくびれ、口縁部は外上方に開く。口縁部内外面ハケのちナデ、体部外面ハケのちナデ。	中～大粒砂混入	内外面褐色
〃 - 31 (992056)	ＳＤ１６４ 下層	小型丸底壺	口径（１０.１） 器高　　９.１	平底で口径が胴径より大きい。口縁部から体部外面ハケ。	中粒砂混入	内外面褐色
〃 - 32 (992099)	ＳＤ１６４	小型丸底壺	口径　　９.５	口縁部は直立する、端部は内側に肥厚する。口縁部内外面ナデ。肩部外面タテハケ。	中粒砂混入	内外面褐色
〃 - 33 (992077)	ＳＤ１６４ 下層	小型丸底壺	胴径　１１.０	胴部最大径は中位。体部外面ナデ。煤付着。	中粒砂混入	内面赤褐色 外面黒褐色
〃 - 34 (992078)	ＳＤ１６４ 上層	小型丸底壺	胴径　１１.２	体部は扁平な球形、肩部はハケのちナデ消し。	中粒砂混入	内外面明褐色
〃 - 35 (992076)	ＳＤ１６４	小型丸底壺	胴径　１０.０	体部は球形、内外面ハケ。	細砂混入	内外面褐色
〃 - 36 (992059)	ＳＤ１６４ 下層	小型丸底壺	口径　　７.７ 器高　　７.９	肩部でややくびれ、口縁部は指頭により内湾しながら直立する。	中～大粒砂多量混入	内外面褐色
〃 - 37 (992087)	ＳＤ１６４ 上層	小型広口壺	口径　１３.４ 器高　１１.３	口縁端部面とり、口縁部内外面ハケのちナデ、体部外面ハケ。煤付着。	細～中粒砂混入	内面褐色 外面黒褐色
〃 - 38 (992086)	ＳＤ１６４ 上層	小型広口壺	口径　１２.２ 器高（１１.２）	体部外面ハケ、口縁部内面ハケ。煤付着、内面炭化物付着。	中粒砂混入	内面褐色 外面黒褐色
〃 - 39 (992093)	ＳＤ１６４ 上層	小型広口壺	口径　１２.４ 器高　１３.４	胴部最大径は中位、口縁部は内湾気味に外上方に開く。口縁部内面、体部外面ハケ。煤付着。	中粒砂混入	内外面黒褐色
〃 - 40 (992095)	ＳＤ１６４ 上層	小型広口壺	口径（１０.２） 器高　１３.８	体部内面に指頭圧痕あり、口縁部外面、体部外面タテハケ。	中粒砂混入	内外面褐色
〃 - 41 (992092)	ＳＤ１６４ 上層	小型広口壺	口径（１２.０）	口縁端部は丸味をもつ、口縁部内面、体部外面ハケ。	中～大粒砂混入	内外面褐色
〃 - 42 (992080)	ＳＤ１６４ 下層	小型広口壺	胴径　１３.１	体部は球形、外面ハケ。	中粒砂混入	内外面褐色
186 - 43 (992084)	ＳＤ１６４ 下層	小型広口壺	口径　１０.４	胴部最大径は上位より、口縁部は外反気味。体部外面ハケのちナデ消し。	中粒砂混入	内外面黒褐色
〃 - 44 (992082)	ＳＤ１６４ 上層	小型広口壺	口径　１１.６	口縁部内外面、肩部外面ハケのちナデ。肩部内面指押さえ痕あり。	細砂混入	内外面明褐色
〃 - 45 (992083)	ＳＤ１６４ 上層	小型広口壺	口径　１１.３	口縁部内外面、肩部外面ヨコハケ。	中粒砂混入	内外面褐色
〃 - 46 (992081)	ＳＤ１６４ 上層	直口壺	口径　１０.０	口縁部内外面、体部外面ハケのちナデ消し。	細～中粒砂混入	内外面褐色
〃 - 47 (992089)	ＳＤ１６４	直口壺	口径　１０.０	体部は球形。口縁部内外面、体部外面ハケのちナデ消し。体下半部煤付着。	細砂混入	内外面明褐色

表58　古墳水田出土土師器一覧表(4)

挿図-番号 (登録番号)	出土地点	器種 種別	法量 (cm)	形態・成形・調整の特徴	胎土	色調
186 - 48 (992097)	ＳＤ１６４ 上層	直口壺	口径（　９.６） 器高　１４.５	胴部最大径は中位、口縁部は直立する。口縁部内面、体部外面ハケ。器壁剥落。	中～大粒砂混入	内外面明褐色
〃 - 49 (992088)	ＳＤ１６４ 下層	直口壺	口径　１１.４ 器高　１５.２	体部は球形。口縁部内外面ハケのちナデ。体部外面ハケ。体下半部黒色タール状付着。	中粒砂混入	内外面褐色
〃 - 50 (992090)	ＳＤ１６４ 上層	直口壺	口径（１０.０）	口縁部は直立気味。口縁部内外面ヨコナデ。	中粒砂混入	内外面褐色
〃 - 51 (992094)	ＳＤ１６４ 上層	直口壺	口径（１０.３）	体部は球形、口縁部は直立。口縁部内外面ナデ、体部外面粗いハケ。肩部内面指押さえ痕あり。	細砂少量混入	内外面明褐色
〃 - 52 (992091)	ＳＤ１６４ 上層	直口壺	口径（１２.２）	体部は球形で口縁部は直立し端部で外反する。口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ハケ。	中～大粒砂混入	内面褐色 外面黒褐色
〃 - 53 (992096)	ＳＤ１６４ 下層	直口壺	胴径　１６.５	体部は球形、口縁部は直立？体部外面ハケ。	大粒砂混入	内外面明褐色
〃 - 54 (992079)	ＳＤ１６４ 上層	壺	胴径（１６.８）	体部は球形。外面ハケ。	中～大粒砂混入	内外面褐色
187 - 55 (992085)	ＳＤ１６４ 下層	小型広口壺	口径　１２.４ 器高　１６.３	体部は球形で口縁部は内湾気味。口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ハケのちナデ消し。煤？付着。	中粒砂少量混入	内外面褐色
〃 - 56 (990394)	ＳＤ１６４ 上層	小型広口壺	口径　１６.２ 器高　２１.５	体部はややいびつな球形で口縁部は直線的に外上方に開く。体部外面ハケ。煤付着。	細～中粒砂混入	内外面褐色
〃 - 57 (992061)	ＳＤ１６４ 下層	台付鉢	口径　１５.８	肩部で緩やかにくびれ口縁部は外上方に開く。口縁部内外面ナデ、体部外面ハケのちナデ。	細～中粒砂混入	内外面褐色
〃 - 58 (992062)	ＳＤ１６４ 下層	台付鉢	口径　１１.８	口縁部は外上方に開く。口縁部内外面ナデ。体部外面ハケのち上半部ナデ。	中粒砂混入	内外面褐色
〃 - 59 (992069)	ＳＤ１６４ 上層	鉢	口径（１３.８）	口縁部は短く外反する。端部欠損。口縁部内外面ナデ。	中粒砂混入	内外面褐色
〃 - 60 (992066)	ＳＤ１６４	鉢	口径（　８.６） 器高（　５.０）	口縁部は緩やかに屈曲し外上方に開く。口縁部内面、体部外面ハケ。	中粒砂混入	内外面黒褐色
〃 - 61 (992067)	ＳＤ１６４ 上層	鉢	口径（１２.４）	口縁部でわずかに屈曲し外反する。内面ナデ、外面ハケ。	中粒砂混入	内面褐色 外面黒褐色
〃 - 62 (992068)	ＳＤ１６４ 上層	鉢	口径（１２.７）	平底で口縁部は緩やかに屈曲し外上方に開く。口縁部内面ハケ。	中～大粒砂混入	内外面褐色
〃 - 63 (992074)	ＳＤ１６４	鉢	口径　１３.０ 器高　　８.８	素口縁。口縁部内面ハケ。外面煤？付着。底部内面炭化物付着。	中～大粒砂混入	内外面褐色
〃 - 64 (992075)	ＳＤ１６４ 上層	鉢	口径（　９.７） 器高　　７.９			
〃 - 65 (992064)	ＳＤ１６４ 上層	鉢	口径　　８.５ 器高　　７.２	体部は丸味をもち、口縁部でわずかに屈曲し垂直に立ち上がる。体部外面ハケ。	金雲母混入 細砂混入	内外面褐色
〃 - 66 (992063)	ＳＤ１６４ 上層	鉢	口径　　７.８ 器高　　７.１	体部は丸味をもち、口縁部でわずかに屈曲し垂直に立ち上がる。口縁部内面、体部外面ハケ。	中粒砂混入	内外面明褐色
〃 - 67 (990600)	ＳＤ１６４ 上層	鉢	口径　　９.０ 器高　　９.５	素口縁、指押さえ痕あり。	中～大粒砂混入	内外面褐色
〃 - 68 (992071)	ＳＤ１６４	鉢	口径（１０.６） 器高（　６.２）	平底、素口縁、体部は丸味をもつ。指押さえ痕あり。	細～中粒砂混入	内外面明褐色
〃 - 69 (992070)	ＳＤ１６４	鉢	口径　１０.０ 器高（　５.６）	平底、素口縁、体部は垂直に立ち上がる。	中粒砂混入	内外面明褐色
〃 - 70 (992065)	ＳＤ１６４	鉢	口径（　７.６） 器高（　７.０）	口縁部は短く外反する。口縁部内外面ナデ、体部外面粗いタテハケ。	中粒砂混入	内外面褐色
〃 - 71 (992072)	ＳＤ１６４ 上層	鉢	口径　　７.０ 器高　　６.９	素口縁、指押さえ痕あり。外面ハケ、内面ケズリ。	中粒砂混入	内外面褐色
〃 - 72 (992051)	ＳＤ１６４ 上層	鉢	口径　１０.６ 器高　　９.１	平底、肩部で若干くびれ口縁部は外上方にやや開く。口縁部内外面、体部外面ハケ。	細～中粒砂混入	内外面褐色
〃 - 73 (992052)	ＳＤ１６４ 上層	鉢	口径　１０.９ 器高　　８.８	口縁部は外上方に開く。端部面とり。口縁部内面ハケ。体部外面器壁剥落。煤付着。	中粒砂多量混入	内面褐色 外面黒褐色
〃 - 74 (990599)	ＳＤ１６４ 上層	鉢	口径　１１.４ 器高　１２.２	平底で口縁部は直立する。体部内面指痕あり。体部内面全面に煤？付着。	細～中粒砂混入	内面黒褐色 外面明褐色
〃 - 75 (992073)	ＳＤ１６４ 下層	有孔鉢・甑	口径　１７.７ 器高　１１.３	平底で底部に円形の孔を穿つ。体部外面、口縁部内面ハケ。体部内面ナデ。	中～大粒砂混入	内外面褐色
〃 - 76 (990396)	ＳＤ１６４	鉢	口径　　２.６ 器高　　２.９	ミニチュア土器、口縁部にかけて内に傾く。	中粒砂混入	内外面褐色
188 - 77 (992108)	ＳＤ１６４ 上層	高杯	口径（１８.２）	有稜で口縁部は外反する。内外面ナデ。	中粒砂混入	内面褐色 外面明褐色
〃 - 78 (992109)	ＳＤ１６４ 上層	高杯	口径（１８.６）	有稜で口縁部は外反する。内外面ナデ。	細～中粒砂少量混入	内外面橙色

表59　古墳水田出土土師器一覧表(5)

挿図-番号 (登録番号)	出土地点	器種 種別	法量 (cm)	形態・成形・調整の特徴	胎土	色調
188 - 79 (992110)	ＳＤ１６４ 上層	高杯	口径（１９.４）	稜はわずかにつき、口縁部もわずかに外反する。口縁部外面ハケのちナデ。	細砂少量混入	内面褐色 外面明褐色
〃 - 80 (992111)	ＳＤ１６４	高杯	口径（１８.８）	稜はわずかにつき口縁部はわずかに外反する。口縁部内外面ナデ。杯底部ケズリ。	細～中砂少量混入	内外面褐色
〃 - 81 (992112)	ＳＤ１６４	高杯	口径（１９.４）	稜はわずかにつき口縁部は直線的に外上方に開く。口縁部内外面ナデ。	中粒砂混入	内外面褐色
〃 - 82 (992113)	ＳＤ１６４	高杯	口径（１９.２）	有稜で口縁部は外反する。外面ハケのちナデ。	細砂混入	内面褐色 外面明褐色
〃 - 83 (992115)	ＳＤ１６４	高杯	口径（１５.４）	有稜で口縁部は外上方に開く。口縁部内外面ナデ。	中粒砂混入	内外面明褐色
〃 - 84 (992100)	ＳＤ１６４ 上層	高杯	口径　１８.３	有稜で口縁部は外反する。口縁部内外面ナデ、杯底部ヘラケズリ。	中粒砂混入	内外面褐色
〃 - 85 (992101)	ＳＤ１６４ 上層	高杯	口径　１９.９	有稜で口縁部はわずかに外反する。口縁部内外面ナデ、杯内部ハケ。	中～大粒砂混入	内面褐色 外面明褐色
〃 - 86 (992114)	ＳＤ１６４	高杯	口径（１８.８）	杯部下位で段がつく。口縁部内外面ナデ。杯底部ケズリ。	中粒砂混入	内外面褐色
〃 - 87 (992102)	ＳＤ１６４ 上層	高杯	口径（１７.８）	稜はナデ消されわずかにつく。口縁部は直線的に外上方に開く。内外面ナデ。	中粒砂混入	内外面明褐色
〃 - 88 (992103)	ＳＤ１６４ 下層	高杯	口径　１９.８	有稜で口縁部はわずかに外反する。口縁部内外面ナデ、杯部内面器壁剥落。	中～大粒砂混入	内外面褐色
〃 - 89 (992107)	ＳＤ１６４	高杯	口径　２２.１	有稜で口縁部は直線的に外上方に開く。口縁部内外面ナデ、杯底部ケズリ。	中粒砂混入	内外面赤褐色
〃 - 90 (992104)	ＳＤ１６４ 下層	高杯	口径　１６.９	稜はわずかにつき口縁部は直線的に外上方に開く。	中～大粒砂混入	内外面明褐色
〃 - 91 (992117)	ＳＤ１６４	高杯	口径（１７.２）	稜はナデ消されわずかにつく。口縁部はわずかに外反する。内外面ナデ。	細砂混入	内面黒褐色 外面明褐色
〃 - 92 (992105)	ＳＤ１６４	高杯	口径（１９.９）	有稜で口縁部は外反する。内外面ナデ。内外面部分的に器壁剥落。	細砂混入	内外面明褐色
〃 - 93 (992116)	ＳＤ１６４	高杯	口径（１７.２）	稜はナデ消されわずかにつく。内外面ナデ。	細砂混入	内外面褐色
〃 - 94 (003056)	ＳＤ１６４	高杯	口径（１２.８）	口縁部は垂直にたちあがる。杯下半部ケズリのちナデ、口縁部内外面ナデ。	中粒砂混入	内外面褐色
〃 - 95 (992122)	ＳＤ１６４	高杯	底径　１１.６	脚裾部は下外方に開く。裾端部面とり。外面タテ方向ナデ。	中粒砂混入	内外面褐色
〃 - 96 (992119)	ＳＤ１６４ 上層	高杯	底径　１２.０	脚裾部内面に稜あり。裾端部面とり。外面ハケのちナデ。	細砂混入	内外面明褐色
〃 - 97 (992121)	ＳＤ１６４	高杯	底径（１２.０）	脚裾部は水平に開く。	中粒砂混入	内外面褐色
〃 - 98 (992118)	ＳＤ１６４ 上層	高杯	底径　１０.８	脚部は外反してラッパ状に開く。内外面ナデ。	中粒砂混入	内外面褐色
〃 - 99 (992120)	ＳＤ１６４ 下層	高杯	底径　　９.４	脚裾端部は上方にはねあがる。外面ハケのちナデ。内面ナデ。	中粒砂混入	内外面褐色

②木製品

農具、工具、紡績具、建築部材、杭などがある。

１は又鍬、三又鍬か？刃部のみ残存。2～10は二又鍬、2,3,4,6,7は方形の柄孔をあける。９,10は柄孔をあけず組み合わせる。刃部内側がＶ字形に開くもの（2,3,6）と平行するもの（4,7,9,10）がある。刃部はすべて薄い。また、7,9,10はSF168畦畔内に一括埋納されており、法量や形態が類似する。

11は長柄鋤、刃部の一部と柄を欠損する。12は農具などの柄である。13は匙、握部に横方向の刻みがはいる。14は容器。15は斧柄。SK103出土の斧柄と形態が類似する。16は臼。側面に突帯を削り出す。17,18は槌の子、表皮のついた芯持ち材の中央に刻みをいれる。19ははしご。20,21は不明木製品、20は長方形板材の端部に隅丸方形の孔を穿つ。21は周辺端部は加工され3箇所に楕円形の孔を穿つ。1箇所は断面に認められる。

22～25は杭。杭分類では22,25がＡｂ、23,24がＡａである。

26～32は建築部材である。板材、丸木にほぞ穴をあける。29,30,31は高床建築の床大引材の可能性がある。32は二又に分かれた枝部分を加工する。

（３）中世・近世の出土遺物

①土器

Ａ，中世陶磁器

SD281、SD282、SD283および包含層から、土師器・中国産陶磁器が出土した。

ＳＤ280

土師器皿４点（１～４）、青磁（５）、白磁（６）、磁器（８,９）、土師質の擂鉢（10）、陶器皿（７）が出土した。

土師器皿のうち１，２は磨耗し表面の調整が不明であるが、３，４の底部外面は糸切調整である。５は龍泉窯系の蓮弁文碗である。６は白磁体部片である。腰部からわずかに内湾気味に立ち上がり、口縁端部を外側に摘み出し、口唇部は水平となる。淡灰白色の胎土の上に、透明釉を体部外面下位以外全面に施す。表面には気泡による凹凸がわずかに残る。内側見込みには陰刻による一重圏線がはいる。７は肥前産の陶器皿で、底部外面以外は藁灰釉が施される。見込みには胎土目が２ヶ所付着する。16世紀末から17世紀初頭のものとみられ、流れ込みの可能性が高い。８は中国産とみられる染付である。見込みには陽刻で一重圏線が施される。９も中国産とみられる瓶である。底部外面は回転ケズリ調整によりやや上げ底となり、体部と底部の境の稜を面取りする。内面は無釉で、外面は灰釉を施す。10は全面無釉の土師質の擂鉢である。口縁部内側には断面三角形の突帯を付け、口唇部はほぼ水平となる。外面は回転ケズリのあと回転ナデを施している。

ＳＤ282

青磁碗１点（11）が出土した。蛇ノ目高台で、高台と体部の境には深さ２～３mmの切込みがはいる。見込みには陰刻で一重圏線がはいる。

ＳＤ283

須恵器甕２点（12,13）が出土した。12は外面が格子目状タタキで内面はナデ調整である。13は両面とも平行タタキ調整である。

包含層

擂鉢１点（14）、土師器皿７点（15～21）が出土した。14は底部片で、残存部は無釉である。底部は糸切痕が付く。15～16の底部は、17が調整不明である以外、すべて糸切痕が付く。15～18，21が底部から

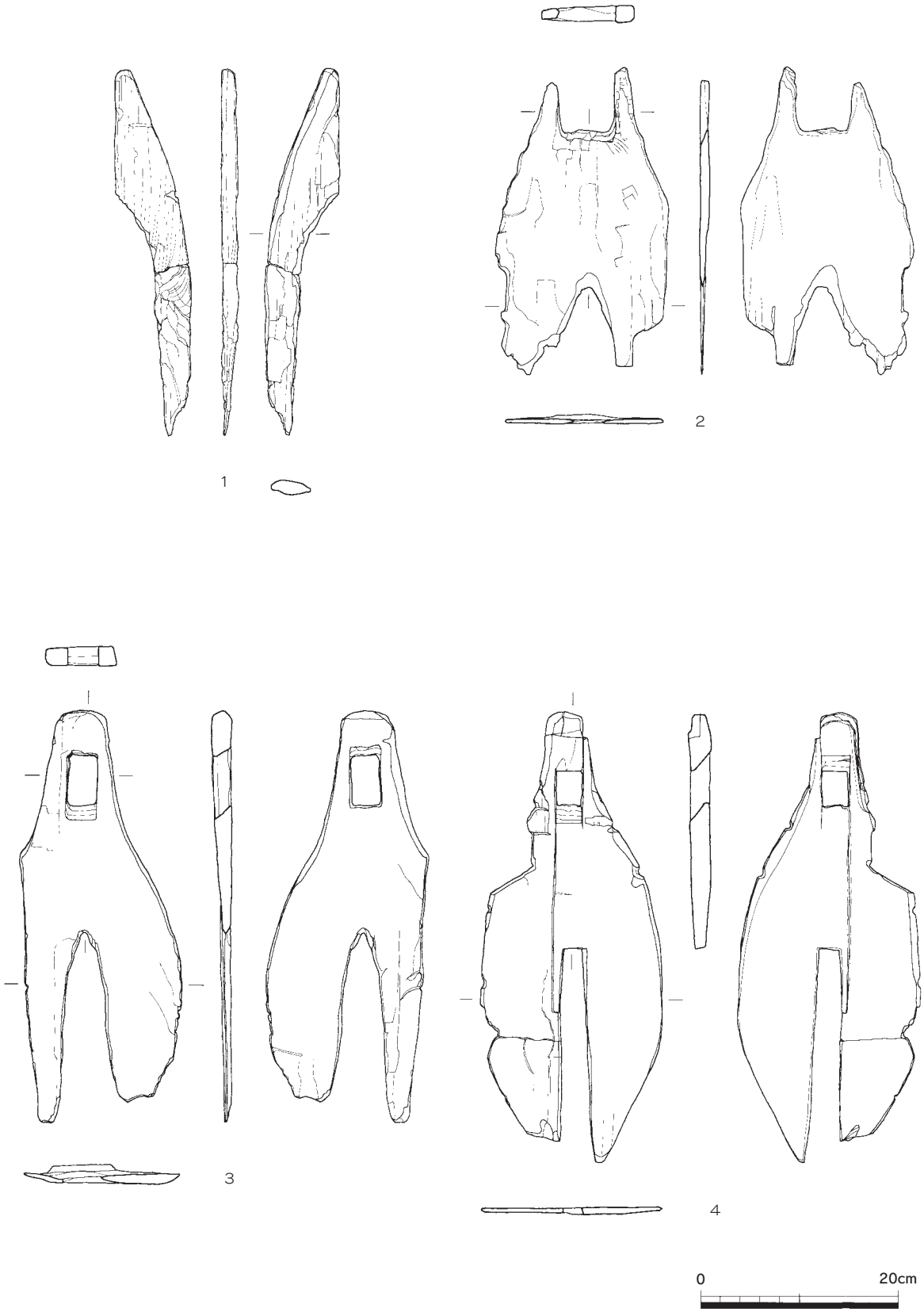


図189　古墳水田出土木製品１(1/6)

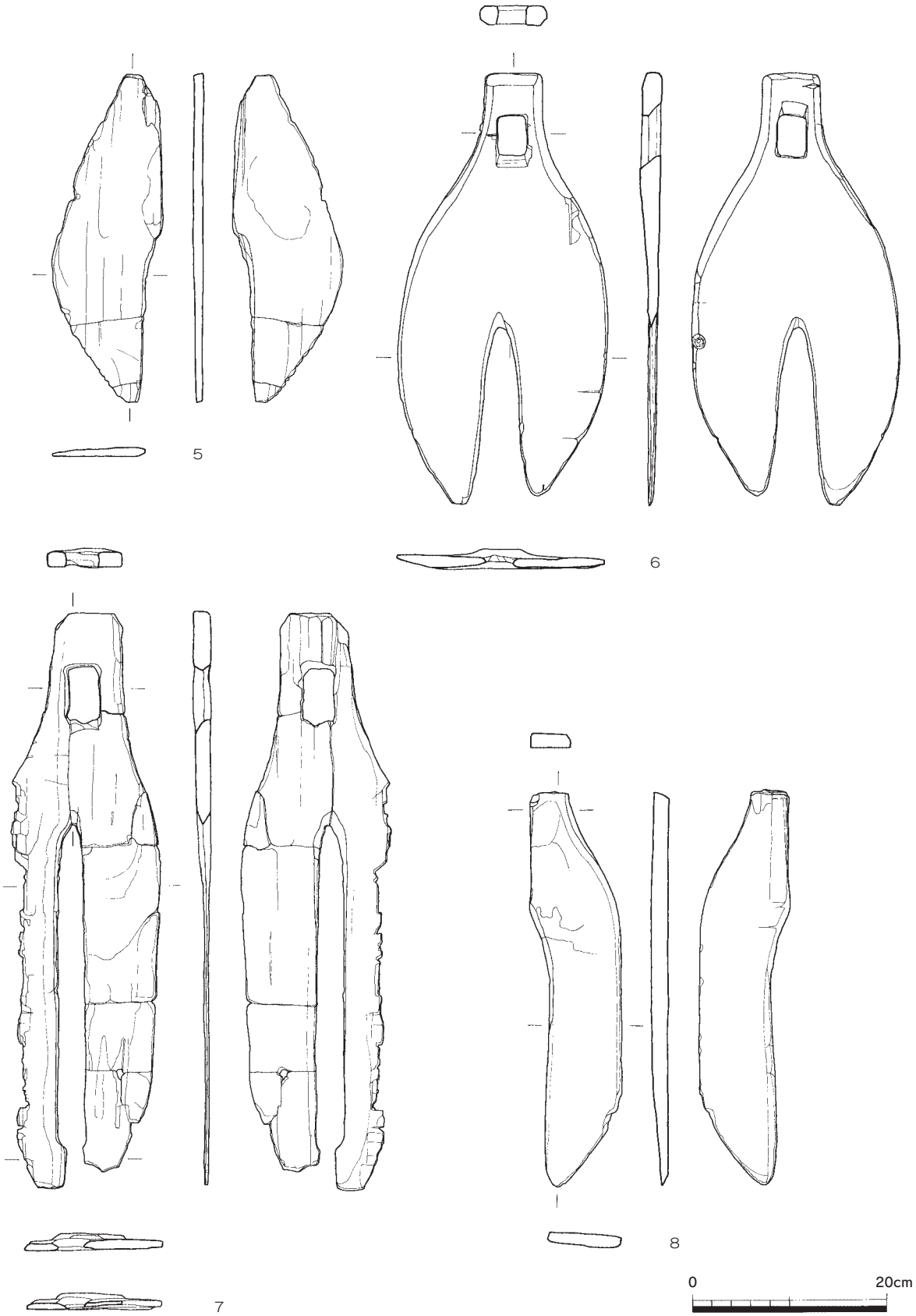


図190　古墳水田出土木製品２(1/6)

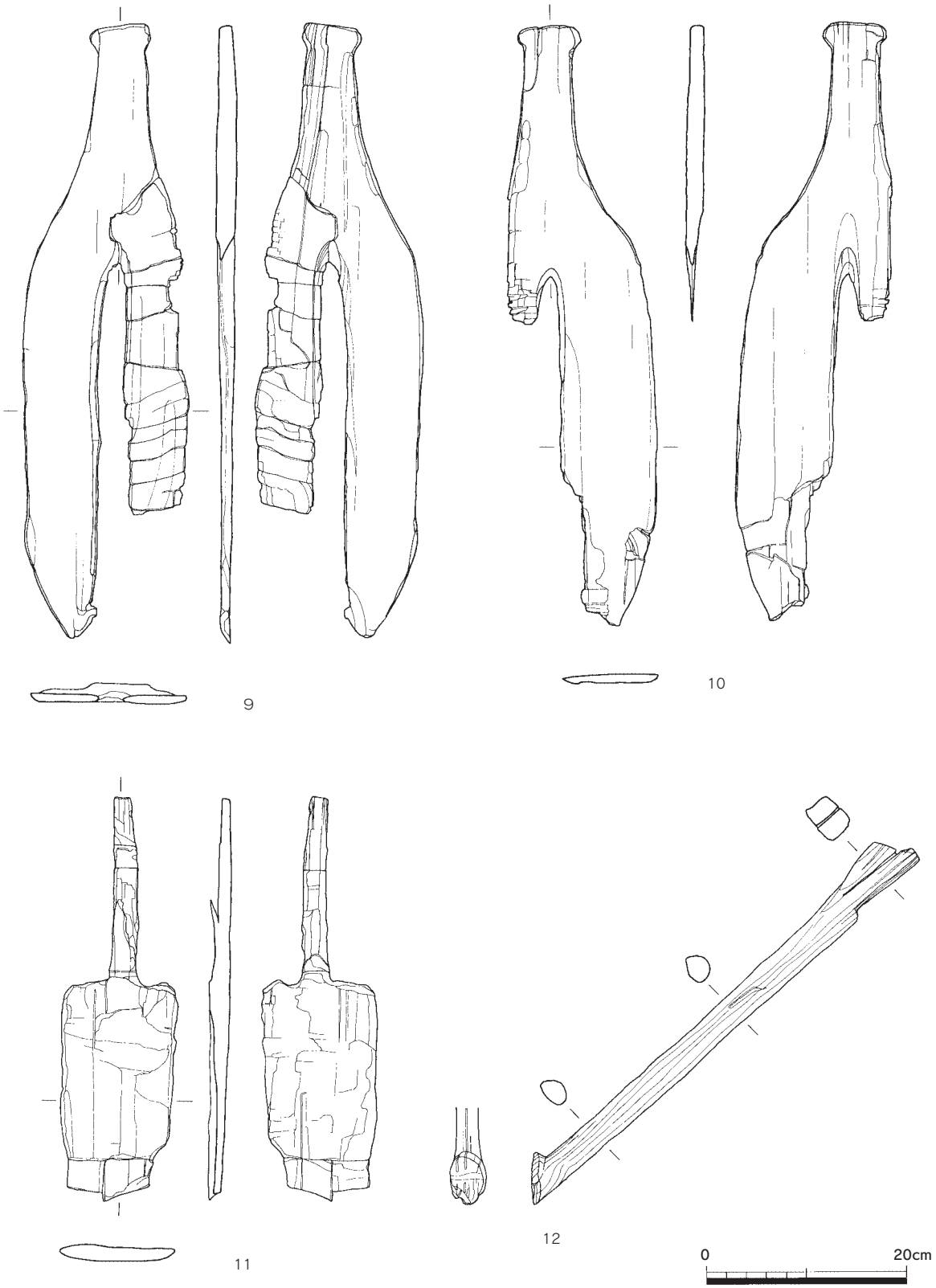


図191　古墳水田出土木製品３(1/6)

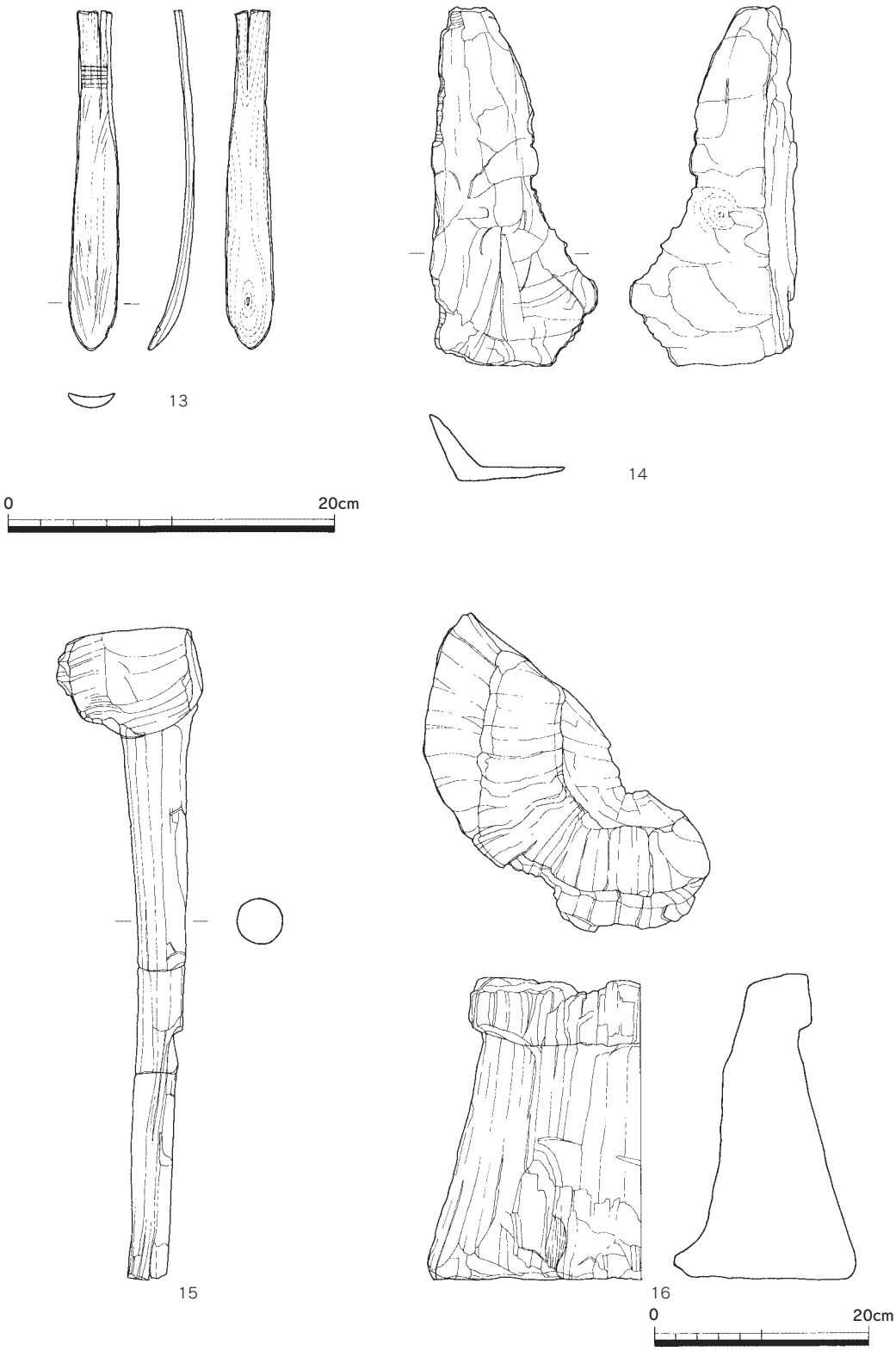


図192　古墳水田出土木製品４(1/4・1/6)

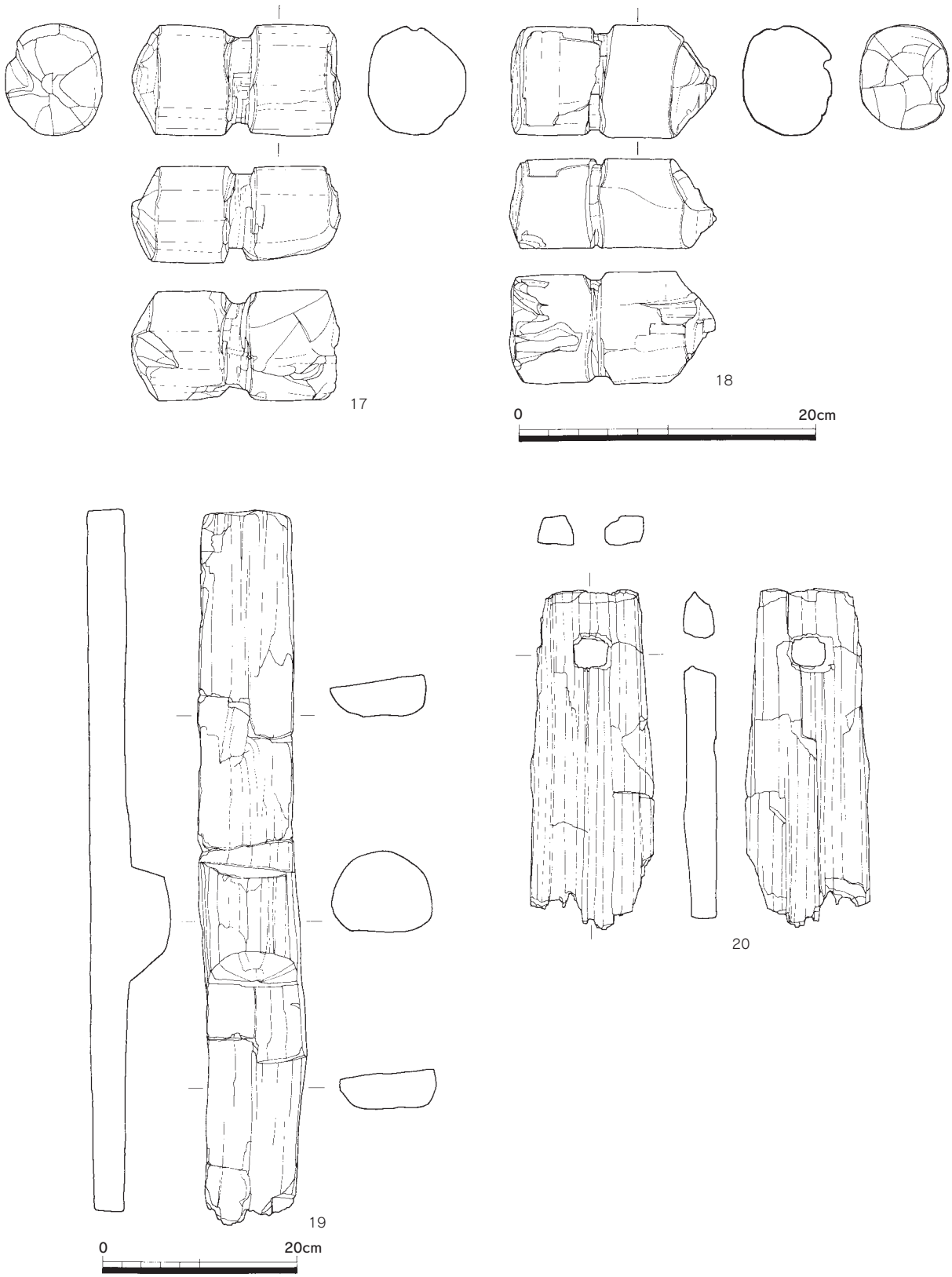


図193　古墳水田出土木製品５(1/6・1/4)

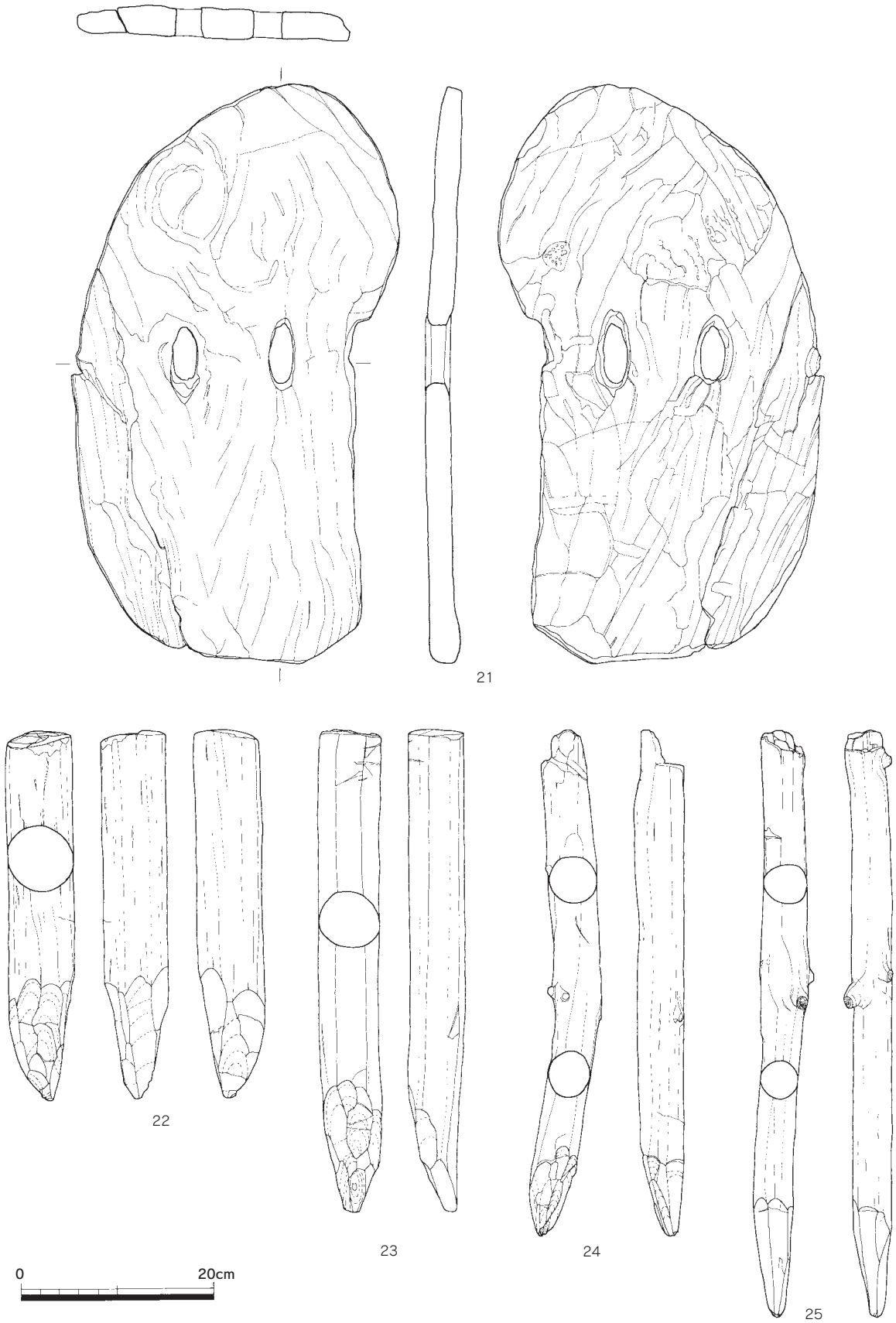


図194　古墳水田出土木製品６(1/6)

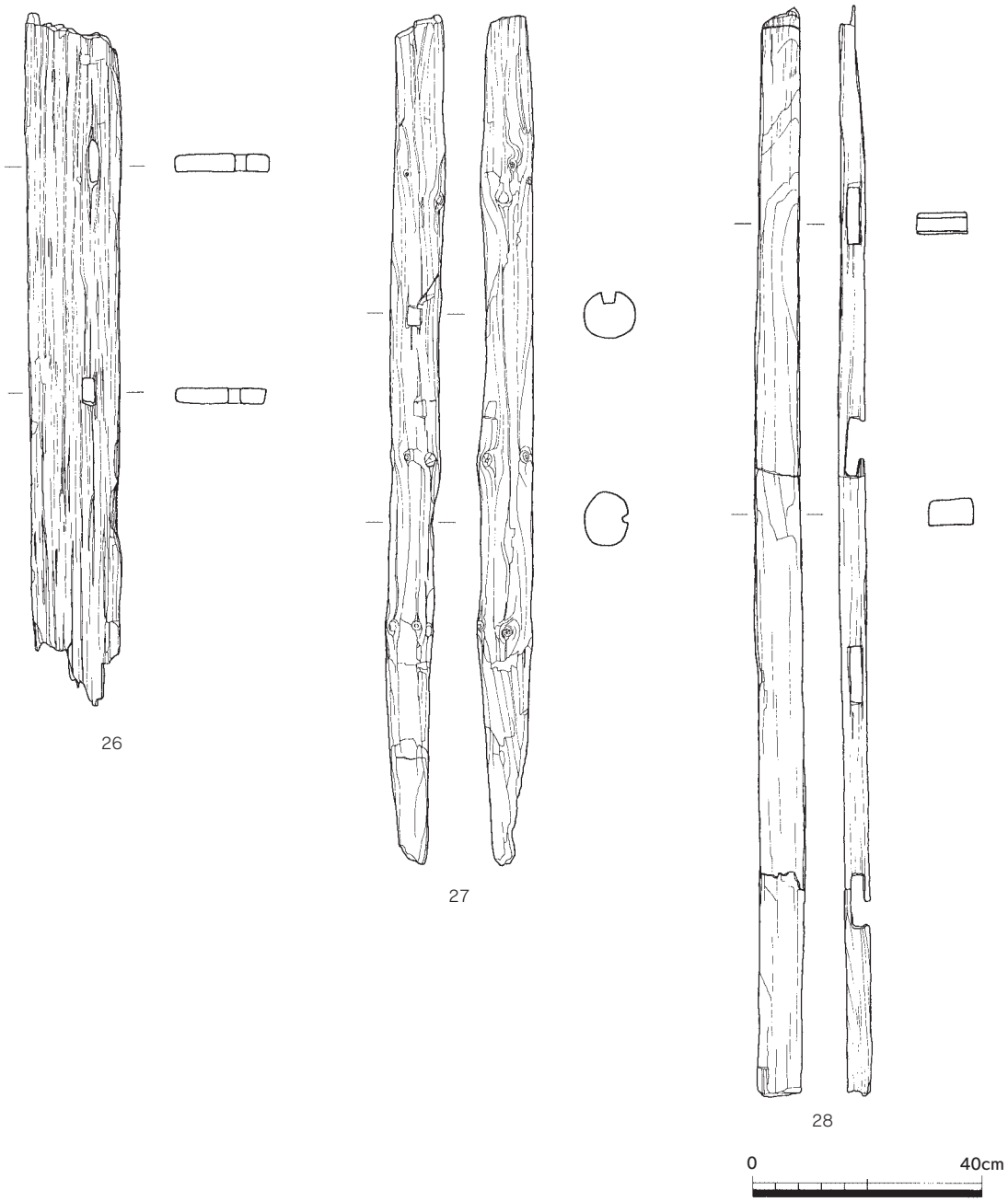


図195　古墳水田出土木製品７(1/12)

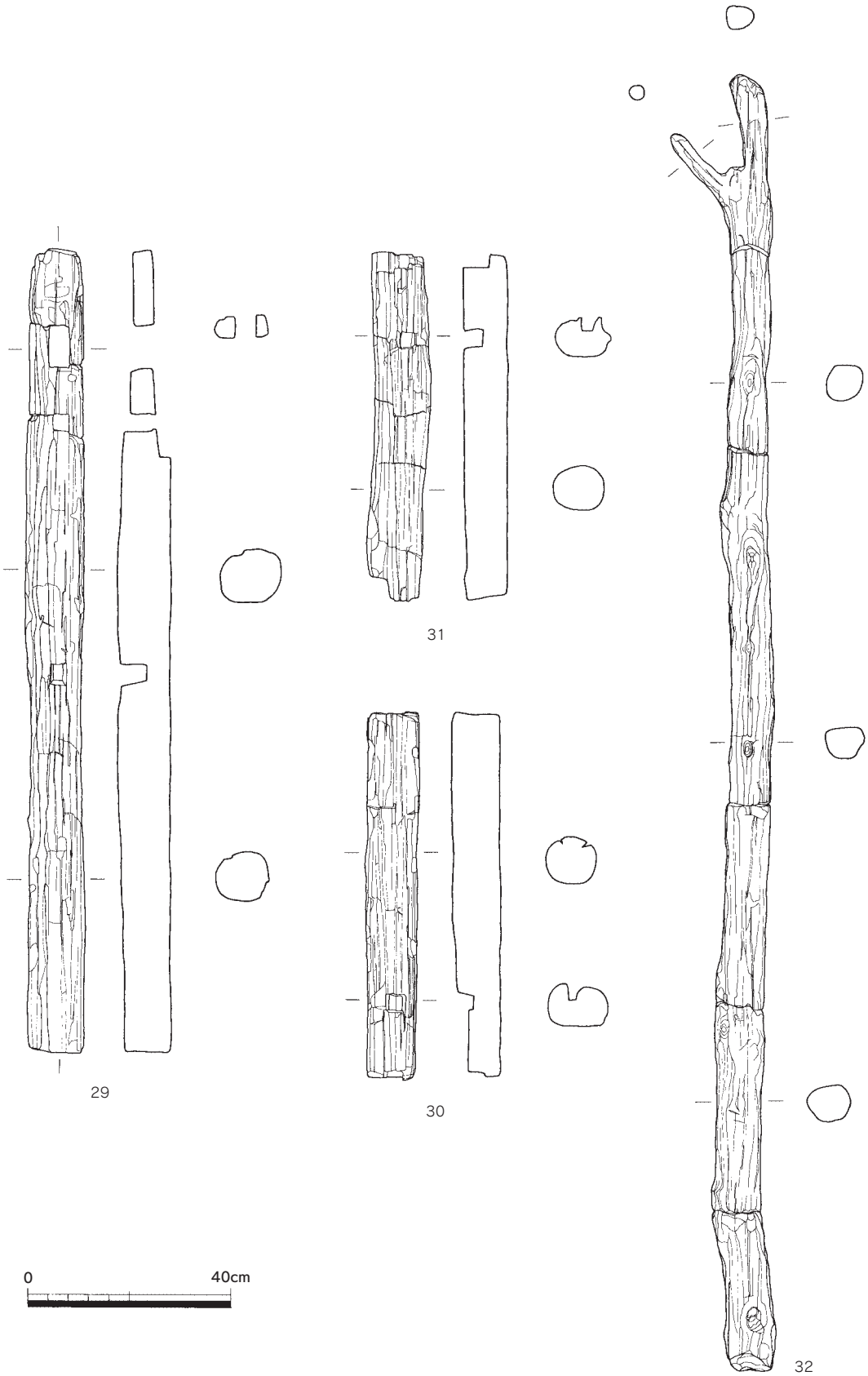


図196　古墳水田出土木製品８(1/12)

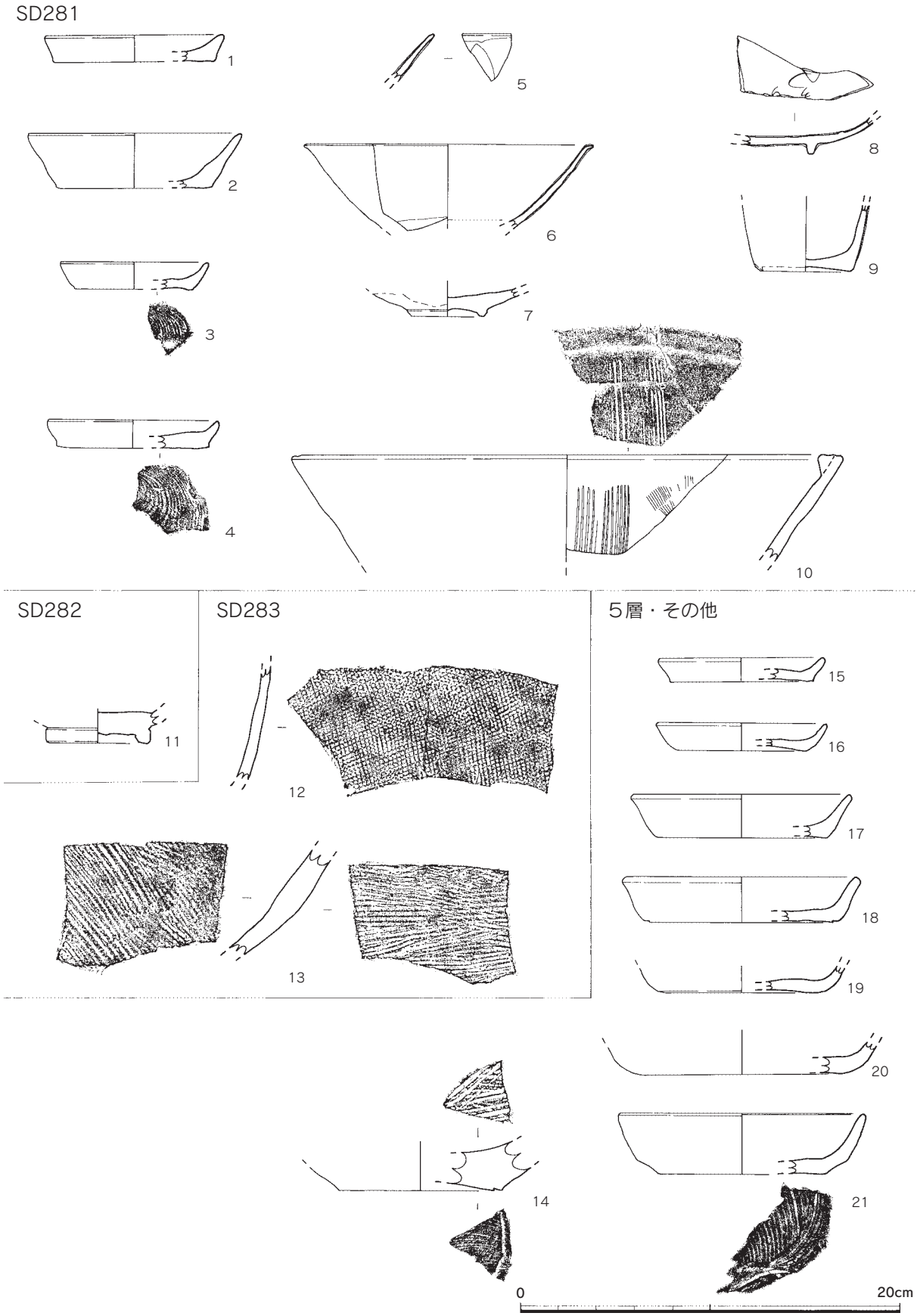


図197　中世土師器・陶磁器(1/3)

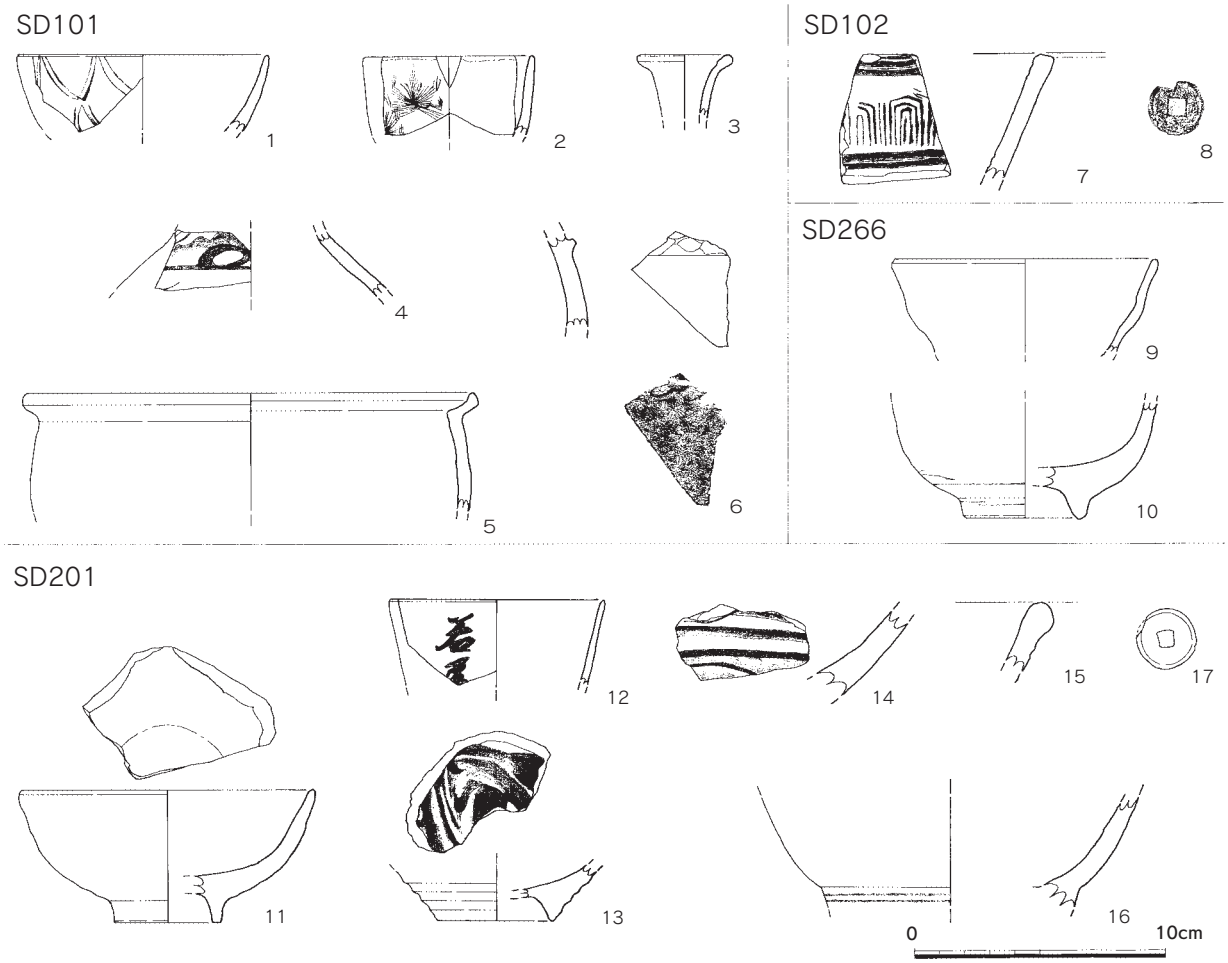


図198　近世陶磁器他１(1/3)

直線的に立ち上がるのに対し、19，20の体部下位はやや丸みを帯びる。

Ｂ，近世陶磁器

近世陶磁器は、遺構（SD101,102,201,266)、包含層から出土した。ほとんどが小片である。

ＳＤ101（１～６）

遺物は全て小片である。磁器椀２点（１,２)、磁器瓶２点（３,４)、産地不明の土鍋？１点（５）甕１点（６）が出土した。５を除き全て肥前産とみられる。時期は17～18世紀代のもの（１,３,６）から19世紀代のもの（２,４,５）まであり、この水路が江戸時代を通じて長く利用されていたことが窺える。１は18世紀後半の肥前二重網目文染付椀である。

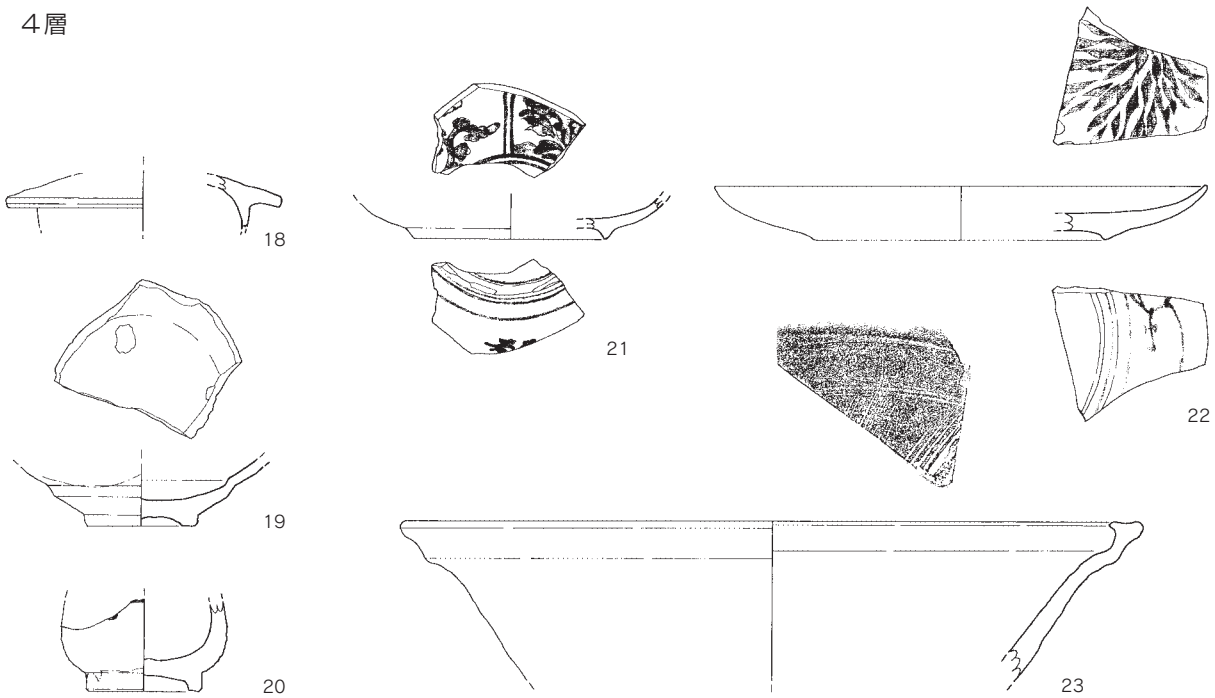
ＳＤ102（７,８）

肥前陶器鉢片1点（７）と、寛永通宝1点（８）が出土した。鉢片は17世紀末から18世紀にかけてのものである。８は緑青が著しく銭銘が判然としないが、新寛永とみられる。

ＳＤ201（11～17）

磁器椀１点（12)、磁器瓶1点（16)、陶器椀２点（11,13)、陶器皿１点（14）甕１点（15）寛永通宝１点（17）が出土した。15は中国産で17世紀以前のものとみられるが、その他は概ね18世紀代のものである。12は関西系とみられ、そのほかの椀・皿はすべて肥前産である。17は銭銘がはっきりしないが、新寛永とみられる。

４層



表土・トレンチ・その他

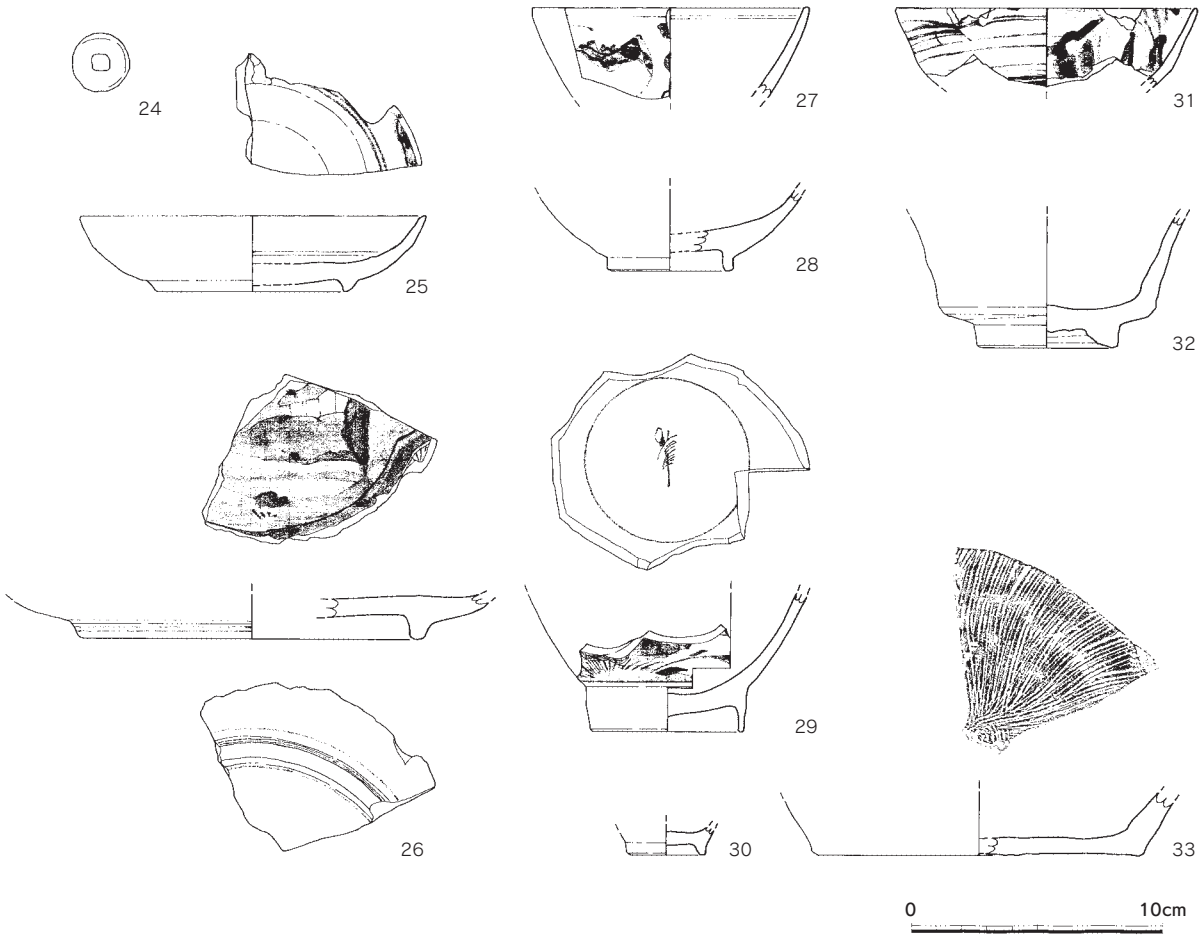


図199　近世陶磁器２(1/3)

ＳＤ266（９,10）

磁器椀（９）・陶器椀（10）２点が出土した。９は萩産で、18世紀後半から19世紀前半にかけてのものである。10は肥前産の陶胎染付椀である。これらよりSD266は18世紀後半代に利用された可能性が高い。

４層（18～23）

磁器皿２点（21,22）、磁器瓶（20）、陶器蓋（18）・陶器皿（19）・陶器擂鉢（23）各１点が出土した。19は16世紀末～17世紀初頭の肥前産の陶器皿である。21は18世紀前半の肥前産染付皿、22は18世紀末～19世紀初頭の肥前産染付皿である。23は肥前産擂鉢で17世紀代のものである。これらより４層は、16世紀末から19世紀代に堆積したとみられる。

表土・トレンチ・その他（24～33）

１～３層（近現代相当）トレンチ出土、出土地点不明の近世陶磁器を一括して記す。

24は緑青が著しいため銭銘が不明である。25は19世紀初頭の肥前産染付皿、27は19世紀後半の肥前産変形型打皿である。27は中国産とみられる染付椀で、外面に蝙蝠文を施す。29は19世紀前半の肥前広東椀型染付椀で、見込みに「寿」銘を施す。31は17世紀末～18世紀初頭の肥前産刷毛目陶器椀である。

②木製品

１は不明木製品。両側を削り柄のような形態に仕上る。２は下駄。ともに５層出土である。

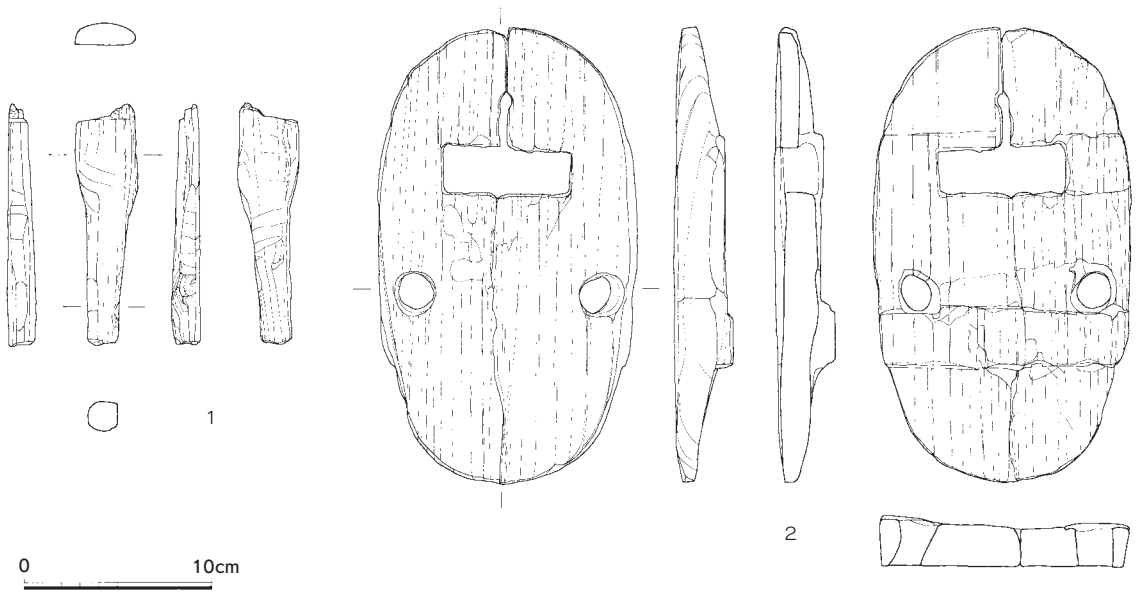


図200　中・近世包含層出土木製品(1/4)

表60　古墳水田出土木製品一覧（1）

挿図－番号	登録番号	出土地点	器種	法量	樹種	木取り	時期	備考
189 - 1	99001494	古墳水田（SD164）	又鍬	残存長38.1　残存幅3.8　最大厚1.6	コナラ属アカガシ亜属	柾目		刃部のみ残存。三又鍬か？
〃 - 2	99001451	古墳水田	二又鍬	残存長20.5　幅11.4　最大厚0.6	コナラ属アカガシ亜属	柾目		刃部と基部の一部を欠く。
〃 - 3	99001461	古墳水田	二又鍬	残存長39.2　残存幅15.8　最大厚2.0 刃部幅7.6　柄孔長5.0　柄孔幅3.0	コナラ属アカガシ亜属	柾目		刃部の一部を欠く。着柄角は約40度。
〃 - 4	99001465	古墳水田（SF157）	二又鍬	全長45.1　幅18.0　最大厚2.3 刃部長21.4　刃厚1.6 柄孔長3.4　柄部幅2.9	コナラ属アカガシ亜属	柾目		ほぼ完形。着柄角は50度。
190 - 5	99001466	古墳水田	二又鍬	残存長32　残存幅10.0　最大厚0.6	コナラ属アカガシ亜属	柾目		2分の1程度残存。
〃 - 6	99001456	古墳水田（SF154）	二又鍬	全長44.2　幅21.0　最大厚2.0	コナラ属アカガシ亜属	柾目		ほぼ完形。着柄角は40度。
〃 - 7	99001464	古墳水田（SF168）	二又鍬	全長58.7　残存幅15.0　最大厚2.2 柄孔長5.2　柄孔幅3.2 刃長36.0　刃幅26.5	コナラ属アカガシ亜属	柾目		刃部の一部を欠く。着柄角は50度
〃 - 8	99001462	古墳水田	二又鍬	残存長40.4　残存幅　最大厚1.8 刃長27.7　刃幅7.5	コナラ属アカガシ亜属	柾目		ナスビ型二又鍬で刃部のみ残存。
191 - 9	99001457	古墳水田（SF168）	二又鍬	残存長61.0　残存幅16.2　最大厚1.5 刃幅6.8　刃厚1.0	コナラ属アカガシ亜属	柾目		刃部の一部を欠く。刃部内側は両側から削り。
〃 - 10	99001458	古墳水田（SF168）	二又鍬	残存長61.6　残存幅13.6　最大厚1.8 刃幅9.6　刃厚0.8	コナラ属アカガシ亜属	柾目		刃部の一部を欠く。
〃 - 11	99001468	古墳水田（SD164）	長柄鋤	残存長29.0　刃部幅11.4　刃部厚2.0	コナラ属アカガシ亜属	柾目		刃部の一部と柄を破損。
〃 - 12	00003052	古墳水田	農具の柄	残存長51.4　径2.9×2.2	チシャノキ属	芯持ち材		
192 - 13	99001479	古墳水田	匙	残存長20.9　幅3.0　最大厚0.8	イヌガヤ			握部はまだ続くものと思われる。握部に刻みがあり、匙部に線が入る。
〃 - 14	00001674	古墳水田	容器	残存長22.0　残存幅10.0　最大厚0.9	クスノキ			
〃 - 15	99001480	古墳水田	斧柄	残存長40.0	サカキ	芯持ち材		台部の一部を欠く。
〃 - 16	00003048	古墳水田	臼	器高28.0　（底径40.0　口径32.0）		丸木		
193 - 17	99001470	古墳水田（SD164）	槌の子	全長13.8　径7.5×6.0	アワブキ属？	芯持ち材		ほぼ完形。片側を削りにより尖らせる。
〃 - 18	99001471	古墳水田（SD164）	槌の子	全長14.0　径7.6×6.5	ガマズミ属	芯持ち材		ほぼ完形。片側を削りにより尖らせる。
〃 - 19	99001503	古墳水田（SD164）	はしご	残存長72.2　幅10.2　最大厚8.2 足掛け幅10.2　足掛け部厚8.2　板部厚4.0	クマシデ属 イヌシデ節	丸木		
〃 - 20	99001495	古墳水田（SD164）	不明	残存長23.0　幅6.7　最大厚2.0	マツ属複維管束亜属			
194 - 21	00003051	古墳水田	不明	全長64.2　残存幅29.2　最大厚3.0		柾目		3箇所に楕円形の穿孔。1箇所は断面に認められる。ほぼ完形品。使用痕や加工痕は不明瞭で用途は不明。
〃 - 22	00001631	古墳水田（SF171）	杭	全長38.0　径6.9×6.7		丸木		
〃 - 23	00001669	SF171	杭	全長50.2　径6.2×5.7		丸木		
〃 - 24	00001632	古墳水田（SF171）	杭	全長52.2　径5.0×4.9		丸木		
〃 - 25	00001633	古墳水田（SF171）	杭	全長60.3　径4.0×4.0		丸木		
195 - 26	00003063	古墳水田	建築材	残存長118.0　幅8.6		板目		2箇所にほぞ穴。
〃 - 27	00003064	古墳水田	建築材	残存長146.6　径5.6×8.0		丸木		
〃 - 28	00003059	古墳水田	建築材	残存長194.0　幅8.0		板目		

表61　古墳水田出土木製品一覧（2）

挿図－番号	登録番号	出土地点	器種	法量	樹種	木取り	時期	備考
196 - 29	00003062	古墳水田	建築材	残存長153.8　径11.2×10.4		丸木		
〃 - 30	00003061	古墳水田	建築材	残存長72.4　径9.0×9.0		丸木		
〃 - 31	00003060	古墳水田	建築材	残存長75.4　径10.8		丸木		
〃 - 32	00003057	古墳水田 (SD150)	建築材	残存長260.0	サカキ	丸木		二又に分かれた枝部分を利用。

表62　中世土師器・陶磁器一覧表

挿図－番号	登録番号	胎質	器種	遺構名	層位	グリッド	法量			所見
							口径	器高	底径	
197 - 1	99-0543	土師器	皿	SD281			9.4	1.4	8.6	0.5～1mm程度の砂粒含む。にぶい黄橙色。底部糸切調整
〃 - 2	99-0544	土師器	皿	SD281	4・5	F-24	11.2	2.9	8.2	0.5～1mm程度の砂粒含む。にぶい黄橙色。底部糸切調整
〃 - 3	99-0545	土師器	皿	SD281	4・5	F-24	7.8	1.4	6.2	0.5～1mm程度の砂粒含む。橙色。底部糸切調整
〃 - 4	99-0542	土師器	皿	SD281			9.0	1.5	8.0	0.5～1mm程度の砂粒含む。にぶい黄橙色。底部糸切調整
〃 - 5	01-0005	青磁	椀	SD281				(2.5)		外面－蓮弁文
〃 - 6	99-0538	白磁	椀	SD281	4・5		15.2	(4.4)		内外面－透明釉。外面下位露胎。見込－陰刻で一重圏線あり。
〃 - 7	01-0006	陶器	皿	SD281	1			(1.5)	3.8	内外面－藁灰釉。底部露胎、見込み－胎土目２ヶ所付着。粗い貫入あり。肥前産。
〃 - 8	99-0540	磁器	皿	SD281				(1.9)		外面－粗い貫入。内面－見込み文様不明、陽刻で一重圏線。
〃 - 9	99-0539	磁器	瓶	SD281	3		4.7	(3.5)		外面－灰釉、底部露胎。内面－露胎。底部はケズリによりやや凹む。
〃 - 10	99-0541	土師器	擂鉢	SD281			28.8	(5.6)		0.5～2mm程度の砂粒含む。にぶい黄橙色。12本櫛目か。
〃 - 11	01-0007	青磁	椀	SD282				(1.7)	3.4	見込み線彫り一重圏線
〃 - 12	00-2943	須恵器	甕	SD283				(13.5)		1mm以下の砂粒含む。灰白色。外面－格子目状叩き、内面横ナデ。
〃 - 13	00-2944	須恵器	甕	SD283				(5.4)		1mm以下の砂粒含む。灰色。内外面叩き
〃 - 14	01-0003	陶器	擂鉢	SD280	3			(2.6)	8.6	底部片。底部糸切り、内外面－露胎
〃 - 15	01-0002	土師器	皿	SD207			(8.8)	(7.6)	1.3	1mm以下の砂粒含む、にぶい黄橙色、底部外面糸切り離し痕、
〃 - 16	00-2945	土師器	皿	包含層	5	G-2	9.0	1.5	6.7	1mm以下の砂粒含む。にぶい黄橙色。
〃 - 17	99-0546	土師器	皿	SD280			11.0	2.3	9.0	0.5～2mm程度の砂粒含む。にぶい黄橙色。底部調整不明。
〃 - 18	99-0547	土師器	皿	SD280			12.5	2.4	10.2	1mm以下の砂粒含む。にぶい黄橙色。底部静止糸切調整。
〃 - 19	00-2946	土師器	皿	包含層	5	F-2		(1.4)	8.8	2mm以下の砂粒含む。にぶい黄橙色。
〃 - 20	00-2947	土師器	皿	包含層	5	F-2		(1.7)	10.6	3mm以下の砂粒含む。にぶい黄橙色。底部糸切調整。
〃 - 21	00-2948	土師器	皿	包含層	5	F・G-2	13.0	3.2	8.8	4mm以下の砂粒含む。にぶい黄橙色。底部静止糸切調整

表63　近世陶磁器一覧表

挿図－番号	登録番号	胎質	器種	遺構名	推定産地	層位	グリッド	法量			所見
								口径	器高	底径	
198 - 1	99-0532	磁器	椀	SD101	肥前			10.0	(3.0)		外面－二重網目文。
〃 - 2	99-0533	磁器	椀	SD101	肥前			6.4	(3.1)		外面－松葉文。口唇部口錆。
〃 - 3	99-0534	磁器	瓶	SD101	肥前			3.8	(2.5)		口縁部片。
〃 - 4	99-2219	磁器	瓶	SD101	肥前				(2.6)		外面－山水文。焼成不十分のため、釉がやや白濁。内面－露胎。
〃 - 5	99-2221	陶器	土鍋？	SD101	不明			18.0	(4.7)		内外面鉄釉。
〃 - 6	99-2222	陶器	甕？	SD101	肥前				(3.7)		胴部片。内外面－タタキ調整、鉄釉。縄状突帯巡る。
〃 - 7	01-0020	陶器	鉢	SD102	肥前				(4.9)		象嵌技法で文様を陰刻後、内面と外面口縁部の胎土地に白化粧土。透明釉。
〃 - 9	01-0001	陶器	椀	SD266	萩			10.6	(3.7)		内外面－藁灰釉。
〃 - 10	99-0537	陶器	椀	SD266	肥前				(4.6)	4.9	陶胎染付。外面－呉須・鉄絵による草文。細かい貫入あり。
〃 - 11	99-0535	陶器	椀	SD201	肥前			11.7	4.3	5.2	内外面－灰釉、細かい貫入あり。見込－蛇ノ目釉剥ぎ後、鉄錆。畳付－露胎。
〃 - 12	01-0016	磁器	椀	SD201	関西系	3		8.6	3.5		外面－「若屋～」銘。
〃 - 13	99-0536	陶器	椀	SD201	肥前				(2.2)	4.6	外面－沈線状。内面－胎土地に白化粧土による刷毛目文。全面透明釉。
〃 - 14	01-0017	陶器	皿	SD201	肥前				(3.4)		内面－胎土地に白化粧土で刷毛目文のあと透明釉。外面－露胎。
〃 - 15	00-2950	陶器	甕？	SD201	中国				(2.8)		口縁部片。内外面－鉄釉。
〃 - 16	01-0018	磁器	瓶	SD201	肥前	4			(4.3)		内面－露胎・ろくろナデ。
199 - 18	01-0011	陶器	蓋	包含層	肥前	4	E-2	10.9	(2.2)		焼成不良のため、天井部の釉剥落。
〃 - 19	01-0008	陶器	皿	包含層	肥前	4	C-6		(2.7)	4.3	内外面－口縁部灰釉。底部露胎、見込み－胎土目２ヶ所付着。
〃 - 20	99-0531	磁器	瓶	包含層	肥前	4・5	E-20		(3.6)	4.6	外面－灰釉、底部露胎、高台削り出し。内面－露胎。
〃 - 21	01-0014	磁器	皿	包含層	肥前	4			(1.7)	7.6	外面－唐草文。内面－区画割花文・唐草文。高台内－一重圏線。畳付露胎。
〃 - 22	01-0013	磁器	皿	包含層	肥前	4		19.6	2.2	11.4	外面－唐草文。内面－竹文。畳付露胎。
〃 - 23	01-0009	陶器	擂鉢	包含層	肥前	4	F-3	29.4	(6.3)		口縁部片。内外面口縁部のみ鉄釉。11本櫛目。
〃 - 25	97-0280	磁器	皿	表土	肥前			13.6	3.0	7.3	内面－草花文。見込－二重圏線、蛇ノ目釉剥ぎ。畳付－露胎、砂付着。
〃 - 26	01-0015	磁器	変形型打皿	トレンチ	肥前	1	F-3		(1.8)	13.8	内面－楼閣山水文。高台内－一重圏線。
〃 - 27	01-0012	磁器	椀	包含層	中国？	K水2・3	D--1	11.0	(3.6)		外面－蝙蝠文。
〃 - 28	99-0529	磁器	椀	包含層	肥前	3			(3.2)	5.0	内外面－焼成不良につき、釉白濁。畳付－露胎。
〃 - 29	97-0315	磁器	椀	不明	肥前				(5.5)	6.1	外面－草花文。見込み－一重圏線内、「寿」銘。広東碗型
〃 - 30	99-2217	磁器	瓶	SD279	肥前				(3.1)	3.1	内面・畳付－露胎。
〃 - 31	99-0528	陶器	椀	包含層	肥前	3層下面	G-3	12.0	(3.1)		内外面－胎土地に白化粧土で刷毛目文、透明釉。
〃 - 32	99-0530	陶器	椀	包含層	肥前		B-14		(5.2)	5.6	内外面－灰釉、細かい貫入。底部露胎。
〃 - 33	99-0527	陶器	擂鉢？	包含層	肥前	3	E-4		(2.5)	13.1	底部片。底部外面に一部自然釉が付着する以外は全面露胎。14本櫛目か。

表64　銭貨一覧表

挿図－番号	登録番号	銭銘	種類	遺構名	層位	グリッド	法量		所見
							径	穿径	
198－8	01-0021	寛永通宝	新寛永	SD102			2.3	0.7	緑青著しく付着。
ゃ－17	01-0019	寛永通宝	新寛永	SD201			2.4	0.6	緑青著しく付着。
ゃ－24	01-0010	不明		包含層	3(最下層)	F-3	2.3	0.7	緑青著しく付着。

発掘調査参加者集合

Ⅵ，自然科学分析

１，梅白遺跡におけるプラントオパール分析　　古環境研究所

（１）はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸（SiO_2）が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出する分析であり、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査が可能である（藤原・杉山，1984）。

梅白遺跡の発掘調査では、複数の層準から水田跡が検出された。ここでは、これらの遺構における稲作の検証を主目的として分析を行った。

（２）試料

試料は、E-－２グリッドおよびG-－５グリッドの２地点から採取された計43点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

（３）分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原，1976）をもとに、次の手順で行った。

①試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）
②試料約１gに対し直径約40μmのガラスビーズを約0.02g添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）
③電気炉灰化法（550℃・６時間）による脱有機物処理
④超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
⑤沈底法による20μm以下の微粒子除去
⑥封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
⑦検鏡・計数。

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来するプラント・オパールをおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。試料１gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズ個数の比率をかけて、試料１g中のプラント・オパール個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重、単位：10^{-5}g）をかけて、単位面積で層厚１cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ（赤米）の換算係数は2.94（種実重は1.03）、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、タケ亜科は0.48である。

（４）分析結果

水田跡（稲作跡）の検討が主目的であることから、同定および定量はイネ、ヒエ属型、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科の主要な５分類群に限定した。これらの分類群について定量を行い、その結果を図201に示した。図202に主要な分類群の顕微鏡写真を示す。

（５）考察

１）水田跡の検討

水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラント・オパールが試料１gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。ただし、

密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

①E-－２グリッド

６a層（試料１）から８b層（試料18）までの層準について分析を行った。その結果、８b層（試料18）を除く各層準からイネが検出された。このうち、弥生時代の水田跡（水田１）が検出された７a層（試料10～12）では、密度が10,500個/gとかなり高い値であり、古墳時代の水田跡（上層水田、中層水田、下層水田）が検出された６ａ層（試料１～３）、６ｂ層（試料４～６）、６ｃ層（試料７、９）、および弥生時代の水田跡（水田２）が検出された７ｂ層（試料13～15）でも、5,300～7,600個/gと高い値である。したがって、これらの各層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

縄文時代晩期とされる溝（SD187）の埋土（試料16）では、密度が6,000個/gと高い値である。このことから、当時は溝の周辺で稲作が行われており、そこから何らかの形で溝内にイネのプラント・オパールが混入したものと推定される。

②G-－５グリッド

３層（試料１）から８b層（試料25）までの層準について分析を行った。その結果、３層（試料１）から７b層（試料22）までの各層からイネが検出された。このうち、古墳時代の水田跡（水田１、水田２、水田３）が検出された６ａ層（試料11～13）、６ｂ層（試料14～16）、６ｃ層（試料17、18）、および弥生時代の水田跡（水田１）が検出された７ａ層（試料19、20）では、密度が5,300～7,500個/gと高い値である。また、３層（試料１）および近世とされる４層（試料２）でも、3,000～3,700個/gと比較的高い値である。したがって、これらの各層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

中世とされる５層（試料６、７）、コモ層下部（試料９、10）、弥生時代の水田跡（水田２）が検出された７ｂ層（試料21、22）では、密度が800～2,300個/gと比較的低い値である。イネの密度が低い原因としては、稲作が行われていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が速かったこと、洪水などによって耕作土が流出したこと、採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、および上層や他所からの混入などが考えられる。

２）堆積環境の推定

イネ以外の分類群では、部分的にヨシ属やススキ属型などが検出されたが、いずれも少量である。おもな分類群の推定生産量によると、コモ層などを除いて全体的にイネが卓越していることが分かる。

以上のことから、本遺跡では弥生時代以降は集約的な水田稲作が継続的に行われていたと考えられ、イネ科の野雑草はあまり見られなかったと推定される。なお、５層直下のコモ層の堆積当時は、一時的にヨシ属などが繁茂する湿地的な環境になっていたと推定される。

（６）まとめ

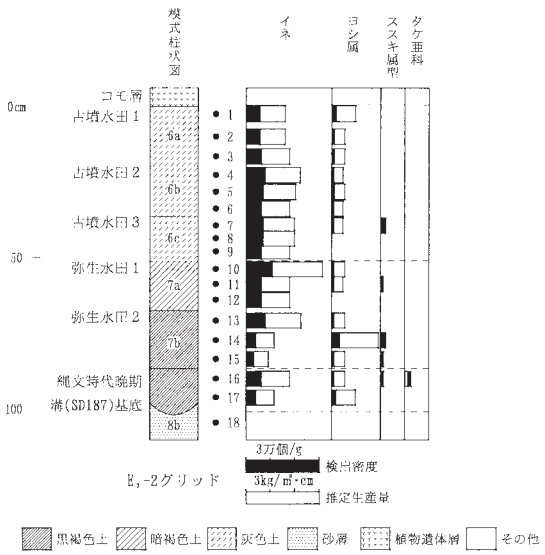
プラント・オパール分析の結果、弥生時代や古墳時代とされる水田跡が検出された土層からは、イネが多量に検出され、各層で稲作が行われていたことが分析的に検証された。また、縄文時代晩期とされる溝（SD187）の埋土でもイネが多量に検出され、周辺で稲作が行われていた可能性が高いと判断された。本遺跡では、弥生時代以降は集約的な水田稲作が継続的に行われていたと考えられ、イネ科の野雑草はあまり見られなかったと推定される。

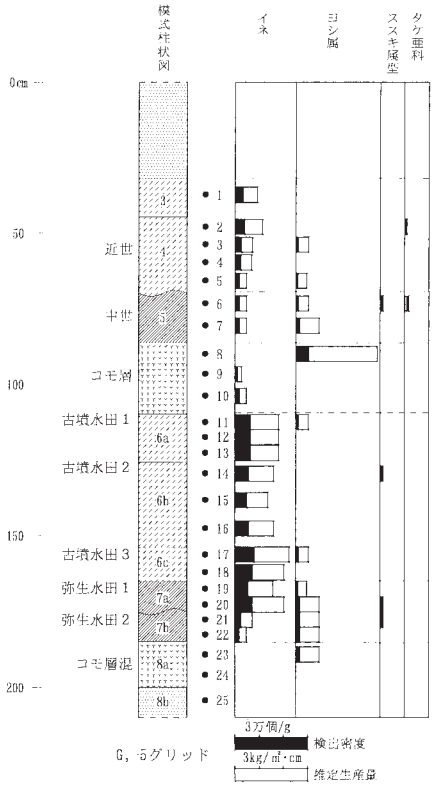
参考文献

杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）．考古学と植物学．同成社，p.189-213.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9，p.15-29.

藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オパール分析による水田址の探査－．考古学と自然科学，17，p.73-85.





検出密度（単位：×100個/g）

分類群	学名	地点・試料	E₁-2グリッド SD187																	
			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
イネ	*Oryza sativa* (domestic rice)		53	53	60	75	68	60	67	67	60	105	60	60	76	38	30	60	38	
ヨシ属	*Phragmites* (reed)		15	8	8	7	8	7	7			8	7		8	30	8	8	15	
ススキ属型	*Miscanthus* type								15				7			15	8	8		
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)																	23		

推定生産量（単位：kg/m²・cm）

イネ	*Oryza sativa* (domestic rice)	1.54	1.55	1.77	2.20	2.00	1.76	1.98	1.98	1.76	3.09	1.76	1.77	2.23	1.10	0.89	1.77	1.11	
ヨシ属	*Phragmites* (reed)	0.95	0.48	0.48	0.47	0.48	0.47	0.47			0.47	0.47		0.48	1.89	0.48	0.47	0.96	
ススキ属型	*Miscanthus* type							0.19				0.09			0.19	0.09	0.09		
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)																0.11		

※試料の仮比重を1.0と仮定して算出。

検出密度（単位：×100個/g）

分類群	学名	地点・試料	G₁-5グリッド																							
			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25
イネ	*Oryza sativa* (domestic rice)		30	37	23	22	15	15	15		8	15	60	60	60	53	45	53	75	68	52	68	23	15			
ヨシ属	*Phragmites* (reed)				8		7	8	15	53			8						8		7	15	15	15	15		
ススキ属型	*Miscanthus* type							8								8						8	8				
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)			7				15																			

推定生産量（単位：kg/m²・cm）

イネ	*Oryza sativa* (domestic rice)	0.88	1.10	0.67	0.66	0.44	0.44	0.44		0.22	0.45	1.77	1.76	1.77	1.55	1.33	1.56	2.22	2.00	1.54	1.99	0.67	0.44			
ヨシ属	*Phragmites* (reed)			0.48		0.47	0.48	0.95	3.33			0.47						0.48		0.47	0.95	0.96	0.95	0.95		
ススキ属型	*Miscanthus* type						0.09								0.09						0.09	0.09				
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)		0.04				0.07																			

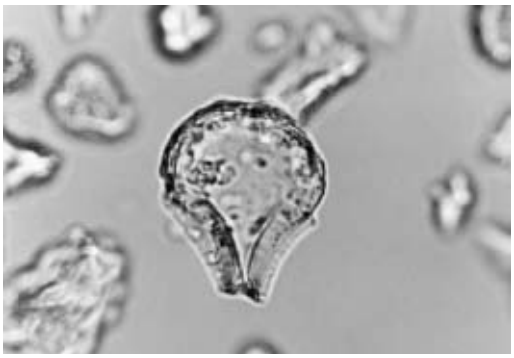
※試料の仮比重を1.0と仮定して算出。

図201　プラント・オパール分析結果

1

2

1. イネ　E--２　試料10
2. イネ　G--５　試料20



3

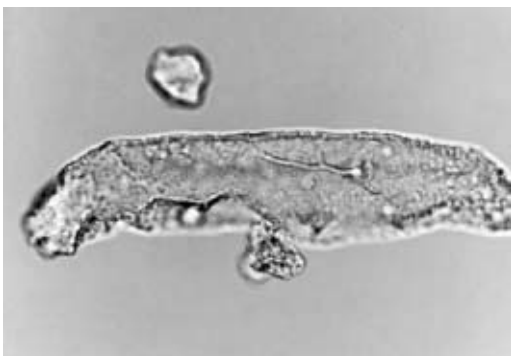
4

3. イネ　G--５　試料3
4. イネ(側面) E--２ 試料17

5

6

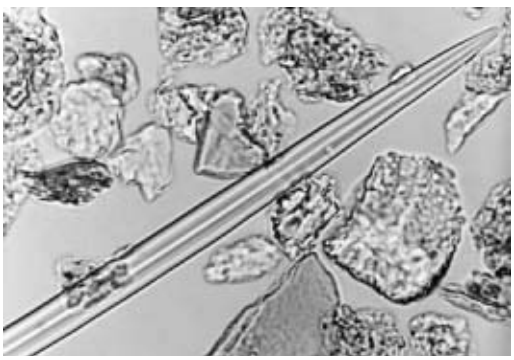
5. ヨシ属 G--５ 試料8
6. ブナ科(シイ属) E--２ 試料13



7

8

7. クスノキ科 E--２ 試料9
6. マンサク科(イスノキ属) G--５ 試料10



9

9. 海綿骨針 G--５ 試料10

図202　プラント・オパール顕微鏡写真

２，梅白遺跡における花粉分析　　古環境研究所

（１）はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な地域の植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。なお、乾燥的な環境下の堆積物では、花粉などの植物遺体が分解して残存していない場合もある。

（２）試料

試料は、E-－２グリッドおよびG-－５グリッドの２地点から採取された計20点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

（３）方法

花粉粒の分離抽出は、中村（1973）の方法をもとに、以下の手順で行った。

①５％水酸化カリウム溶液を加え、15分間湯煎する。

②水洗した後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。

③25％フッ化水素酸溶液を加えて、30分放置する。

④水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理を施す。

⑤再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。

⑥沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入してプレパラートを作製する。

⑦検鏡・計数を行う。

各処理間の水洗は、遠心分離（1500rpm、２分間）の後、上澄みを捨てるという操作を３回繰り返して行った。検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。

花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示した。イネ属については、中村（1974、1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種があることからイネ属型とした。

（４）結果

①分類群

出現した分類群は、樹木花粉33、樹木花粉と草本花粉を含むもの３、草本花粉30、シダ植物胞子３形態の計69である。これらの学名と和名および粒数を表65、66に示し、主要な分類群を図204に示す。花粉数が100個以上計数できた試料は、花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを示した。以下に出現した分類群を記す。

〔樹木花粉〕

マキ属、モミ属、ツガ属、マツ属複維管束亜属、マツ属単維管束亜属、スギ、コウヤマキ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、ヤマモモ属、クルミ属、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属－アサダ、クリ－シイ属－マテバシイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属－ケヤキ、エノキ属－ムクノキ、アカメガシワ、サンショウ属、モチノキ属、カエデ属、ブドウ属、グミ属、ハイノキ属、モクセイ科、ツツジ科、ニワトコ属－ガマズミ属、イスノキ属、スイカズラ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科－イラクサ科、マメ科、ウコギ科

〔草本花粉〕

ガマ属－ミクリ属、サジオモダカ属、オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、ホシクサ属、イボクサ、ミズアオイ属、タデ属サナエタデ節、ギシギシ属、アカザ科－ヒユ科、ナデシコ科、キンポウゲ属、アブラナ科、ササゲ属、ツリフネソウ属、ノブドウ、アカバナ科、アリノトウグサ属－フサモ属、チドメグサ亜科、セリ亜科、シソ科、オオバコ属、オミナエシ科、ゴキヅル、タンポポ亜科、キク亜科、オナモミ属、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、ミズワラビ、三条溝胞子

②花粉群集の特徴

E--２グリッド（図１）

樹木花粉では、全体的にクリーシイ属－マテバシイ属、コナラ属アカガシ亜属の出現率が高く、マツ属複維管束亜属が伴われる。草本花粉では、イネ属型を含むイネ科が優占し、カヤツリグサ科、ヨモギ属、ミズアオイ属が連続して出現する。

G--５グリッド（図２）

花粉群集の構成とその変遷から、下位よりⅠ帯、Ⅱ帯、Ⅲ帯の花粉分帯を設定した。花粉分帯に沿って花粉群集の特徴を記す。

Ⅰ帯（試料25）では、樹木花粉の占める割合が高く、コナラ属アカガシ亜属、クリーシイ属－マテバシイ属の出現率が高い。草本花粉はやや低率でイネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属などが出現する。

Ⅱ帯（試料９～23）では、樹木花粉の占める割合は高いが、前帯よりやや減少し、上位に向かって草本花粉が増加する。樹木花粉では前帯よりコナラ属アカガシ亜属の出現率が減少するが、クリーシイ属－マテバシイ属、コナラ属アカガシ亜属が優占し、マツ属複維管束亜属、コナラ属コナラ亜属が伴われる。草本花粉では、イネ属型を伴うイネ科とカヤツリグサ科の出現率が高く、上位に向かってイネ科は増加し、カヤツリグサ科は減少する。他にヨモギ属、ミズアオイ属が伴われる。

Ⅲ帯（試料６～８）では、樹木花粉の占める割合より草本花粉の割合が高くなり、樹木花粉のマツ属複維管束亜属の出現率がやや高くなるのが特徴である。草本花粉ではイネ科、ガマ属－ミクリ属、カヤツリグサ科の出現率が高い。樹木花粉ではクリーシイ属－マテバシイ属、コナラ属アカガシ亜属の出現率が高い。Ⅳ帯（試料２～４）では、イネ属型の出現率が高くなり、イネ属型を含むイネ科が優占する。樹木花粉ではクリーシイ属－マテバシイ属、コナラ属アカガシ亜属が低率になり、マツ属複維管束亜属がやや高率になる。

（５）花粉分析から推定される植生と環境

E--２グリッド

縄文時代晩期とされる溝（SD187）の内部は、ガマ属－ミクリ属などの水生植物が生育していたと考えられ、溝の周辺では水田稲作が行われていたと推定される。遺跡周辺は、イネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属などが生育する人里の環境であったと考えられ、周辺地域にはクリーシイ属－マテバシイ属（シイ類）、コナラ属アカガシ亜属（カシ類）、マツ属複維管束亜属（ニヨウマツ類）を主要素とする照葉樹林が分布していたと推定される。

弥生時代から古墳時代にかけては、継続的に水田稲作が行われていたと考えられ、水田内にはミズアオイ属やオモダカ属などの水田雑草も生育していたと推定される。周辺地域の森林植生には、とくに大きな変化は見られなかったと推定される。

G--５グリッド

縄文時代晩期以前の遺跡周辺は、イネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属、ガマ属－ミクリ属などが生育する沼沢ないし湿地の環境であったと考えられ、周辺地域にはシイ類やカシ類を主要素とする照葉樹林が分布していたと推定される。弥生時代から古墳時代にかけては、継続的に水田稲作が行われていたと考えられるが、周辺地域の森林植生には、とくに大きな変化は見られなかったと推定される。

古墳時代から中世にかけては、一時的にガマ属－ミクリ属などが生育する沼沢地になり、水田稲作は行われなくなったと考えられるが、中世の頃には再開され、近世にかけては集約的な水田稲作が行われていたと推定される。近世の頃には、周辺地域で照葉樹林が減少し、マツの二次林が増加したと推定される。

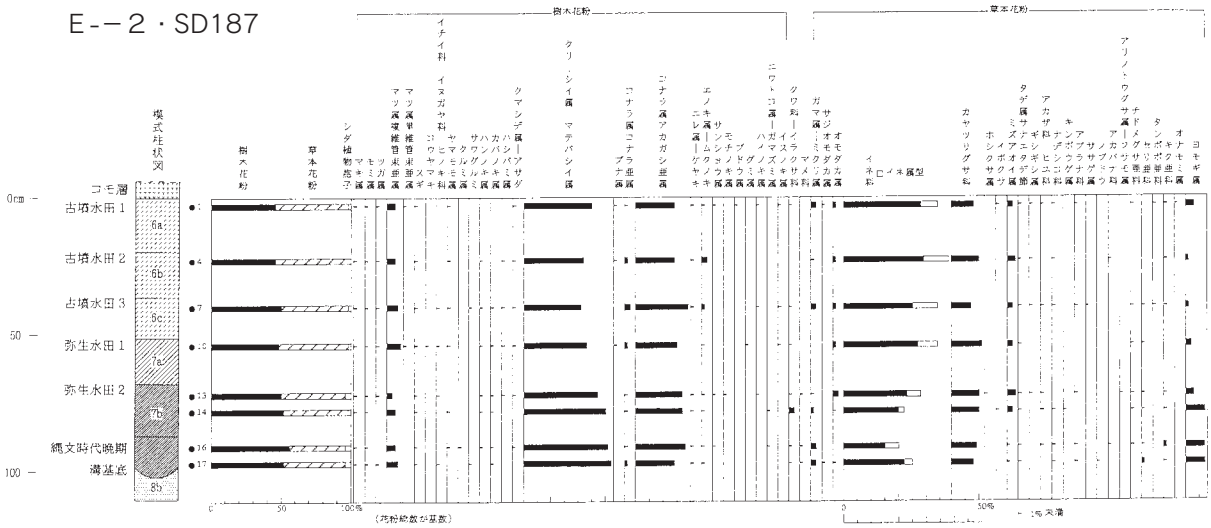
（6）まとめ

縄文時代晩期より以前の遺跡周辺は、イネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属などが生育する人里の環境であったと考えられ、周辺地域にはシイ林やカシ林などの照葉樹林が分布していたと推定される。縄文時代晩期から古墳時代にかけては、継続的に水田稲作が行われていたと考えられるが、周辺地域の森林植生にはとくに大きな変化は見られなかったと推定される。

その後、何らかの原因で一時的に沼沢地化したと考えられるが、中世の頃には再開され、近世にかけては集約的な水田稲作が行われていたと推定される。近世の頃には、周辺地域で照葉樹林が減少し、マツの二次林が拡大したと推定される。

参考文献

中村純（1973）花粉分析．古今書院，p.82-110.
金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法，角川書店，p.248-262.
島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第５集，60p.
中村純（1980）日本産花粉の標徴．大阪自然史博物館収蔵目録第13集，91p.
中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ（Oryza sativa）を中心として．第四紀研究，13，p.187-193.
中村純（1977）稲作とイネ花粉．考古学と自然科学，第10号，p.21-30.



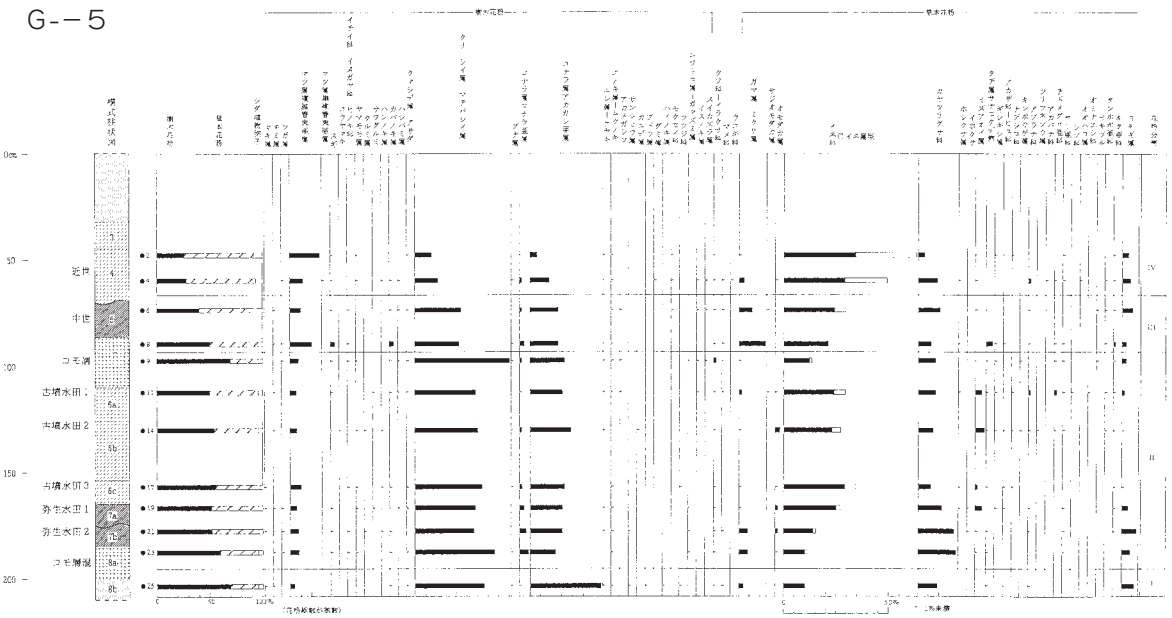
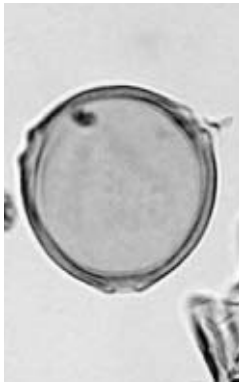


図203　花粉ダイアグラム

1.マツ属複維管束亜属

2.スギ


3.クマシデ属−アサダ

4.ブナ属

5.シイ属

6.コナラ属コナラ亜属

7.コナラ属アカガシ亜属

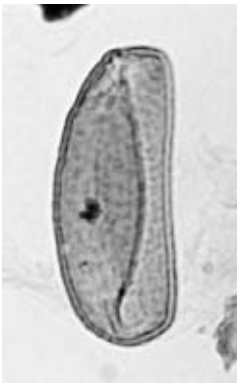
8.エノキ属−ムクノキ

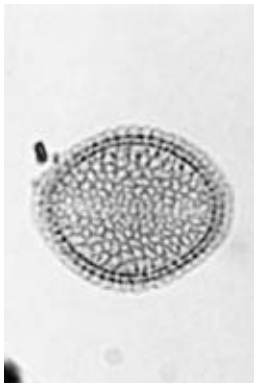
9.マメ科

10.オモダカ属

11.イネ属型

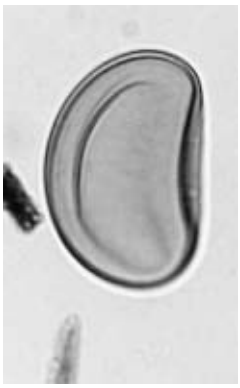
12.カヤツリグサ属

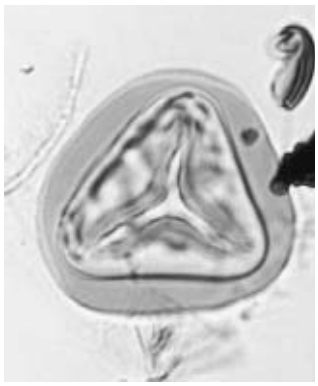

13.ミズアオイ属


14.アブラナ科

15.ギシギシ属

16.ササゲ属


17.シダ植物単条溝胞子


18.シダ植物三条溝胞子

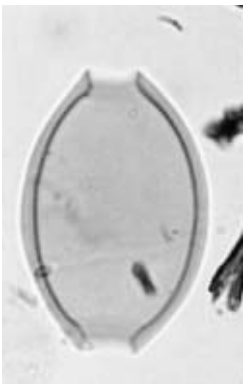

19.鞭虫卵

図204　花粉顕微鏡写真

表65　梅白遺跡における花粉分析結果（1）

分類群		E, -2区SD187							
和名	学名	1	4	7	10	13	14	16	17
樹木花粉	Arboreal pollen								
マキ属	*Podocarpus*	2	1	2	1	2	1	2	1
モミ属	*Abies*	1	1	1	2	1	2	1	1
ツガ属	*Tsuga*	1	1	1	1	1			1
マツ属複維管束亜属	*Pinus subgen. Diploxylon*	13	15	23	26	8	12	21	23
マツ属複維管束亜属	*Pinus subgen. Haploxylon*	1			1				
スギ	*Cryptomeria japonica*	3	1	1	2	1	1	1	4
コウヤマキ	*Sciadopitys verticillata*				1				
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	Taxaceae-Cephalotaxaxeae-Cupressacea			2	1	1			2
ヤマモモ属	*Myrica*	1	4	3	1		1	1	
クルミ属	*Juglans*							1	
サワグルミ	*Pterocarya rhoifolia*			1					1
ハンノキ属	*Alnus*		1	1	2	2	1	1	
カバノキ属	*Betula*			1	1	2	3	3	1
ハシバミ属	*Corylus*		1	1	2	1			
クマシデ属-アサダ	*Carpinus-Ostrya japonica*	1	1	1	1	1		2	
クリ-シイ属-マテバシイ属	*Castanea crenata-Castanopsis-Pasania*	123	107	109	128	124	125	201	173
ブナ属	*Fagus*	1	1		1				
コナラ属コナラ亜属	*Quercus subgen. Lepidobalanus*	4	5	10	7	4	4	6	7
コナラ属アカガシ亜属	*Quercus subgen. Cyclobalanopsis*	67	69	97	85	77	74	117	78
ニレ属-ケヤキ	*Ulmus-Zelkova serrata*	1	1	1		2	2	5	1
エノキ属-ムクノキ	*Celtis-Aphananthe aspera*	2	9	5	4	3	2	6	3
サンショウ属	*Zanthoxylum*	2				1		1	
モチノキ属	*Ilex*					1			
ブドウ属	*Vitis*	1							
グミ属	*Elaeagnus*				1				
ハイノキ属	*Symplocos*	2		1		1			
ニワトコ属-ガマズミ属	*Sambucus-Viburnum*						1	3	
イスノキ属	*Distylium*	1		4	1				
樹木・草本花粉	Arboreal・Nonarboreal pollen								
クワ科-イラクサ科	Moraceae-Urticaceae	3		1	4	4	7	6	5
マメ科	Leguminosae					1		1	1
草本花粉	Nonarboreal pollen								
ガマ属-ミクリ属	*Typha-Sparganium*	8	3	9		2	5	14	12
サジオモダカ属	*Alisma*	1							1
オモダカ属	*Sagittaria*	7	5	6	8	11	2		2
イネ科	Gramineae	137	141	128	152	107	85	98	123
イネ属型	*Oryza type*	31	43	44	39	23	10	30	14
カヤツリグサ科	Cyperaceae	40	47	35	60	44	44	55	41
ホシクサ属	*Eriocaulon*						1		
イボクサ	*Aneilema keisak*	1					1		
ミズアオイ属	*Monochoria*	8	12	11	13	12	7	5	2
タデ属サナエタデ節	*Polygonum sect. Persicaria*	1	1	1	1	1	2	1	1
ギシギシ属	*Rumex*	1	1	2		1			
アカザ科-ヒユ科	Chenopodiaceae-Amaranthaceae	1		1		1	3	1	
ナデシコ科	Caryophyllaceae	1	1	1			1	1	1
キンポウゲ属	*Ranunculus*						1		
アブラナ科	Cruciferae	3		1		1		4	1
ササゲ属	*Vigna*			1					
ノブドウ	*Ampelopsis brevipedunculata*								1
アカバナ科	Onagraceae		1					1	
アリノトウグサ属-フサモ属	*Haloragis-Myriophyllum*					1			
チドメグサ亜科	Hydrocetyloideae	4		1	2	1	1	1	
セリ亜科	Apiodeae			1	1	2	2	1	6
タンポポ亜科	Lactucoideae	1		1					
キク亜科	Asteroideae	1	1	3		2	1	7	3
オナモミ属	*Xanthium*	1							
ヨモギ属	*Artemisia*	15	5	5	12	15	29	42	40
シダ植物胞子	Fern spore								
単条溝胞子	Monolate type spore	6	1	2	9	10	6	11	11
三条溝胞子	Trilate type spore	6	1	5	3	3	3	10	9
樹木花粉	Arboreal pollen	227	218	265	269	233	229	372	296
樹木・草本花粉	Arboreal ・Nonarboreal pollen	3	0	1	4	5	7	7	6
草本花粉	Nonarboreal pollen	262	261	251	288	224	195	261	248
花粉総数	Total pollen	492	479	517	561	462	431	640	550
未同定花粉	Unknown pollen	3	1	1	4	3	5	3	3
シダ植物胞子	Fern spore	12	2	7	12	13	9	21	20
寄生虫卵	Helminth eggs								
鞭虫卵	Trichuris							32	72
計	Total	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	32	72
	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)

表66　梅白遺跡における花粉分析結果（2）

分類群		G, －5区											
和名	学名	2	4	6	8	9	11	14	17	19	21	23	25
樹木花粉	Arboreal pollen												
マキ属	*Podocarpus*								1	2	1		2
モミ属	*Abies*			1	1		1	1		1	2	1	2
ツガ属	*Tsuga*		1		2	3				1	1	1	
マツ属複維管束亜属	*Pinus subgen. Diploxylon*	47	23	20	40	21	14	14	19	12	20	14	6
マツ属単維管束亜属	*Pinus subgen. Haploxylon*		1										
スギ	*Cryptomeria japonica*	1	3	3	6	4	1	2		2	3	1	
コウヤマキ	*Sciadopitys verticillata*							1					
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	Taxaceae-Cephalotaxaeae-Cupressaceae			1	1	1			1		3	2	
ヤマモモ属	*Myrica*	2	1			1		1	1	1		1	
クルミ属	*Juglans*							1			1		
サワグルミ	*Pterocarya rhoifolia*						1			1			
ハンノキ属	*Alnus*		1					1	1		1		
カバノキ属	*Betula*		2	1	7	2	1		2	2	1	2	1
ハシバミ属	*Corylus*		1	1		1	1			1			
クマシデ属-アサダ	*Carpinus-Ostrya japonica*	1		3		2	3		2	3		1	3
クリ-シイ属-マテバシイ属	*Castanea crenata-Castanopsis-Pasania*	26	45	83	83	228	125	134	119	127	130	150	120
ブナ属	*Fagus*		1		1	2		1	1			2	1
コナラ属コナラ亜属	*Quercus subgen. Lepidobalanus*	2	4	4	8	6	4	5	5	7	13	14	3
コナラ属アカガシ亜属	*Quercus subgen. Cyclobalanopsis*	11	35	49	52	79	65	85	58	65	68	47	119
ニレ属-ケヤキ	*Ulmus-Zelkova serrata*	1	1		1	1	1	1		2	1		1
エノキ属-ムクノキ	*Geltis-Aphananthe aspera*	1	1	2	1	2	1		1	2	1	3	2
アカメガシワ	*Mallotus japonicus*			1		1	1						
サンショウ属	*Zanthoxylum*										1		1
カエデ属	*Acer*							2					
ブドウ属	*Vitis*												1
グミ属	*Elaeagnus*		1										
ハイノキ属	*Symplocos*												1
モクセイ科	Oleaceae	1	2	1									
ツツジ科	Ericaceae								1				1
ニワトコ属-ガマズミ属	*Sambucus-Viburnum*					2				1	1	1	
イスノキ属	*Distylium*		2	1		3	1						
スイカズラ属	*Lonicera*		1	1		1							
樹木・草本花粉	Arboreal・Nonarboreal pollen												
クワ科-イラクサ科	Moraceae-Urticaceae	2	1	2	1	5	4	2	2	2	1	1	1
マメ科	Leguminosae		1	1	2	1	1				1		2
ウコギ科	Araliacea		1										
草本花粉	Nonarboreal pollen												
ガマ属-ミクリ属	*Typha－Sparganium*	3	6	24	46	4	6	3	1	3	19	17	6
サジオモダカ属	*Alisma*			1			1						
オモダカ属	*Sagittaria*		1				3	7	1	5	5	1	
イネ科	Gramineae	116	119	93	82	58	107	106	107	110	63	41	37
イネ属型	*Oryza type*	97	83	19	1	7	22	18	17	8	6	2	
カヤツリグサ科	Cyperaceae	10	38	39	22	41	35	32	21	48	77	71	33
ホシクサ属	*Eriocaulon*		1		1		1		1	2			
イボクサ	*Aneilema keisak*									1	1		
ミズアオイ属	*Monochoria*	1	3	2		2	14	17	5	11	1	2	
タデ属サナエタデ節	*Polygonum sect. Persicaria*			2	10	3	1	3	2		1	1	1
ギシギシ属	*Rumex*	2			1	1	1	1		1			
アカザ科-ヒユ科	Chenopodiaceae－Amaranthaceae	2		2	1			1	1	1			1
ナデシコ科	Caryophyllaceae	1					1	1	1				
キンポウゲ属	*Ranunculus*					1		1					
アブラナ科	Cruciferae		4	2	2		6	2		1	1		1
ツリフネソウ属	*Impatiens*							1					
アカバナ科	Onagraceae		1	1									
チドメグサ亜科	Hydrocetyloideae		3		1	3	5	4					
セリ亜科	Apiodeae	1	3		2	4	1	1		1	4	1	
シソ科	Labiatae						1						
オオバコ属	Plantago		1										
オミナエシ科	Valerianaceae						1						
ゴキヅル	*Actinostemma lobatum*			1		2							
タンポポ亜科	Lactucoideae		3	1	1		1	1					
キク亜科	Asteroideae	1	2	1	4	4	1	1	1	2	2		
コモギ属	*Artemisia*	9	15	19	8	10	5	2	3	11	32	17	20
シダ植物胞子	Fern spore												
単条溝胞子	Monolate type spore	23	17	51	8	15	9	11	4	8	8	9	11
ミズワラビ	Celatopteris									1	1		
三条溝胞子	Trilate type spore	14	12	1	10	6	6	3	1	5	5	4	3
樹木花粉	Arboreal pollen	93	126	172	203	360	220	249	212	230	248	240	264
樹木・草本花粉	Arboreal ・Nonarboreal pollen	2	3	3	3	6	5	2	2	2	2	1	3
草本花粉	Nonarboreal pollen	243	283	207	182	140	213	202	161	205	212	153	99
花粉総数	Total pollen	338	412	382	388	506	438	453	375	437	462	394	366
未同定花粉	Unknown pollen	6	5	4	2	5	2	6	2	1	2	3	2
シダ植物胞子	Fern spore	37	29	52	18	21	15	14	5	14	14	13	14
寄生虫卵	Helminth eggs												
鞭虫卵	Trichuris							16					
計	Total	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	16	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)
明らかな消化残渣		(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)

３，梅白遺跡における珪藻分析　　古環境研究所

（１）はじめに

珪藻は、珪酸質の被殻を有する単細胞植物であり、海水域から淡水域のほぼすべての水域、および湿った土壌、岩石、コケの表面にまで生息している。珪藻の各分類群は、塩分濃度、酸性度、流水性などの環境要因に応じて、それぞれ特定の生息場所を持っている。珪藻化石群集の組成は、当時の堆積環境を反映していることから、水域を主とする古環境復原の指標として利用されている。

（２）試料

試料は、E-－２グリッドおよびG-－５グリッドの２地点から採取された計20点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

（３）方法

以下の物理化学処理を施して、プレパラートを作成した。

①試料から乾燥重量１ｇを秤量する。

②10％過酸化水素水を加えて加温し、１晩放置する。

③上澄みを捨て、細粒のコロイドおよび薬品の水洗を行う。

④残渣をマイクロピペットでカバーグラスに滴下し、乾燥させる。

⑤マウントメディアによって封入し、プレパラートを作成する。

生物顕微鏡を用いて600～1000倍の倍率で検鏡し、直線視野法により計数を行った。同定・計数は珪藻被殻が100個体以上になるまで行い、少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行った。

（４）結果

試料から検出された珪藻は、真－中塩性種（海－汽水生種）８分類群、中－貧塩性種（汽－淡水生種）７分類群、貧塩性種（淡水生種）115分類群である。計数された珪藻の学名と個数を表67～70に示し、珪藻総数を基数とする百分率を算定したダイアグラムを図205に示す。

E-－２グリッド（図１）

全体的に*Fragilaria construens*、*Fragilaria construens* v.*venter*、*Fragilaria pinnata*などの好止水性種の出現率が高く、試料10より下位では*Fragilaria virescens*などの好止水性種や*Navicula elginensis*などの好流水性種、沼沢湿地付着生環境指標群も比較的多い。試料７から試料１にかけては、*Eunotia praerupta* v.*bidens*や*Navicula mutica*などの陸生珪藻、および好止水性種の*Amphora ovalis*が増加しており、湖沼沼沢湿地環境指標群なども検出された。

G-－５グリッド（図２）

珪藻群集の構成とその変遷から、下位よりⅠ帯、Ⅱ帯、Ⅲ帯の珪藻分帯を設定した。Ⅰ帯（試料23～25）では、真止水性種、湖沼浮遊生環境指標群の*Aulacosira granulata*、不定性の*Actinocyclus* sp.などの出現率が高く、*Fragilaria construens*、*Fragilaria construens* v.*venter*、*Fragilaria pinnata*、*Amphora ovalis*など真－好止水性種や海水砂質干潟環境指標群の*Openphora martyi*も出現する。Ⅱ帯（試料14～21）では、*Fragilaria construens*、*Fragilaria construens* v.*venter*、*Fragilaria pinnata*、*Fragilaria virescens*、*Amphora ovalis*など好止水性種が多く検出され、好止水性種、湖沼沼沢湿地環境指標群の*Aulacosira ambigua*、真－好流水性種、沼沢湿地付着生環境指標群の*Navicula elginensis*などが伴われる。

Ⅲ帯（試料２～11）では、*Fragilaria construens*、*Fragilaria construens* v.*venter*、*Amphora ovalis*などの真－好止水性種や*Aulacosira ambigua*などの好止水性種、湖沼沼沢湿地環境指標群の出現率が高く、不定性の*Cymbella cuspidata*、陸生珪藻である*Eunotia praerupta* v.*bidens*、*Navicula mutica*、*Nitzschia brevissima*なども

検出される。

（５）珪藻分析から推定される堆積環境

Ｅ--２グリッド

縄文時代晩期とされる溝（SD187）の内部は、ややよどんだ状態であったと考えられる。弥生時代とされる７ｂ層から古墳時代とされる６ｂ層にかけては、止水域で沼沢地の環境であったと考えられ、流水の影響も受けていたと推定される。古墳時代とされる６ａ層の堆積当時は、湿潤な陸域を伴う止水域で沼沢地の環境が考えられる。

Ｇ--５グリッド

縄文時代晩期以前とされる８ａ層の堆積当時は、潟湖の縁辺など、汽水の影響のある湖沼の環境であったと推定される。弥生時代とされる７ｂ層から古墳とされる６ｂ層にかけては、流水の影響のある沼沢地の環境であったと考えられ、当時の水田は湿田であったと推定される。中世から近世にかけては、湿潤な陸域を伴う沼沢地の環境であり、当時の水田は湿田～半湿田であったと推定される。

参考文献

小杉正人（1986）陸生珪藻による古環境解析とその意義－わが国への導入とその展望－．植生史研究，第１号，植生史研究会，p29-44.

小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用．第四紀研究，27，p1-20.

安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用．東北地理，42，p73-88.

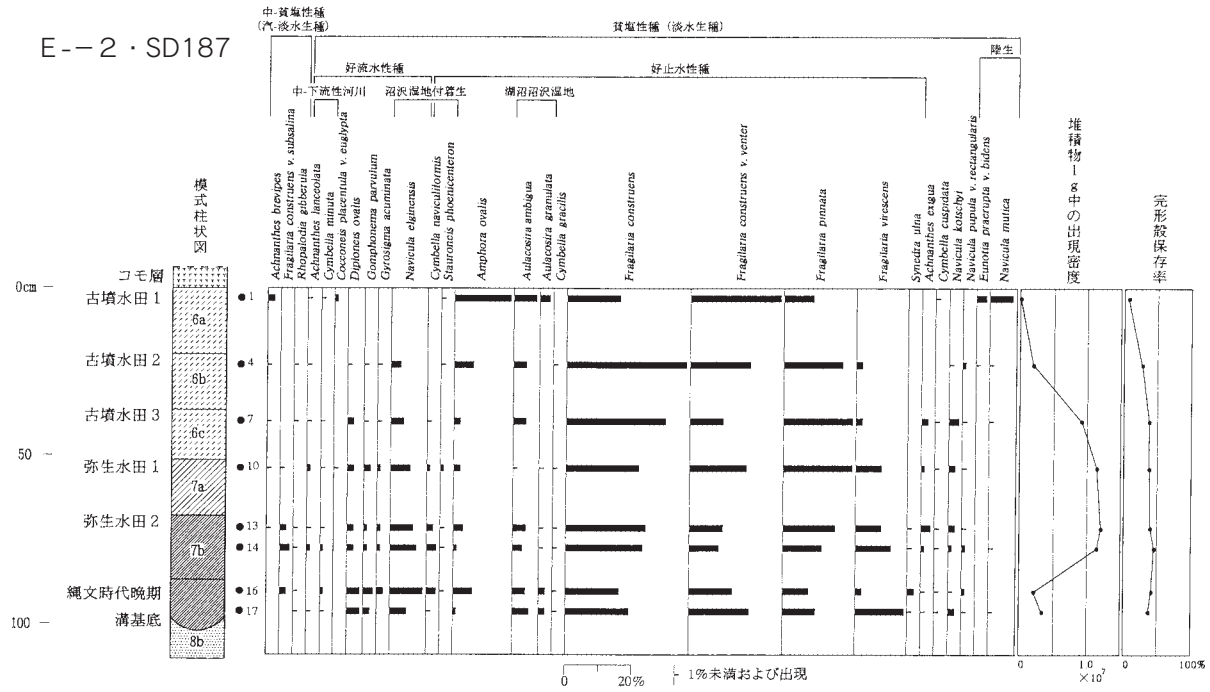
伊藤良永・堀内誠示（1991）陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用．珪藻学会誌，９，p23-45.

Asai,K.&,Watanabe,T.(1995)Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relaiting to Organic Water Pollution(2) Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom,10,p35-47.

Hustedt, F.(1930) Bacillariophyta,Die Susswasser Flora Mitteleeuropas,10 Gustav Fischer, Jena, 466p.

Patrick, R.eimer, C. W.(1966) The diatom of the United States, vol.1. Monographs of Natural Sciences of Philadelphia, No. 13, The Academy of Natural Siences of Philadelphia, 644p.

Patrick, R.eimer, C. W.(1975) The diatom of the United States, vol. 2. Monographs of Natural Sciences of Philadelphia, No. 13, The Academy of Natural Siences of Philadelphia, 213p



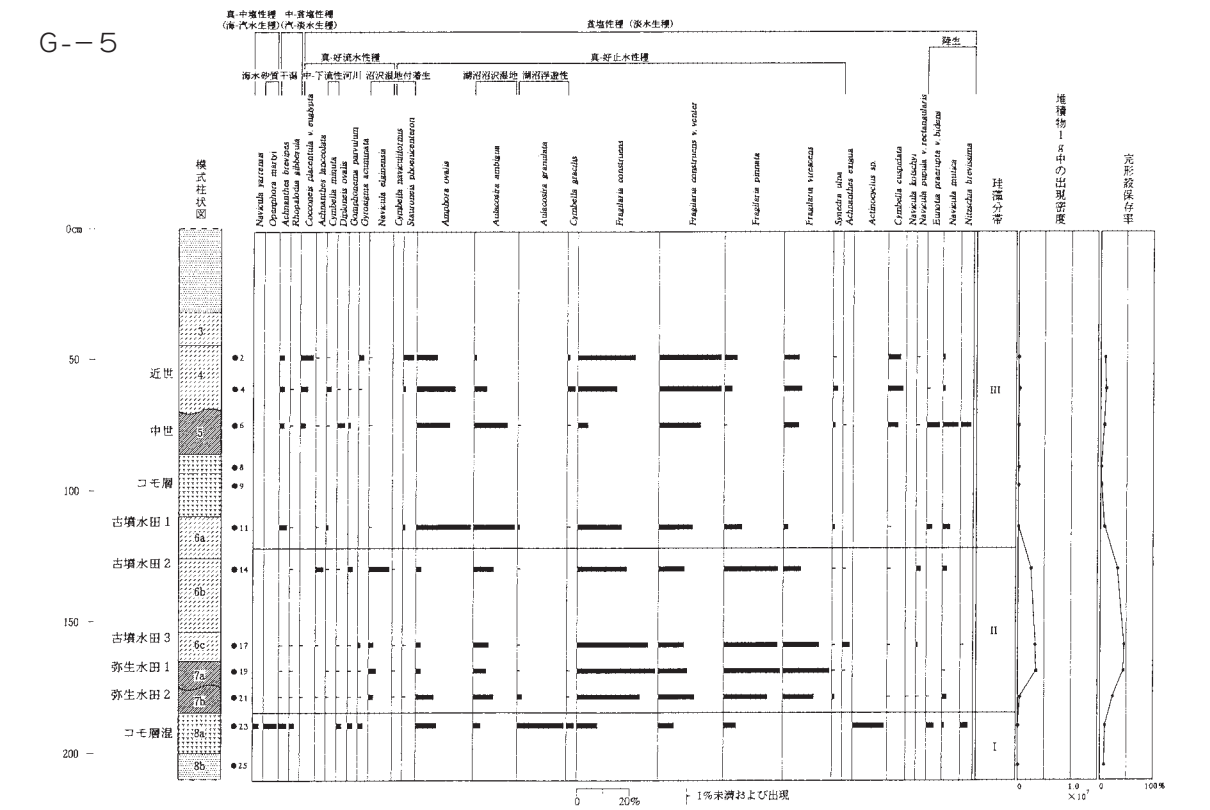
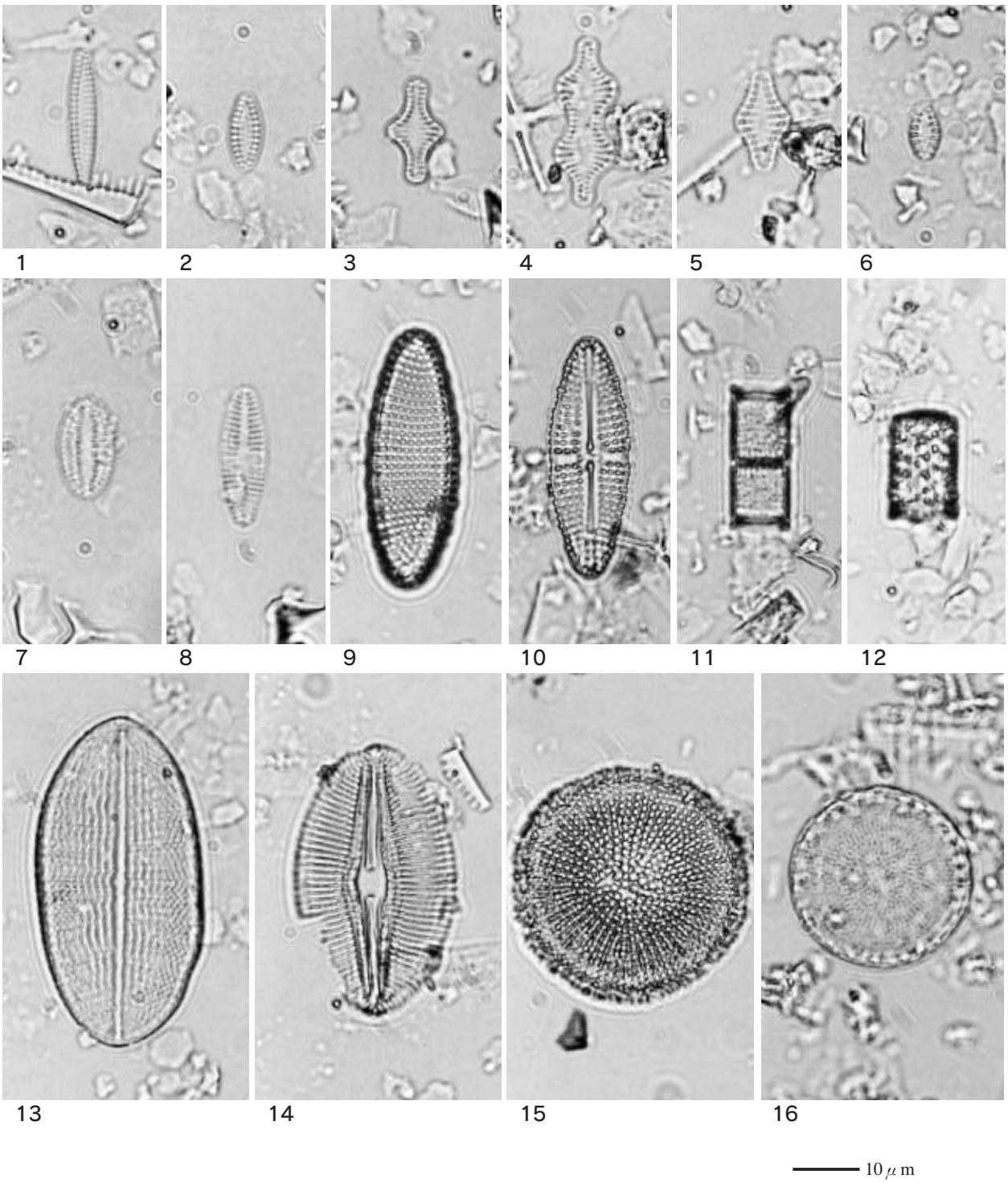
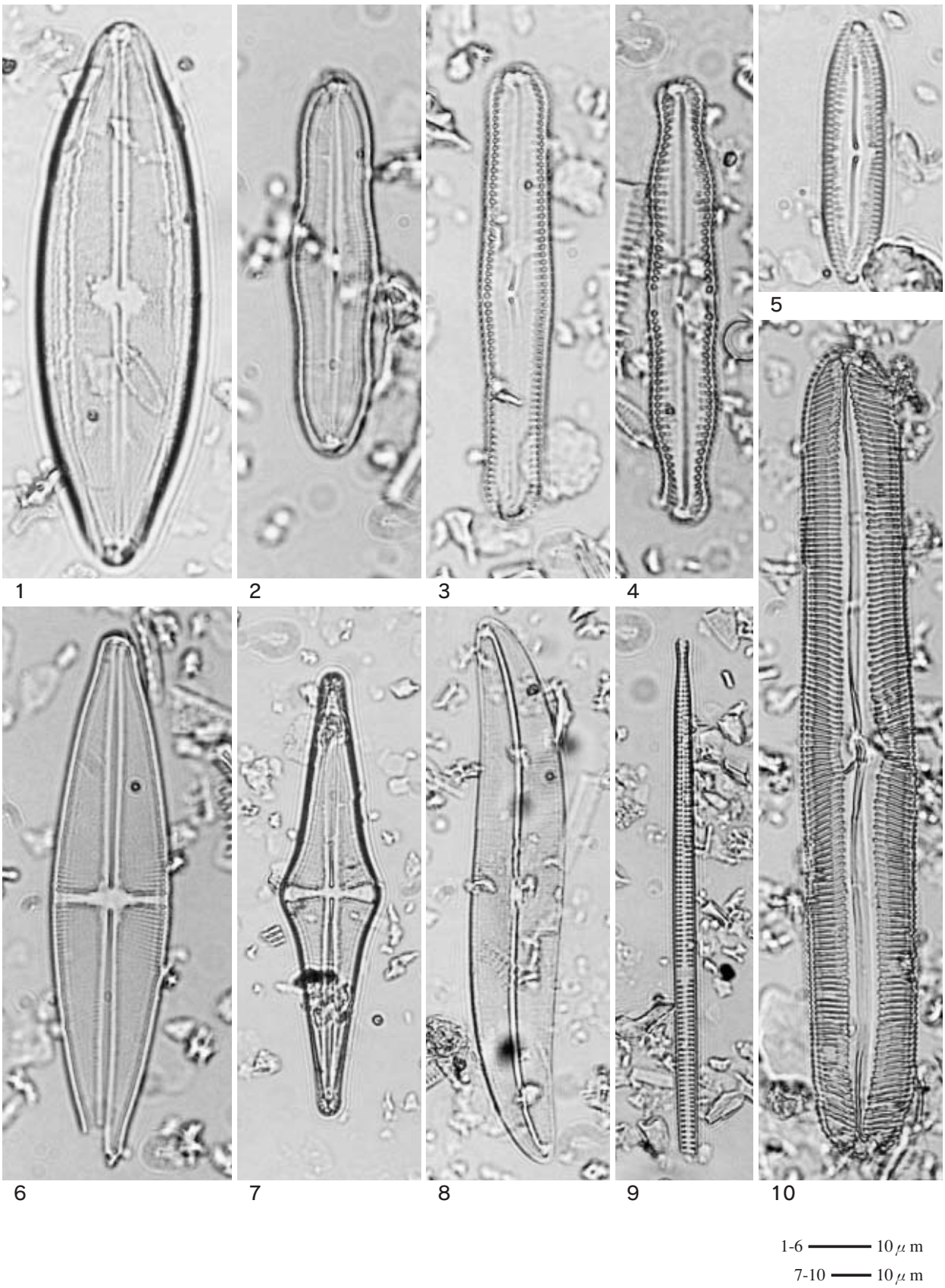


図205　珪藻ダイアグラム



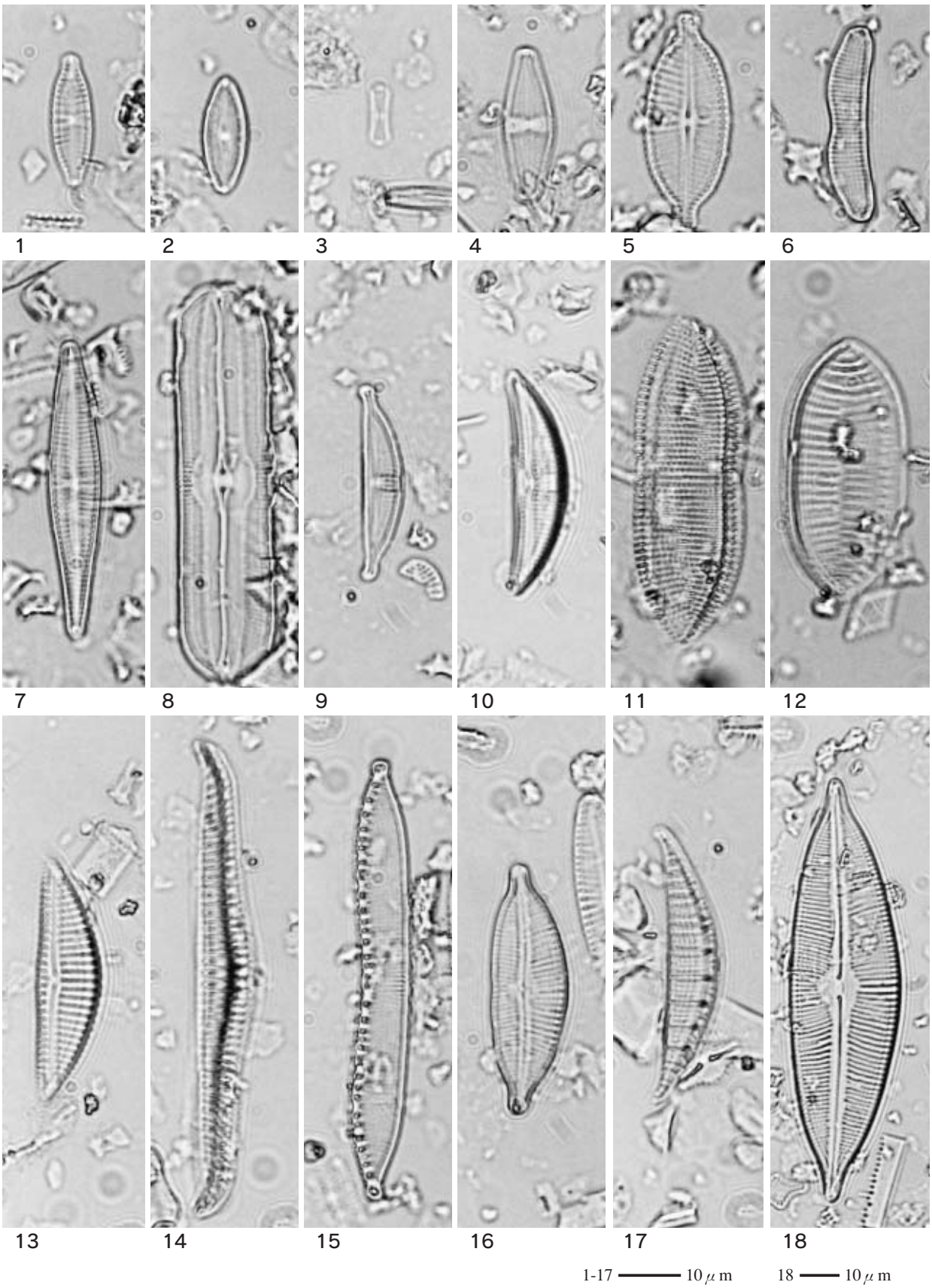
1.*Fragilaria virescens* 2.*Fragilaria construens v.venter* 3.*Fragilaria construens*
4.*Fagilaria construens v.binodis* 5.*Fragilaria pinnata v.lancettula* 6.*Fragilaria pinnata*
7.*Cocconeis disculus* 8.*A chnanthes lanceolata* 9.10.*A chnanthes brevipes*
11.*A ulacoseira ambigua* 12.*A ulacoseira granulata* 13.*Cocconeis placuntula v.euglypta*
14.*Diploneis ovalis* 15.*Actinocyclus sp.* 16.*Stephanodiscus sp.*

図206　珪藻顕微鏡写真１



1.*Neidium iridis* 2.*Caloneis silicula* 3.*Pinnularia acrospphaeria* 4.*Pinnularia nodosa* 5.*Pinnularia viridis*
6.*Stauroneis phoenicenteron* 7.*Stauroneis acuta* 8.*Gyrosigma acuminatum* 9.*Synedra ulna*
10.*Pinnularia major*

図207　珪藻顕微鏡写真２



1.*Gomphonema parvulum* 2. *Navicula sp.* 3.*Navicula contenta* 4.*Navicula mutica* 5.*Navicula elginensis*
6.*Eunotia praerupta v.bidens* 7.*Gomphonema gracile* 8.*Navicula americana* 9.*Amphora montana*
10.*Amphora ovalis* 11.*Nitzschia punctata v.coarctata* 12.*Nitzschia tryblionella v.victoriae*
13.*Rhopalodia gibberula* 14.*Rhopalodia gibba* 15.*Hantzschia amphioxys* 16.*Cymbella naviculiformis*
17.*Cymbella minuta* 18.*Cymbella cuspidata*

図208　珪藻顕微鏡写真３

表67　梅白遺跡における珪藻分析結果（1）

分類群	E,-2区SD187							
	1	4	7	10	13	14	16	17
真-中塩性種								
Nitzschia apiculata							1	
Nitzschia cocconeiformis				1				
Nitzschia sigma								1
中-貧塩性種								
Achnanthes brevipes	5	1	1	1	1			
Anomoeoneis sphaerophora		1	1					
Fragilaria construens v. binodis		3	3	1	3	1	1	1
Fragilaria construens v. subsalina				1	13	11	8	
Navicula capitata					1		1	
Nitzschia obtusa					1			
Rhopalodia gibberula		1	2		3	3	1	1
貧塩性種								
Achnanthes exigua			7	7	18	5	1	2
Achnanthes lanceolata	2	1	4	9	7	5		2
Amphora montana					2	1	6	
Amphora ovalis	47	23	10	12	18	5	19	5
Aulacoseira ambigua	18	17	16	2	25	10	14	17
Aulacoseira granulata	7			1	2	1	6	7
Caloneis bacillum		1	2	4	6	2	6	2
Caloneis silicula		3	2	5	7	2	4	3
Cocconeis disculus	1	3		1			2	1
Cocconeis placentula								1
Cocconeis placentula v. euglypta	4			1				
Cyclotella sp.-1					1		1	
Cymbella cuspidata	1		3	2	3	1	2	1
Cymbella gracilis		1		1	1	1	1	1
Cymbella minuta	1		4	4	4	4	6	3
Cymbella naviculiformis			1	9	12	10	10	1
Cymbella tumida	1	1		1	1	1		
Diploneis ovalis		2	8	16	17	7	13	15
Eunotia pectinails							1	1
Eunotia pectinalis v. minor	1	2	4	2	1	1	1	1
Eunotia praerupta v. bidens	9	2						
Fragilaria capucina	1	5	2	11				
Fragilaria construens	43	144	135	144	169	79	52	65
Fragilaria construens v. venter	74	69	45	114	71	32	42	64
Fragilaria parasitica		3	3					
Fragilaria pinnata	24	71	92	136	113	43	27	36
Fragilaria pinnata v. interredens	1							
Fragilaria virescens		7	10	52	60	40	8	52
Frustulia vulgaris			1		1	1	3	1
Gomphonema acuminatam v. turri	2							
Gomphonema angustum	2		2			1		1
Gomphonema clevei	2							
Gomphonema gracile	1		1	3	3	2	1	2
Gomphonema grovei v. lingulatum							1	
Gomphonema parvulum		1	4	12	9	4	10	8
Gomphonema subtile					1	1		
Gyrosigma acuminatum		3	4	8	9	5	5	
Hantzschia amphioxys	1			1	1	1		1
Mastogloia apiculata	1				1	1		
Meridion circulare v. constrictum							1	
Navicula americana	1	1	1		1			
Navicula arvensis			10			1	1	4
Navicula bacillum				1	2	1	2	
Navicula cohnii							3	2
Navicula contenta	2						1	

表68　梅白遺跡における珪藻分析結果（2）

分類群	E,-2区SD187							
	1	4	7	10	13	14	16	17
Navicula cryptocephala			3		2			
Navicula cryptotenella			4				2	3
Navicula cuspidata		1	1		1	1		
Navicula elginensis		11	17	37	50	29	31	19
Navicula elginensis v. cuneata				1				
Navicula erifuga				2	2	3		2
Navicula kotschyi		4	14	11	14	4	2	6
Navicula laevissima	2							
Navicula mutica	18	3	2			1		1
Navicula mutica v. undulata				5				
Navicula pseudolanceolata		1						
Navicula pupula		1	11	5	5	1	1	
Navicula pupula v. rectangularis		6	3	4	6	4	4	3
Navicula radiosa		2	1	3	15	3	4	
Navicula radiosa v. nipponica				7	1			
Navicula tokyoensis	1	1		1	1	1		
Navicula viridula				1	5	3	2	
Neidium affine					1		1	
Neidium affine v. amphirhynchus					1			
Neidium iridis		1	1			1		
Neidium iridis v. amphigomphus								1
Nitzschia dissipata								1
Nitzschia punctata v. coarctata				1	1	1		
Nitzschia sp.							1	
Nitzschia tryblionella			1	2	1	2		1
Pinnularia acrosphaeria	1		2		2	1		1
Pinnularia borealis							1	
Pinnularia gibba			3	2	1			1
Pinnularia interrupta		1	1		2			1
Pinnularia microstauron		1			2		1	
Pinnularia sp.-1	2							
Pinnularia subcapitata				2			1	
Pinnularia viridis		1		1	2	2		2
Rhopalodia gibba			1		1	1	1	
Stauroneis acuta			1	1				
Stauroneis alabamae v. angulata				1				
Stauroneis anceps			1					
Stauroneis lauenburgiana				1	3	2		1
Stauroneis phoenicenteron	1	3		7	2	3	2	
Stauroneis smithii		1	1	1	2	1	1	
Stephanodiscus sp.					1	1	1	
Surirella ovata							1	1
Synedra rumpens v. familiaris						2		
Synedra ulna					1	1	5	1
合　計	277	404	446	659	713	351	324	347
未同定	12	18	102	80	88	51	67	34
破片	3752	1116	871	1174	1211	463	520	630
試料１ｇ中の殻数密度	2.2×10^{5}	3.9×10^{6}	8.6×10^{6}	1.3×10^{7}	1.4×10^{7}	1.3×10^{7}	4.1×10^{6}	6.7×10^{6}
完形殻保存率（%）	7.2	27.4	38.6	38.6	39.8	46.5	42.9	37.7

表69　梅白遺跡における珪藻分析結果（3）

分類群	G, -5区											
	2	4	6	8	9	11	14	17	19	21	23	25
真-中塩性種												
Achnanthes brevipes v. angustata	1											
Melosira sulcata												1
Navicula alpha												1
Navicula yarrensis											3	
Opephora martyi											6	
中-貧塩性種												
Anomoeoneis sphaerophora								1				
Fragilaria construens v. binodis								2		3		
Navicula capitata							1					
Nitzschia obtusa							1					
Rhopalodia gibberula		1	8		1	1	1	1	2	1	2	
貧塩性種												
Achnanthes brevipes	4	5	6		5	9		1	1	1	4	
Achnanthes exigua			1				4	9	1			
Achnanthes inflata						1						
Achnanthes lanceolata	1		3			2	13	2		1		
Actinocyclus sp.											16	9
Amphora montana						1						
Amphora ovalis	14	32	42		2	72	12	7	7	34	10	
Aulacoseira ambigua	2	11	41			56	39	19	17	43	4	3
Aulacoseira granulata			1			4	4	1	1	8	24	
Caloneis bacillum		1	1				1					
Caloneis silicula	1	1					2	1	1	4		
Cocconeis disculus		2	1			7	2					
Cocconeis placentula						8						
Cocconeis placentula v. euglypta	8	6	5					1		1		
Cymbella aspera	1											
Cymbella cuspidata	9	12	13			2	2	1		1		
Cymbella gracilis	2	6	3			1			2	3	4	
Cymbella lanceolata		2	5								4	
Cymbella minuta	1	5	3			4	3		1	4		
Cymbella naviculiformis							5	1	1	2		
Cymbella sinuata								1				
Cymbella tumida	2	2				1	1			1		
Diatoma vulgare										2		
Diploneis ovalis		1	10				3	1	1	1	2	
Epithemia adnata	1											
Eunotia arcus v. bidens			1									
Eunotia monodon v. tropica		1										
Eunotia pectinails			5				1	1				
Eunotia pectinalis v. minor	1				1	1	6	3	2	1	2	
Eunotia pectinalis v. undulata										2		
Eunotia praerupta						1						
Eunotia praerupta v. bidens		1	17		3	6				2	4	
Epithemia sp.-1		1										
Fragilaria capucina v. vaucheriae			1									
Fragilaria construens	39	32	13			59	99	89	109	122	10	
Fragilaria construens v. venter	42	52	52			45	50	33	41	72	8	F
Fragilaria pinnata	8	6	3		1	26	110	68	81	88	6	
Fragilaria pinnata v. lancettula											2	
Fragilaria virescens	10	15	19			7	34	44	66	63		
Gomphonema acuminatum						2						
Gomphonema acuminatam f. pusilla							1					
Gomphonema angustum							3			1	2	
Gomphonema clevei	1											

表70　梅白遺跡における珪藻分析結果（4）

分類群	G, -5区											
	2	4	6	8	9	11	14	17	19	21	23	25
Gomphonema constrictum		1										
Gomphonema gracile	2					1			2	1		
Gomphonema grovei v. lingulatum										1		
Gomphonema parvulum		1	4				9	3	1	2	2	
Gomphonema sphaerophorum		1					1		1			
Gomphonema truncatum						2	1			2		
Gyrosigma acuminatum	4	1						4	2	5	2	
Hantzschia amphioxys			2	1			1		1			
Mastogloia apiculata	3					1						
Meridion circulare v. constrictum							1			1		
Navicula americana			1				1					
Navicula arvensis	2	2				2	2	1	2	1		
Navicula bacillum							7					
Navicula cohnii		1	5									
Navicula contenta	1				1	1	2					
Navicula cryptocephala								1				
Navicula cryptotenella									1			
Navicula cuspidata								1	1			
Navicula elginensis	1		2			3	40	6	10	8		
Navicula kotschyi										1		
Navicula mutica	2	3	20	9	3	11	10		1	9	2	
Navicula pupula							5	2				
Navicula pupula v. rectangularis	1		1				9	4		2		
Navicula radiosa							2	3				
Navicula sp.									1			
Navicula striolata						5	2				2	
Navicula tokyoensis			2	1						1	2	
Neidium iridis		1								1		
Neidium iridis v. amphigomphus								2	1			
Nitzschia brevissima			14		1			1			4	
Nitzchia tryblionella							1	1				
Pinnularia acrosphaeria							1	1		2	2	
Pinnularia borealis			2						1			
Pinnularia gibba			4				3					
Pinnularia major							1	1				
Pinnularia mesolepta								1		1		P
Pinnularia microstauron							2		1			
Pinnlaria nodosa							2					
Pinnularia sp.-1			3		1			1				
Pinnularia subcapitata							2					
Pinnularia viridis	1	1	2				3		2	2		
Rhopalodia gibba					1		2	1		1		
Stauroneis acuta	1					1					2	
Stauroneis alabamae								1				
Stauroneis anceps		1	3				2			1	2	
Stauroneis lauenburgiana		1					1		1			
Stauroneis phoenicenteron	7	3				4		1		1		
Stauroneis smithii								1	1	1		
Synedra ulna	1	5	4			4	2	2	3	7		
合　計	174	217	323	11	20	351	513	326	367	512	133	14
未同定	8	11	15	0	0	7	33	10	11	18	14	1
破片	1825	2033	3686	401	457	3471	1073	405	470	1607	1346	177
試料１ｇ中の殻数密度	1.4×10^{5}	3.5×10^{5}	1.3×10^{5}	2.2×10^{3}	4.0×10^{3}	1.4×10^{5}	4.9×10^{6}	6.3×10^{6}	7.0×10^{6}	8.2×10^{5}	2.7×10^{4}	2.8×10^{3}
完形殻保存率（%）	9.1	10.1	8.4	2.7	4.2	9.3	33.7	45.3	44.6	24.8	9.8	7.8

４，梅白遺跡における放射性炭素年代測定　　測定：地球科学研究所・古環境研究所

（１）測定試料

基本土層の年代を測定する目的で低地部水田跡の調査区南壁土層から試料①～④を採取した。また、水田跡の最下層で検出した堅果類がつまった土坑出土の種実（アカガシ亜属）も測定した。図209は試料①～④の採取土層地点である。表71がこれらの測定値である。試料①～④は地球科学研究所、⑤は古環境研究所の測定によるドングリ土坑出土の種実である。

表71　放射性炭素年代測定値表

試料	C14年代(yBP)	δ13C	補正C14年代(yBP)	暦年代	測定法
①	1170±50	−27.0	1140±50	ＡＤ775～1005	ＡＭＳ法
②	1340±60	−27.6	1300±60	ＡＤ645～880	β線計測法
③	1310±70	−27.0	1280±70	ＡＤ645～895	β線計測法
④	3340±60	−23.8	3360±60	ＢＣ1765～1510	ＡＭＳ法
⑤	2520±50	−26.9	2490±50	交点:ＢＣ760,653, 5601δ:ＢＣ780～515 ２δ:ＢＣ795～410	β線計測法

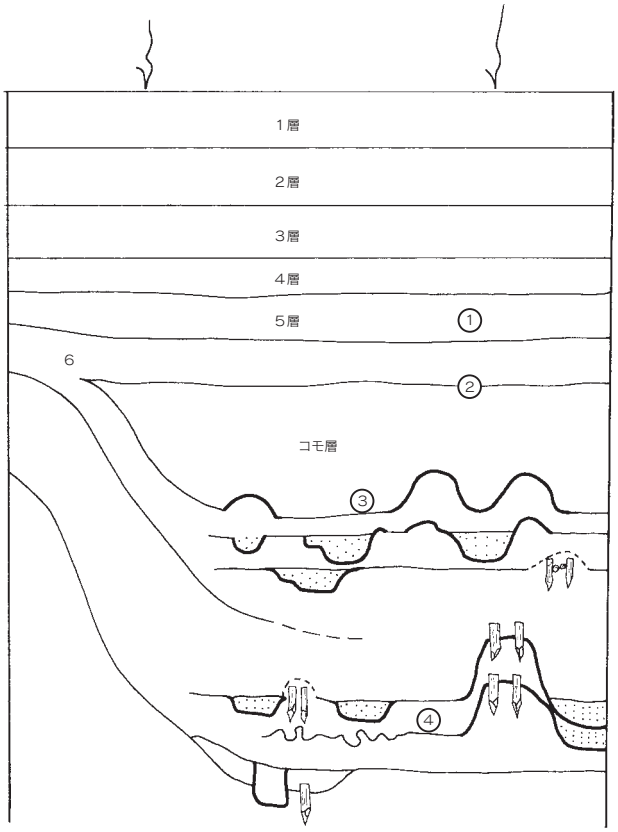


図209　C[14]土壌採取土層模式図

５，梅白遺跡出土木材の樹種同定　　古環境研究所

（１）試料・結果

試料は次の①～③である。①は弥生時代の水田跡のSF175大畦畔のＤ，Ｅ-－６に打ち込まれていた杭材である。②は弥生時代～古墳時代の木製品である。③は古墳時代中期前半の掘立柱建物の柱根である。

それぞれの同定結果を表72～75に示す。

（２）方法

カミソリを用いて新鮮な基本的三断面（木材の横断面、放射断面、接線断面）を作製し、生物顕微鏡によって60～600倍で観察した。樹種同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

（３）所見

①弥生時代水田跡SF175大畦畔内杭材

同定の結果、マツ属複維管束亜属５、ヤナギ属１、クマシデ属イヌシデ節２、クリ47、ツブラジイ15、シイ属12、コナラ属クヌギ節８、ブナ科２、クスノキ科１、サクラ属１、ヤブツバキ２、サカキ１、シャシャンボ１、散孔材４が同定された。

クリやコナラ属クヌギ節は、温帯の乾燥した台地上や丘陵地などに生育し、二次林要素でもある。ツブラジイ、シイ属は、温帯下部の暖温帯に分布する照葉樹林の主要構成要素であるが、二次林要素でもある。マツ属複維管束亜属には、二次林を形成するアカマツと海岸林を形成するクロマツとがある。

当時の遺跡周辺には、これらの照葉樹林や落葉広葉樹林が分布していたと考えられ、杭材には近隣に生育していたこれらの樹木が利用されていたと推定される。

②弥生時代～古墳時代の木製品

同定の結果、コナラ属アカガシ亜属35、サカキ５、クリ３、マキ属、クスノキ、ヤブツバキ各２、イヌガヤ、マツ属複維管束亜属、クマシデ属イヌシデ節 、イスノキ、サクラ属 、アワブキ属 、チシャノキ属？、ガマズミ属？、散孔材、樹皮各１と同定された。

最も多く使用されているコナラ属アカガシ亜属をはじめ、大部分の樹種は温帯下部の暖温帯に分布する照葉樹林の主要高木ないし構成要素である。コナラ属アカガシ亜属は、材が堅硬で強靭であり、弾力性が強く耐湿性も高いことから、とくに農耕具に多く使用されていたと考えられる。

③古墳時代中期前半の掘立柱建物・柱根

同定の結果、アカマツ、マツ属複維管束亜属、スギ、クリ、ツブラジイ、シイ属、コナラ属クヌギ節、ニレ属、アワブキ属、ホルトノキ属、ヤブツバキ、サカキ、環孔材の13の樹種が同定された。いずれの樹種も高木であり、暖温帯域の森林から普通に得られる樹種である。柱材は、SB136ではクリ、SB137ではコナラ属クヌギ節、SB253とSB254ではヤブツバキ、SB255ではアワブキ属と掘立柱建物ごとに同じ樹種が使われ、SB123ではアカマツ、SB140ではヤブツバキが多く使われている。以上から、掘立柱建物単位に同一樹種の木材を使う傾向が示唆される。

文献

１，佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.20-48.
２，佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.49-100.
３，島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，296p.

表72　弥生時代水田跡ＳＦ175大畦畔内杭材（1）

試料番号	樹　種　（和　名）	樹　種　（学　名）
1	クマシデ属イヌシデ節	Carpinus sect.Carpinus
2	散孔材	Diffuse-porous wood
3	シイ属	Castanopsis
4	サクラ属	Prunus
5	シイ属	Castanopsis
6	マツ属複維管束亜属	Pinus subgen.Diploxylon
7	マツ属複維管束亜属	Pinus subgen.Diploxylon
8	コナラ属クヌギ節	Quercus sect.Aegilops
9	シイ属	Castanopsis
10	ヤブツバキ	Camellia japonica Linn.
11	クリ	Castanea crenata Sieb.et Zucc.
12	クリ	Castanea crenata Sieb.et Zucc.
13	シイ属	Castanopsis
14	ツブラジイ	Castanopsis cuspidata Schottky
15	シイ属	Casranopsis
16	クマシデ属イヌシデ節	Carpinus sect.Carpinus
17	コナラ属クヌギ節	Quercus sect.Aegilops
18	マツ属複維管束亜属	Pinus subgen.Diploxylon
19	マツ属複維管束亜属	Pinus subgen.Diploxylon
20	散孔材	Diffuse-porous wood
21	コナラ属クヌギ節	Quercus sect.Aegilops
22	クリ	Castanea crenata Sieb.et Zucc.
23	クスノキ科	Lauraceae
24	ヤブツバキ	Camellia japonica Linn.
25	マツ属複維管束亜属	Pinus subgen.Diploxylon
26	コナラ属クヌギ節	Quercus sect.Aegilops
27	ブナ科	Fagaceae
28	シャシャンボ	Vaccinium bracteatum Thunb.
29	コナラ属クヌギ節	Quercus sect.Aegilops
30	コナラ属クヌギ節	Quercus sect.Aegilops
31	ヤナギ属	Salix
32	クリ	Castanea crenata Sieb.et Zucc.
33	サカキ	Cleyera japonica Thunb.
34	コナラ属クヌギ節	Quercus sect.Aegilops
35	散孔材	Diffuse-porous wood
36	ツブラジイ	Castanopsis cuspidata Schottky
37	シイ属	Castanopsis
38	ツブラジイ	Castanopsis cuspidata Schottky
39	ツブラジイ	Castanopsis cuspidata Schottky
40	ツブラジイ	Castanopsis cuspidata Schottky
41	ツブラジイ	Castanopsis cuspidata Schottky
42	ツブラジイ	Castanopsis cuspidata Schottky
43	ツブラジイ	Castanopsis cuspidata Schottky
44	クリ	Castanea crenata Sieb.et Zucc.
45	ツブラジイ	Castanopsis cuspidata Schottky
46	ブナ科	Fagaceae
47	シイ属	Castanopsis
48	シイ属	Castanopsis
49	ツブラジイ	Castanopsis cuspidata Schottky
50	ツブラジイ	Castanopsis cuspidata Schottky
51	ツブラジイ	Castanopsis cuspidata Schottky
52	クリ	Castanea crenata Sieb.et Zucc.
53	シイ属	Castanopsis

表73　弥生時代水田跡ＳＦ175大畦畔内杭材（2）

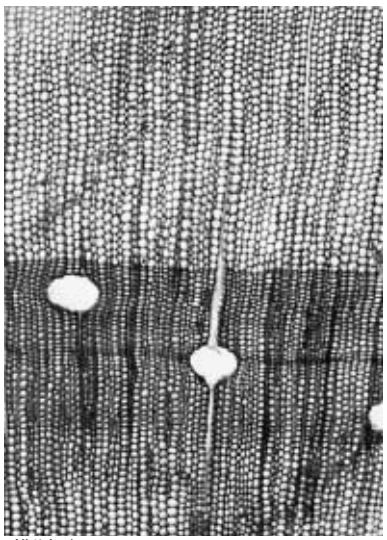
試料番号	樹　種　（和　名）	樹　種　（学　名）
54	クリ	Castanea crenata Sieb.et Zucc.
55	クリ	Castanea crenata Sieb.et Zucc.
56	クリ	Castanea crenata Sieb.et Zucc.
57	クリ	Castanea crenata Sieb.et Zucc.
58	シイ属	Castanopsis
59	クリ	Castanea crenata Sieb.et Zucc.
60	クリ	Castanea crenata Sieb.et Zucc.
61	クリ	Castanea crenata Sieb.et Zucc.
62	クリ	Castanea crenata Sieb.et Zucc.
63	クリ	Castanea crenata Sieb.et Zucc.
64	クリ	Castanea crenata Sieb.et Zucc.
65	クリ	Castanea crenata Sieb.et Zucc.
66	クリ	Castanea crenata Sieb.et Zucc.
67	クリ	Castanea crenata Sieb.et Zucc.
68	クリ	Castanea crenata Sieb.et Zucc.
69	散孔材	Diffuse-porous wood
70	クリ	Castanea crenata Sieb.et Zucc.
71	クリ	Castanea crenata Sieb.et Zucc.
72	ツブラジイ	Castanopsis cuspidata Schottky
73	クリ	Castanea crenata Sieb.et Zucc.
74	ツブラジイ	Castanopsis cuspidata Schottky
75	クリ	Castanea crenata Sieb.et Zucc.
76	クリ	Castanea crenata Sieb.et Zucc.
77	クリ	Castanea crenata Sieb.et Zucc.
78	クリ	Castanea crenata Sieb.et Zucc.
79	クリ	Castanea crenata Sieb.et Zucc.
80	クリ	Castanea crenata Sieb.et Zucc.
81	クリ	Castanea crenata Sieb.et Zucc.
82	ツブラジイ	Castanopsis cuspidata Schottky
83	クリ	Castanea crenata Sieb.et Zucc.
84	シイ属	Castanopsis
85	クリ	Castanea crenata Sieb.et Zucc.
86	クリ	Castanea crenata Sieb.et Zucc.
87	クリ	Castanea crenata Sieb.et Zucc.
88	クリ	Castanea crenata Sieb.et Zucc.
89	クリ	Castanea crenata Sieb.et Zucc.
90	クリ	Castanea crenata Sieb.et Zucc.
91	クリ	Castanea crenata Sieb.et Zucc.
92	クリ	Castanea crenata Sieb.et Zucc.
93	クリ	Castanea crenata Sieb.et Zucc.
94	クリ	Castanea crenata Sieb.et Zucc.
95	クリ	Castanea crenata Sieb.et Zucc.
96	クリ	Castanea crenata Sieb.et Zucc.
97	クリ	Castanea crenata Sieb.et Zucc.
98	クリ	Castanea crenata Sieb.et Zucc.
99	クリ	Castanea crenata Sieb.et Zucc.
100	クリ	Castanea crenata Sieb.et Zucc.
101	シイ属	Castanopsis
102	コナラ属クヌギ節	Quercus sect.Aegilops

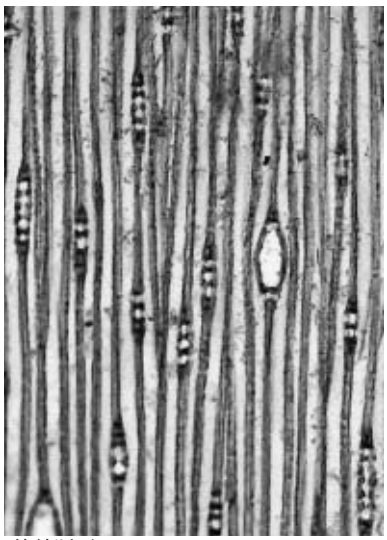
表74　弥生時代～古墳時代の木製品

試料番号	挿図－番号	器種	時代	樹　種　（和　名）	樹　種　（学　名）
1	164-2	平鍬	弥生	コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*
2	〃 -3	諸手鍬	弥生	コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*
3	〃 -4	諸手鍬	弥生	コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*
4	165-5	諸手鍬	弥生	コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*
5	〃 -6	諸手鍬未製品	弥生	樹皮	*bark*
6	166-8	又鍬	弥生	コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*
7	〃 -7	多又鍬	弥生	コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*
8	〃 -9	多又鍬	弥生	コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*
9	〃 -10	多又鍬	弥生	コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*
10	167-11	又鍬	弥生	コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*
11	〃 -12	三又鍬	弥生	コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*
12	〃 -13	三又鍬	弥生	コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*
13	〃 -14	多又鍬	弥生	コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*
14	168-15	又鍬	弥生	コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*
15	〃 -16	又鍬	弥生	コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*
16	〃 -17	三又鍬	弥生	コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*
17	〃 -18	多又鍬	弥生	コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*
18	〃 -19	多又鍬	弥生	コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*
19	169-20	二又鍬	弥生	コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*
20	〃 -21	又鍬	弥生	コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*
21	〃 -22	鋤	弥生	コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*
22	〃 -23	鋤	弥生	コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*
23	170-24	鋤	弥生	コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*
24	〃 -26	エブリ	弥生	クスノキ	*Cinnamomum camphora* Presl
25	171-27	ひしゃく？	弥生	イスノキ	*Distylium racemosum* Sieb.et Zucc.
26	〃 -28	容器	弥生	クリ	*Castanea crenata* Sieb.et Zucc.
27	172-30	斧柄	弥生	サカキ	*Cleyera japonica* Thunb.
28	〃 -32	使途不明	弥生	マキ属	*Podocarpus*
29	177-69	杭	弥生	サカキ	*Cleyera japonica* Thunb.
30	〃 -70	杭	弥生	サクラ属	*Prunus*
31	〃 -71	杭	弥生	散孔材	diffuse-porous wood
32	〃 -72	杭	弥生	マキ属	*Podocarpus*
33	178-79	矢板	弥生	クリ	*Castanea crenata* Sieb.et Zucc.
34	〃 -78	矢板	弥生	クリ	*Castanea crenata* Sieb.et Zucc.
35	189-1	二又鍬	古墳	コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*
36	〃 -2	二又鍬	古墳	コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*
37	〃 -3	二又鍬	古墳	コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*
38	〃 -4	二又鍬	古墳	コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*
39	190-5	二又鍬	古墳	コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*
40	〃 -6	二又鍬	古墳	コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*
41	〃 -7	二又鍬	古墳	コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*
42	〃 -8	二又鍬	古墳	コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*
43	191-9	二又鍬	古墳	コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*
44	〃 -10	二又鍬	古墳	コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*
45	〃 -11	鋤	弥生	コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*
46	〃 -12	柄	古墳	チシャノキ属？	*Ehretia?*
47	192-13	匙	古墳	イヌガヤ	*Cephalotaxus harringtonia* K.Koch
48	〃 -14	容器	古墳	クスノキ	*Cinnamomum camphora* Presl
49	〃 -15	斧柄	古墳	サカキ	*Cleyera japonica* Thunb.
50	193-17	槌の子	古墳	アワブキ属	*Meliosma*
51	〃 -18	槌の子	古墳	ガマズミ属？	*Viburnum?*
52	〃 -20	使途不明	古墳	マツ属複維管束亜属	*Pinus* subgen. *Diploxylon*
53	〃 -19	はしご	古墳	クマシデ属イヌシデ節	*Carpinus* sect. *Carpinus*
54	196-32	柱	古墳	サカキ	*Cleyera japonica* Thunb.
55	104-5	槌の子	古墳	ヤブツバキ	*Camellia japonica* Linn.
56	89 -9	斧柄	古墳	サカキ	*Cleyera japonica* Thunb.
57	〃 -11	杵	古墳	ヤブツバキ	*Camellia japonica* Linn.
58	124-2	紡錘車	古墳	コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*
59	〃 -1	フォーク状	古墳	コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*

表75　古墳時代中期前半の掘立柱建物・柱根

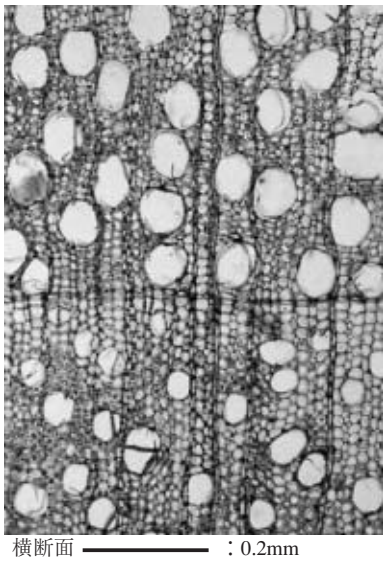
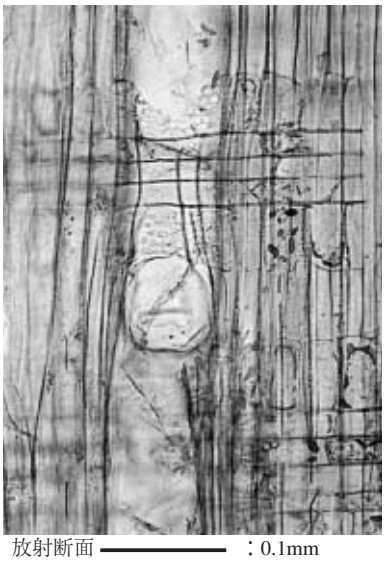
試料番号	出土遺構	種別	樹種（和名）	樹種（学名）
1	SB123　P1	柱痕	ニレ属	*Ulmus*
2	SB123　P3	柱痕	アカマツ	*Pinus densiflora* Sieb. et Zucc.
3	SB123　P4	柱痕	アカマツ	*Pinus densiflora* Sieb. et Zucc.
4	SB123　P5	柱痕	アカマツ	*Pinus densiflora* Sieb. et Zucc.
5	SB123　P6	柱痕	アカマツ	*Pinus densiflora* Sieb. et Zucc.
6	SB136　P1	柱痕	クリ	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.
7	SB136　P2	柱痕	クリ	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.
8	SB136　P3	柱痕	クリ	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.
9	SB136　P4	柱痕	クリ	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.
10	SB137　P1	柱痕	コナラ属クヌギ節	*Quercus* sect. *Aegilops*
11	SB137　P2	柱痕	コナラ属クヌギ節	*Quercus* sect. *Aegilops*
12	SB137　P3	柱痕	コナラ属クヌギ節	*Quercus* sect. *Aegilops*
13	SB137　P4	柱痕	コナラ属クヌギ節	*Quercus* sect. *Aegilops*
14	SB140　P1	柱痕	ホルトノキ属	*Elaeocarpus*
15	SB140　P2	柱痕	ヤブツバキ	*Camellia japonica* Linn.
16	SB140　P3	柱痕	ヤブツバキ	*Camellia japonica* Linn.
17	SB253　P3	柱痕	ヤブツバキ	*Camellia japonica* Linn.
18	SB253　P4	柱痕	ヤブツバキ	*Camellia japonica* Linn.
19	SB254　P1	柱痕	ヤブツバキ	*Camellia japonica* Linn.
20	SB254　P3	柱痕	ヤブツバキ	*Camellia japonica* Linn.
21	SB254　P4	柱痕	ヤブツバキ	*Camellia japonica* Linn.
22	SB255　P2	柱痕	アワブキ属	*Meliosma*
23	SB255　P3	柱痕	アワブキ属	*Meliosma*
24	P1034(SB141)	柱痕	ツブラジイ	*Castanopsis cuspidata* Schottky
25	P1037(SB141)	柱痕	クリ	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.
26	P2164(G-6)	柱痕	クリ	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.
27	P2165(G-6)	柱痕	環孔材	ring－popous wood
28	P2166(G-6)	柱痕	クリ	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.
29	P2167(G-6)	柱痕	シイ属	*Castanopsis*
30	P2180(SB141)	柱痕	クリ	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.
31	P2187(G-6)	柱痕	クリ	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.





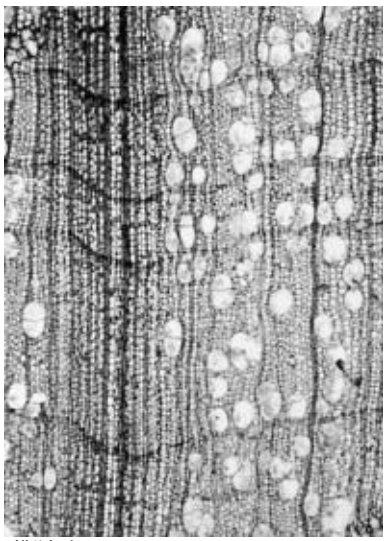
横断面 ：0.5mm　放射断面 ：0.05mm　接線断面 ：0.2mm

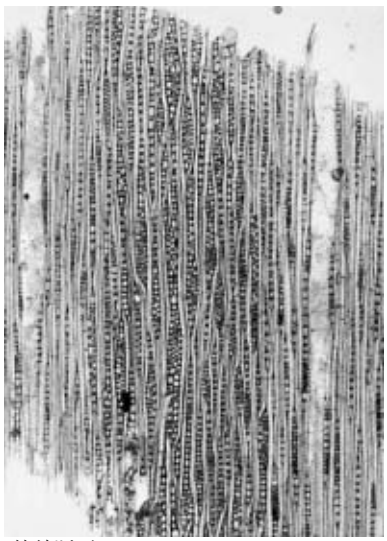
1. No.25　SF175　マツ属複維管束亜属

横断面 ：0.2mm　放射断面 ：0.1mm　接線断面 ：0.2mm

2. No.31　SF175　ヤナギ属





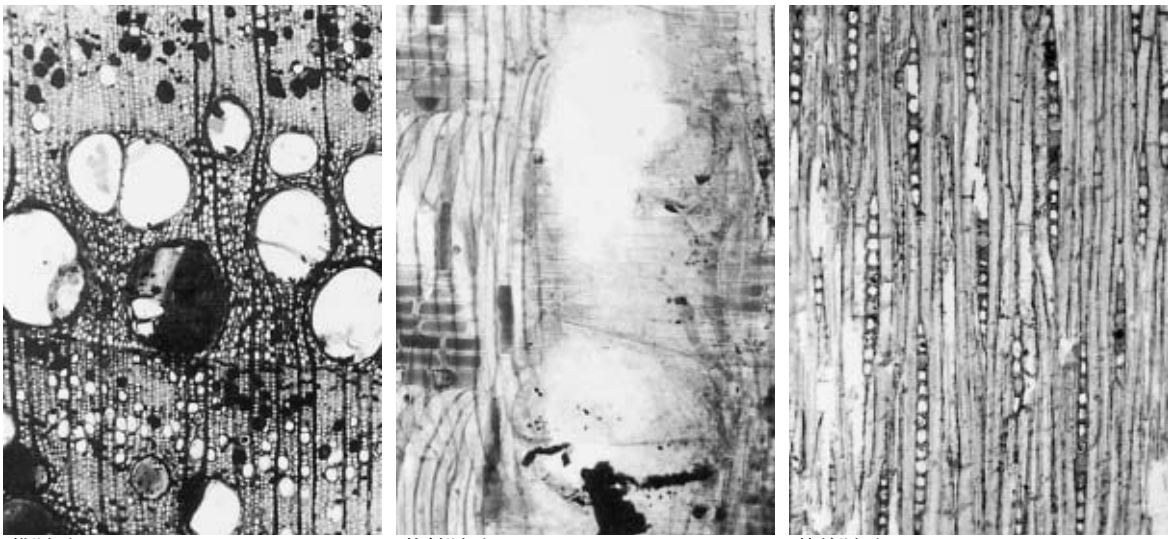
横断面 ：0.5mm　放射断面 ：0.2mm　接線断面 ：0.5mm

3. No.16　SF175　クマシデ属イヌシデ節

図210　弥生時代水田跡大畦畔内杭材顕微鏡写真１

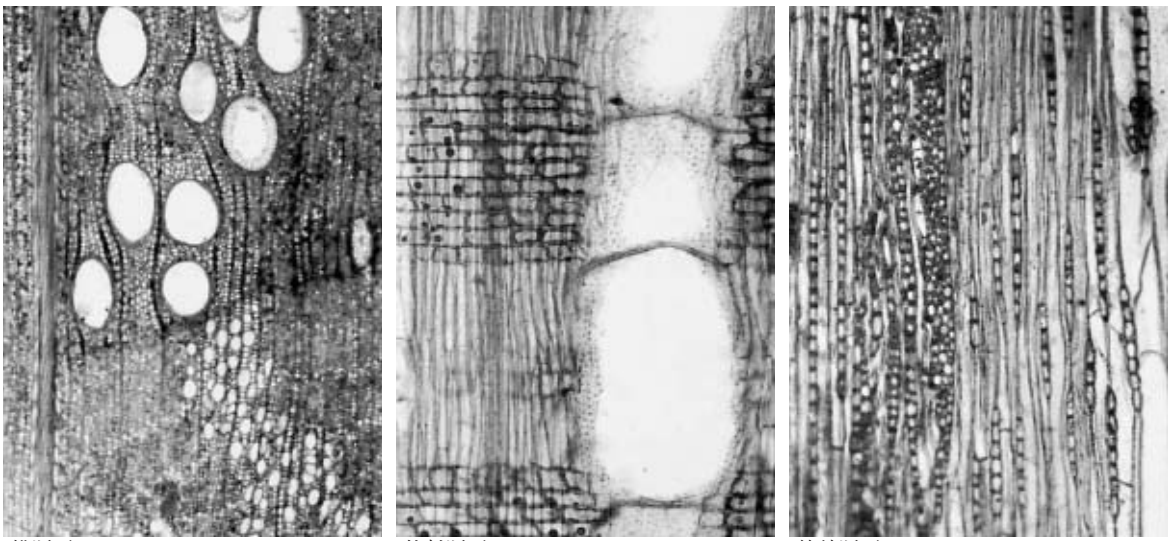
横断面 ：0.5mm　放射断面 ：0.2mm　接線断面 ：0.2mm

4. No.55　SF175　クリ



横断面 ：0.5mm　放射断面 ：0.2mm　接線断面 ：0.2mm

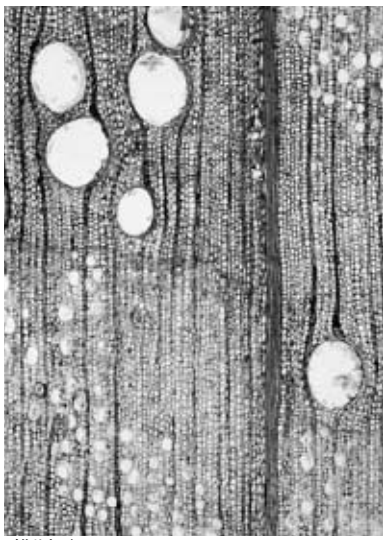
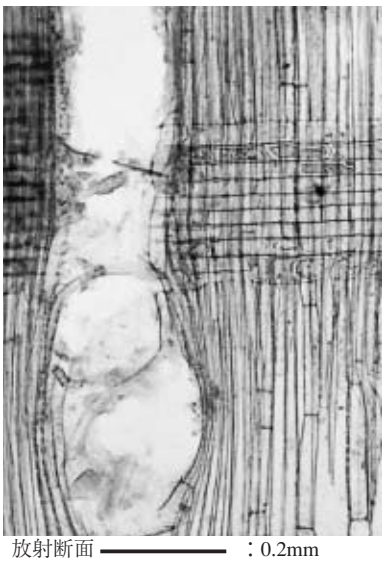
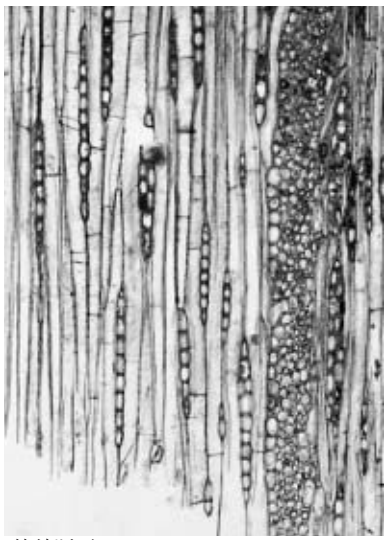
5. No.76　SF175　クリ



横断面 ：0.5mm　放射断面 ：0.2mm　接線断面 ：0.5mm

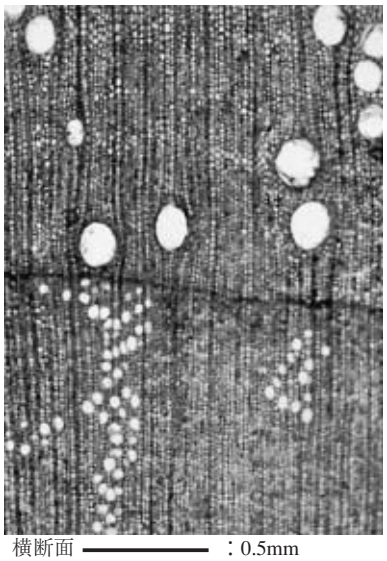
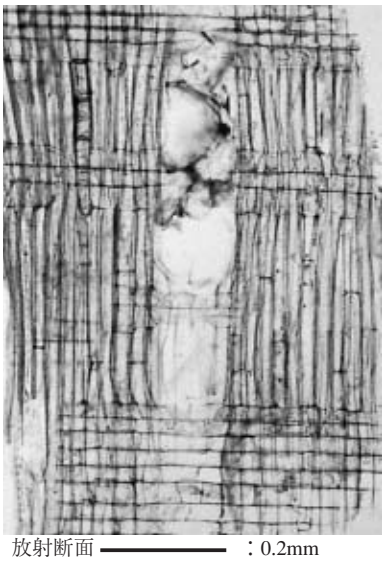
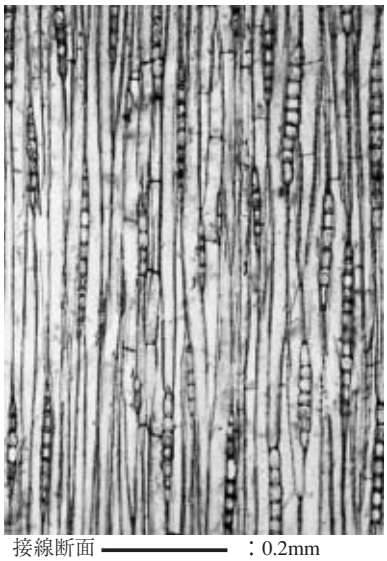
6. No.43　SF175　ツブラジイ

図211　弥生時代水田跡大畦畔内杭材顕微鏡写真２

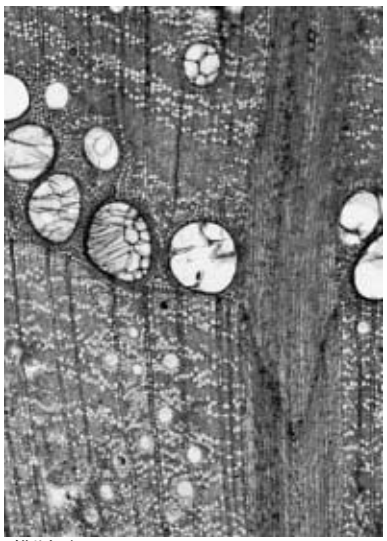
横断面 ：0.5mm　放射断面 ：0.2mm　接線断面 ：0.2mm

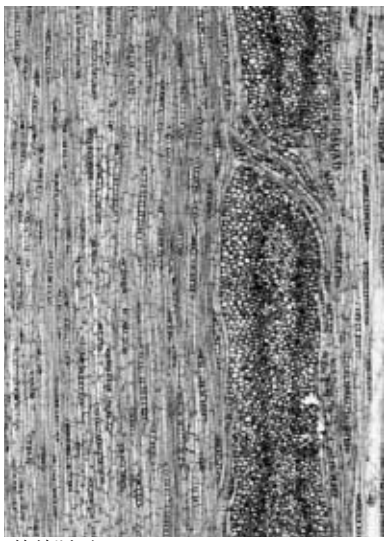
7. No.72　SF175　ツブラジイ

横断面 ：0.5mm　放射断面 ：0.2mm　接線断面 ：0.2mm

8. No.15　SF175　シイ属

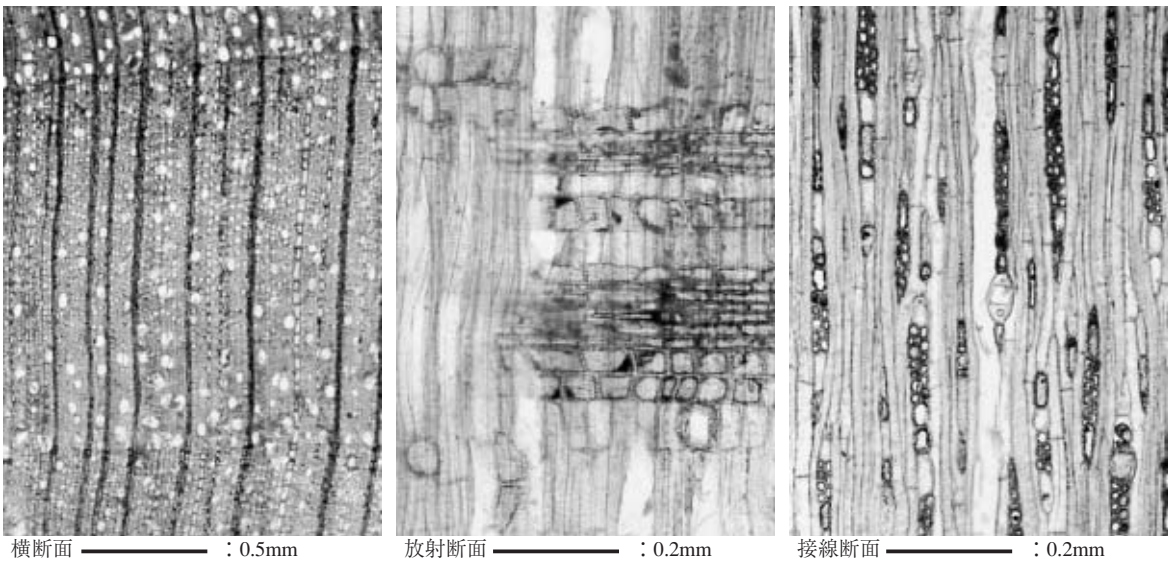




横断面 ：0.5mm　放射断面 ：0.2mm　接線断面 ：0.5mm

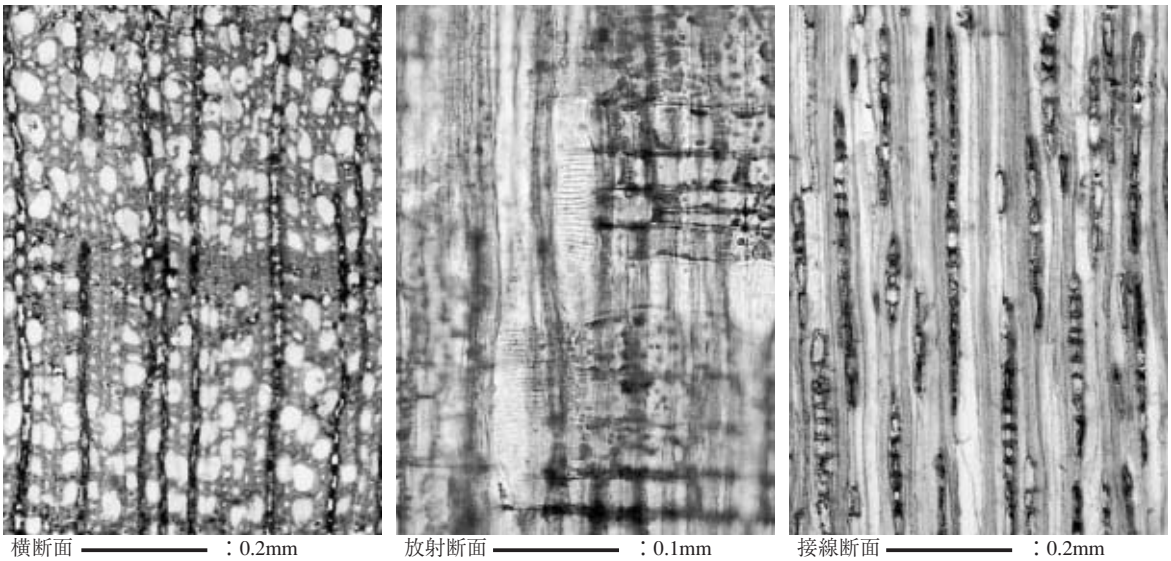
9. No.30　SF175　コナラ属クヌギ節

図212　弥生時代水田跡大畦畔内杭材顕微鏡写真３



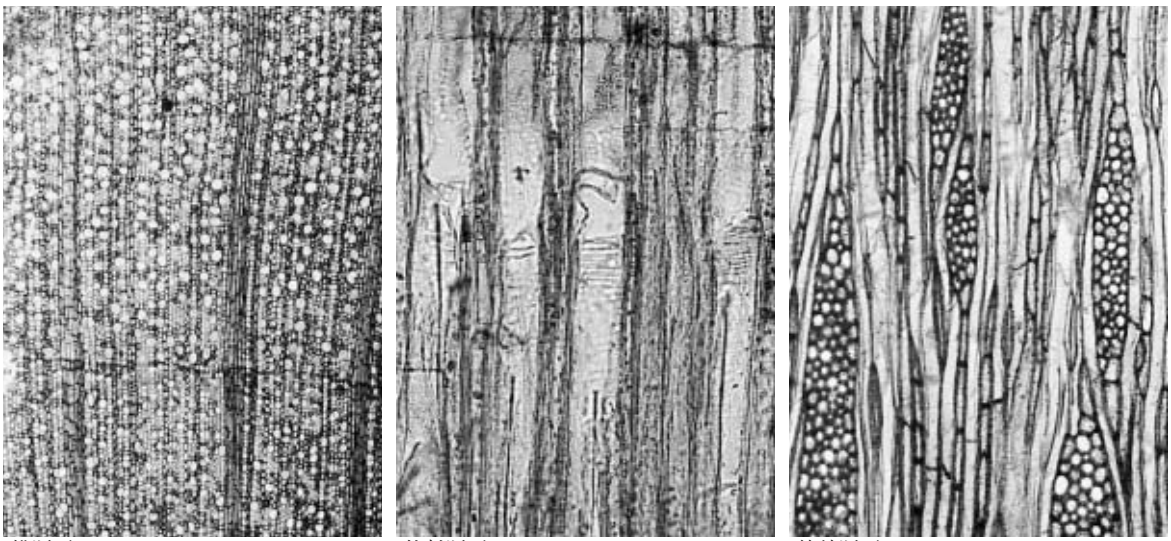
横断面 ：0.5mm　放射断面 ：0.2mm　接線断面 ：0.2mm

10. No.24　SF175　ヤブツバキ



横断面 ：0.2mm　放射断面 ：0.1mm　接線断面 ：0.2mm

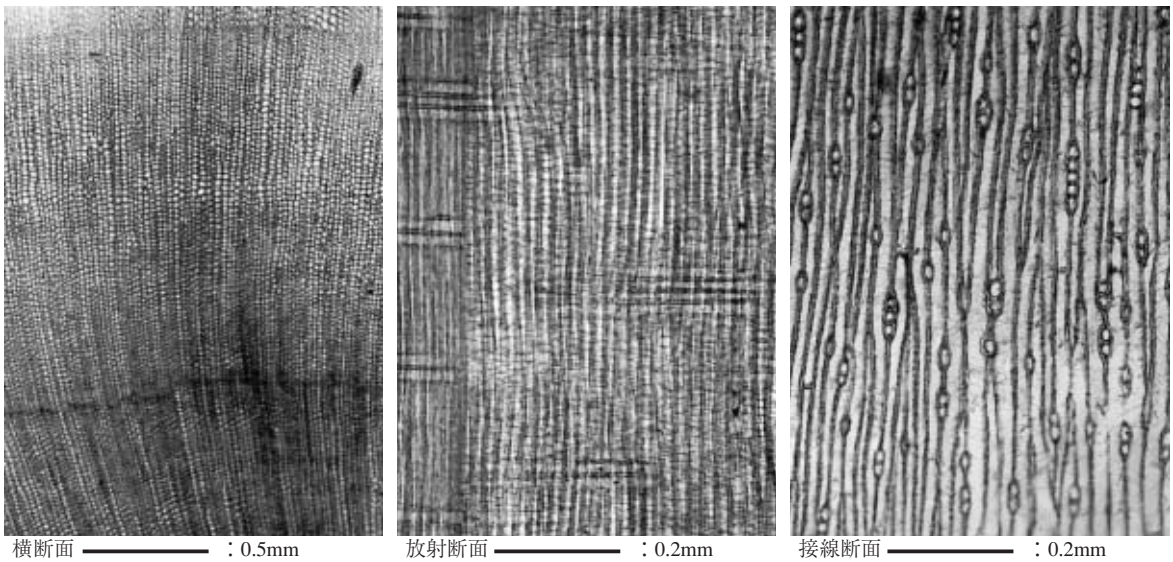
11. No.33　SF175　サカキ



横断面 ：0.5mm　放射断面 ：0.1mm　接線断面 ：0.2mm

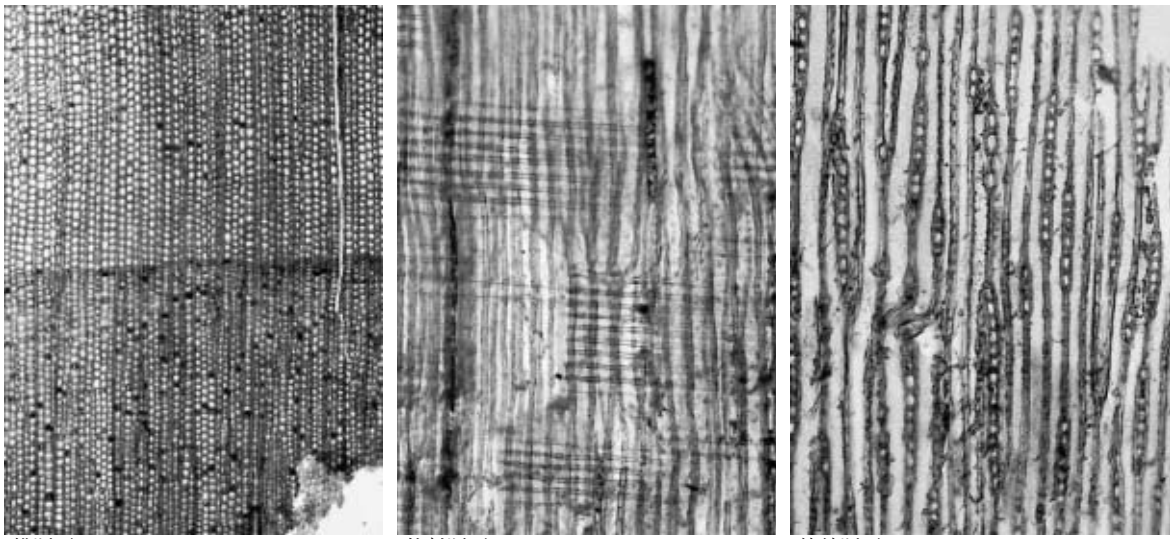
12. No.28　SF175　シャシャンボ

図213　弥生時代水田跡大畦畔内杭材顕微鏡写真４



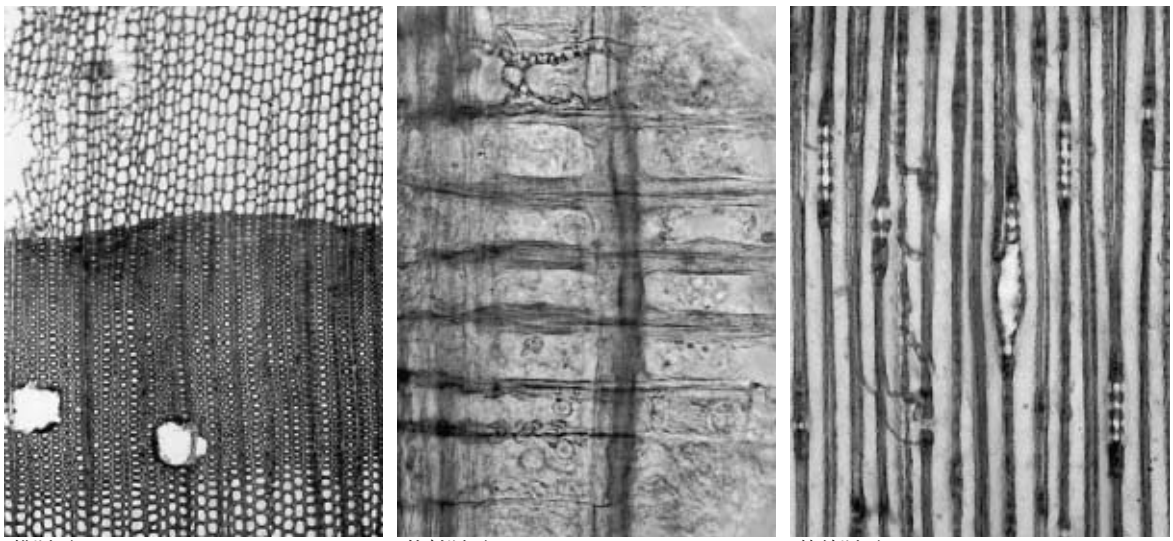
横断面 ：0.5mm　放射断面 ：0.2mm　接線断面 ：0.2mm

1．47　E-1　匙　イヌガヤ



横断面 ：0.5mm　放射断面 ：0.2mm　接線断面 ：0.2mm

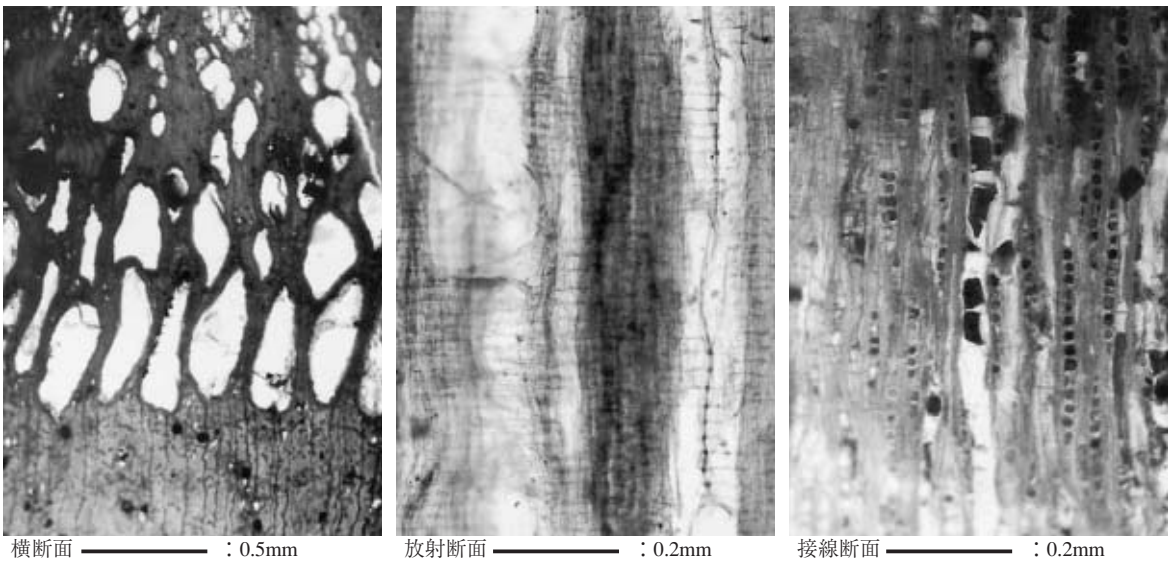
2．28　SD173-6　使途不明　マキ属



横断面 ：0.5mm　放射断面 ：0.2mm　接線断面 ：0.5mm

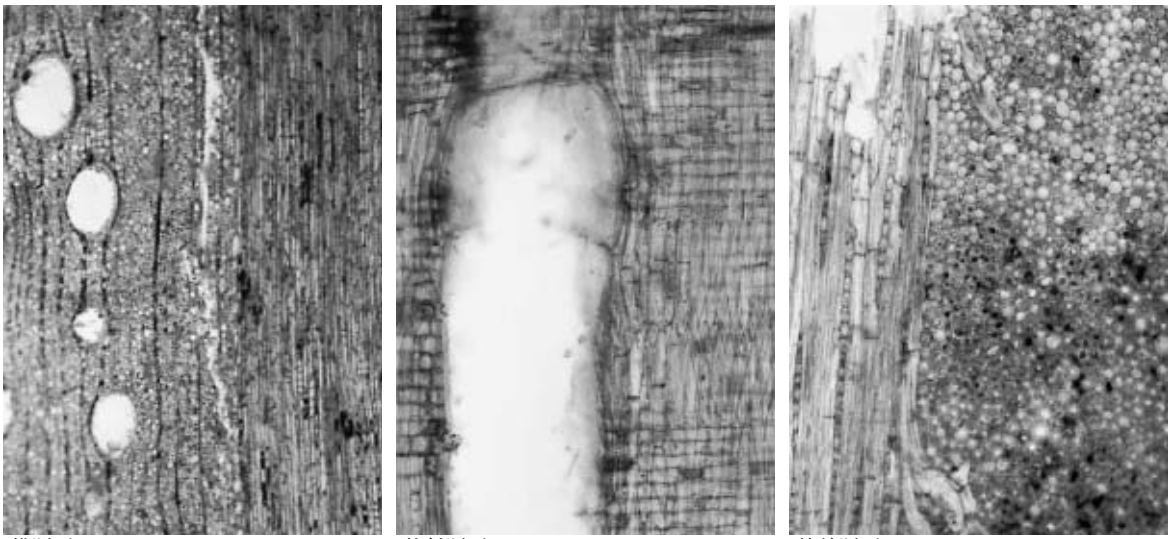
3．52　SD164-71　使途不明　マツ属複維管束亜属

図214　木製品木材顕微鏡写真１



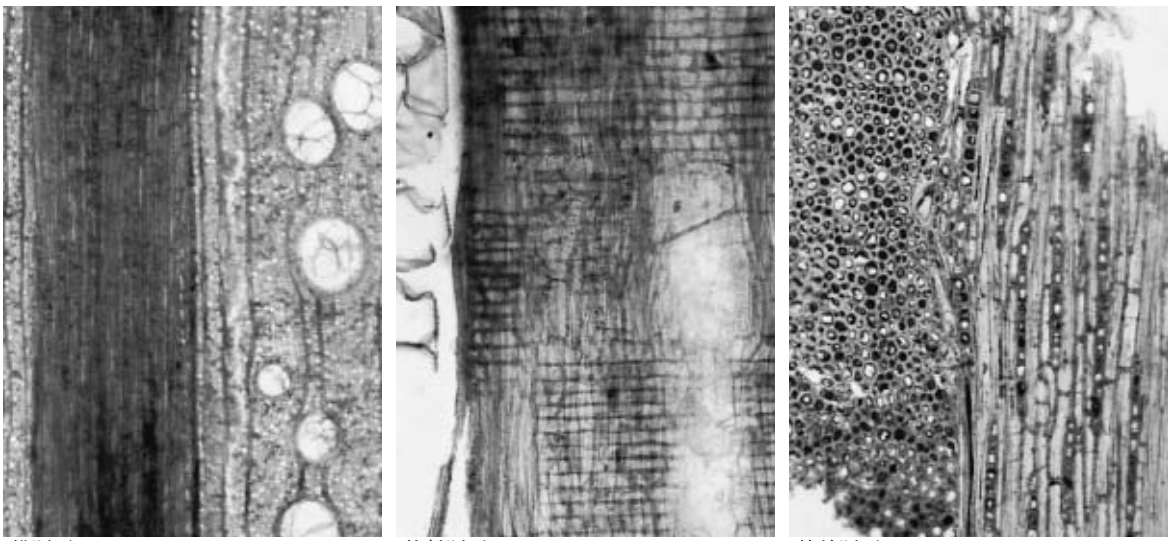
横断面 ：0.5mm　放射断面 ：0.2mm　接線断面 ：0.2mm

4．33　SD187　矢板　クリ



横断面 ：0.5mm　放射断面 ：0.2mm　接線断面 ：0.2mm

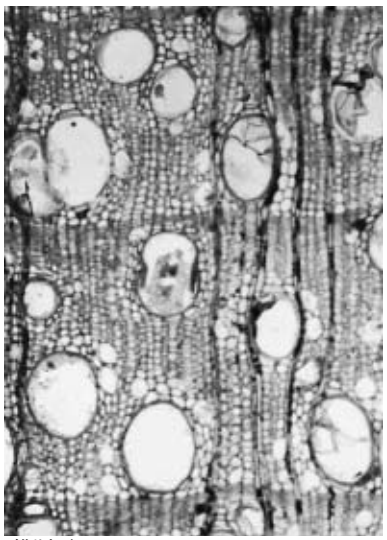
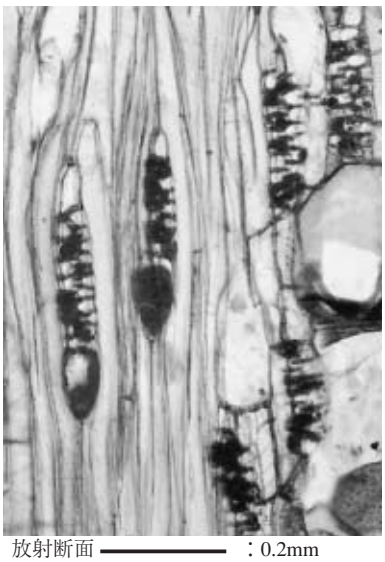
5．15　SD163-9　又鍬　コナラ属アカガシ亜属



横断面 ：0.5mm　放射断面 ：0.2mm　接線断面 ：0.2mm

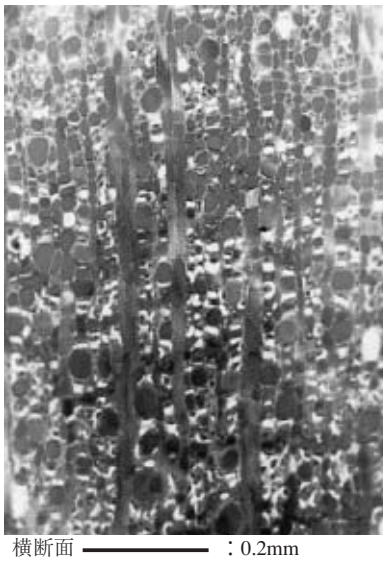
6．45　SD164-68　鋤　コナラ属アカガシ亜属

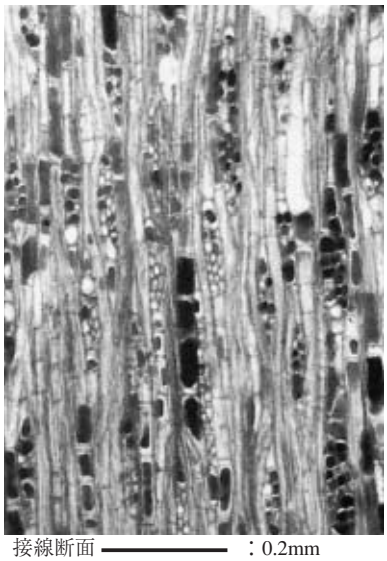
図215　木製品木材顕微鏡写真２

横断面 ―――― ：0.5mm　放射断面 ―――― ：0.2mm　接線断面 ―――― ：0.2mm

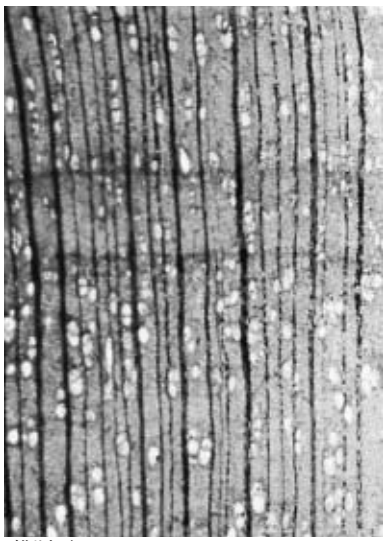
7．48　D-1　容器　クスノキ

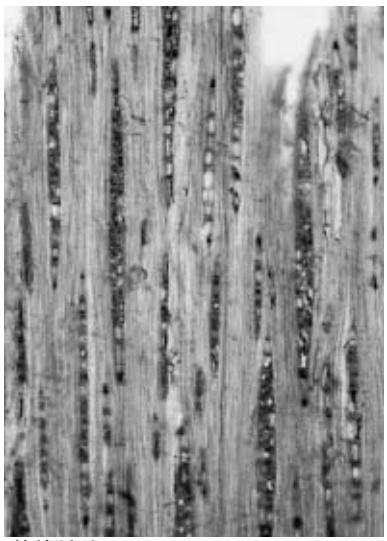




横断面 ―――― ：0.2mm　放射断面 ―――― ：0.2mm　接線断面 ―――― ：0.2mm

8．25　SD163-10　ひしゃく？　イスノキ

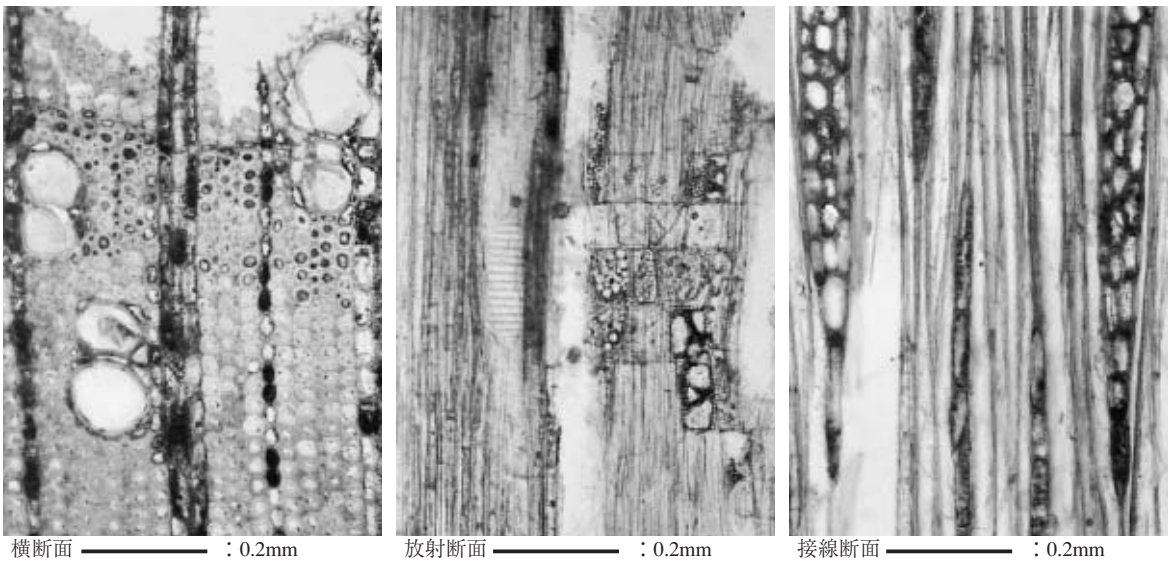




横断面 ―――― ：0.5mm　放射断面 ―――― ：0.2mm　接線断面 ―――― ：0.2mm

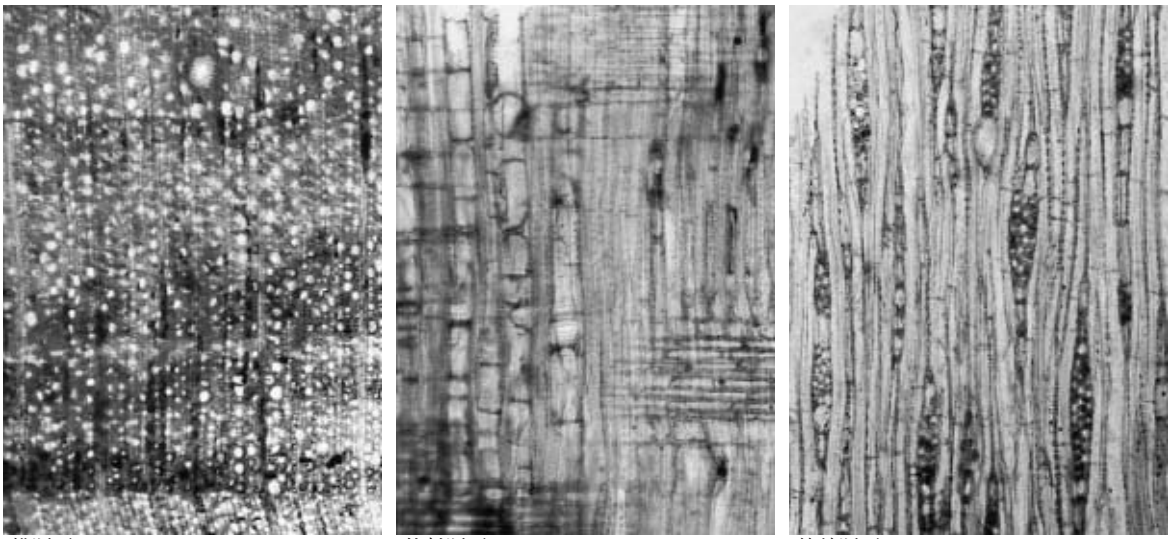
9．30　SF175　杭　サクラ属

図216　木製品木材顕微鏡写真３



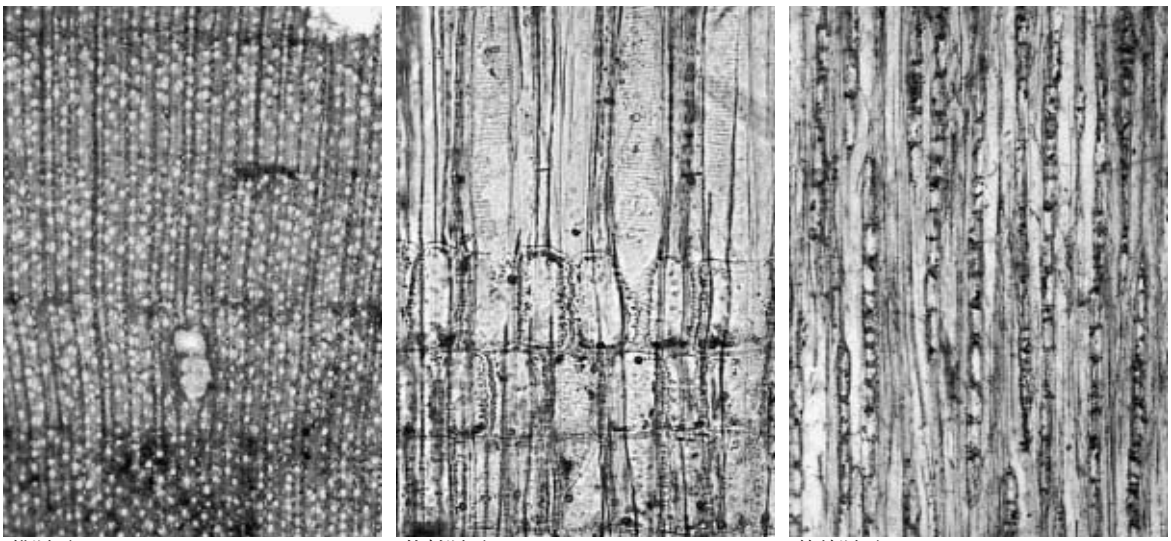
横断面 ：0.2mm　放射断面 ：0.2mm　接線断面 ：0.2mm

10．50　SD164下層　槌の子　アワブキ属



横断面 ：0.5mm　放射断面 ：0.2mm　接線断面 ：0.2mm

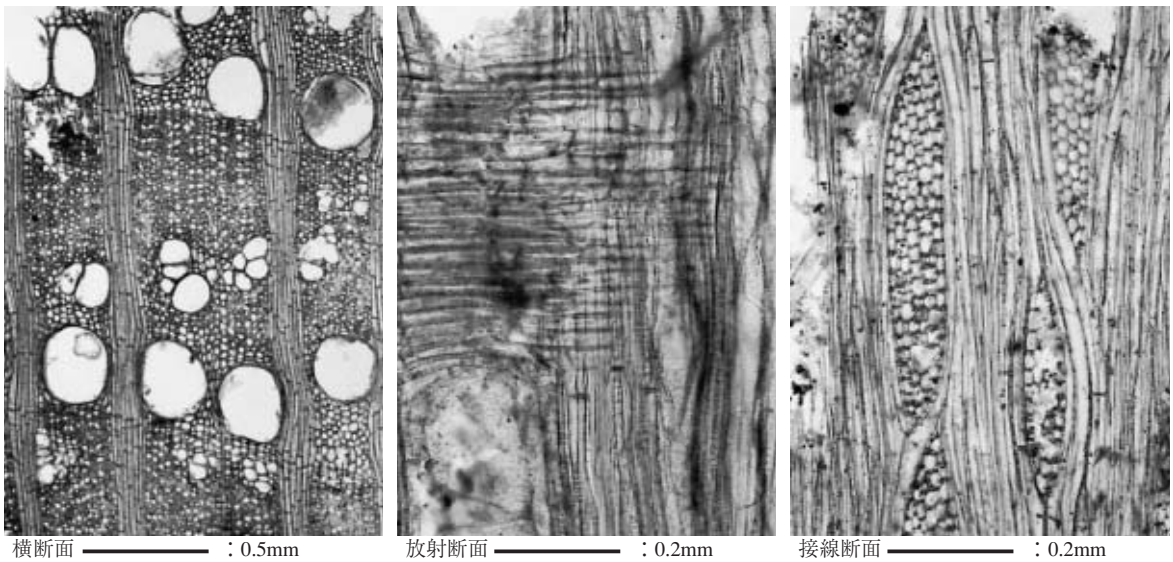
11．55　SK228　槌の子　ヤブツバキ



横断面 ：0.5mm　放射断面 ：0.1mm　接線断面 ：0.2mm

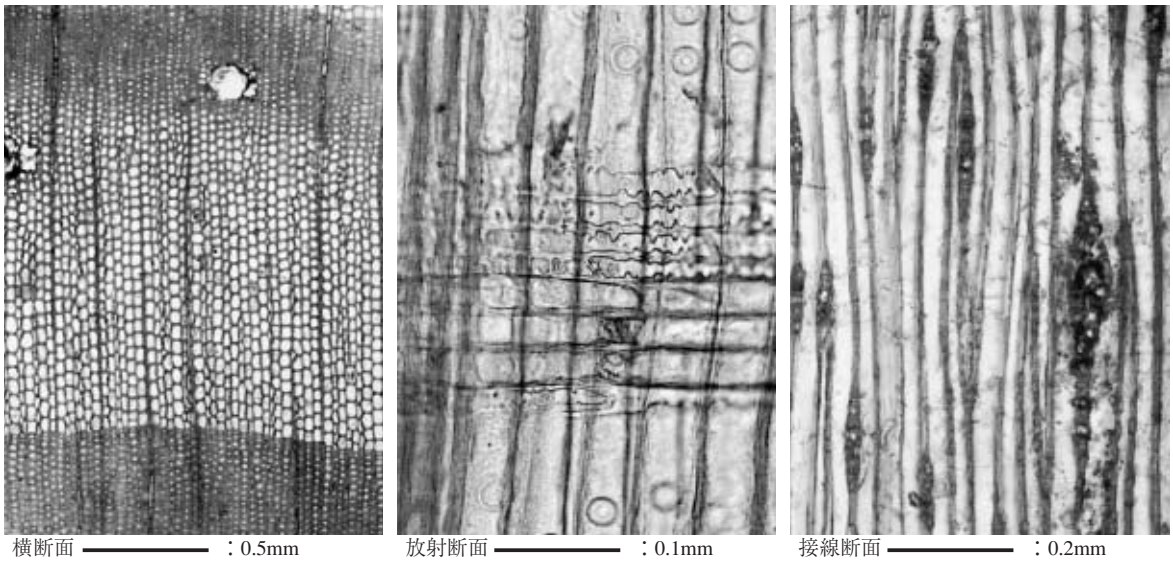
12．49　水田部　斧柄　サカキ

図217　木製品木材顕微鏡写真４



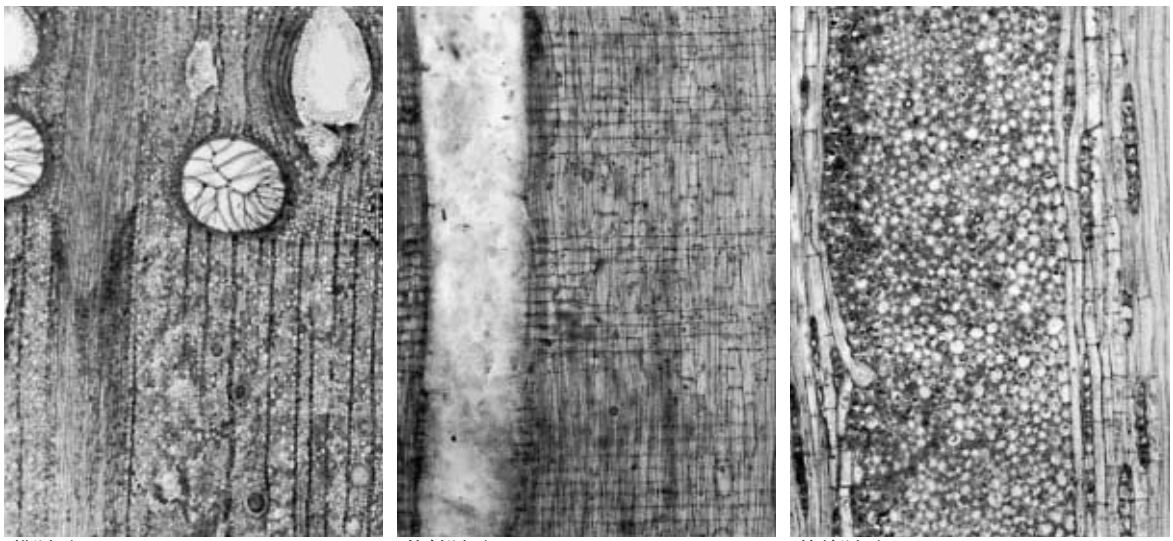
横断面 ：0.5mm　放射断面 ：0.2mm　接線断面 ：0.2mm

1．1　梅白遺跡　SB123 P1　柱痕　ニレ属



横断面 ：0.5mm　放射断面 ：0.1mm　接線断面 ：0.2mm

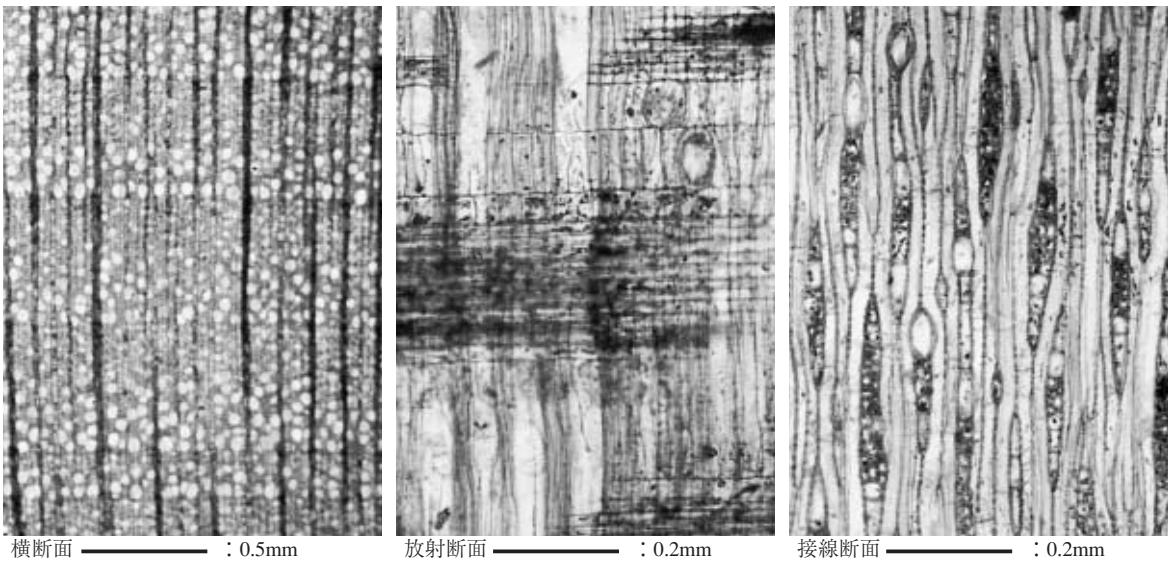
2．4　梅白遺跡　SB123 P5　柱痕　アカマツ



横断面 ：0.5mm　放射断面 ：0.2mm　接線断面 ：0.2mm

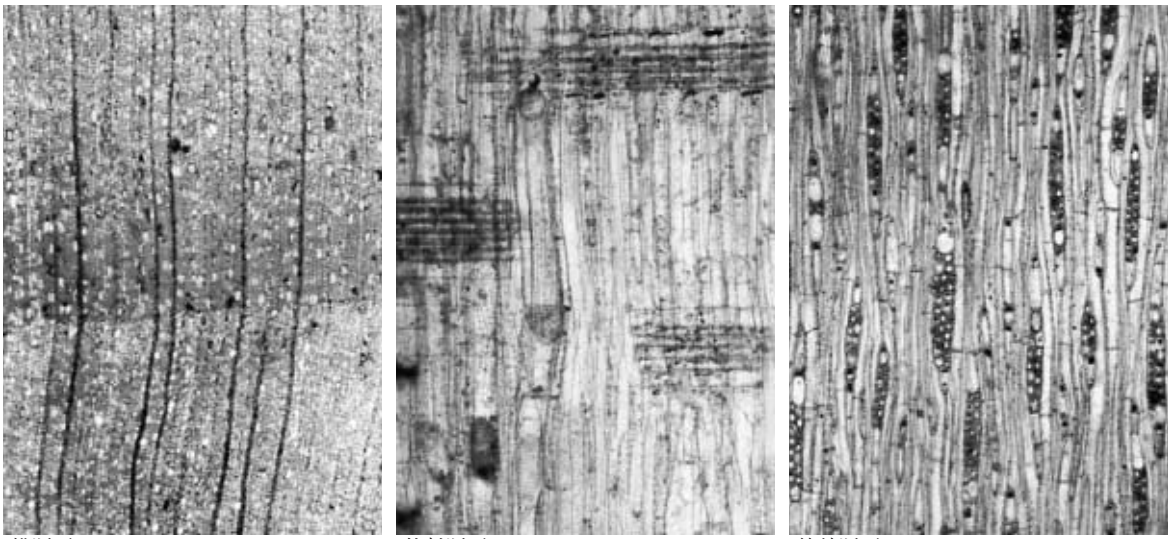
3．10　梅白遺跡　SB137 P1　柱痕　コナラ属クヌギ節

図218　掘立柱建物柱根材顕微鏡写真１



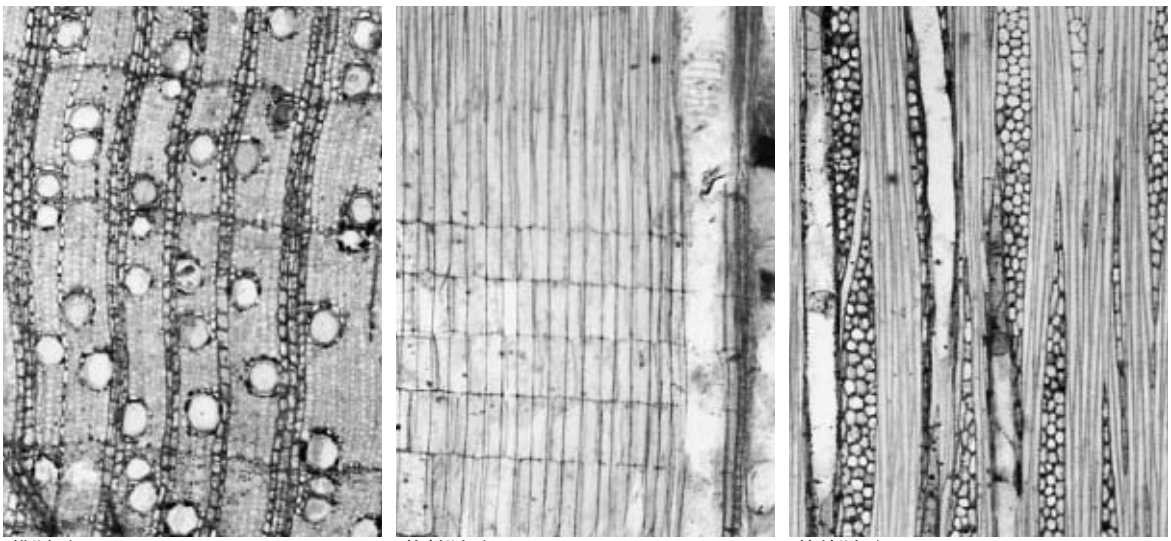
横断面 ：0.5mm　放射断面 ：0.2mm　接線断面 ：0.2mm

4．16　梅白遺跡　SB140 P3　柱痕　ヤブツバキ



横断面 ：0.5mm　放射断面 ：0.2mm　接線断面 ：0.2mm

5．18　梅白遺跡　SB253 P4　柱痕　ヤブツバキ



横断面 ：0.5mm　放射断面 ：0.2mm　接線断面 ：0.5mm

6．22　梅白遺跡　SB255 P2　柱痕　アワブキ属

図219　掘立柱建物柱根材顕微鏡写真２

６，梅白遺跡における種実同定　　古環境研究所

（１）はじめに

植物の種子や果実は、保存性が比較的高いものが多く、堆積物や遺構内に残存している場合がある。遺構内などから種実を検出し、その種類や構成を調べることで、過去の植生や栽培植物を明らかにすることができる。

（２）試料

試料は、弥生時代前期とされる貯蔵穴のSK182、SK185、SK186から出土した、水洗選別済み試料67点である。

（３）方法

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行った。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

（４）結果

同定の結果、試料65点はイチイガシ、コナラ属アカガシ亜属であった。他に、破片が認められた。学名、和名および個数を表に示し、分類群を写真に示す。以下に同定根拠となる形態特徴を記す。

〔樹木〕

イチイガシ　*Quercus gilva Blume*　殻斗・堅果　ブナ科

黒褐色で楕円形を呈し、先端に明瞭な花柱を持つ。

殻斗は輪状紋をもち基部から先端に向かって直線的な椀状を呈する。

コナラ属アカガシ亜属　*Quercus subgen. Cyclobalanopsis* 殻斗・堅果 ブナ科

黒褐色で楕円形を呈する。殻斗は黒褐色でゆるやかな椀状を呈し、輪状紋がある。アカガシないしシラカシの類であろう。殻斗の欠落するものが多い。花柱の先端の保存が悪いものも一括した。

（５）所見

分析の結果、弥生時代前期とされる貯蔵穴から出土した種実は、イチイガシおよびコナラ属アカガシ亜属と同定された。これらの樹木は、温帯下部の暖温帯に分布する照葉樹林の主要高木であり、イチイガシは自然度の高い沖積平野の肥沃な適潤地に生育している。イチイガシの堅果は渋抜きなしで食用になり、コナラ属アカガシ亜属の堅果は渋抜きをすれば食用になる。

参考文献

南木睦彦（1992）低湿地遺跡の種実．月刊考古学ジャーナル№355，ニューサイエンス社，p.18-22.
南木睦彦（1993）葉・果実・種子．日本第四紀学会編，第四紀試料分析法，東京大学出版会，p.276-283.
渡辺誠（1975）縄文時代の植物食．雄山閣，187p.

表76　梅白遺跡における種実同定結果

分類群			SK182,SK185,SK186
学名	和名	部位	（弥生時代前期貯蔵穴）
Arbor	樹木		
Quercus gilva Blume	イチイガシ	殻斗・堅果	2
		殻斗	4
Quercus subgen. Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属	殻斗・堅果	8
		堅果	38
		1/2堅果	13
		破片	＋
Total	合計		65

1. イチイガシ殻斗・堅果

2. イチイガシ殻斗・堅果

3. イチイガシ堅果

4. イチイガシ堅果

5. コナラ属アカガシ亜属殻斗・堅果

6. コナラ属アカガシ亜属殻斗・堅果

7. コナラ属アカガシ亜属殻斗・堅果

8. コナラ属アカガシ亜属殻斗・堅果

9. コナラ属アカガシ亜属堅果

10. コナラ属アカガシ亜属堅果

11. コナラ属アカガシ亜属堅果

12. コナラ属アカガシ亜属堅果

━ 1.0mm

図220　種 実 写 真

テント生活も楽しいな

まえとうしろ

田植えしたのは私達です

Ⅶ，考　察

古墳時代土師器の器種・形式・型式分類

1，器種・形式・型式分類の方法

器種・形式・型式分類するにあたり分類の属性を１次形式～４次形式と設定した。１次形式は器種、２次形式・３次形式は器形・法量・形態要素（大別形式・細別形式）、４次形式は各部の成形・調整方法により分類した。型式名はアルファベット・ローマ数字・算用数字で表記し、その組み合わせで型式名を表した。下記に形式とその属性と表記例を記す。また、器種、器形によって法量と大別形式が前後するものがある。

１次形式	２次形式		３次形式	４次形式
器種	器形	法量	形態要素	各部の成形手法
			大別形式　細別形式	

例）甕　Ａ　Ⅰ　１　①　ａ
　　器形法量 大別細別成形

＊　器種、器形によって法量と大別形式が前後するものがある。

例）二重口縁壺１Ⅰａ

2，分類表

各器種ごとの分類表・分類図を下記に示す。

表77　甕分類表

器種	２次形式	３次形式	４次形式
甕	A 丸底で口縁部成形技法A Ⅰ口径 14 ～ 16.5cm 器高 22.5 ～ 24cm ＊規格性あり Ⅱ口径 16 ～ 23cm 器高 24 ～ 27.5cm	１砲弾形胴部 胴径指数(胴径／器高) 0.9 以下。 ２球形胴部　胴径指数(胴径／器高) 0.9 以上。 ①口縁部が内湾。 ②口縁部が直線的。 ③口縁部が外反。 ④口縁部長が 4cm 以上で口縁部角度が 70°以上。	ａ肩部ヨコハケで端部は面とりあるいは内側に肥厚。 ｂ肩部タテハケでつくりは粗雑、端部は丸味をもつ。
	B 中型甕 口径 11 ～ 16cm 器高 11 ～ 22cm	１口縁部はやや長く外反する。 ２口縁部は短く外反する。	ａ器壁は薄く(5mm 以下)比較的丁寧なつくり。 ｂ器壁は厚く(5mm 以上)粗雑なつくり。

表78　壺分類表

器種	2次形式	3次形式	4次形式
壷	A広口壺	1口縁部の長さ6cm以上。 2口縁部の長さ4～6cm。 ＊2のなかには壷と甕の区別がつかないものがある。	a端部が面とりされる。肩部ヨコハケ。 b端部は丸味をもち、外反気味に屈曲する。
	B二重口縁壺	1二次口縁が傾くもの Ⅰ口径17～20cm、器高34cm前後 Ⅱ口径25cm前後 2二次口縁が直立するもの。 Ⅰ口径18cm前後、器高40cm前後 Ⅱ口径15cm前後	a二次口縁屈曲部はナデにより、断面三角形になる。つくりが全体的にシャープである。 b二次口縁屈曲部が退化する。または口縁端部が外反する。
		3口径10cm前後の小型品。例少ない。須恵器模倣も含む。	
	C小型丸底壺 口径あるいは器高が10cm以下の丸底壺。	1口径＞器高 2口径＜器高 ①口径≧胴径 ②口径＜胴径 ③②のうち口縁部が直立するもの。	a外面ヨコハケおよびナデを多用。 b外面タテハケを多用。
	D小型広口壺 口径が10cm～15cm、器高は10cm～18cm。	1口径＞器高 2口径＜器高 ①肩部のくびれが強く内面の稜あり。 ②肩部のくびれが弱く内面の稜も弱い。	
	E中型広口壺 口径15cm以上、器高18cm以上。		
	F直口壺 Ⅰ大型口縁部長6cm以上		
	Ⅱ小型　口径＜器高で口縁部長指数(口縁部長／器高×10)が2.4以上	1口縁部がわずかに外反。 2口縁部が強く外反。	

表79　高杯分類表

器種	2次形式	3次形式	4次形式
高杯	A杯部、脚部ともに屈曲 Ⅰ 口 径　15 ～ 21cm 　器 高　11 ～ 16cm Ⅱ口径 22cm 以上	1脚部内側全面へラケズリにより器壁薄い。長脚。器高は 15cm 以上が多い。 2脚部の器壁はやや厚く、太い。 3脚部はラッパ状に開き裾部近くで外反。内側に稜がつく。 ①杯口縁部は直線的。 ②杯口縁部は直線的、端部で外反する。 ③杯口縁部は外反する。 ④杯口縁部は内湾し端部で外反する。	a 杯部外面の稜をナデ消す。 b 杯部外面の稜が残る。
	B杯部は屈曲し脚部はラッパ状に開く。	⑤杯口縁部は内湾する。 ⑥杯部は深く口縁部は内湾する。 ⑦杯部は深く口縁部は内湾し端部は外反する。 ①′ 杯部の深さ、浅い 5cm 以内。 ②′ 杯部の深さ、深い 5cm 以上。	

表80　鉢分類表

器種	2次形式	3次形式	4次形式
鉢	A素口縁	1浅鉢　口径≧器高 2深鉢　口径＜器高 ①口縁部が逆八の字形に開く。 ②口縁部が直立するか内湾する。	
	B屈曲口縁	1浅鉢　口径＞器高 2深鉢　口径≦器高 ①口縁部外反。 ②口縁部直立。	

表81　椀分類表

器種	2次形式	3次形式	4次形式
椀	Ⅰ 口 径　13 ～ 16cm 　器高 4 ～ 7cm Ⅱ 口 径　10 ～ 13cm	1口縁端部を上方につまみあげる。 2口縁端部はわずかに外反。 3口縁部で屈曲し外反する。 4口縁部は内湾するものまたは素口縁。 5素口縁で平底。	

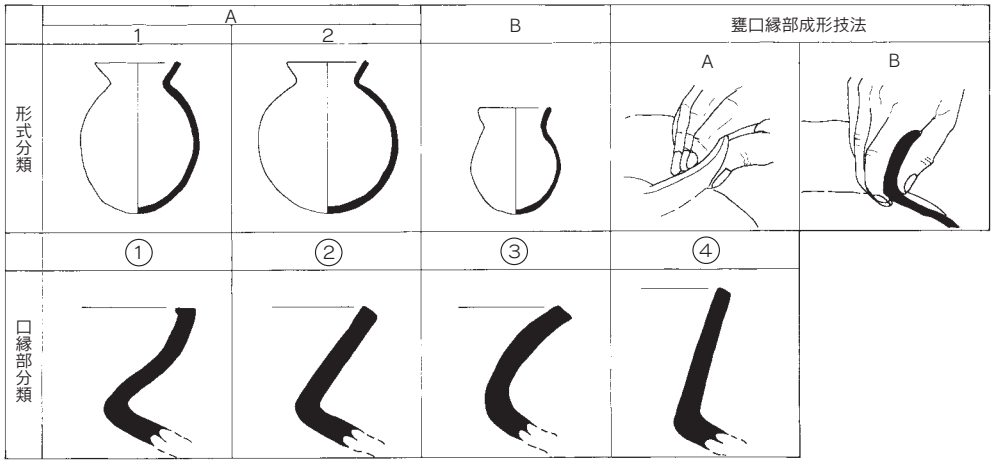


図221　甕形式分類図

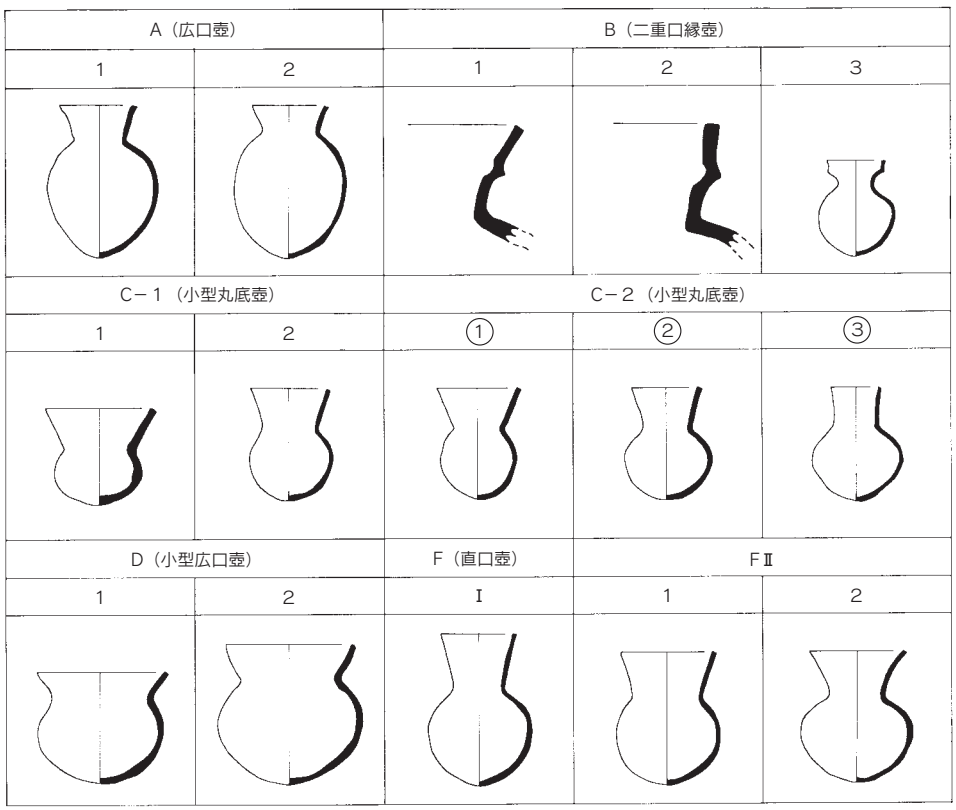


図222　壺形式分類図

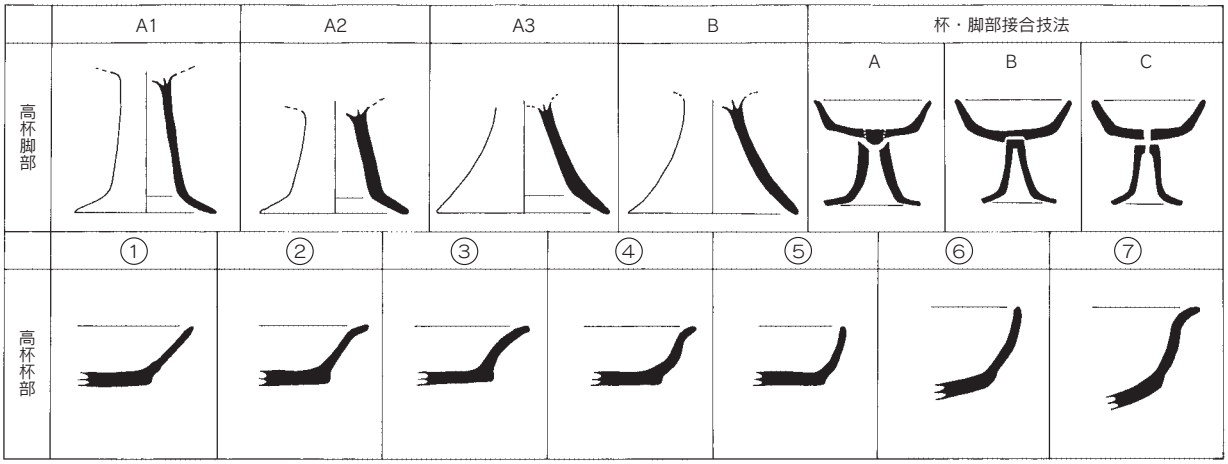


図223　高杯形式分類図

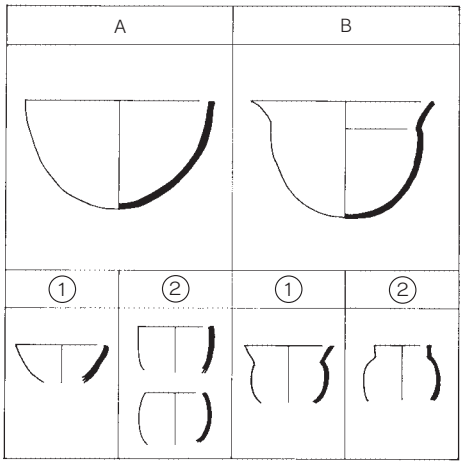


図224　鉢A,B形式分類図

表82　ＳＨ104高杯脚部形式分類表

	1	2	3
A		1,2,3,4,5,6	
B	7		

表83　ＳＨ104高杯杯部形式分類表

	a	b
①	2	7
②		3,5
③		1
④		4

表84　ＳＨ121甕Ａ・体部形式分類表

	1　砲弾胴部	2　球形胴部
Ⅰ 小型	7	
Ⅱ 大型	5,6	1,2,4,5

表85　ＳＨ121甕Ａ・口縁部形態・体部調整分類表

	a	b
① 内椀	1	2
② 直線	7,9	5,6,8
③ 外反		
④ ?		

表86　ＳＨ121鉢形式分類表

	1	2	①	②
A	32,33,34,35 37,38	36,39,41	32,33,34 35	36,37,38 39,41
B	30,31,40		30,31,40	

表87　ＳＨ121高杯・杯部形式分類表

	a	b
①	21	19
②		15,17,18
③		20

表88　ＳＨ121高杯・脚部形式分類表

	1	2	3
A		15,16 22,23	25,27
B	24,　26		

表89　ＳＨ125小型丸底壺形式分類表

	①	②	③
1	7		
2		8	9,10

表90　ＳＤ115・甕Ａ分類表

		法　　量		胴部形態		細部成形・調整	
		Ⅰ	Ⅱ	1	2（球胴）	a	b
口縁部形態	①	2,12,16	1,7,8	7,8,12,16		1,7,8	12,18
	②	6,11,13 14,18	3,9,15,17 19,20,22 24,25	3,9,11,14 17,18,19 22,24,25	6,13,15 20	2,3,5,6	9,11,13,14 15,17,18 19,20,22 23,24,25
	③		4,5,21,23	21,23	4,5		4,21
	④		27,28	27	28		27,28,29 30

表91　ＳＤ115高杯脚部形式分類表

	1	2	3
A	68,69,70	71,72,83 84,85,86 87,88,91	
B	73,89,(90)		

表92　ＳＤ115高杯杯部形式分類表

	a	b
①	69,78	71,72,73 77,80
②		74,75
③	79,81	68,76
④		70

表93　ＳＤ115小型広口壺形式分類表

	3次形式		4次形式	
	①	②	a	b
1	56,57,60 66	58,67	56	57,58,60 66,67
2	63	59,61,62		59,61,62 63

表94　包含層・甕Ａ分類表

	Ⅰ	Ⅱ	1	2	a	b
①		1,3,5		5	1,3,5	
②	4,8,10,11 24,27,28	2,6,7,9 12,15,16 17,19,26	2,7,8,9 11,15,17 21,24,28	4,6,16	2,4,6,7,8 9,11,16,17 24,27,28	10,12,15 19,21,26
③		18,20,22 23,25,29	18,22,25 29		20,25	18,22,23 29
④						

表95　包含層・小型丸底壺形式分類表

	①	②	③	a	b
1	47,48,49		47,48,49		
2	50,53	51,52	54,55,56	50,54	51,52,53 55,56

表96　包含層・高杯脚部形式分類表

	1	2	3
A		71,75,76, 77,79,82	70,78,80 81
B	83,84,85		

表97　包含層・高杯杯部形式分類表

	a	b
①		88,92
②		89
③	87,91	
④		93

表98　包含層・鉢形式分類表

	1	2	①	②
A	96,97,98 102,103 104,105 106,107 115,116 117,118	111,112 114,119	97,115 116	96,98,102 103,104 105,106 107,111 112,114 117,118
B	95,108 110,120	100,109	108,109 110,120	95,100 101,99

表99　ＳＤ164甕Ａ・体部形式分類表

	1	2
Ⅰ	2,3,5	4,18
Ⅱ	8,9,14	1,11,17

表100　ＳＤ164甕Ａ・口縁部形態・体部調整分類表

	a	b
①	1,2	4
②	5,6,8	7,12,14
③		11,13
④		9,10

表101　ＳＤ164小型広口壺形式分類表

	①	②	a	b
1	37	38	37	38
2	39,52,53	40,41,42	39,53	40,41,42

表102　ＳＤ164鉢形式分類表

	1	2	①	②
A	60,61,62 63,64,68 69	67,70,71	60,61,62 63,68	64,67,69 70,71
B	59,65,66 73	72,74		

表103　ＳＤ164高杯脚部形式分類表

	1	2	3
A	95	96,97,99	
B	98		

表104　ＳＤ164高杯杯部・口縁部形式分類表

	a	b
①	79,80,81 83,90,91	82,85,89 93
②		84,88
③	92	77,78
④	86,87	

梅白遺跡出土土師器群の編年的位置づけ－梅白式の提唱－

小　松　　譲

１，はじめに

梅白遺跡では古墳時代中期の集落跡と水田跡を検出した。集落跡と水田跡はほぼ同時期であり、比較的短期間のうちに廃絶したことが判った。とくに、古墳時代の上層水田は植物遺体層であるコモ層に覆われて廃絶したために遺存状態がきわめて良好であった。コモ層は宇木川・半田川の周辺に広範囲に堆積していることがこれまでの確認調査によってわかっており、少なくとも梅白遺跡周辺では鍵層になりえる。

集落跡、水田跡からは多量の土器が出土しており、時期決定に有効な資料となった。そこで、本遺跡出土の土器群の編年的位置づけを行うことは集落跡や水田跡のみならず、コモ層堆積の時期にも言及することになり、今後の調査研究の進展を促すことになると考える。

ところで、当該時期の土師器の編年について筆者は試案を提出した（小松2002）。この試案をまとめるにあたり本遺跡出土の土器も分析の対象にし、編年案の中に位置づけてみた。そこで、本遺跡出土土師器群の時期を考える上で先に提出した編年試案を基にしたものとし、土器群の編年的位置づけを考えてみた。

２，研究史

小論をまとめるにあたり、やや長くなるが当該期の土師器編年の研究史について述べる。

北部九州における土師器の研究は古墳出現期の編年研究は盛んであるものの古墳時代を通じた土師器の編年的研究はなく個別遺跡出土資料を中心とした研究が中心である。弥生時代の終末と古墳時代の始まりや初現期の古墳に対する関心は古式土師器の編年研究へと向かい、九州においては80年代において各氏の編年案が提出されている。ところが須恵器出現期以降の土師器編年は個別遺跡出土の土器群の時期の位置づけ段階であり体系的な編年研究がなされていないのが現状である。以下、古式土師器をふくめて当該期の研究史をふりかえる。

60年代から70年代は福岡県において早良平野の宮の前遺跡や福岡平野の柏田遺跡の資料をもとに古式土師器の編年が緒についた段階であり、これらに後続する土器群の提示や個別遺跡の資料をもとに編年を組み立て各資料の併行関係を論じる段階であった。

武末（1977）は福岡県八女市室岡所在遺跡群出土の土師器の編年的位置づけを行っている。宮の前遺跡・柏田遺跡の編年案をうけて古式土師器を弥生土器の伝統が根強い第Ⅰ期、布留式の様相が圧倒し、小型丸底壺の口径が胴部最大径より大きくなる第Ⅱ期、複合口縁壺、小型器台がなくなり、小型丸底壺の口径が胴部最大径よりも小さくなる第Ⅲ期とした。柏田Ⅰ～Ⅳ期は第Ⅰ，Ⅱ期にあたり室岡遺跡群出土の土師器群は後続する第Ⅲ期にあたり、この段階では筑後地方ではじめてのまとまった資料であった。この第Ⅲ期を他地域の資料も参考にして高杯の形態変化に着目してＡ・Ｂ・Ｃの３期に細分し各々の時期の代表的資料を示した。ⅢＡ期には原２号墳、竹ヶ本11号住居跡、有田25街区住居跡、ⅢＢ期には伊勢山Ⅲ区１号、黄金山古墳、立花貝塚ｂ群、ⅢＣ期には大曲り遺跡第３号住居跡をそれにあてた。八女市室岡所在の野口遺跡Ⅴ字溝下層、道添遺跡12～18号住居跡出土土師器群はⅢＡ期に属し５世紀前半であるとした。

井上裕弘（1978）は春日市門田遺跡６号住居跡出土土器群を柏田Ⅰ期→柏田Ⅱ期→柏田Ⅲ期→下原遺跡出土土器群に後続する資料で須恵器出現以前と位置づけている。この土器群は粗製の小型丸底壺、胴部最大径を下位にもつ甕、高杯は脚部がラッパ状に開いたり、エンタシス状の脚柱部をもつものが出現している。

80年代前半になると資料にめぐまれた遺跡の調査が相次ぎ佐々木（1980，1984）井上（1983）らの編年案が提出される。また、橋口（1979，1983）は当該期の陶質土器の編年を論じ併行期の土師器群と実年代についてもふれている。この段階で、５世紀代の土師器については個別資料が集まり、土器群の変遷については追える段階にきていた。しかし個別資料を中心とした編年案であったために器種の欠落や型式学的検討は充分になされておらず、あくまでも基準資料を並べるという段階であった。

まず、佐々木(1980)は那珂川町今光遺跡や福岡平野、早良平野の当該時期の資料をもとに弥生時代終末期から須恵器出現併行期までをⅠ期からⅦ期に編年している。Ⅰ期は弥生時代終末期、Ⅱ期は庄内式併行期、Ⅲ期は布留式併行期でⅢ－１、Ⅲ－２、Ⅲ－３の小期に分かれⅢ－３は布留式新段階である。Ⅳ期は資料的には恵まれないが今光21号住居跡出土資料をあてた。これを井上(1978)が提示した下原遺跡出土資料と門田６号住居跡出土土器群の隙間を補充する資料として位置づけている。Ⅴ期は今光遺跡溝２出土土器群で門田６号住居跡出土土器群との併行関係を考えている。Ⅵ期は今光13号・17号住居跡出土土器群をあて、把手付甑が出現するなど煮沸形態に画期がある段階とした。Ⅶ期は安徳・中原遺跡５号住居跡出土土器群をあて初期須恵器出現期と併行するとしている。

井上(1983)は二丈町御床松原遺跡の資料をもとにⅠ期からⅥ期に編年している。Ⅴ期は15号住居跡出土土器をあてこの段階での須恵器生産の開始の可能性を考えている。Ⅵ期は器種に欠落があるものの甕と椀の型式差によりａとｂの二つの小期に細分している。Ⅵａ期は１、２、11号住居跡出土土器群を中心とし、中村編年Ⅰ－２、３段階に併行するとしている。Ⅵｂ期は47、55号住居跡出土土器を主体とする土器群で中村編年Ⅰ－３、４段階との併行を考えており、これに後続する土器群として福岡市蒲田遺跡Ｄ地区２号住居跡や須恵器が主体であるが須恵町乙植木２号墳をあげている。

これらの今光編年、御床松原編年をうけてさらに佐々木(1984)は那珂川町松木遺跡の資料をもとに松木編年を提示した。それはⅠ期からⅦ期に編年したものであるが布留式にあたるⅢ期の土器群は松木遺跡には欠落する。資料不足であった今光Ⅳ期をうめる土器群に37号住居跡出土土器群をあてⅣ期を設定し、御床松原Ⅴ期とも併行するとした。Ⅴ期は150街区２号、16号住居の土器群をあて、赤井手37号住居と併行し須恵器の生産が始まっている段階とした。Ⅵ期は150街区６号、９号、12号住居の土器群を指標とし中村Ⅰ－３段階と併行し、Ⅶ期は150街区３号、５号、13号住居と溝２の一部の土器群をあて中村Ⅰ－５段階併行期とした。この松木編年は資料不足であった今光Ⅳ期、Ⅵ期、Ⅶ期の土器群を補強することができ、ここに５世紀代の土師器編年案が提示できた。

このような今光編年、御床松原編年、松木編年などの５世紀代の土師器編年が提案されるなか、甘木市池の上墳墓、古寺墳墓群の調査により陶質土器・初期須恵器が出土しその編年作業が進展した。橋口達也(1979,1983)は両遺跡と周辺地域の資料をもとに池の上Ⅰ～Ⅳ式に編年し、併行関係にある土器群や今光編年との対応さらには実年代の比定をしている。池の上Ⅰ式は下原遺跡土器群・御床松原Ⅳ期の布留式新段階、池の上Ⅱ式は今光Ⅳ期・御床松原Ⅴ期と併行し４Ｃ末～５Ｃ初頭にあたる。つづく池の上Ⅲ式は赤井手43号住居跡土器群、今光Ⅴ期・中村Ⅰ－１段階に併行し５Ｃ前半の前葉に、池の上Ⅳ式は御床松原Ⅵ期・中村Ⅰ－２～３段階に併行し５Ｃ前半後葉に併行するとした。

この他、柳田(1983)は陶質土器が出土した前原市三雲遺跡堺地区６号住居跡出土土器群について柳田編年(1982)のⅡｂ式に後続するⅢ式とし５世紀初頭に位置づけた。

80年代前半段階で弥生終末から古式土師器の編年が進むなか前述のとおり佐々木、井上、橋口らは、土器群を抽出する作業によって５世紀代までの編年案を提示した。土器群としては下原遺跡出土土器群→今光21号住居跡・松木37号住居跡・御床松原15号住居跡→今光溝２・松木２号住居跡・16号住居跡・

門田６号住居跡・赤井手43号住居→御床松原１号住居跡・２号住居跡・11号住居跡→松木６号住居跡・９号住居跡・12号住居跡→御床松原47号住居跡・55号住居跡→松木３号住居跡・５号住居跡・13号住居跡・溝２出土土器群となる。この編年のなかで注目された土器の変化として小型丸底壺の型式変化と消失、新型式の高杯の出現、単口縁で器高の浅い鉢の消失と椀の出現、把手付甑の出現などがあげられる。

80年代の当該期土器編年は個別遺跡出土土器群を編年する作業が中心であったが、古式土師器の編年は武末（1977）、柳田（1982）、常松（1982）、田崎（1983）らによる研究がなされ、80年代後半から90年代にかけても溝口（1988）、柳沢（1989）、井上(1991)、蒲原(1992)らの編年案が次々と提示される。この中、柳沢、井上は北部九州と対象地域を拡げたうえで古式土師器の編年をおこなっている。

柳沢一男(1989)は初期須恵器併行期までを６期に細分している。１、２期が布留式古段階、３期が布留式中段階、４、５期が布留式新段階、６期の段階には初期須恵器は確実に伴い須恵器の出現は５期の後半段階を推定している。基準資料として４期は下原住居跡、柏田７号住居跡、５期は御床松原15号住居跡、今光溝２、吉武３次SD05、６期は赤井手43号住居跡、塚堂D区９号住居跡、井原上学溝３をあげている。併行関係では４期が今光Ⅳ期、御床松原Ⅳ期の新様相、５期が今光Ⅴ期、御床松原Ⅴ期、６期が今光Ⅵ期、御床松原Ⅵａ期と大枠で併行している。

土器群では甕を在地系とその変容形式、折衷系、近畿系、山陰系の各系譜に分類し４期には変容形式が甕の主体となり５期にはその形式分化がおきる。高杯は脚部が緩やかにラッパ状にひらく形式が５期には伴い、その出現を４期まで遡る可能性を考えている。土器群のセットから考えると５期には甕、高杯、小型丸底壺に新形式が出現するとしながらも布留式新段階併行としたことが疑問である。

井上（1991）はこの柳沢編年の在地系甕の系譜は疑問であるものの体系的に整理された編年案と評価し井上編年(1991)と整合するとしている。これは弥生時代後期後葉から須恵器出現前までを対象とし古墳時代前期を１式から５式の５つの様式に編年している。

代表的資料として４式は三雲遺跡加賀石１号住居跡、湯納遺跡Ｄ５溝、原遺跡４号溝、下原遺跡住居跡、不整形竪穴、柏田遺跡７号住居跡、５式は三雲遺跡堺６号住居跡、御床松原遺跡15号住居跡、松木遺跡150街区37号住居跡、筑紫野市脇田遺跡４号住居跡、塚堂遺跡Ａ地区１Ｂ住居跡出土土器群をあげている。４式、５式と壺、甕の粗雑化が進行していく。４式は小型器台がある段階で５式では脚部がラッパ状に開く高杯が出現する。陶質土器の流入も５式の指標である。

柳田康雄(1991)は弥生時代終末期から古墳時代後期までを土師器Ⅰ式～Ⅶ式の様式に区分している。これは1982年の編年をもとにⅠ式、Ⅱ式に後続する様式を設定しており北部九州の古墳時代前期から後期までをとおした唯一の編年である。

Ⅱ式は布留系土器群の様式でⅢ式が布留系直後の様式である。Ⅲ式はａ、ｂの小期に細分し、Ⅲａ式で口縁が直立近くにたつ甕Ｄ類が出現し、Ⅲｂ式で口縁がゆるく外反する甕Ｅ類や角状把手付多窓式甑が出現し初期須恵器も供伴する段階である。Ⅳ式は定型化した古式須恵器に伴う様式で口縁部が丸く外湾する甕や底部全体が窓になる甑が出現する。以後のⅤ式、Ⅵ式、Ⅶ式はこの甕と甑の型式変化により設定される。柳田編年は各器種の形式分類までで詳細な型式組列は知り得ない。甕は口縁部形態でＤ類、Ｅ類、Ｆ類の各形式に分類し各様式の指標にしている。

重藤輝行(1995)は古墳時代前期、中期の埋葬施設の地域性と階層性を論じる中で特に布留式新段階併行期から６世紀初頭の土師器編年にもふれている。甕、高杯、中形壺、小型丸底壺の型式変化をもとにⅢＡ期、ⅢＢ期、Ⅳ期、Ⅴ期を設定している。Ⅲ期は布留式新段階、Ⅳ期は陶邑編年TK73～TK208型式、Ⅴ期はTK23～TK47型式と併行するとしている。

さらに重藤(2000)は福岡県浮羽郡の古墳時代中後期の土師器を編年している。これは前期を１～３期に区分した塚堂編年につづき４期から９期に編年している。この中でTK216併行期の６期は大きな画期にあたる。椀が急激に増加したり、大型の把手付甑や小型甕などの新器種が出現するがこれは朝鮮半島の軟質土器小型鉢の影響を受けて成立した器種である可能性を指摘し、カマドや須恵器の出現も同時期であるとした。

佐賀県内においての当該期の土師器研究は『土師式土器集成』（杉原・大塚編1971・1972）あたりを嚆矢とする。木下之治は中期の土器群として唐津市桜馬場遺跡、鳥栖市永吉遺跡住居跡出土土師器や古墳出土として横田下古墳、銚子塚古墳出土土器をあげている。

このうち、銚子塚出土の二重口縁壺は前期に位置づけられるだろうし、逆に当該期の土器群である伊勢山遺跡出土の土器群を前期とするなど研究の限界が窺われる。

これに対し前期の土師器編年研究は蒲原宏行氏による精力的に行われてきた。蒲原宏行（1989)は県内の古式土師器を布留古段階、中段階、新段階、初期須恵器の各併行期にわけそれぞれの土器群を抽出している。このうちの新段階併行期土器群として尾崎土生SD401、SK113、金立開拓ST029、ST030、西原SB026を、初期須恵器併行期土器群として伊勢山第３区１号住居跡、西原SB027、鈴熊ST001、金立開拓ST033、礫石８号墳をあげている。

その後蒲原宏行(1992)は佐賀平野を対象地域として古墳時代初頭前後の土器編年を論じている。その方法は器種・類型・細別類型を分類し型式組列を構築するもので、その検証を遺構出土の一括土器群によって行うという理路整然としたものである。その結果、６つの細別様式と惣座式、夕ヶ里式、土師本村式の３つの大別様式が設定できた。

土師本村様式は布留様式に併行するもので須恵器出現直前までとし１式から３式に細分している。３式は良好な一括資料に恵まれず様式の全容を十分に把握できないものの全体的に器種が乏しくなるとしている。代表的遺構として土師本村遺跡SK22、SK８土壙をあげている。蒲原編年によると土師本村２式にあたる様式５と土師本村３式にあたる様式６では在地系と外来系土器の構成比が20％と80％と変化はみられないものの、類型が27から15と減少している。また土器群の変化の特徴は全体的に厚手つくりで口縁端部や屈曲部のシャープさがなくなり、器形のバランスを失うものが多くなることを指摘した。

徳永(1993)は鳥栖市平原遺跡SX222出土土器群の編年的位置づけについて直前、直後の土器群をあげ平原SX222を須恵器出現以前であることを示唆している。直前の土器群として松木37号住居跡、併行に御床松原15号住居跡、直後に赤井手43号住居跡・塚堂Ｄ地区９号・11号住居跡・伊勢山３区１号住居跡出土の各土器群をあげている。

以上、研究史からみた土師器編年研究の問題点を挙げる。

１，佐賀平野では前期の編年研究はあるものの中期の研究はない。

２，福岡県内では糸島平野の井上（1983)、福岡平野の佐々木（1980,1984）浮羽郡の重藤（2000）があるものの個別遺跡を中心としたものである。

３，北部九州を対象とした編年はあるものの土器群の型式学的な検討はなされていない。

４，２，３をみるに小型壺、高杯など特定器種、形式の型式組列（変遷）はほぼ共通するものの様式の設定と認識に大きな相違があるのが現状である。

３，編年の方法と編年

（１）形式・型式分類

本遺跡出土土師器の全てを編年の対象とし土器群の位置づけを行った。出土土器群の時期幅は古墳時

代前期前半から中期前半～中頃までにおさまるが特に中期前半の土器群が多くみられることはこれまでの研究成果を参照すれば理解できる。本遺跡出土土師器の編年的位置づけを行うにあたり、器種・形式分類を行い型式組列を考えてみた。器種・形式分類は本書前項で述べた。本書分類と小松試案(2002)の分類はやや異なる。作業的には本書分類を先行し、後続して小松試案(2002)を行った。分類としては本書分類がやや細かくなった。これは分類属性を１次形式～４次形式と設定し、型式分類をアルファベット、ローマ数字、算用数字などで表記したためである。小松試案(2002)では編年の対象時期が古墳時代中・後期であり、それを７段階の画期に分けた。さらに２期と４期、５期はＡ、Ｂの小画期に分けたため、計10の画期からなる。各時期の設定は土器型式の組み合わせにより決定するという方法を採用したため、細かすぎる分類より、型式変化を重視した分類が妥当であると考えた。

ただ、両分類で器種・形式が異なるものが一つある。本書分類で甕Ａ④は口縁部長が４cm以上で口縁部角度が70°以上をいう。これらの土器には器壁外面に煤がついたものがあり煮炊に用いられたと考え、甕に分類した。ところが同型式で煮炊きに用いられない土器もあり壺Ａ２（広口壺）との区別が困難になってきたのは事実である。当該期の報告書をみるに、甕と壺の区別が困難であるという記述をよくみかけるがこうした土器であろう。また、当該期は小型広口壺や小型丸底壺までも煮炊きに用いるなど土器の機能が形式をこえている。こうしたことから、前段階からの型式変化を重視して本書の甕Ａ④は小松(2002）分類の壺Ａに対比した。

（２）編年

①小松編年の概要

小松(2002)編年は肥前地域の古墳時代中・後期土師器を対象にした。対象時期は小型丸底壺や小型器台

図225　土器の共通した型式変化

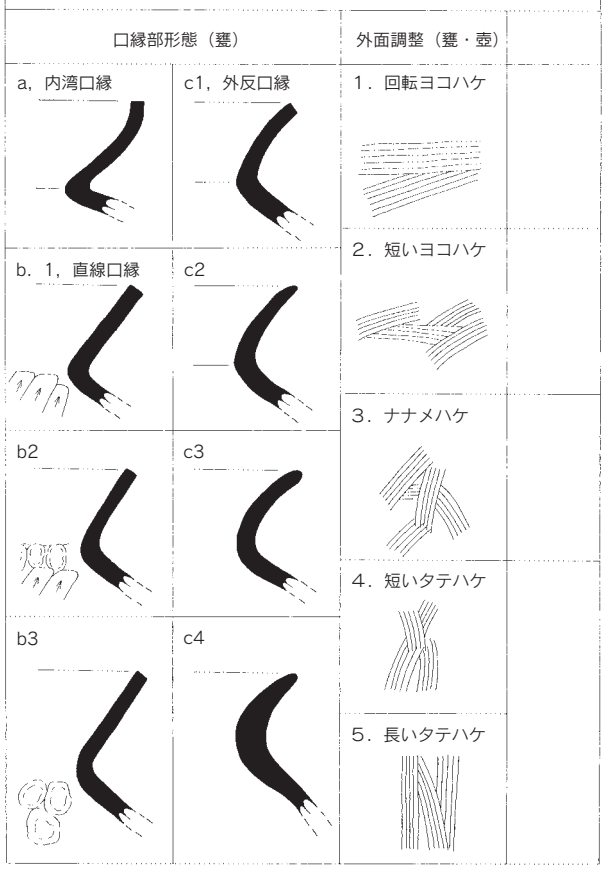
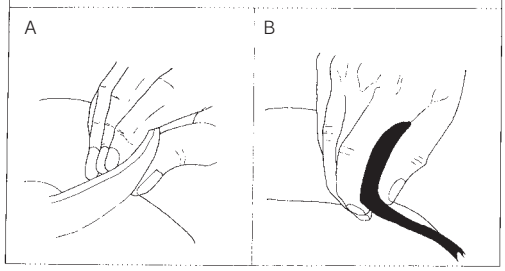


表105　甕・壺属性型式消長表

		口縁部形態									外面調整					内面調整		
		a	b			C												
		1	1	2	3	1	2	3	4		1	2	3	4	5	1	2	3
1期																		
2期	A																	
	B																	
3期																		
4期	A																	
	B																	
5期	A																	
	B																	
6期																		
7期																		

図226　甕口縁部成形技法



が消失していく段階から高台付杯や皿が出現する段階までとした。その方法として器種・形式分類を行い、主要土器群の器種構成の変化を調べた。当該期は前期的土器群が衰退し、新たな器種が出現するという器種構成の変化がみられるがその変化を具体的に帯グラフで提示した。前期的な土器群としては二重口縁壺や小型丸底壺、小型器台などがありこれらは早い段階で消失していく。また、中・後期的土器群として把手的甑や杯、模倣杯などがある。中・後期を通して安定した器種構成を占めるのは甕であり、これは煮沸具という機能を保持しつづけるためであろう。それに対して、高杯や杯などの器種構成が著しく変化するのは供膳形態の変化が考えられるし、壺などの貯蔵・調理具の変化は須恵器の出現が影響を与えているのであろう。以上のような器種構成の変化を考慮し、さらに各土器群の型式組列を考え、遺構出土土器群にて型式の組み合わせを検証してみた。その結果、１群から10群の様式が設定でき、このうち２群と３群、５群と６群、７群と８群がそれぞれ小画期となったため、７段階の画期が設定できた。

②土器の共通した型式変化

布留様式の甕や壺は体部内面をヘラケズリのちナデを施し、外面はハケを施す。口縁端部は面取りし、口縁部内外面はナデを施すなど器壁の薄いシャープな土器を特徴とする。このような布留様式で確立した甕や壺、高杯などの精製土器が次第に粗製化していくのが中・後期の土師器である。つまり甕や壺の口縁部調整や体部外面・内面調整が簡略化し粗製化していくのは共通した型式変化である。この他、口縁部の直立化は甕、小型丸底壺などで共通した形態変化であるし胴部形態が球形から扁球形へと変化するのも斉一的変化である。このように甕や壺などの各器種に共通した型式変化に着眼してみた。

型式変化の属性として口縁部形態、体部外面調整、内面調整などがあり、図225が各属性の分類図である。口縁部の形態はａ内湾口縁、ｂ直線口縁、ｃ外反口縁に分類できる。口縁端部は面とり→丸味をもつという変化、頸部内面に稜をもつ→もたないという変化が看取できる。外面調整はおもに肩部外面をさすが布留型甕の特徴である回転ヨコハケ→短いヨコハケ→ナナメハケ→短いタテハケ→長いタテハケの変化がみられる。この各属性の変化は甕や壺の各形式に共通している。表105は属性の型式変化表である。ただし、この各属性の組み合わせが表のとおりになるとは限らず、例えば甕において口縁部形態、体部内外面調整の古い要素と新しい要素がそれぞれ組み合うのが現実である。甕の型式変化の第一属性は口縁部の形態変化であり、次に外面調整、内面調整などがあげられる。

内湾口縁や口縁端部の肥厚は布留型甕の特徴であり、この内湾口縁と外反口縁は口縁部成形の意識の変化である。図226に口縁部成形技法を示す。Ａ技法は指頭を使い、より丁寧な口縁部を成形しようとする意識がみられる。このＡ技法により内湾口縁（Ａａ式）や直線口縁（Ａｂ式）が成形される。口縁端部は指頭をあてナデることで内外に肥厚させる。さらに口縁部内外面の指頭圧痕は横ナデにより消される。古式の甕の口縁部はこのように複数の工程をふむが、新式になると工程の簡略化がみられ粗雑化していく。口縁端部が丸みをもつことは端部のナデの簡略化、省略化である。

Ｂ技法は指の第一関節を甕の肩部内面にまわし、口縁部を外反しようとする意識がみられる。Ａｃ２～Ａｃ３式からＢ技法が用いられ、肩部内面に指頭圧痕がのこる場合もある。ただし、Ａｃ２式など古式の甕の肩部内面の指頭圧痕はヘラケズリにより消される場合が多い。この肩部内面の成形、調整も簡略化・省略化へと型式変化していく。その結果、頸部内面に稜をもつ→もたないへの変化を促す。甕や壺に共通した型式変化は以上のような口縁部の成形、口縁端部の調整、体部外面・内面調整工程の簡略化・省略化による。

③梅白遺跡出土土器群の編年

各土器型式の型式組列は前述の共通した土器型式の変化を基本にしながら組み立てた。各器種、形式

の変化は前稿（小松2002）で述べたのでここでは割愛する。図227～229は梅白遺跡出土土器群の編年図である。梅白遺跡出土土器群を前稿編年上で位置づけることを目的として作成した。表106は主要土器型式構成表である。土器型式は本書分類を用い各小期を特徴づける主要型式の組み合わせを示した。また、表107は各編年案との併行関係である。

表106　梅白遺跡出土主要土器型式構成表

	甕	小型丸底壺	高杯	杯	須恵器
1期					
2期	A①、A②	C１①	A１		
3A期	A②、B	C２②	A２、B		
3B期	A②、A③	C２②、C２③	A２、A３		
4期	A③		A３？	有	有

表107　主要編年案との併行関係

梅白編年	梅白遺跡主要遺構	各編年案との併行関係		
		小松(2002)	蒲原(1992)	田辺編年
梅白１期	SE251		夕ヶ里式～土師本村１式	
			土師本村２式	
梅白２期	SK111、SK228、SK133、SD115の一部	１期	土師本村３式	
梅白３A期	SD164 SD115 SH104	２A期		
梅白３B期	SH231	２B期		TK73
梅白4期	SD149	３期		TK216
梅白5期	SK106	４期		TK208～TK47

梅白１期は前稿の対象時期外であり、遺構はSE251のみである。甕、二重口縁壺、手ずくね鉢がある。甕の口縁部は内湾と外反ともにある。本期の甕は畿内系の甕や変容甕などいくつかの系譜がみられるようである。内湾口縁は畿内系で外反口縁は変容甕と思われる。二重口縁壺の二次口縁下端部は下方に突出する。蒲原編年の夕ヶ里式～土師本村式と思われる。

梅白１期と２期の間に土師本村２式がはいると考えるが本遺跡では相当する土器群はない。梅白２期の主要遺構はSK111、SK133、SK228、SD115の一部である。甕はA①の内湾口縁とA②の直線口縁がみられる。A①がみられるのはこの段階までである。表（SD115甕A分類表）をみても判るように、甕A②の比率が高い。小型丸底壺は口径＞器高で口径≧胴径のC１①である。高杯は脚部内面が全面ヘラケズリにより器壁が薄く長脚である。この他、二重口縁壺、広口壺があるが端部のつくりがシャープである。梅白２期の主要土器型式は甕A①、甕A②、小型丸底壺C１①、高杯A１である。前稿の１期にあたる。

梅白３A期の主要遺構はSD164、SD115、SH104である。甕はA②が主流でA①はみられない。小型丸底壺はC１①から型式変化し、口径＜器高、口径＜胴径のC２②になる。高杯は脚部の器壁がやや厚く、太いA２がある。形態的には高杯A１からA２の型式変化が考えられるが、A１の胎土は緻密で色調も明橙色であるがA２の胎土はやや砂粒も多くなり色調も橙色と違いがあるため、系譜については慎重を記す。また、脚部がラッパ状に開く高杯Bである。梅白３A期の主要土器型式は甕A②、小型丸底壺C２②、高杯A２、高杯Bであり２期との違いは小型丸底壺の型式変化、高杯の型式変化、高杯Bの出現である。前稿の２A期にあたる。

梅白３B期の主要遺構はSH231である。甕はA②に加え外反口縁の甕A③が加わる。このA③は３B期になると多く見られるようになる。甕の粗雑化が進行する。１期の106-2に見られるよう古い段階にもみられることから系譜については今後の検討が必要である。小型丸底壺はC２②に加えて口縁部が直立するC２③がみられる。高杯はA２に加えて高杯Bの影響をうけ脚部はラッパ状に開き裾部近くで外反、内側に稜がつく高杯A３がみられる。梅白３B期の主要土器型式は甕A②、甕A③、小型丸底壺C２②、C２③、高杯A２、高杯A３である。３A期との違いは甕A③、小型丸底壺C２③、高杯A３など各土器形式に型式変化がみられることである。前稿の２B期にあたる。

梅白４期の主要遺構はSK106、SD149である。甕はA③のみで粗雑化が益々進行する。小型丸底壺は消失している。高杯は少なくなりA３が残る。この時期に杯が出現する。また、甑の口縁部（181-1）や多

図227　梅白遺跡古墳時代土器群の編年１(1/10)

遺物番号は、上が報告書番号，下が型式名
●は1/8

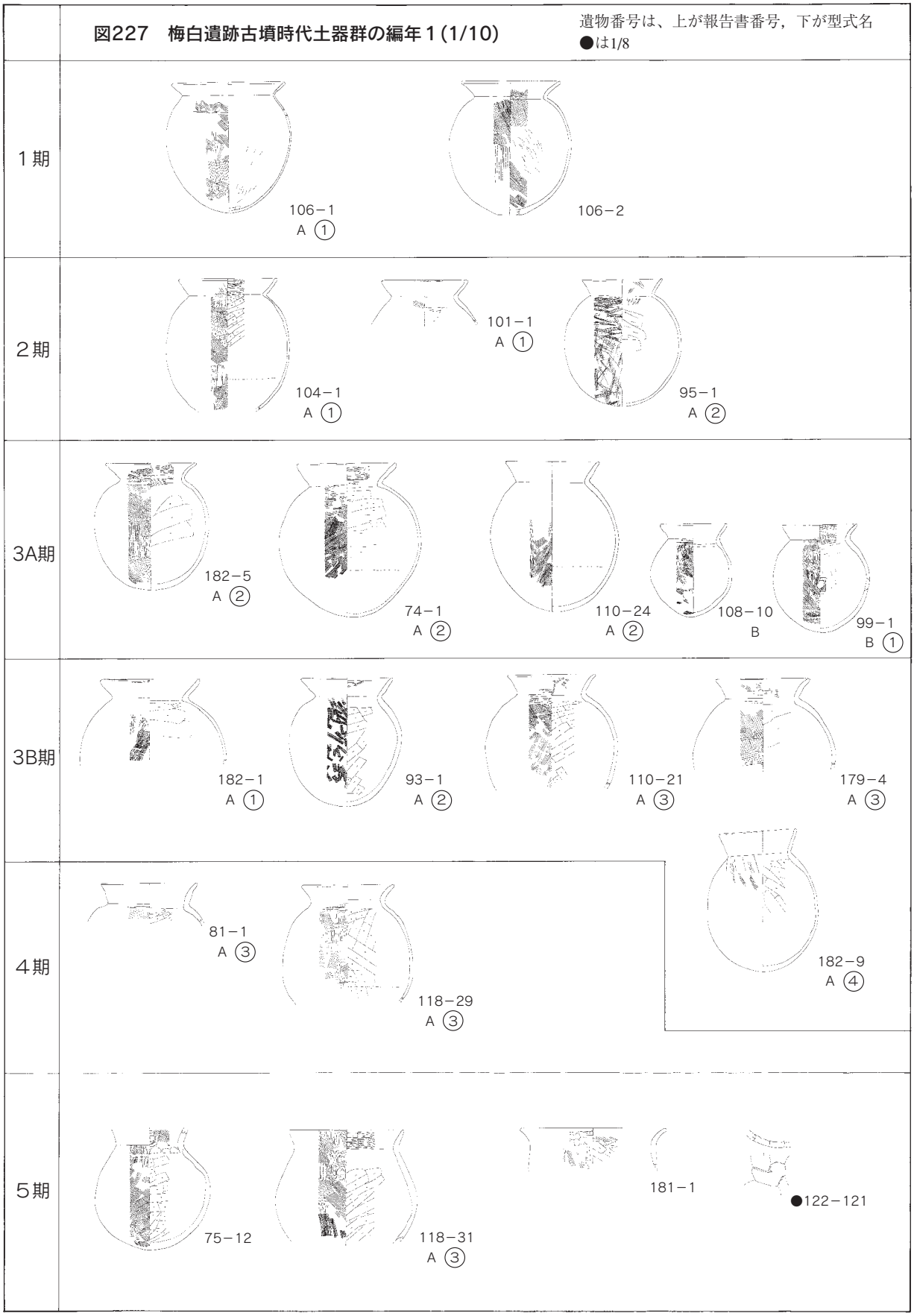


図228　梅白遺跡古墳時代土器群の編年２(1/10)

遺物番号は、上が報告書番号，下が型式名
●は1/8

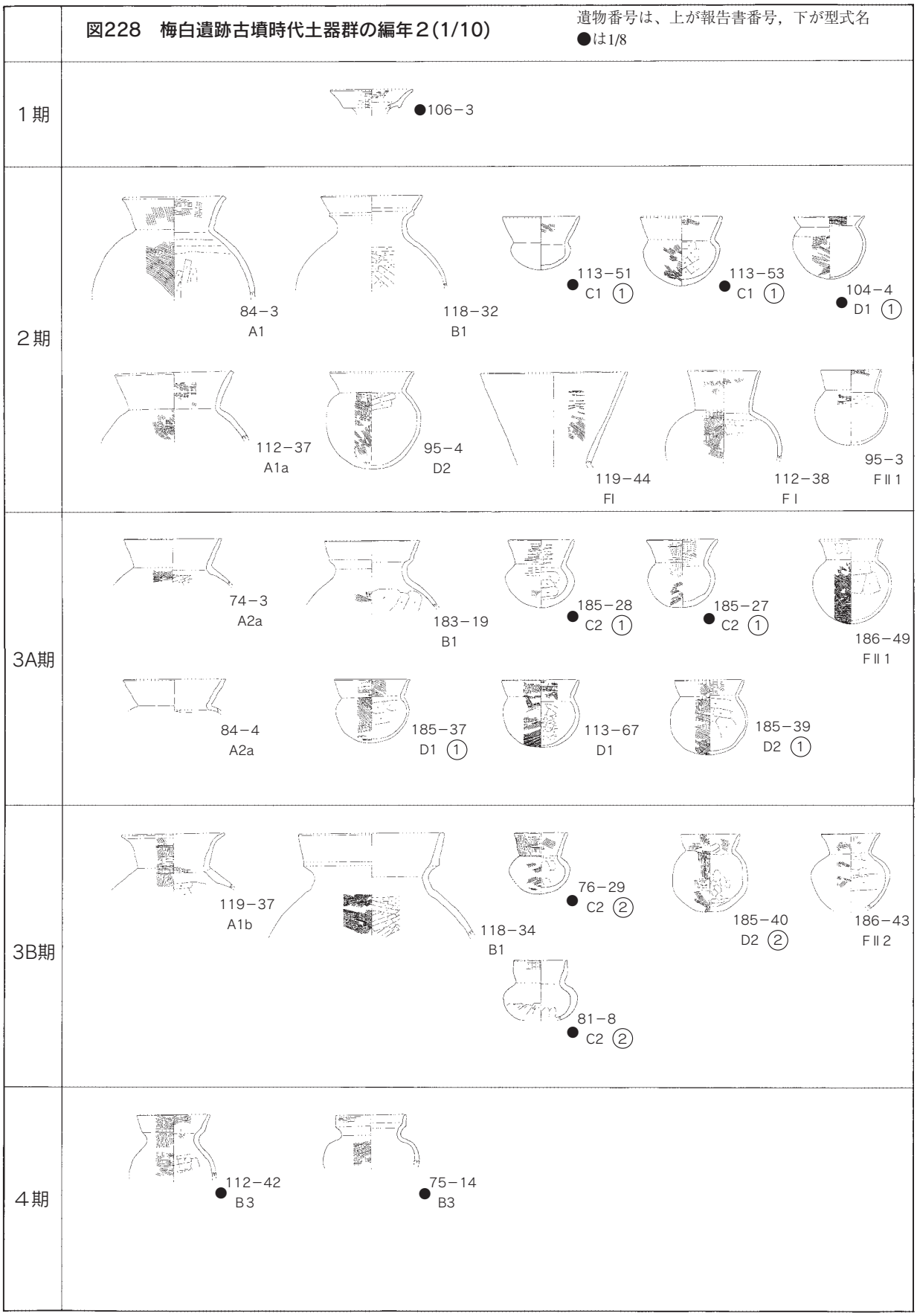
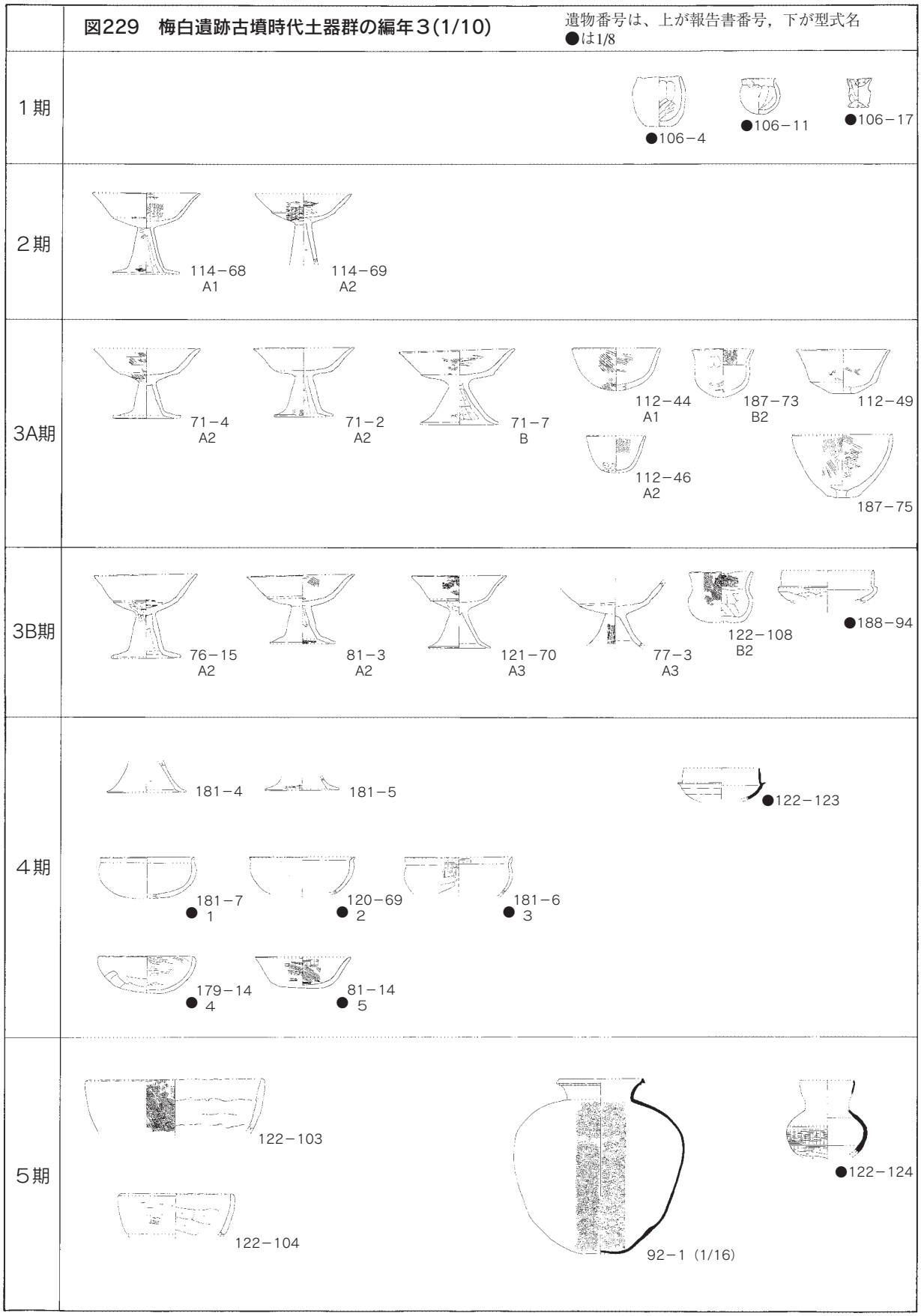


図229　梅白遺跡古墳時代土器群の編年３(1/10)

遺物番号は、上が報告書番号，下が型式名
●は1/8



孔甑の底部（122-121)さらに大型鉢（122-103,122-104)もみられる。須恵器の甕(92-1)、壺(122-124)、杯身(122-123)もあり、陶質土器・高杯の模倣と思われる188-94も当期にあたる。梅白４期は新器種である杯、大型鉢、さらには須恵器などをみても時間幅がありそうで、そのことは甕をみても型式差をとらえられる。土器群が少なく細分できなかったが前稿の３期、４期にあたろう。

④蒲原編年との整合性

梅白１期は夕ヶ里式～土師本村１式であることはのべた。

土師本村３式は梅白２期～梅白３Ａ期に併行すると考えたので結果的には土師本村３式を細分した編年になった。

蒲原宏行（1992)が設定した土師本村３式は良好な一括資料に恵まれないため様式の全容を十分把握できないとしながらその時期を須恵器出現直前までと考えているようである。様式を構成する主要土器型式に壺ＯⅢ（小型丸底壺)、器台Ｄ（小型器台)、高杯Ｇ・Ｈがある。まず、器台Ｄは土師本村３式の基本資料土器群をみてもわかるようにきわめて出土例が少ない。土師本村３式の前半で器台Ｄは消失する。さらに高杯Ｈは脚部内面を全面ヘラケズリし器壁を薄く仕上げるのに対して高杯Ｇは脚部のつくりが粗雑化しており、高杯ＨとＧでは型式差を認めざるえない。甕では74-2は器壁も厚く粗雑化が進行してい

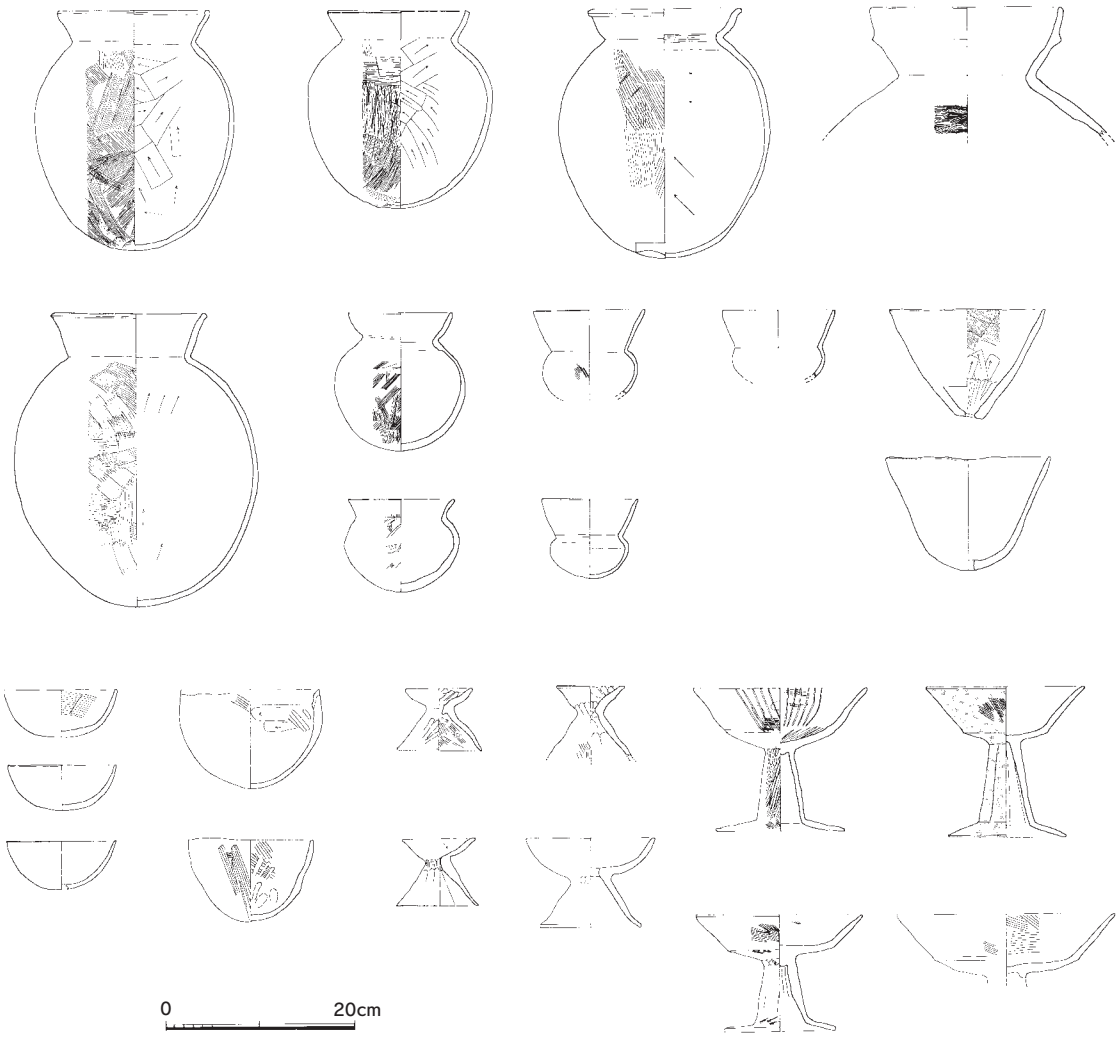


図230　土師本村３式土器群(1/8)

る。これらのことからも土師本村３式は細分が可能でありその前半が梅白２期、後半が３Ａ期とした。梅白２期は小型器台が少量ながらも残り小型丸底壺Ｃ１①、高杯Ａ１さらに甕は口縁部内湾、あるいは肩部外面にヨコハケを多様するものがみられる。梅白３Ａ期には器台は消失し小型丸底壺もＣ２②へと型式変化し高杯もＡ２になるなど、明らかに土師本村３式を細分することは可能である。

４，梅白式の提唱

梅白３Ａ期、３Ｂ期は①小型精製器台の消失、②小型丸底壺の粗製化、③ラッパ状脚部・高杯の出現④陶質土器模倣土師器（高杯・有孔小型丸底壺）の出現など梅白２期・梅白４期との様式差は明確である。この梅白３Ａ期、３Ｂ期（前稿２Ａ期、２Ｂ期）の様式名として梅白式を提唱したい。さらに梅白３Ａ期を梅白１式、梅白３Ｂ期を梅白２式とする。梅白式前後の様式名では梅白２期（前稿１期）は土師本村３式の前半期であることは前述したが、佐賀市御手水遺跡（西田1994)の名をとって御手水式としたい。また、梅白４期（前稿３期）は鳥栖市牛原前田遺跡（石橋1996、内野・石田1996)の名をとって牛原前田式としたい。これによって御手水式（土師本村式の前半）－梅白式－牛原前田式の様式名を提唱することになる。

５，土器編年と遺跡の変遷

最後に梅白遺跡検出の集落と水田の変遷時期を土器編年でみてみる。梅白遺跡内では１期のSE251井戸跡にみられるよう夕ヶ里式～土師本村１式段階（古墳時代初頭）から人々の活動痕跡が認められる。集落の形成が活発化するのは２期からであり、最盛期が３期そして４期で消失していく。集落と水田の間に掘削されたSD115溝からは多量の土師器が出土した。それには完形品も多くみられたが祭祀行為によるものと思われ、２期～３Ａ期の遺物が出土した。同じ溝内で継続した祭祀を行っているのだろう。また集落の移動あるいは廃絶はSK106の須恵器甕の破砕に象徴されているようである。その時期は５期である。

水田経営も集落とほぼ同時期に行われている。古墳上層水田の廃絶時期を示すのはSD149溝出土土器群である。甑や杯などが出現していることから４期の中で確実に廃絶している。多孔式甑は久里天園４号住居で出土しているが本遺跡出土の甑口縁部は外反しておりそれと類似する。また、包含層からも多孔式甑の底部が出土しており、これらの時期は５期であろう。従ってコモ層の形成は５期以後になる。

参考文献

下条信行1971「宮の前遺跡（Ａ～Ｄ地点)」福岡県労働者住宅生活協同組合
武末純一1977「考察２，土師器」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告１９』福岡県教育委員会
井上裕弘1977「柏田遺跡」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』４福岡県教育委員会
井上裕弘1978「弥生終末～古墳前期の土器群について」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』７集　福岡県教育委員会
武末純一1978「早良平野の古式土師器」『古文化談叢』５
橋口達也1979「池の上出土陶質土器の編年」『池の上墳墓群』甘木市教育委員会
佐々木隆彦1980「古式土師器について」『今光遺跡・地余遺跡』東急不動産
丸山康夫1980『赤井手遺跡』春日市教育委員会
柳田康雄1982「三、四世紀の土器と鏡」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』
常松幹雄1982「北部九州における西新町遺跡の位置」『西新町遺跡』福岡市教育委員会
井上裕之1983「弥生終末から古墳前期の土器群について」『御床松原遺跡』志摩町教育委員会
橋口達也1983「陶質土器・須恵器の年代観」『古寺墳墓群Ⅱ』甘木市教育委員会
田崎博之1983「古墳時代初頭前後の筑前地方」『史淵』１２０
佐々木隆彦1984「松木遺跡群出土土器の展開」『松木遺跡Ⅰ』那珂川町文化財調査報告書１１

蒲原宏行1984「土師器」『金立開拓遺跡』佐賀県教育委員会
蒲原宏行1985「佐賀平野の初期須恵器・陶質土器」『古文化談叢』１５
佐藤浩司1987「古墳時代後半期の土師器編年試案」『長野Ａ遺跡２』北九州市教育文化事業団
溝口孝司1988「古墳出現前後の土器相－筑前地方を素材として」考古学研究35-2
柳沢一男1989「北部九州土器編年の概要」『古墳時代前半期の古墳出土土器の検討』第２５回埋蔵文化財研究集会
柳田康雄1991「土師器の編年２九州」『古墳時代の研究』６
井上裕之1991「北部九州における古墳出現前後の土器群とその背景」『古文化論叢』児島先生記念論集
蒲原宏行1992「古墳時代初頭前後の土器編年」佐賀県立博物館・美術館調査研究書第16集
西田巌1994「御手洗遺跡」佐賀市教育委員会　佐賀市文化財調査報告書第55集
重藤輝行1995「埋葬施設にみる古墳時代北部九州の地域性と階層性」日本考古学２
石橋新次1996「牛原前田遺跡Ⅰ」鳥栖市教育委員会　鳥栖市文化財調査報告書第47集
内野武史・石田玲子1996「牛原前田遺跡Ⅱ」鳥栖市教育委員会　鳥栖市文化財調査報告書第48集
重藤輝行2000「仁右衛門畑遺跡を中心とした浮羽郡の古墳時代土師器編年」『仁右衛門畑遺跡Ⅰ』福岡県教育委員会
小松譲2002「肥前地域における古墳時代中・後期土師器の編年」『古墳時代中・後期の土師器－その編年と地域性』第５回九州前方後円墳研究会資料集

水田跡の検討（群馬県教委・能登氏）

水 田 跡 測 量 風 景

唐津市梅白遺跡の弥生・古墳時代の集落と水田跡の変遷

小　松　　譲

１，はじめに

梅白遺跡の調査では弥生時代・古墳時代の集落跡と水田跡を確認した。集落跡と水田跡はほぼ同時期であり貴重な調査事例となった。遺跡の現況は標高４～５ｍの平坦な水田地帯であるが、弥生・古墳時代当時は比高差約1.5ｍ～２ｍの起伏のある地形であった。遺跡は砂丘の東端肩部に立地し、低地部では水田を営んでいた。

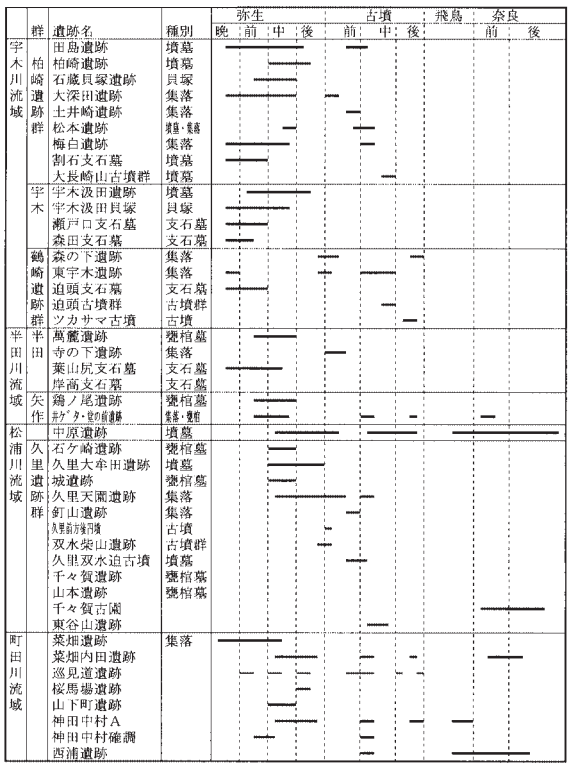
ところで、本遺跡周辺の低地部に堆積する植物遺体層・通称コモ層の存在は比較的早くから知られていたが、その時期についてはさほど関心がむけられなかったようである。ところが、今回の調査でコモ層の下から水田跡が確認され地形の発達と集落の変遷を考えざるえなくなった。そこで梅白遺跡の変遷をまとめることで、今後の唐津平野の地形の発達と遺跡変遷の研究の材料になればと考える。

２，遺跡の立地と周辺の遺跡

遺跡は鏡山南方を流れる宇木川・半田川によって形成された平野部のほぼ中央に位置し宇木川・半田川の合流地点の東方、標高４～５ｍの低地に立地する。昭和50年代の農業基盤整備事業に係る文化財確認調査によって宇木川・半田川流域にはアシなどの湿地性植物を多量に含む堆積層・通称コモ層の分布範囲が明らかになった。図231は確認調査を担当した木下(1981)をもとにコモ層の範囲と遺跡分布を示した。梅白遺跡は夕日山山麓から原集落にかけて北方に舌状にのびる砂丘（砂堆）の東端に位置し、遺跡の東端にはコモ層が堆積する。発掘調査でもそのことが証明された。

図231は宇木川・半田川流域の遺跡分布も示す。旧河川流域にはコモ層が堆積しており当時は低地部であったことが判る。丘陵の裾部に５つの遺跡群が分布する。宇木川流域は柏崎遺跡群、宇木遺跡群、鶴崎遺跡群があり、半田川流域には半田遺跡群、矢作遺跡群がある。いずれも弥生から古墳時代にかけての遺跡群で遺跡の消長は軌を一にする。表108に唐津平野の遺跡群消長表を示す。多紐細文鏡、銅矛、銅剣を副葬した甕棺墓が出土した宇木汲田遺跡や触角式有柄銅剣、日光鏡を出土した柏崎遺跡は弥生時代中期の有力首長層の発達を物語る。梅白遺跡は柏崎遺跡群のひとつである。また、近年の調査で重要な成果をあげている中原遺跡は弥生時代中期以降発達する遺跡で周辺遺跡群の中では最も継続性がある。遺跡立地は柏崎遺跡群と同一の砂丘上であるが、やや標高も高く徳武－原の集落につながる古砂丘上で大河川である松浦川流域に位置する。

表108　唐津平野遺跡群消長表



３，梅白遺跡各期の概要

梅白遺跡では①縄文時代晩期の遺物包含層、②弥生時代前期の集落と前期～中期の水田跡、③古墳時代中期の集落と水田を検出した。図236に基本土層模式図を示す。図233～234は弥生時代の集落、水田

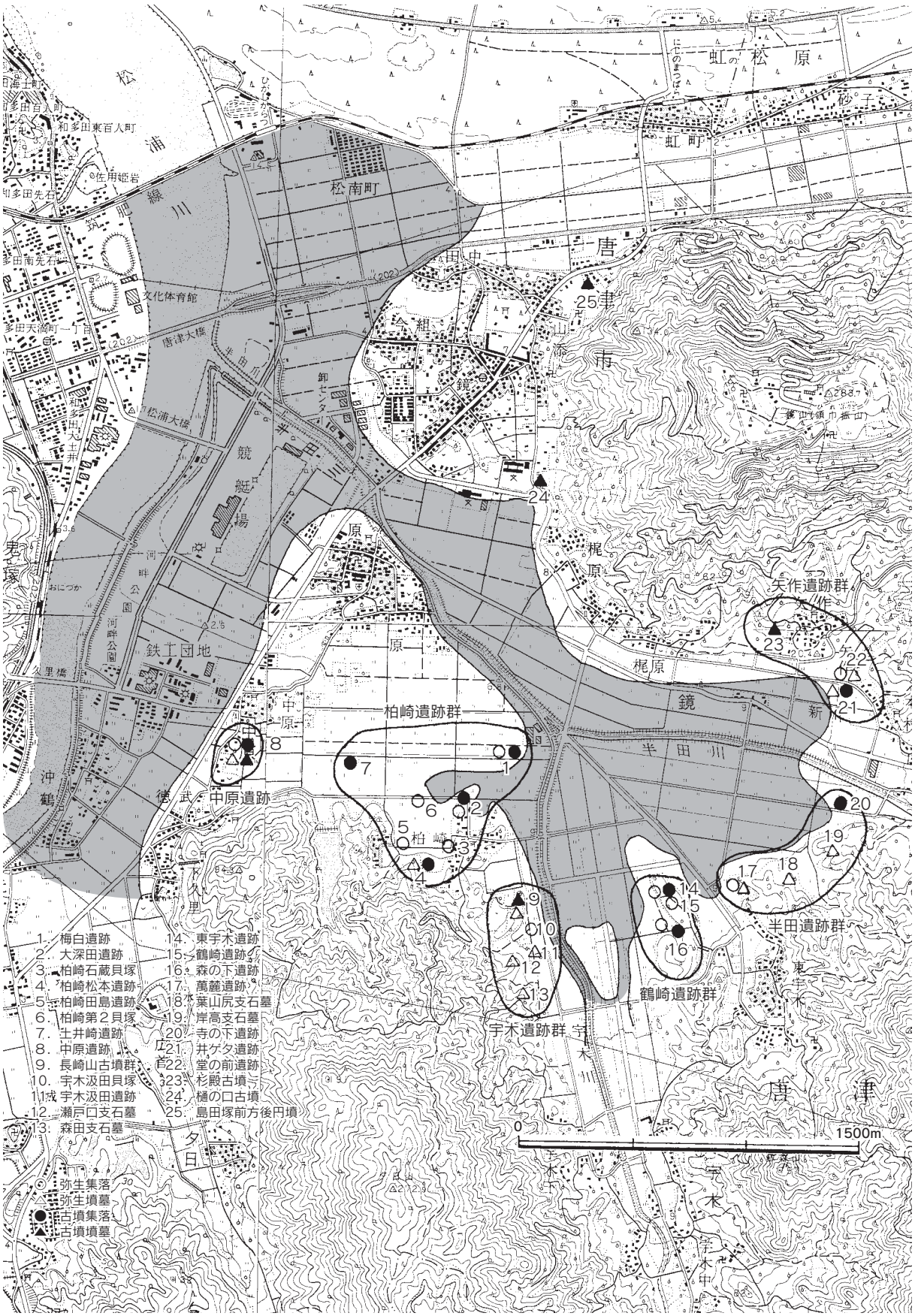


図231　宇木川，半田川流域遺跡群分布図(1/25000)

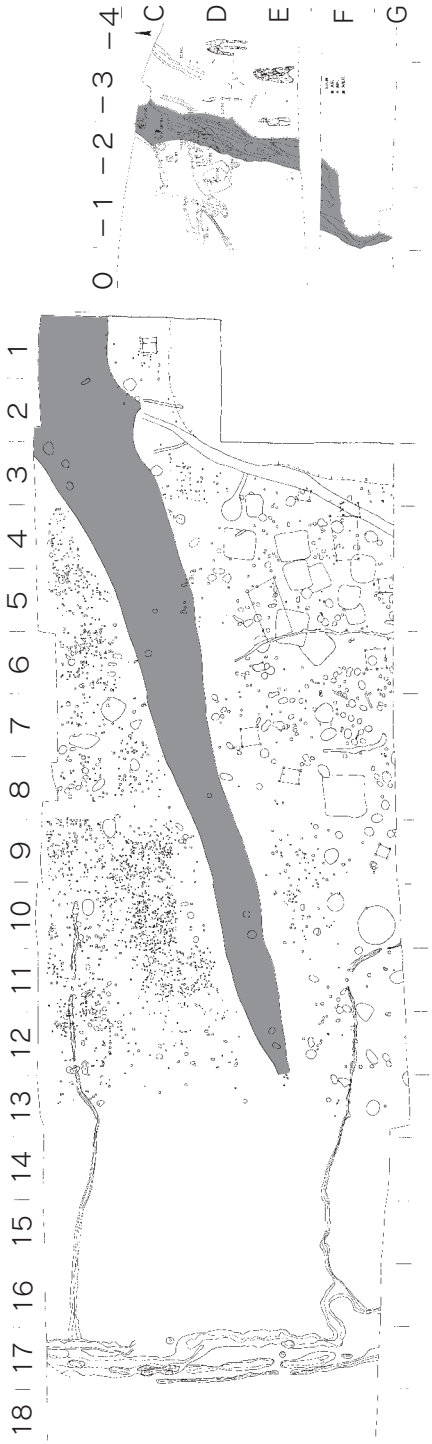


図232　縄文時代晩期遺構配置図

跡の遺構配置図、図235は古墳時代の同図である。以下時代をおって概要を記す。

（1）縄文時代晩期（図232）

縄文時代晩期の遺物は調査区内の旧河道（落ち込み）や自然流路内から多量に出土した。図232のスクリーントーン部分がそれにあたる。刻目突帯文の甕、壺、方形波状の浅鉢、口縁くの字形の浅鉢などのほか組織痕文土器片も出土した。時期の主体は晩期後半であるが、晩期前半の土器片も数点出土している。同時期の遺構は調査区内において検出できなかったが旧河道の西方において完形の土器がまとまって出土しており、調査区周辺に集落があったものと考えられる。

また、調査区東側の低地部からはSD187自然流路を検出した。自然流路埋土中から刻目突帯文土器と平鍬、石庖丁が出土した。この流路内の出土遺物には時期差が認められ埋没したのは前期であろう。水田遺構は検出できなかったものの調査区周辺で水田が営まれていたと考えられる。

（2）弥生時代前期～中期（図233～234）

弥生時代前期の集落跡として竪穴住居跡３軒を検出した。このうち２軒はともに床面中央に石囲いの炉がある特異なものである。SH222は径約3.5ｍの不整円形、SH119は径約４ｍの隅丸方形で明確に配置された柱穴は検出できなかった。SH222の炉は平面円形に石を巡らし、SH119のそれは馬蹄形に石を配する。出土遺物は甕口縁部片のほかSH119からは片刃石斧がSH239からは磨製石剣が出土している。また、遺構は検出できなかったものの中期の土器片も出土している。

前期の集落は砂丘の東端縁辺部に立地するが、その東方の低地では同時期と思われる水田跡２面を検出した。下層水田のさらに下層からドングリを貯蔵した土坑10基を確認した。前述の弥生前期の集落と同時期と考えられるのが弥生下層水田である。ドングリ貯蔵の土坑からは時期を決定できるような土器は出土していないが刻目突帯文土器を包含する自然流路をきって土坑が掘られていることや弥生下層水田のさらに下層であることなどから時期の絞り込みが可能である。

弥生上層水田は標高2.3ｍ、弥生下層水田は標高2.2ｍである。弥生上層水田を覆う埋土中から中期前半～中頃の土器が出土している。 弥生上層水田と弥生下層水田の遺構とし

図233　弥生時代前期遺構配置図

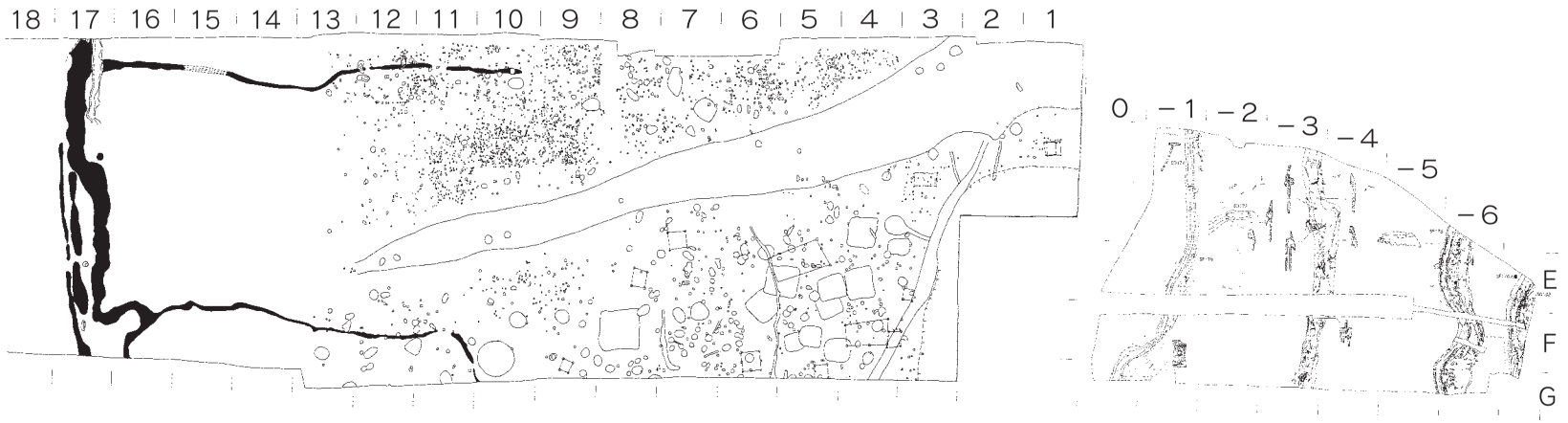


図234　弥生時代中期遺構配置図

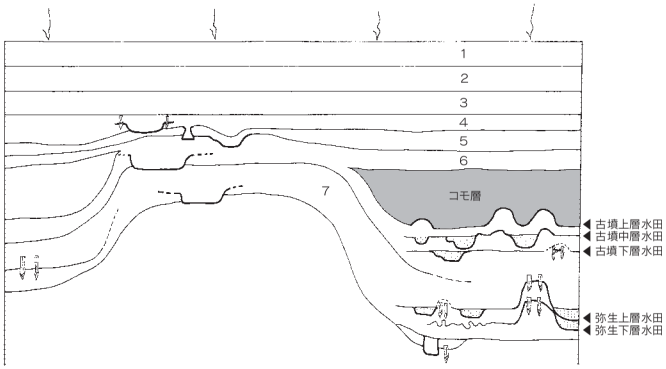
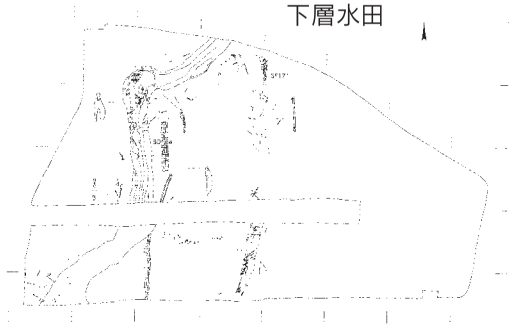


図236　基本土層模式図



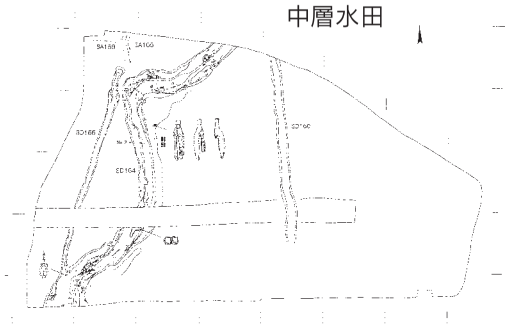


図235　古墳時代中期遺構配置図

て大畦畔や水路があるが、ともに一致するものが多い。小畦畔や小区画は確認できなかった。下層水田のSD162水路は調査区東側を湾曲して南流し、水路に沿って西側にSF176大畦畔がつくられる。上層水田ではSD162水路・SF176大畦畔は踏襲され、SF176下層の直上にさらに盛土をして補強している。これら大畦畔には丸杭、割杭、矢板杭などが打ち込まれ、長さ数mの材を横たえて芯材としている。大畦畔の規模は幅約1.3m、高さ約30㎝を測る。水田面および水路から又鍬やエブリなどの農具が出土した。低地部水田の特徴は自然地形にあった流路を水路としながら、それにあわせて大畦畔をつくっていることである。

また、調査区西側の砂丘微高地上において長方形に巡る溝跡を検出した。図234の黒塗りした溝であるが、埋土は砂層でSD288から須玖式の甕形土器口縁部片が出土している。ほぼ東西方向に走るSD204とSD265の間は約37mで水田の大区画の可能性も考えられる。この溝が水田の大区画であるとすると中期段階には低地のみならず砂丘上にも水田が営まれていたことになる。

（３）古墳時代前期～中期

古墳時代の集落は砂丘の東端縁辺部に立地する。竪穴住居跡９軒、掘立柱建物跡12棟、井戸１からなる集落である。前期の遺構はSE251井戸跡のみで住居は確認されていない。調査区内で集落の形成が活発化するのは前期末～中期前半にかけてである。集落の衰退は出土土器の検討から５世紀中頃であろう。集落は住居２，３軒の切り合いが認められその存続時期は比較的短いとおもわれる。SH121には多量の土器が投げ込まれ、SK106では古式の須恵器甕を破砕していたがこれらは集落の移動に伴う祭祀と思われる。竪穴住居は屋内の主柱が２本のものと４本のものがある。また、竪穴住居の中でSH231は１辺6.5mの大型住居で２回の立て替えが認められ、他の住居群からやや離れてつくられている点など注目される。また旧河道の落ち込み縁辺部にはSK103やSK105などの祭祀土坑がある。この集落東側の落ち込みの傾斜変換線に沿ってSD115溝が掘削されるがこの溝から分岐してSK133土坑に導水する施設もつくられている。

集落の東側は低地になりコモ層が厚さ約30～50㎝程堆積しているがその直下から集落と同時期の水田跡を３面検出した。時期は３面とも集落と同時期である。標高は上層水田が３m、中層水田が2.8m～2.9m、下層水田が2.5mである。

古墳上層水田はコモ層に覆われていたため大畦畔、小畦畔が良好に遺存していた。２条に併走する大畦畔で３つの大区画にわけられ、その中をさらに小畦畔で整然と区画されている。区画された１枚の水田は30～50㎡である。大畦畔の規模は下幅1.5～2.0m、高さ0.3m、小畦畔のそれは下幅約1.2m、高さ0.15mと畦畔としては大きな部類である。取水・排水は大畦畔間の溝や小畦畔にみられる「田越し」による。大小畦畔は盛り土によりつくられるが、大畦畔の中には部分的に芯材で補強されている部分もある。さらに畦畔盛土に先行して小区画の割付けのための細い自然木を配したり、木製農具を埋納していた。

古墳中層水田は上層水田の下約20㎝にて検出した。SD160溝は上層水田の大畦畔と重なることから中層水田の区画を踏襲して上層水田がつくられたことが判った。このSD160やSD166は直線的に掘削され計画性のある溝であるが、それとは対照的にSD164は蛇行して南流する自然流路を利用した水路である。埋土中からは多量の土師器が出土した。その中には水辺の祭祀を彷彿させるような出土状況のものもみられた。このSD164の東縁に沿って畦畔がはしるが、D-－２グリッドでは数個の又鍬が一括して埋納されていた。

古墳下層水田は中層水田の下約40㎝にて検出した。遺構としてSD164やSF171大畦畔がある。このSF171大畦畔は弥生上層水田の溝であるSD173溝の直上に同方向に設けられており、丸杭を打ち込んで大畦畔を補強している。

３，遺跡変遷・小結

弥生・古墳時代の集落と水田跡が同一遺跡内で確認された貴重な調査となった。唐津平野は菜畑遺跡で確認されたように我が国で最も早く稲作を受容した地域である。唐津平野内において稲作がどのような過程をえて拡散していったのか、そして発生した農耕集落の実態やその展開が古墳時代中期に至るまで追うことが可能になるであろう。

宇木川上流域の宇木汲田貝塚遺跡において夜臼式単純層出土の土器底部の籾圧痕から縄文晩期終末の稲作が証明された。その水田立地においては菜畑遺跡の成果と合わせて谷水田との評価が与えられていたが、本遺跡のごとく平野中央部の低地においても受容期水田が営まれている可能性が高くなった。また、晩期前半や夜臼Ⅰ式の土器群も少量ながら出土していることなどから、在地縄文人の集落において稲作を受容し、発展していったと考えられる。出土遺物として擦り切り石庖丁や柱状片刃石斧、扁平片刃石斧などの大陸系磨製石斧は出土しているが朝鮮系の無文土器は確認できなかった。

本遺跡において住居跡が確認できるのは弥生前期からである。それは床面中央に石囲いの炉をもつという特異な構造であった。類例は国内においては知らずその起源を半島に求めることが可能かもしれない。この段階まではドングリ貯蔵の土坑や多量の石鏃の出土にみられるように狩猟・採集活動の比率も高かったと考えられる。その集落も住居跡３軒という世帯共同体ともいうべき単位集団であったと考えられる。

宇木川・半田川流域において農耕集落が発展し、有力首長層が出現するのは宇木汲田遺跡や柏崎遺跡群にみられるよう弥生中期前半であるが、本遺跡の弥生上層水田の大畦畔や砂丘微高地上の大区画水田がそのことを物語っている。低地の水田は自然地形の制約を受けながらも大畦畔には無数の杭を打ちこんで補強している。その杭の切り口観察所見としては鉄器の使用が充分考えられる。また、砂丘微高地上の大区画水田はそれまでの居住域を生産域に変えたということでも画期的なことであり、これは柏崎遺跡群の発展の結果と考えられる。この発展した農耕集落も後期に入るとその姿を消してしまう。これは宇木川・半田川流域のみならず北部九州的な範囲での遺跡の変遷として捉えられる。これは地域内における環濠集落の出現契機や集住化とあわせて解釈する必要があろう。現在、松浦川流域の中原遺跡では弥生時代後期～終末の密集した集落跡を調査中である。狭い範囲に集中して集落を形成している点などは梅白遺跡の集落と対象的である。

古墳時代中期の集落と水田は須恵器出現期併行期前後の短期間のものである。竪穴住居跡の切り合いや水田跡が３面あることなどから、一時期に３軒前後の竪穴住居と数棟の倉庫からなる世帯共同体ともよぶべき単位集団が水田経営を行っていたと考えられる。竪穴住居の中にはやや離れて大型住居があり、これは建て替えが認められる点などその性格に興味が持たれる。梅白遺跡周辺600～700ｍには柏崎松本遺跡、土井崎遺跡、大深田遺跡など古墳時代前期～中期の集落が点在する。いずれもこれらは小規模で梅白遺跡同様短期間の集落である。これらのことから、宇木川流域の柏崎遺跡群を領域とする単位集団が移住を繰り返しながら農耕を営んでいたと考えられる。また、梅白遺跡では12棟の掘立柱建物跡のうち１間×１間が８棟あり、いずれもこれらは竪穴住居群とは分布を異にし、中には建て替えも見られる。同様の集落構造は佐賀市御手水遺跡においてもみられ、５世紀段階の農耕集落では余剰生産物は単位集団ごとに管理され家父長による再分配が行われていたと考えたい。

梅白遺跡検出の古墳時代中期の水田跡は自然地形に沿いながらも直線的な大畦畔や水路の掘削など計画的で整然とした方形区画水田がつくられている。これまでの水田調査により、小畦畔は水懸かりを目的とした土盛り畦畔が多くみられたが、梅白遺跡のそれは規模も大きく、割付的な自然木の配置や木製

農具の埋納など一時的なものではないことは注目される。このような方形小区画水田の意義について方格地割計画との関連を説く石野博信（1990）らの見解がある一方、土木技術的工夫とする都出比呂志（1983）の反論もある。古墳時代にはいると首長居館も方形を指向することからも、古墳時代における方形区画水田は平野全体を貫く地割でないにしろ、中小河川流域で部分的に施行されたと考えたい。ただ、５世紀段階の方形地割水田が条里制とつながるかは疑問であり、少なくとも水田に係る税制は集落構造の分析結果からは求められない。

４，周辺地域の水田跡調査事例

コモ層によって覆われた古墳時代中期の水田は梅白遺跡のみならず、半田川の右岸にも広範囲に広がることが判っている。平成11年３月24日、工事に伴い掘削された壁面で畦畔を確認した。位置は梅白遺跡より東方約400ｍの半田川と大森川に挟まれた地点である。図237はその写真で図238，239は土層観察を行った地点と土層模式図である。出土遺物がないため詳細な時期はわからないが水田面は２面みられた。この地域の鍵層ともいうべきコモ層の直下にて畦畔を確認した。土壌や畦畔の検出標高などから古墳水田と弥生水田とみられる。

また、唐津市町田川流域では著名な菜畑遺跡にて弥生時代の水田跡が確認されているが、この他に菜畑内田遺跡、巡見道遺跡でも水田跡らしき遺構が確認されている。

菜畑内田遺跡はこれまで３年次におよぶ調査が実施され、平成９年度の調査では丘陵地形にそった古墳時代中期の石列が検出されている（岩尾1999）。平成10年度の調査区は前年調査区に隣接した南側にあたるが、ここでは谷地形に直交して走る土塁状の遺構・SX02を検出している（図244参照）。SX02は高さ約50cmの盛土を行い板状の杭を打ち込み、さらに土塁と同じ方向の横木を据えている。調査担当者によると平成９年度検出の石列とこのSX02は関連する遺構であろうとの所見である（岩尾2000）。平成10年度調査区を筆者が見学したおり、調査区壁面でコモ層直下の畦畔状の高まりを確認した。調査担当者である唐津市教育委員会の岩尾氏から基本土層の時期の説明を受け作成したのが図242の模式図である。７層がコモ層であり、梅白遺跡の古墳水田と全く同じような畦畔状の高まりであった。層序からSX02も同時期の遺構であり、出土遺物も梅白遺跡の古墳水田とほぼ同時期であった。

また、同じ町田川流域の巡見道遺跡・Ａ地区ではしがらみ状遺構が検出されている。（図241参照）幅

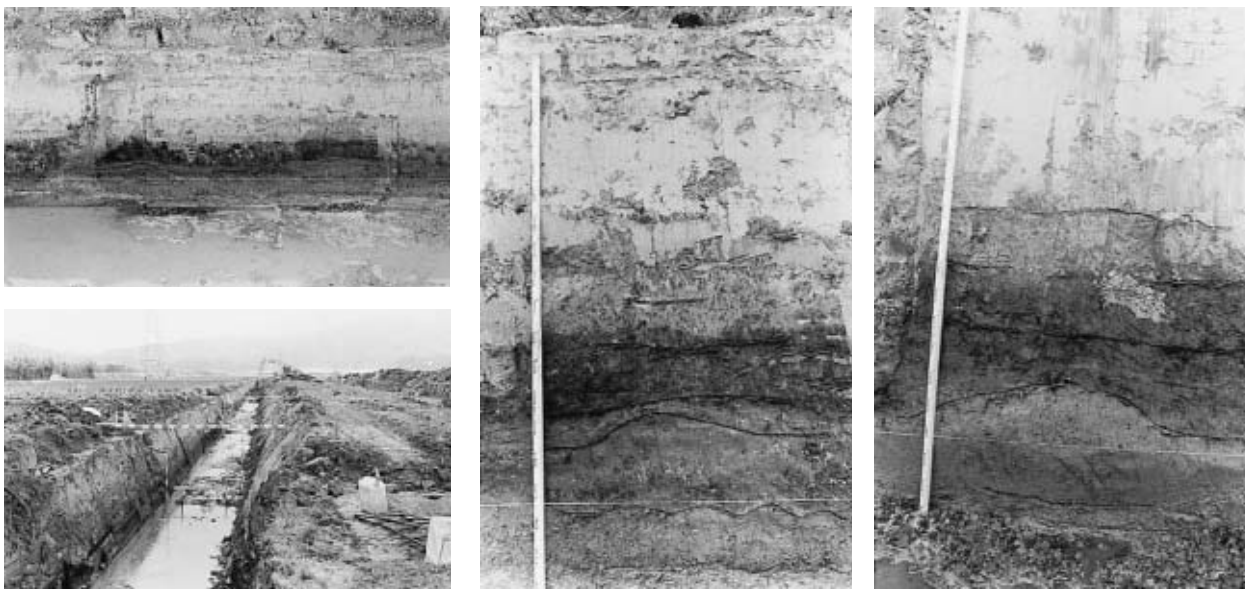


図237　確認した畦畔

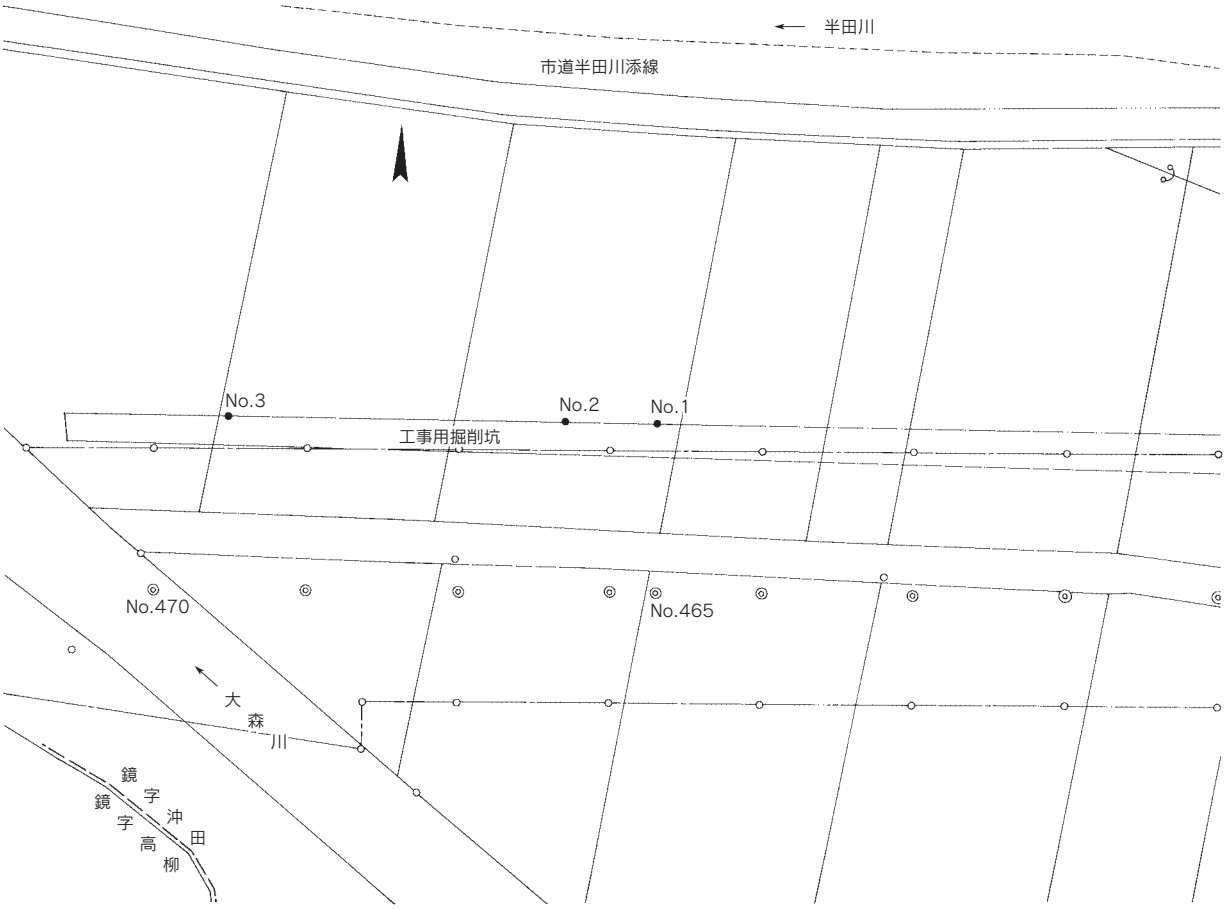
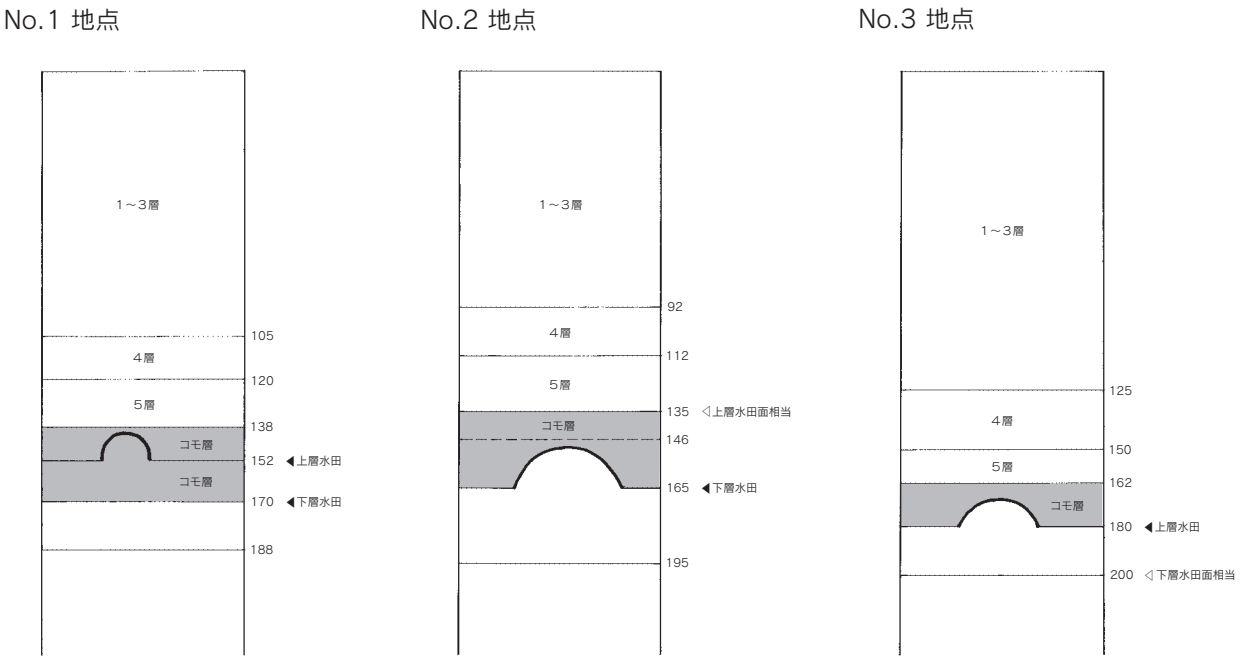


図238　畦畔確認地点位置図(1/1000)



※数字は表土からのマイナス高、
層序名は梅白遺跡基本土層対応

図239　基本土層模式図

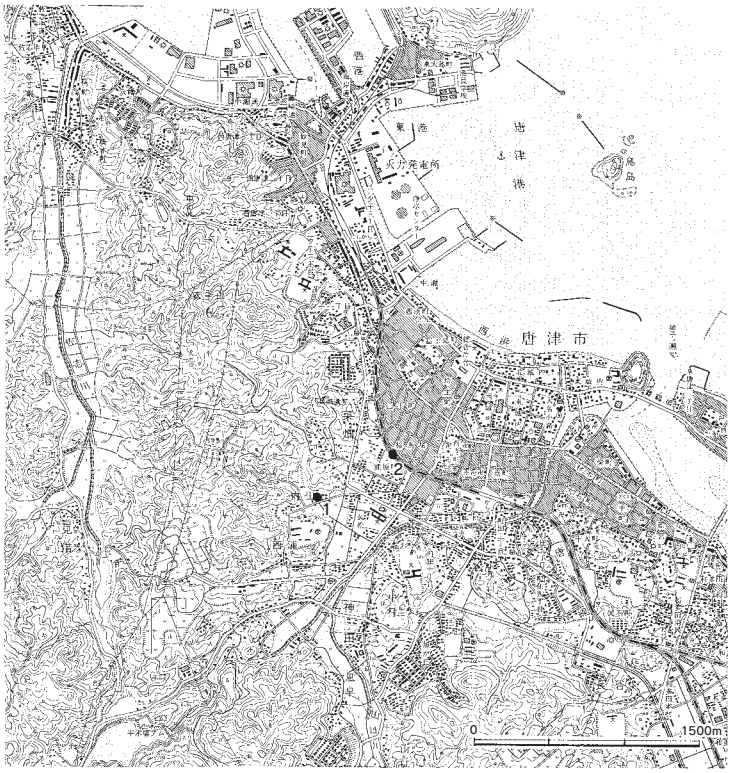


図240　遺跡位置図(1/50000)　1.菜畑内田遺跡
2.巡見道遺跡

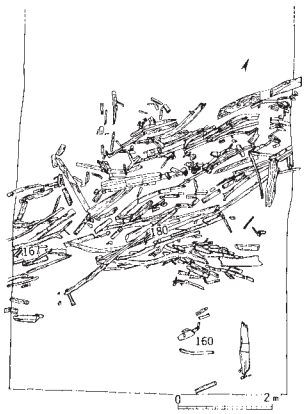


図241　巡見道遺跡A－1区検出遺構(1/16)

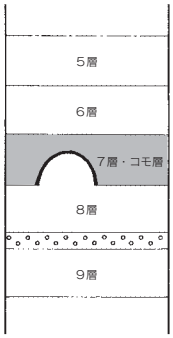


図242　菜畑内田遺跡基本土層模式図

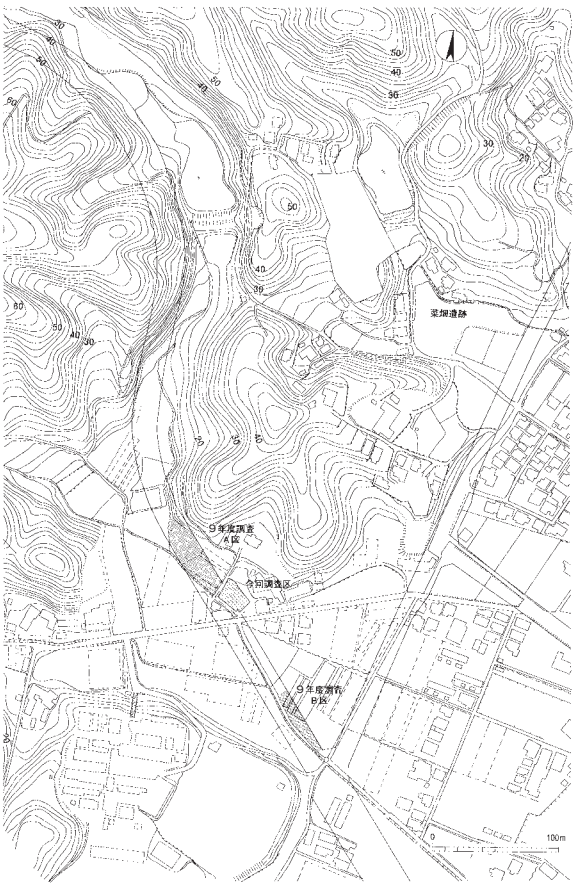


図243　菜畑内田遺跡調査区位置図

図244　菜畑内田遺跡3次調査遺構配置図(1/240)

約２ｍ～３ｍに自然木を多数横たえ、さらに杭を打ちつけており、材の中からは農具などの木製品が出土している。旧砂丘列より後背湿地に至る範囲に等高線と直交して、同一方向（N40°E）をもって一定の距離に並んでおり、その時期は弥生中期頃と推定される。調査担当者も水田跡との関連を示唆されている（中島1982）。

このように町田川流域の古砂丘列の後背湿地でも、菜畑遺跡、巡見道遺跡、菜畑内田遺跡などの水田跡、水田関連遺跡が確認されこれらが古砂丘上の集落・墳墓群を発達される生産基盤になっていたことはほぼ証明されたといってよいだろう。結果として、町田川流域の古砂丘列上には後漢鏡や銅釧、巴形銅器を出土した桜馬場遺跡が出現するのであろう。これと、全く同様な事例が宇木川・半田川流域にもみられ、古砂丘上に中原遺跡が出現するのはその後背湿地の生産基盤によるものだろう。

５，おわりに

唐津平野は地形の発達に伴い遺跡の変遷がおえる絶好のフィールドである。調査時において常々疑問であったのが梅白遺跡の古墳水田廃絶であった。コモ層に覆われて廃絶した理由を環境あるいは政治的動向など何に求めるかということであった。古代人が苦労して開発した水田を放棄した理由はまだわからない。これをとりかかりに地形の発達と遺跡の変遷を時折考えてみたがまだ消化不十分な結果で時間切れとなった。ただしまだ、筆者には今後の時間が残されているし、同様のテーマで研究をされる諸氏の参考になれば幸いである。

参考文献

木下巧1981『古代末盧文化資料集成』肥前文化史研究会
中島直幸1982「巡見道遺跡」唐津市文化財調査報告書第3集
都出比呂志1983「古代水田の二つの型」『展望・アジアの考古学』
石野博信1990「５世紀の変革」『古墳時代史』雄山閣
岩尾峯希1999「菜畑内田遺跡（２）」唐津市文化財調査報告書第87集
岩尾峯希2000「菜畑内田遺跡（３）」唐津市文化財調査報告書第93集

弥生・古墳水田出土杭の型式変化

小　松　　譲

１，はじめに

梅白遺跡の調査では弥生時代・古墳時代の水田跡を検出した。それぞれの水田跡には多量の杭を打ち込んだ大畦畔がつくられていた。とくに弥生水田の大畦畔は蛇行する自然流路に沿ってつくられており、自然木や建築部材までも芯材として利用し、多量の杭を打ち込んだものであった。

調査時において、これらの杭を観察すると数種類に分類できることがわかり、とくに弥生時代水田と古墳時代水田の杭では明らかな違いがあることが判った。

低湿地の発掘調査では杭を検出することが非常に多い。しかし、杭が打ち込まれた時期を特定することは非常に困難である。杭により遺跡の時代をある程度決定できれば今後の調査の一助となろう。ここでは杭の分類を行いその変遷を考えてみた。

２，対象試料と分類

（１）対象試料

弥生水田・古墳水田の大畦畔に打ち込まれた杭を対象としたがすべての杭の分類を行うことは不可能であったので、代表的な大畦畔の杭を対象とした。対象試料は次のとおりである。

弥生上層水田

SF175大畦畔（D-－６、E-－６、F-－６、G-－６グリッド）228点

SF176上層大畦畔（E-－７、F-－７、G-－７グリッド）68点

SF178大畦畔（C-－１、D-－１、E-－１グリッド）207点

弥生下層水田

SF176下層大畦畔（E-－７、F-－７グリッド）154点

古墳下層水田

SF171大畦畔（C-－３、D-－３、E-－３、F-－３、G-－３グリッド）70点

（２）分類

杭の分類を図245に示す。杭は樹皮のついた丸木を利用するものと径の大きな材をミカン割りして杭として加工するものがある。A、B類は丸杭であり樹皮を残す。A類は丸杭・大で径が４cm～８cmでB類は丸杭・小で径が１cm～４cmである。A、B類は先端部の加工によってさらに３つに分類した。ａは片側のみから削るもの、ｂは鉛筆状に先端を尖らせるもの、ｃは先端部が折れるものである。小分類のａ

図245　杭分類図

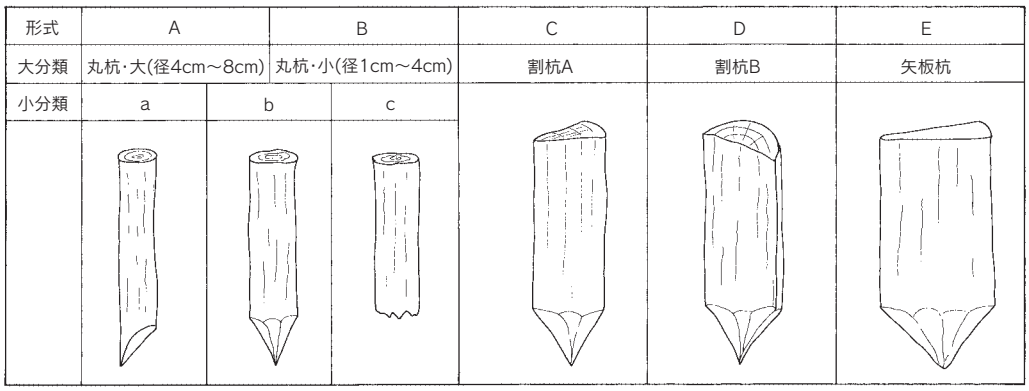


図246　弥生水田出土杭形式比率

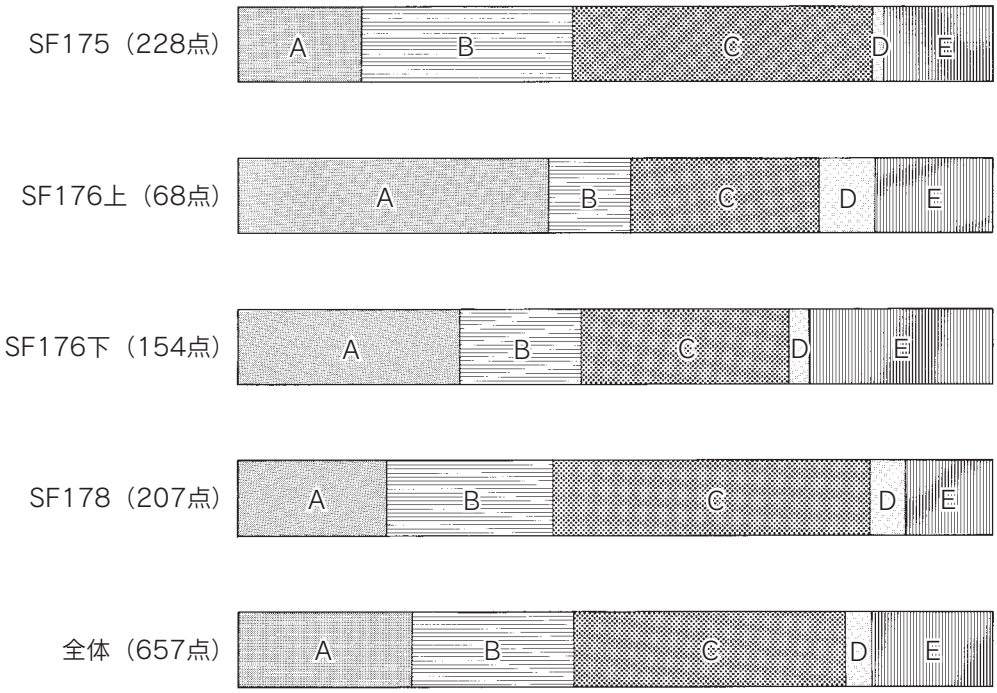
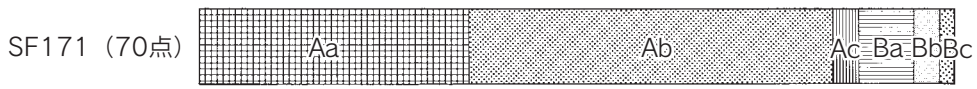


図247　古墳水田出土杭形式比率



～ｃは古墳水田・SF171の杭に用いた。Ｃ類はミカン割り材を杭に加工するもので、Ｄ類は半裁した材を杭に加工するものである。Ｅ類は矢板状の杭である。

３，杭の型式比率

出土した杭を分類し、その比率を帯グラフで示した。図246は弥生水田出土杭の型式比率で、図247は古墳水田出土杭の型式比率である。弥生水田出土の杭型式はＡ～Ｄ類すべてがみられる。４条の大畦畔で同じような型式比率であることから、この比率は有効であろう。最下段に全体657点の杭の型式比率を示す。それによるとＣ類が約35％を占め最も多く次にＡ・Ｂ類が約20％、そしてＥ、Ｄ類とつづくことがわかる。

古墳水田出土杭はＡ類とＢ類のみである。Ａａ類とＡｂ類で約85％をしめる。古墳水田出土杭にＣ、Ｄ、Ｅ類がみられずＡ類とＢ類のみで構成される点に注目したい。弥生時代の杭と古墳時代の杭では明らかな変化がみられる。同様の視点で浜玉町大江前遺跡、唐津市中原遺跡出土の杭列を観察してみたが、古墳時代以降の杭はＡ、Ｂ類であろうことが推定できた。調査時に杭列を検出した場合、杭を観察しどの分類の杭が多いかを調べたら弥生時代か古墳時代以降であるかがある程度推測できることになる。

杭をつくる場合、Ｃ、Ｄ、Ｅ類の方が大ぶりの木を切り出し、割って杭を加工するため多くの労力を必要とする。Ａ、Ｂ類は１本の杭を加工するのは労力を必要としない。このように杭を加工する際の協業の変化が杭の型式変化を促しているのではなかろうか。

佐賀県唐津市梅白遺跡出土資料の年代学的調査

国立歴史民俗博物館
考古研究部　藤尾慎一郎（助教授）
情報資料研究部　今村峯雄（教授）・坂本稔（助手）

1　調査概要

佐賀県唐津市原所在の梅白遺跡から出土した、弥生時代早期に比定されている２点の杭、２点の土器に付着していた炭化物を炭素14年代法によって調査して、次の４点が明らかになった。

・杭は２点とも樹齢20年以下のクリ材で、年輪年代測定には適さない。杭２点と土器付着炭化物について炭素14年代法による年代測定を行った。

・２本の杭が伐採された炭素14年較正年代（以後、較正年代と呼ぶ）は、前９世紀から前８世紀後半であった。

・土器付着炭化物３の較正年代は、前９世紀から前８世紀後半であった。また４の較正年代は前14～11世紀と極端に古く出た。４に関してはもともと試料の量が少なかったことが関係している可能性がある。

・これらの年代は、ほかの遺跡の試料について最近得られている炭素14年代法にもとづく較正年代と互いに整合性がとれているが、現状ではさらに測定値の蓄積を進め確認してゆくことが重要であろう。

2　調査の経緯

梅白遺跡は、佐賀県唐津市原に所在する。西九州自動車道路建設に伴って調査された、弥生早期と前期の水田、住居跡が見つかった遺跡である。遺跡は末盧国の中心部である中原遺跡から東へ１kmほどしか離れていないところに所在するため、これまでよくわからなかった末盧国中心部における弥生開始期の集落や生産基盤を知る手がかりになる遺跡と考えられている。これまで唐津市では1960年代に宇木汲田貝塚、1980年代に菜畑遺跡などの調査がおこなわれ、弥生時代の九州北部でももっとも早く本格的な水田稲作が始まった地域のひとつであることがわかっている。また出土した木炭や炭化米を対象にβ線による炭素14年代も測定されてきており、弥生開始期の実年代を知る初期のデータを提供してきた地域でもある。AMSを利用した今回の炭素14測定による調査は、これまでより精度の高い年代が得られるだけでなく、土器に付着した炭化物の年代が得られることにより、これまで出された炭素14年代によって考えられてきた弥生早・前期の年代観を見直す手がかりが得られることが期待された。

3　試料の選定

弥生前期の水田の下層に伴う自然流路SD187に、流れに対して直角に打ち込まれていた杭２本を資料とした。出土した土器からこの流路は夜臼Ⅱ式に比定されている。また土器に付着した炭化物を目的に６点の資料を選んだが、年代を測定できたのは２点にとどまった。年代が測定できたのは、次の４点である。

・　資料１（杭）　杭の頭から２cmのところを起点に、幅1.5cmを切断し、試料とした（写真１）。

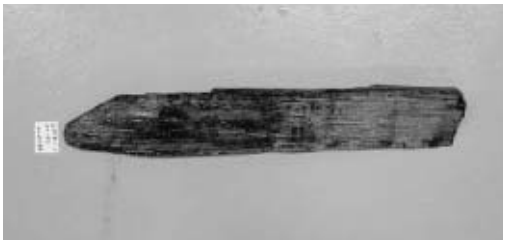
・　資料２（杭）　杭の頭から２cmのところを起点に、幅1.5cmを切断し、試料とした（写真２）。

・　資料３（甕）　図157-13　板付Ⅰ式の影響を受けて変容した突帯文甕の口縁下に付着した炭化物を採取（写真３）

・　資料４（甕）　図14-20　夜臼Ⅱ式の二条甕の頸部に付着した炭化物を採取（写真４）

4　土器の考古学的年代

資料３は、口縁下端部をつまみだし刻目をほどこしたいわゆる口縁下端突状甕である。口縁部がわ



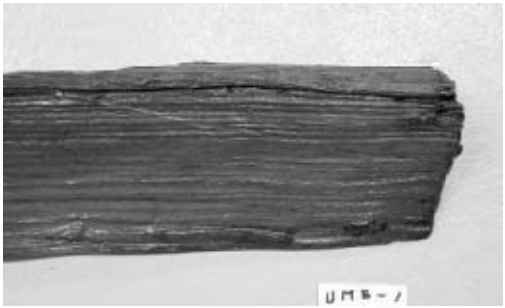


写真１　資料１（杭）

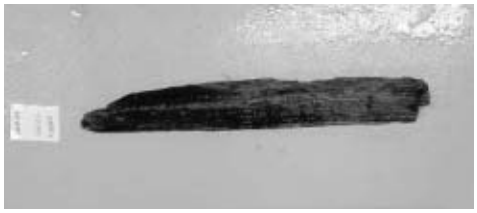
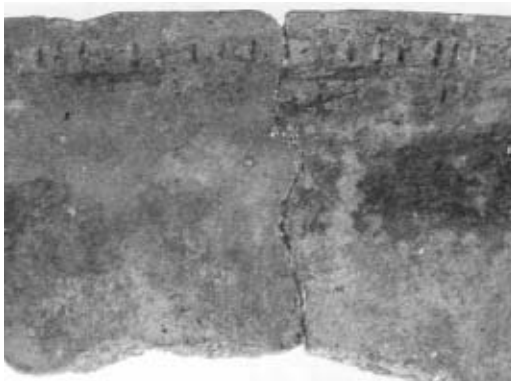


写真２　資料２（杭）

写真３　資料３　突帯文土器



付着炭化物

写真４　資料４　突帯文土器

付着炭化物

ずかに外反しているところから、板付祖型甕や板付Ⅰ式甕の影響を受けていると考えられるため、夜臼Ⅱｂ式に併行すると考える。資料４は、口縁部、屈曲部ともに貼り付け突帯をもつ屈曲型の二条甕で、突帯間の幅が短いものである。夜臼Ⅱｂ式に比定できる。

５．杭の材質について

広葉樹の環孔材で、国立歴史民俗博物館の辻誠一郎氏の判定によれば樹種はクリである。

６．杭からの年代測定用試料の採取

木材の表皮からの年代が明らかな年輪資料を取るため、年輪観察を行った。資料をビーカーに入れ、純水中で超音波洗浄し、付着した泥などの不純物を除き、実体顕微鏡下で観察し年輪の確認を行った。資料１は16年輪、資料２は15年輪を数えた。それぞれ試料を短冊状に切り取り、外側から５年輪を切断し年代測定用試料とした。

７．試料の前処理

炭素14測定のための手順は、(1)試料の物理的洗浄、(2)化学洗浄（AAA処理）、(3)燃焼による炭酸ガス化、(4)炭酸ガスの精製、(5)炭酸ガスからグラファイト炭素への転換、(6)加速器質量分析法（AMS）によるグラファイト炭素中の炭素14濃度の測定である。外部依頼した手順以外は、国立歴史民俗博物館の年代測定試料実験室で行った。

まず、杭の木材試料については市販のミキサーにかけ（１～２分）、純水中でミリメートル程度に粉砕した。これをナイロン製メッシュでろ過、洗浄した。洗浄した試料は110℃で乾燥した。

試料１，２については、0.05-0.1グラムの乾燥試料を、地球科学研究所（株）を通じて、米国Beta Analytic 社に、(2)以下の操作を含め、AMSによる炭素14測定を依頼した[1]。

炭化物試料については、坂本が担当し顕微鏡下で異物等のチェックを行った後、全量を用いてAAA処理以下の操作を行った。試料に含まれる無機質の炭酸塩などの除去を目的として1N塩酸約50ml中で80℃、１時間かけて洗浄（２回）した。次にフミン酸等の汚染成分の除去のため0.1N-NaOH（苛性ソーダ）で同様に80℃、１時間（３回）洗浄した。さらに、1N塩酸で80℃、１時間弱処理し、浄水が中性になるまで純水で数回洗浄する操作を行った。試料はろ過し、110℃で乾燥した。

次に、試料を酸化銅約500 mgとともにバイコール管に投じ、真空下で熔封し、これを電気炉で950℃、３時間加熱して炭酸ガスに転換した。さらに生成した炭酸ガスを精製用の真空ラインで不純物を取り除いた。この精製ガスをガラス管に熔封し、地球化学研究所（株）を通じて、米国Beta Analytic 社に (5)以下の操作を含め、AMSによる炭素14測定を依頼した。

８．測定結果

測定結果を表１にまとめた。表１における年代につけられた誤差は、測定における統計誤差（１標準偏差、68％信頼限界）によるものである。なお、AMS測定では、同時測定した標準試料のデータによって規格化を行い、再現精度と正確度の評価を行っており、測定値に含まれる誤差には、測定における計数の統計誤差と標準データの再現精度の結果が反映されている。

炭素14の年代データの14C BPという表示は、西暦1950年を基点にして計算した炭素14年代（モデル年代）であることを示す（yr BPで表現することが多い）。

最近のAMS測定では、グラファイト炭素試料の炭素14/13/12同位体比を一括して加速器により測定する。AMS測定では、試料自体の炭素の同位体分別効果(mass fractionation effect)以外に、測定装置・測定条件による同位体差別効果（mass discrimination effect）が存在するためである。これらの効果を補正するために加速器で得られた炭素13/12同位体比（δ13C値2)）を-25.0‰に規格化し、炭素14/12同位体比年代値を求

める。表のconventional ageとはこの同位体効果を補正した後の値である。

なお、試料自体の炭素の同位体効果（δ13C値）は加速器では正確に得られないので、別の炭酸ガス試料をガス質量分析計で測定する。この値は、試料の特性をあらわすもので、表の値は、この数値を示してある。炭化物については、試料量が少なかったため、δ13C値を求めるための試料が確保できなかったので測定されていない。

表１

試料ID	測定機関番号	試料のδ^{13}C値 (per mil)	炭素14年代(^{14}C BP) （conventional age）
UME-1	Beta-174312	-32.8	2600±40
UME-2	Beta-174313	-25.0	2680±40
UME-3	Beta-172136	--	2660±40
UME-4	Beta-172137	-	2970±40

９．暦年較正

年輪年代と炭素14年代との対応関係を示す暦年較正曲線（炭素14年代を暦年代に修正するためのデータベース、1998年版：INTCAL981））をデータベースとして用いて解析した結果を図1に示す。解析はオックス・フォード大学でベイズ統計の考え方を導入したOxcalプラグラムに準拠した計算法を用いた(表2)。図2では、年代を確率分布で示してあり、全体の確率が１になるように規格化してある。暦年較正曲線自体は、過去の大気の^{14}Cの変動に加えて14Cの測定誤差も重なり複雑であるため確率分布曲線はやや複雑な形になっている。この解析をもとに年輪試料の年代を、95%の確率範囲で推定すると別表のような結果が得られる。ここでcal BCという表示は、暦年較正を行った年代（この場合紀元前）であることを示し、数字は５年で丸めた値を示してある。括弧内は推定確率を示す。確率が１％未満の範囲については省略した。

表２

試料ID		較　正　年　代
UME-1	外皮から1-5年輪	830-750 cal BC (78%) 680-660 cal BC (6%) 630-580 cal BC (8%) 580-540 cal BC (4%)
UME-2	外皮から1-5年輪	900-790 cal BC (95%)
UME-3		900-750 cal BC (95%)
UME-4		1360-1350 cal BC (2%) 1310-1040 cal BC (93%)

２本の杭の較正年代は非常に接近しており、同時期のものであるとみられる。また、杭の伐採年代はこの年代よりさらに少なくとも2.5年若い年代であることに注意しなければならない。

10.まとめ

夜臼Ⅱ式に比定した杭と夜臼Ⅱｂ式に比定された土器の年代は、資料４を除いて前800年を中心とする時期に80%以上の確率で収まっていることがわかる。これは従来の年代観からすると500年ほど古い年代である。果たしてこの年代についてどのように理解すればよいのであろうか。検討する上で参考となるデータが存在するので三つの視点から検証しておこう。

①玄界灘沿岸地域の諸遺跡との関係

まず、炭素14年代法により分析した福岡市早良区橋本一丁田遺跡、同博多区雀居遺跡の夜臼Ⅱ式の年代である。詳細はそれぞれの報告書を参照していただくとして、２遺跡とも夜臼Ⅱ式の較正年代が前900～前750年に95％の確率で収まることが明らかになっている。これは梅白遺跡の今回の年代と整合する年代である。つまり従来の年代観より500年ほど古い年代だが、梅白だけがとびぬけて特異な年代であるわけではなく、玄界灘沿岸地域の当該期の遺跡においては、炭素14から得られる一般的な較正年代であることを意味している。

さらに突帯文土器に先行する縄文晩期黒川式の炭素14年代は、玄界灘沿岸地域の資料ではないものの、九州東北部と九州南部の資料から前1400～前1100年という較正年代を得ている。夜臼式の炭素14年代との間で整合性はとれていることがわかる。ただ、③で述べる東北地方との関係では問題が起こる。すなわち晩期はじめの大洞B式よりも黒川式の方が古く出てしまうものが含まれている点である。これについてはやはり関連資料の蓄積が必要となってこよう。

②韓半島南部との関係

このことは対岸の韓半島南部との関係においても同様である。すなわち夜臼Ⅱｂ式の年代が仮に前800年ごろを上限とするならば、夜臼Ⅱ式や山の寺式は前10世紀半ばくらいまではさかのぼるものと考えられる。前10世紀といえば、東國大學校の安在晧が韓半島南部で無文土器時代が始まった時期と考えてきた年代だけに、その関係が注目される。今回歴博では、韓国南部の突帯文土器が出土した住居跡で見つかった木炭などを数点分析したが、その年代は前1100～前1000年というものであった。これは以前、晋州南江ダムの建設に伴う調査で発見された大坪里・漁隠遺跡１地区110号住居跡（突帯文土器）から見つかった炭化米の年代である2850±60 yBP（較正年代で前1190～前1135（7.3%）、前1130～前890（82.6%））とほぼ一致する。

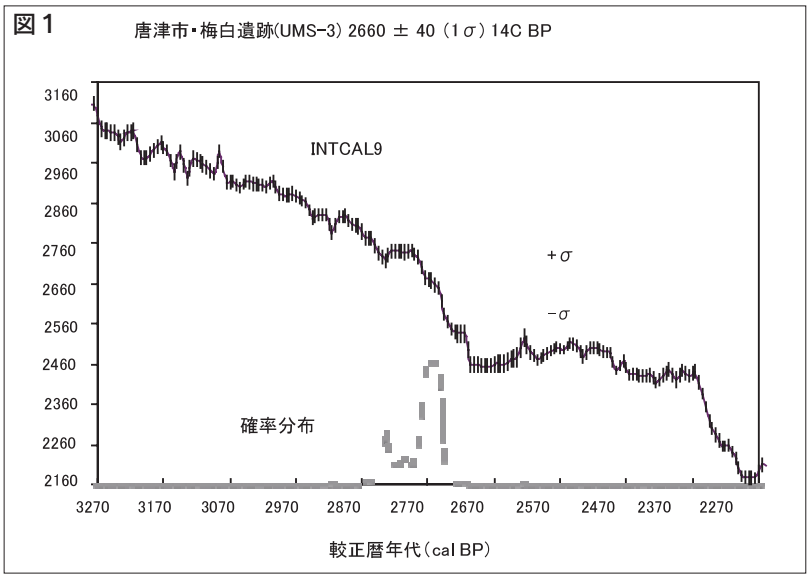
これは韓半島と西日本の突帯文土器の関係に大きな影響を与えることになる。これまで西日本のもっとも古い突帯文土器の年代は前500年ごろと考えられていただけに、韓国の突帯文土器が水田稲作とともに西日本に伝播して日本の突帯文土器が成立したという、韓国の研究者が主張する説は成り立ちにくいと考えてきた〔藤尾2002〕。ところが、今回のデータをとるとすれば、韓半島との時間差は百年弱ということになり、時期的な問題はなくなってしまうことになる。このように今回の結果は、日本の突帯文土器の出自に、大きな影響を与えることは必至である。

③東北地方との関係

東北地方北部の縄文晩期との関係である。雀居遺跡第４次調査では夜臼Ⅱa式に伴って大洞C2式の壺が出土している。つまり前900年頃という夜臼Ⅱ式の年代が大洞C2式との関係で整合性をもつのかという問題である。歴博の坂本稔が青森県是川中居遺跡で採取した漆の炭素14年代法による測定では、晩期前葉の大洞B式は前1100年という結果が出ている。これはこれまで前10世紀ごろと考えられてきた晩期の始まりの年代が100年ほど古くなることを意味している。大洞式はB、BC、C1、C_2式と変遷するので、C_2が伴った夜臼Ⅱa式の年代が前900年頃に比定されるという成果は、大洞C_2式の年代が大洞式の編年体系の中

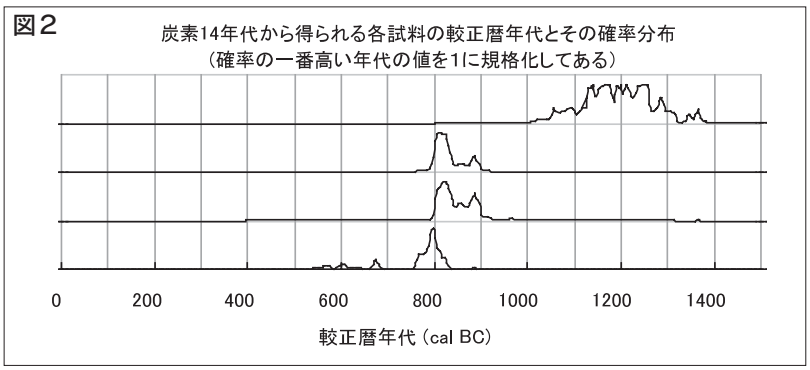
でも整合性をもつ年代であることを示している。

しかし①で述べたように、晩期の黒川式が晩期の指標である大洞式よりも古くなるものを含んでいることなど、問題は残されている。



以上、梅白遺跡のある玄界灘沿岸地域および九州においては、夜臼式、黒川式とも逆転することもなく整合性のとれた較正年代が得られたといえる。しかし一方では、韓半島の突帯文土器との年代差がなくなったこと、東北晩期初頭の年代との関係、そして板付Ⅱa式に併行する近畿長原式(第Ⅰ期古・中段階)の較正年代が、前６～５世紀ごろに中心をもつことを考えると、近畿の年輪年代との関係も再考しなければならないなど、解決すべき問題は山積していることがわかってきた。今後はさらなる類例の増加に努めつつ、得られた年代の考古編年との関連を詳細に検討してその妥当性について考えていきたい。

この分析は、日本学術振興会科学研究費平成14年度基盤研究（A･1）（一般「縄文時代／弥生時代の高精度編年体系の構築」（代表・今村峯雄）の成果の一部を用いている。１から４は藤尾が、５から９は今村が、10は、藤尾と今村が執筆した。



註

1) Beta Analytic社は、世界のAMS施設（大学、研究所）と契約を結び、AMSによる高精度^{14}C測定を代行している。木材、木炭、貝などの標準的な試料については、前処理についても、標準化された方法でAAA処理、炭酸ガス化・精製を行い、グラファイト炭素試料を作製し、炭素14測定を行っている。

2) 炭素13/12同位体効果は標準試料blemniteからの偏差値を1/1000単位（パーミル、‰）で表示し、δ^{13}Cで表示される。

参考文献

Stuiver, M. et al. 1998: INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, 24,000-0 cal BP, Radiocarbon , 40, 1041-1083 .

藤尾慎一郎2002：「朝鮮半島の「突帯文土器」」(『韓半島考古学論叢』89-124、すずさわ書店).

遺物から見た縄文時代～弥生時代にかけての梅白遺跡

美　浦　雄　二

１　遺構の変遷について

まず遺構の時期について出土遺物が少なくはっきりしないが、集落部の住居跡はSH222で出土した甕Ⅲ類から田崎編年の板付Ⅰ式土器とみられ、１点であることから確定できないが、板付Ⅰ式土器の時期とする。SH119はそれと並行する時期か若干下ると思われ、SH239は床面直上出土の土器がなく推測であるが、板付Ⅱ式土器の時期と思われる。最も問題となる水田跡の時期であるが、水田跡は出土する土器が少なく、時期特定が難しいが、最下層に位置するSD189は出土した土器から夜臼式土器から板付Ⅰ式土器まで含んでおり、埋没時期は板付Ⅰ式土器の時期であろう。埋土最下層からプラントオパールが検出されており、梅白遺跡の調査区内では検出できなかったが、周辺部にこの時期の水田跡が広がっている可能性が高い。下層水田跡は板付Ⅱ式土器までを含んでおり、埋没時期はその時期か。上層水田跡は被覆している洪水砂から出土する土器から、中期中頃までには埋没していると思われる。堅果類が大量に出土した土坑群であるが、SD189と下層水田跡の間に挟まれていることから、板付Ⅰ式土器～Ⅱ式土器の時期にあたると思われる。微高地水田跡は水路のみの検出であるが、埋土に２種類あり、黒褐色土のものと下層に砂層が入るものに別れ、中世の水路跡に切られていることから中世以前であることは間違いない。出土遺物から見ると弥生時代中期のものが最も多く、それ以降のものは出土していない。そのため弥生時代中期であると考える。

２　遺物について

（１）土器

梅白遺跡の最古の遺物は縄文時代前期の曽畑式土器である。小片であり細かな位置付けはできないが、滑石粉を混入していないことから曽畑式土器でも新しい段階のものであろう。その他並木式土器、阿高式土器が出土していることから、おそらく断続的に生活の場として利用されていたと思われる。ごく少量の出土であるが、砂堆の形成時期と密接にかかわることから注目に値する。

その後梅白遺跡で遺物が見られるのは縄文時代晩期になってからである。黒川式土器の新しい段階の浅鉢が出土している。甕ははっきりしないが、Ⅰ類とした粗製の甕や口縁部に突起がついた浅鉢の中に黒川式土器の甕が含まれているかもしれない。突帯文土器の最古の段階である菜畑13上層式土器は出土していない。夜臼式土器古段階の土器は点数は少ないが浅鉢や組織痕土器出土している。次の夜臼式土器新段階は甕ⅡＢ①類や一部の②類、その他のⅡ類の中に当該期の土器を含む。板付Ⅰ～Ⅱ式土器にかけての時期が梅白遺跡の中で最も多くの土器が出土する。このように見ていくと、突帯文土器の最古の段階は梅白遺跡では空白の時期となるのかもしれない。

甕ⅡＢ②類は梅白遺跡の甕の中で最も出土数が多く、中心となる甕である。その典型的なものは本文中にも述べているように、従来から指摘されている口縁端部を端整に面取りすること、口縁部内面にくぼみを持つことのほかに、口縁端部を外方につまみ出し、そこにヘラ状工具による刻目を施すことが挙げられる。これらの特徴はほとんどの土器にあてはまるが、図16-33は端部のつまみ出しが甘く、刻目も棒状の工具による刺突であることから、古い特徴を示すものと思われる。この他16-34やSH239出土の58-1は肩部の屈曲がほとんどなく直線的に立ち上がり、口縁部の刻目が極浅く、胴部の突帯も退化していることから最も新しい段階のものであろう。その時期であるが、菜畑遺跡と宇木汲田遺跡の調査成果により板付Ⅰ～Ⅱ式土器であろう。しかし他の遺跡出土品との細かな検討を経ていないため、詳しい位置付

けは行っていない。唐津地域の大きな特徴でもあるので、今後の課題として取り組みたい。

板付系の土器でも口縁部が短く外反も弱いものがあり、板付祖形甕と呼ばれている一群が梅白遺跡でも出土しており、注目される。

この他大きな特徴として他地域の土器が出土していることが挙げられる。東九州系の土器が多く、18-46が挙げられる。157-12,13が口縁下端凸状甕とすればこれらも含まれることになる。また18-53もその可能性があり、確認を行っていないが豊後地域の土器に類似品がある。17-45は胎土、焼成が他のものと異なることから搬入品または折衷系の土器とおもわれ、その地域を特定することも含めて検討が必要である。これらの他地域の土器は並行関係を抑える意味でも重要であり、また物の流通が広域にわたっていたことを示すものとして重要である。

（2）石器

ほとんど検討を行えなかったが、石鏃が圧倒的に多く、図化していないものも含めると石器中に占める割合は相当高いものになる。その中でもｂ類とした基部に抉りをもつものとｃ類とした基部が平坦なものが多く出土している。また磨石が比較的多く出土していることは、堅果類の貯蔵穴があることにも対応すると思われる。このように梅白遺跡では水田を検出し、木製農耕具が多く出土しているものの、石器から見るとその他の生業の割合も低くなかったことが窺える。ただし層位的に出土していないため時期ごとの割合は不明である。大陸系磨製石器は加工斧を中心に磨製石鏃も多く、石庖丁は数点しか出土していない。一点だけの出土ではあるが擦り切り技法で作られた石庖丁も注目すべき石器である。しかし前述した石器群と比べるとその量にかなりの開きがある。両刃石斧は破損品が数多く出土しており、点数的には石鏃の次に多い。その他、砥石には突起がついたもの抉りが入ったものなどいろいろなバリエーションが出土している。そのほか磨製穿孔具など多様な石器が出土している。

弥生時代の遺物は多種多様な遺物が出土し検討すべき課題は多くあったが、筆者の怠慢からかなり雑な報告しか行えなかったことを反省し、今後の課題として取り組んでいきたい。

なお弥生時代の遺物で使用した参考文献は以下のとおりである。

参考文献

田崎博之　1994　「夜臼式土器から板付式土器へ」『牟田裕二君追悼論集』牟田裕二君追悼論集刊行会

田崎博之　2000　「水田稲作農耕社会への移行－日本列島の土器・水田・農具の検討」『韓国古代文化の変遷と交渉』尹世英教授　停年記念論集刊行委員会

中島直幸・田島龍太　1982『菜畑遺跡』唐津市教育委員会

藤尾慎一郎　1990　「西部九州の刻目突帯文土器」国立歴史民俗博物館研究報告26

藤尾慎一郎　1991　「水稲農耕と突帯文土器」『日本における初期弥生文化の成立』横山浩一先生退官記念論文集

山崎純男　1980　「弥生文化成立期における土器の編年的研究」『古文化論攷鏡山猛先生古稀記念』

図　　版

1. 集落跡遠景（北から）

2. 集落跡遠景（南から）

1. 集落跡空中写真（北東上空から）

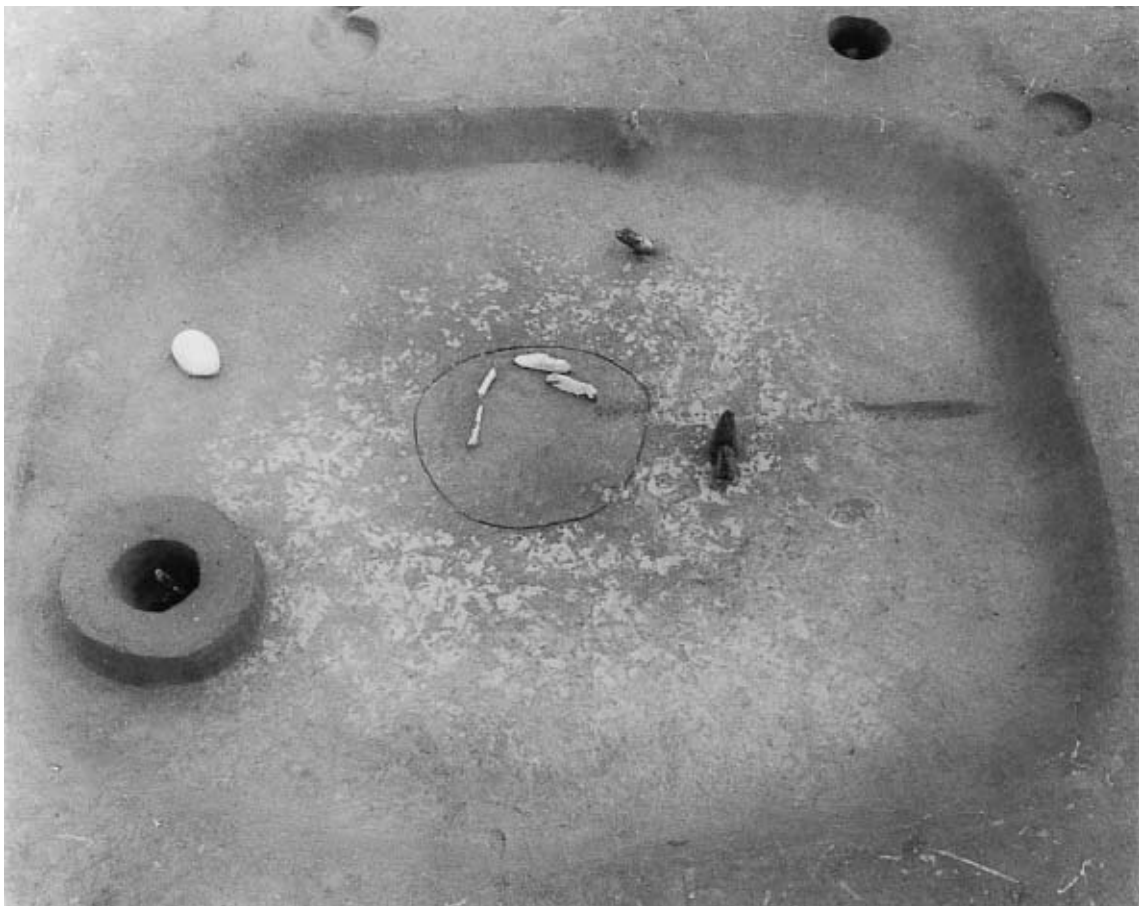
2. 集落跡空中写真（真上から）

1. 旧河道全景（東から）

2. 旧河道土層（西から）

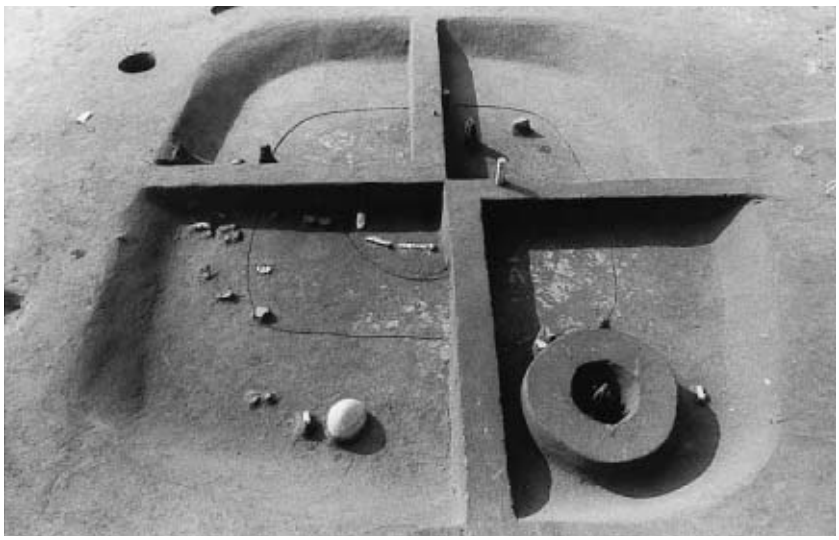
1. 旧河道作業風景（北東から）

2. 旧河道作業風景（南から）



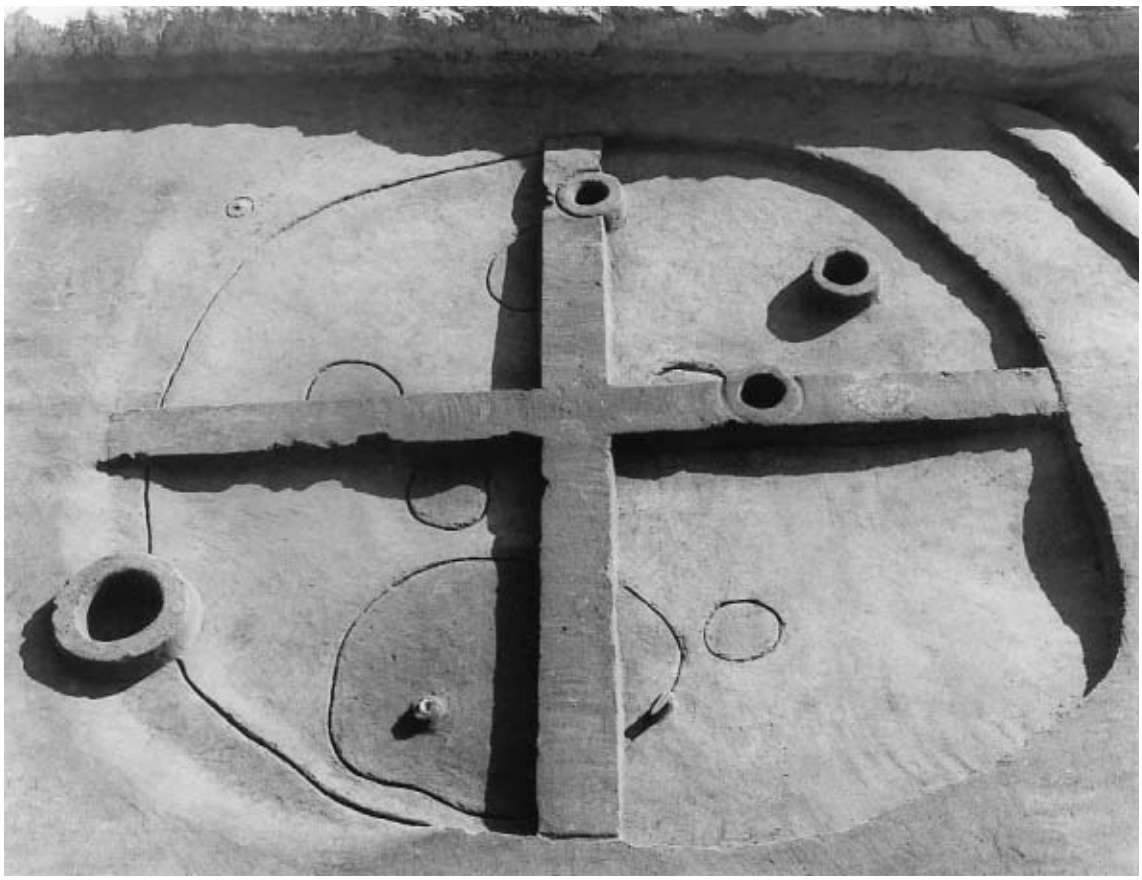
1. SH119(1)（北から）

2. SH119(2)（北から）

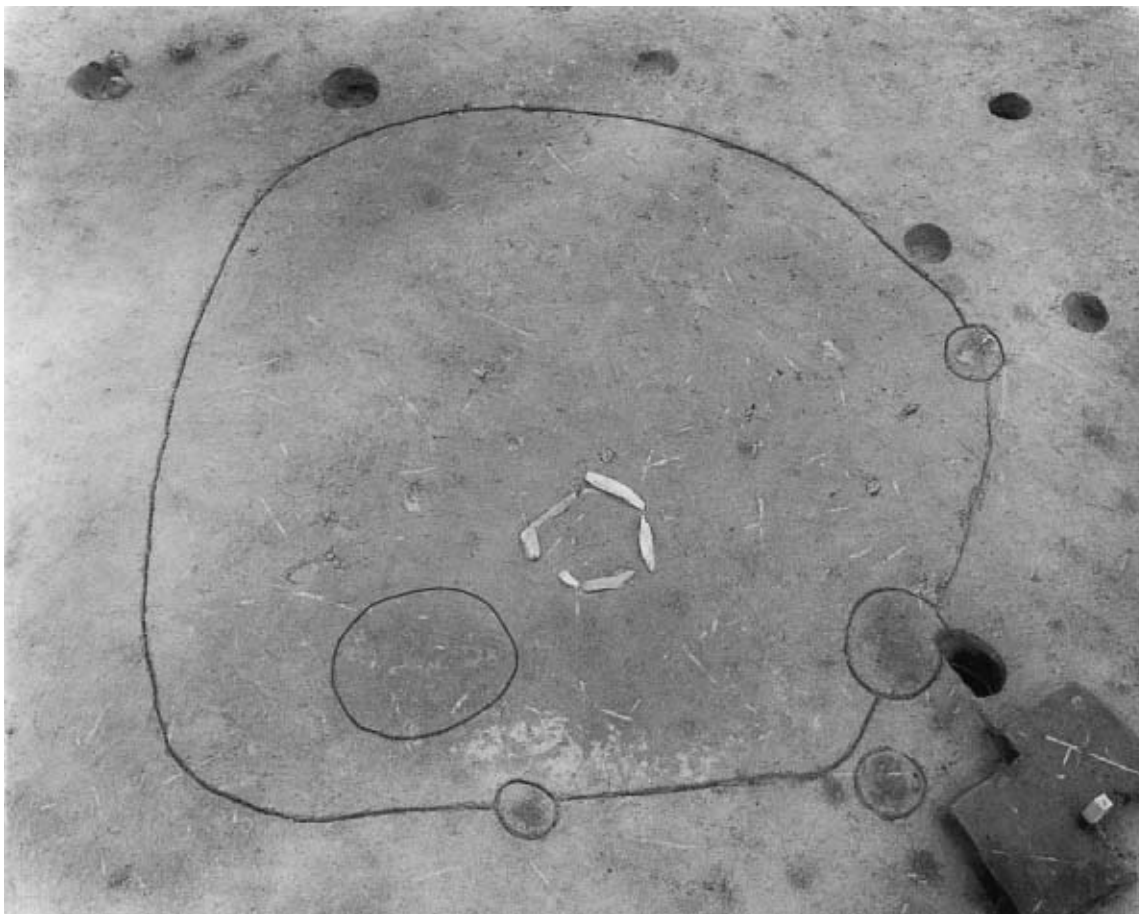


1. SH119遺物出土状況（東から）

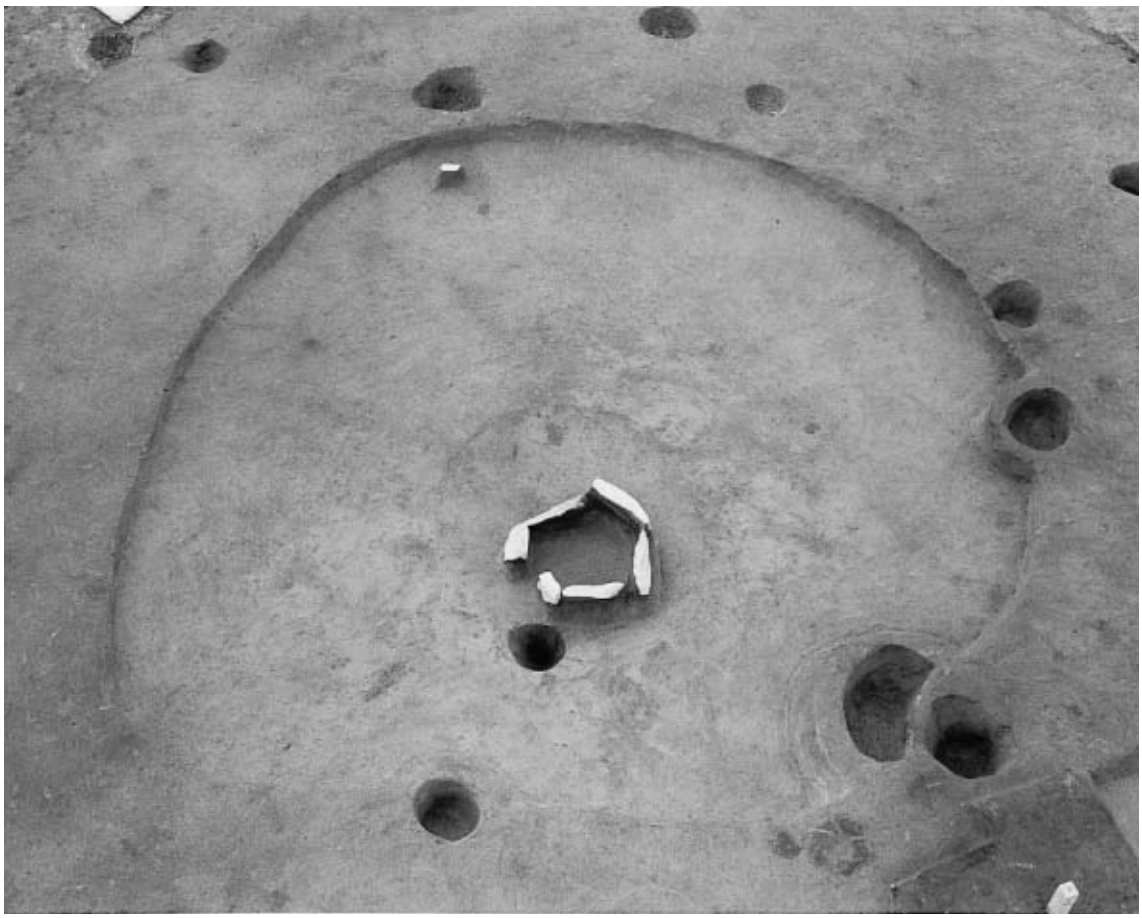
2. SH119炉跡（北から）



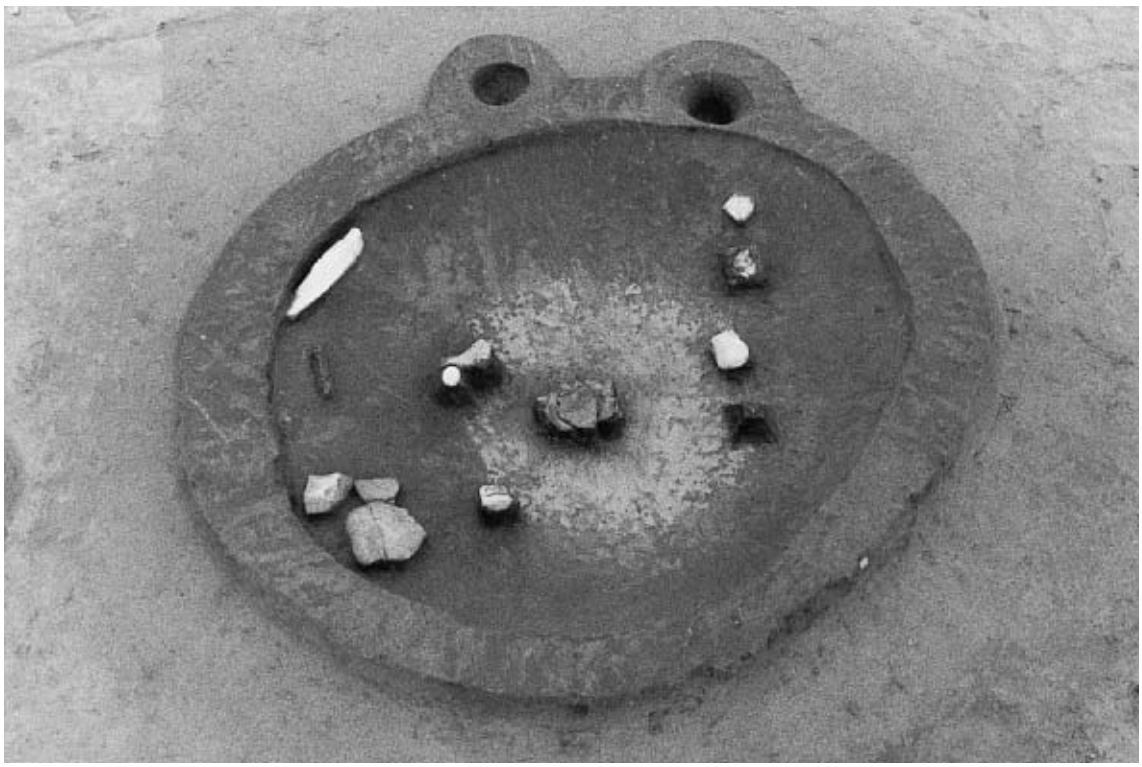
3. SH239（北から）



1. SH222（1）（東から）



2. SH222（2）（東から）



1. SK285完掘（西から）

2. SK285半載（南から）

3. SK285遺物出土状況（南から）

1. SJ292完掘（北から）

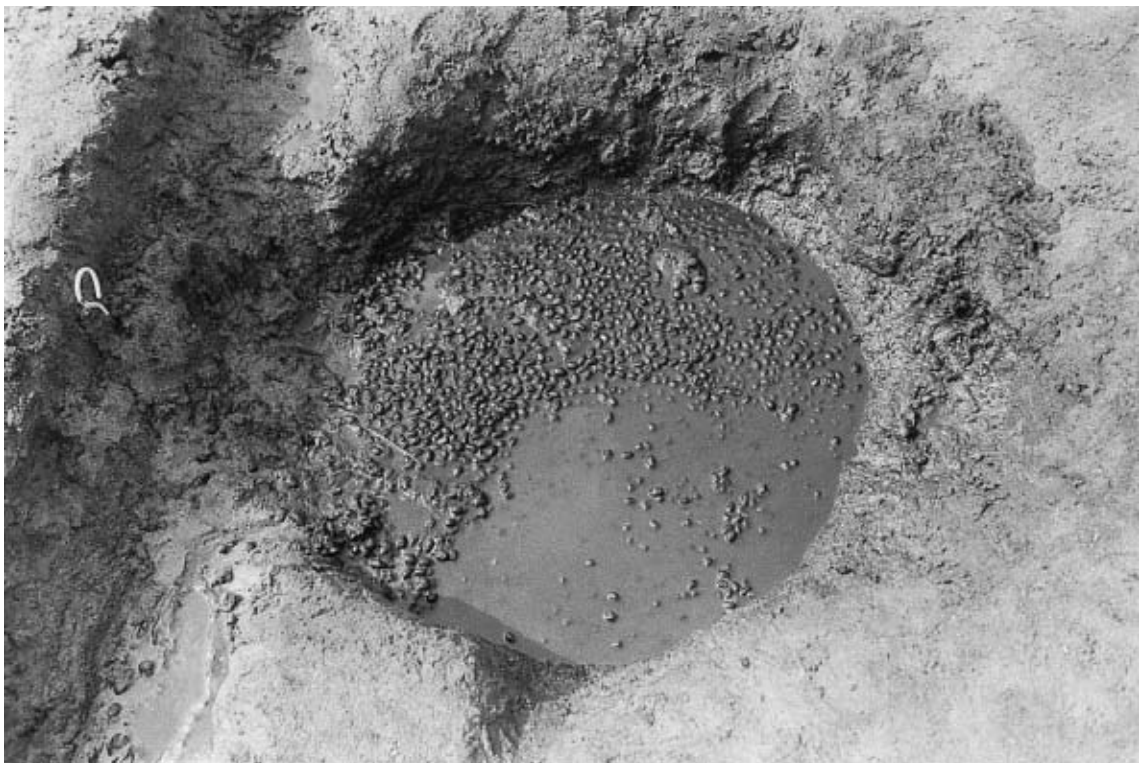
2. SJ292土器棺（西から）

3. SK291遺物出土状況（東から）

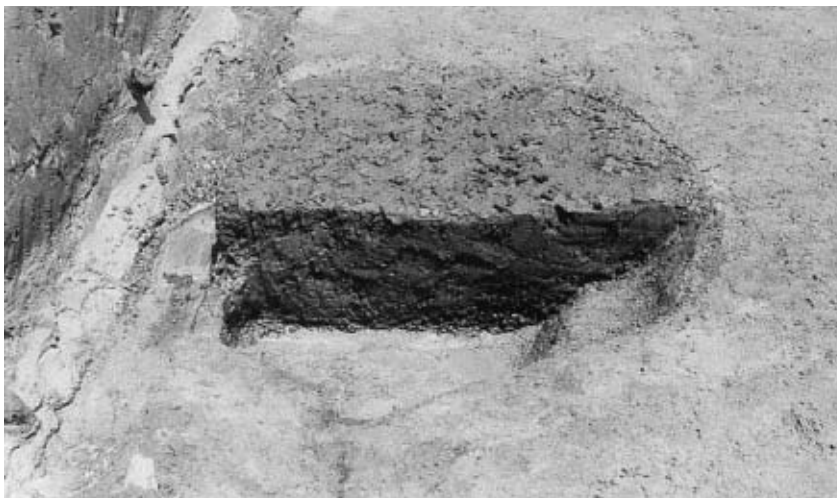
1. SD187と土坑群（北から）

2. SK180（東から）

3. SK180（真上から）



1. SK182堅果出土状況（南から）



2. SK182半載（南から）

3. SK181完掘（西から）

1. SK183（南から）

2. SK184（南から）

3. SK185堅果出土状況

4. SK185完掘

5. SK186半載・堅果出土状況

6. SK186完掘

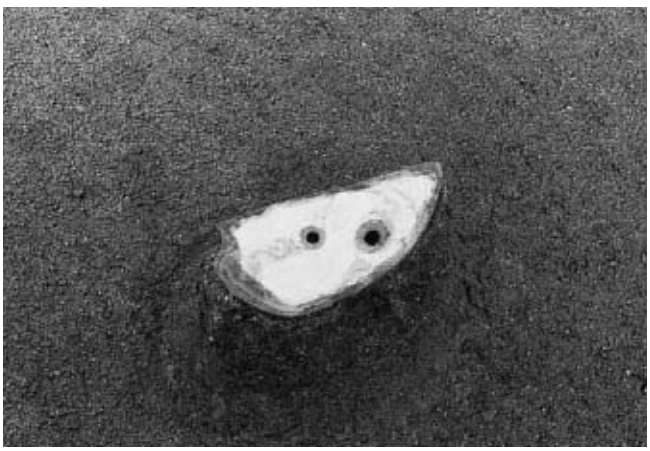
7. SK189・SK190（南から）

1. 弥生土器出土状況・F-15(1)

2. 弥生土器出土状況・F-15(2)

3. 柱状片刃石斧出土状況

4. 磨製穿孔具出土状況



5. 石庖丁出土状況

6. フォーク状木製品出土状況

7. 長柄出土状況

8. 不明木製品出土状況

1. 作業風景・E-11（北東から）

2. 遺物出土状況・E-11(1)（北東から）

3.遺物出土状況・E-11(2)

4. 遺物出土状況・E-11(3)

5. 遺物出土状況・D-8

6. 遺物出土状況・C-5

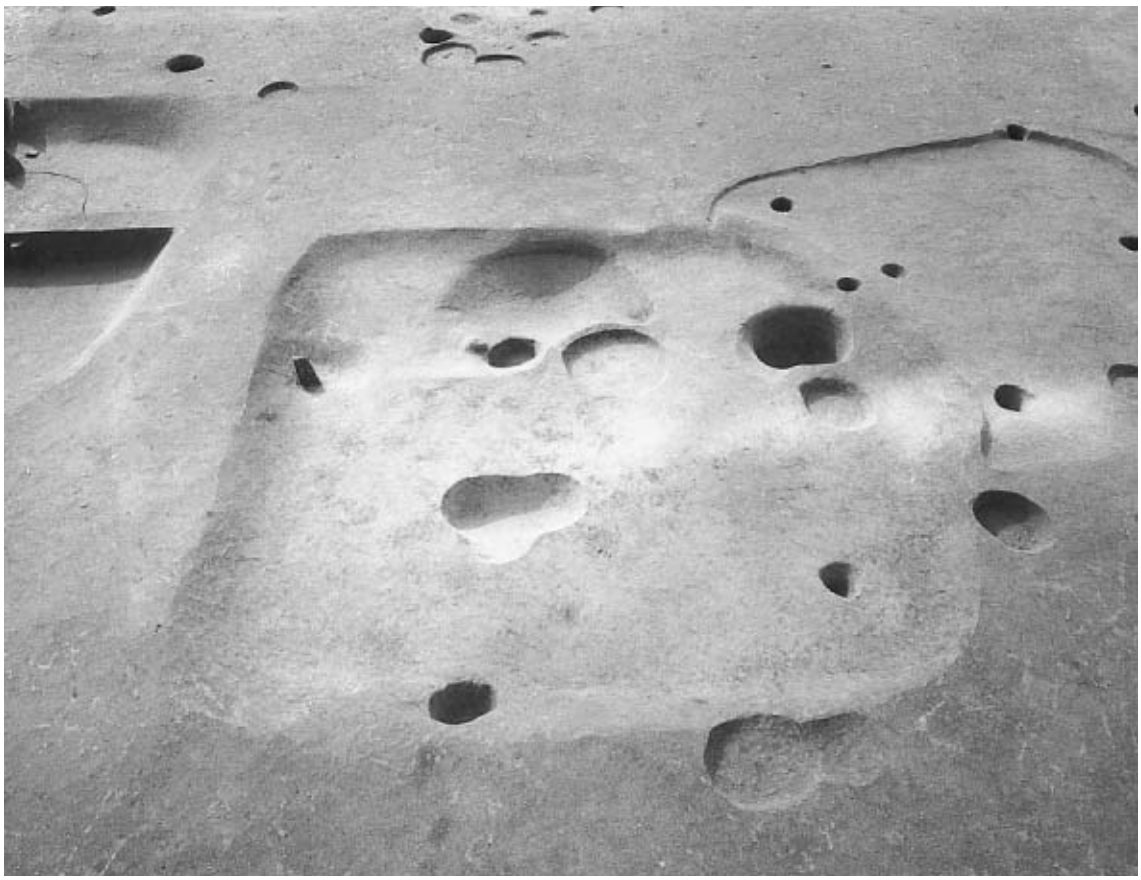
7. 遺物出土状況・D-6

1. SH104（南から）

3. 炉跡

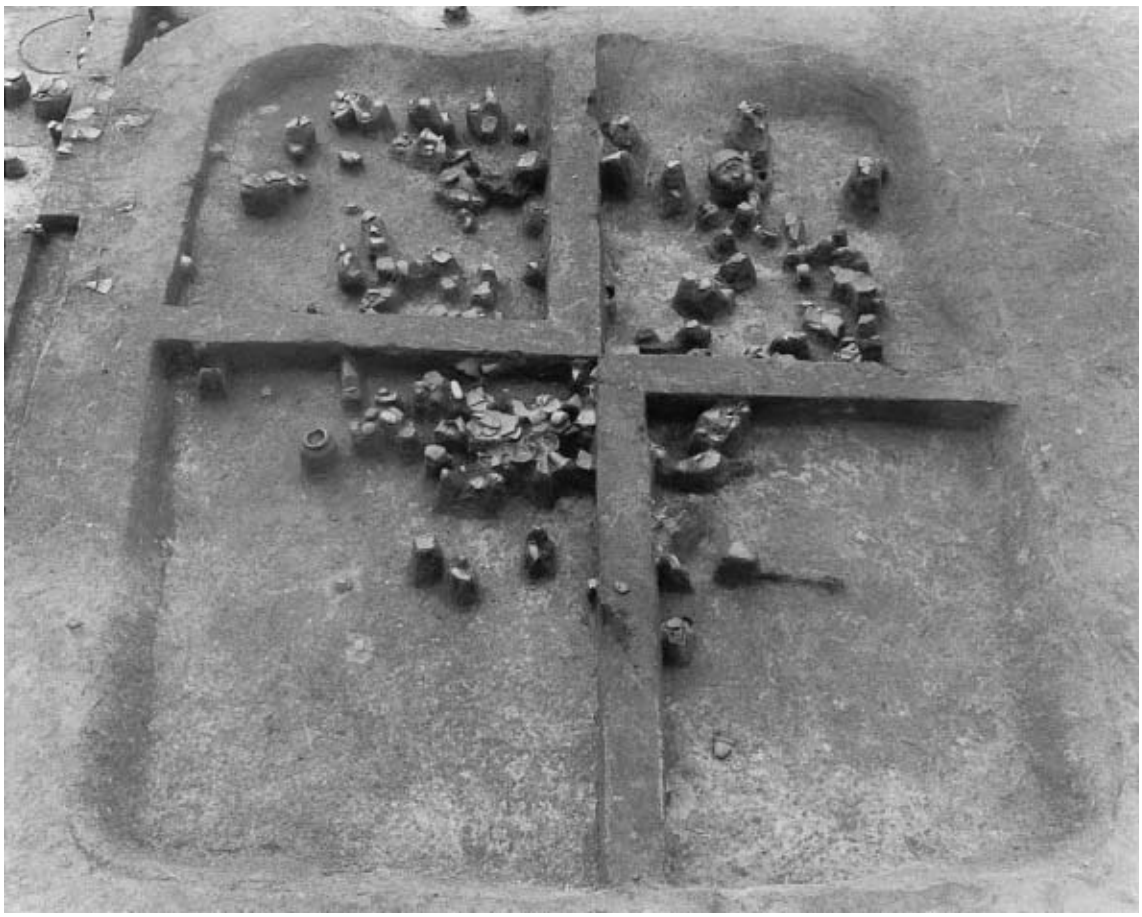
2. 柱穴内高杯出土状況

4. 遺物出土状況



1. SH118（北から）

2. SH122（東から）

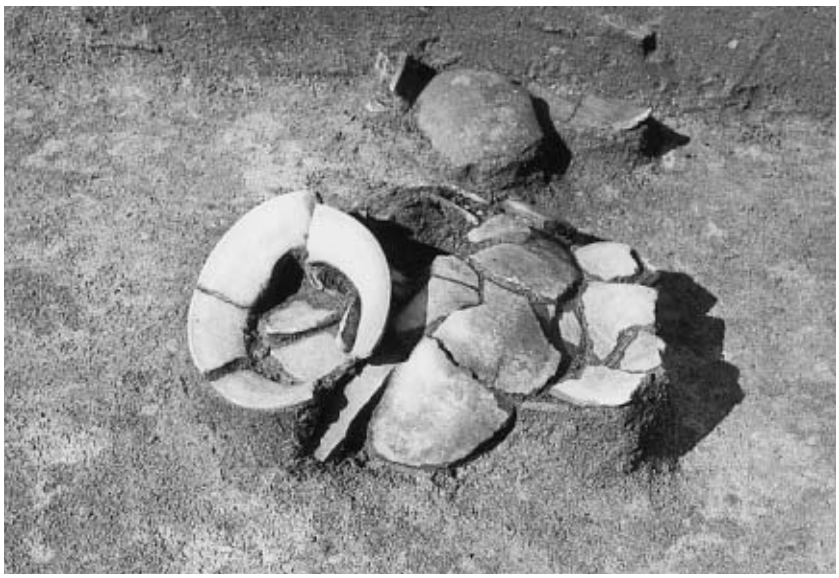


1. SH121遺物出土状況（東から）

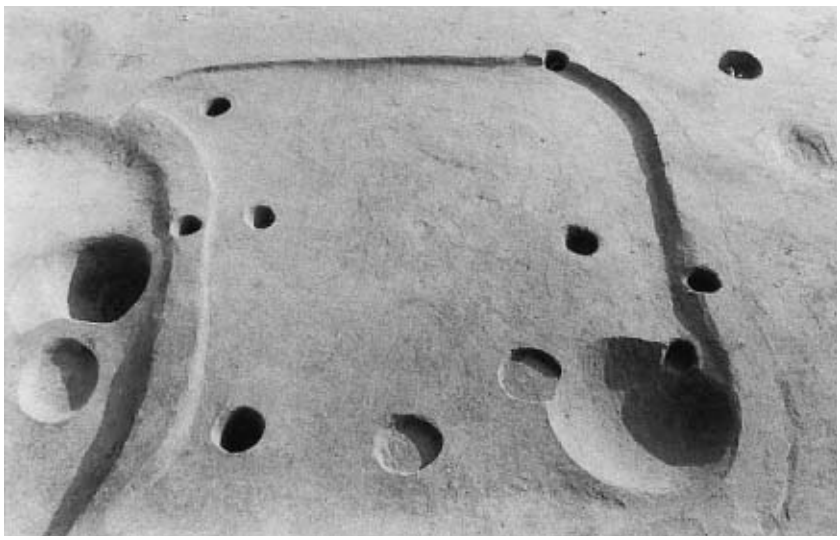
2. SH121完掘（北から）

1. SH121遺物出土状況（南東から）

2. SH121土層（南から）

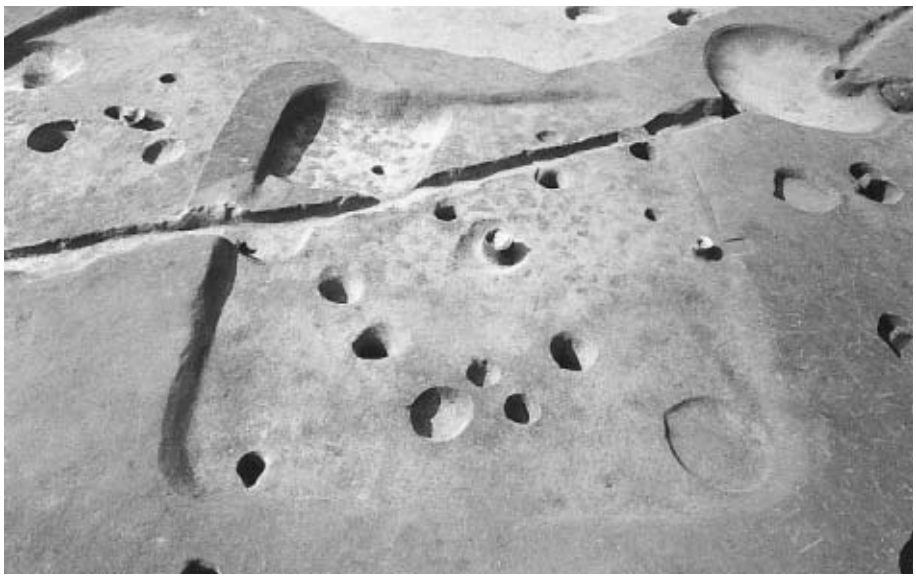


3. SH121遺物出土状況

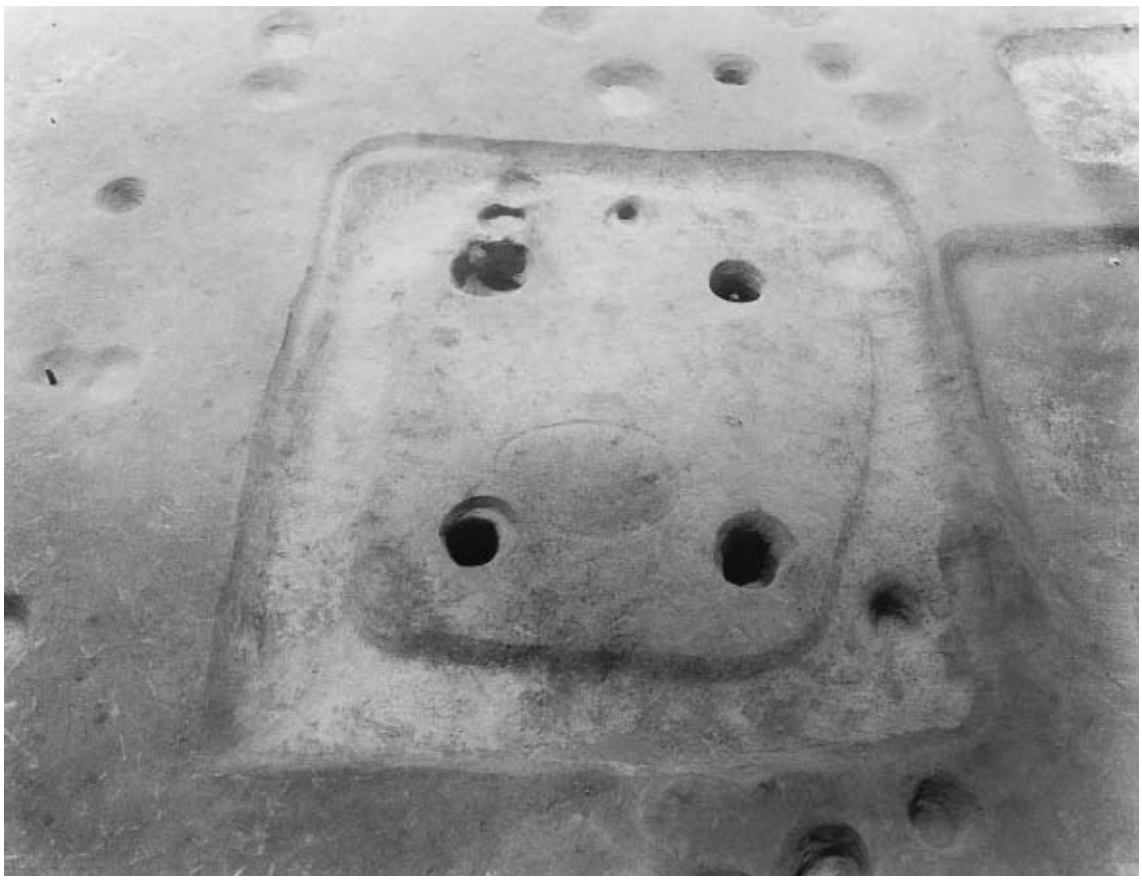


1. SH124（北から）

2. SH250（南から）

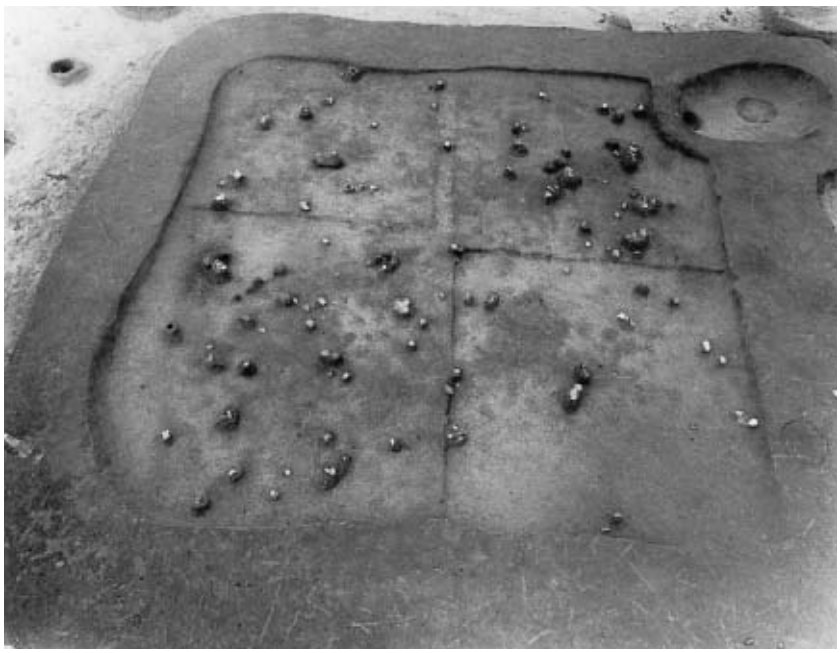


3. SH262（東から）



1. SH125（北から）

2. SH125遺物出土状況（東から）



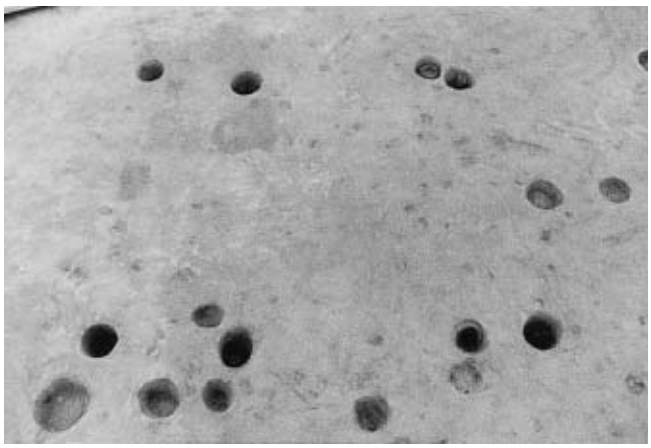
1. SH231遺物出土状況（南から）

2. SH231完掘（南から）

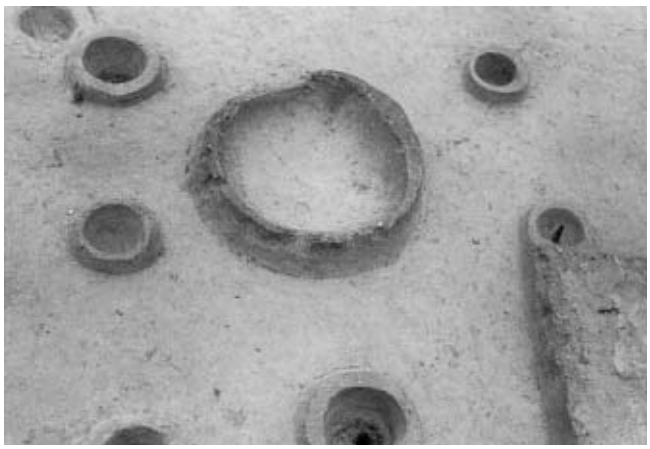
4. 床面検出足跡

3. 屋内土坑（東から）

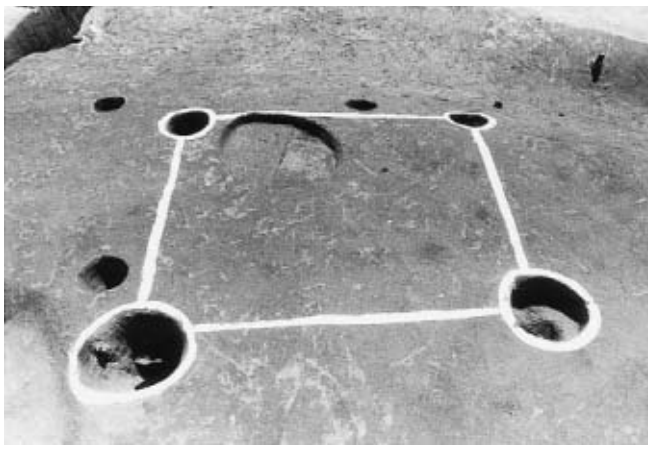
1. SB107（南から）



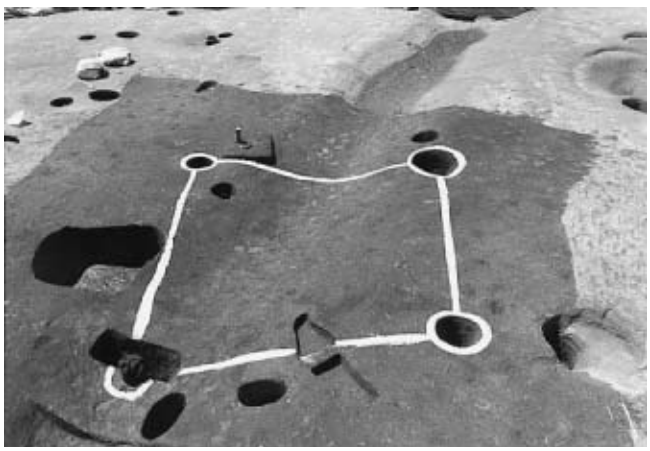
2. SB136・137(北から)



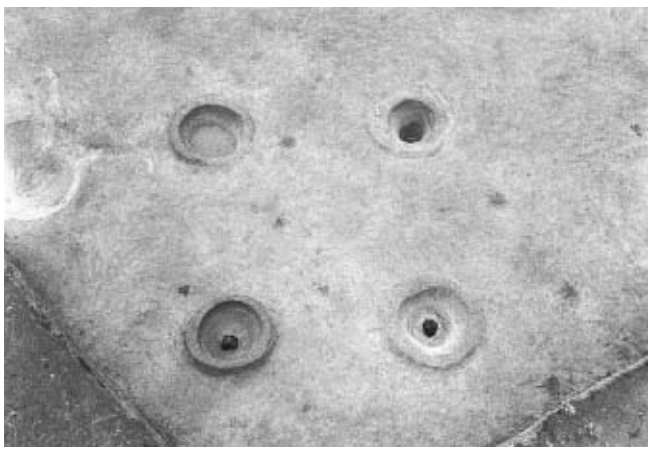
3. SB144（南から）



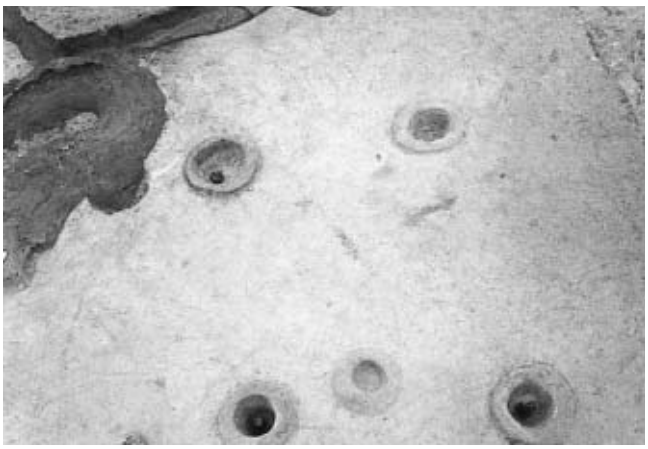
4. SB145（西から）



5. SB148（北から）

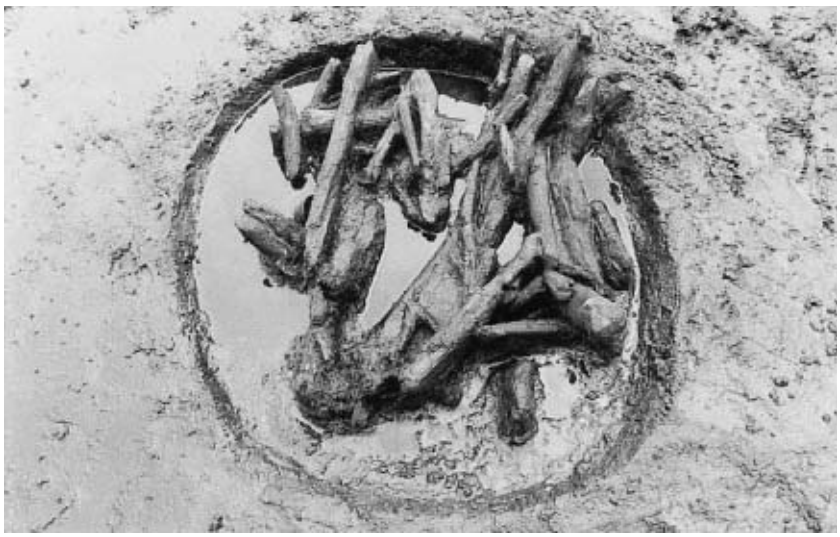


6. SB253（南から）



7. SB254（北から）

8. SB255(北から)



1. SK103上層遺物出土状況（東から）

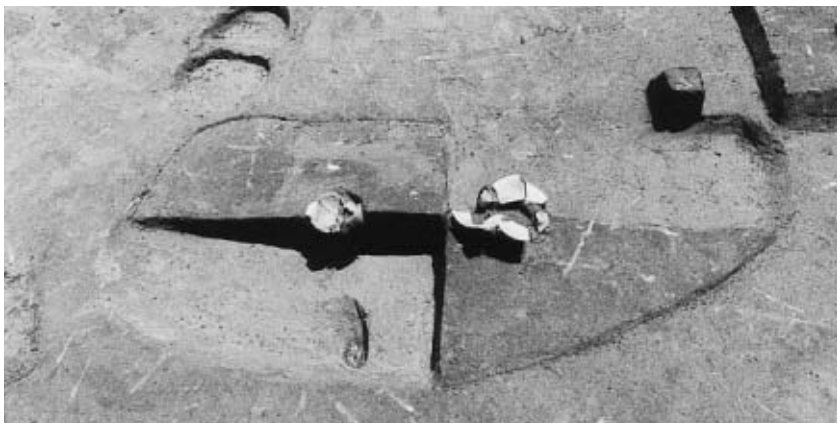
2. SK103中層遺物出土状況（東から）

3. SK103下層遺物出土状況（東から）

1. SK105（西から）

2. SK106（北西から）

3. SK108（南から）



1. SK110半載（西から）

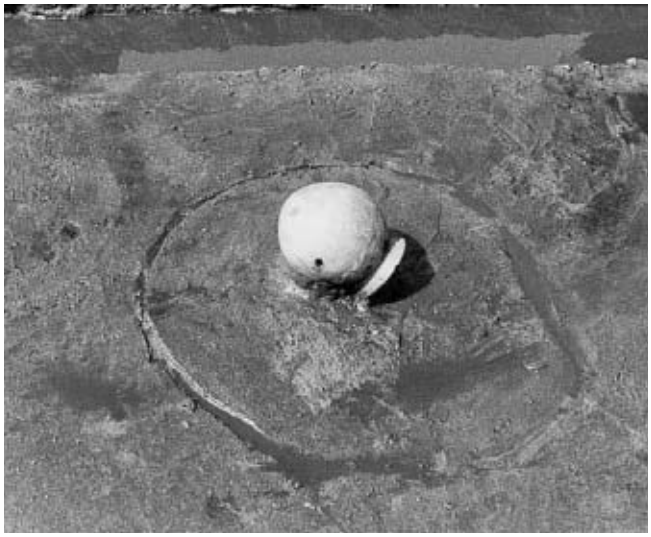
2. SK110（東から）

3. SK111遺物出土状況（北から）

1. SK127・SK133（北西から）

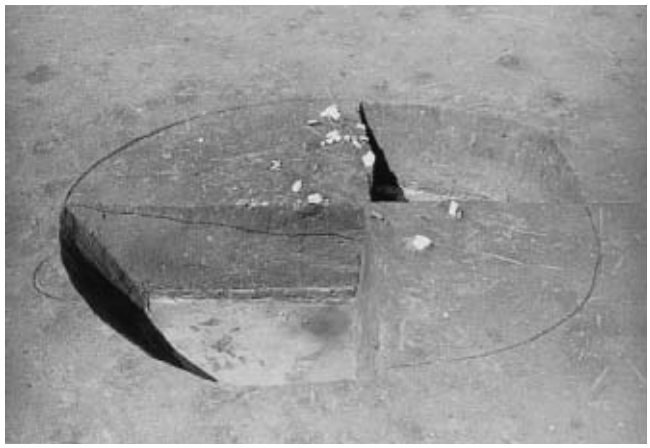
2. SK127（西から）

2. SK132（東から）

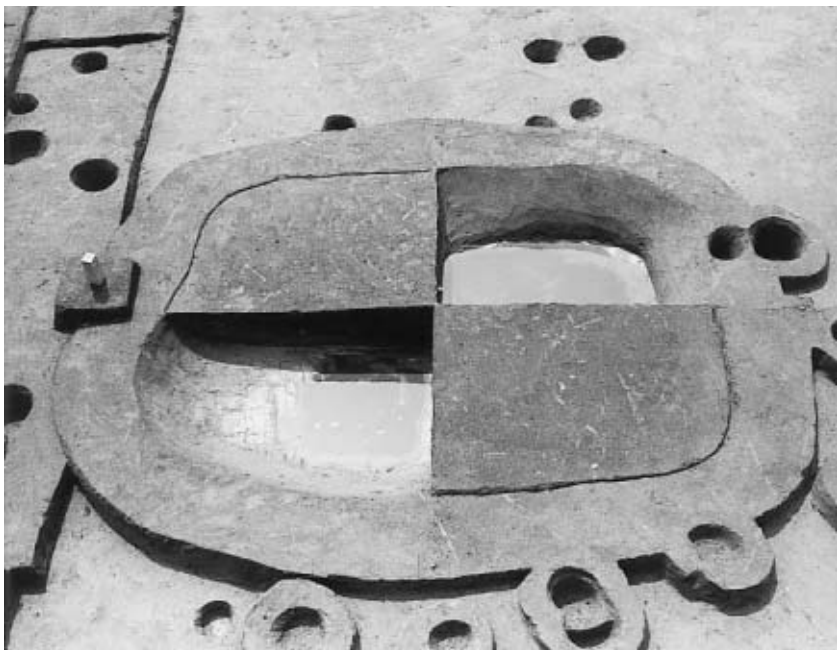


1. SK128（南から）

4. SK205完掘（南から）



3. SK205半載（南から）



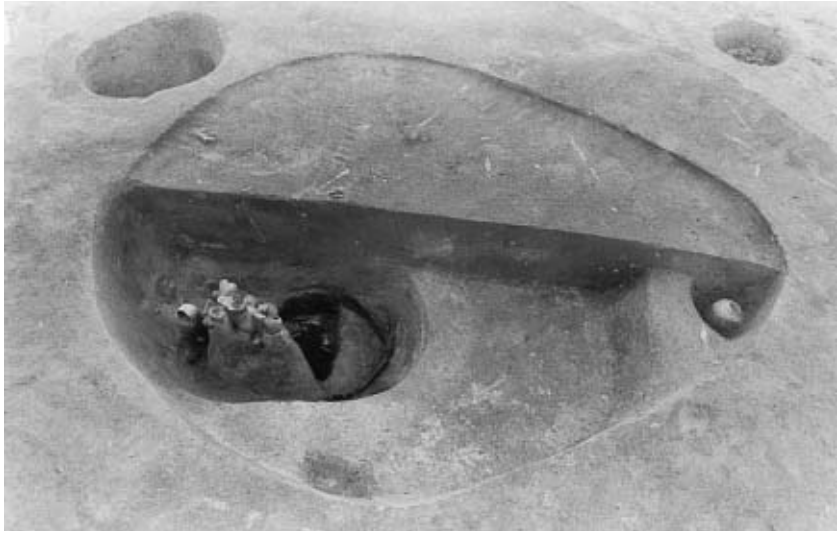
5. SK220半載（南から）

1. SK228遺物出土状況（西から）

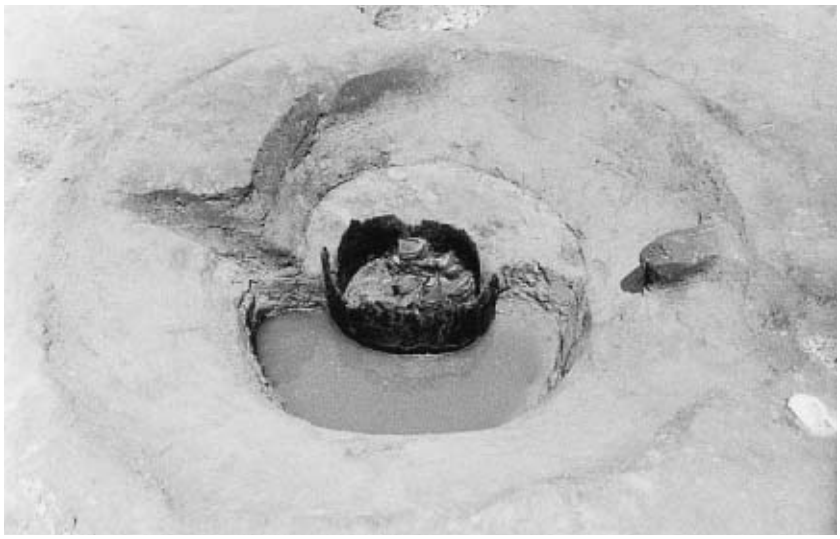
2. SK232遺物出土状況（東から）

3. SK232完掘（西から）

2. 上層遺物出土状況



1.SE251検出状況（南から）



3. SE251井戸枠（南から）

4. SE251井戸枠内遺物出土状況（北から）

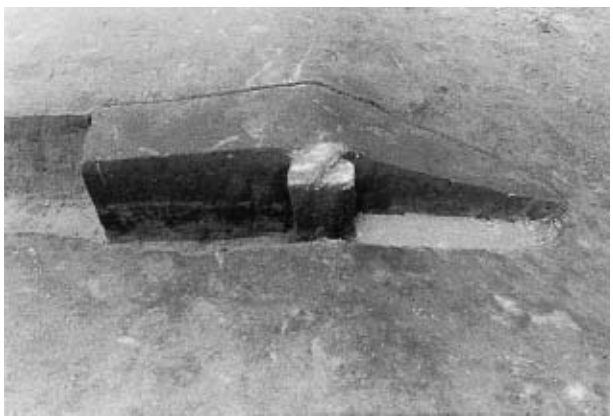
1. SD115遺物出土状況・SD149検出状況（南から）

2. SD115・SD149完掘（南から）

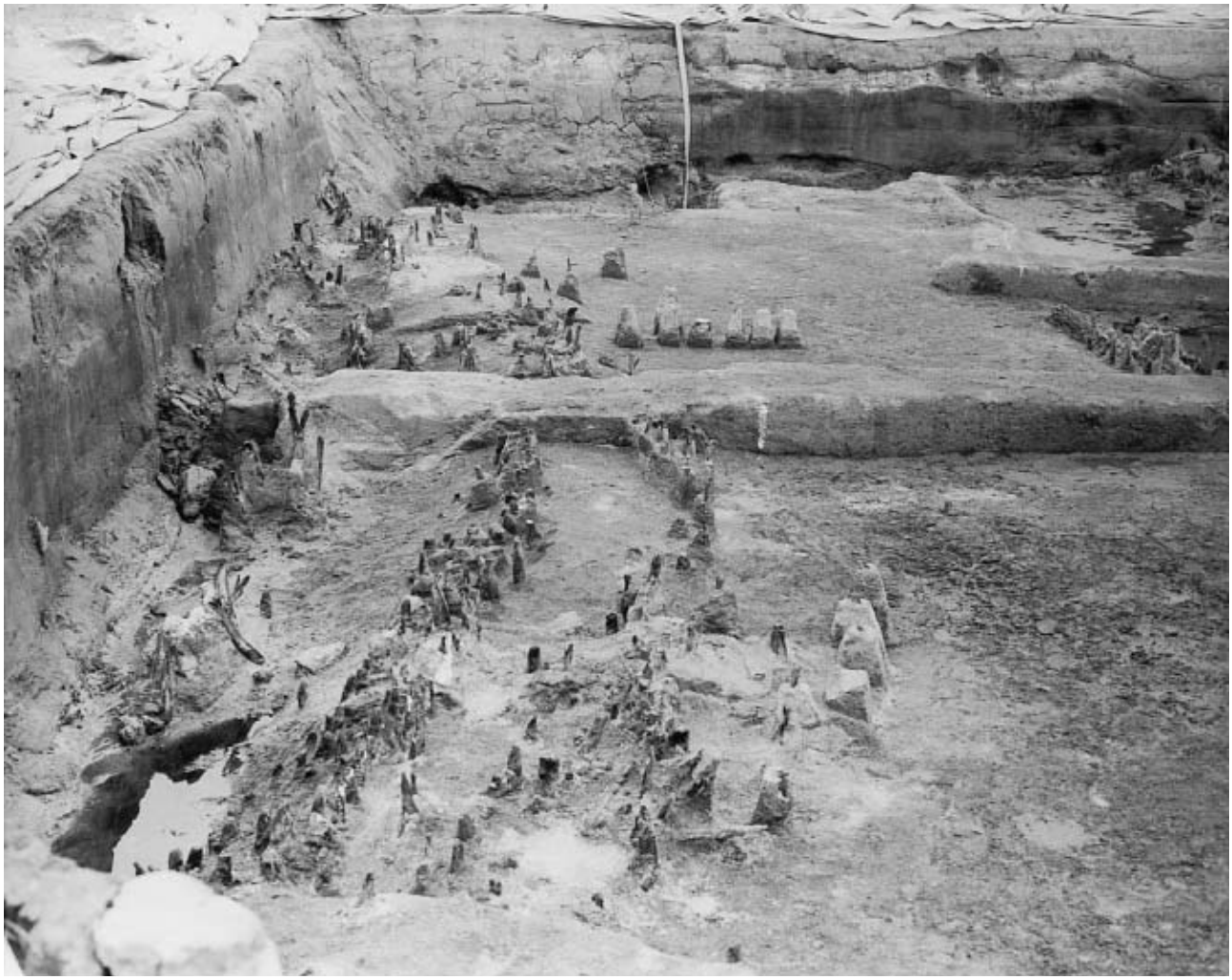
1. SD115と竪穴住居群（南から）

2. SD115遺物出土状況（北から）

3. SD115土層（南から）



4. SD138土層（南から）



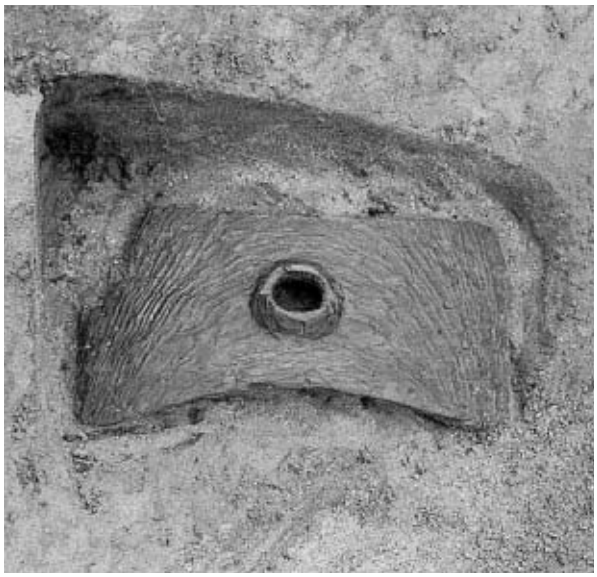
1. SF176・SD162（北から）

2. SF176大畦畔に打ち込まれた杭（南から）

1. SD163土層（南から）

2. SF175・SD163下層水田（南から）

1. SD174（南から）



2. 諸手鍬出土状況

3. 三又鍬出土状況

1. 弥生水田空中写真（真上から）

2. 弥生上層水田遠景（南から）

1. SF175近景（北から）

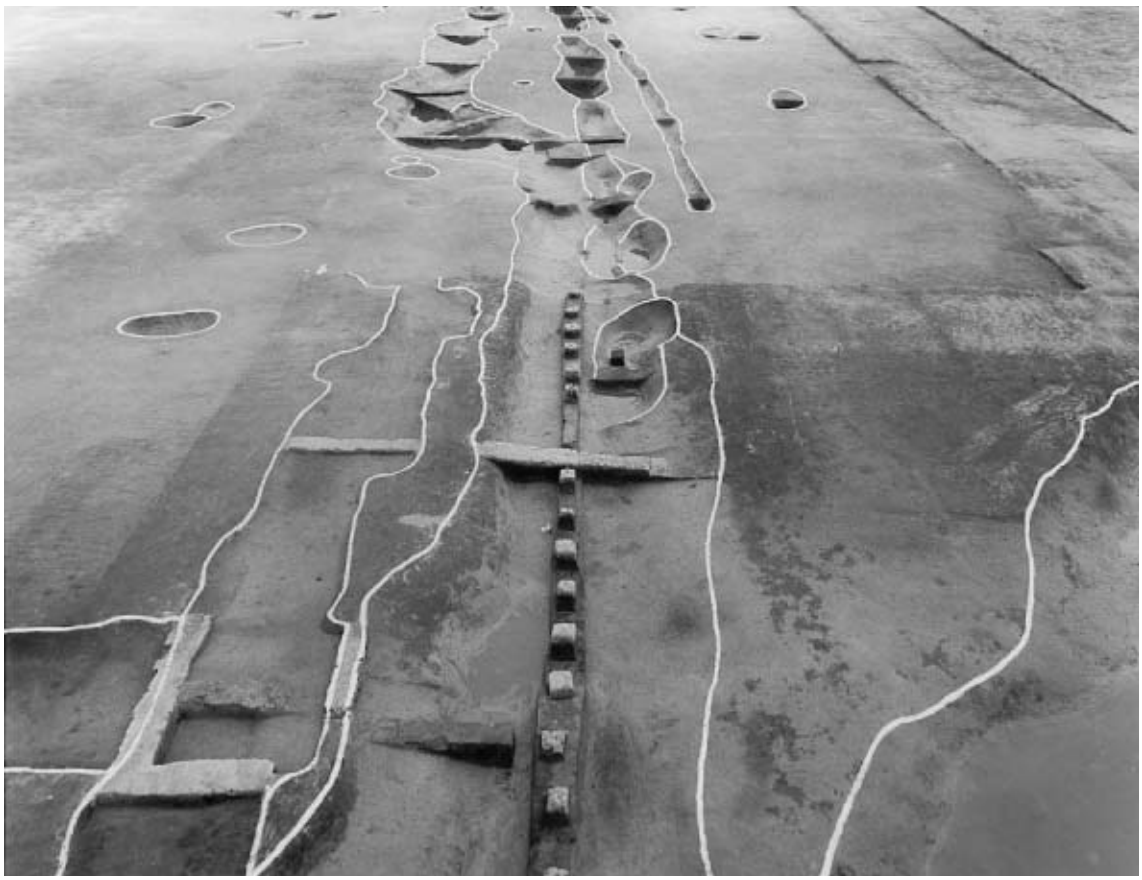
2. SX177（東から）

3. SX177（真上から）

1. SF176土層（南から）

2. SD174（南から）

3. SD173（南から）



1. 微高地弥生水田・SD280（北から）

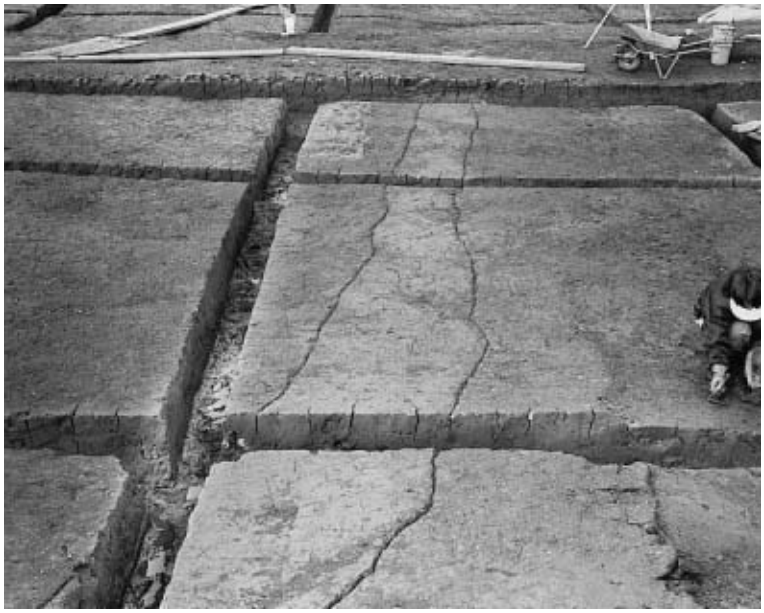
2. 微高地弥生水田・SD288・SD286（南から）

1. SD164下層（北から）

2. SD164下層堰状木組と階段状遺構（南から）

3. 堰状木組

1. SF171杭列（南から）



2. SF171検出状況（南から）

3. SF171芯材（北から）

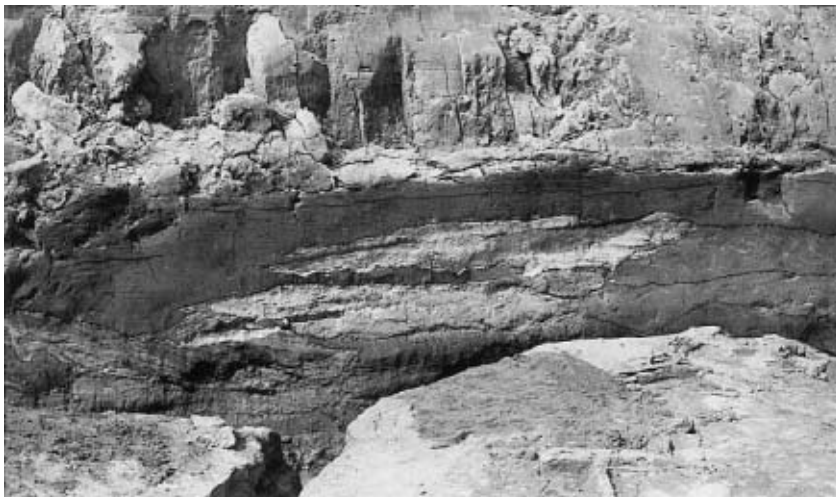
4. SF171杭列（南から）

1. SD164上層（北から）

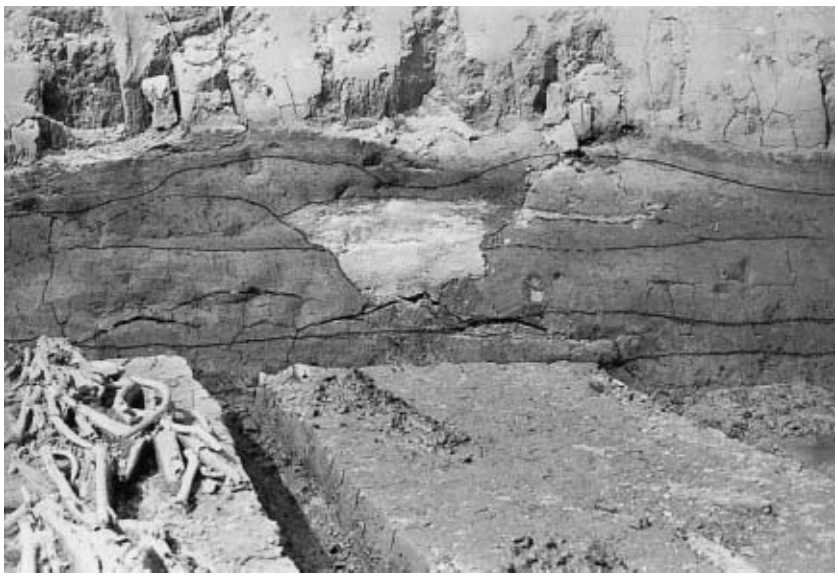
2. 畦畔内埋納二又鍬

1. SD164上層遺物出土状況1（南から）

2. SD164上層遺物出土状況2



3. SD164土層



1. SF157・SF158・SD160土層1、調査区北壁

2. SF157・SF158・SD160土層2、調査区南壁

3. SD160（南から）

1. 古墳上層水田空中写真1（南上空から）

2. 古墳水田空中写真2（真上から）

1. 古墳上層水田遠景（南東から）

2. 古墳上層水田近景（北西から）

1. 古墳上層水田、二条に並んだ大畦畔（北から）

2. 古墳上層水田、大区画水口（北から）

1. 古墳上層水田大区画1、検出状況（北から）

2. 古墳上層水田大区画1・2（北から）

1. SA161（北から）

2. SF155芯材内出土木製品

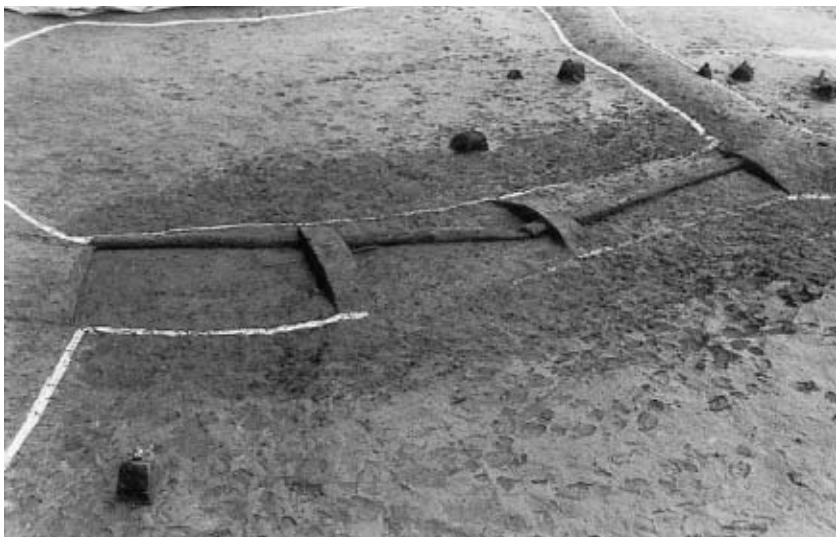
3. SD150土層

1. 古墳上層水田畦畔盛土内出土芯材１（北から）

2. 古墳上層水田畦畔盛土内出土芯材２（北西から）

1. SF154畦畔内出土二又鍬（北東から）

2. SF156芯材出土状況（東から）



3. 小区画水田㊱-㊳畦畔内出土芯材（北から）

4. 杭で固定した芯材

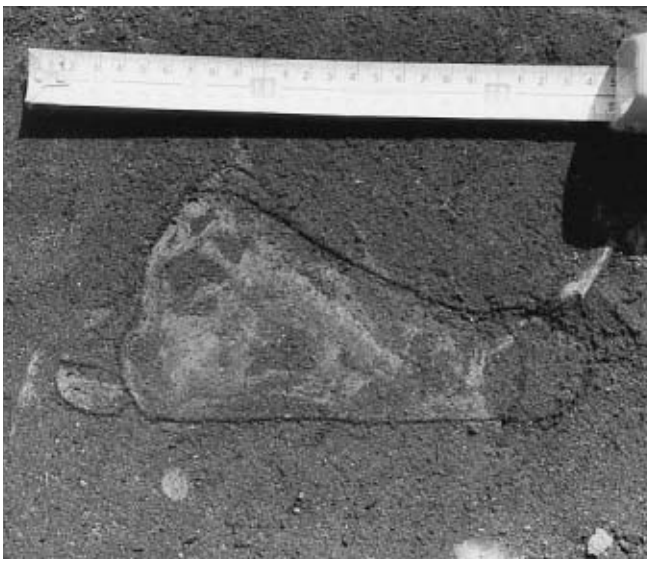
1. 中世水田溝、SD281・282・283（北から）

2. 中世水田溝、SD289・281（南から）

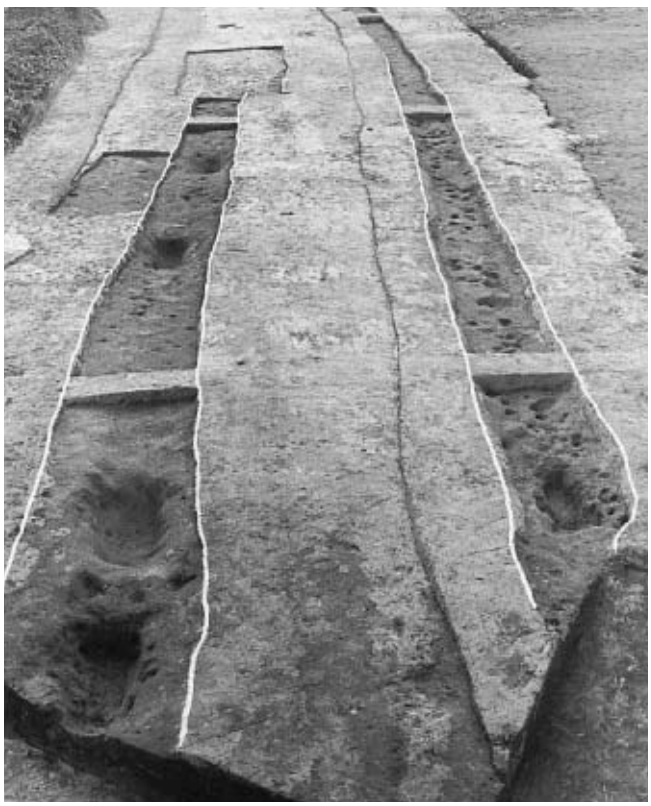
1. 中世水田溝、SD281（南から）

2. 中世水田溝、SD283（南から）

1. 近世水田検出状況（南東から）

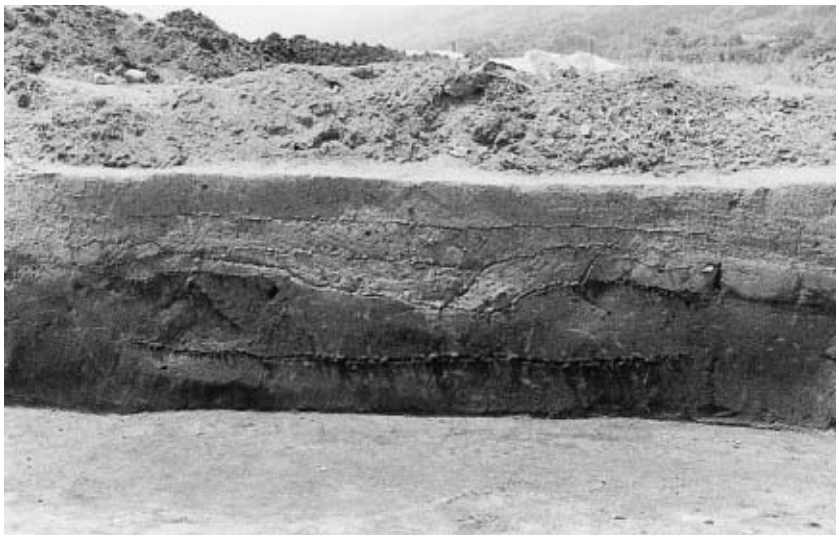


3. 足跡検出状況



2. SD101、SD102（南から）

1. SD102に沿った杭列（南から）



2. SD101土層

3. SD102土層

13-2 1

13-4 2

13-7 3

13-8 4

13-9 5

13-10 6

14-12 7

14-13 8

14-14 9

14-16 10

14-18 11

14-22 12

包含層出土　縄文～弥生土器（1）　　1～12－包含層

15-24 1

15-26 2

15-28 3

15-29 4

16-31 5

16-33 6

16-35 7

16-36 8

16-37 9

17-38 10

17-39 11

17-40 12

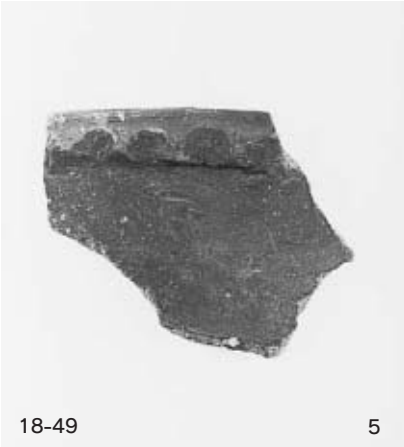
包含層出土　縄文～弥生土器（2）　　1～12－包含層

17-41 1

17-44 2

17-45 3

18-46 4


18-49 5

18-50 6

18-52 7

18-55 8

18-57 9

18-58 10

19-59 11

19-60 12

包含層出土　縄文～弥生土器（3）　　1～12－包含層

19-62 1

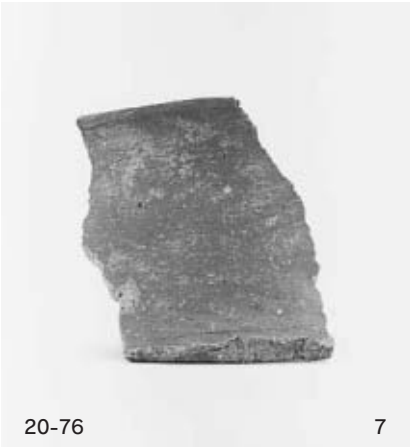
19-67 2

19-70 3

19-73 4

20-74 5

20-75 6


20-76 7

20-77 8

20-78 9

20-79 10

20-80 11

包含層出土　縄文～弥生土器（4）　　1～11－包含層

20-81 1

21-82 2

21-83 3

21-87 4

21-92 5

21-93 6

21-94 7

21-95 8

22-97 9

22-101 10

22-109 11

22-110 12

包含層出土　縄文～弥生土器（5）　　1～12－包含層

22-112 1

22-115 2

22-116 3

23-117 4

23-120 5

23-125 6

23-126 7

23-128 8

24-132 9

24-133 10

24-134 11

24-136 12

包含層出土　縄文～弥生土器（6）　　1～12－包含層

24-138 1

24-140 2

21-141 3

24-143 4

24-144 5

25-146 6

25-156 7

25-157 8

26-158 9

26-160 10

26-161 11

26-164 12

包含層出土　縄文～弥生土器（7）　　1～12－包含層

26-167 1

26-168 2

26-169 3

26-171 4

27-175 5

27-176 6

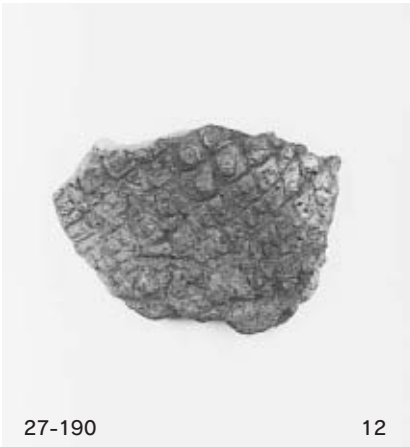
27-177 7

27-181 8

27-183 9

27-188 10

27-189 11


27-190 12

包含層出土　縄文～弥生土器（8）　　1～12－包含層

27-191 1

28-192 2

28-207 3

29-239 4

30-256 5

30-261 6

30-265 7

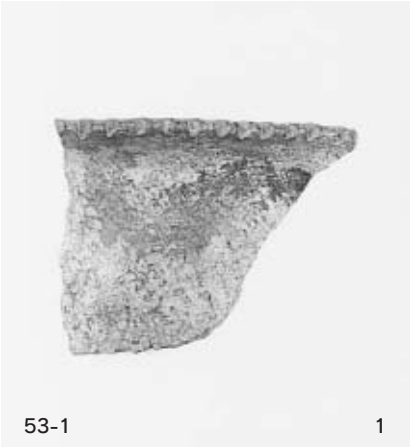
30-276 8

30-277 9

31-291 10

31-293 11

包含層出土　縄文～弥生土器（9）　　1～11－包含層


53-1 1

53-4 2

53-7 3

56-1 4

58-3 5

60-1 6

61-1 7

62-1 8

62-2 9

62-3 10

63-1 11

65-1 12

遺構出土　縄文～弥生土器

1～3－SH119，4　－SH222
5　－SH239，6　－SK223
7　－SK248，8～10－SK285
11　－SK291，12　－SK292

65-2 1

68-1 2

68-2 3

68-3 4

68-19 5

69-24 6

157-1 7

157-13 8

157-19 9

158-23 10

159-57 11

159-58 12

遺構・低地部弥生水田出土弥生土器

1～5 －SD187, 6－SD192
7～12 －低地部弥生水田

159-62 1

163-1 2

163-5 3

163-6 4

1　－低地部水田
2～4－SD286

低地部・微高地上水田出土弥生土器

32-1 1

32-2 2

32-4 3

32-5 4

32-6 5

32-7 6

包含層出土　縄文～弥生石器（1）

1～6－包含層

33-9 1

33-10 2

33-11 3

33-14 4

33-15 5

34-16 6

34-21 7

43-156 8

44-163 9

44-166 10

44-168 11

45-172 12

包含層出土　縄文～弥生石器（2）

45-174 1

54-15 2

160-1 3

160-2 4

160-3 5

160-4 6

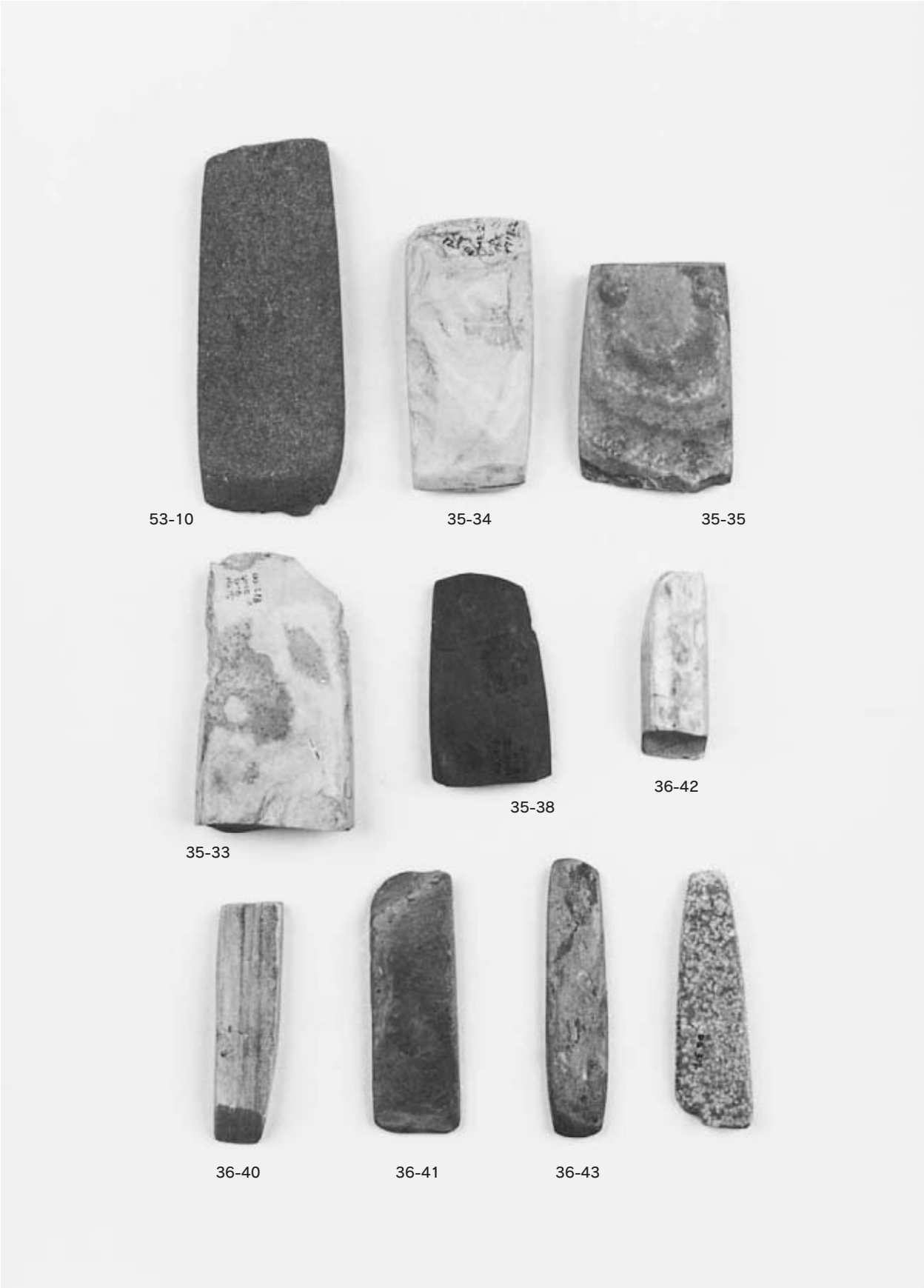
160-5 7

160-6 8

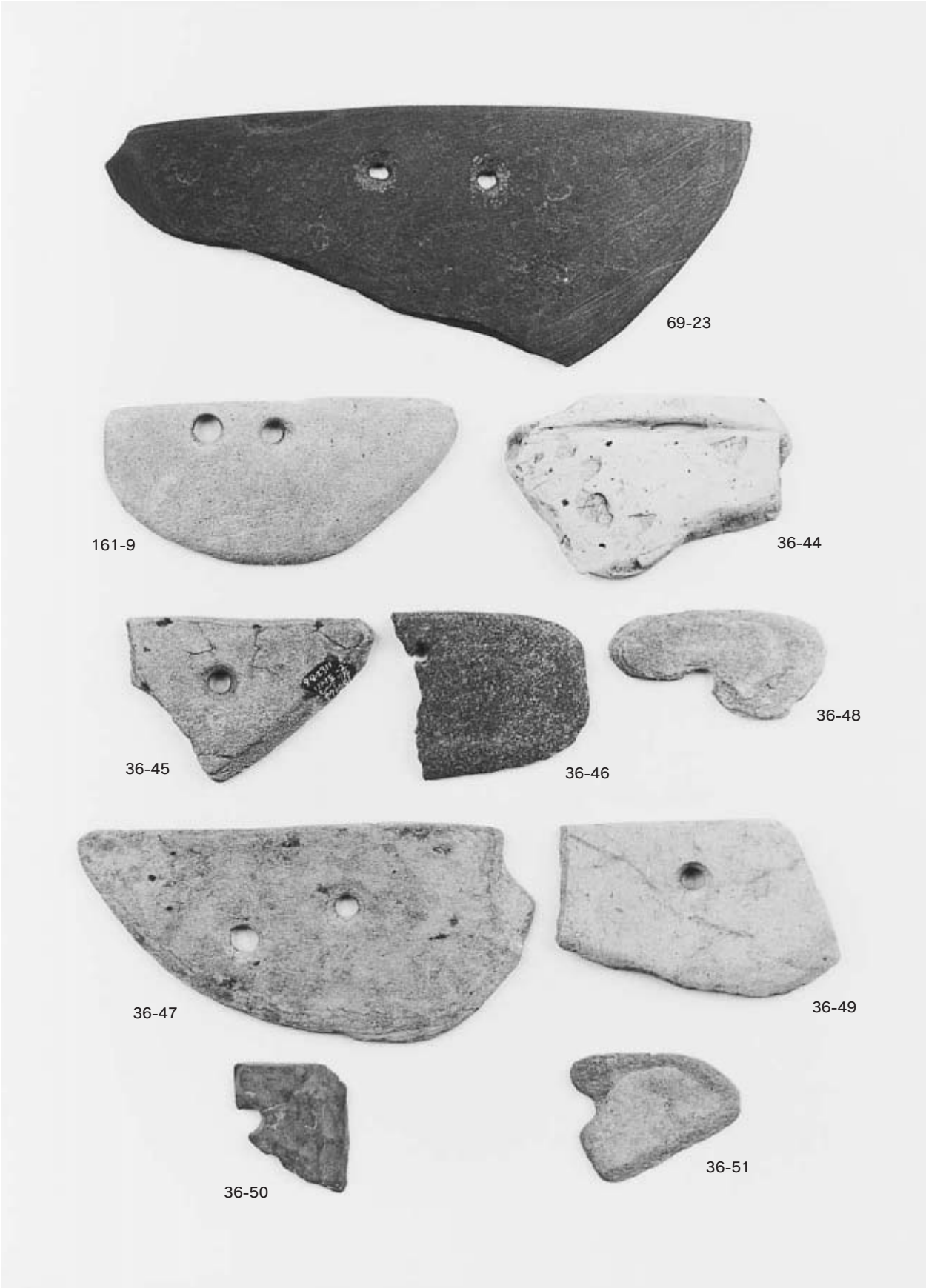
包含層他出土　縄文～弥生石器

1　　－包含層
2　　－SH119
3～8－低地部弥生水田

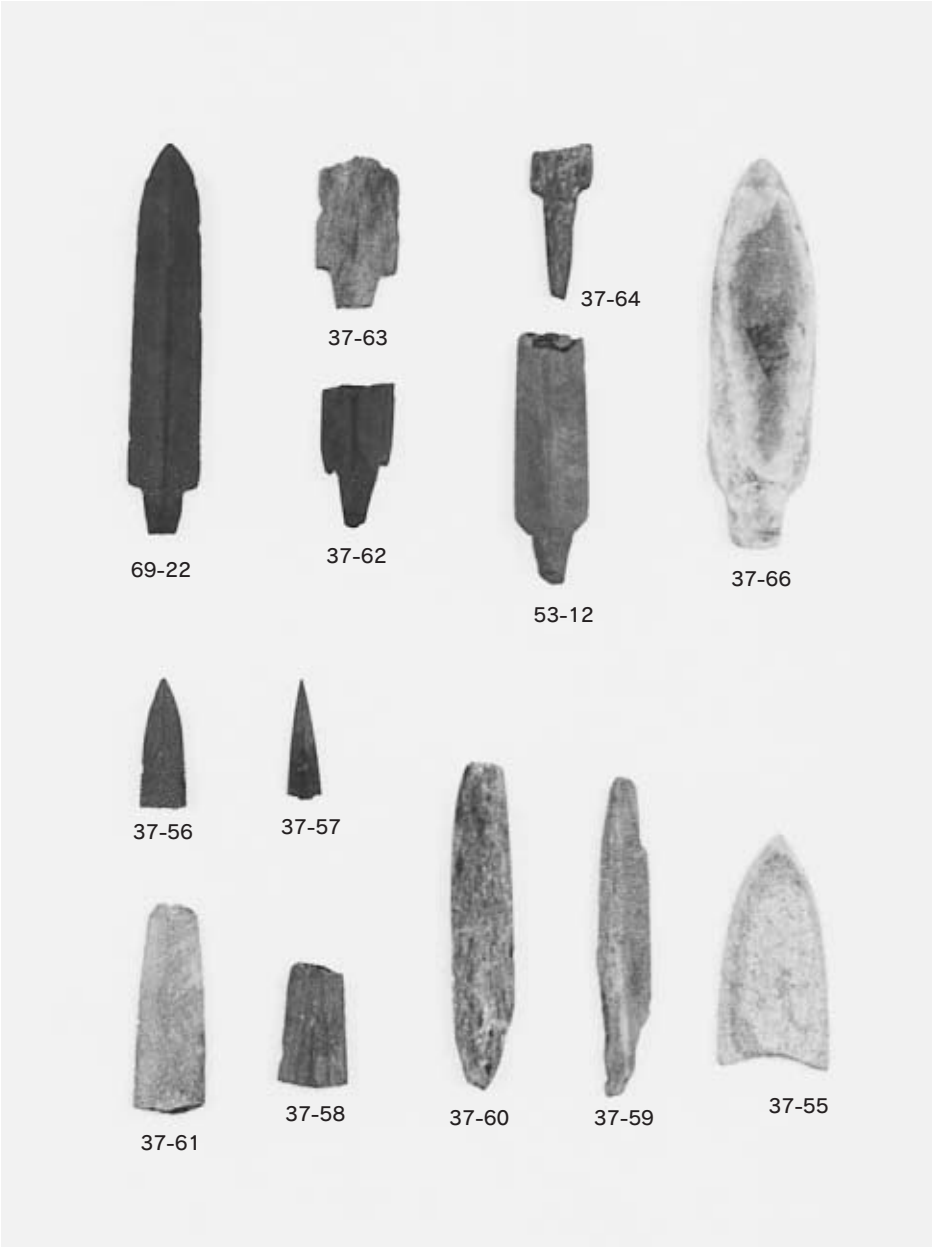
柱状片刃石斧



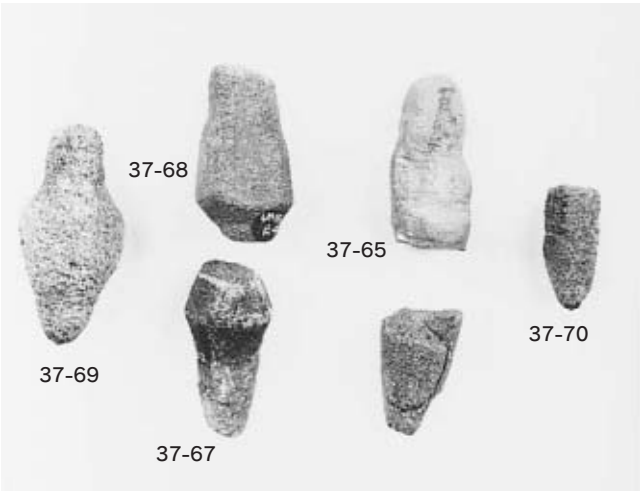
扁平片刃石斧



石 庖 丁


37-63
37-64
69-22
37-62
53-12
37-66
37-56
37-57
37-61
37-58
37-60
37-59
37-55

磨 製 石 鏃


37-68
37-65
37-70
37-69
37-67

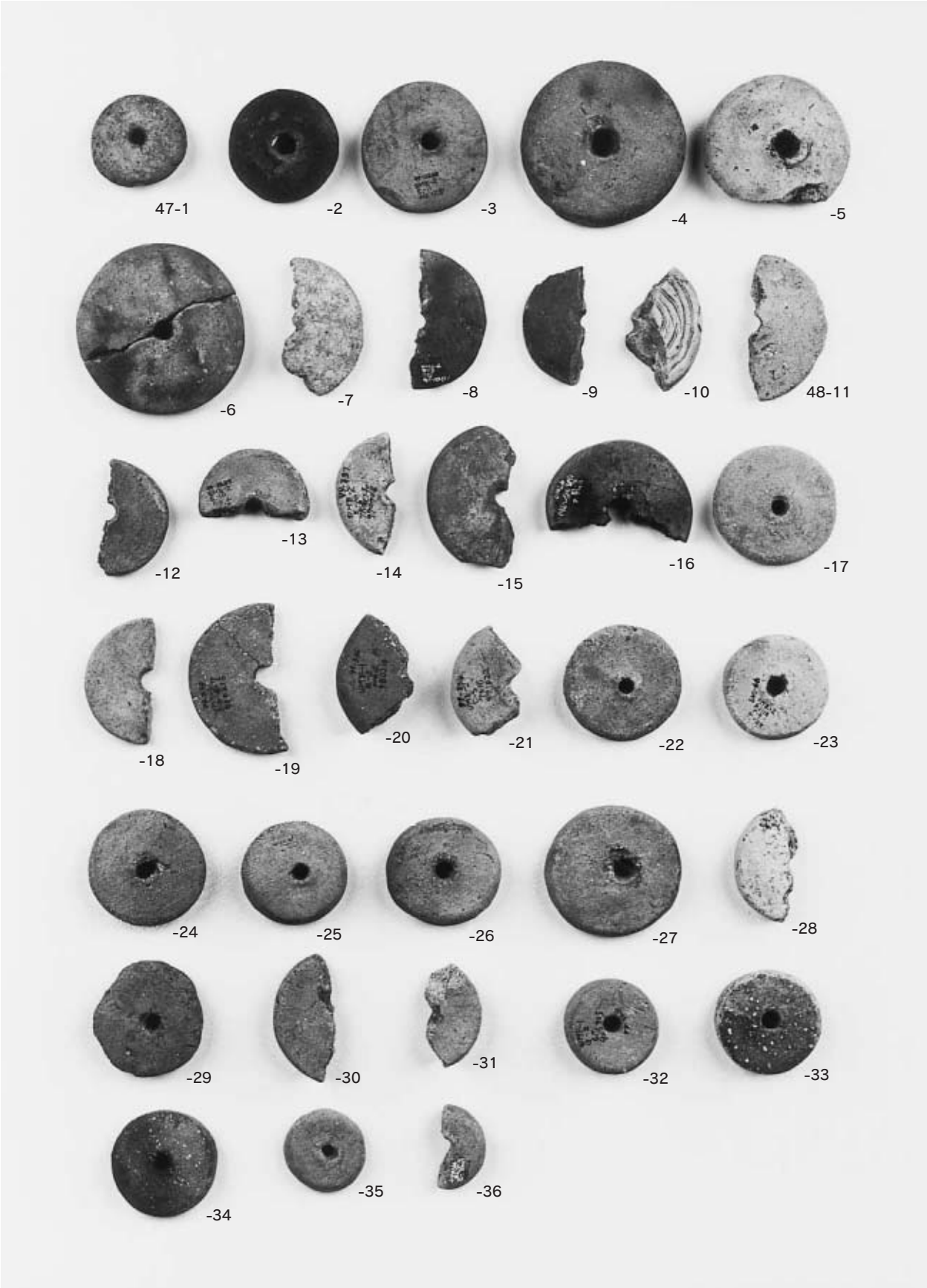
磨 製 穿 孔 具

58-7

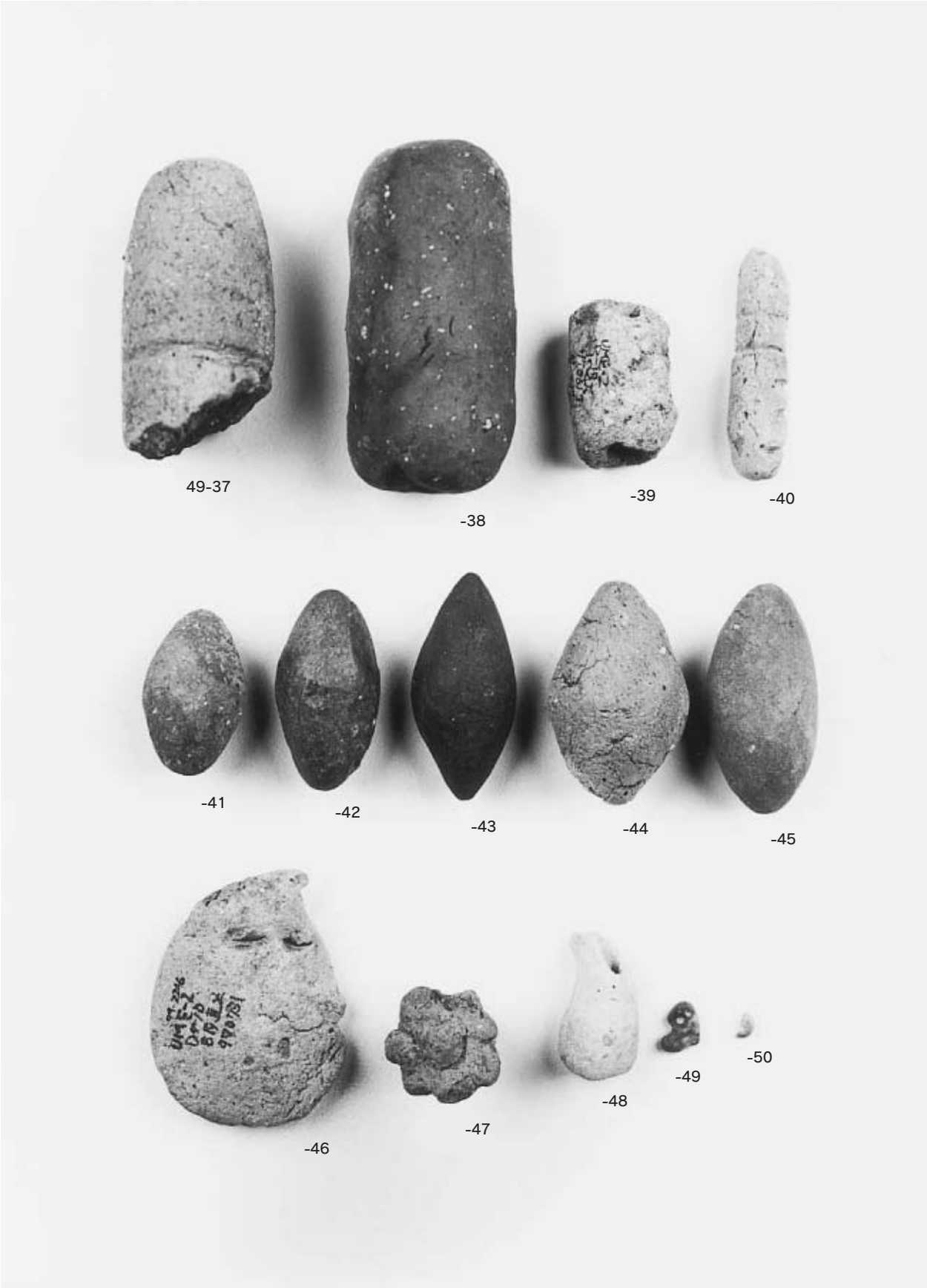
37-53

37-54

磨 製 石 剣


47-1
-2
-3
-4
-5
-6
-7
-8
-9
-10
48-11
-12
-13
-14
-15
-16
-17
-18
-19
-20
-21
-22
-23
-24
-25
-26
-27
-28
-29
-30
-31
-32
-33
-34
-35
-36

包含層出土紡錘車



包含層他出土土製品・玉類

71-1 1

71-2 2

71-4 3

71-5 4

71-7 5

74-1 6

74-2 7

74-3 8

75-4 9

75-5 10

75-6 11

75-7 12

集落跡出土　古墳時代　土師器（1）　　1～5－SH04，6～12－SH121

75-8 1

75-9 2

75-10 3

75-11 4

75-12 5

75-13 6

75-14 7

76-15 8

76-16 9

76-22 10

76-23 11

76-25 12

集落跡出土　古墳時代　土師器（2）　1～12－SH121

76-26 1

76-28 2

76-29 3

76-30 4

76-32 5

76-33 6

76-34 7

76-35 8

76-36 9

76-37 10

76-38 11

76-39 12

集落跡出土　古墳時代　土師器（3）　1～12－SH121

76-40 1

76-41 2

77-1 3

77-2 4

77-3 5

77-4 6

79-1 7

79-2 8

79-3 9

79-4 10

79-5 11

79-6 12

集落跡出土　古墳時代　土師器（4）

1～2　－SH121，3～6－SH122
7～12－SH125

79-7 1

79-8 2

79-10 3

81-1 4

81-2 5

81-3 6

81-4 7

81-5 8

81-6 9

81-8 10

81-9 11

81-10 12

集落跡出土　古墳時代　土師器（5）

1～3　－SH125
4～12－SH231

81-11 1

81-12 2

81-13 3

81-14 4

81-15 5

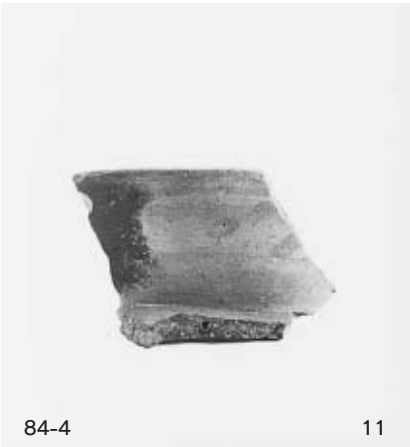
82-1 6

82-3 7

82-6 8

84-1 9

84-3 10


84-4 11

84-5 12

集落跡出土　古墳時代　土師器（6）

1～5　－SH231
6～8　－SH250
9～12－SH262

84-7 1

84-9 2

84-11 3

89-1 4

89-2 5

89-6 6

89-7·8 7

92-1 8

93-1 9

94-1 10

94-2 11

95-1 12

集落跡出土　古墳時代　土師器（7）

1～3　－SH262,　4～7－SK103
8　　－SK106,　9　　－SK108
10～11－SK110,　12　－SK111

95-2 1

95-3 2

95-4 3

96-1 4

97-1 5

98-1 6

98-2 7

98-3 8

98-4 9

98-5 10

98-6 11

99-1 12

集落跡出土　古墳時代　土師器（8）

1～3－SK111，4　－SK112
5　－SK120，6～11－SK127
12　－SK128

100-1 1

100-2 2

100-3 3

100-4 4

100-5 5

102-1 6

104-1 7

104-2 8

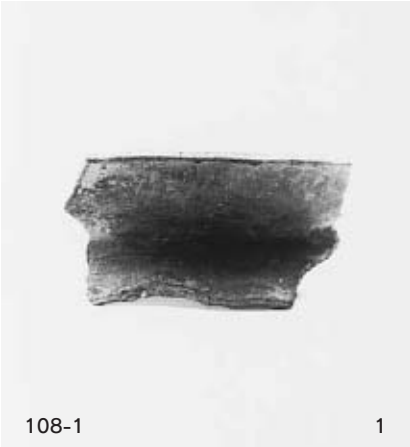
104-3 9

104-4 10

106-1 11

106-2 12

集落跡出土　古墳時代　土師器（9）　1～5　－SK132，6　　－SK205
7～10－SK228，11～12－SK251


108-1 1

108-2 2

108-3 3

108-4 4

108-5 5

108-6 6

108-7 7

108-8 8

108-9 9

108-10 10

109-11 11

109-12 12

集落跡出土　古墳時代　土師器（10）　1～12－SD115

109-13 1

109-14 2

109-15 3

109-16 4

109-17 5

109-18 6

109-19 7

110-20 8

110-21 9

110-22 10

110-23 11

110-24 12

集落跡出土　古墳時代　土師器（11）　1～12－SD115

110-25 1

110-26 2

111-27 3

111-28 4

111-30 5

111-31 6

111-32 7

111-34 8

111-35 9

112-36 10

112-37 11

112-38 12

集落跡出土　古墳時代　土師器（12）　1～12－SD115

112-39 1

112-41 2

112-42 3

112-43 4

112-44 5

112-50 6

113-51 7

113-53 8

113-54 9

113-55 10

113-56 11

113-57 12

集落跡出土　古墳時代　土師器（13）　1～12－SD115

113-58 1

113-59 2

113-60 3

113-62 4

113-63 5

113-66 6

113-67 7

114-68 8

114-69 9

114-70 10

114-71 11

114-74 12

集落跡出土　古墳時代　土師器（14）　1～12－SD115

114-77 1

114-78 2

114-83 3

114-85 4

114-86 5

114-87 6

114-89 7

114-90 8

114-91 9

115-1 10

115-2 11

116-1 12

集落跡出土　古墳時代　土師器（15）

1～9　－SD115
10～11－SD138
12　　－包含層

116-2 1

116-3 2

116-4 3

116-5 4

116-6 5

116-7 6

116-8 7

116-9 8

116-10 9

116-11 10

117-12 11

117-13 12

集落跡出土　古墳時代　土師器（16）　　1～12－包含層

117-14 1

117-16 2

117-17 3

117-18 4

117-19 5

117-20 6

117-21 7

117-22 8

117-23 9

117-24 10

117-25 11

118-26 12

集落跡出土　古墳時代　土師器（17）　　1～12－包含層

118-27 1

118-28 2

118-29 3

118-31 4

118-32 5

118-34 6

118-36 7

119-37 8

119-38 9

119-39 10

119-40 11

119-41 12

集落跡出土　古墳時代　土師器（18）　　1～12－包含層

119-42 1

119-44 2

119-45 3

119-46 4

120-47 5

120-48 6

120-50 7

120-51 8

120-52 9

120-53 10

120-54 11

120-55 12

集落跡出土　古墳時代　土師器（19）　　1～12－包含層

120-56 1

120-60 2

120-63 3

120-65 4

120-67 5

120-68 6

120-69 7

121-70 8

121-71 9

121-72 10

121-74 11

121-75 12

集落跡出土　古墳時代　土師器（20）　　1～12－包含層

121-76 1

121-77 2

121-79 3

121-80 4

121-81 5

121-82 6

121-83 7

121-84 8

121-85 9

121-86 10

121-88 11

121-89 12

集落跡出土　古墳時代　土師器（21）　　1～12－包含層

121-90 1

121-91 2

121-92 3

121-93 4

122-95 5

122-96 6

122-97 7

122-98 8

122-100 9

122-101 10

122-103 11

122-105 12

集落跡出土　古墳時代　土師器（22）　1～12－包含層

122-106 1

122-108 2

122-109～112 3

122-116·118·119 4

122-123 5

122-124 6

179-1 7

179-2 8

179-3 9

179-4 10

179-9 11

179-10 12

集落跡・水田跡出土　古墳時代　土師器

1～5　－包含層
6　　－SD283
7～12－水田跡

179-11 1

179-12 2

179-13 3

179-14 4

179-15 5

180-17 6

180-18 7

180-20 8

180-21 9

180-22 10

180-23 11

180-25 12

水田跡出土　古墳時代　土師器（1）　　1～12－水田跡

180-26 1

180-27 2

181-1 3

181-2 4

181-4 5

181-7 6

182-1 7

182-2 8

182-3 9

182-4 10

182-5 11

182-6 12

水田跡出土　古墳時代　土師器（2）

1～2　－水田跡
3～6　－SD149
7～12－SD164

182-7 1

182-8 2

182-9 3

182-10 4

183-11 5

183-12 6

183-13 7

183-14 8

183-15 9

183-16 10

183-17 11

183-18 12

水田跡出土　古墳時代　土師器（3）　1～12－SD164

183-19 1

183-20 2

183-21 3

184-22 4

185-23 5

185-24 6

185-25 7

185-26 8

185-27 9

185-28 10

185-29 11

185-30 12

水田跡出土　古墳時代　土師器（4）　1～12－SD164

185-31 1

185-32 2

185-33 3

185-34 4

185-35 5

185-36 6

185-37 7

185-38 8

185-39 9

185-40 10

185-41 11

185-42 12

水田跡出土　古墳時代　土師器（5）　1～12－SD164

186-43 1

186-44 2

186-45 3

186-46 4

186-47 5

186-48 6

186-49 7

186-50 8

186-52 9

186-53 10

186-54 11

187-55 12

水田跡出土　古墳時代　土師器（6）　1～12－SD164

187-56 1

187-57 2

187-58 3

187-59 4

187-60 5

187-61 6

187-62 7

187-63 8

187-65 9

187-66 10

187-67 11

187-68 12

水田跡出土　古墳時代　土師器（7）　1～12－SD164

187-69 1

187-70 2

187-71 3

187-72 4

187-73 5

187-74 6

187-75 7

188-78 8

188-79 9

188-80 10

188-81 11

188-84 12

水田跡出土　古墳時代　土師器（8）　1～12－SD164

188-85 1

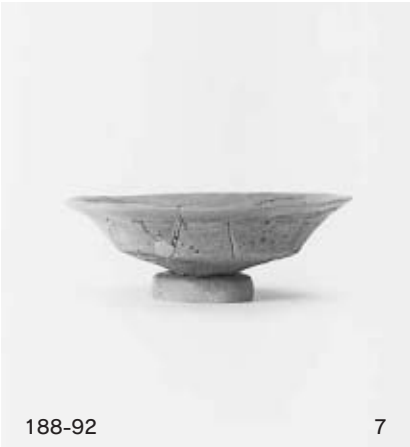
188-87 2

188-88 3

188-89 4

188-90 5

188-91 6


188-92 7

188-94 8

188-95 9

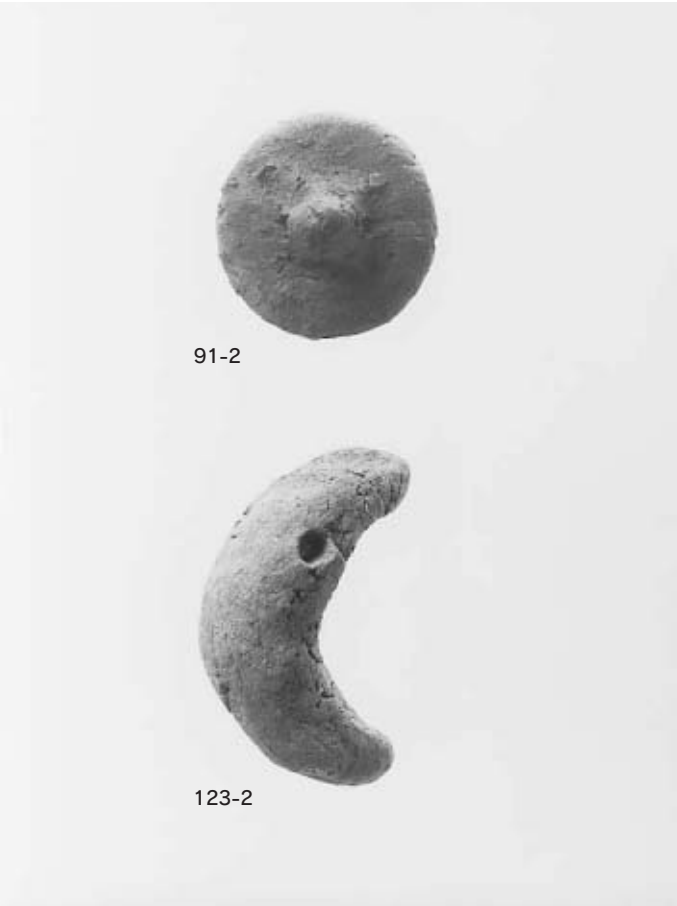
188-96 10

188-97 11

188-98 12

水田跡出土　古墳時代　土師器（9）　1～12－SD164

1. 古墳時代　石製品



2. 古墳時代　土製品

3. 土製人形

164-1

164-2

164-3

164-4

165-5

弥生時代　木製品（1）

165-6

166-7

166-8

166-9

166-10

弥生時代　木製品（2）

167-11

167-12

167-13

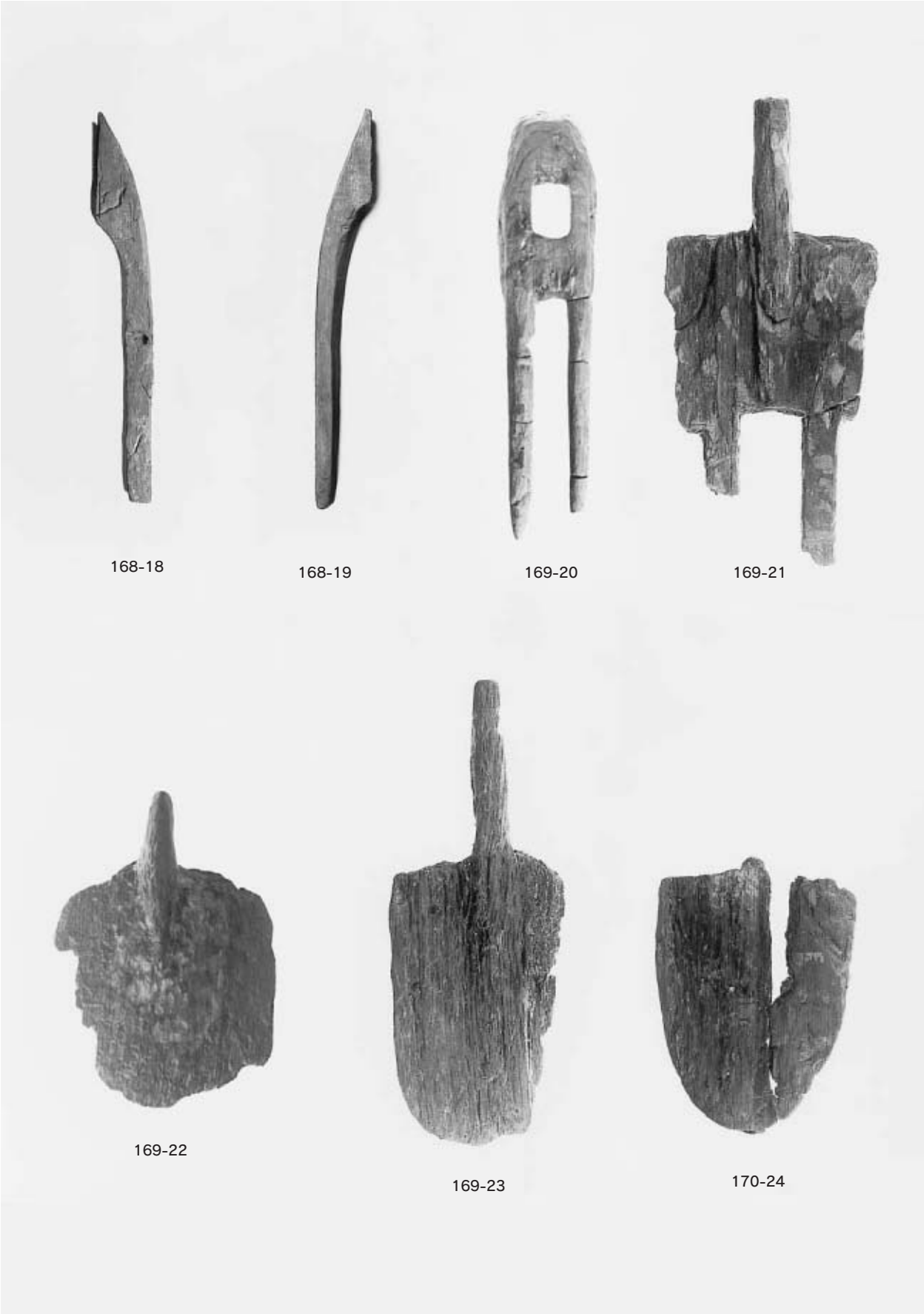
167-14

168-15

168-16

168-17

弥生時代　木製品（3）



弥生時代　木製品（4）

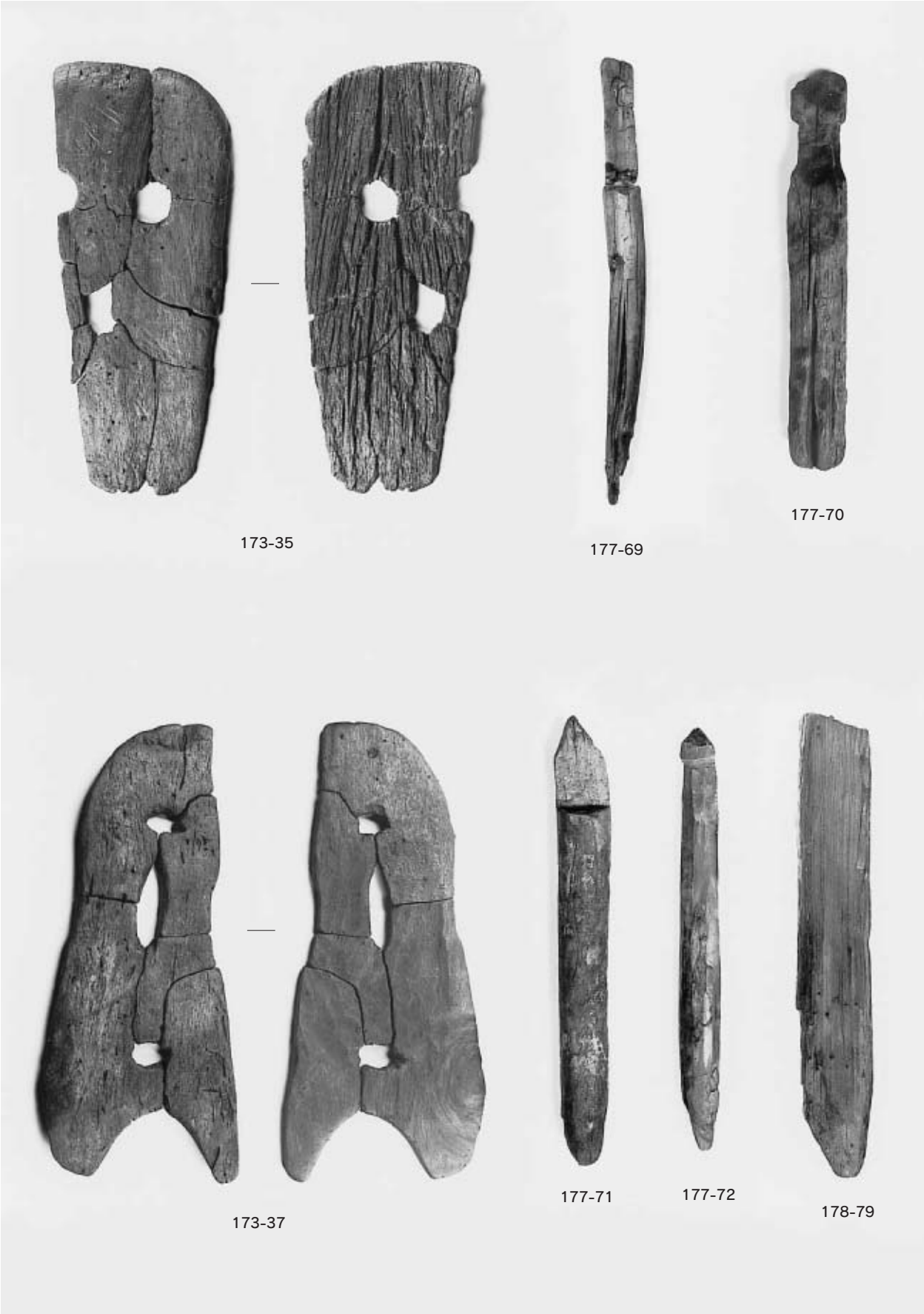
170-26

171-27

171-28

172-32

弥生時代　木製品（5）



弥生時代　木製品（6）

189-1

189-2

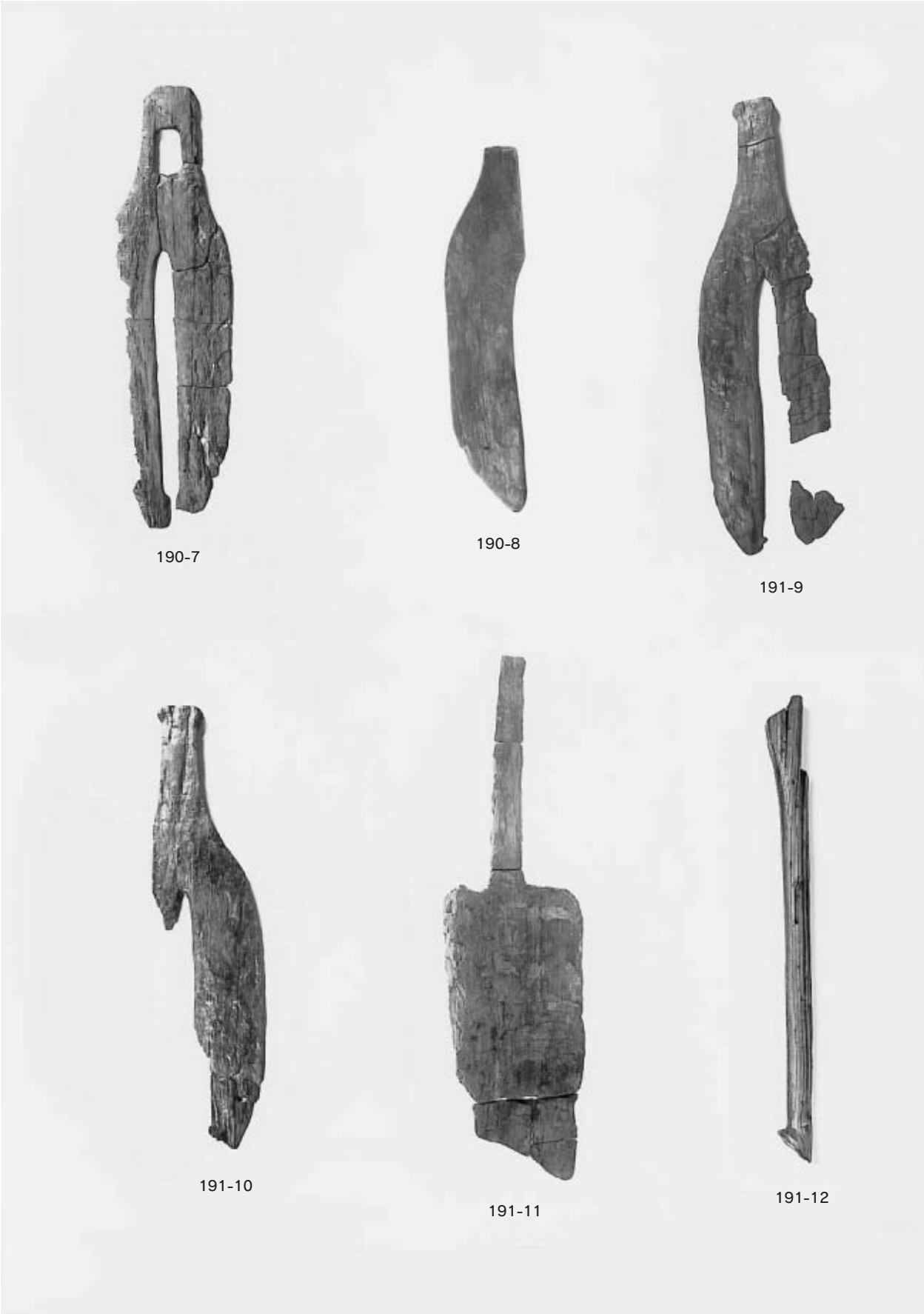
189-3

189-4

190-5

190-6

古墳時代　木製品（1）



古墳時代　木製品（2）

192-13

192-14

192-15

192-16

古墳時代　木製品（3）

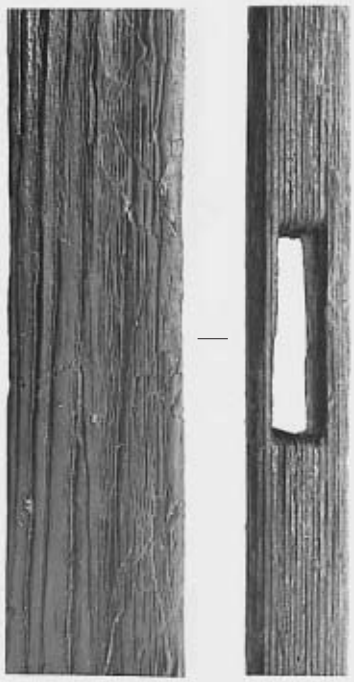
193-18

193-19

193-20

194-21

195-26



195-28

古墳時代　木製品（4）

196-29

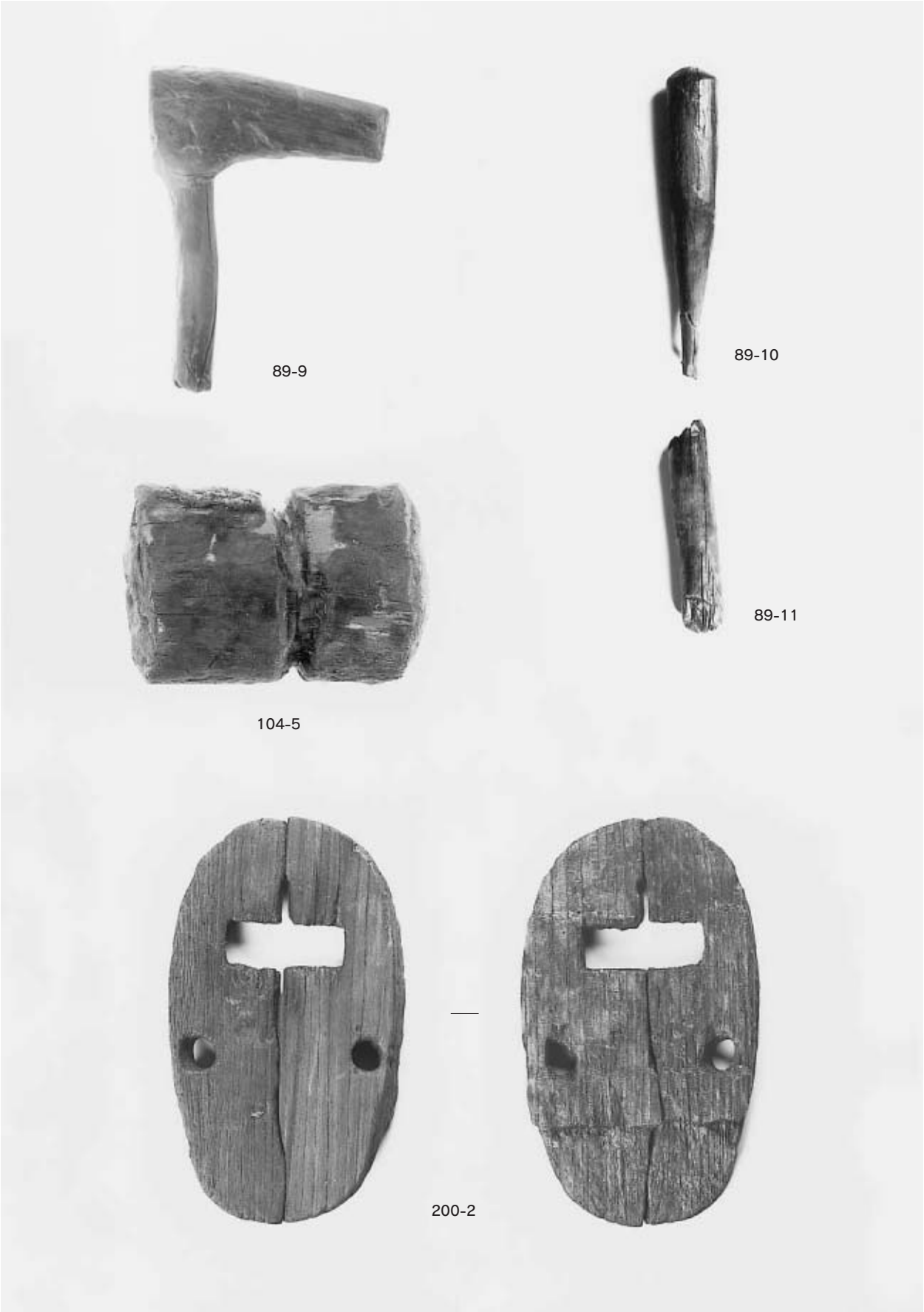
196-31

196-32

124-1

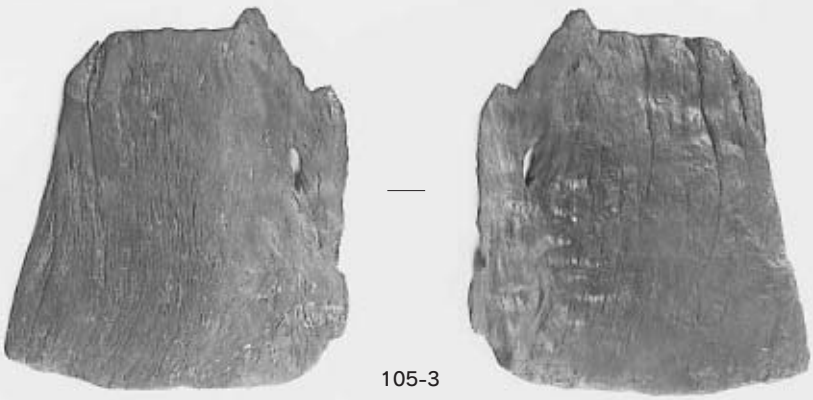
124-2

古墳時代　木製品（5）



古墳時代　木製品（6）

105-4



105-3

105-5

古墳時代　木製品（7）

報告書抄録

ふ り が な	うめじろいせき
書 名	梅白遺跡
副 書 名	西九州自動車道建設に係る文化財調査報告書
巻 次	2
シ リ ー ズ 名	佐賀県文化財調査報告書
シリーズ番号	第154集
編 著 者 名	小松譲・美浦雄二・辻村美代子・藤尾慎一郎・今村峯雄・坂本稔
編 集 機 関	佐賀県教育委員会
所 在 地	〒840-0041　佐賀市城内1丁目1番59号　TEL(0952)25-7232
発 行 年 月 日	西暦2003年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m^2	調査原因
		市町村	遺跡番号					
梅白遺跡（うめじろ）	唐津市（からつし） 大字原（おおあざはる） 字梅白（あざうめじろ）	412023	2178 3184	33°24′ 41″ 8622	130°00′ 42″ 5160	平成９年5月 12日～ 平成11年6月 30日	18000m^2	西九州自動車道建設事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
梅白	集落 水田	弥生 古墳	竪穴住居 掘立柱建物 土坑 井戸 水田	弥生土器 大陸系磨製石器 木製農具 土師器 線刻土器 人形土製品	弥生、古墳時代の集落と水田跡。 弥生時代の石囲い炉をもつ竪穴住居。 古墳時代の水田跡。

あ　と　が　き

平成９年４月、西九州道調査担当に着任しはじめての現場が梅白遺跡であった。発掘調査に約２年、その後４年かかって報告書刊行までこぎつくことができた。

梅白遺跡をはじめてみたときは現地は野原で、前年度に行われたトレンチ跡が残っていた。前任者から確認調査結果を聞きながらこの先の調査のことを考えた。ヒバリの鳴き声が心地よかったのを覚えている。調査当初はたいした遺構もでず、近世水田の足跡の実測から始めたが、そのうち住居跡もでてきた。地山は砂地で遺構の肩部は容易にくずれシート養生をしないと風紋ができ砂漠のような状態になった。

低地部だったので水田をだそうと、土層には常に気を遣い結果的にはそれが水田の発見につながった。土層で確認した大畦畔を平面でだそうと重機で薄く剥いだところ鮮やかな灰色の二条の帯がみえた。大畦畔検出の瞬間である。

水田の調査は水との戦いであった。調査区が100mプールに早変わりするこどが度々あった。苦労した子供ほど可愛いというが、泣かされた現場も同じである。梅雨時、台風時、大型ポンプのお世話になった。次第に低地調査の技術や知恵が身についていったようだ。

報告書作成は現場と併行して行った。大部分の基礎整理は佐賀市の高木瀬事務所で行ったため常に唐津と佐賀の往復であった。また、報告書執筆、遺物写真撮影は新しくできたばかりの中原事務所だったのでこれは大変心地よかった。事務所１階の倉庫での土器の観察や写真撮影は充実した時間だった。

ここに、梅白遺跡の調査・報告書作成まで終わり一段落した。調査そして報告書作成までこぎつけたのは、この仕事に携わったすべての人々の力による。とくに立石係長とは現場で事務所でよく議論？した。議論をへて少しずつ現場・事務所が変わっていったように思える。

今は報告書が終わったという安堵感と達成感、そして反省が残る。これまでの調査やこの報告書が広く役立つことを願う。

最後になりましたが、発掘調査作業、整理作業に従事していただきました地元の皆様、調査の後方支援してくれた県文化課、埋蔵文化財の保護に御理解頂きました佐賀国道工事事務所に対し、心より厚くお礼申しあげます。

小松

佐賀県文化財調査報告書第154集

梅　白　遺　跡

—西九州自動車道建設に係る文化財調査報告書(２)—

平成15（2003）年３月31日

発行　　佐賀県教育委員会
　　〒840-0041　佐賀県佐賀市城内１丁目１番59号
印刷　　株式会社 三光